

稲荷上遺跡 第6次調査

—学校法人 文理佐藤学園 西武学園文理小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017

埼玉県狭山市遺跡調査会

いなりうえいせき
稲荷上遺跡 第6次調査

—学校法人 文理佐藤学園 西武学園文理小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017

埼玉県狭山市遺跡調査会

序

狭山市を貫流する入間川流域には、先人の生活、文化、そして知恵を現在に伝える埋蔵文化財が数多く所在しています。こうした営みの跡は、古くは1万6千年前の旧石器時代から近世まで、途中断絶しながらも狭山市を含む入間地区の歴史を雄弁に語り継いでいます。

しかし、これらの貴重な埋蔵文化財も昭和40年代後半から増加した開発行為により、次第に消え去りつつあります。このため、狭山市遺跡調査会は、開発により失われる埋蔵文化財を記録保存するため、発掘調査を実施してまいりました。

今回報告する稲荷上遺跡第6次調査は、平成14年度に私立小学校建設に伴って実施したもので、縄文時代及び奈良・平安時代の住居跡が多数発見され、多量の土器、石器が出土し、大きな成果を上げることができました。本書は、その調査結果をまとめたものです。

本書が、今後の地域研究の一助となり、あわせて市民の皆様の埋蔵文化財に対する理解を深め、生涯学習に資するものとなれば幸いです。

最後になりましたが、刊行にあたり、発掘調査においてご理解いただいた学校法人文理佐藤学園、また、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた補助員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成29年10月

狭山市遺跡調査会
会長 向野 康雄

例 言

- 1 本書は狭山市大字下奥富地内所在の稲荷上遺跡第6次調査の報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は小学校建設に伴うもので、狭山市遺跡調査会が発掘調査を実施し、調査費用は原因者である学校法人文理佐藤学園が負担した。
- 3 発掘調査届に対する埼玉県の指示通知番号と日付は、以下のとおりである。
教文第2－75号 平成14年10月16日
- 4 発掘調査期間及び整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。
発掘調査：平成14年10月9日～平成15年4月11日
整理・報告書作成：平成15年5月1日～平成29年8月9日
- 5 発掘調査は石塚和則、安井智幸が担当した。また、雨宮吾郎、伊倉榮男、石田八重、今坂優代、遠藤義昌、大石雪枝、大友久芳、尾崎照江、岸 幸子、岸 千代子、北島 功、小林はつみ、志賀たか子、瀬戸山真由美、高野静香、竹田則光、田口文枝、津川啓三、橋本弓子、晝間由美子、本田 豊、山川淑恵、山本とし子の補助を受けた。
- 6 図版の作成と出土品の整理は石塚和則、安井智幸、三ツ木康介が担当した。また、雨宮吾郎、今坂優代、江川久美子、岸 幸子、岸 千代子、小林はつみ、瀬戸山真由美、名雲教子、橋本弓子、晝間由実子、山川淑恵の補助を受けた。
- 7 本書の執筆は、石塚和則が行った。
- 8 本書の編集は狭山市遺跡調査会が行った。
- 9 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。
金子直行、熊澤孝之、笹森健一、細田 勝、松本尚也、宮崎朝雄、渡辺厚志、和田晋治
株式会社アルカ、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、飯能市教育委員会、日高市教育委員会、富士見市教育委員会

凡 例

- 1 挿図の縮尺は以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。
遺跡分布図：1／50,000、調査区位置図：1／2,500、遺構図：1／60、調査区全測図：1／400
遺物実測図：1／3・2／3・1／4、土器文様展開図：1／8
- 2 遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
- 3 図版中の遺構の表記記号は以下のとおりである。
住居跡：S J、掘立柱建物跡：S B、性格不明遺構：S X、土壌：S K、単独埋甕：S U、溝：S D
- 4 遺構番号は、昭和58年に実施した第1次調査からの通し番号である（ただし、第2～5次は未報告）。
- 5 本報告書に掲載した図面、出土品は狭山市教育委員会で保管している。

目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

I 調査の概要

- 1 発掘調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 発掘調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 3 発掘調査・報告書作成の経過・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

II 遺跡の立地と環境

- 1 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 2 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 3 遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

III 検出遺構

- 1 検出遺構の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 2 検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
 - 住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
 - 掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
 - 土壌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
 - 性格不明遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
 - 単独埋葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
 - 溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

IV 出土遺物

- 1 出土遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
- 2 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
 - 土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
 - 石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 155
 - 土製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181

V 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186

插图目次

第 1 图	狭山市遺跡分布图	4	第 33 图	第 72・73 号住居跡	45
第 2 图	稻荷上遺跡第 6 次調査区位置图	8	第 34 图	第 74 号住居跡	47
第 3 图	稻荷上遺跡第 6 次調査区全測图	9	第 35 图	土壙 (1)	49
第 4 图	第 37・38 号住居跡	11	第 36 图	土壙 (2)	52
第 5 图	第 39・40 号住居跡	12	第 37 图	土壙 (3)・第 3 号单独埋甕	56
第 6 图	第 41 ~ 43 号住居跡	14	第 38 图	第 37 号住居跡出土土器	62
第 7 图	第 44・45 号住居跡	16	第 39 图	第 38 号住居跡出土土器	63
第 8 图	第 46 号住居跡	17	第 40 图	第 39 号住居跡出土土器	65
第 9 图	第 47 号住居跡	18	第 41 图	第 40 号住居跡出土土器	65
第 10 图	第 48 号住居跡・第 1 号性格不明遺構	19	第 42 图	第 41 号住居跡出土土器	66
第 11 图	第 49 号住居跡	20	第 43 图	第 42・43 号住居跡出土土器 (1)	66
第 12 图	第 50 号住居跡	22	第 44 图	第 42・43 号住居跡出土土器 (2)	67
第 13 图	第 51 号住居跡	23	第 45 图	第 44 号住居跡出土土器 (1)	69
第 14 图	第 52 号住居跡	24	第 46 图	第 44 号住居跡出土土器 (2)	70
第 15 图	第 53 号住居跡	25	第 47 图	第 45 号住居跡出土土器	71
第 16 图	第 54 ~ 56 号住居跡 (1)	26	第 48 图	第 46 号住居跡出土土器	73
第 17 图	第 54 ~ 56 号住居跡 (2)	27	第 49 图	第 47 号住居跡出土土器	75
第 18 图	第 54 ~ 56 号住居跡 (3)	28	第 50 图	第 48 号住居跡出土土器 (1)	76
第 19 图	第 57 号住居跡	30	第 51 图	第 48 号住居跡出土土器 (2)	77
第 20 图	第 58 号住居跡・第 2 号性格不明遺構 ・第 5 号掘立柱建物跡 (1)	31	第 52 图	第 49 号住居跡出土土器 (1)	77
第 21 图	第 58 号住居跡・第 2 号性格不明遺構 ・第 5 号掘立柱建物跡 (2)	32	第 53 图	第 49 号住居跡出土土器 (2)	79
第 22 图	第 59 号住居跡	33	第 54 图	第 50 号住居跡出土土器	81
第 23 图	第 60 号住居跡	34	第 55 图	第 51 号住居跡出土土器	81
第 24 图	第 61 号住居跡	35	第 56 图	第 52 号住居跡出土土器 (1)	83
第 25 图	第 62 号住居跡	36	第 57 图	第 52 号住居跡出土土器 (2)	84
第 26 图	第 63 号住居跡	37	第 58 图	第 54 号住居跡出土土器	86
第 27 图	第 64・65 号住居跡 (1)	38	第 59 图	第 55 号住居跡出土土器 (1)	87
第 28 图	第 64・65 号住居跡 (2)	39	第 60 图	第 55 号住居跡出土土器 (2)	89
第 29 图	第 66・71 号住居跡	40	第 61 图	第 55 号住居跡出土土器 (3)	90
第 30 图	第 67・68 号住居跡 (1)	41	第 62 图	第 55 号住居跡出土土器 (4)	92
第 31 图	第 67・68 号住居跡 (2)	42	第 63 图	第 56 号住居跡出土土器 (1)	94
第 32 图	第 69・70 号住居跡	44	第 64 图	第 56 号住居跡出土土器 (2)	95
			第 65 图	第 57 号住居跡出土土器	97
			第 66 图	第 58 号住居跡出土土器 (1)	97

第 67 图	第 58 号住居跡出土土器 (2) ······ 98	第 104 图	遺構外出土土器 (3) ······150
第 68 图	第 59 号住居跡出土土器 (1) ······ 98	第 105 图	遺構外出土土器 (4) ······151
第 69 图	第 59 号住居跡出土土器 (2) ······100	第 106 图	遺構外出土土器 (5) ······153
第 70 图	第 60 号住居跡出土土器 (1) ······100	第 107 图	遺構外出土土器 (6) ······154
第 71 图	第 60 号住居跡出土土器 (2) ······102	第 108 图	第 37·38 号住居跡出土石器 ······156
第 72 图	第 61 号住居跡出土土器 ······103	第 109 图	第 39 号住居跡出土石器 ······156
第 73 图	第 62 号住居跡出土土器 (1) ······105	第 110 图	第 40 号住居跡出土石器 ······156
第 74 图	第 62 号住居跡出土土器 (2) ······106	第 111 图	第 41 号住居跡出土石器 ······157
第 75 图	第 63 号住居跡出土土器 (1) ······108	第 112 图	第 44 号住居跡出土石器 ······157
第 76 图	第 63 号住居跡出土土器 (2) ······109	第 113 图	第 46 号住居跡出土石器 (1) ······157
第 77 图	第 63 号住居跡出土土器 (3) ······111	第 114 图	第 46 号住居跡出土石器 (2) ······158
第 78 图	第 64 号住居跡出土土器 (1) ······113	第 115 图	第 48 号住居跡出土石器 ······158
第 79 图	第 64 号住居跡出土土器 (2) ······114	第 116 图	第 49 号住居跡出土石器 ······160
第 80 图	第 65 号住居跡出土土器 (1) ······116	第 117 图	第 51·52 号住居跡出土石器 ······160
第 81 图	第 65 号住居跡出土土器 (2) ······117	第 118 图	第 54 号住居跡出土石器 (1) ······160
第 82 图	第 65 号住居跡出土土器 (3) ······119	第 119 图	第 54 号住居跡出土石器 (2) ······161
第 83 图	第 65 号住居跡出土土器 (4) ······121	第 120 图	第 55 号住居跡出土石器 (1) ······161
第 84 图	第 66 号住居跡出土土器 ······122	第 121 图	第 55 号住居跡出土石器 (2) ······163
第 85 图	第 67 ~ 69 号住居跡出土土器 (1) ····122	第 122 图	第 55 号住居跡出土石器 (3) ······164
第 86 图	第 67 ~ 69 号住居跡出土土器 (2) ····124	第 123 图	第 56 号住居跡出土石器 (1) ······164
第 87 图	第 70 号住居跡出土土器 (1) ······125	第 124 图	第 56 号住居跡出土石器 (2) ······166
第 88 图	第 70 号住居跡出土土器 (2) ······126	第 125 图	第 58 号住居跡出土石器 ······166
第 89 图	第 71 号住居跡出土土器 ······128	第 126 图	第 59·60 号住居跡出土石器 ······166
第 90 图	第 72 号住居跡出土土器 ······130	第 127 图	第 61·62 号住居跡出土石器 ······168
第 91 图	第 73 号住居跡出土土器 ······132	第 128 图	第 63 号住居跡出土石器 (1) ······168
第 92 图	第 74 号住居跡出土土器 (1) ······134	第 129 图	第 63 号住居跡出土石器 (2) ······169
第 93 图	第 74 号住居跡出土土器 (2) ······135	第 130 图	第 64 号住居跡出土石器 ······170
第 94 图	第 74 号住居跡出土土器 (3) ······136	第 131 图	第 65 号住居跡出土石器 ······172
第 95 图	土壙出土土器 (1) ······138	第 132 图	第 66 号住居跡出土石器 ······172
第 96 图	土壙出土土器 (2) ······140	第 133 图	第 67 号住居跡出土石器 (1) ······172
第 97 图	土壙出土土器 (3) ······141	第 134 图	第 67 号住居跡出土石器 (2) ······173
第 98 图	土壙出土土器 (4) ······143	第 135 图	第 70 ~ 72 号住居跡出土石器 ······175
第 99 图	第 2 号性格不明遺構出土土器 ······143	第 136 图	第 73 号住居跡出土石器 ······175
第 100 图	单独埋甕 (1) ······145	第 137 图	第 74 号住居跡出土石器 (1) ······175
第 101 图	单独埋甕 (2) ······147	第 138 图	第 74 号住居跡出土石器 (2) ······176
第 102 图	遺構外出土土器 (1) ······147	第 139 图	第 2 号性格不明遺構出土石器 ······176
第 103 图	遺構外出土土器 (2) ······148	第 140 图	土壙出土石器 (1) ······176

第 141 図	土壙出土石器 (2)	177	第 146 図	稻荷上遺跡出土土器変遷図 (3)	191
第 142 図	出土土製品 (1)	182	第 147 図	第 3 a 期連弧文土器出土例	191
第 143 図	出土土製品 (2)	184	第 148 図	稻荷上遺跡集落変遷図 (1)	196
第 144 図	稻荷上遺跡出土土器変遷図 (1)	187	第 149 図	稻荷上遺跡集落変遷図 (2)	197
第 145 図	稻荷上遺跡出土土器変遷図 (2)	189			

表目次

第 1 表	出土石器属性表 (1)	178	第 3 表	出土石器属性表 (3)	180
第 2 表	出土石器属性表 (2)	179			

写真図版目次

図版 1	稻荷上遺跡 第 6 次調査区空中写真	第 53 号住居跡全景
図版 2	稻荷上遺跡 第 6 次調査区全景	第 54 号住居跡全景 炉跡
	第 37 号住居跡全景	第 55 号住居跡全景 炉跡 1 炉跡 1 土器埋設 状況 屋内埋喪 1・2
	第 38 号住居跡全景 炉跡	図版 7 第 56 号住居跡全景 炉跡 屋内埋喪 遺物出 土状況
	第 39 号住居跡全景 炉跡 屋内埋喪	第 57 号住居跡炉跡
	第 40 号住居跡全景	第 58 号住居跡全景 遺物出土状況
図版 3	第 41 号住居跡全景	第 59 号住居跡全景
	第 42・43 号住居跡全景 炉跡 屋内埋喪	図版 8 第 60 号住居跡全景 遺物出土状況
	第 44 号住居跡全景 炉跡	第 61 号住居跡全景 炉跡 遺物出土状況
	第 45 号住居跡全景 炉跡	第 62 号住居跡全景 炉跡
図版 4	第 46 号住居跡全景 カマド 1 カマド 2	第 63 号住居跡全景
	第 47 号住居跡全景	図版 9 第 63 号住居跡炉跡 屋内埋喪
	第 48 号住居跡・第 1 号性格不明遺構全景	第 64・65 号住居跡全景
	第 48 号住居跡炉跡 遺物出土状況	第 64 号住居跡遺物出土状況
	第 1 号性格不明遺構遺物出土状況	第 65 号住居跡炉跡 遺物出土状況
図版 5	第 49 号住居跡全景 炉跡 屋内埋喪	第 66・71 号住居跡全景 第 66 号住居跡炉跡
	第 50 号住居跡炉跡	図版 10 第 71 号住居跡炉跡
	第 51 号住居跡全景 炉跡	第 67・68 号住居跡全景 炉跡 2
	第 52 号住居跡全景 炉跡 1・2	
図版 6	第 52 号住居跡遺物出土状況	

- 第 69・70・72・73 号住居跡全景
第 70 号住居跡炉跡
第 72 号住居跡炉跡 遺物出土狀況
第 73 号住居跡全景
- 図版 11 第 2 号性格不明遺構全景
第 32 号土壙・第 2 号单独埋甕全景
第 46 号土壙全景
第 56 号土壙全景
第 63 号土壙全景
第 4 号单独埋甕検出狀況
第 5 号单独埋甕検出狀況
第 6 号单独埋甕検出狀況
- 図版 12 出土土器
第 37 号住居跡 (第 38 図 1～3)
第 38 号住居跡 (第 39 図 1)
第 40 号住居跡 (第 40 図 1・2)
- 図版 13 出土土器
第 41 号住居跡 (第 42 図 1)
第 42・43 号住居跡 (第 43 図 1・2 第 44 図 3・4)
第 44 号住居跡 (第 45 図 1)
- 図版 14 出土土器
第 44 号住居跡 (第 45 図 2～4)
第 45 号住居跡 (第 47 図 1)
第 46 号住居跡 (第 48 図 1・2)
- 図版 15 出土土器
第 46 号住居跡 (第 48 図 3～6・8～11)
- 図版 16 出土土器
第 48 号住居跡 (第 50 図 1・2)
第 49 号住居跡 (第 52 図 1・2 第 53 図 3)
第 50 号住居跡 (第 54 図 1)
- 図版 17 出土土器
第 51 号住居跡 (第 55 図 1)
第 52 号住居跡 (第 56 図 1～5)
- 図版 18 出土土器
第 52 号住居跡 (第 56 図 6・7)
第 55 号住居跡 (第 59 図 1～4)
- 図版 19 出土土器
第 55 号住居跡 (第 60 図 5～9 第 61 図 12)
- 図版 20 出土土器
第 55 号住居跡 (第 61 図 13・14)
第 56 号住居跡 (第 63 図 1～4)
- 図版 21 出土土器
第 57 号住居跡 (第 65 図 1)
第 58 号住居跡 (第 66 図 1～5)
- 図版 22 出土土器
第 58 号住居跡 (第 66 図 6・7)
第 60 号住居跡 (第 70 図 1～3 第 71 図 4)
- 図版 23 出土土器
第 61 号住居跡 (第 72 図 1～3)
第 62 号住居跡 (第 73 図 1・3)
第 63 号住居跡 (第 75 図 1)
- 図版 24 出土土器
第 63 号住居跡 (第 75 図 2～5 第 76 図 6・7)
- 図版 25 出土土器
第 63 号住居跡 (第 76 図 8・9・11)
第 64 号住居跡 (第 78 図 1・2 第 79 図 3)
- 図版 26 出土土器
第 64 号住居跡 (第 79 図 4～6)
第 65 号住居跡 (第 80 図 1～3)
- 図版 27 第 65 号住居跡 (第 81 図 4・5 第 82 図 7～10)
- 図版 28 出土土器
第 65 号住居跡 (第 82 図 11)
第 67～69 号住居跡 (第 85 図 1)
第 70 号住居跡 (第 87 図 1～4)
- 図版 29 出土土器
第 70 号住居跡 (第 87 図 5～7)
第 71 号住居跡 (第 89 図 1)
第 72 号住居跡 (第 90 図 1・2)
- 図版 30 出土土器
第 73 号住居跡 (第 91 図 1～3)
第 74 号住居跡 (第 92 図 1～3)
- 図版 31 出土土器
第 74 号住居跡 (第 92 図 4～8 第 93 図 10)
- 図版 32 出土土器

- 第 74 号住居跡 (第 93 图 11)
- 第 32 号土壙 (第 95 图 15・16)
- 第 46 号土壙 (第 96 图 39)
- 第 1 号单独埋甕 (第 100 图 1)
- 第 2 号单独埋甕 (第 100 图 2)
- 图版 33 出土石器
- 第 3 号单独埋甕 (第 100 图 3)
- 第 4 号单独埋甕 (第 100 图 4)
- 第 5 号单独埋甕 (第 100 图 5)
- 第 6 号单独埋甕 (第 101 图 6)
- 遺構外出土石器 (第 102 图 1・3)
- 图版 34 出土石器
- 遺構外出土石器 (第 102 图 4 第 103 图 5~9)
- 图版 35 出土石器
- 第 37~39 号住居跡 (第 108・109 图)
- 第 40 号住居跡 (第 110 图)
- 图版 36 出土石器
- 第 41・44 号住居跡 (第 111・112 图)
- 第 46 号住居跡 (第 113・114 图)
- 图版 37 出土石器
- 第 48 号住居跡 (第 115 图)
- 第 49・51・52 号住居跡 (第 116・117 图)
- 图版 38 出土石器
- 第 54 号住居跡 (第 118・119 图)
- 图版 39 出土石器
- 第 55 号住居跡 (第 120 图 第 121 图-1)
- 图版 40 出土石器
- 第 55 号住居跡 (第 121 图-2 第 122 图)
- 图版 41 出土石器
- 第 56 号住居跡 (第 123・124 图)
- 图版 42 出土石器
- 第 58~60 号住居跡 (第 125・126 图)
- 第 61・62 号住居跡 (第 127 图)
- 图版 43 出土石器
- 第 63 号住居跡 (第 128 图 第 129 图-1)
- 图版 44 出土石器
- 第 63 号住居跡 (第 129 图-2・3)
- 图版 45 出土石器
- 第 64 号住居跡 (第 130 图-1・2)
- 图版 46 出土石器
- 第 65・66 号住居跡 (第 131・132 图)
- 第 67 号住居跡 (第 133・134 图-1)
- 图版 47 出土石器
- 第 67 号住居跡 (第 134 图-2・3)
- 图版 48 出土石器
- 第 70~73 号住居跡 (第 135・136 图)
- 第 74 号住居跡 (第 137・138 图)
- 图版 49 出土石器
- 第 2 号性格不明遺構・第 22・44・61 号土壙
(第 139~141 图)

I 調査の概要

1 発掘調査に至る経過

平成 14 年 6 月に、学校法人文理佐藤学園（以下、事業者）より学校建設が予定されている狭山市大字下奥富字稲荷上 582 外の土地について、埋蔵文化財の所在確認があった。狭山市教育委員会社会教育課（以下、市教委）は、当該開発予定地が稲荷上遺跡に該当するため、埋蔵文化財確認調査の実施が必要であると回答した。その後の日程調整の結果、平成 14 年 8 月 22 日から 8 月 30 日の予定で確認調査を行うこととした。

市教委が実施した確認調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡 20 軒余が検出された。建設される小学校は、平成 16 年度開校予定で対応が急がれるところであり、発掘調査実施が避けられないものとなったため、事業者に了承を得た上で、表土除去作業を継続して行った。その後、事業者名で、文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項（現第 93 条の 1）の規定による埋蔵文化財発掘届が提出され、市教委は確認調査の結果を添付し、平成 14 年 10 月 8 日に埼玉県教育委員会へ進達した。同日、狭山市遺跡調査会会長名で、文化財保護法第 57 条第 1 項（現第 92 条）に基づく発掘調査届を提出し、調査実施の運びとなった。発掘調査は、平成 14 年 10 月 9 日から開始した。なお、地権者との調整の関係で未調査の部分については、本調査期間に確認調査、表土除去を行うことで事業者と合意した。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 面 積	時 代
稲荷上遺跡 (県遺跡番号 22-032)	狭山市大字下奥富 字稲荷上 582 外	3,700 m ²	縄文・奈良・平安

2 発掘調査の組織

1) 発掘調査（平成 14・15 年度）

狭山市遺跡調査会（主体者） (事務局)	会長	野村甚三郎（狭山市教育委員会教育長）
	理事	今坂隆二（狭山市文化財保護審議会委員長）
	理事	濱野良一（狭山市教育委員会教育次長）
	事務局長	名雲康仁（社会教育課長）
	事務局	末吉 隆（社会教育課主幹）
	事務局	大野美由紀（社会教育課主任）
	事務局	石塚和則（社会教育課主任）
	事務局	安井智幸（社会教育課主事補）
	調査担当	石塚和則・安井智幸

2) 報告書作成（平成 29 年度）

狭山市遺跡調査会（主体者）	会長	向野康雄（狭山市教育委員会教育長）
	理事	高橋光昭（狭山市文化財保護審議会委員長）

	理事	日吉一博	(狭山市文化財保護審議会委員)
	理事	橋本太郎	(狭山市文化財保護審議会委員)
	理事	滝嶋正司	(狭山市教育委員会生涯学習部長)
(事務局)	事務局長	田中肇夫	(社会教育課長)
	事務局	吉田 弘	(社会教育課主幹)
	事務局	石塚和則	(社会教育課主査)
	事務局	安井智幸	(社会教育課主査)
	事務局	三ツ木康介	(社会教育課主任)
	整理担当	石塚和則・安井智幸	

3 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査（平成14・15年度）

発掘調査は、校舎等建設予定部分の内、遺構検出範囲の3,700㎡を対象に平成14年10月19日より開始した。表土は調査区北東部の一部を除いて掘削済みであったため、北西側から遺構確認作業を行った。その結果、11月上旬までに縄文時代前・中期の住居跡31軒、奈良・平安時代の住居跡2軒、土壌多数を確認した。北端で検出された住居跡から番号を打ち、掘り下げと断面図作成を行う。11月中旬、基準点測量を実施、写真撮影を終えた住居跡から、順次平面図作成を開始した。平成15年1月上旬、北側残り部分の表土を除去し、遺構確認を行い、新たに6軒の住居跡を検出した。1月中旬、調査区南側にある未調査部分について確認調査を行うが、遺構は検出されなかった。2月以降は、調査区央部から南側の遺構群の調査を進めた。3月下旬に航空写真撮影を実施し、調査区南東側の遺構集中部分の写真撮影、平面図作成を行った。平成15年4月11日をもって、現地作業を終えた。

報告書作成（平成15～28年度）

出土遺物の水洗、注記、接合は平成15～18年度までに断続的に行った。土器の実測は接合と並行して行い、平成24年度末に終了した。平成25年度から遺構図版、土器図版の作成を本格的に開始、石器図版を除いて平成26年度初めに完了した。原稿執筆は平成26年10月から開始、出土土器の写真撮影は、平成27年5月に行い、並行して写真図版の編集を進めた。石器の実測については、選別、分類のうえ、外部業者に委託し、平成27年8月に石器実測図が納品された。出土石器の写真撮影、原稿執筆及び編集は平成28・29年度に行い、平成29年10月に報告書刊行の運びとなった。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

狭山市は、市域中央を貫流する入間川によって分断された入間台地と武蔵野台地の境に所在する。入間川は外秩父山地を水源とする名栗川と、青梅市に水源を持つ成木川が加治丘陵で合流して形成された河川で、比企丘陵入間台地を開析する都幾川・槻川・高麗川・越辺川・小畦川を束ねて荒川に接続し、市域から始まり荒川接続点周辺にいたる地域までの巨大な沖積平野を形成する。

沖積平野に繋がる市域の最も低い沖積面の両側には河岸段丘が見られる。段丘の内最も低い面は立川面、最も高い面は下末吉面であり、その中間に武蔵野面が存在する。

市域の最高点は稲荷山公園南方の航空自衛隊基地内にあり、海拔高は約 100m を測る。高度は北東に行くに従って下がり、青柳北方の川越市と隣接する地点で最も低くなり、海拔高は約 29m になる。

市域の地下構造は、下末吉・武蔵野・立川のそれぞれの名を冠した礫層の上にさらに各名のローム層がのり形となっている。下末吉・武蔵野ローム層は立川ローム層によって覆われているため、通常は露出していない。崖地でのみ観察できる。

下末吉ローム層は、下末吉面から武蔵野面へ遷移する場所でのみ観察される。主に鶉ノ木周辺の崖地で観察することが可能である。黄褐色から橙茶色の色調で、粘土化の進んだ柔らかいロームである。厚さは 3～4m で、輝石と角閃石および木曾御岳火山から噴出した Pm-1 が含まれる層である（ただし Pm-1 は、市域では未確認）。

武蔵野ローム層は、下末吉面または武蔵野面から立川面に遷移する場所でのみ観察される。乾燥し易く暗茶褐色を呈し、最下部より 10～20cm 位に箱根火山から噴出した火山灰層である東京軽石層が存在する。輝石を多く含み、層上部に行くに従ってカンラン石が増える。

立川ローム層は市域全体を 1～2m 程度覆う層で、乾燥すると暗赤褐色～暗黄褐色を呈する。カンラン石・輝石を含むこの層の上部に遺構が存在するため、市域の発掘調査における遺構確認面の大多数は立川ローム層に設定されている。

市域の北側となる左岸は武蔵野・立川面の二段、南側となる右岸は、これに下末吉面を加えた三段の河岸段丘を形成している。市内遺跡は市域の河川の中でも入間川を中心にして分布するものが多い。

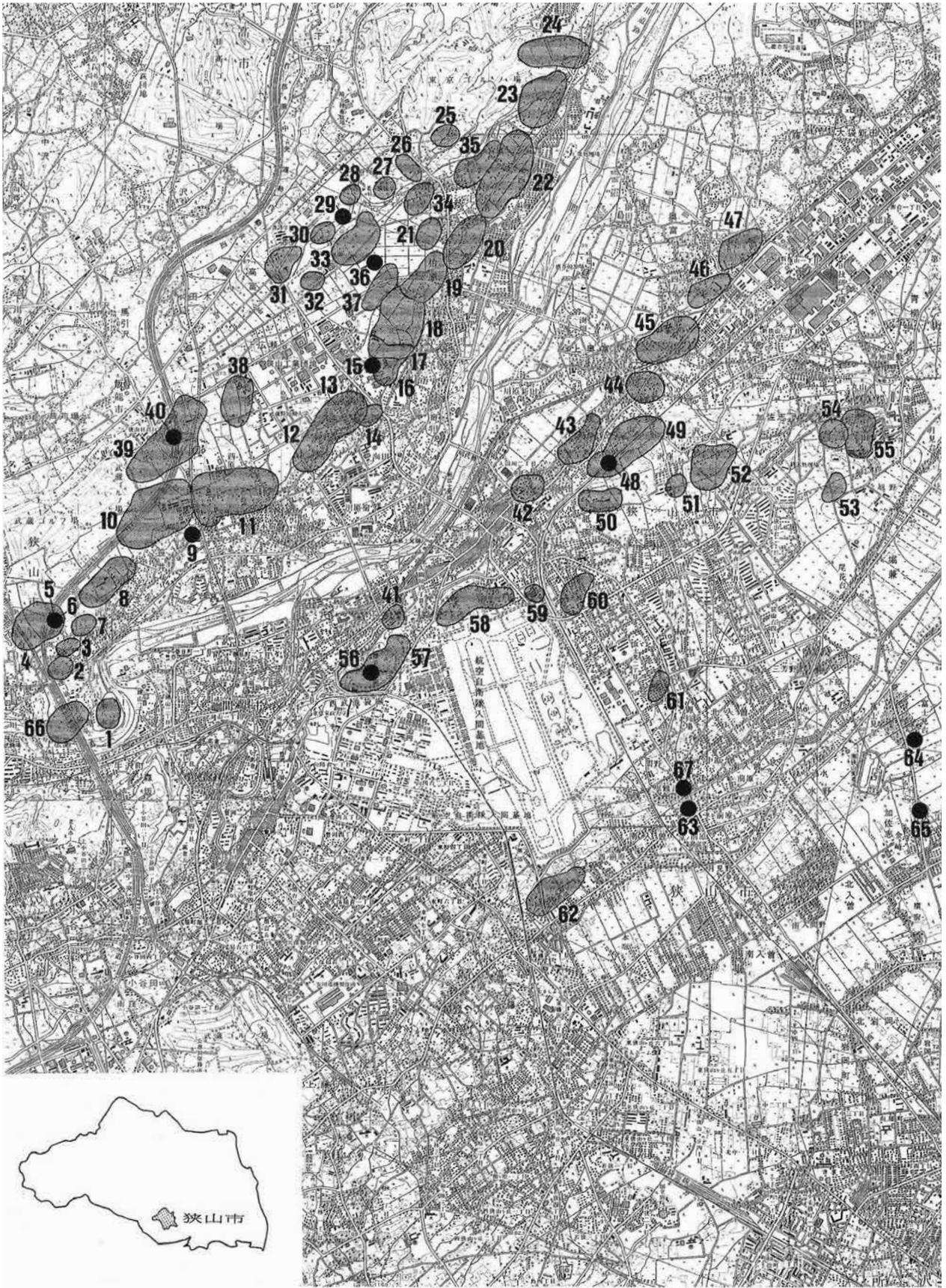
入間川左岸は、入間台地に属し、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、鳥ノ上遺跡、富士塚遺跡、森ノ上遺跡と存在し、若干離れて今宿遺跡、上広瀬古墳群、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡群等が連綿と帯状に続く。これら一連の遺跡群は時代が下るにつれて下流から上流へと形成されていく傾向がある。

入間川右岸は武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稲荷上遺跡、揚楯木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成する。これら右岸の遺跡群は地下水脈が深く、湧水地点の周辺に、集中的に集落が形成される傾向がある。

2 歴史的環境

狭山市市内では 67 箇所の遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡としては、平成 2 年度から平成 3 年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が



第1図 狭山市遺跡分布図

狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

- | | |
|-----------------------------|----------------------------------|
| 1 東八木窯跡群（22049）奈・平 | 37 上双木遺跡（22077）縄（中・後）、奈・平 |
| 2 八木遺跡（22068）縄（前・中）、奈・平 | 38 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平 |
| 3 八木北遺跡（22021）奈・平 | 39 西久保遺跡（22069）先、縄（草）、奈・平 |
| 4 八木上遺跡（22022）縄（前・中）、奈・平 | 40 東久保遺跡（22070）先 |
| 5 沢口上古墳群（22020）古（後） | 41 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後） |
| 6 笹井古墳群（22019）古（後） | 42 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）、古、奈・平 |
| 7 沢口遺跡（22080）縄（早～中）、古、奈・平 | 43 峰遺跡（22024）縄（中・後）、奈・平 |
| 8 宮地遺跡（22018）縄（中）、奈・平 | 44 戸張遺跡（22026）縄（前・中）、奈・平 |
| 9 金井遺跡（22071）中 | 45 揚櫓木遺跡（22027）縄（前・中）、奈・平 |
| 10 金井上遺跡（22023）縄（草・前）、奈・平、中 | 46 坂上遺跡（22029）縄（中）、奈・平 |
| 11 上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）、奈・平 | 47 稲荷上遺跡（22032）縄（前・中）、奈・平 |
| 12 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）、奈・平 | 48 上中原遺跡（22025）先 |
| 13 今宿遺跡（22002）縄（早～中）、奈・平 | 49 中原遺跡（22025）縄（早～後）、奈・平 |
| 14 上広瀬古墳群（22001）古（後） | 50 沢台遺跡（22079）縄（中）、奈・平 |
| 15 森ノ上西遺跡（22079）先 | 51 沢久保遺跡（22041）縄（中） |
| 16 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平 | 52 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）、奈・平 |
| 17 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平 | 53 吉原遺跡（22067）縄（前） |
| 18 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平 | 54 下向遺跡（22085）縄（前～後） |
| 19 小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）、古～中 | 55 台遺跡（22084）縄（前～後） |
| 20 御所の内遺跡（22012）奈・平 | 56 稲荷山公園古墳群（22052）古（後） |
| 21 英遺跡（22074）奈・平、中 | 57 稲荷山公園遺跡（22051）縄（中） |
| 22 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）、奈・平、中 | 58 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平 |
| 23 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）、奈・平 | 59 富士見西遺跡（22082）縄（中）、奈・平 |
| 24 字尻遺跡（22075）縄（前～後）、奈・平 | 60 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）、奈・平 |
| 25 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平 | 61 富士見南遺跡（22081）縄（中） |
| 26 金井林遺跡（22035）縄（前～後） | 62 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）、奈・平 |
| 27 鶴田遺跡（22044）縄（前・中） | 63 七曲井（22046）中 |
| 28 上ノ原東遺跡（22065）奈・平 | 64 堀兼之井（22047）中 |
| 29 上ノ原西遺跡（22063）縄（中） | 65 八軒家の井（22076）中 |
| 30 半貫山遺跡（22061）中 | 66 八木前遺跡（22087）縄（前・後） |
| 31 稲荷山遺跡（22058）縄（後） | 67 堀難井遺跡（22089）中 |
| 32 前山遺跡（22059）縄（中） | |
| 33 高根遺跡（22062）縄（早・中・後） | |
| 34 町久保遺跡（22034）縄（中）、奈・平、中 | |
| 35 宮原遺跡（22017）縄（前～後） | |
| 36 下双木遺跡（22078）縄（草） | |

首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡（39）発掘調査において、旧石器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における当該期の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成6年度に同遺跡の発掘調査を行っており、武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得ている。また、宮地遺跡（8）では細石刃、細石核が表採されている。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されている。概観すると、前期黒浜期に集落の明確化、遺跡数の増加等、大きな動きが認められるが、数的には中期中葉から後葉のものが大勢を占めており、この時期偏差が市内の縄文遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。

草創期の遺跡としては、入間川左岸の金井上遺跡（10）、西久保遺跡（39）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、下双木遺跡（36）、丸山遺跡（25）、右岸では滝祇園遺跡（42）で、当該期のものと思われる尖頭器が出土している。今後も単独出土例が増加すると思われるが、現在のところ土器を伴った事例はないので、本期の詳細は不明である。

早期前半では押型文土器の小破片が左岸の高根遺跡（33）で出土しているほか、近接する日高市向山遺跡で本段階主体の住居跡6軒が検出されている。早期後半には、今宿遺跡（13）で条痕文系土器を伴う炉穴が検出されている。西久保遺跡でも、早期のものと思われる炉穴群が検出されている。

前期前半では関山式土器が宮原遺跡（35）で出土しているが、未だ遺構検出を見ていない。黒浜期には、市内でもまとまった調査事例がある。右岸域では、揚楯木遺跡（45）、今回報告の稲荷上遺跡（47）で、段丘崖に並行して占地する住居跡が検出された。左岸域では、笹井地区に集落跡の集中が見られ、八木前遺跡（66）、八木遺跡（2）、八木上遺跡（4）では、圏央道関連で黒浜期の集落が調査され、これらを含めれば、入間川両岸で広く当該期の集落が展開していたことが明らかとなっている。前期後半では、諸磯b～C式、十三菩提式の土器が、金井上遺跡、八木上遺跡で出土している。当該期には遺跡数減少、規模縮小の傾向が知られているが、市域においても例外ではない。

中期には、表面採集資料での評価も含めて、遺跡数は39箇所と急増する。特に中期中葉、勝坂期からの増加、規模の拡大が顕著である。代表的な遺跡としては、左岸柏原地区に所在する丸山遺跡、宮原遺跡、笹井地区には市内遺跡屈指の大集落跡である宮地遺跡が立地する。右岸では今回報告の稲荷上遺跡が挙げられる。しかしながら、中期終末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。入間川左岸においては、森ノ上遺跡（16）の他、宮地遺跡、字尻遺跡（24）、右岸では揚楯木遺跡等、中期末から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されるにとどまり、市内各地で集落の縮小、住居軒数の急激な減少が看取される。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市・飯能市・日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いことで知られている。ただし、森ノ上遺跡や字尻遺跡のように当該期のみ限定された集落は稀有な存在と言えよう。なお、入間川左岸に立地する今宿遺跡では、中期末の張出部を持たない径3m前後の小型住居跡が確認されている。本種住居跡は、日高市宿東遺跡でも検出例があり、系統や柄鏡形住居跡との共存関係等、興味深い問題が提起されている（渡辺1998）。後期前半では、宮原遺跡で堀之内1式期の住居跡が検出されている。後半では、城ノ越遺跡（22）で安行Ⅱ式の土器片が出土した。

縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺構、遺物の確認例はほとんど見られず、森ノ上遺跡で土壌中より弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる土器が一点報告されているのみである。

古墳時代の遺跡は、沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稲荷山公園古墳群（56）

と滝祇園遺跡が所在する。古墳群のうち調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、7世紀後半のものとする。ただし、笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性もある。当該期の集落遺跡には滝祇園遺跡があり、上広瀬古墳群に近い時期の土師甕や坏が出土している。

奈良・平安時代の集落は、入間川左岸に帯状に23遺跡あり、右岸は久保・不老川流域のものを含めて14遺跡存在し、住居跡や掘立柱建物跡等の遺構群が検出されている。これら遺構群は、出土遺物を基に時代推定が行われ、8世紀初頭から10世紀末までの間、1世紀を四半期に分割した大略12期に分類して報告されている。市域の集落は、高麗郡が建郡された霊龜二年（716年）よりやや時代の下った8世紀中頃から形成され、その後9世紀第2四半期ごろにピークを迎えた後、次第に数を減らしていく。

8世紀第1・2四半期に、入間川両岸にある宮ノ越遺跡（23）、森ノ上遺跡、小山ノ上遺跡（19）、揚榎木遺跡に初源を見るが、他期に比べて検出されている遺構・遺物数が少ないため不明な点が多い。

8世紀後半以降、入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡（20）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡（12）、今宿遺跡、金井上遺跡、宮地遺跡へと連綿と集落が形成され、右岸でも稲荷上遺跡、坂上遺跡（46）、揚榎木遺跡、戸張遺跡（44）、中原遺跡（49）、峰遺跡（43）、滝祇園遺跡へと、やはり帯状に集落が形成されている。この頃に見られる人口の増加とそれに伴う東金子窯跡群製品の普及は、承和12年（845年）に開始された国分寺の再建に連動していると考えられ、当該期の市域の集落は、これに関係する人々のものである可能性が指摘されている。

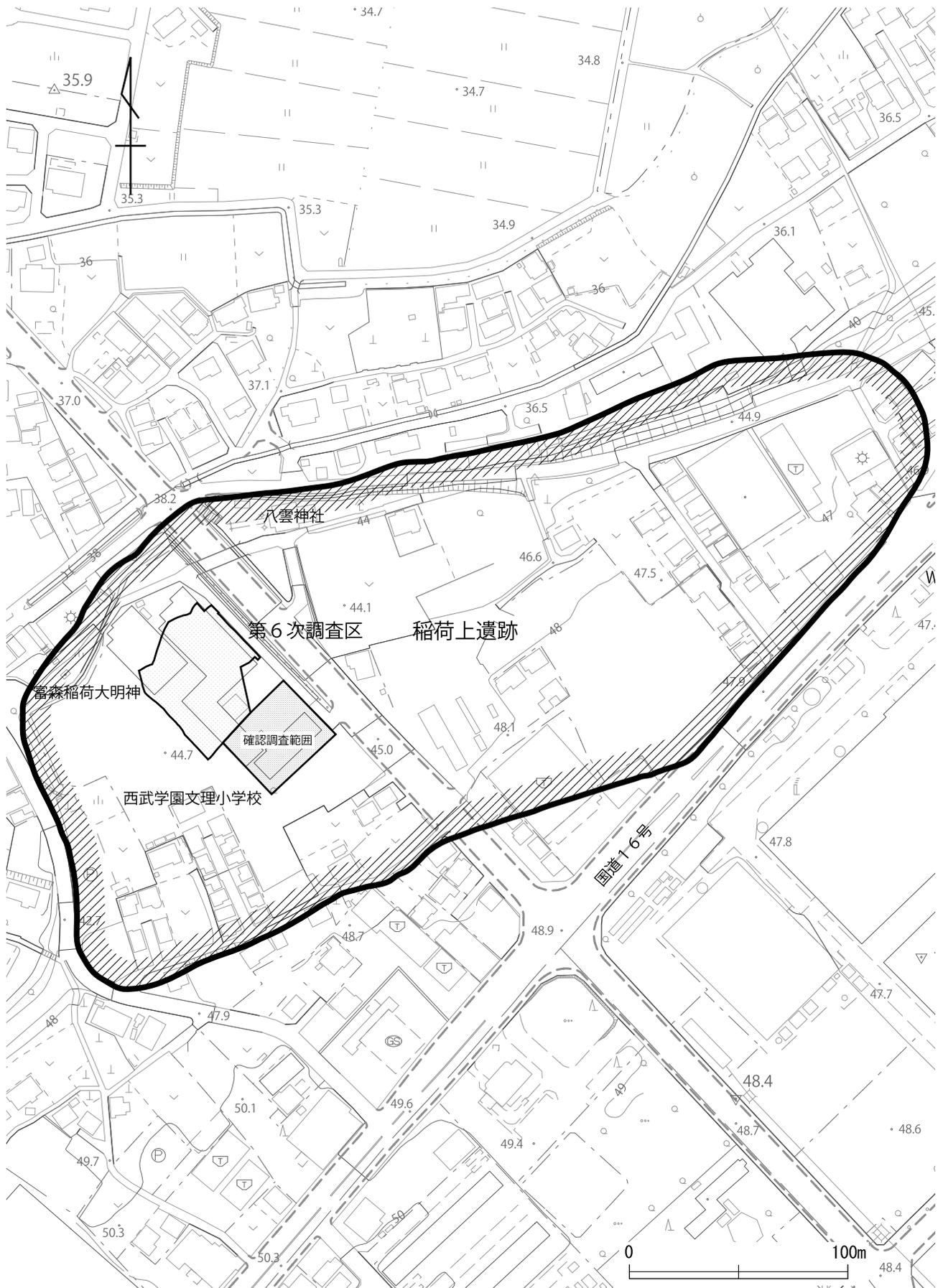
9世紀後半になると住居跡数は減少するが、集落形成範囲の縮小はほとんど見られない。当該期の遺構は宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稲荷上遺跡、揚榎木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡に見られ、新久A-1・2窯からD-1・3窯（入間市）の東金子系須恵器が出土する。約半数は還元焰による焼成が行われていない土師質須恵器の坏や埴が出現し始め、還元焰によって須恵器を焼成するための諸環境が悪化し、9世紀中ごろまで続いていた生産技術大系の変容が看取できる。なお、これらの集落遺跡はおおよそ10世紀代まで継続する。

3 遺跡の概要

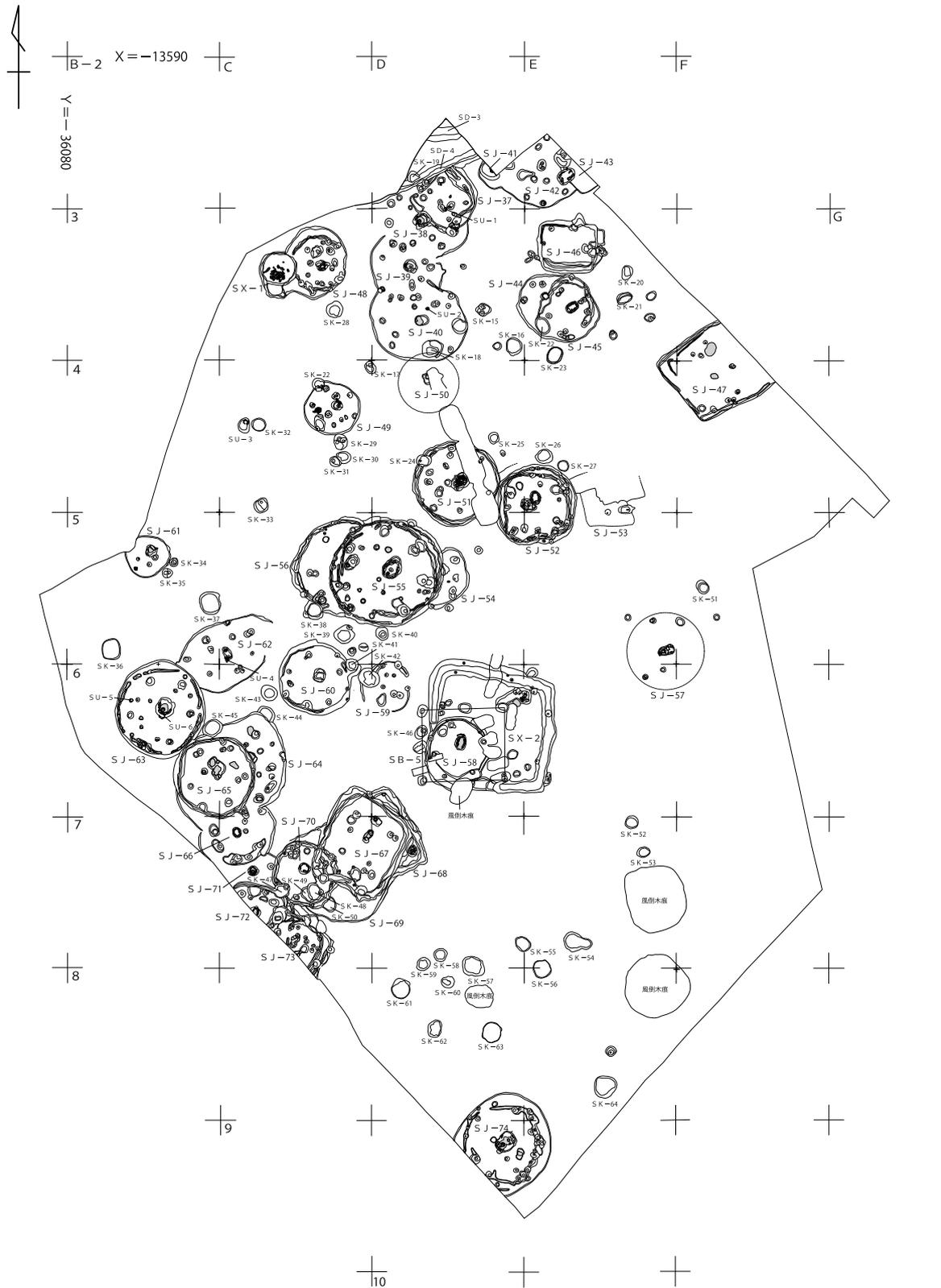
稲荷上遺跡は狭山市大字下奥富に所在する。西武新宿線狭山市駅より北へ直線距離にして0.6km付近、狭山市と川越市の市境付近に位置する（第2図）。南西には坂上遺跡、揚榎木遺跡が立地している。

縄文時代前・中期および奈良・平安時代の集落遺跡で、入間川右岸の台地縁辺部に立地する。遺跡内の標高は44～48mで、遺跡北側の沖積地との比高差は約8mを測る。遺跡面は段丘2段に跨り、上位面は奈良・平安時代主体、界下位面は縄文時代前期・中期の集落が展開する。

本遺跡では、これまでに7回の本発掘調査が実施され（内、第2～5次、7次は未報告）、縄文時代住居跡84軒、奈良・平安時代住居跡9軒、掘立柱建物跡5棟、単独埋甕6基、土壙64基、溝状遺構4条、性格不明遺構2基が検出されている。遺構検出数では、市内最大規模の宮地遺跡に拮抗する。縄文時代の住居跡の内訳は、前期9軒、中期75軒を数える。前期黒浜式期の住居跡は崖線に並行する形で線的に分布する傾向がある。この在り方は、隣接する揚榎木遺跡で検出された同時期の集落に共通する。中期の遺構群は、現時点では南側に開口する馬蹄形配置が想定され、外縁部に加曾利EⅢ式期の住居跡や中期末の単独埋甕が展開する傾向が看取される。



第2図 稲荷上遺跡第6次調査区位置図



第3図 稻荷上遺跡第6次調査区全測図

Ⅲ 検出遺構

1 検出遺構の概要

今回報告する稲荷上遺跡第6次調査区は、平成7年度に市道幹第74号線建設に伴って実施された第2次調査区（未報告）に隣接する。調査は、小学校建設用地 11,000㎡の内、3,700㎡を対象とした。

検出された遺構は、縄文時代前期黒浜1式期の住居跡5軒、同中期勝坂2a式期・加曾利EⅠ（新）～加曾利EⅢ式（新）期の住居跡25軒（うち1軒は遺構内重複）、時期不明7軒、単独埋甕6基、奈良・平安時代の住居跡2軒、掘立柱建物1棟、両時代の土壇49基の他、時期不明の性格不明遺構2基、溝2条である（第3図）。縄文時代の遺構分布は、前述したように、前期住居跡は線的に分布する。中期住居跡は弧状を呈し、全体に重複が著しい。外縁部に新しい段階の住居跡と同時期の屋外埋甕が分布する傾向が認められる。土壇は調査区南側にまとまる傾向があるが、縄文時代と奈良・平安時代に帰属すると思われるが、出土遺物が非常に少ないため、時期を特定できたものは少数である。中央から北側にかけては、特定区域に集中するような傾向は見られず、住居跡空間と重複して散在する。奈良・平安時代の遺構は、調査区中央から東側に点在する。段丘上位面を対象とした第1次調査及び今回報告と同一面の調査である第2次調査では、同時代の住居跡が合わせて8軒検出されており、集落が段丘2面に亘って展開する。

2 検出遺構

住居跡

第37号住居跡（第4図）

本住居跡は調査区北端、D-2・3グリッドに位置する。北側に第4号溝、東側に第38号住居跡が重複する。また、覆土内から第1号単独埋甕が検出された。

平面形は、北側が不明確であるが、不整な隅丸方形を呈する。規模は長径4.12m、短径4.01m、深さ0.15m前後を測る。主軸方位は、N-37°-Wを指す。ピットは、17箇所検出されたが、いくつかは隣接する第38号住居跡のものと思われる。各々の深さは、P1=0.06m、P2=0.31m、P3=0.30m、P4=0.39m、P5=0.09m、P6=0.30m、P7=0.55m、P8=0.18m、P9=0.20m、P10=0.70m、P11=0.35m、P12=0.10m、P13=0.23m、P14=0.47m、P15=0.40m、P16=0.19m、P17=0.13mを測る。主柱穴配置は、不明である。床面は概ね平坦であるが、硬化面は認められなかった。壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は深さ15cm前後と浅いが、ほぼ全周し、東側には2条確認された。炉跡は検出されなかった。ただし、P15～17内側で、焼土面が認められた。

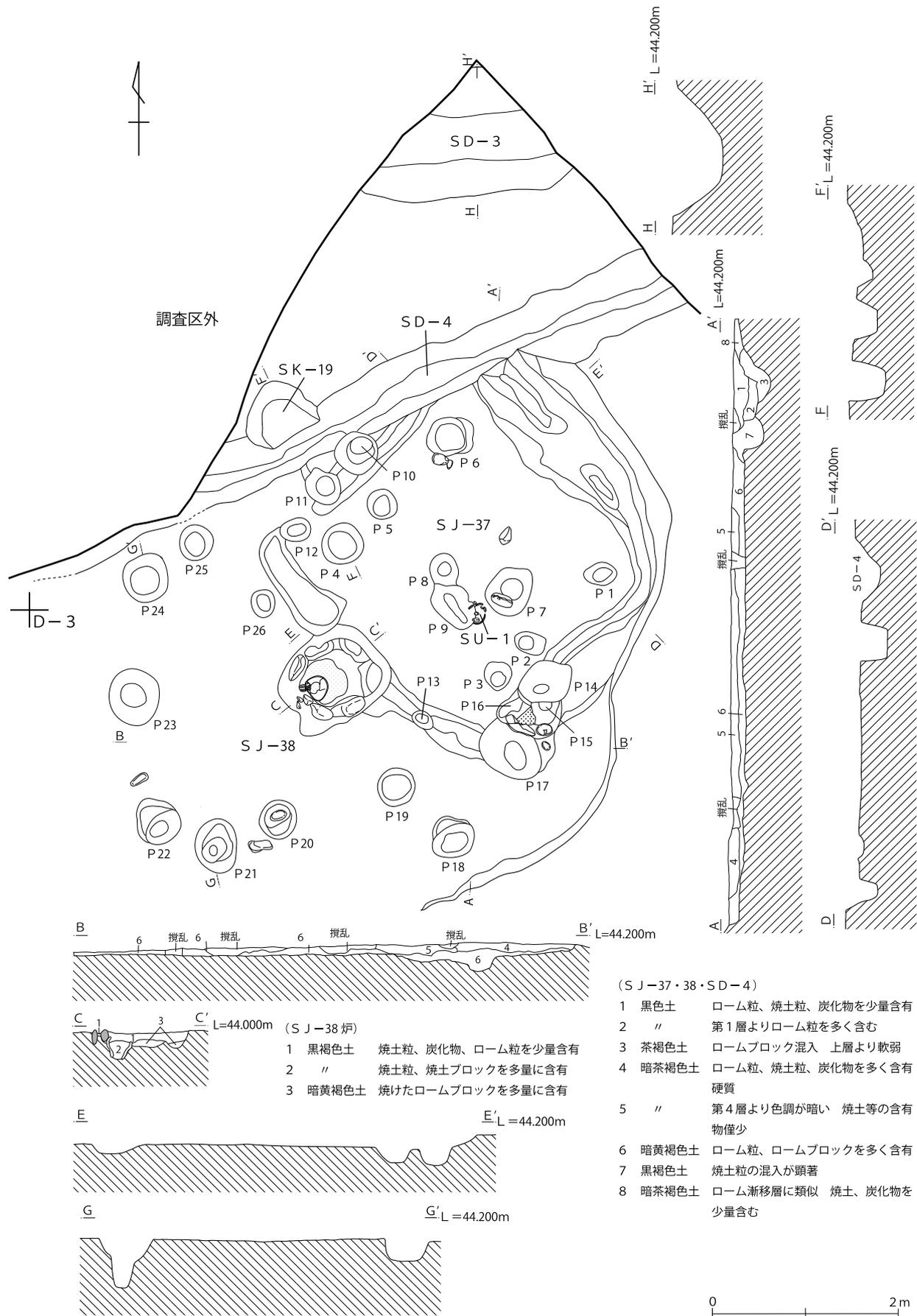
出土遺物は、まとまり無く覆土全体に散乱して出土したが、量的には少ない。土器片は、遺構帰属時期以外の混入も顕著であった。

出土土器から、本住居跡の時期は黒浜式段階と思われる。

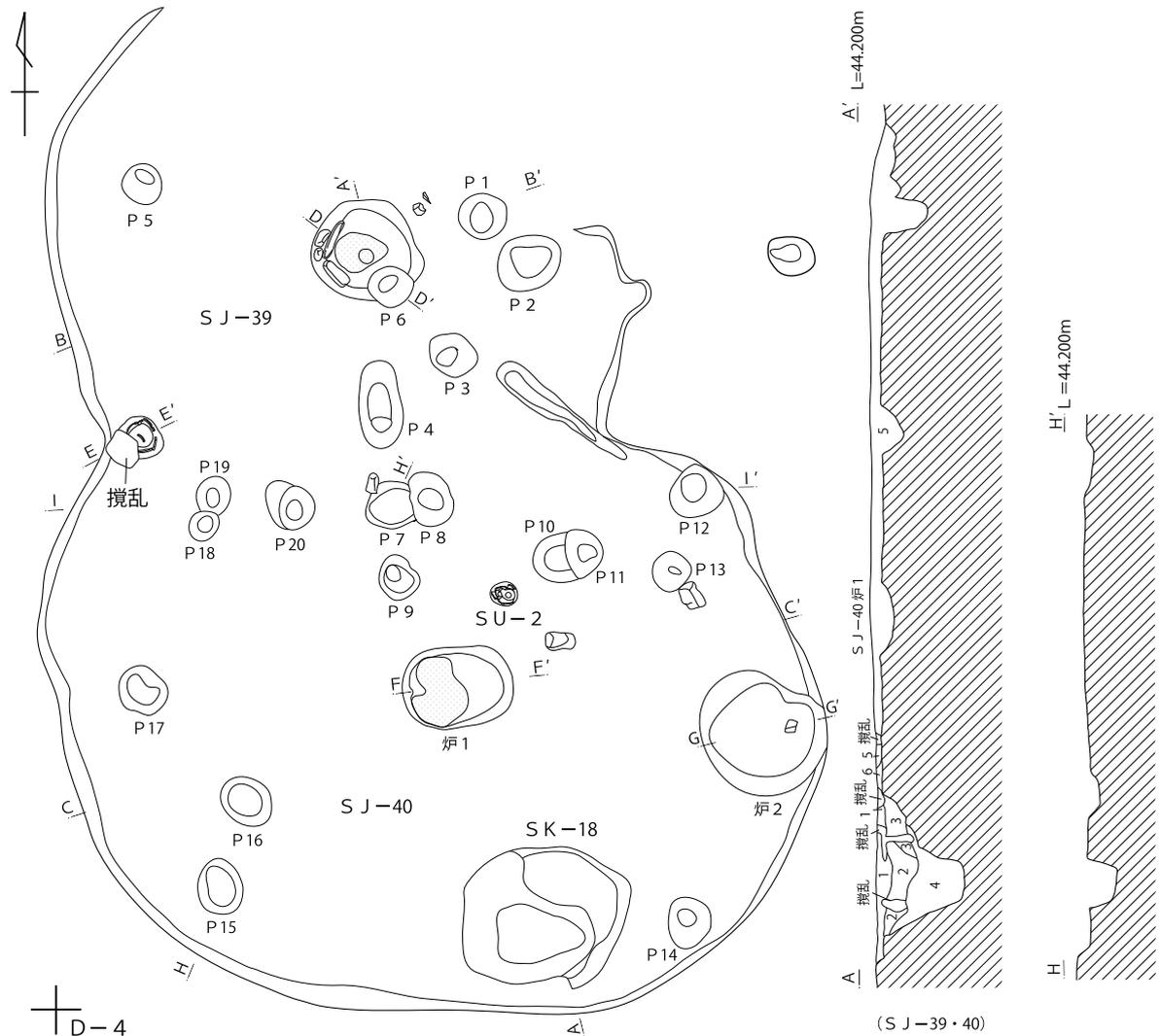
第38号住居跡（第4図）

本住居跡は調査区北端、D-3グリッドに位置し、第37・39号住居跡と重複する。

平面形は西から南にかけての壁は検出されていないため不明であるが、南東壁の状況から炉跡を中心とした径5.50m程度の不整円形を想定した。深さ0.10m前後を測る。主軸を炉跡の中軸線に設定すると、方位はN-45°-Eを指す。ピットは9箇所検出された。各々の深さは、P18=0.63m、P19=0.08m、



第4図 第37・38号住居跡



- (S J-39・40)
- 1 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を含有 硬く締まっている
 - 2 " 第1層より焼土粒を多く含有
 - 3 茶褐色土 第1・2層よりローム粒の含有が多く、色調が明るい
 - 4 " 黒褐色土が、まだらに混入
 - 5 " ロームブロックを含有
 - 6 暗黄褐色土 ロームブロックを多く含有
- (S J-39 炉)
- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有
 - 2 " 焼土粒、焼土ブロックを多く含有
 - 3 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロック多く含有
- (S J-39 屋内埋藏)
- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を少量含有
- (S J-40 炉1)
- 1 暗赤褐色土 焼土を多量に含有
 - 2 " 焼土を主体とする
 - 3 暗黄褐色土 焼けたロームブロック層
- (S J-40 炉2)
- 1 暗茶褐色土 焼土粒、焼土ブロックを多量に含有



第5図 第39・40号住居跡

P 20 = 0.35 m、P 21 = 0.52 m、P 22 = 0.13 m、P 23 = 0.27 m、P 24 = 0.24 m、P 25 = 0.26 m、P 26 = 0.16 mを測る。いくつかは支柱穴として十分な深度を有するが、整然とした配置にはならない。床面は概ね平坦であるが、上層からの攪乱が及ぶ。硬化面は認められなかった。壁溝は検出されていない。

炉跡は石囲土器埋設炉で、遺構中央部に位置すると思われる。平面形は長径 1.22 m、短径 0.96 mの不整楕円形を呈し、深さは土器埋設部で 0.28 mを測る。炉縁石は北側部分が抜きとられている。埋設土器内側の被熱痕跡は、それほど顕著ではない。

遺物は、覆土が薄いため、炉埋設土器の他は少量の土器片と石器が出土している。

炉跡埋設土器から、本住居跡の時期は加曾利 E Ⅲ式古段階と考えられる。

第 39 号住居跡 (第 5 図)

本住居跡は調査区北端、D-3 グリッドに位置し、第 38・40 号住居跡と重複する。

平面形は北及び南側の壁が検出されていないため不明確であるが、東・西壁の状況から炉跡を中心として、おおよそ径 4.80 m前後の不整円形を呈するものと思われる。深さ 0.10 m前後を測る。主軸方位は N-50°-E を指す。ピットは 6 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.16 m、P 2 = 0.10 m、P 3 = 0.15 m、P 4 = 0.14 m、P 5 = 0.11 m、P 6 = 0.35 mを測る。P 6 以外は、いずれも浅く支柱穴とは言い難い。床面は平坦であるが、攪乱が及ぶ。硬化面は認められなかった。壁溝は検出されていない。

炉跡は石囲土器で、遺構中央部に位置すると思われる。平面形は長径 0.95 m、短径 0.86 mの不整楕円形を呈し、深さは 0.15 mを測る。炉縁石は西側部分に一部を残す。炉底は被熱痕跡が顕著で、焼土化していた。

屋内埋嚢は、西壁、第 40 号住居跡との接合部分で検出された。深鉢の上半部を正位で埋設しているが、約 3/4 が攪乱により失われている。

覆土が薄いため、出土遺物は少量である。

屋内埋嚢から、本住居跡の時期は加曾利 E Ⅲ式古段階と思われる。

第 40 号住居跡 (第 5 図)

本住居跡は調査区北側、D-3 グリッドに位置する。北側で第 39 号住居跡と重複する。炉跡北側に、第 2 号単独埋嚢が埋設されていた。

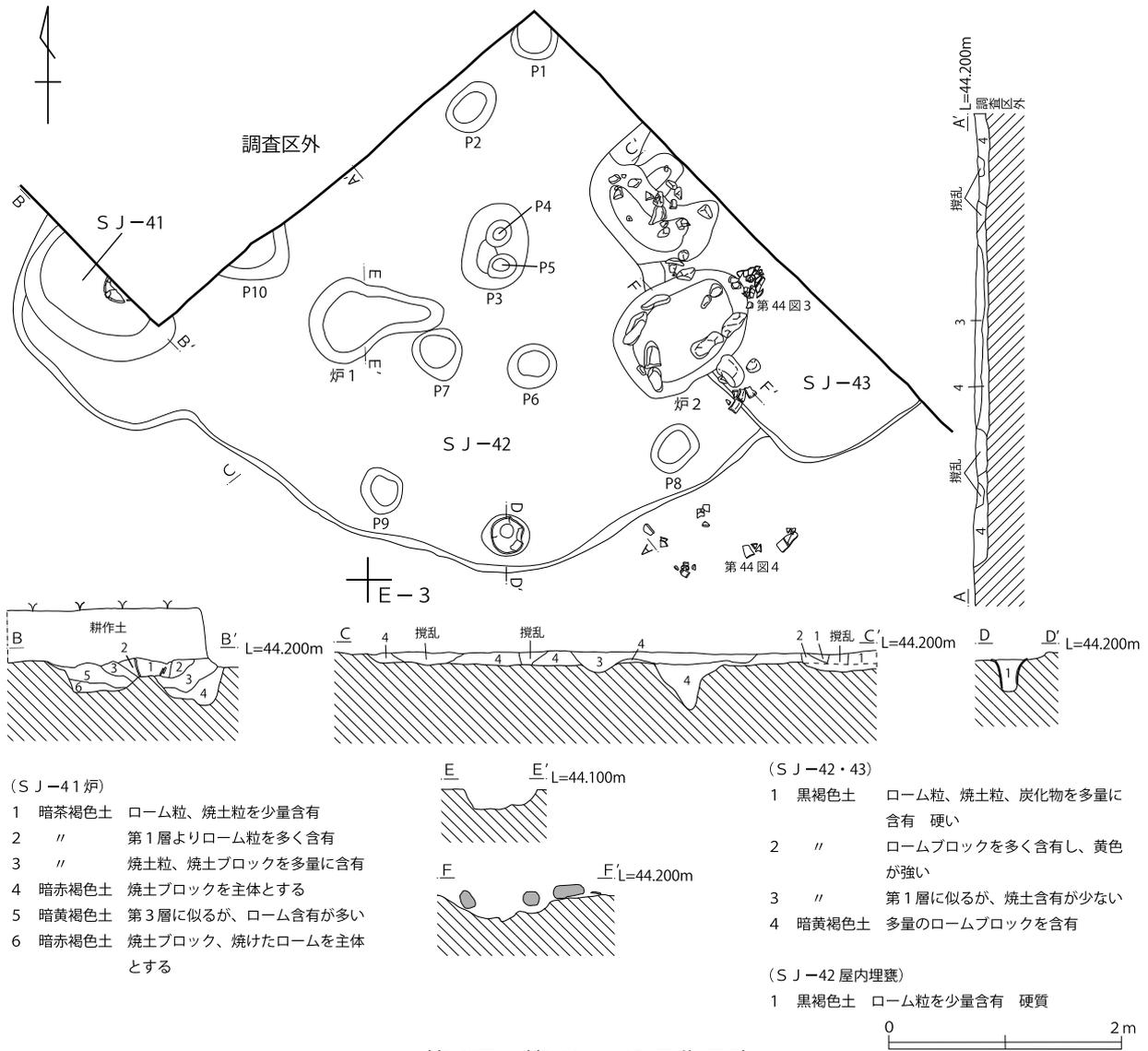
平面形は東西に長軸を有する不整楕円形を呈するものと思われる。長径 6.21 m、短径は 5.13 m、深さ 0.10 m前後を測る。主軸方位は N-70°-E を指す。ピットは 14 箇所検出された。各々の深さは、P 7 = 0.07 m、P 8 = 0.18 m、P 9 = 0.10 m、P 10 = 0.10 m、P 11 = 0.21 m、P 12 = 0.21 m、P 13 = 0.16 m、P 14 = 0.35 m、P 15 = 0.24 m、P 16 = 0.07 m、P 17 = 0.14 m、P 18 = 0.26 m、P 19 = 0.33 m、P 20 = 0.36 mを測る。深さ 0.30 m以上のものが 3 箇所あるが、配置に規則性は認められない。床面は概ね平坦であるが、周辺の遺構と同様、上層からの攪乱が及び、硬化面も確認できなかった。壁溝は北壁の一部で検出されている。

炉跡は地床炉で、遺構中央部に位置する。平面形は長径 0.92 m、短径 0.65 mの楕円形を呈し、深さは 0.08 mを測る。炉底は、西側で被熱痕跡が顕著である。

覆土が薄く、出土遺物は極少量で、混入も認められる。そのため、本住居跡の時期は不明とする。

第 41 号住居跡 (第 6 図)

本住居跡は調査区北端、D-2 グリッドに位置する。南側で第 42 号住居跡と重複するが、炉跡のみの



第 6 図 第 41 ~ 43 号住居跡

検出のため、重複状況は不明である。

炉跡は調査区外にかかって検出された。土器埋設炉である。平面形は長径 1.36 m の楕円形を呈すると思われる。土器はほぼ中央に位置すると思われる。主軸方位は N-46°-W を指す。深さは、土器埋設部分で 0.20 m 前後を測るが、被熱は 0.40 m に及ぶが、埋設土器内面は、それほど焼けてなかった。

出土遺物は炉跡埋設土器のみである。

炉跡埋設土器から、本住居跡の時期は加曽利 E Ⅲ 式古段階と思われる。

第 42 号住居跡 (第 6 図)

本住居跡は調査区北側、D・E-2 グリッドに位置する。西側で第 41 号住居跡、東側で第 43 号住居跡と重複する。

平面形は大部分が調査区外にかかるため不明であるが、検出部分から想定すると、不整形円形を呈するものと思われる。深さは 0.10 m 前後を測る。ただし、炉跡 2 と屋内埋糞の位置、遺物の出土状況から、南側に広がる可能性が高い。炉跡 2 と屋内埋糞を結ぶ線を主軸とすれば、方位は N-42°-E を指す。ピットは 10 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.12 m、P 2 = 0.10 m、P 3 = 0.32 m、P 4 = 0.47 m、

P 5 = 0.40 m、P 6 = 0.13 m、P 7 = 0.15 m、P 8 = 0.10 m、P 9 = 0.13 m、P 10 = 0.12 mを測る。柱穴として十分な深度を有するものもあるが、配置には規則性が見られない。床面は概ね平坦であるが、周辺の遺構と同様、上層から攪乱が及び、硬化面も確認できなかった。壁溝は検出されていない。

炉跡は2箇所検出された。炉跡1は地床炉で、遺構中央部南西寄りに位置する。平面形は長径1.14 m、短径0.65 mの不整形を呈し、深さは0.16 mを測る。炉底の被熱痕跡は弱い。炉跡2は南壁寄りに検出された。石囲炉である。長径1.25 m、短径0.96 mの楕円形の掘り込みに縁石を巡らすが、いずれの石も若干動いているようである。深さは0.14 mを測る。炉底の被熱痕跡は、炉跡1と同様、弱い。

屋内埋甕は南壁際、ほぼ中央で検出された。深さ0.30 mで、土器とほぼ同じ大きさの掘り込みに長胴の深鉢を正位に埋設していた。

出土遺物は覆土が薄い割には比較的多い。

本住居跡の時期は、屋内埋甕から加曾利EⅡ式古段階と思われる。

第43号住居跡(第6図)

本住居跡は、調査区北端、E-2グリッドに位置する。西側で第42号住居跡と重複する。

第42号住居跡の床面を精査したところ、調査区東壁から路跡2の下に方形の落ち込みが検出された。平面形は方形を呈すると思われるが、大部分が調査区外にあるため、詳細は不明である。規模は東西辺3.44 m、深さ0.16 mを測る。主軸方位はN-50°-Eを指す。北西壁際に壁溝の一部が見られる。

出土遺物は上層に顕著であったが、ほとんどは第42号住居跡に帰属すると思われる。下層から出土したのは、土器の細片のみであった。時期決定資料が乏しいため、本住居跡の時期は不明である。

第44号住居跡(第7図)

本住居跡は調査区北側、D・E-3グリッドに位置する。東側で第45号住居跡と重複する。

平面形は第45号住居跡と重複する部分が多いため、不明確であるが、径4.20 m前後の不整形円形を呈するものと思われる。深さは0.15 m前後を測る。主軸方位は、N-3°-Eと推定される。ピットは5箇所認められた。各々の深さは、P 1 = 0.15 m、P 2 = 0.14 m、P 3 = 0.37 m、P 4 = 0.15 m、P 5 = 0.20 mを測る。主柱穴たる深度を有するのはP 3のみで、対応するピットは検出されていない。床面は概ね平坦であるが、顕著な硬化面は見られない。壁溝は検出されなかった。

炉跡は土器埋設炉で、遺構中央やや北寄りに位置すると思われる。径0.50 m、深さ0.19 mの掘り込みに土器が埋設されていた。約1/2を第45号住居跡の壁溝に破壊されている。被熱痕跡は顕著ではない。

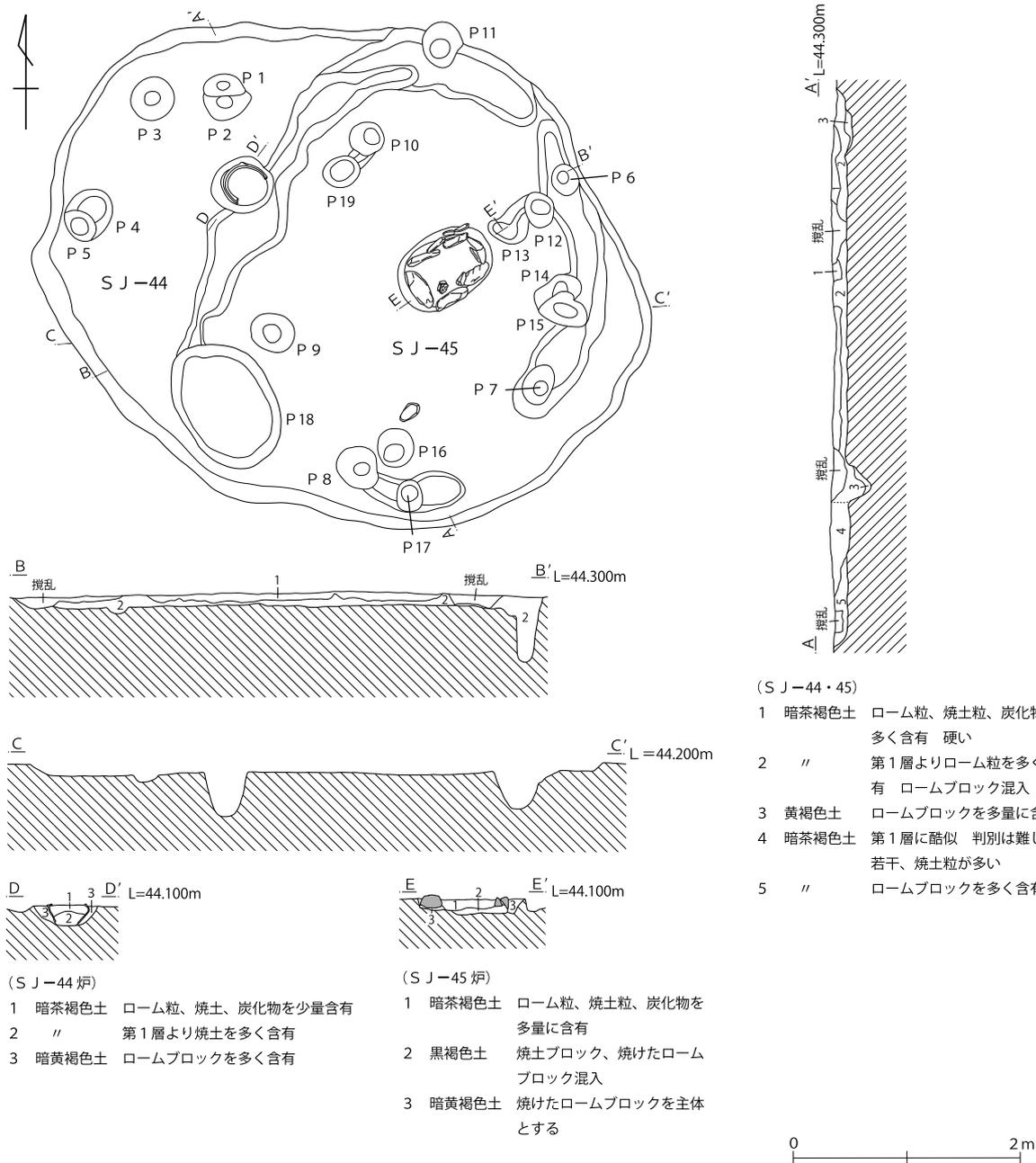
出土遺物は少なく、覆土内にまとまりなく散在していた。

本住居跡の時期は、炉跡埋設土器から加曾利EⅠ式新段階と考えられる。

第45号住居跡(第7図)

本住居跡は、調査区北側のD-3グリッドに位置する。西側に第44号住居跡と重複する。重複部分のセクションは攪乱のため、両住居跡の新旧関係は不明である。

平面形は、不整形楕円形を呈し、規模は長径4.41 m、短径3.72 m、深さは0.16 m前後を測る。炉跡の中軸線とP 6を結んだ線を主軸とすると、方位はN-56°-Eを示す。ピットは14箇所検出された。各々の深さは、P 6 = 0.41 m、P 7 = 0.45 m、P 8 = 0.60 m、P 9 = 0.40 m、P 10 = 0.50 m、P 11 = 0.37 m、P 12 = 0.22 m、P 13 = 0.12 m、P 14 = 0.18 m、P 15 = 0.32 m、P 16 = 0.16 m、P 17 = 0.49 m、P 18 = 0.10 m、P 19 = 0.15 mを測る。深さと位置関係から、P 6~P 10の5箇所が主柱穴と思われる。



第7図 第44・45号住居跡

床面は概ね平坦、壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は幅広く、南側の一部以外は全周する。

炉跡は石囲炉で、遺構中央やや北東寄りに位置する。掘り込みの平面形は長径 0.89 m、短径 0.62 m の楕円形で、縁石を巡らしている。深さは 0.15 m を測る。炉底は、それほど焼けていなかった。

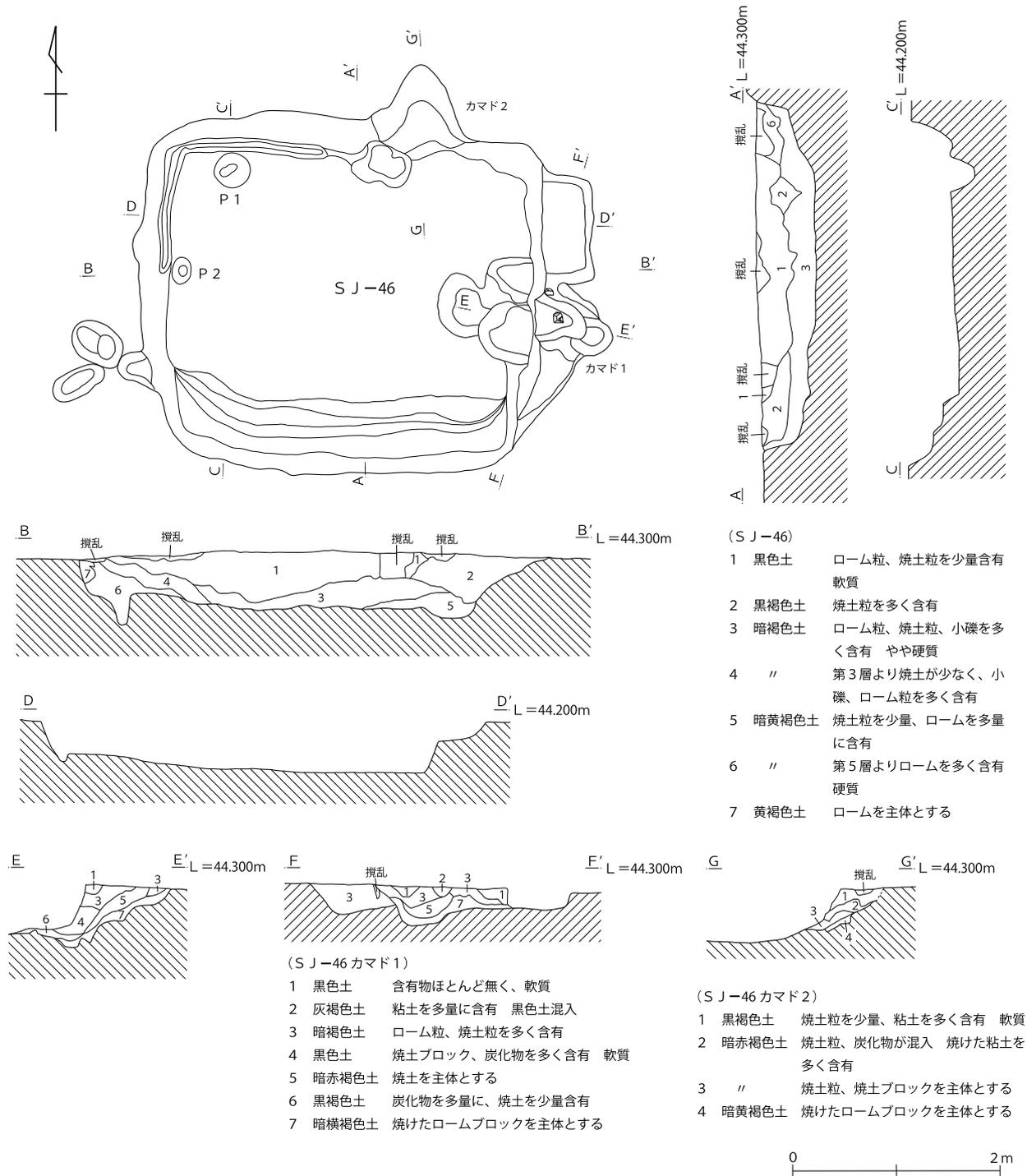
出土遺物は非常に少なく、覆土内にまとまりなく散在していた。

本住居跡の時期は、覆土出土土器から加曾利 E I 式新段階と思われる。

第46号住居跡 (第8図)

本住居跡は調査区北側の E-3 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。

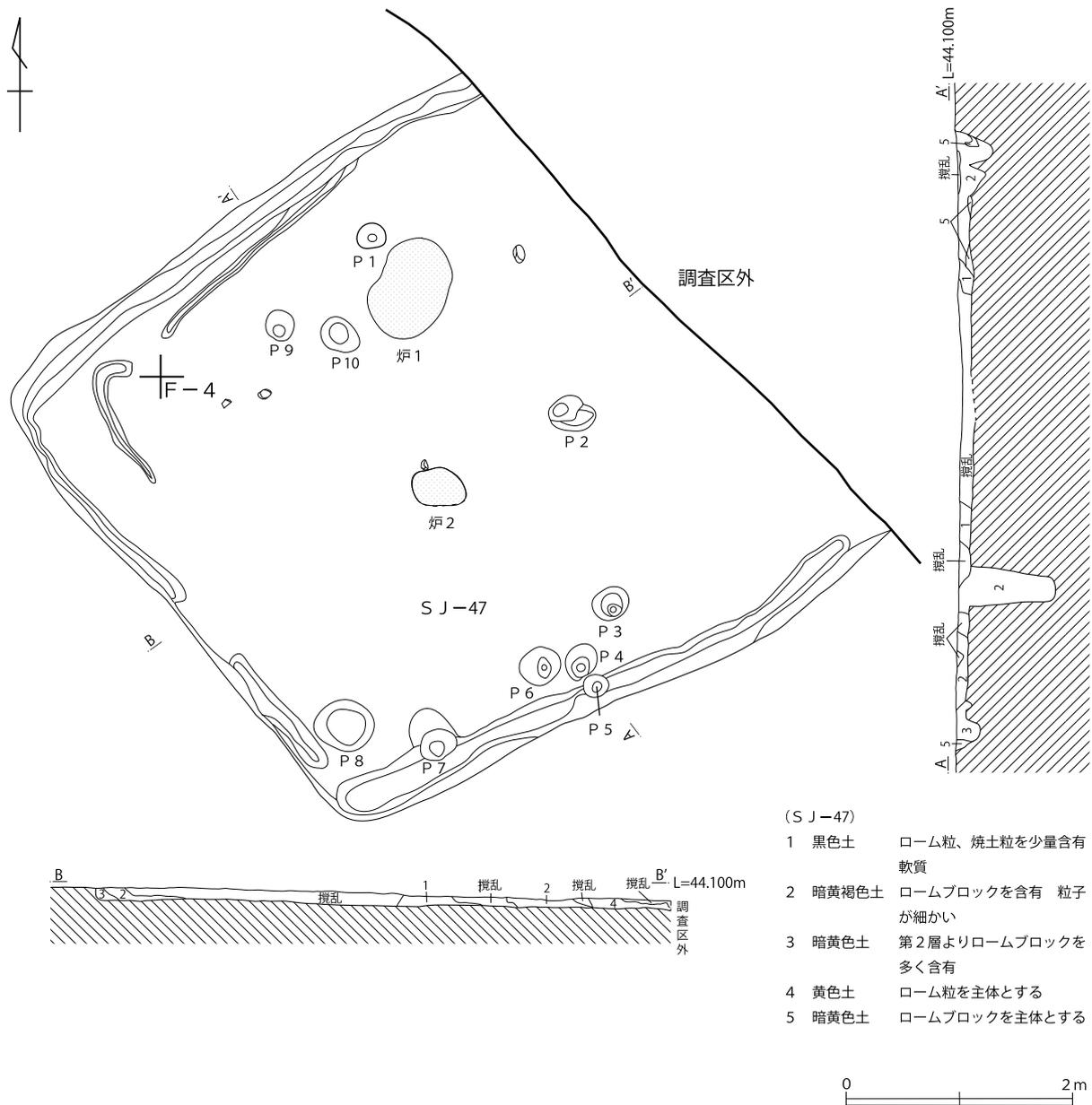
平面形は隅丸長方形で、規模は長辺 4.81 m、短辺 3.65 m、深さ 0.55 m を測る。カマドは 2 箇所検出された。カマド 1 の主軸方位は N-96°-E、カマド 2 は N-2°-W を指す。ピットは 2 箇所検出され



第8図 第46号住居跡

た。各々の深さは、P 1 = 0.25 m、P 2 = 0.29 mを測る。P 2は、位置的に入口施設の可能性がある。床面は南側壁際に段差を有するが、中央部は概ね平坦で、硬化面も確認された。壁溝は北西コーナー付近で検出され、壁の約1/4を巡る。壁は、やや外傾するように立ち上がる。カマド1の煙道北側には、棚状施設が確認されている。

カマド1は東壁ほぼ中央で検出された。遺存状態は不良で、袖部の粘土もほとんど流れ出ていた。火床部は良く焼けていた。カマド2は北壁中央やや東寄りで検出された。煙道と火床部の一部を残し、カマド1に作り替えた時に破壊されたものと思われる。



第9図 第47号住居跡

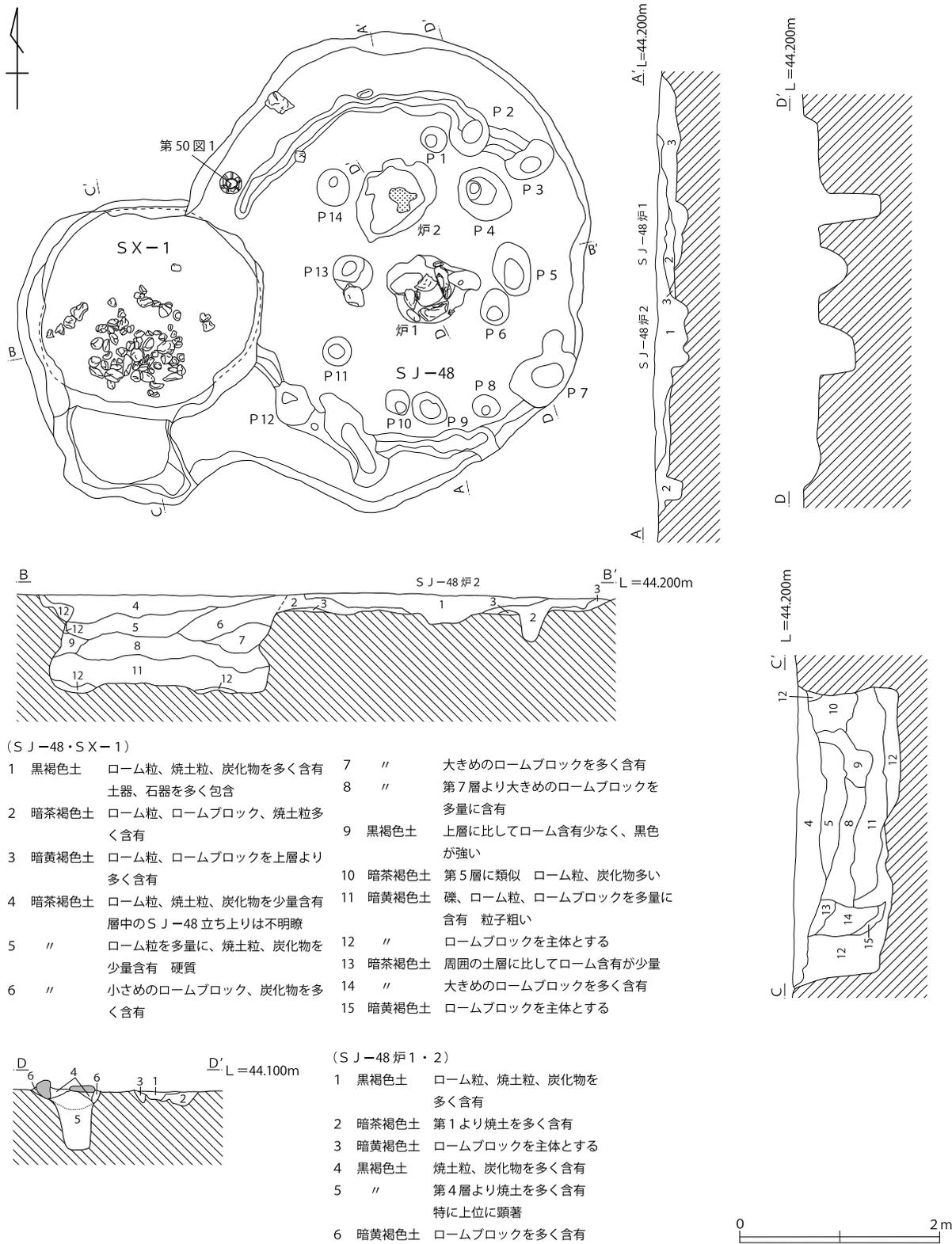
出土遺物は比較的豊富で、須恵器環、鉄鉢、瓦片等がある。

本住居跡の時期は、覆土から出土した須恵器から9世紀第2四半期と考えられる。

第47号住居跡 (第9図)

本住居跡は調査区北東側のE・F-3・4グリッドに位置し、東側の一部が調査区外にかかる。他の遺構との重複関係はない。

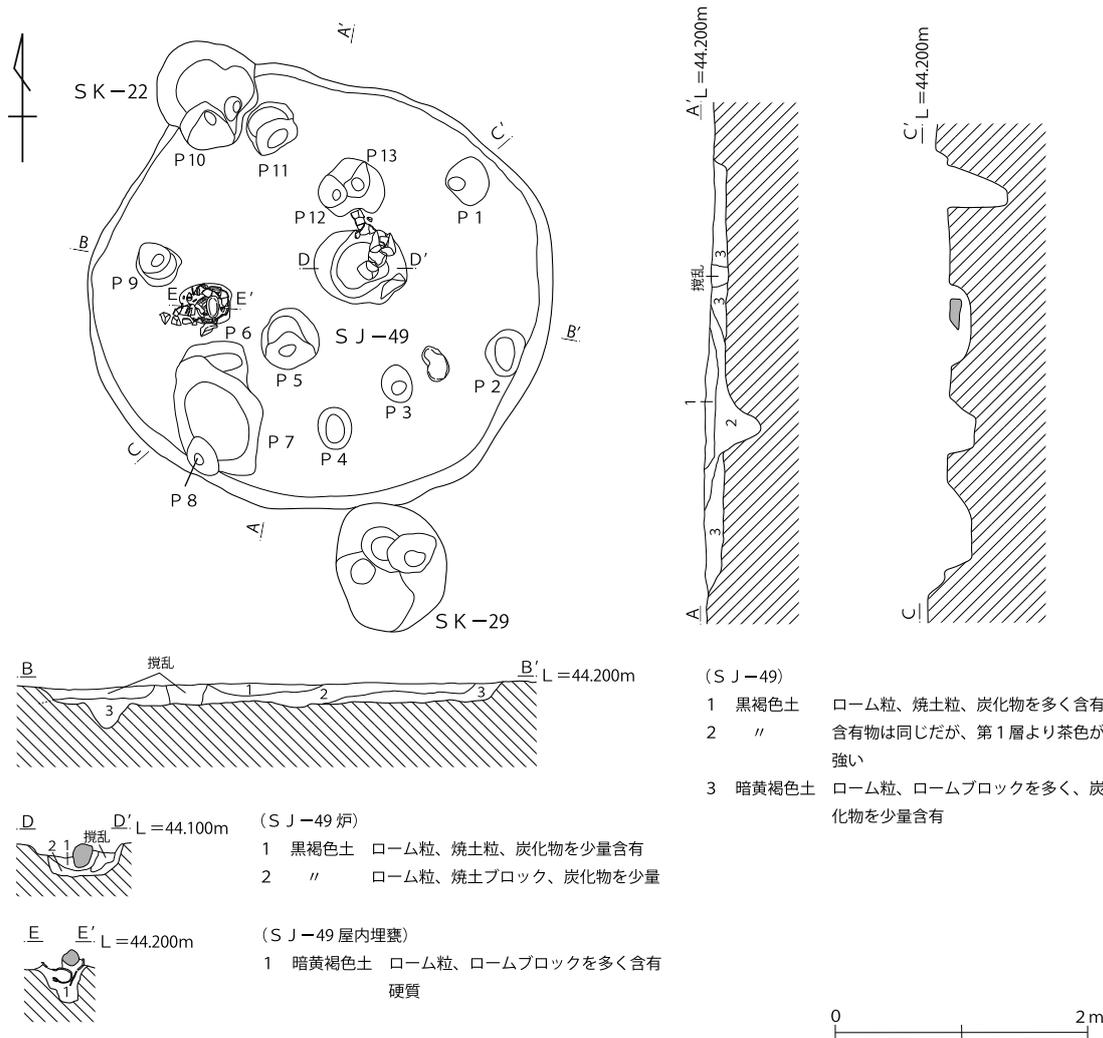
平面形は方形、あるいは長方形を呈する。南北で5.82m、東西は不明である。深さは0.12mを測る。主軸方位は、炉跡2の中軸と考えるとN-38°-Wを示す。ピットは10箇所検出された。各々の深さは、P1=0.19m、P2=0.22m、P3=0.19m、P4=0.19m、P5=0.22m、P6=0.22m、P7=0.61m、P8=0.15m、P9=0.41m、P10=0.75mを測る。P7・9・10は柱穴として十分な深度を有するが、規則的な配置ではない。床面は上層からの攪乱が著しい。残存部分は概ね平坦で、部



第10図 第48号住居跡・第1号性格不明遺構

分的に硬化面が認められる。壁溝は、ほぼ全周し、遺構北側では2条確認されている。

炉跡は2箇所確認された。いずれも地床炉である。炉跡1は遺構北側で検出された。平面形は不整楕円形で、長径0.93m、短径0.65mの範囲で床面が焼けている。炉跡2は遺構中央やや南寄りで検出された。平面形は不整楕円形で、長径0.51m、短径0.33mの範囲で床面が焼けていた。



第 11 図 第 49 号住居跡

出土遺物は覆土が薄く攪乱も広範囲に及ぶため僅少で、覆土内に散在する。

遺構の状況と覆土出土土器から、本住居跡の時期は黒浜式段階と思われる。

第 48 号住居跡 (第 10 図)

本住居跡は調査区北端の C-3 グリッドに位置する。西側に第 1 号性格不明遺構が重複する。

平面形は不整楕円形を呈し、長径 4.52 m、短径推定 3.50 m、深さ 0.19 m 前後を測る。主軸は炉跡 1・2 の中軸を結ぶ線で、方位は N-20°-W を指す。ピットは 14 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.26m、P 2 = 0.61 m、P 3 = 0.48 m、P 4 = 0.28 m、P 5 = 0.36 m、P 6 = 0.15 m、P 7 = 0.06 m、P 8 = 0.15 m、P 9 = 0.23 m、P 10 = 0.28 m、P 11 = 0.08 m、P 12 = 0.23 m、P 13 = 0.43 m、P 14 = 0.22 m を測る。P 2・3・5・13 は柱穴としての深度を有するが、規則的な配置は認められない。床面は炉跡周辺では堅緻であるが、周辺に行くに従って軟弱となる。検出された壁は、緩やかに立ち上がる。壁溝は壁より内側で検出されている。遺構東側と西側の一部以外は、径約 3.90 m でほぼ全周する。第 1 号性格不明遺構との重複部分については、明確な立ち上がりは確認できなかった。

炉跡は 2 箇所検出された。炉跡 1 は遺構ほぼ中央に位置する石囲炉で、平面形は不整楕円形、規模は長径 0.76 m、短径 0.67 m、中央はピット状を呈し、深さ 0.65 m を測る。縁石は掘り込みのやや内側に巡る。

炉底は検出できなかったが、第5層上層に焼土が顕著であった。炉跡2は炉跡1の北側に位置する。地床炉、あるいは縁石を抜き取られた石囲炉と思われる。平面形は不整形で、長径0.95 m、短径0.68 m、深さ0.14 mを測る。炉底中央に被熱が顕著であった。いずれの炉跡が拡張後の壁に対応するかは不明確であるが、炉縁石を残すことから、炉跡1と考える。

出土遺物は比較的少なく、まとまりのない状態で散在していた。北西側壁溝と壁の間には逆位に置かれた深鉢が出土している。

床面出土の伏甕から、本住居跡の時期は加曾利EⅢ式新段階と思われる。

第49号住居跡(第11図)

本住居跡は調査区北西側のC-4グリッドに位置する。北壁に第22号土壙、南側に第29号土壙が重複する。

平面形は、やや不整な円形を呈し、規模は長径3.81 m、短径3.77 m、深さ0.15 m前後を測る。炉跡と屋内埋甕を結んだ線を主軸とすると、方位はN-72°-Eを示す。ピットは13箇所検出された。深さは、各々P1=0.49 m、P2=0.09 m、P3=0.28 m、P4=0.16 m、P5=0.29 m、P6=0.13 m、P7=0.21 m、P8=0.36 m、P9=0.21 m、P10=0.37 m、P11=0.22 m、P12=0.35 m、P13=0.37 mを測る。支柱穴たる深度を有するものも見られるが、規則的な配置は認められない。床面は平坦であるが、軟弱であった。壁は外傾気味に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

炉跡は遺構中央やや東寄りに位置する。石囲炉と思われるが、炉縁石ほとんどが原位置を保っていない。被熱で割れているものが多い。掘り込みの平面形は、不整楕円形を呈し、長径0.73 m、短径0.68 m、深さ0.21 m前後を測る。炉底は、よく焼けている。

屋内埋甕は西壁より、やや内側で検出された。深鉢の上半部が埋設されており、内側にジョッキ形土器が落とし込まれていた。掘り込みの深さは0.29 mを測る。

遺物は埋甕の他、炉跡直上から大形の深鉢が出土している。

本住居跡の時期は、屋内埋甕から加曾利EⅢ式新段階と思われる。

第50号住居跡(第12図)

本住居跡は調査区北側、D-4グリッドで検出された。北側には第40号住居跡が位置する。

炉跡のみ検出された遺構であるため、平面形、規模等は不明であるが、時期的に比較的小規模な住居跡と思われる。炉跡は土器埋設炉で、1/2程度攪乱で破壊されている。掘り込みは長径0.76 m前後の隅丸長方形を呈するものと思われ、土器は北寄りに埋設されていた。深さは0.20 mを測る。

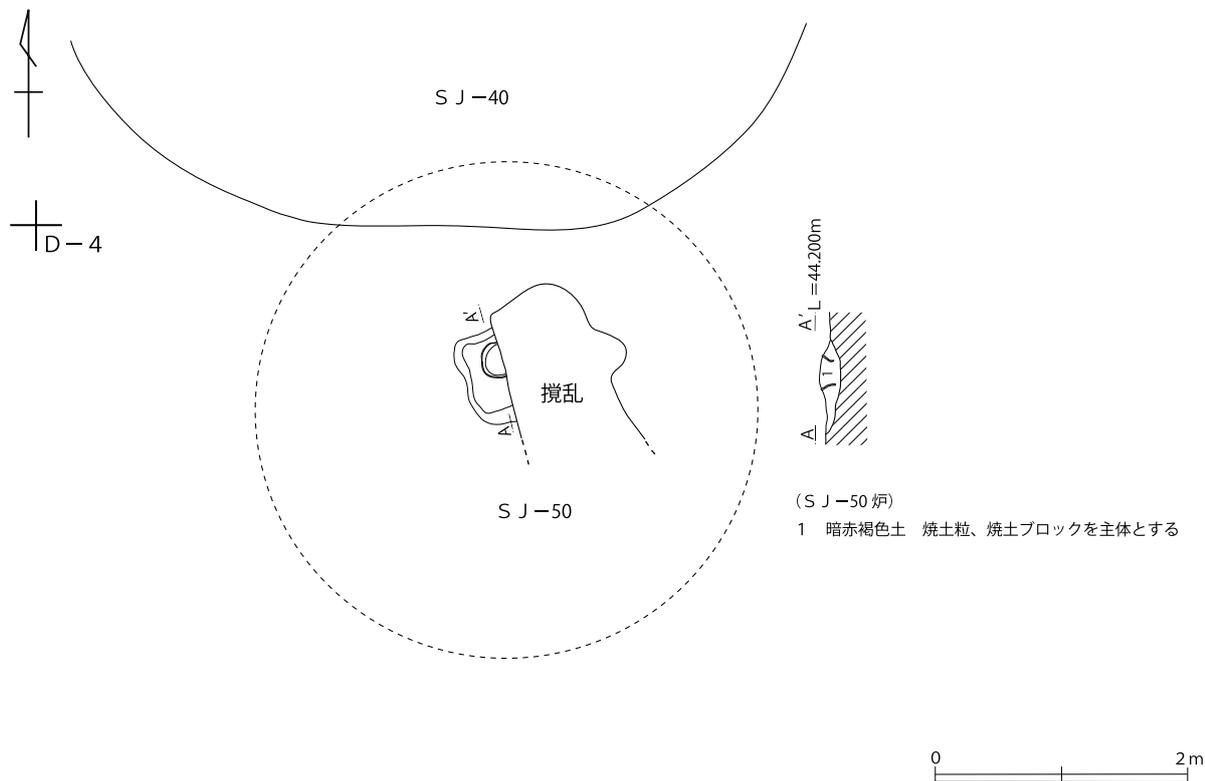
炉埋設土器以外の出土遺物は無い。

本住居跡の時期は、炉跡埋設土器から加曾利EⅢ式古段階と思われる。

第51号住居跡(第13図)

本住居跡は調査区中央やや北寄り、D-4・5グリッドで検出された。南東側には第52号住居跡が、北西壁には第24号土壙が重複する。遺構北側から南側にかけて、縦断するように攪乱に破壊されている。

平面形は円形に近い。長径5.62 m、短径推定で5.50 m前後、深さ0.23 mを測る。ピットは15箇所確認された。各々の深さは、P1=0.44 m、P2=0.56 m、P3=0.42 m、P4=0.46 m、P5=0.23 m、P6=0.25 m、P7=0.16 m、P8=0.16 m、P9=0.09 m、P10=0.17 m、P11=0.11 m、P12=0.06 m、P13=0.14 m、P14=0.10 m、P15=0.23 mを測る。深さと位置関係から、



第 12 図 第 50 号住居跡

P 1～4 が支柱穴に該当し、1 箇所は攪乱によって失われている。整った五角形配置を呈すると思われる。床面は平坦で、遺構中央部は堅緻であった。壁は、やや外傾して立ち上がり、壁溝は、ほぼ全周する。

炉跡は遺構のほぼ中央に位置する。焼石炉で、覆土最下層に、焼けて破碎した礫と土器片、炭化物が多量に含まれる。平面形は長楕円形で、東側の一部が攪乱を受けている。長径推定 1.40 m、短径 0.94 m、深さは 0.36 m を測る。

遺物は少なく、まとまった状態で出土したものは無かった。

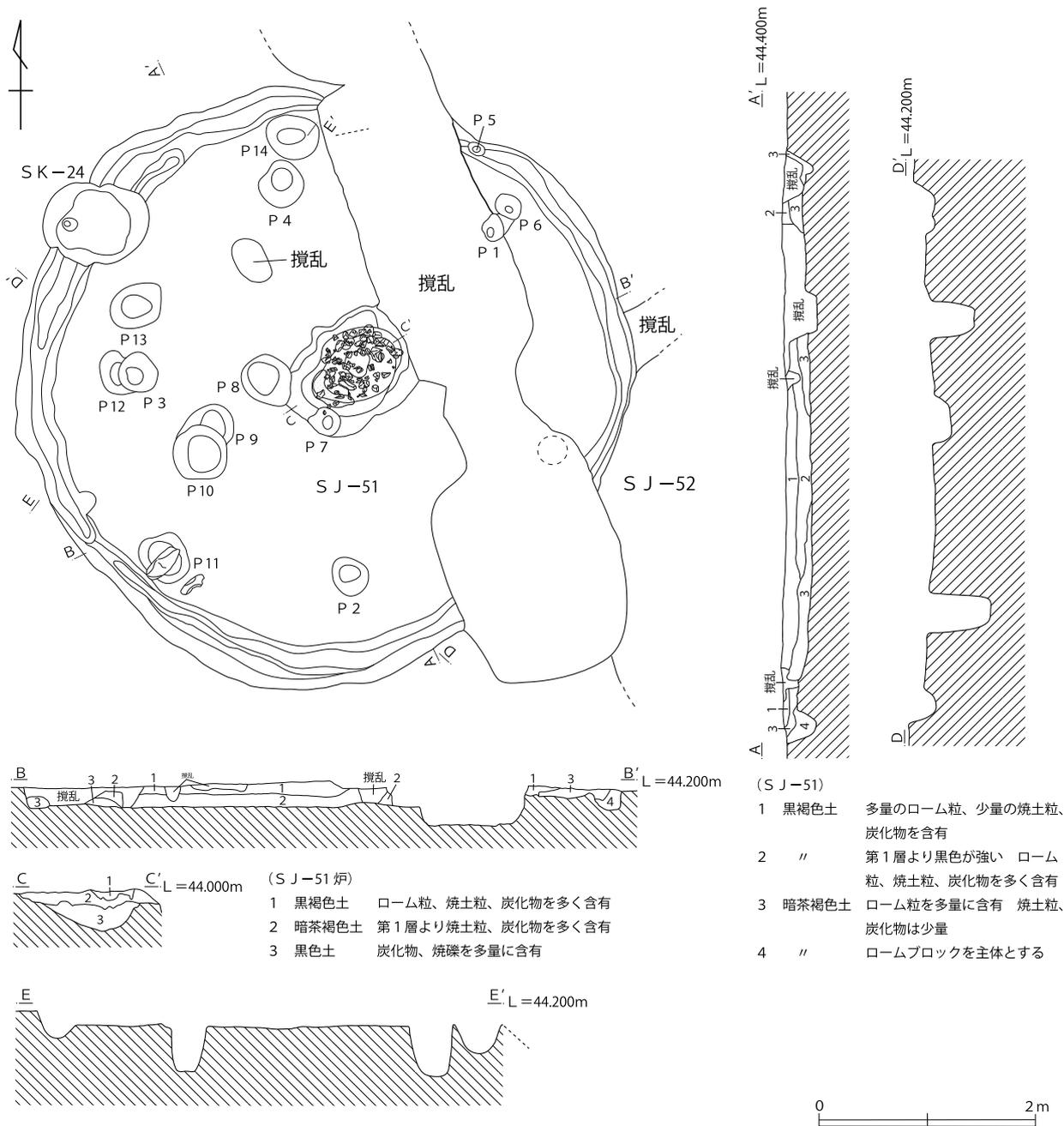
時期決定資料に乏しいが、復元された覆土出土土器から加曾利 E II 式新段階に帰属すると思われる。

第 52 号住居跡 (第 14 図)

本住居跡は調査区中央やや北寄り、D・E-4・5 に位置する。西側で第 51 号住居跡と重複する。

平面形は、やや横長の隅丸方形で、長径推定 5.50 m、短径 5.53 m、深さ 0.25 m 前後を測る。主軸方位は、P 1 と炉跡 1 の中軸を結んだ線すると、N-9°-W を示す。ピットは 30 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.68 m、P 2 = 0.63 m、P 3 = 0.73 m、P 4 = 0.73 m、P 5 = 0.72 m、P 6 = 0.73 m、P 7 = 0.74 m、P 8 = 0.60 m、P 9 = 0.56 m、P 10 = 0.55 m、P 11 = 0.55 m、P 12 = 0.48 m、P 13 = 0.11 m、P 14 = 0.06 m、P 15 = 0.50 m、P 16 = 0.06 m、P 17 = 0.22 m、P 18 = 0.21 m、P 19 = 0.51 m、P 20 = 0.09 m、P 21 = 0.14 m、P 22 = 0.29 m、P 23 = 0.41 m、P 24 = 0.45 m、P 25 = 0.25 m、P 26 = 0.22 m、P 27 = 0.27 m、P 28 = 0.32 m、P 29 = 0.16 m、P 30 = 0.38 m を測る。新炉である炉跡 1 に伴う支柱穴は、P 1～P 5 とと思われる。炉跡 2 の支柱穴配置は不明である。床面は概ね平坦で、全体的に堅緻である。壁は外傾して立ち上がる。壁溝は 2 条検出され、全周する。外側の壁溝は、炉跡 1 に伴うものと思われる。

炉跡 1 は遺構中央やや北寄りに位置する。石囲炉である。平面形は楕円形で、長径 0.94 m、短径 0.67



第13図 第51号住居跡

m、深さ 0.20 mを測る。炉縁石は、原位置を保っている。炉底は、よく焼けていた。炉跡2は炉跡1の南西側に位置する。石囲炉だったと思われるが、炉縁石は抜き取られている。不整楕円形の掘り込み縁辺部に、被熱痕跡が顕著である。規模は長径 1.16 m、短径 0.75 m、深さ 0.17 mを測る。

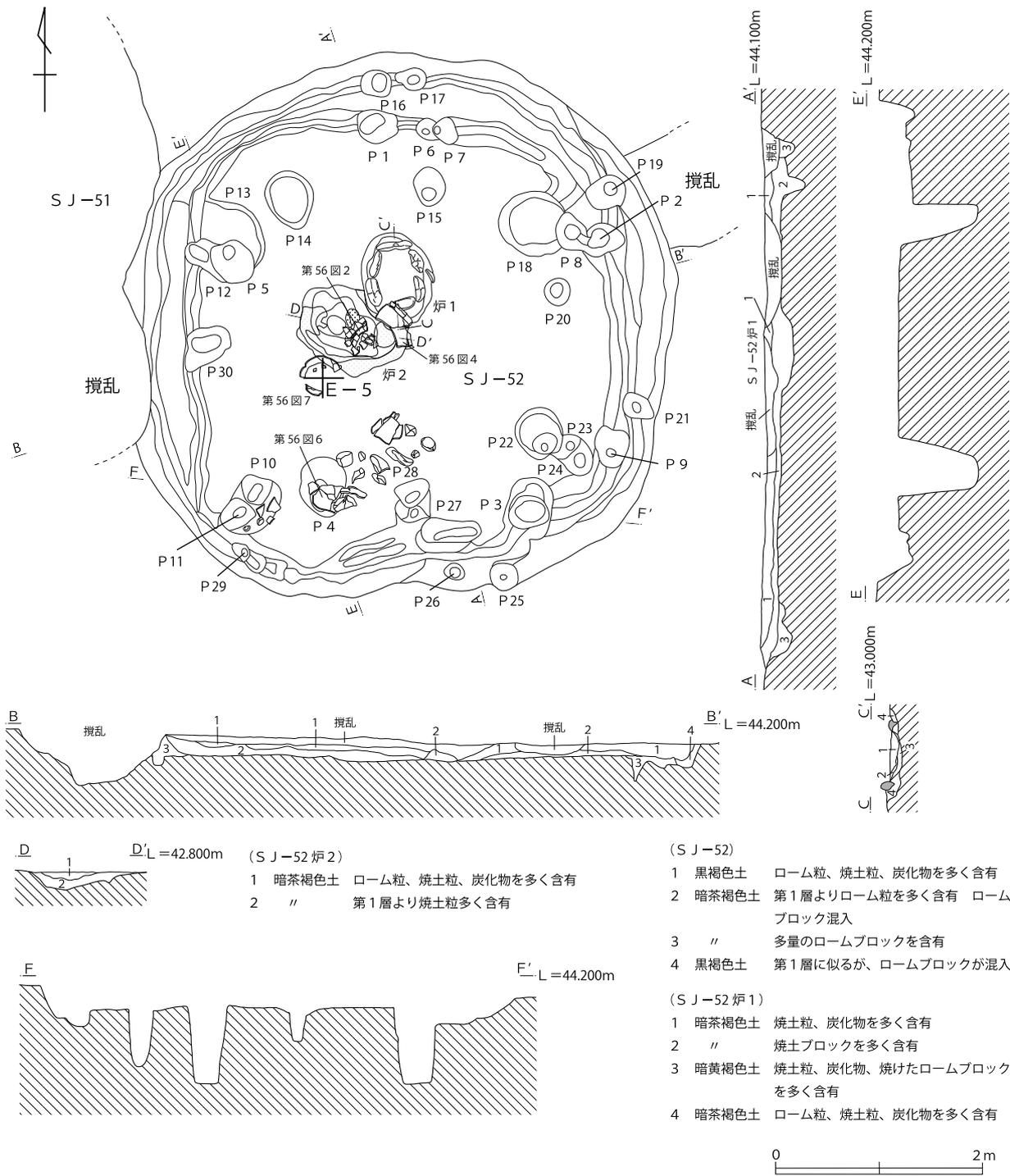
出土遺物は比較的多く、覆土第2層直上、遺構中央から南側にかけてまとまりがあった。

本住居跡の出土土器は、複数の時期のものが混在するため、遺構の時期は確定できなかった。

第53号住居跡 (第15図)

本住居跡は調査区中央やや東寄り、E-4・5グリッドに位置する。第52号住居跡が西側に隣接している。北側は大きく攪乱を受けている。

検出されたのはカマド火床部と煙道及び床面の一部で、床面も大部分が耕作による攪乱を受けている。平面形は方形を呈すると思われる。東西辺は 3.00 m、火床部の深さは 0.19 mを測る。ピットは 1 箇所



第 14 図 第 52 号住居跡

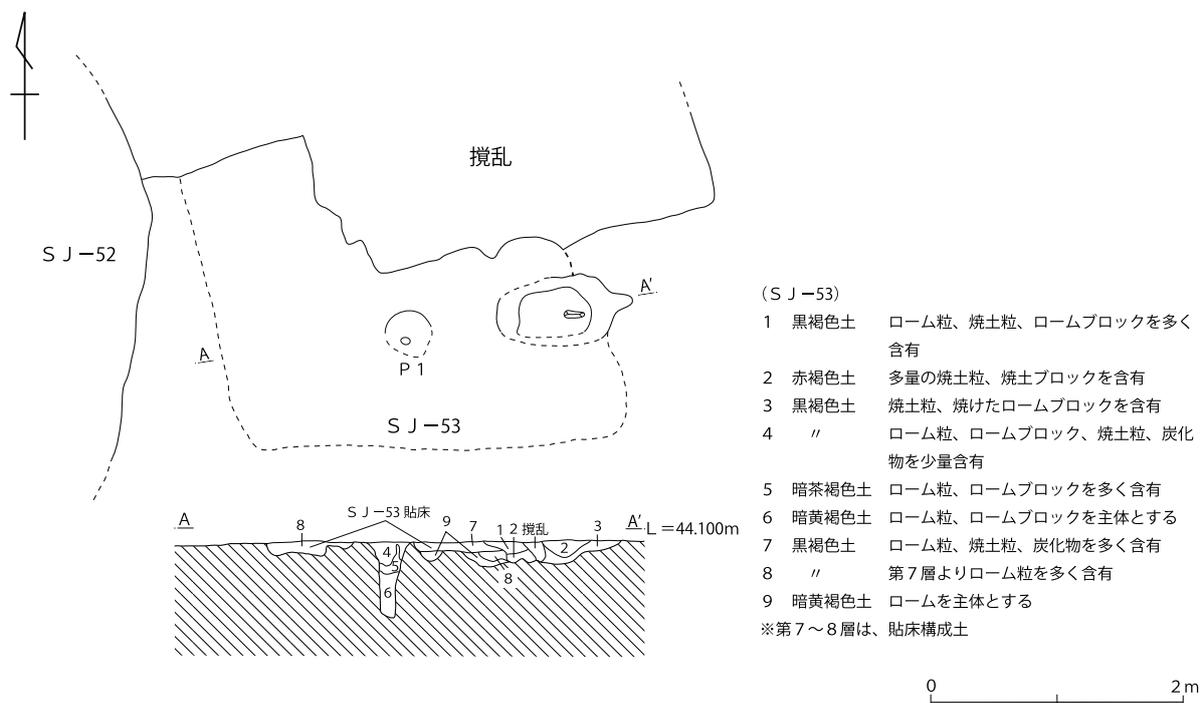
検出され、深さは 0.64 m を測る。貼床の厚さは 0.15 m 前後である。

遺物はカマド火床部から出土した須恵器の細片のみで、詳細時期は不明である。

第 54 号住居跡 (第 16 ~ 18 図)

本住居跡は調査区中央やや西寄り、D-5 グリッドにて検出された。西側で第 55 号住居跡と重複する。

平面形は不整楕円形を呈するものと思われる。長径 4.02 m、短径推定 3.60 m、深さ 0.15 m を測る。ピットは 6 箇所検出された。各々の深さは、P 35 = 0.52 m、P 36 = 0.20 m、P 37 = 0.55 m、P 38 = 0.11 m、P 39 = 0.29 m、P 40 = 0.16 m を測る。これらの内、P 35・37 が支柱穴と思われる。床面



第15図 第53号住居跡

は耕作による攪乱を受けており、明確な硬化面は確認できなかった。壁は、緩やかに立ち上がる。検出部分では、壁溝は認められない。

炉跡は遺構中央やや北寄りに位置するものと思われる。1/2以上を第55号住居跡に破壊されている。残存部分の平面形は不整形を呈する。長径0.82m、深さ0.39mを測る。炉底は被熱痕跡が顕著であった。

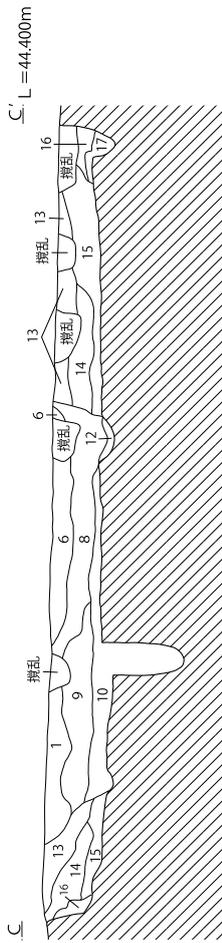
出土遺物は比較的少なく、覆土中にまとりなく散在する。

覆土出土土器は、複数の時期が混在するため、本住居跡の時期は不明である。

第55号住居跡 (第16～18図)

本住居跡は調査区中央やや西寄り、C・D-5グリッドに位置し、東側で第54号住居跡、西側で第56号住居跡と重複する。

平面形は大略円形を呈する。長径7.84m、短径7.12m、深さ0.51m前後を測り、今回報告の住居跡の中では最大である。主軸を炉埋設土器、屋内埋甕2を結んだ線とすると、方位はN-48°-Eを指す。ピットは34箇所検出された。各々の深さは、P1=0.76m、P2=0.84m、P3=0.92m、P4=0.72m、P5=0.64m、P6=0.68m、P7=0.66m、P8=0.68m、P9=0.71m、P10=0.63m、P11=0.74m、P12=0.06m、P13=0.40m、P14=0.18m、P15=0.45m、P16=0.30m、P17=0.12m、P18=0.46m、P19=0.11m、P20=0.31m、P21=0.10m、P22=0.05m、P23=0.15m、P24=0.25m、P25=0.24m、P26=0.09m、P27=0.22m、P28=0.17m、P29=0.20m、P30=0.50m、P31=0.29m、P32=0.37m、P33=0.46m、P34=0.12mを測る。壁溝が2条検出されていることから、1回の建て替えが考えられる。旧住居は内側の壁溝と支柱穴はP1～7で、新住居はP8～11で、P3・4・7が兼用され、外周0.50～0.60m拡張後も7本柱が維持されている。ただし、P4・5・10は他の支柱穴に比して小規模である。旧住居の柱穴には、貼床が施されたものもあった。また、P9等、拡張後の柱穴の方が浅くなっている箇所も確認されている。床面は概ね平坦であるが、中心に向かって若干傾斜している。壁は外傾して立ち上がる。壁溝は2条とも



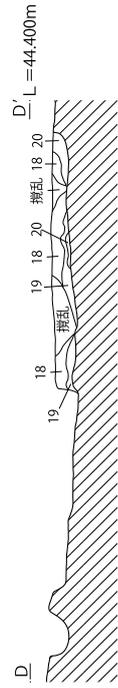
(S J-54 ~ 56)

(S J-55)

- | | | | |
|----|-------|-------------------------------|--------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒、焼土粒、炭化物を多量に含有 | 硬質 |
| 2 | " | 第1層より炭化物を多く含む | 少量のロームブロック混入 |
| 3 | " | 上層よりローム粒、焼土粒を多く含む | やや黄色が強い |
| 4 | 暗茶褐色土 | 小さなロームブロック、焼土粒、炭化物を多く含む | |
| 5 | " | 第4層に似るが、大きめのロームブロック混入 | |
| 6 | " | 第4層より黄色が強く、焼土粒、炭化物の含有が少ない | |
| 7 | 暗黄褐色土 | 多量のローム粒を含有 | 下層より黄色が強い |
| 8 | " | やや灰色がかかった色調で、大きめのロームブロックを多く含む | 粘性あり 硬質 |
| 9 | " | 第8層よりロームブロックを多く含む | |
| 10 | " | 第8層に似るが、ロームブロックは少ない | 硬質 |
| 11 | " | ローム粒、ロームブロックを主体とする | |
| 12 | " | ロームブロックを主体とする | |

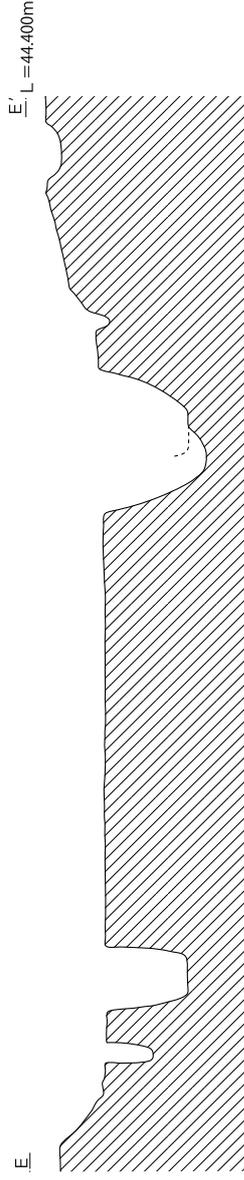
(S J-56)

- | | | |
|----|-------|-----------------------|
| 13 | 黒褐色土 | 第1層に似るが、焼土粒、炭化物は少ない |
| 14 | 暗茶褐色土 | ローム粒を多量に、炭化物は上層より多く含む |
| 15 | 暗黄褐色土 | ローム粒、ロームブロックを多く含む |
| 16 | " | ローム粒を主体とする粗い粒子の均一的な層 |
| 17 | " | ロームブロックは含まない |
| E | | ロームブロックを主体とする |



(S J-54)

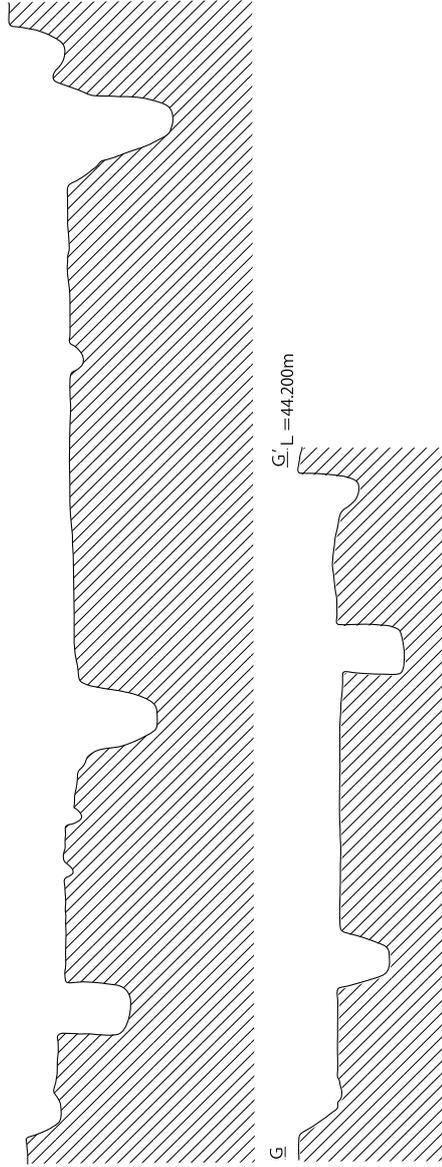
- | | | | |
|----|-------|--------------------|----|
| 18 | 黒褐色土 | ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含む | 軟質 |
| 19 | " | 第18層より多く焼土粒を含有 | |
| 20 | 暗黄褐色土 | ローム粒、ロームブロックを主体とする | |



E' L=44.400m

E' L=44.400m

E



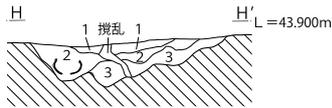
G' L=44.200m

G



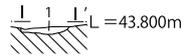
第17図 第54～56号住居跡(2)

(炉・屋内埋裏・柱穴)



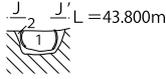
(S J-55 炉1)

- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有
- 2 " 第1層より焼土粒、炭化物を多く含有
- 3 " 焼土ブロック、焼けたロームブロックを含有



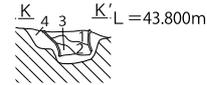
(S J-55 炉2)

- 1 赤褐色土 焼土を主体とする



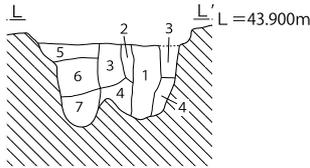
(S J-55 屋内埋裏1)

- 1 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含有 硬質
- 2 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを主体とする



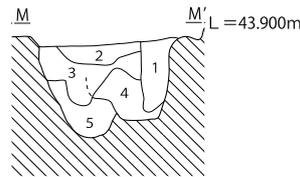
(S J-55 屋内埋裏2)

- 1 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含有
- 2 " ロームをほとんど含まない
- 3 " 第2層より色調が暗い 軟質
- 4 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを主体とする



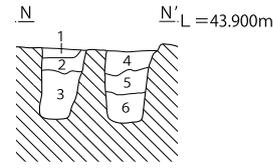
(S J-55 P1・8)

- 1 暗茶褐色土 ローム粒を多量、焼土粒、炭化物を少量含有 柱痕?
- 2 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土粒を多く含有 硬質
- 3 " ロームブロックを多量に含有
- 4 " ロームブロックを主体とする
- 5 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有
- 6 " 第5層よりローム含有少ない
- 7 " ロームブロックを多く含有



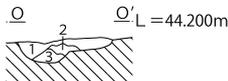
(S J-55 P2・9)

- 1 暗茶褐色土 ローム粒を多量、焼土粒、炭化物を少量含有 柱痕?
- 2 黒褐色土 ローム粒含有が少なく、黒色が強い
- 3 暗茶褐色土 焼土ブロック、ロームブロック混入
- 4 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含有
- 5 暗茶褐色土 第4層よりローム少量



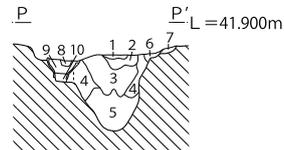
(S J-55 P5・10)

- 1 暗黄褐色土 ローム粒を主体とする
- 2 " ロームブロックを主体とする
- 3 " 第2層に似るが、軟質
- 4 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有
- 5 " ロームブロックが混入
- 6 暗茶褐色土 ロームブロックを主体とする



(S J-54 炉)

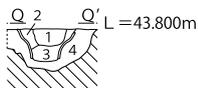
- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を多量に含有 脆弱
- 2 暗赤褐色土 焼土ブロックと焼けたロームブロックを主体とする
- 3 黒褐色土 第1層に似るが、焼土粒少量



(S J-55 P6・S J-56 炉)

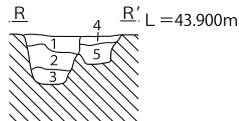
(S J-55 P6)

- 1 黄褐色土 ロームを主体とする 硬質 旧柱穴上の貼床上層
- 2 暗褐色土 ロームブロックと黒色土の混合層 硬質 貼床の下層
- 3 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有 上層に比して脆弱
- 4 暗茶褐色土 第3層よりローム粒、焼土粒を多く含有
- 5 暗黄褐色土 多量のローム粒、ロームブロックを含有 (S J-56 炉)
- 6 暗茶褐色土 第4層より大きめの焼土粒を多く含有
- 7 赤褐色土 焼土と暗茶褐色土の混合層
- 8 黄褐色土 ロームと黒褐色土の混合層 S J-55の貼床か?
- 9 暗赤褐色土 ローム粒、焼土粒を多量に含有
- 10 暗茶褐色土 第9層より焼土粒が少ない



(S J-56 屋内埋裏)

- 1 暗茶褐色土 多量のロームブロックを含有
- 2 黒褐色土 黒色土ブロック混入
- 3 " ローム粒、ロームブロックを少量含有
- 4 暗茶褐色土 多量のロームブロックを含有 硬質



(S J-56 P44・49)

- 1 黒褐色土 多量のローム粒、少量の焼土粒、炭化物を含有
- 2 暗茶褐色土 第1層にロームブロック混入
- 3 " ロームブロックを主体とする
- 4 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土粒を少量含有 硬質
- 5 " 第4層よりロームブロックが多い



第18図 第54～56号住居跡(3)

ほぼ全周するが、旧住居の屋内埋甕1付近は検出されなかった。

炉跡は2箇所検出された。炉跡1は石囲土器埋設炉で、遺構中央やや北寄りに位置している。平面形は不整楕円形で、長径1.58 m、短径1.12 m、深さ0.35 mを測る。炉底中心部は、被熱痕跡が顕著であった。炉縁石は、北側の一部が失われている。西南端の炉縁石は、石皿を転用している。埋設土器は鉢形土器で、南側縁石付近に設置されていた。底部を欠く。炉跡1は壁溝、支柱穴等との位置関係から新旧住居で兼用されていたと思われるが、埋設土器は後出的であるため追加設置された可能性が高い。炉跡2は、炉跡1の北側に位置する。平面形は楕円形で、長径0.45 m、短径0.36 mの範囲で床面が焼けていた。

屋内埋甕は、2箇所検出されている。屋内埋甕1は遺構南側、P4・5の中間に位置する。周辺は壁溝が途切れる。深さ0.25 mの掘り込みに、口縁部と胴下半部欠いた深鉢が埋設されていた。屋内埋甕2は、南壁の壁溝際に位置する。深さ0.30 m程の掘り込みに、口縁部の約3/4と胴下半部を欠く深鉢が埋設されていた。

出土遺物は多量であるが、覆土中にまとまり無く散在していた。

旧住居跡は屋内埋甕1から加曾利EⅡ式古段階、新住居跡は炉跡埋設土器と屋内埋甕2から、加曾利EⅡ式新段階と思われる。

第56号住居跡(第16～18図)

本住居跡は、調査区中央やや西寄り、C-5グリッドに位置する。東側に第55号住居跡、南壁に第38号土壙が重複する。

約2/3を第55号住居跡に破壊されているため、平面形は不明であるが、支柱穴配置から推定すると、径6.50 m前後の円形を呈するものと思われる。深さは0.38 mを測る。炉埋設土器と埋甕を結んだ主軸の方位は、N-36°-Eを指す。ピットは残存部分に8箇所、第55号住居跡内で3箇所検出された。各々の深さは、P41=0.49 m、P42=0.40 m、P43=0.38 m、P44=0.41 m、P45=0.53 m、P46=0.55 m、P47=0.39 m、P48=0.25 m、P49=0.24 m、P50=0.13 m、P51=0.14 m、P52=0.13 mを測る。P41～43は第55号住居跡に上部を壊されているため、この数値より若干深くなる。位置関係から、支柱穴はP41～46と思われる。床面は堅緻で、概ね平坦。壁は、やや外反して立ち上がる。壁溝は残存部分では南壁の一部を除いてほぼ全周するが、重複部分では検出されなかった。

炉跡は第55号住居跡P6に重複して検出された。埋設土器の一部が破壊されている。土器埋設炉であるが、炉縁石を伴った可能性もある。深さ0.25 m程の掘り込みに、胴下半部を欠く深鉢が埋設されていた。埋設土器は、内外面とも上半部に顕著な被熱痕跡が認められる。

屋内埋甕は南壁際に埋設されていた。口縁部の一部と、胴下半部を欠く大形の深鉢である。

出土遺物は比較的少ないが、第55号住居跡壁際、床面直上にはほぼ完形の注口土器が出土している。

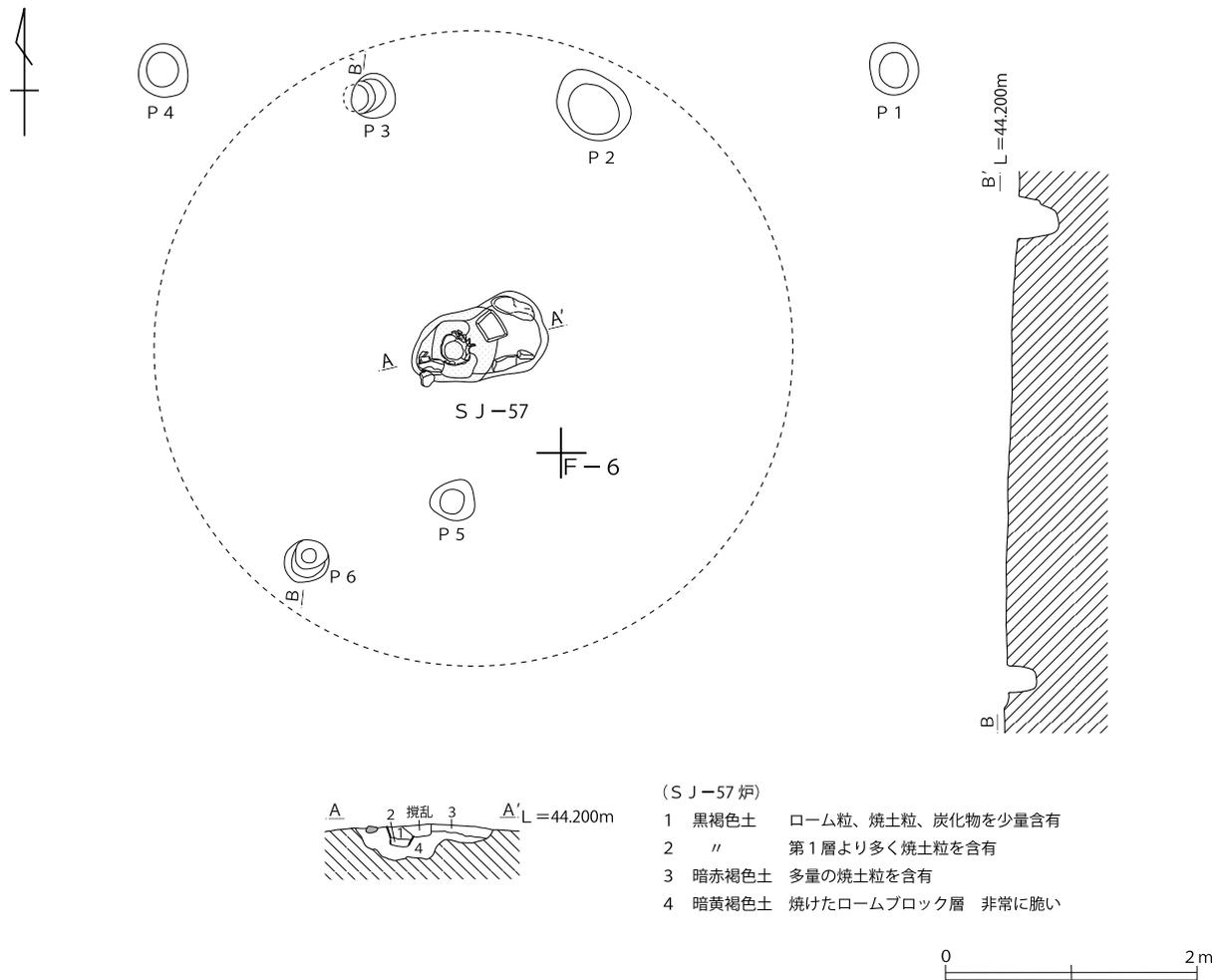
炉跡埋設土器と屋内埋甕から、本住居跡の時期は加曾利EⅡ式古段階と思われる。

第57号住居跡(第19図)

本住居跡は調査区東側のほぼ中央、E-5グリッドで検出された。

炉跡とピットが検出されたが、平面形及び規模は不明である。炉跡の主軸方位は、N-71°-Eを指す。

ピットは炉跡周辺で6箇所確認された。深さは各々、P1=0.18 m、P2=0.13 m、P3=0.34 m、P4=0.12 m、P5=0.20 m、P6=0.24 mを測る。P3以外は柱穴たる深度を有さず、配置も不規則である。周辺からは床面状の硬化面も検出されていない。



第 19 図 第 57 号住居跡

炉跡は石囲土器埋設炉である。平面形は不整楕円形を呈し、長径 1.10 m、短径 0.54 m、深さ 0.25 m 前後を測る。炉底は良く焼けており、被熱痕跡は深い位置まで及んでいた。埋設土器は、炉中央より西側に偏在する。胴下半部を欠き、口縁部は被熱のため、大部分が剥落している。炉縁石は大部分が抜き取られるか、原位置を保たない。

出土遺物は炉埋設土器のみである。

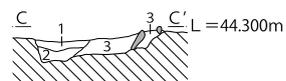
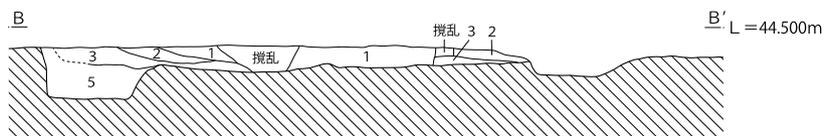
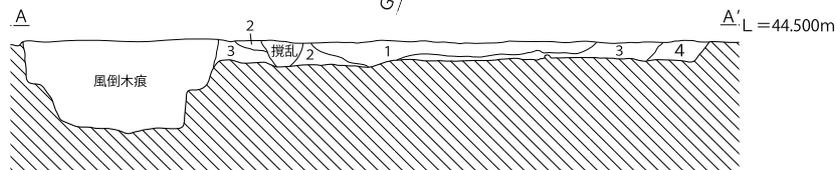
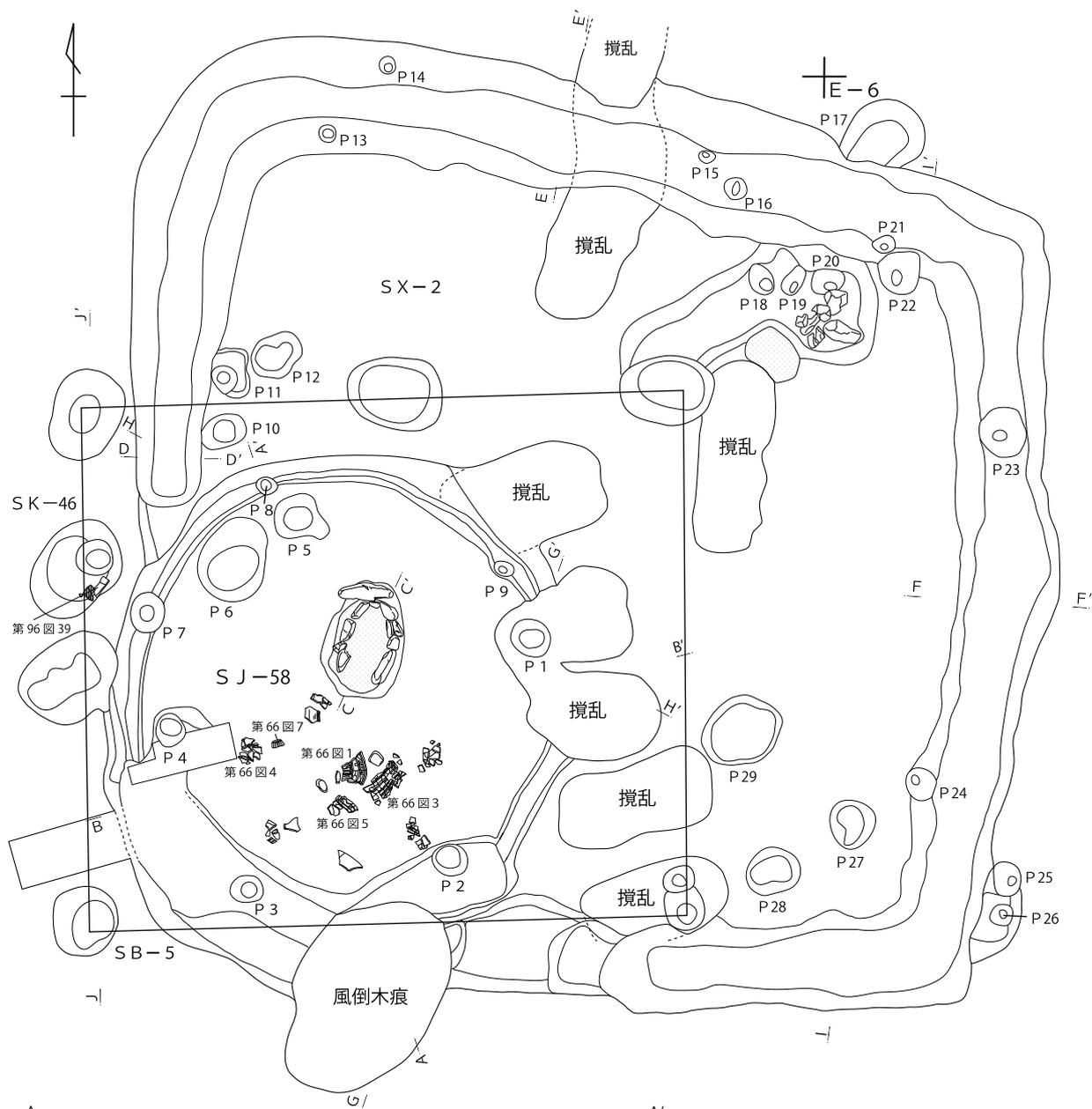
本住居跡の時期は、炉跡埋設土器から加曽利 E II 式新段階と思われる。

第 58 号住居跡 (第 20・21 図)

本住居跡は調査区中央やや南寄り、D・E-6 グリッドに位置し、第 2 号性格不明遺構、第 5 号掘立柱建物跡と重複している。また、北西側には第 59 号住居跡が位置している。

平面形は長径 5.63 m、短径 4.14 m の楕円形で、深さは 0.23 m 前後を測る。主軸方位は、N-28°-E を指している。ピットは 9 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.64 m、P 2 = 0.65 m、P 3 = 0.57 m、P 4 = 0.50 m、P 5 = 0.53 m、P 6 = 0.21 m、P 7 = 0.25 m、P 8 = 0.20 m、P 9 = 0.25 m を測る。深さと位置関係から、P 1 ~ P 5 が支柱穴と考えられる。床面は概ね平坦で、炉跡周辺は硬化が顕著である。壁は、やや外反して立ち上がる。壁溝は南側が不明確であるが、他の部分では全周する。

炉跡は遺構中央やや北寄りに位置する。石囲炉である。平面形は楕円形で、長径 1.06 m、短径 0.72 m、

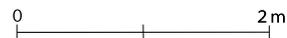


(S J-58・S X-2)

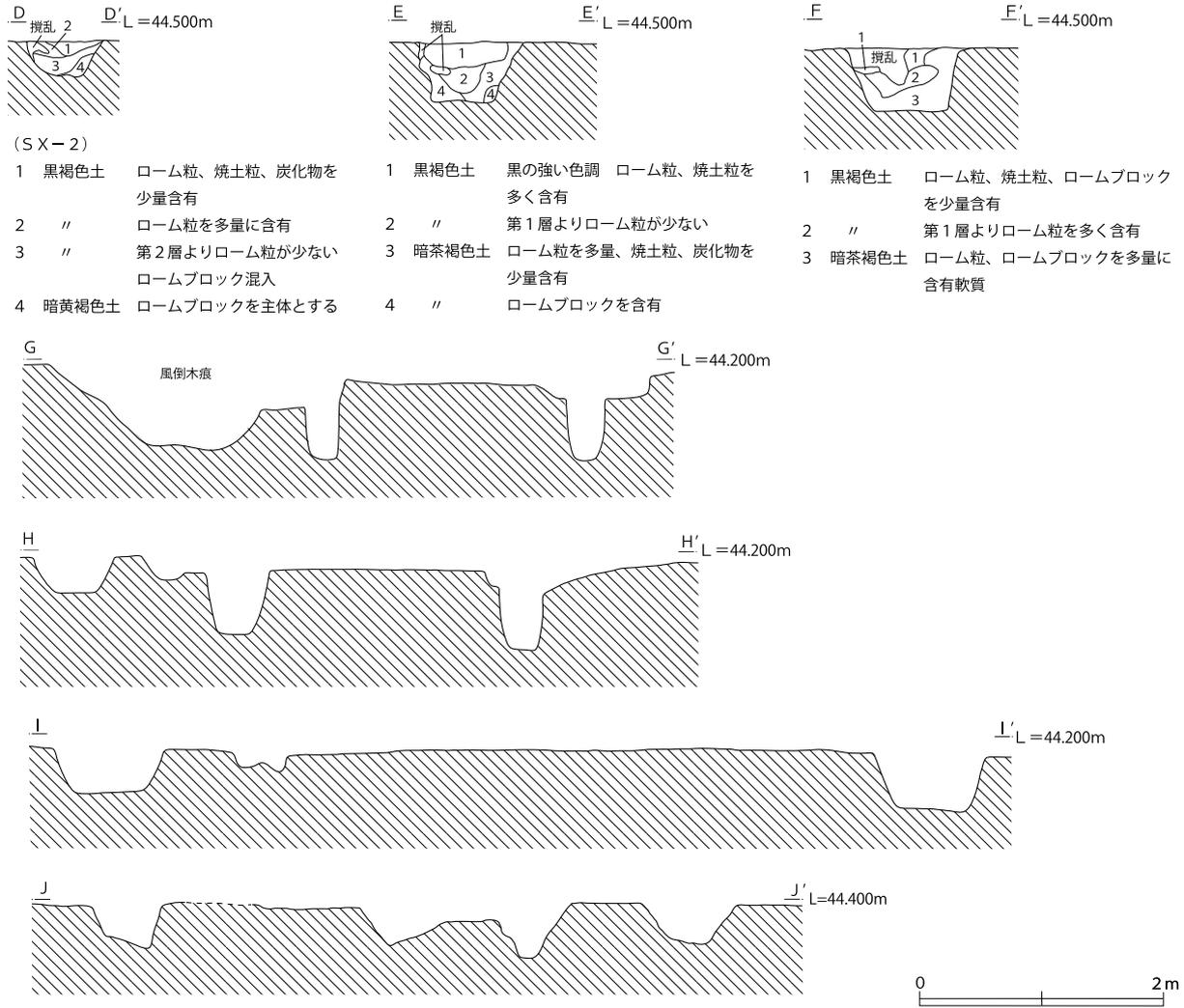
- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含有
軟質
- 2 " 第1層に似るが、色調がやや
明るい
- 3 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多く含有
硬質 S X-2 覆土 (第5層)
との境目は不明確
- 4 黄褐色土 ロームブロックを多量に含有
- 5 暗茶褐色土 ローム粒、ロームブロックを
多量に含有 軟質 S X-2
覆土

(S J-58 炉)

- 1 黒褐色土 ローム粒を少量、焼土粒、炭化物を多く含有
- 2 " 第1層より多く焼土粒、炭化物を含有
- 3 " 第1・2層より硬質 焼土も多量に含有



第 20 図 第 58 号住居跡・第 2 号性格不明遺構・第 5 号掘立柱建物跡 (1)



第 21 図 第 58 号住居跡・第 2 号性格不明遺構・第 5 号掘立柱建物跡 (2)

深さ 0.18 m を測る。炉縁石は南側の一部を欠く。炉底は、よく焼けて硬化していた。

出土遺物は豊富で、遺構南側、第 2 層直上にまとまりがある。

本住居跡の時期は、覆土下位出土の土器群から、加曾利 E II 式古段階と思われる。

第 59 号住居跡 (第 22 図)

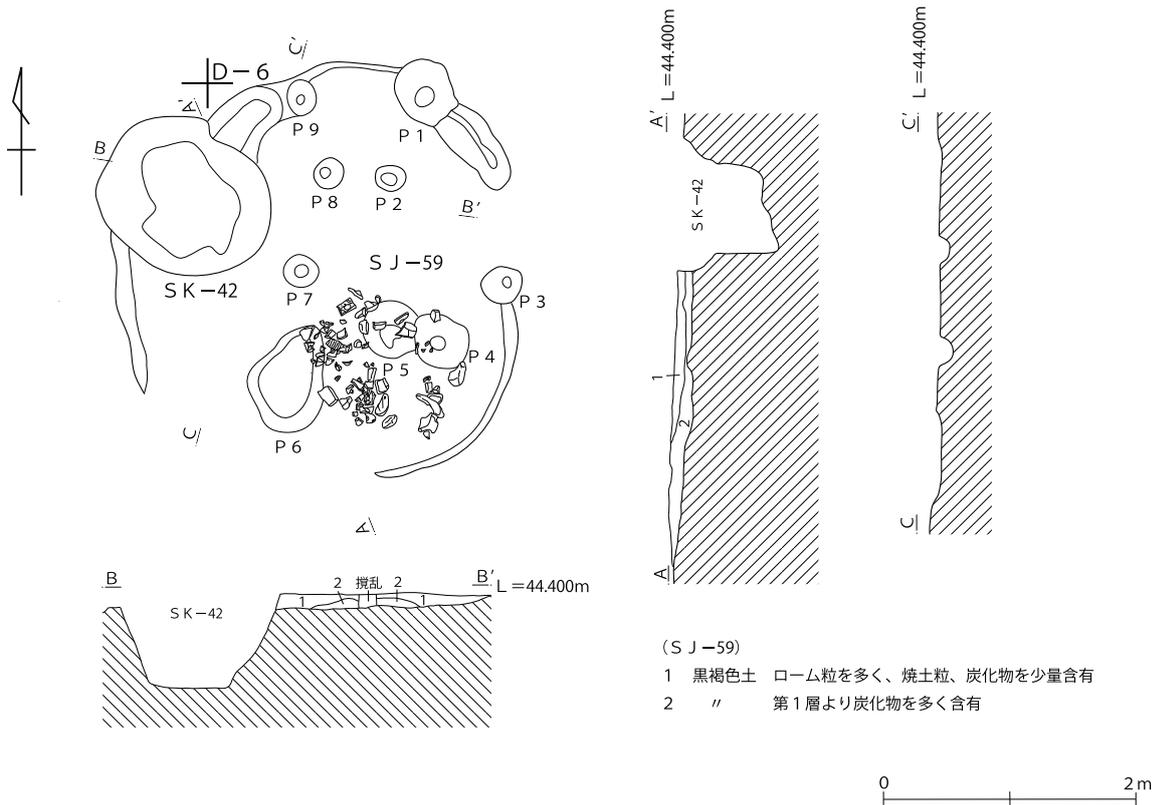
本住居跡は調査区中央やや西寄り、D-5 及び C・D-6 グリッドで検出された。北側に第 55 号住居跡、第 39～41 号土壇、西側に第 60 号住居跡が位置する。また、第 42 号土壇と重複する。

南・東壁が検出されていないが、平面形は大略径 3.20 m 前後の不整形円形を呈するものと思われる。深さは、0.16 m を測る。主軸方位は不明である。ピットは 9 箇所検出された。深さは各々、P 1 = 0.18 m、P 2 = 0.04 m、P 3 = 0.24 m、P 4 = 0.40 m、P 5 = 0.25 m、P 6 = 0.09 m、P 7 = 0.10 m、P 8 = 0.08 m、P 9 = 0.11 m を測る。P 3～5 が比較的深い。配置に規則性が見られない。床面は軟弱で、比較的平坦。壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は北側に部分的に検出された。炉跡は検出されなかった。

遺物は遺構南側にまとまって出土しているが、復元された土器個体は無い。加曾利 E III 式新段階の土器が比較的多く出土しているが、他の時期の混入も顕著であるため、時期は不明とする。

第 60 号住居跡 (第 23 図)

本住居跡は調査区西側、C-5・6 グリッドで検出された。東側に第 59 号住居跡、北側に第 56 号住居跡、



第22図 第59号住居跡

第38号土壙、西側に第62・64号住居跡が位置する。また、東壁に第41号土壙が重複する。

平面形は不整形円形を呈する。規模は、長径5.04m、短径4.72m、深さ0.35m前後を測る。主軸方位はN-25°-Eを示す。ピットは10箇所検出された。各々の深さは、P1=0.46m、P2=0.44m、P3=0.41m、P4=0.52m、P5=0.10m、P6=0.23m、P7=0.22m、P8=0.38m、P9=0.21m、P10=0.07mを測る。深さと位置関係から、P1~4が支柱穴と思われる。床面は平坦で、支柱穴内側に硬化面が認められた。壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は西側から南側にかけて検出された。

炉跡は遺構中央部に位置する。地床炉である。平面形は南北に長い不整形楕円形を呈する。規模は長径0.84m、短径0.74m、深さ0.20mを測る。炉底は、よく焼けていた。

遺物は、中央から東側の第9層直上に集中する傾向が見られる。また、西壁中央壁際から小型の深鉢が伏せられた状態で出土している。

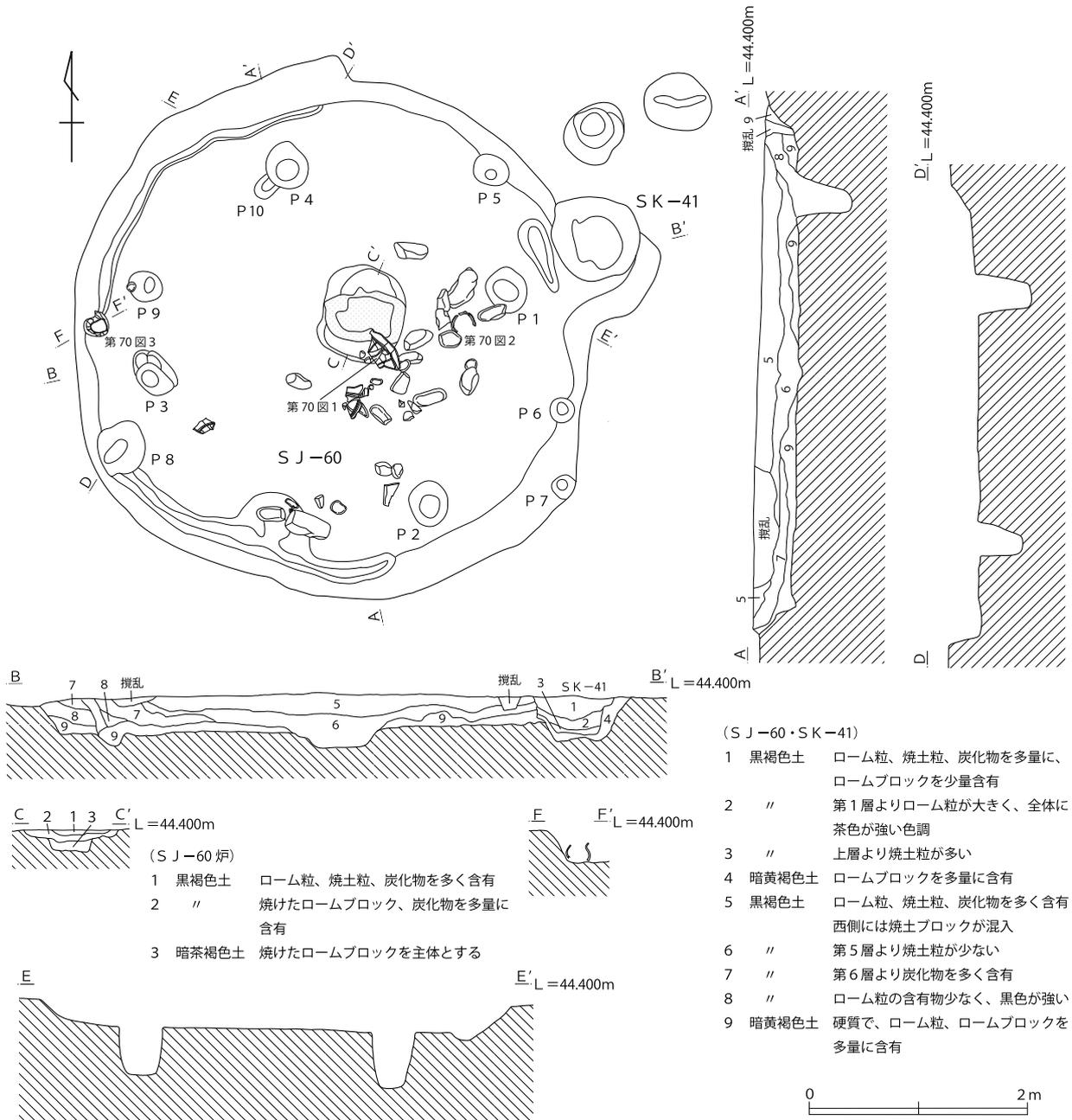
本住居跡の時期は、覆土出土土器から加曾利EⅡ式古段階と思われる。

第61号住居跡 (第24図)

本住居跡は調査区北西壁際、B-5グリッドで検出された。南側に第62号住居跡が位置する。また、第34・35号土壙が東側に隣接する。

北西壁の一部が調査区外にあるが、平面形は径2.90m程度の小規模な不整形円形を呈すると思われる。深さは、0.30m前後を測る。炉跡中軸と屋外埋甕を結ぶ主軸線の方位は、N-41°-Eを指す。ピットは2箇所検出された。深さは各々、P1=0.37m、P2=0.24mを測る。床面は平坦であるが、比較的軟弱であった。壁は、やや外傾して立ち上がる。壁溝は、検出されなかった。

炉跡は2箇所検出された。炉跡1は、遺構中央やや南東寄りに位置する地床炉である。径0.40mの不



第23図 第60号住居跡

整円形を呈し、床面自体が焼けたような状況であった。炉跡2は石囲炉と思われるが、炉縁石は一部を残すのみである。平面形は、不整楕円形を呈する。長径0.78 m、短径0.75 m、深さ0.15 mを測る。北側と南側に、大形の炉縁石を残している。いずれも被熱により亀裂が入っている。炉底中央部は被熱が顕著であり、硬化していた。

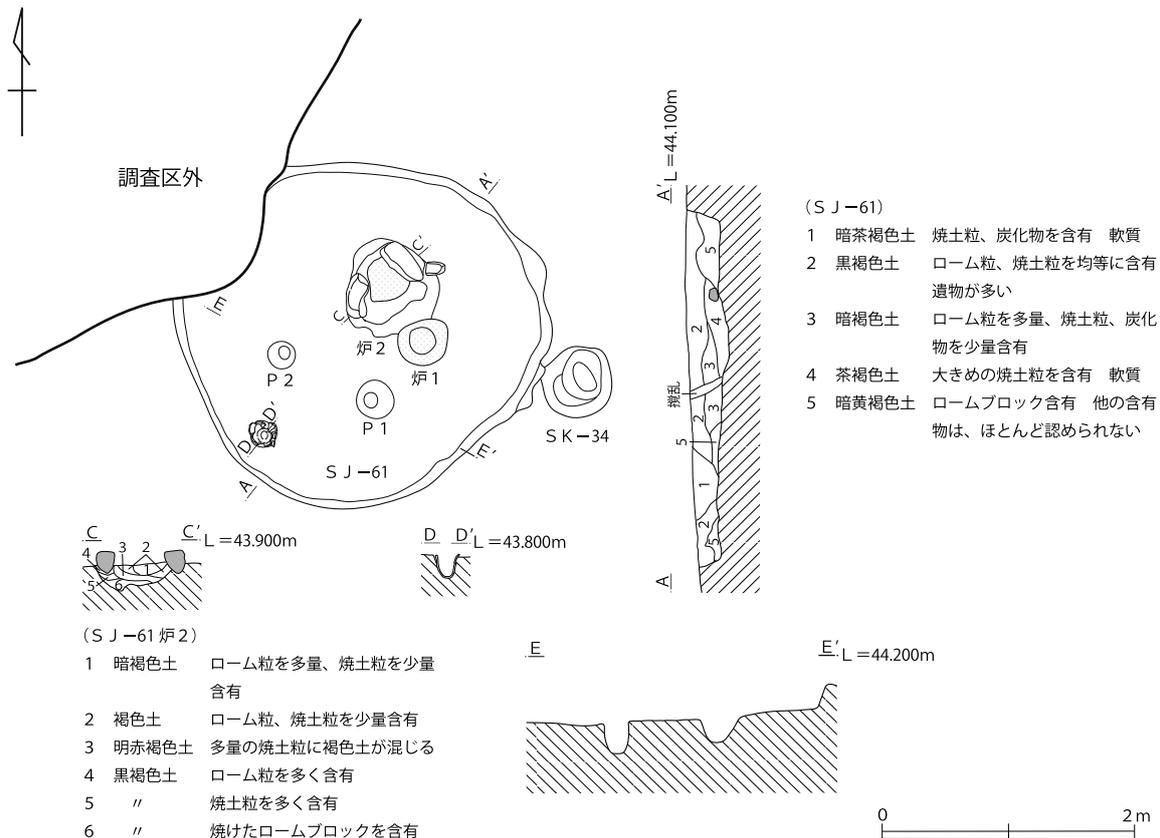
屋内埋嚢は南西側に位置している。土器と同規模の掘り込みに、口縁部を欠く深鉢が正位に埋設されていた。土器の上位部分は、周辺から出土している。

出土遺物は比較的少ない。まとまり無く、覆土中に散在していた。

本住居跡の時期は、屋内埋嚢から加曽利EⅢ式新段階と思われる。

第62号住居跡 (第25図)

本住居跡は調査区西側、B・C-5・6グリッドに位置する。南西側には、第63号住居跡が重複する。



第 24 図 第 61 号住居跡

覆土内から第 4 号単独埋葬が検出された。

平面形は東壁が検出されていないが、大略不整楕円形を呈している。長径推定 6.50 m、短径 4.33 m、深さ 0.10 m 前後を測る。炉跡の主軸方位は N-34°-W を示す。ピットは 12 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.24 m、P 2 = 0.12 m、P 3 = 0.12 m、P 4 = 0.12 m、P 5 = 0.16 m、P 7 = 0.22 m、P 8 = 0.13 m、P 9 = 0.15 m、P 10 = 0.15 m、P 11 = 0.32 m、P 12 = 0.15 m を測る。P 6・11 が柱穴たる深度を有するが、他はいずれも浅く、配置にも規則性は認められない。床面は平坦で、炉跡周辺に硬化面が見られた。壁は外傾して立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

炉跡は遺構のほぼ中央に位置する。土器埋設炉である。平面形は楕円形を呈し、長径 0.87 m、短径 0.52 m、深さ 0.21 m を測る。土器は掘り込みの北側に埋設されていた。土器周辺は、よく焼けて焼土化しており、土器自体も被熱が顕著である。炉跡南壁付近には、第 4 号屋外埋葬が埋設されていた。

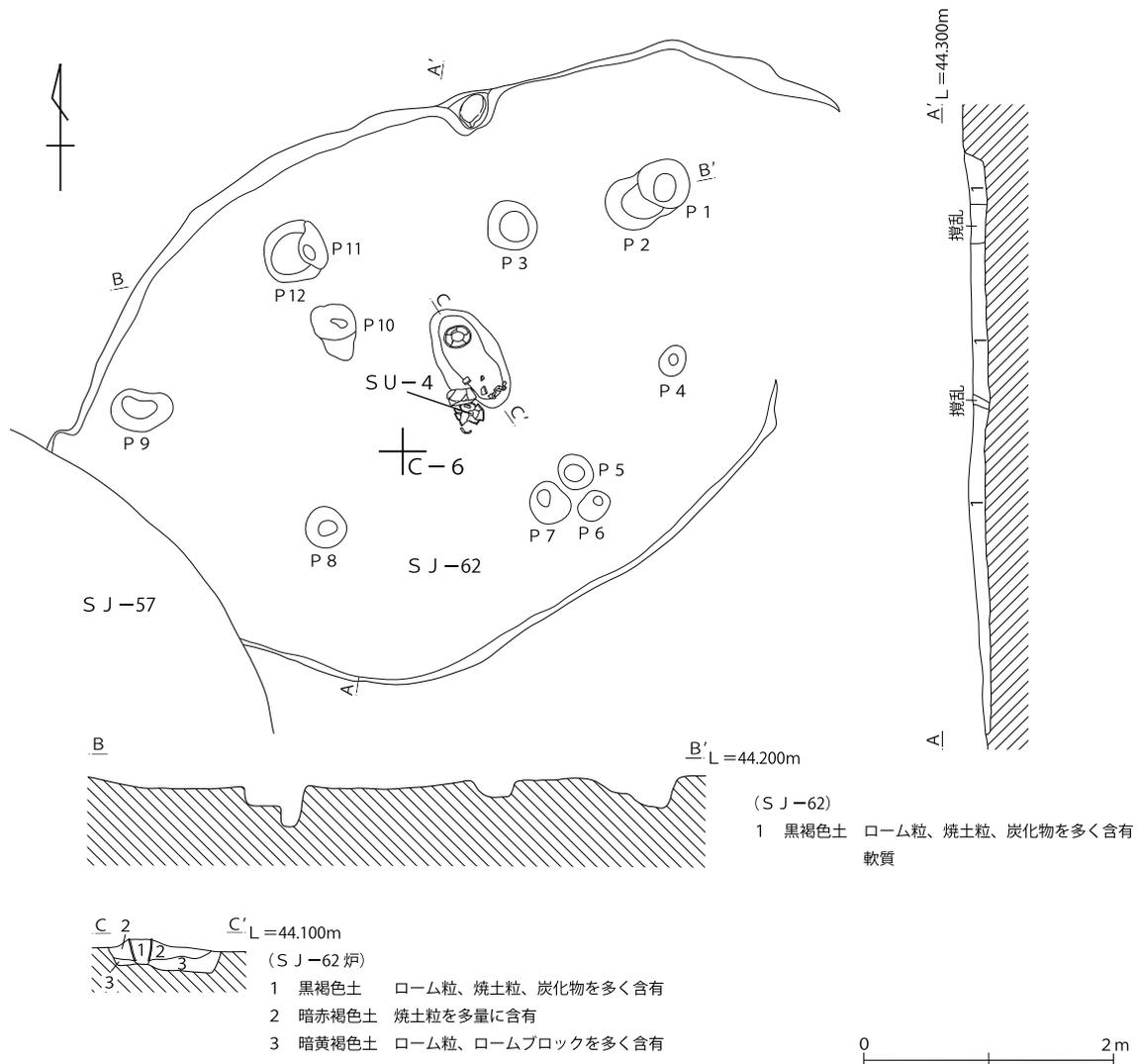
出土遺物は比較的多く、大形の破片が目立つ。

本住居跡の時期は、炉跡埋設土器から、加曾利 E Ⅲ 式古段階と思われる。

第 63 号住居跡 (第 26 図)

本住居跡は調査区西端、B-6 グリッドで検出された。北東側に、第 62 号住居跡が重複する。覆土内には、第 5・6 号単独埋葬が埋設されていた。

平面形は整った楕円形を呈し、規模は長径 6.16 m、短径 5.92 m、深さ 0.42 m 前後を測る。主軸は炉埋設土器と屋内埋葬を結んだ線で、方位は N-36°-E を指す。ピットは 24 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.59 m、P 2 = 0.69 m、P 3 = 0.67 m、P 4 = 0.50 m、P 5 = 0.49 m、P 6 = 0.09 m、P 7 = 0.12 m、P 8 = 0.19 m、P 9 = 0.20 m、P 10 = 0.19 m、P 11 = 0.17 m、P 12 = 0.13 m、



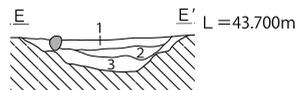
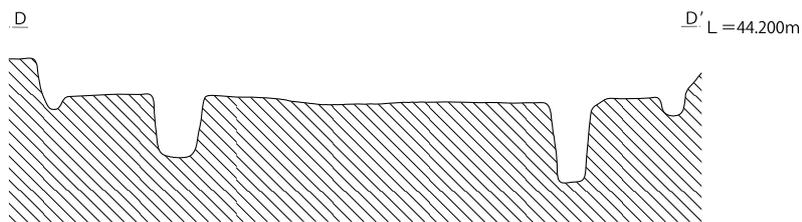
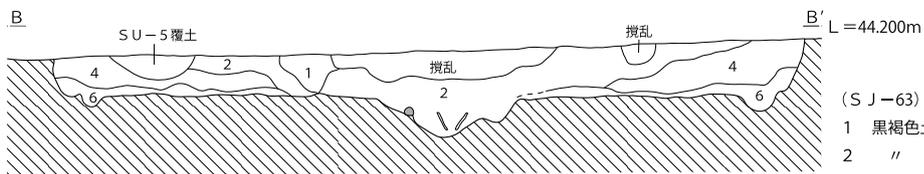
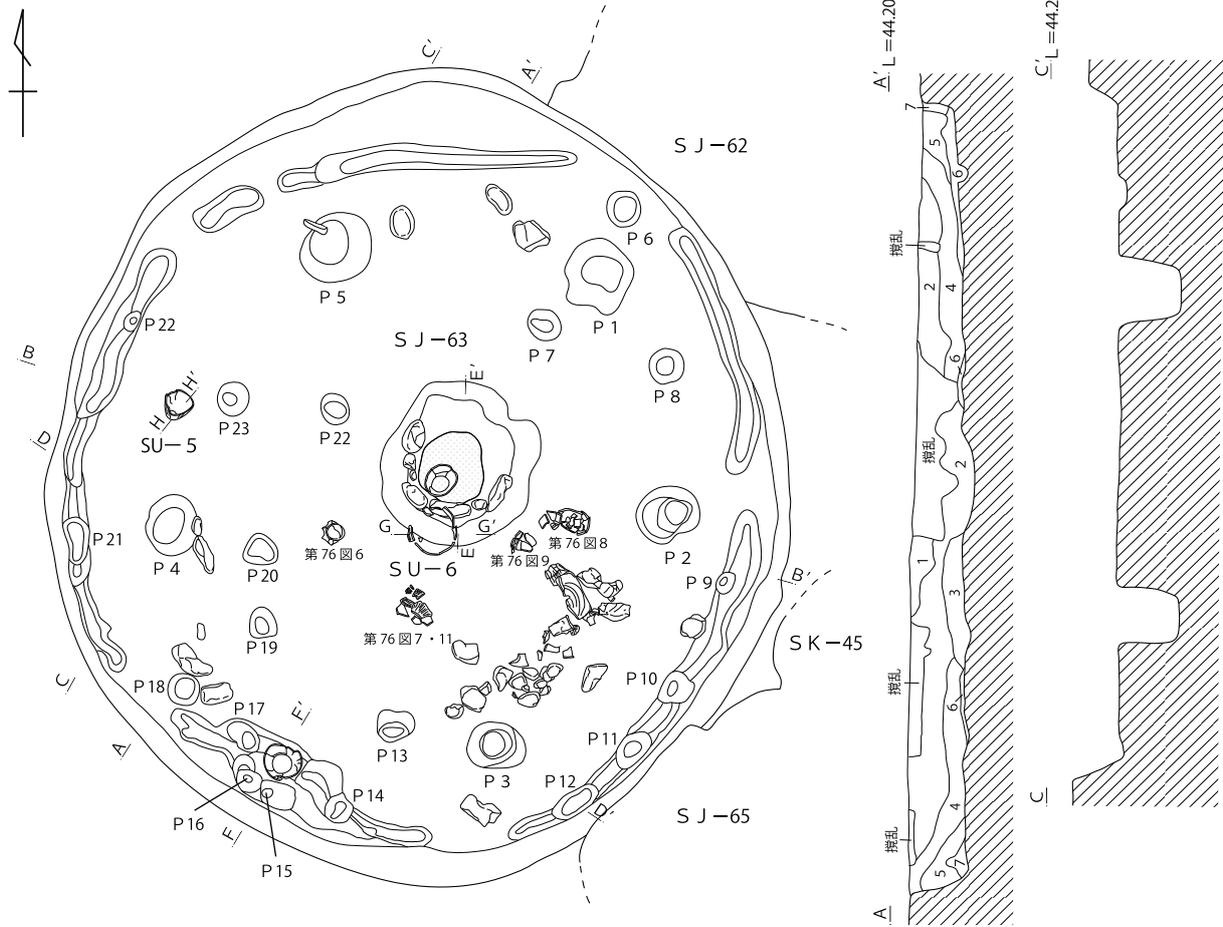
第25図 第62号住居跡

P 13 = 0.16 m、P 14 = 0.30 m、P 15 = 0.35 m、P 16 = 0.32 m、P 17 = 0.22 m、P 18 = 0.09 m、P 19 = 0.10 m、P 20 = 0.12 m、P 21 = 0.08 m、P 22 = 0.16 m、P 23 = 0.25 m、P 24 = 0.15 mを測る。深さと位置関係からP 1～5が支柱穴と考えられ、整った五角形に配置されている。P 14～17は、屋内埋甕の周辺に位置し、深さから入口施設に関連しているものと思われる。床面は平坦で、支柱穴内側は堅緻であった。壁は、やや外傾して立ち上がる。壁溝は数箇所途切れるが、ほぼ全周する。

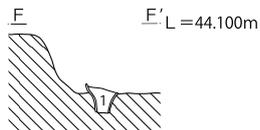
炉跡は遺構ほぼ中央に位置する。石囲土器埋設炉であるが、北側の炉縁石は抜き取られている。平面形は不整楕円形で、長径 1.31 m、短径 1.20 m、深さ 0.26 mを測る。埋設土器は、南側の炉縁石に近接して埋設されていた。土器周辺は良く焼けており、土器自体も被熱痕跡が顕著である。なお、炉跡南壁付近に、第6号屋外埋甕が位置する。

屋内埋甕は、南壁の壁溝内に埋設されていた。深さ 0.25 m程の掘り込みに、口縁部の約 1/2 と胴下半部を欠く深鉢が埋設されていた。

遺物は、炉跡南西側、第2層中にまとまった出土があった。

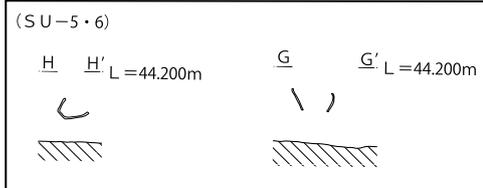


- (S J-63 炉)
- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有
 - 2 " 第1層より焼土粒を多く含有
 - 3 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含有



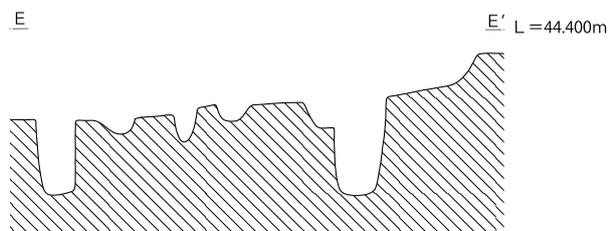
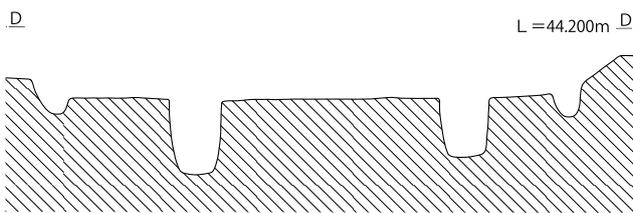
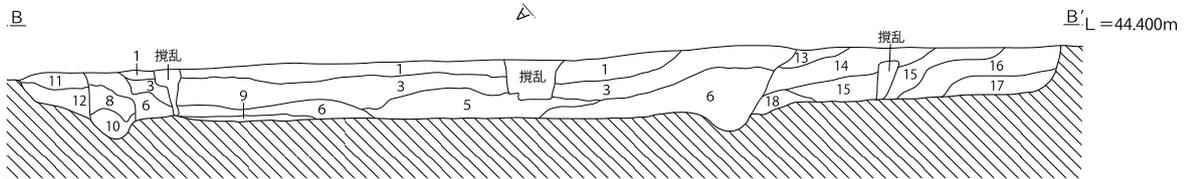
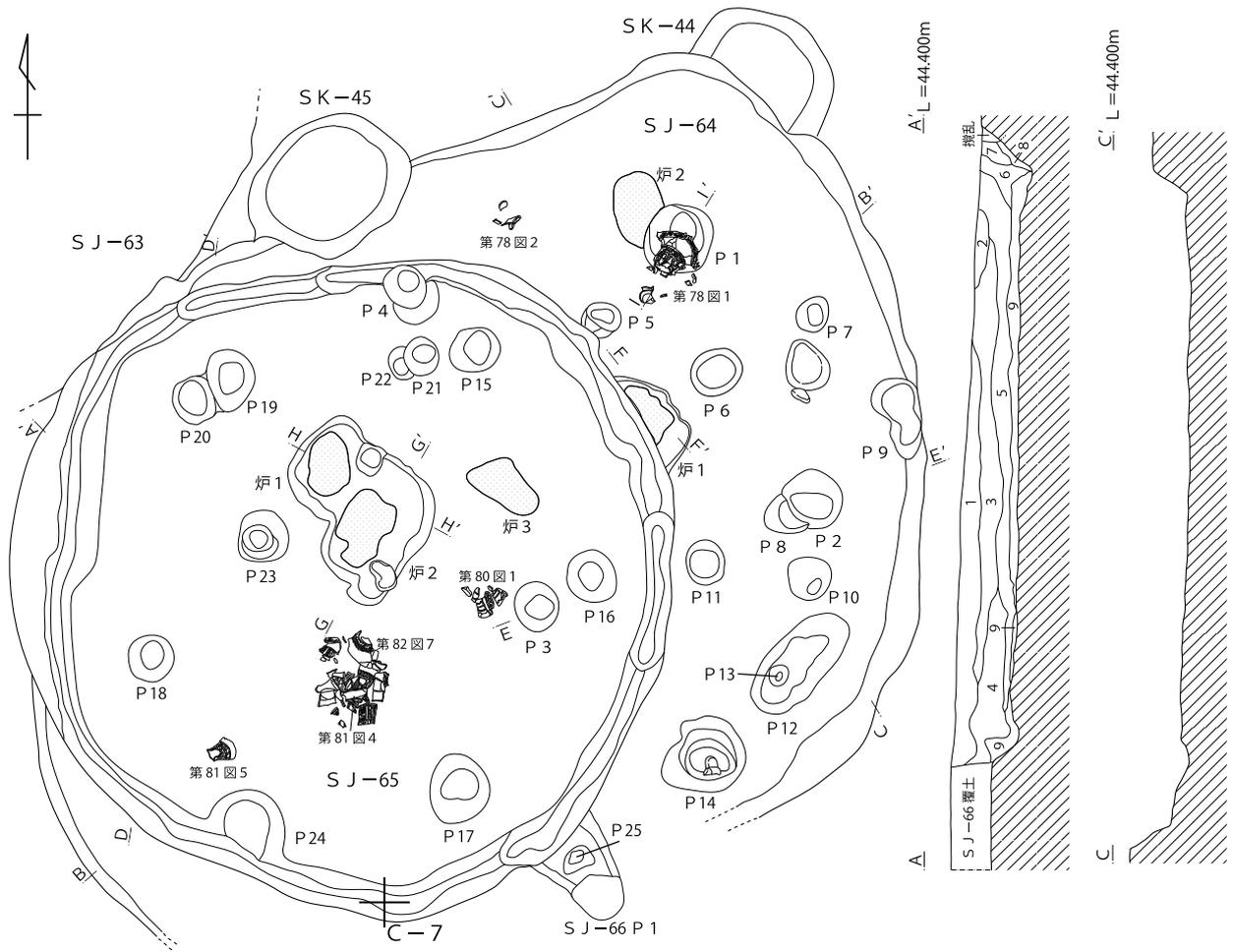
- (S J-63 屋内埋塞)
- 1 茶褐色土 ローム粒を少量含有

- (S J-63)
- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を多く含有 軟質
 - 2 " ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有 遺物を多く包含
 - 3 暗茶褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物の他、ロームブロック混入
 - 4 茶褐色土 第3層より硬質で、ローム粒を多く含有 焼土粒をほとんど含まない
 - 5 黒褐色土 第4層より硬質 ローム粒をほとんど含まない
 - 6 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを主体とする 硬質
 - 7 明茶褐色土 ローム粒を主体とする



0 2m

第26図 第63号住居跡

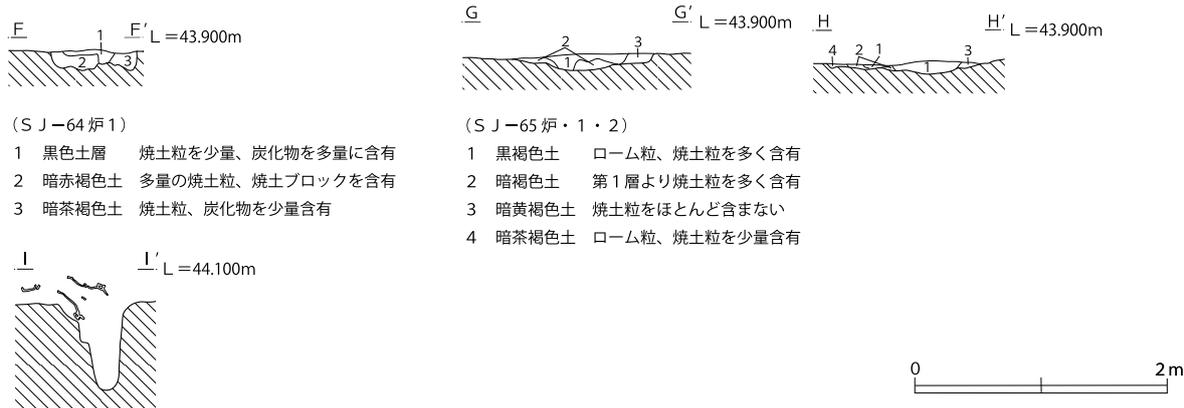


(S J-64・65)

- | | |
|----------|--|
| 1 黒褐色土 | 黒色の強い層 ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有 他に灰色の砂粒状粒子を含有 |
| 2 黒色土 | 第1層より黒色が強く、ローム粒が少ない |
| 3 黒褐色土 | 第1層よりローム粒を多く含有 遺物を多く包含 |
| 4 " | 第3層より大きめのローム粒を含有 |
| 5 " | 第4層より焼土粒、炭化物を多く含有 |
| 6 黒色土 | 第5層よりローム粒が少ない |
| 7 黒褐色土 | ロームブロック、焼土ブロックを含有 |
| 8 黒色土 | 第7層より黒色が強い |
| 9 暗黄褐色土 | ローム粒、ロームブロックを多量に含有 硬質 |
| 10 暗茶褐色土 | ローム粒を多量に含有 |
| 11 " | ローム粒、焼土粒を少量含有 |
| 12 " | 第10層に似る 大きめのローム粒を多量に含有 |
| 13 黒褐色土 | 第3層に比して茶色が強い ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有 |
| 14 " | 第13層より焼土粒が多い |
| 15 " | 第14層より黒色が強い |
| 16 暗茶褐色土 | 小さめのロームブロック混入 |
| 17 " | 第16層より大きめのロームブロックを多く含有 |
| 18 " | 焼土粒を多量に含有 S J-54 炉1 覆土 |



第27図 第64・65号住居跡(1)



第 28 図 第 64・65 号住居跡 (2)

本住居跡の時期は、炉跡埋設土器と屋内埋甕から加曾利 E II 式新段階と思われる。

第 64 号住居跡 (第 27・28 図)

本住居跡は調査区西端の C-6 グリッドで検出された。西側に第 65 号住居跡、南側に第 66 号住居跡、北壁には第 44・45 号土壌が重複する。

平面形は東側の大部分が第 65 号住居跡と重複するため不明確であるが、南北に長い不整楕円形を呈するものと思われる。規模は、長径 6.02 m、短径は支柱穴位置から推定して 4.40 m 前後、深さは 0.42 m を測る。ピットは第 65 号住居跡内のもも含めて、14 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.70 m、P 2 = 0.78 m、P 3 = 0.59 m、P 4 = 0.62 m、P 5 = 0.49 m、P 6 = 0.10 m、P 7 = 0.25 m、P 8 = 0.22 m、P 9 = 0.13 m、P 10 = 0.04 m、P 11 = 0.12 m、P 12 = 0.12 m、P 13 = 0.26 m、P 14 = 0.70 m を測る。支柱穴は、やや歪んだ長方形配置の P 1～4 と思われるが、P 14 を加えた五角形配置も考えられる。床面は比較的堅緻で、平坦。壁は、やや外傾して立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

炉跡は、2 箇所検出された。炉跡 1 は、遺構ほぼ中央に位置し、第 65 号住居跡に約 1/2 が破壊されている。地床炉と思われる。残存部の長径は 0.85 m、深さは 0.10 m を測る。炉底は被熱痕跡が顕著である。炉跡 2 は P 1 と重複する。長径 0.62 m、短径 0.42 m の楕円形の範囲で床面が焼けていた。

遺物量は比較的少ない。P 1 に落ち込むように深鉢の半完形品が出土している他は、覆土内に散在していた。また、本住居跡の遺物が第 65 号住居跡覆土に混入しているのが看取された。

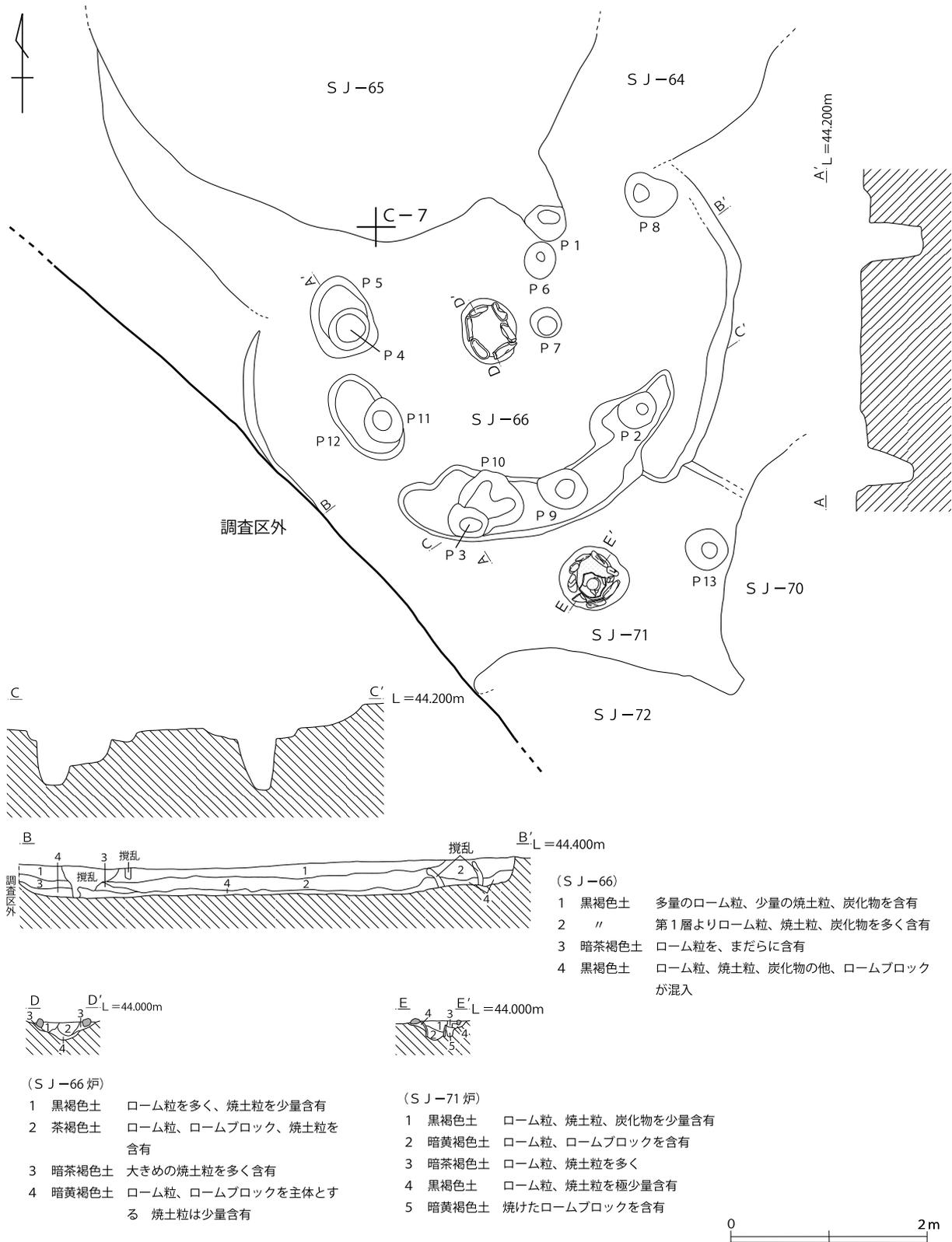
本住居跡の時期は、覆土出土土器から、勝坂 2 a 式段階と思われる。

第 65 号住居跡 (第 27・28 図)

本住居跡は調査区西端、B・C-6 グリッドで検出された。西側で第 64 号住居跡、南側で第 66 号住居跡と重複している。

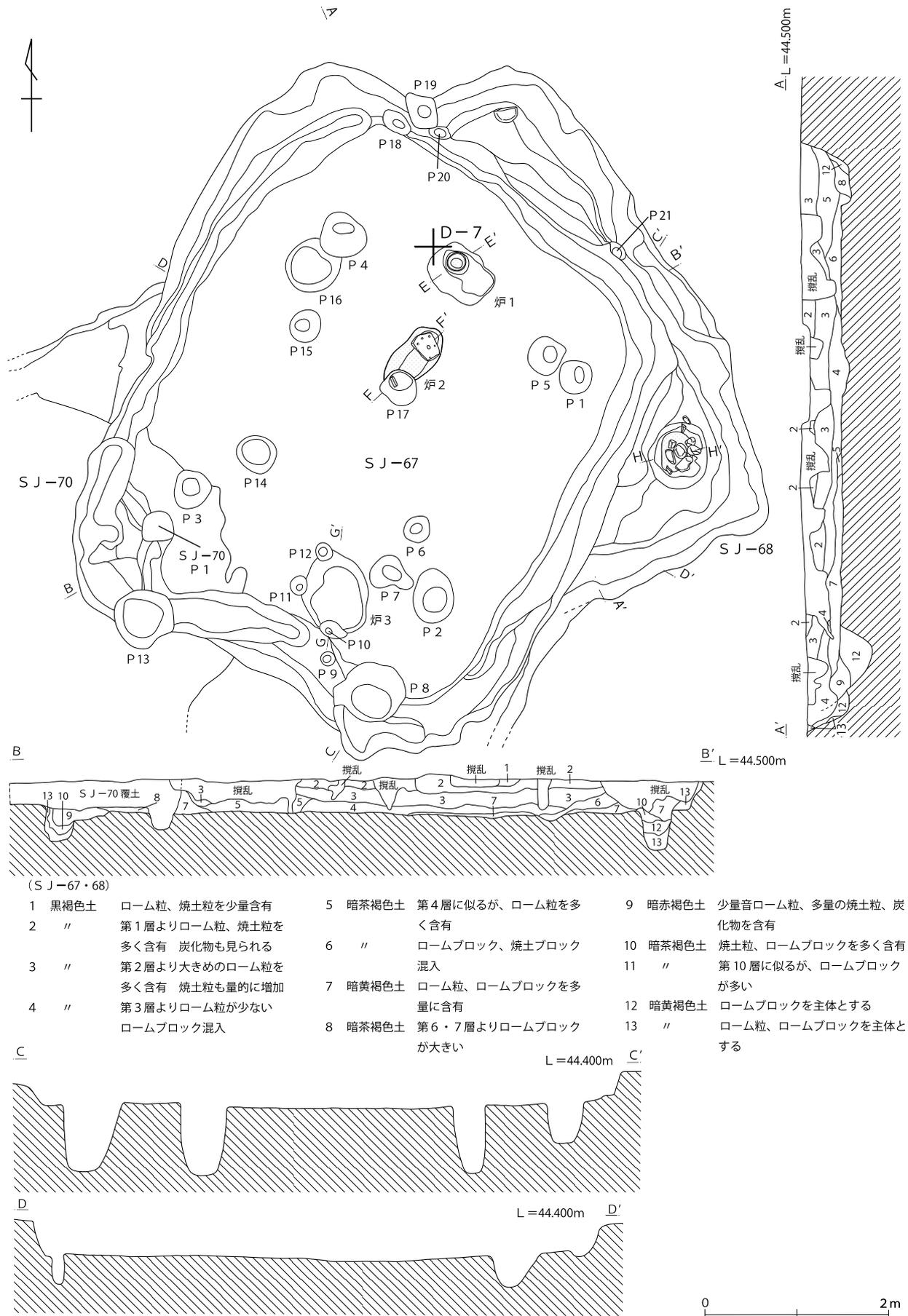
平面形はやや不整な円形を呈する。径 5.42 m 前後、深さ 0.48 m を測る。主軸を P 15・24 を結んだ線とすると、方位は N-24°-E を指す。ピットは 11 箇所検出された。各々の深さは、P 15 = 0.71 m、P 16 = 0.57 m、P 17 = 0.71 m、P 18 = 0.59 m、P 19 = 0.68 m、P 20 = 0.46 m、P 21 = 0.63 m、P 22 = 0.20 m、P 23 = 0.66 m、P 24 = 0.19 m、P 25 = 0.11 m を測る。支柱穴は、深さと位置関係から P 15～19 の 5 箇所と思われるが、P 20・21 と P 16～18 の組み合わせで 1 回の建替えが想定される。床面は概ね平坦で、堅緻である。壁は、緩やかに立ち上がる。壁溝は、全周する。

炉跡は 3 箇所検出された。炉跡 1 は炉跡 2 と重複する。地床炉である。平面形は長径 0.78 m 程の楕円形を呈すると思われる。深さは 0.06 m を測る。炉底は、長径 0.50 m、短径 0.32 m の楕円形の範囲で被



第 29 図 第 66・71 号住居跡

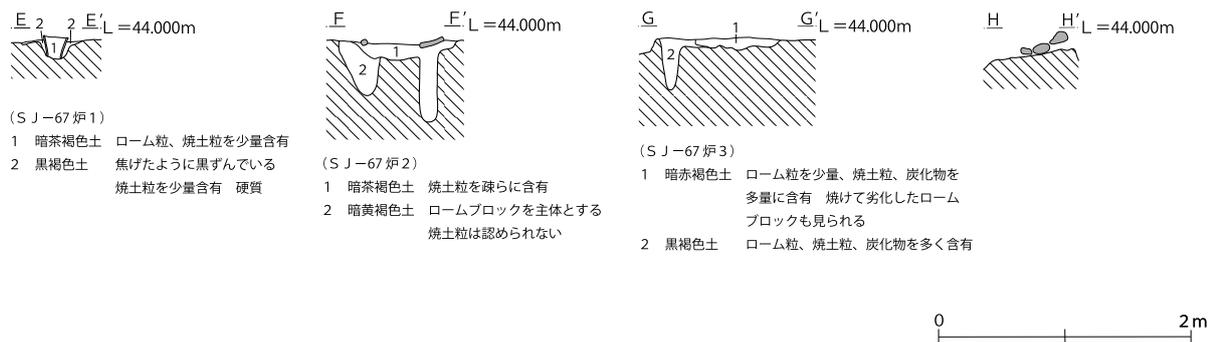
熱痕跡が顕著であった。炉跡 2 は炉跡 1 の南側に位置する。地床炉である。平面形は隅丸長方形と思われ、長径 1.08 m、短径は断面から推定で 0.75 m、深さ 0.15 m を測る。炉底は、長径 0.58 m の不整形範囲がよく焼けている。炉跡 3 は炉跡 1 の東側に位置する。長径 0.64 m、短径 0.36 m の不整形範囲で、床



(S J-67・68)

- | | | | | | |
|--------|------------------------------|---------|--------------------|----------|-----------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒、焼土粒を少量含有 | 5 暗茶褐色土 | 第4層に似るが、ローム粒を多く含有 | 9 暗赤褐色土 | 少量のローム粒、多量の焼土粒、炭化物を含有 |
| 2 " | 第1層よりローム粒、焼土粒を多く含有 炭化物も見られる | 6 " | ロームブロック、焼土ブロック混入 | 10 暗茶褐色土 | 焼土粒、ロームブロックを多く含有 |
| 3 " | 第2層より大きめのローム粒を多く含有 焼土粒も量的に増加 | 7 暗黄褐色土 | ローム粒、ロームブロックを多量に含有 | 11 " | 第10層に似るが、ロームブロックが多い |
| 4 " | 第3層よりローム粒が少ないロームブロック混入 | 8 暗茶褐色土 | 第6・7層よりロームブロックが大きい | 12 暗黄褐色土 | ロームブロックを主体とする |
| | | | | 13 " | ローム粒、ロームブロックを主体とする |

第30図 第67・68号住居跡(1)



第 31 図 第 67・68 号住居跡 (2)

面が被熱、硬化していた。

出土遺物は比較的多い。土器は遺構南側の覆土第 5・6 層中にまとまった出土があった。また、第 64 号住居跡から混入したと思われる土器も認められる。

本住居跡の時期は、覆土下位から出土した土器から加曾利 E II 式古段階と思われる。

第 66 号住居跡 (第 29 図)

本住居跡は調査区西壁近く、B・C-7 グリッドで検出された。周辺は、今回の調査で遺構が最も密集する区域である。北側に第 64・65 号住居跡、南側に第 71 号住居跡が重複する。

検出された壁がおよそ 1/3 程度であるが、平面形は長径 5.23 m、短径 4.70 m 前後のやや横長の楕円形を呈するものと思われる。炉跡の中軸線の方位は、N-25°-W を示す。ピットは 12 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.63 m、P 2 = 0.59 m、P 3 = 0.55 m、P 4 = 0.61 m、P 5 = 0.09 m、P 6 = 0.25 m、P 7 = 0.09 m、P 8 = 0.30 m、P 9 = 0.54 m、P 10 = 0.41 m、P 11 = 0.19 m、P 12 = 0.08 m を測る。支柱穴は深さと位置関係から、P 1 ~ 4 と思われる。なお、P 9 は第 71 号住居跡に帰属する可能性がある。床面は平坦であるが、全体的に軟弱である。壁は外傾して立ち上がる。P 2 から P 3 を結ぶラインで、溝が弧状に検出されたが、本来の壁溝とは異なると思われる。

炉跡は遺構中央に位置するものと思われる。石囲炉である。長径 0.70 m、短径 0.58 m の楕円形の掘り込みに炉縁石を巡らす。深さ 0.18 m を測る。炉底は、あまり焼けていない。

遺物は比較的小なく、覆土中に散在していた。また、前期から中期後半の土器が混在する。

本住居跡の時期は、決定資料を欠くため不明とする。

第 67 号住居跡 (第 30・31 図)

本住居跡は調査区西側の遺構密集区域、C・D-6・7 グリッドで検出された。第 68 ~ 70 号住居跡と重複する。

平面形は南壁が湾曲するが、隅丸長方形を呈する。規模は長辺 6.35 m、短辺 5.52 m、深さは 0.41 m 前後を測る。炉跡 1・2 を結んだ主軸の方位は、N-27°-E を指している。ピットは 20 箇所検出されている。各々の深さは、P 1 = 0.74 m、P 2 = 0.90 m、P 3 = 0.64 m、P 4 = 0.71 m、P 5 = 0.83 m、P 6 = 0.09 m、P 7 = 0.10 m、P 8 = 0.77 m、P 9 = 0.13 m、P 10 = 0.33 m、P 11 = 0.23 m、P 12 = 0.16 m、P 13 = 0.64 m、P 14 = 0.12 m、P 15 = 0.41 m、P 16 = 0.12 m、P 17 = 0.41 m、P 18 = 0.26 m、P 19 = 0.71 m、P 20 = 0.36 m を測る。位置関係と深さから、P 1 ~ 4 が支柱穴と思われる。南壁に位置する P 8・13 は、入口施設等に関連するかもしれない。床面は平坦で、中央部は堅緻。壁は、やや外傾して立ち上がる。壁溝は幅広く、全周する。深さには、部分的に高低差がある。

炉跡は3箇所検出された。炉跡1は北壁寄りに位置する。土器埋設炉である。長径0.72 m、短径0.55 mの不整楕円形の掘り込みの西壁近くに、胴下半部を欠いた深鉢を埋設している。土器内面と土器直下は、被熱が顕著であった。炉跡2は遺構中央やや北寄りに位置する。地床炉である。南側をP 17に壊されているが、平面楕円形を呈すると思われる。長径推定0.80 m、短径0.51 m、深さ0.15 mを測る。上層から石皿が出土しており、その直下にはピットが位置する。炉底は、よく焼けていた。炉跡3は、南壁壁溝近くに位置する。地床炉である。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.92 m、短径0.73 m、深さは0.10 m前後を測る。炉底は、よく焼けていた。

出土遺物は比較的少なく、まとまりなく覆土中に散在する。また、南西コーナー付近には第70号住居跡の遺物が混入している。

本住居跡の時期は、炉跡埋設土器から黒浜式段階と思われる。

第68号住居跡 (第30・31図)

本住居跡は調査区西端の遺構密集区域、D-6・7グリッドで検出された。第67号住居跡と重複し、大部分が破壊されている。北東側には、第58号住居跡が位置する。

検出されたのは遺構北東壁付近である。方形或いは長方形プランを呈するものと思われる。北東辺は5.83 m、深さは0.30 m前後を測る。ピットは、1箇所検出された。P 21の深さは0.16 mを測る。北東コーナー付近の床面は段差を有し、軟弱である。壁溝は検出された部分では全周する。

炉跡は北東コーナーに位置する。地床炉と思われるが、浅い掘り込みで、長径0.43 m、短径0.36 mの楕円形の範囲で炉底が焼けていた。直上から焼石が出土した。

検出された部分が少ないため、遺物は非常に少なかった。

本住居跡の時期は、遺構平面形から黒浜式段階と考えられる。

第69号住居跡 (第32図)

本住居跡は調査区西端の遺構密集区域、C・D-7グリッドで検出された。第67・70号住居跡、第50号土壙と重複する。

壁と床面の一部が検出されたが、平面形、規模、主軸方位等は不明である。深さは、0.20 m前後を測る。ピット、壁溝は確認されなかった。床面は平坦であるが、硬化面は見られない。

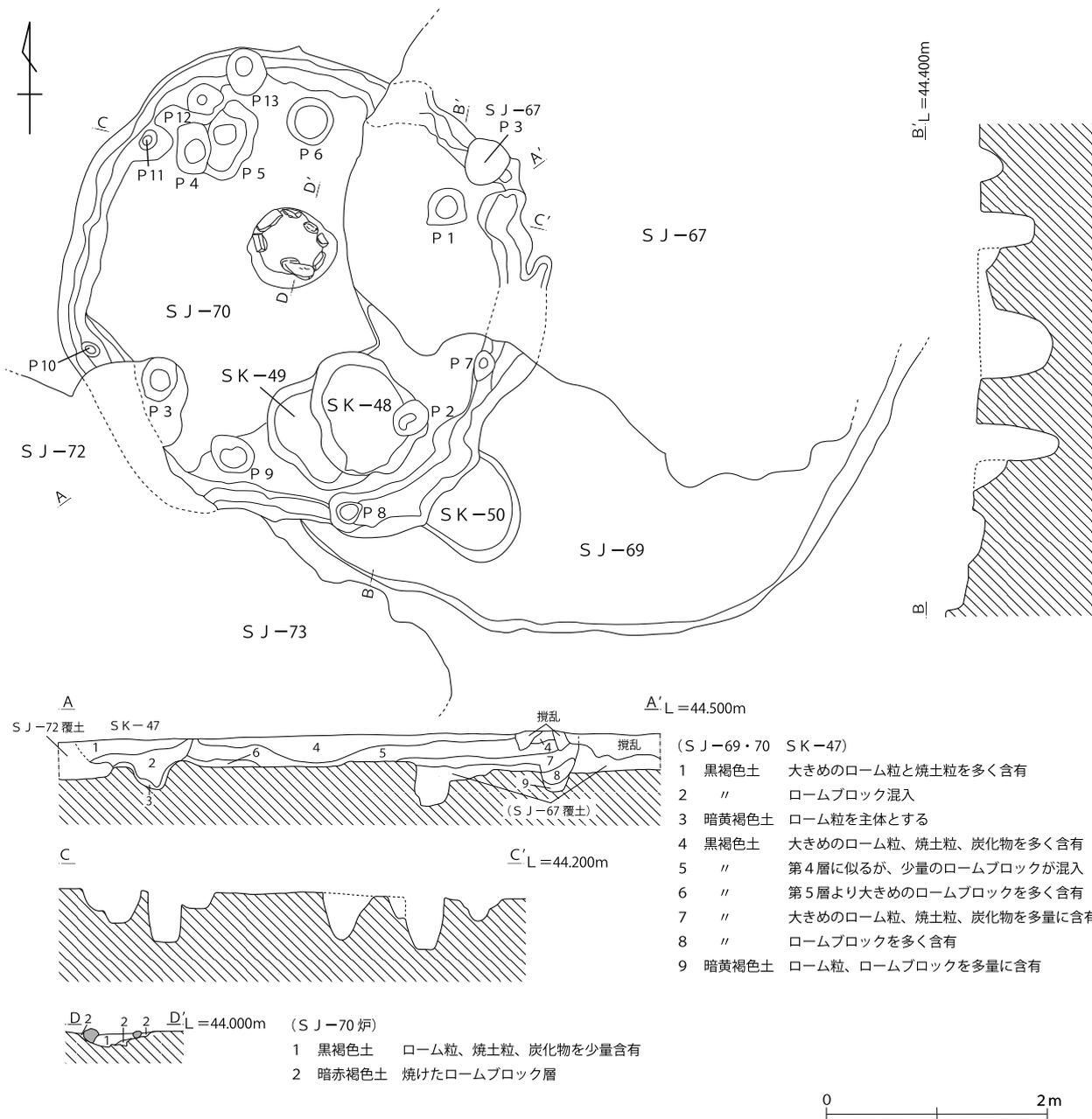
遺物量は非常に少なく、覆土内に散見される程度であった。

本住居跡の時期は、時期決定の資料を欠くため不明である。

第70号住居跡 (第32図)

本住居跡は調査区西端の遺構密集区域、C-7グリッドに位置する。東側で、第67・69号住居跡、西側で第71・72号住居跡と重複する。また、遺構南側に第47～50号土壙が重複している。

平面形は長径4.32 m、短径4.25 mのほぼ円形を呈する。深さは0.29 m前後を測る。主軸は主柱穴間の中間とした。方位は、N-11°Eを示す。ただし、炉跡の中軸線は、これと大きくずれる。ピットは13箇所検出されている。各々の深さは、P 1 = 0.47 m、P 2 = 0.73 m、P 3 = 0.64 m、P 4 = 0.44 m、P 5 = 0.56 m、P 6 = 0.11 m、P 7 = 0.15 m、P 8 = 0.28 m、P 9 = 0.28 m、P 10 = 0.19 m、P 11 = 0.12 m、P 12 = 0.26 m、P 13 = 0.33 mを測る。位置関係と深さから、主柱穴はP 1～4或いはP 5が該当すると思われる。床面は概ね平坦で、炉跡周辺は堅緻であった。第67号住居跡壁溝重複部分は貼床を施さず、そのまま踏み固めたようである。壁は外傾して立ち上がる。壁溝は未検出部分もあ



第 32 図 第 69・70 号住居跡

るが、全周するようである。

炉跡は遺構ほぼ中央に位置する。石囲炉である。平面形は長径 0.77 m、短径 0.75 m の円形の掘り込みに炉縁石を巡らす。深さは 0.13 m を測る。炉底は、よく焼けており、炉縁石も被熱痕跡が顕著であった。

遺物は比較的多く、第 5 層中にまとまりがあった。

本遺構の時期は、出土土器から加曾利 E II 式古段階と考えられる。

第 71 号住居跡 (第 29 図)

本住居跡は調査区西端の遺構密集区域、B・C-7 グリッドで検出された。周囲を第 66・70・72 号住居跡に囲まれており、炉跡と壁及び床面の一部が検出されたのみである。

炉跡と壁の距離から、比較的小規模な住居跡であったことが推定される。深さは第 66 号住居跡とほぼ同レベル、0.30 m 前後を測る。ピットは 1 箇所検出されている。深さは、P 13 = 0.54 m を測る。炉跡

との位置関係から、第 66 号住居跡内の P 9 と対になる可能性もある。床面は平坦で、炉跡周辺には硬化面も認められた。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

炉跡は石囲土器埋設炉で、径 0.66 m 前後の円形の掘り込みに炉縁石を巡らし、やや南に偏った位置に口縁部と同下半部欠いた深鉢を埋設している。土器内面に被熱痕跡が顕著である。

遺物は非常に少なく、炉埋設土器以外はまとまった出土は無かった。

本住居跡の時期は、炉跡埋設土器から加曾利 E II 式古段階と思われる。

第 72 号住居跡 (第 33 図)

本住居跡は調査区西端遺構密集区域の西壁にかかって検出された。C-7 グリッドに位置している。北から西にかけて、第 70・71・73 号住居跡、第 47 号土壙と重複する。

1/2 以上が調査区外にあるため、平面形は不明である。検出された北壁は長さ 3.55 m、深さ 0.38 m 前後を測る。主軸は炉跡の中軸線で、方位は N-15°-E を指す。ピットは 8 箇所検出された。各々の深さは、P 1 = 0.47 m、P 2 = 0.41 m、P 3 = 0.60 m、P 4 = 0.42 m、P 5 = 0.20 m、P 6 = 0.18 m、P 7 = 0.57 m、P 8 = 0.56 m を測る。壁との位置関係と深さから、P 1～3 が支柱穴と思われる。床面は平坦で、堅緻であった。壁は、やや外傾して立ち上がる。壁溝は東壁以外で検出されている。

炉跡は石囲炉で、調査区西壁にかかるため長径は不明、短径 0.75 m の掘り込みに炉縁石を巡らす。炉底は、よく焼けており、硬化していた。

出土遺物は比較的少ないが、炉跡北側から、口縁部約 1/2 を欠く深鉢が横倒しで出土している。

本住居跡の時期は、炉跡に近接して出土した土器により、加曾利 E I 式新段階と思われる。

第 73 号住居跡 (第 33 図)

本住居跡は調査区西端遺構密集区域の西壁にかかって検出された。C-7・8 に位置する。西側に、第 72 号住居跡が重複している。

大半が調査区外に在るため、平面形は不明であるが、長方形或いは方形を呈すると思われる。検出された東西辺は、4.56 m、深さは 0.58 m を測る。主軸は炉跡の中軸線で、方位は N-32°-E を指す。ピットは 17 箇所検出された。各々の深さは、P 9 = 0.40 m、P 10 = 0.48 m、P 11 = 0.41 m、P 12 = 0.45 m、P 13 = 0.34 m、P 14 = 0.19 m、P 15 = 0.40 m、P 16 = 0.36 m、P 17 = 0.06 m、P 18 = 0.35 m、P 19 = 0.34 m、P 20 = 0.15 m、P 21 = 0.21 m、P 22 = 0.42 m、P 23 = 0.36 m、P 24 = 0.53 m、P 25 = 0.38 m を測る。位置関係と深さから、P 9～11 が支柱穴と思われるが、壁溝から 1 回の建て替えが考えられるため、やや内側に位置する P 13・16 も旧住居跡の支柱穴の可能性もある。床面は平坦で、堅緻であった。壁は外傾して立ち上がる。壁溝は部分的に 2 条有り、建て替えが想定される。

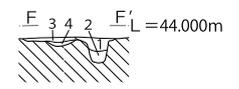
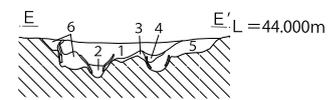
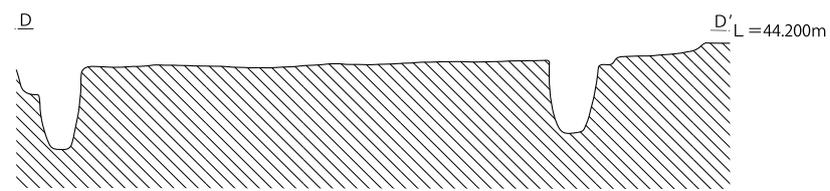
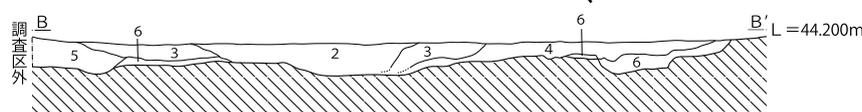
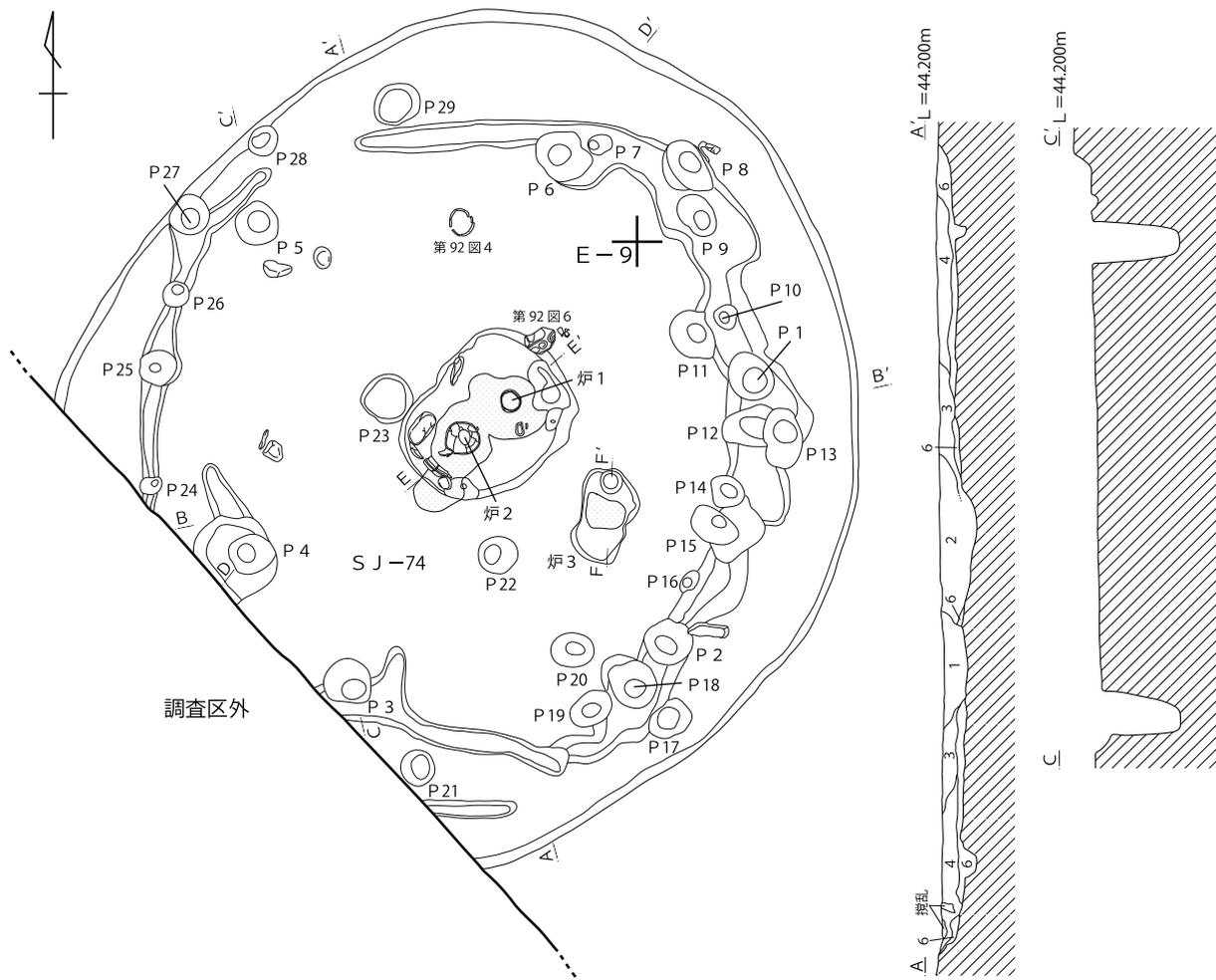
炉跡は遺構の北壁寄りに位置する。地床炉である。不整楕円形の掘り込みは浅く、炉底はよく焼けていた。長径 1.04 m、短径 0.55 m、深さは 0.06 m 前後を測る。

遺構北側の床面直上から、土器 2 個体がつぶれた状態で出土している。また、覆土上層から遺構の時期と異なる深鉢の同下半部が、破損した状態で出土した。覆土内に埋設された屋外埋甕と思われる。

本住居跡の時期は、覆土下位で出土した土器により黒浜式段階と思われる。

第 74 号住居跡 (第 34 図)

本住居跡は調査区南端の西壁にかかって検出された。D・E-8・9 グリッドに位置する。北側には複数の土壙が散在する。他の遺構との重複関係は無い。



- (S J-74 炉1・2)
- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有
 - 2 暗茶褐色土 第1層より焼土粒を多く含有
 - 3 暗赤褐色土 焼土粒、焼土ブロックを主体とする 硬質
 - 4 黒褐色土 焼土粒をほとんど含まない 軟質
 - 5 " 焼土粒、焼土ブロックを多く含有
 - 6 " 焼けたロームブロックを多く含有

- (S J-74 炉3)
- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を多く含有
 - 2 暗茶褐色土 ロームブロックを多量に含有
 - 3 黒褐色土 焼土ブロックを含有
 - 4 暗黄褐色土 焼けたローム層

- (S J-74)
- 1 明黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有 軟質
 - 2 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物、ロームブロックを多く含有 遺物包含が顕著
 - 3 暗茶褐色土 ローム粒を多く、焼土粒、炭化物を少量含有 第2層より遺物包含顕著
 - 4 褐色土 ローム粒を多量に含有 焼土粒、炭化物は含まない 緻密
 - 5 暗褐色土 ローム粒を少量含有 焼土粒、炭化物は含まない
 - 6 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含有



第34図 第74号住居跡

遺構の南壁が調査区外にあるが、平面形は概ね楕円形を呈する。長径推定 6.68 m、短径 6.04 m、深さ 0.14 m 前後を測る。主軸は炉跡の中軸線で、方位は $N - 59^\circ - E$ を示す。ピットは 29 箇所検出された。各々の深さは、 $P 1 = 0.52 \text{ m}$ 、 $P 2 = 0.62 \text{ m}$ 、 $P 3 = 0.63 \text{ m}$ 、 $P 4 = 0.63 \text{ m}$ 、 $P 5 = 0.68 \text{ m}$ 、 $P 6 = 0.57 \text{ m}$ 、 $P 7 = 0.44 \text{ m}$ 、 $P 8 = 0.63 \text{ m}$ 、 $P 9 = 0.14 \text{ m}$ 、 $P 10 = 0.19 \text{ m}$ 、 $P 11 = 0.56 \text{ m}$ 、 $P 12 = 0.14 \text{ m}$ 、 $P 13 = 0.70 \text{ m}$ 、 $P 14 = 0.39 \text{ m}$ 、 $P 15 = 0.35 \text{ m}$ 、 $P 16 = 0.10 \text{ m}$ 、 $P 17 = 0.31 \text{ m}$ 、 $P 18 = 0.53 \text{ m}$ 、 $P 19 = 0.34 \text{ m}$ 、 $P 20 = 0.45 \text{ m}$ 、 $P 21 = 0.59 \text{ m}$ 、 $P 22 = 0.56 \text{ m}$ 、 $P 23 = 0.13 \text{ m}$ 、 $P 24 = 0.16 \text{ m}$ 、 $P 25 = 0.68 \text{ m}$ 、 $P 26 = 0.50 \text{ m}$ 、 $P 27 = 0.44 \text{ m}$ 、 $P 28 = 0.24 \text{ m}$ 、 $P 29 = 0.40 \text{ m}$ を測る。位置関係と深さから、主柱穴は $P 1 \sim 6$ とと思われるが、少なくとも 1 回の建て替えが想定される。その側の壁に対応する主柱穴は、 $P 8 \cdot 13 \cdot 18 \cdot 21$ 、1 箇所は調査区外にあり、 $P 25 \cdot P 29$ につながり、拡張をもって柱が 1 本増加している。床面は概ね平坦で、壁溝内側は比較的堅緻であった。壁は、外傾して立ち上がる。壁溝は、壁の内側で検出された北壁の一部と、入口部と思われる部分を除いて全周する。

炉跡は 3 箇所検出された。炉跡 1 と炉跡 2 は、長径 1.38 m、短径 1.13 m の長楕円形の掘り込みに構築されている。炉跡 1 は掘り込み北寄りに位置し、土器埋設炉或いは炉縁石が抜き取られた石囲土器埋設炉と思われる。土器型式とセクションの状況から、炉跡 1 の方が古いと考えられるため、後者の可能性も否定できない。埋設土器周辺はよく焼けており、土器自体も被熱による劣化が著しい。深さは 0.25 m を測る。炉跡 2 は掘り込みの南壁付近に土器が埋設にされており、南側に炉縁石の一部を残す。石囲土器埋設炉であるが、炉縁の一部に土器片を使用している（第 92 図 5）。炉縁石と埋設土器は、被熱による劣化が顕著で、被熱痕跡は南壁外に及んでいる。深さは 0.28 m を測る。

炉跡 3 は炉跡 1・2 の南東側に位置する。地床炉である。長径 0.74 m、短径 0.36 m の不整楕円形の掘り込み中央部が、焼けて硬化している。深さは 0.06 m 前後を測る。

出土遺物は覆土第 2～4 層中に顕著であったが、覆土が薄いため比較的少ない。

本住居跡の時期は、炉跡 1・2 の埋設土器から加曾利 E II 式新段階と考えられる。

掘立柱建物跡

第 5 号掘立柱建物跡（第 20 図）

本建物跡は調査区中央やや南寄り、D-6 グリッドで検出された。第 58 号住居跡、第 2 号性格不明遺構と重複する。

2×2 間の方形側柱建物跡である。全体の規模は桁行 5.34 m、梁行 5.95 m、主軸方位は $N - 2^\circ - E$ を示す。柱穴の平面形は楕円形が主体で、長径 0.60～0.75 m、短径 0.55～0.60 m、深さは 0.05～0.35 m を測る。東側桁行の中間 1 箇所を欠き、南側梁行の中間 1 箇所は風倒木痕により失われている。柱痕は検出されなかった。

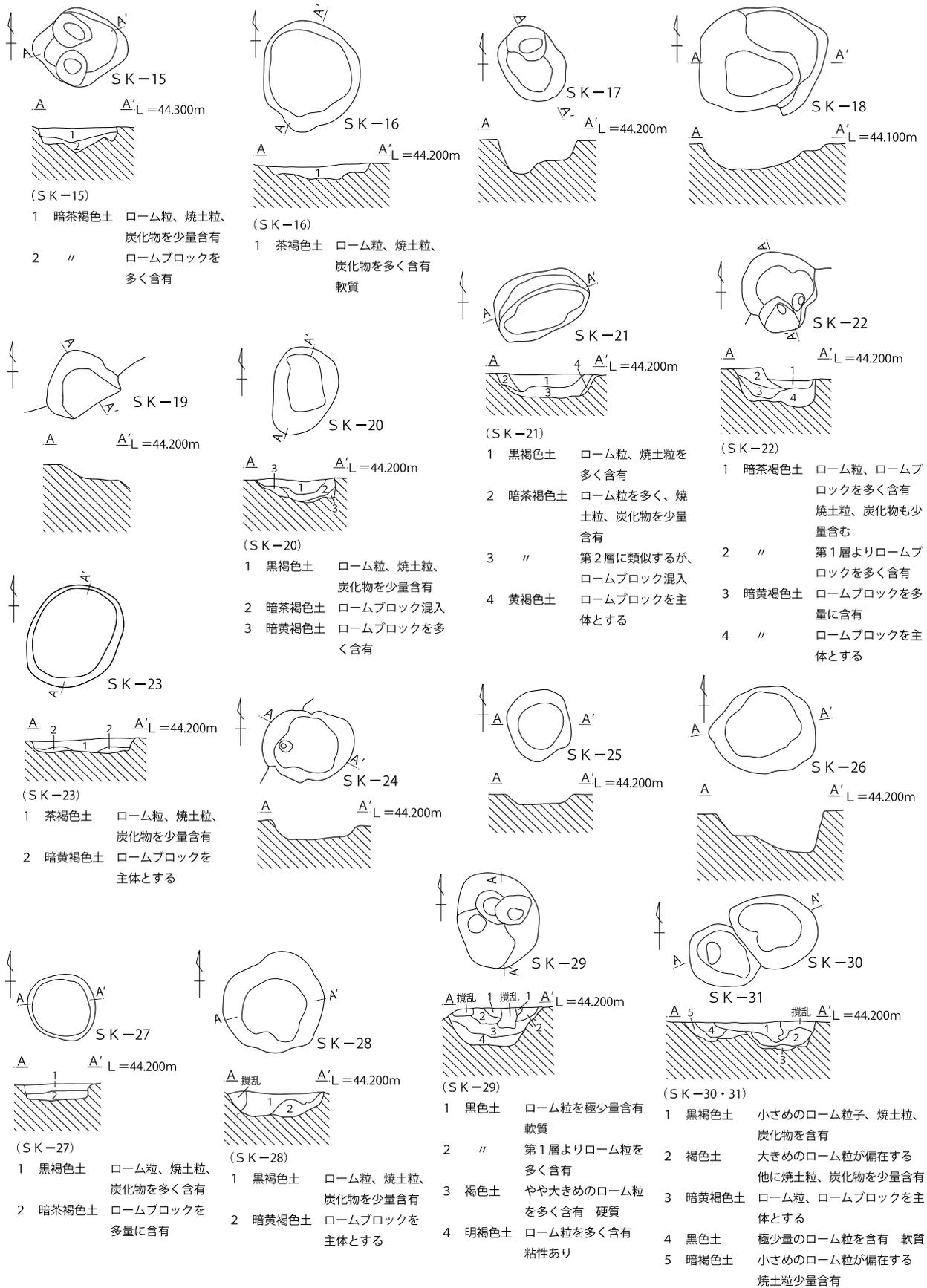
出土遺物は覆土に混入した縄文土器のみで、時期は不明である。

土壇

第 15 号土壇（第 35 図）

本土壇は調査区北側、D-3 グリッドに位置する。

平面形は不整楕円形で、長径 1.03 m、短径 0.86 m、深さは 0.26 m を測る。壇底は中心に向かって傾



第35図 土壌 (1)

斜する。2箇所のピットが重複しているが、土壌に伴うものかは不明である。覆土は2層に分かれる。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第16号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北側、D-3グリッドに位置する。

平面形は、やや不整な楕円形プランを呈する。長径1.18 m、短径1.02 m、深さは0.15 m前後を測る。壙底には凹凸が認められる。覆土は1層の単純層である。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土しているが、土壌自体は覆土の状況から奈良・平安時代のものと思われる。

第17号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北側、C・D-4グリッドに位置する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径0.85 m、短径0.62 m、深さは0.37 m前後を測る。北側にピットが重複するが、本土壙に伴うものかは不明である。壙底は北側に傾斜する。

遺物は縄文土器片が若干出土している。

第18号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北側、D-3グリッド、第40号住居跡内で検出された。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径1.48 m、短径1.11 m、深さは0.25 m前後を東側にテラス状の段差を有する。壙底は鍋底状を呈する。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第19号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北端、D-2グリッドに位置し、第4号溝状遺構に重複する。

平面形は不明で、残存部は径0.71 m、深さは0.17 mを測る。壙底は平坦である。

出土遺物は皆無である。

第20号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北側、E-3グリッドに位置する。

平面形は不整楕円形プランで、長径0.97 m、短径0.68 m、深さは0.26 m前後を測る。壙底には凹凸が認められる。覆土は3層に分かれる。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第21号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北側、D-3グリッドに位置し、北側に第20号土壙が隣接する。

平面形は不整な楕円形プランを呈する。長径1.06 m、短径0.67 m、深さは0.24 m前後を測る。断面形は鍋底状を呈する。覆土は4層に分かれる。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第22号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北側、C-4グリッドに位置し、第49号住居跡に重複している。

平面形はやや不整な円形プランを呈する。径0.87 m、深さは0.38 m前後を測る。南側に2箇所のピットが重複する。覆土は4層に分かれる。

遺物は縄文土器片が若干出土している。

第 23 号土壙 (第 35 図)

本土壙は調査区北側、E-3 グリッドに位置する。

平面形は楕円形プランを呈し、長径 1.12 m、短径 0.94 m、深さは 0.16 m 前後を測る。壙底は平坦で、断面形は台形を呈する。覆土は 2 層に分かれる。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土しているが、土壙自体は覆土の状況から奈良・平安時代のものと思われる。

第 24 号土壙 (第 35 図)

本土壙は調査区中央北寄りの D-4 グリッドに位置し、第 51 号住居跡に重複する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径 0.95 m、短径 0.76 m、深さは 0.18 m 前後を測る。壙底は平坦で、断面形は台形を呈する。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第 25 号土壙 (第 35 図)

本土壙は調査区中央やや北寄り、D-4 グリッドに位置する。南西側には第 51 号住居跡が隣接する。

平面形はやや不整な楕円形プランを呈する。長径 0.78 m、短径 0.65 m、深さは 0.10 m 前後を測る。断面形は鍋底状を呈する。

出土遺物は皆無である。

第 26 号土壙 (第 35 図)

本土壙は調査区中央やや北寄り、E-4 グリッドに位置する。南側に第 52 号住居跡が隣接する。

平面形は、やや不整な楕円形プランを呈する。長径 1.14 m、短径 0.92 m、深さは 0.45 m 前後を測る。遺構西側はテラス状を呈する。壙底は東側に傾斜している。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第 27 号土壙 (第 35 図)

本土壙は調査区中央やや北寄り、E-4 グリッドに位置する。南側に第 52 号住居跡が隣接する。

平面形は円形プランを呈する。径 0.70 m 前後、深さは 0.17 m 前後を測る。壙底は平坦で、断面形は台形を呈する。覆土は 2 層に分かれる。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第 28 号土壙 (第 35 図)

本土壙は調査区北西側、C-3 グリッドに位置し、北側に第 48 号住居跡が隣接する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径 1.18 m、短径 1.02 m、深さは 0.25 m 前後を測る。壙底には凹凸があり、断面形は鍋底状を呈している。覆土は 2 層に分かれる。

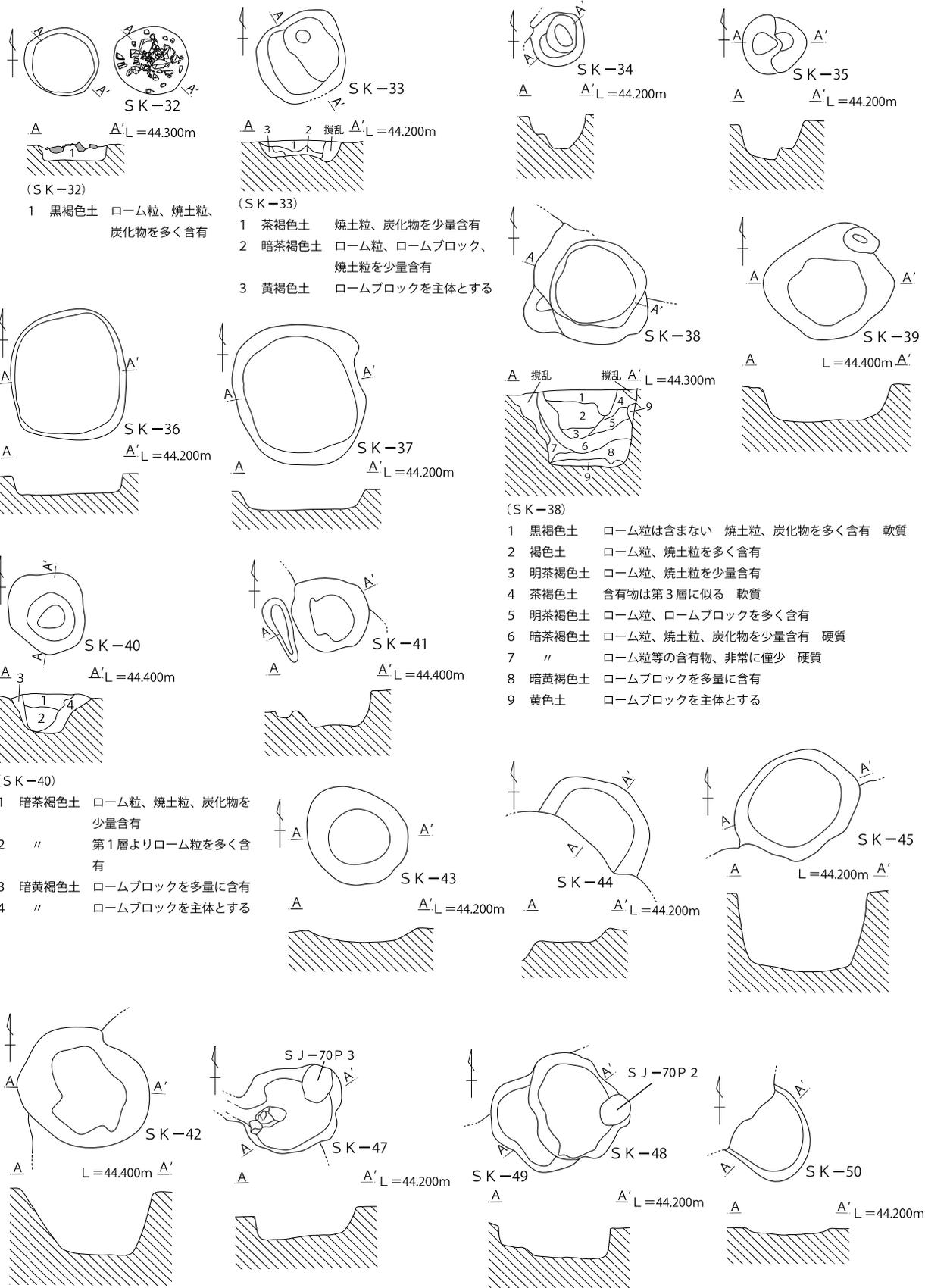
遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第 29 号土壙 (第 35 図)

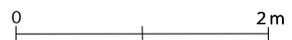
本土壙は調査区北西側、C-4 グリッドに位置し、北側で第 49 号住居跡と接する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径 1.02 m、短径 0.88 m、深さは 0.42 m 前後を測る。壙底には浅いピット 2 箇所が認められる。覆土は 4 層に分かれる。

遺物は縄文土器片が若干出土している。



第36図 土壌 (2)



第30号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北西側、C-4グリッドに位置し、西側で第31号土壙と重複する。

平面形は、やや不整な楕円形プランを呈する。長径0.96 m、短径0.80 m、深さは0.29 m前後を測る。断面形は鍋底状を呈している。覆土は3層に分かれる。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第31号土壙 (第35図)

本土壙は調査区北西側、C-4グリッドに位置する。東側に第30号土壙が重複している。

平面形は不整楕円形プランで、長径0.74 m、短径推定0.70 m、深さは0.14 m前後を測る。断面形は丸みを帯びた鍋底状を呈する。覆土は2層に分かれる。

出土遺物は皆無である。

第32号土壙 (第36図)

本土壙は調査区北西側、C-4グリッドに位置する。西側には第3号屋外埋甕が隣接する。

平面形は楕円形プランを呈する。長径0.87 m、短径0.70 m、深さは0.16 m前後を測る。断面形は台形を呈し、壙底は平坦である。覆土は1層の単純層である。

遺物は縄文前期土器と礫で、量的に多い。覆土上位に集中して出土している。

第33号土壙 (第36図)

本土壙は調査区北西側、C-4グリッドに位置する。

平面形は不整円形プランで、径0.90 m前後、深さは0.22 m前後を測る。断面形は台形を呈するが、中央部が盛り上がっている。覆土は3層に分かれる。

出土遺物は皆無である。

第34号土壙 (第36図)

本土壙は調査区西側、B-5グリッドに位置する。西側で第61号住居跡と接する。

平面形は不整円形プランを呈する。径0.55 m前後、深さは0.38 m前後を測る。西側にテラス状の段差を有する。断面形は柱穴状を呈している。

出土遺物は皆無である。

第35号土壙 (第36図)

本土壙は調査区西側、B-5グリッドに位置する。西側に、第61号住居跡が近接する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径0.67 m前後、短径0.60 m、深さは0.45 m前後を測る。断面形は柱穴状を呈し、平面的には2個のピットが重複しているようにも見える。

出土遺物は皆無である。

第36号土壙 (第36図)

本土壙は調査区西側、B-5グリッドに位置する。

平面形は隅丸長方形プランを呈する。長径1.33 m、短径1.19 m、深さは0.21 m前後を測る。断面形は長方形に近い台形を呈し、壙底は平坦で堅緻である。

遺物は縄文土器の小破片が出土しているが、調査時の所見では奈良・平安時代のものとしている。

第37号土壙 (第36図)

本土壙は調査区西側、B-5グリッドに位置する。南側に、第62号住居跡が隣接する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径 1.50 m、短径 1.38 m、深さは 0.23 m 前後を測る。断面形は台形を呈し、壙底は平坦で堅緻である。

遺物は縄文土器の小破片が出土しているが、調査時の所見では、奈良・平安時代のものとしている。

第 38 号土壙 (第 36 図)

本土壙は調査区中央やや西寄り、C-5 グリッドに位置し、第 56 号住居跡の南壁に重複している。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径 1.32 m、短径 1.12 m、深さは 0.82 m 前後を測る。断面形は東壁が攪乱を受けているが、円筒状を呈する。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第 39 号土壙 (第 36 図)

本土壙は調査区中央やや西寄り、C-5 グリッドにあり、北側に第 55・56 号住居跡が位置する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径 1.34 m、短径 1.22 m、深さは 0.36 m 前後を測る。断面形は東角の取れた台形状を呈し、壙底は平坦である。北壁に、ピットが重複する。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土している。

第 40 号土壙 (第 36 図)

本土壙は調査区中央やや西寄り、D-5 グリッドに位置し、北側に第 55 号住居跡が近接する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径 0.86 m、短径 0.79 m、深さは 0.40 m 前後を測る。断面形は、上位が大きく外傾する台形状を呈する。覆土は 4 層に分かれる。

遺物は縄文土器片が若干出土している。

第 41 号土壙 (第 36 図)

本土壙は調査区中央やや西寄り、C-5・6 グリッドに位置し、第 60 号住居跡の東壁に重複する。

平面形は不整円形プランを呈する。径 0.78 m 前後、深さは 0.39 m 前後を測る。断面形は台形状を呈する。

出土遺物は皆無である。

第 42 号土壙 (第 36 図)

本土壙は調査区中央やや西寄り、C・D-6 グリッドに位置し、第 59 号住居跡の北西壁に重複する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径 1.40 m、短径 1.14 m、深さは 0.65 m 前後を測る。断面形は台形状で、壙底は平坦である。

遺物は縄文土器片が出土している。

第 43 号土壙 (第 36 図)

本土壙は調査区西寄り、C-6 グリッドに位置する。東側に、第 60 号住居跡が隣接する。

平面形は円形プランを呈する。径 0.98 m 前後、深さは浅く、0.14 m 前後を測る。断面形は鍋底状で、壙底は平坦である。

出土遺物は、皆無である。

第 44 号土壙 (第 36 図)

本土壙は調査区西寄り、C-6 グリッドに位置し、第 64 号住居跡の北東壁に重複する。

平面形は約 1/2 が破壊されているため不明である。残存部の径は 1.20 m、深さは 0.16 m 前後を測る。断面形は鍋底状を呈している。

遺物は縄文土器片が出土している。

第45号土壙 (第36図)

本土壙は調査区西寄り、B・C-6グリッドに位置し、第64号住居跡の北壁に重複する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径1.45m、短径推定1.02m、深さは0.82m前後を測る。断面形は台形状で、壙底はわずかに丸みを帯びる。

遺物は縄文土器の小破片が少量出土している。

第46号土壙 (第20図)

本土壙は調査区ほぼ中央、D-6グリッドに位置し、第58号住居跡、第2号性格不明遺構が近接する。

平面形は楕円形プランを呈する。長径0.94m、短径0.70m、深さは0.25m前後を測る。断面形は鍋底状で、壙底北側に1箇所のピットを有する。

遺物は縄文前期土器片が出土している。

第47号土壙 (第36図)

本土壙は調査区南西側、C-7グリッドに位置し、第70・72号住居跡に重複する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径1.10m、短径1.02m、深さは0.30m前後を測る。断面形は箱状で、壙底は西側にわずかに傾斜する。北壁には第70号住居跡P3が重複する。

遺物は縄文土器の小破片と礫が出土している。

第48号土壙 (第36図)

本土壙は調査区南西側、C-7グリッドで検出された。第70号住居跡、第49号土壙に重複する。

平面形は不整楕円形プランを呈する。長径1.15m、短径1.01m、深さは0.33m前後を測る。断面形は台形状で、壙底は平坦である。東壁には第70号住居跡P2が重複する。

遺物は縄文土器の小破片が少量出土している。

第49号土壙 (第36図)

本土壙は調査区南西側、C-7グリッドで検出された。第70号住居跡、第48号土壙に重複する。

平面形は東側が第48号土壙と重複するため不明である。残存部の長径は1.08m、深さは0.21m前後を測る。断面形は台形状で、壙底は平坦である。

遺物は縄文土器の小破片が少量出土している。

第50号土壙 (第36図)

本土壙は調査区南西側、C-7グリッドに位置し、第69・70号住居跡に重複する。

平面形は北側が第70号住居跡に破壊されているため不明である。残存部の短径は0.84m、深さは浅く、0.09m前後を測る。断面形は鍋底状で、壙底は平坦である。

出土遺物は皆無である。

第51号土壙 (第37図)

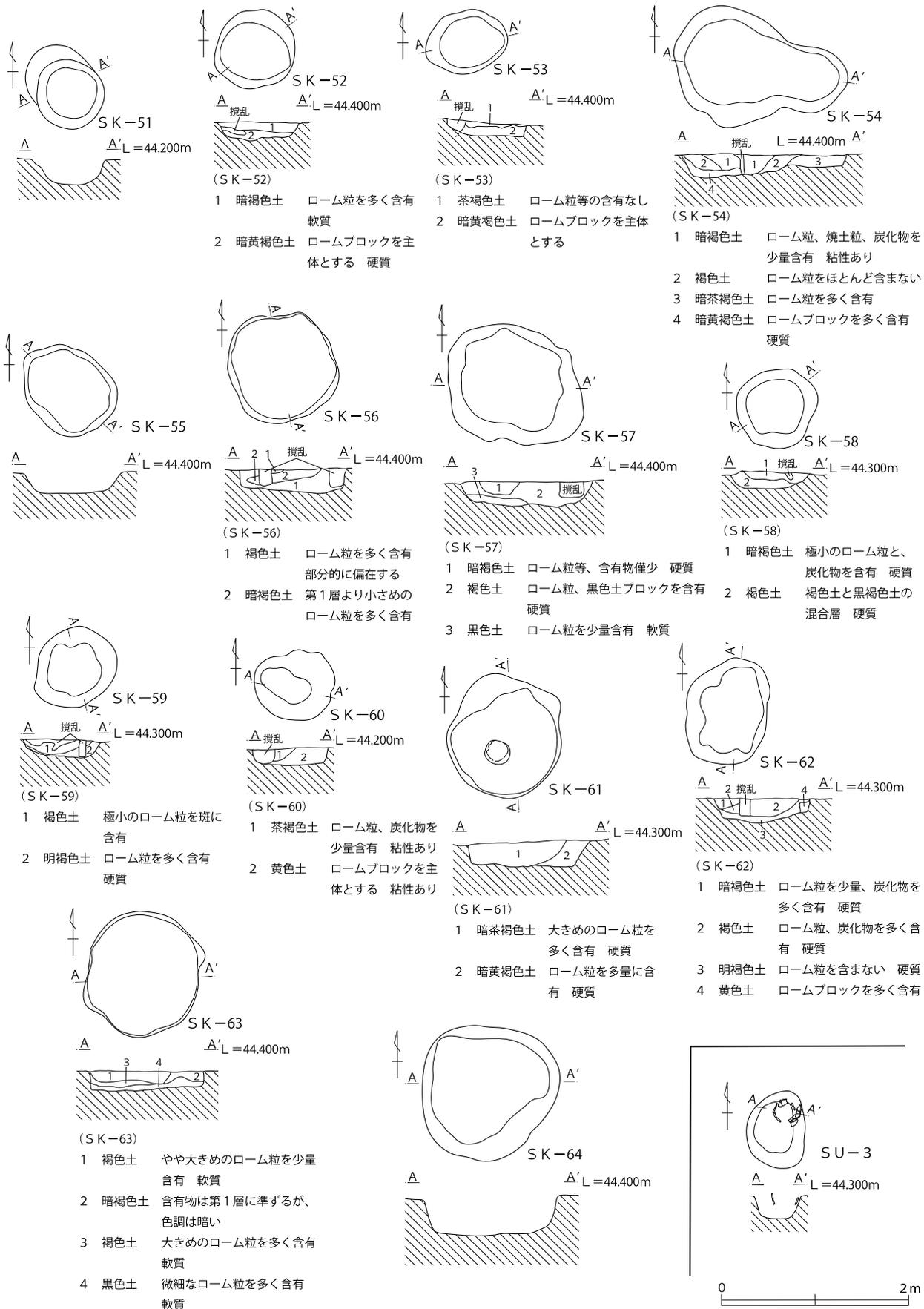
本土壙は調査区東側、F-5グリッドに位置する。南西側に第57号住居跡が隣接する。

平面形は楕円形プランを呈し、北側にテラス状の段差を有する。長径0.93m、短径は0.71m、深さは0.36m前後を測る。断面形は鍋底状を呈する。

出土遺物は皆無である。

第52号土壙 (第37図)

本土壙は調査区南東側、E-7グリッドに位置する。南側に、第53号土壙が隣接する。



第37図 土壌(3)・第3号単独埋甕

平面形は円形プランを呈し、径 0.86 m 前後、深さは 0.20 m 前後を測る。断面形は鍋底状を呈する。覆土は、2 層に分かれる。

出土遺物は皆無である。

第 53 号土壙 (第 37 図)

本土壙は調査区南東側、E-7 グリッドに位置する。北側に、第 53 号土壙が隣接する。

平面形はやや不整な楕円形プランを呈し、長径 0.91 m、短径 0.65 m、深さは 0.14 m 前後を測る。断面形は台形状を呈するが、西側壁は攪乱を受けている。覆土は 2 層に分かれる。

出土遺物は皆無である。

第 54 号土壙 (第 37 図)

本土壙は調査区南側、E-7 グリッドに位置する。西側に第 55・56 号土壙が隣接する。

平面形は不整楕円形プランを呈するが、2 基の土壙が重複している可能性がある。長径 1.84 m、西側の短径 1.26 m、東側は 0.69 m、深さは 0.14 m 前後を測る。断面形は台形状を呈するが、東西で段差がある。覆土は 4 層に分かれる。この内、第 3 層が別土壙の覆土と思われる。

遺物は縄文土器片が出土しているが、調査時の所見から、奈良・平安時代のものと判断した。

第 55 号土壙 (第 37 図)

本土壙は調査区南側、D・E-7 グリッドに位置する。西及び南側に、第 54・56 号土壙が隣接する。

平面形はやや不整な楕円形プランを呈し、長径 1.08 m、短径 0.86 m、深さは 0.14 m 前後を測る。断面形は台形状を呈し、壙底は平坦である。

遺物は縄文土器片が出土しているが、調査時の所見から、第 54 号土壙と同様、奈良・平安時代のものと判断した。

第 56 号土壙 (第 37 図)

本土壙は調査区南側、E-7・8 グリッドに位置する。北側には第 54・55 号土壙が隣接する。

平面形はやや不整な楕円形プランを呈し、長径 1.22 m、短径 1.14 m、深さは 0.28 m 前後を測る。断面形は箱状を呈し、壙底は若干高低さがある。覆土は 2 層に分かれる。

遺物は縄文土器の大形破片が出土しているが、調査時の所見から、第 54・55 号土壙と同様、奈良・平安時代のものと判断した。

第 57 号土壙 (第 37 図)

本土壙は調査区南側、D-7 グリッドに位置する。西側に第 59～61 号土壙が隣接する。

平面形は不整楕円形プランを呈し、長径 1.52 m、短径 1.30 m、深さは 0.25 m 前後を測る。断面形は鍋底状を呈し、壙底は若干高低差がある。覆土は 3 層に分かれる。

遺物は縄文土器の小破片が出土しているが、調査時の所見から、第 54～56 号土壙と同様、奈良・平安時代のものと判断した。

第 58 号土壙 (第 37 図)

本土壙は調査区南東側、D-7・8 グリッドに位置する。南側に、第 57・60・61 号土壙が隣接する。

平面形は、やや不整な円形プランを呈し、径 0.86 m 前後、深さは 0.18 m 前後を測る。断面形は鍋底状を呈し、壙底は丸みを帯びる。覆土は、2 層に分かれる。

出土遺物は皆無である。

第59号土壙 (第37図)

本土壙は調査区南側、D-7・8グリッドに位置する。南側に第57・60・61号土壙が隣接する。

平面形は不整楕円形プランを呈し、長径0.96m、短径0.82m、深さは0.20m前後を測る。断面形は鍋底状を呈し、壙底は平坦である。覆土は2層に分かれる。

出土遺物は皆無である。

第60号土壙 (第37図)

本土壙は調査区南側、D-7グリッドに位置する。東側に第57・58・60号土壙、西側に第61号土壙が隣接する。

平面形は不整楕円形プランを呈し、長径0.86m、短径0.79m、深さは0.18m前後を測る。断面形は台形状を呈し、壙底は平坦である。覆土は2層に分かれる。

出土遺物は皆無である。

第61号土壙 (第37図)

本土壙は調査区南側、D-8グリッドに位置する。東側に第58～60号土壙、西側に第62号土壙が隣接する。

平面形は不整円形プランを呈し、径1.25m前後、短径0.79m、深さは0.28m前後を測る。断面形は不整な台形状を呈する。壙底は平坦で、比較的堅緻であった。中央やや西寄りにピットが穿たれている。覆土は2層に分かれる。

遺物は、縄文土器片が少量出土しているが、調査時の所見から、奈良・平安時代のものと判断した。

第62号土壙 (第37図)

本土壙は調査区南側、D-8グリッドに位置する。北側に第57～61号土壙が隣接する。

平面形は不整楕円形プランを呈し、長径1.15m前後、短径0.86m、深さは0.29m前後を測る。断面形は鍋底状を呈する。壙底は丸みを帯びる。覆土は2層に分かれる。

遺物は縄文土器片が少量出土しているが、第61号土壙と同様、調査時の所見から奈良・平安時代のものと判断した。

第63号土壙 (第37図)

本土壙は調査区南側、D-8グリッドに位置する。北側から西側にかけて、第57～62号土壙が分布している。

平面形は不整円形プランを呈し、径1.32m前後、深さは0.20m前後を測る。断面形は箱状を呈し、壙底は平坦であった。覆土は4層に分かれる。

遺物は縄文土器片が少量出土しているが、調査時の所見から第61・62号土壙と同様、奈良・平安時代のものと判断した。

第64号土壙 (第37図)

本土壙は調査区南端、E-8グリッドで検出された。西側に、第74号住居跡が位置する。

平面形は不整円形プランを呈し、径1.48m前後、深さは0.38m前後を測る。断面形は角の取れた台形状を呈し、壙底は平坦であった。

遺物は縄文土器片が少量出土しているが、調査時の所見から、第61～63号土壙と同様、奈良・平安時代のものと判断した。

性格不明遺構

第1号性格不明遺構（第10図）

本遺構は調査区北端、C-3グリッドに位置する。第48号住居跡と重複する。時期は不明であるが、覆土の状況や全体形から、中世以降の地下式坑の可能性が高い。

平面形は不整形円で、南側に張り出し状の段差を有する。主体部は長径2.92 m、短径2.23 m、短径と張り出し部を合わせると、3.10 mを測る。断面形は部分的にオーバーハングする袋状を呈し、深さは1.00 m前後を測る。床面は中央部がやや高く、全体的に軟弱であった。ピット等の屋内施設は、検出されていない。

遺物は第11層中に多量の礫が検出されている他は、縄文土器の小破片が若干出土している。

第2号性格不明遺構（第20図）

本遺構は調査区中央やや南寄り、D・E-6グリッドに位置する。第58号住居跡、第5号掘立柱建物跡と重複している。遺構確認時、平面形と遺構北東コーナー付近で検出された焼石を伴う炉跡状の施設から縄文時代前期の遺構と判断したが、壁溝状の施設から前期と中期の土器片が混在して出土したため、詳細時期不明の性格不明遺構とした。

平面形は不整な方形を呈する。規模は長辺8.35 m、短辺8.31 m、外周の溝は0.60～0.90 mと幅広く、深さは0.40～0.50 mを測る。ピットは20箇所検出された。各々の深さは、P10 = 0.57 m、P11 = 0.37 m、P12 = 0.08 m、P13 = 0.10 m、P14 = 0.12 m、P15 = 0.18 m、P16 = 0.39 m、P17 = 0.38 m、P18 = 0.34 m、P19 = 0.13 m、P20 = 0.26 m、P21 = 0.26 m、P22 = 0.59 m、P23 = 0.52 m、P24 = 0.68 m、P25 = 0.39 m、P26 = 0.60 m、P27 = 0.11 m、P28 = 0.16 m、P29 = 0.21 mを測る。柱穴たる深度を有するものも散見されるが、規則的な配置は見出せない。床面は概ね平坦であるが、硬化面は認められない。

炉跡状の施設は、北東コーナーで検出された。炉跡自体は掘り込まれておらず、床面が長径0.53 m、短径推定0.40 mの楕円形範囲で焼けていた。北東側で焼石が重なって検出されている。

遺物は縄文土器片が外周の壁溝状の施設内から出土しているが、複数の時期にまたがり、時期を特定するに到らなかった。

単独埋甕

第1号単独埋甕（第4図）

本埋甕は調査区北端、D-2グリッドに位置する。第37号住居跡の覆土内で検出された。

埋設されていた土器は、比較的小型の深鉢で、胴部中位が残存する。埋設状態は正位である。明確な掘り込みは検出されなかった。埋設されていた土器は、加曽利EⅢ式新段階のものである。

第2号単独埋甕（第5図）

本埋甕は調査区北側、D-3グリッドに位置する。第40号住居跡の覆土内で検出された。

埋設されていた土器は、深鉢の胴下半部で底部までが残存する。正位で埋設されていた。掘り込みは、第40号住居跡の床面を穿っており、土器とほぼ同じ規模であった。埋設されていた土器は、加曽利EⅢ式新段階と思われる。

第3号单独埋甕（第37図）

本埋甕は調査区北西側、C-4グリッドに位置する。第32号土壌に隣接して、単独で検出された。

土器は深鉢の口縁部から胴上位で、土壌状の掘り込みの北側に埋設されていた。埋設状態は正位である。掘り込みの規模は、長径0.82 m、短径0.61 m、深さは0.26 mを測る。埋設された土器は加曾利EⅢ式並行と思われる。

第4号单独埋甕（第25図）

本埋甕は調査区西側、C-5グリッドに位置する。第62号住居跡覆土内、炉跡脇で検出された。

埋設されていた土器は深鉢で、口縁部と胴部の大部分を欠く。埋設状態は横位である。第62号住居跡出土土器とは時期が異なるため、屋外埋甕とした。掘り込みは検出されなかった。埋設されていた土器は、加曾利EⅣ式段階と思われる。

第5号单独埋甕（第26図）

本埋甕は調査区西側、B-6グリッドに位置する。第63号住居跡覆土上位で検出された。

埋設されていた土器は、深鉢で胴下半部から底部が残存する。埋設状態は斜位である。第63号住居跡の時期とは異なるため、屋外埋甕とした。セクションベルトにかかっていたため、断面鍋底状の掘り込みが検出されている。埋設されていた土器は、加曾利EⅢ式新段階と思われる。

第6号单独埋甕（第26図）

本埋甕は調査区西側、B-6グリッドに位置する。第63号住居跡の覆土中位で検出された。

埋設されていた土器は、深鉢で口縁部から胴上位が残存する。埋設状態は正位である。第63号住居跡の時期とは明らかに異なるため、屋外埋甕と判断した。埋設されていた土器は、加曾利EⅢ式新段階のものである。

溝

第3号溝（第4図）

本遺構は調査区北端、D-2グリッドで検出された。北壁は調査区外にかかる。南側には第4号溝状遺構、第37・38号住居跡が位置する。

北壁上位面が調査区外にあるため、幅は不明である。溝底幅は0.43 m前後、深さは0.55 m前後を測る。断面形は葉研状を呈している。

遺物は縄文土器の小破片のみで、時期を決定し得る資料は出土していない。

第4号溝（第4図）

本遺構は調査区北端、D-2グリッドで検出され、第3号溝状遺構と並走し、第37・38号住居跡、第19号土壌と重複する。

確認面の幅は0.52～0.84 m、溝底幅は0.12～0.26 m、深さは0.24 m前後を測る。断面形は略葉研状を呈している。

遺物は縄文土器の小破片のみで、時期を決定し得る資料は出土していない。

IV 出土遺物

1 出土遺物の概要

今回報告の第6次調査では、前期及び中期の多量の縄文土器、石器土製品の他、平安時代の土師器、須恵器、瓦が出土している。遺物総量は、440mm×600mm×150mmのコンテナで80箱を数える。主体となるのは縄文土器で、復元个体数は120个体を超える。前期黒浜式、中期勝坂2a～3a式、阿玉台Ⅱ式、加曾利EⅠ式からEⅣ式があるが、加曾利EⅡ式古段階、加曾利EⅡ新～EⅢ古段階の連弧文土器、曾利系土器が比較的多い。また、破片ながら諸磯b式、十三菩提式等も散見される。縄文時代の遺構群は、調査区北側から西側にかけて重複が著しく、遺構覆土からは、各時期の土器が混在して出土するケースが顕著であった。石器は打製石斧を主体として、磨製石斧、石鏃、石皿、敲石等が見られる。遺構出土のものも多いが、近・現代の耕作坑（攪乱）にまとめて投棄されたものを含めると膨大な量に及ぶ。そのため、紙幅の関係から、完形・半完形品の中でも状態が良く特徴的なものを選定して掲載した。

2 出土遺物

土器

住居跡出土土器

第37号住居跡出土土器（第38図）

本住居跡の出土土器は、比較的少ない。第38号住居跡と重複し、覆土上層に攪乱もあるため、中期の土器の混入も認められた。復元、図化し得た土器は3个体である。

第38図1は覆土中から出土した破片が接合したもので、口縁部と胴下半部から底部を欠く。図化部分で30%程度が残存する。器形は括れの小さい頸部を経て、胴上位が膨らみ下位が絞られる。胴部には単節LRが横位に施文されているが、頸部以上と胴下位に空白が目立つ。また、接合痕を明確に残す。全体的に粗い作りである。胎土には繊維を含む。現存高27.9cm、器厚0.8～1.1cm、焼成は良好。色調は明褐色、黒褐色を呈する。

2は覆土中の破片が接合したもので、口縁部の破片から推定復元した。口唇部は無文で、以下に無節Lを横位施文するが、接合痕が残っている。胎土には繊維を含む。現存高8.4cm、口径推定19.6cm、器厚0.8～1.1cmを測る。焼成は良好。色調は暗茶褐色、暗褐色を呈する。

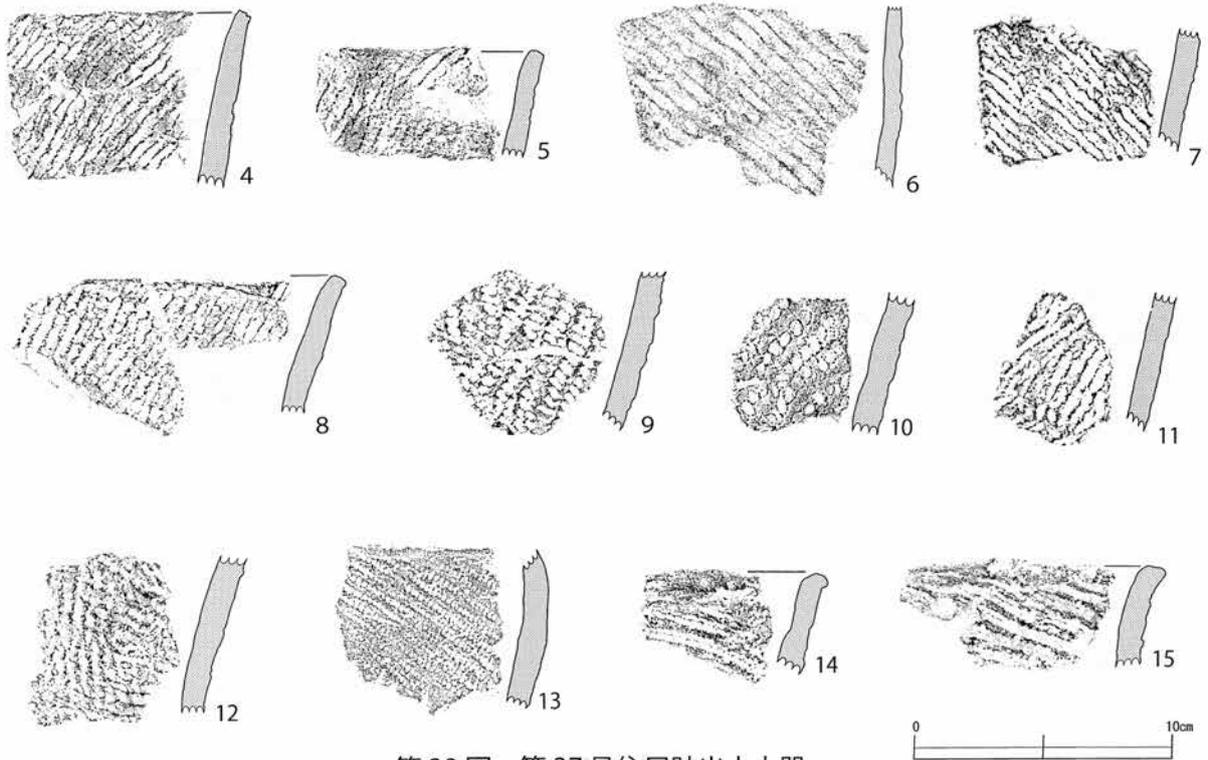
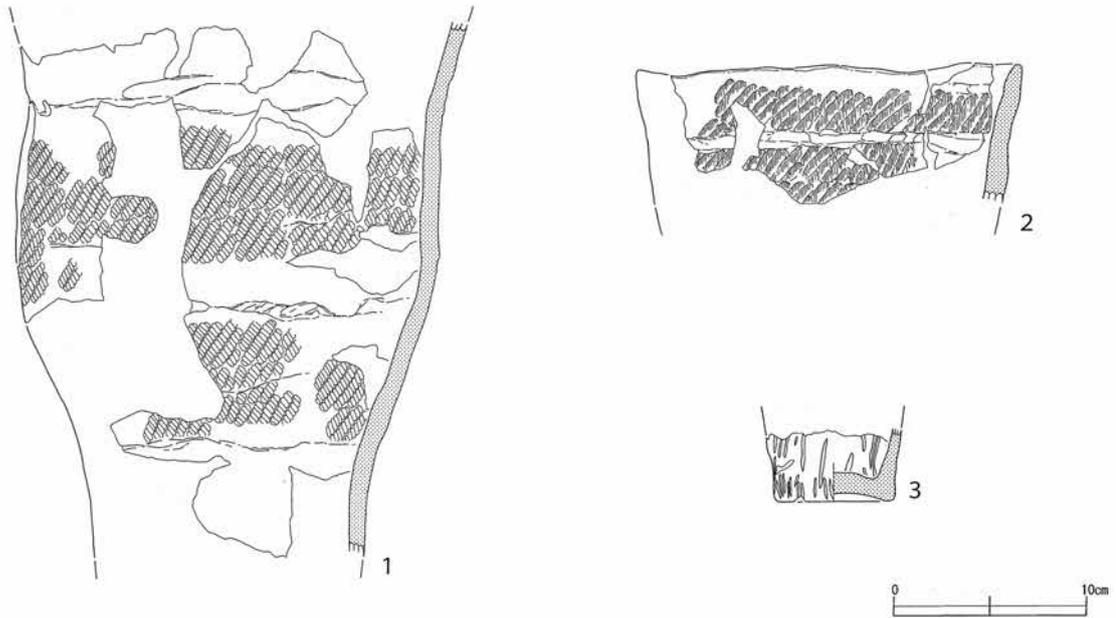
3は小形深鉢の底部付近である。図化部分で60%程度を残す。底部は上げ底になっている。器面には、不規則に長短の沈線を施している。胎土には繊維を含む。現存高3.8cm、底径6.0cm、器厚0.5～1.0cmを測る。焼成は良好で、色調は明茶褐色、暗褐色、暗茶褐色を呈する。

4～15は、いずれも地文のみが施されている。4・5は無節L、6・7は無節Rの横位施文、8～11は単節LR横位、12は単節RLを斜位に、13は付加条、14・15は反撚りRRを施文している。胎土には、すべて繊維を含んでいる。

第38号住居跡出土土器（第39図）

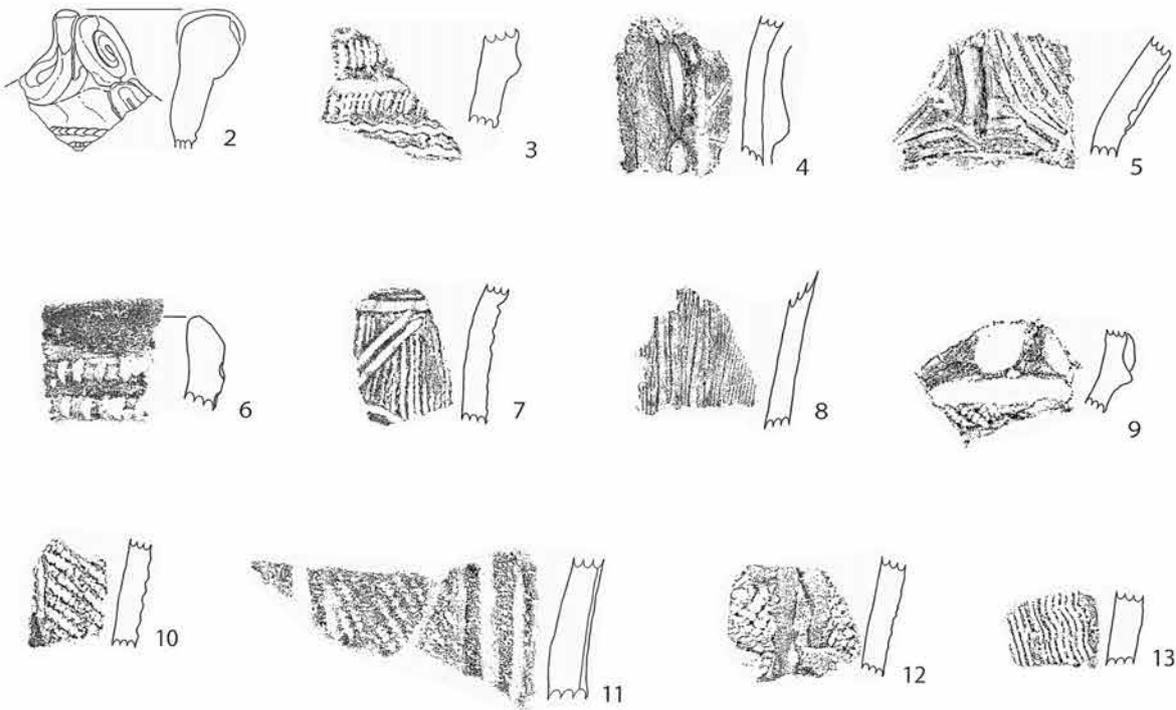
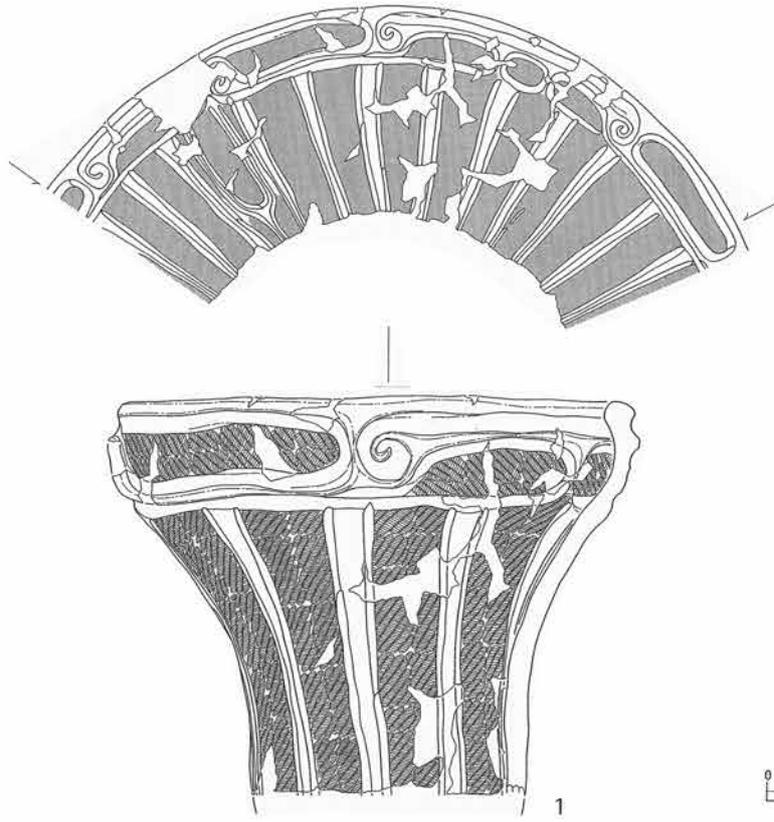
本住居跡は覆土も薄く、床面まで攪乱が及んでいたため、出土遺物は極めて少ない。復元されたのは、炉跡埋設土器のみである。

第39図1は炉跡埋設土器である。胴下半部から底部を欠く。図化部分で90%残存。口縁部は、わず



第38図 第37号住居跡出土土器

かに内湾する。胴部上位で括れて、円筒形に近い下半部へと続く。口縁部文様は口唇部直下に両端に渦巻文を持つ沈線文と、その下位に楕円区画文を組み合わせるものを2単位置く。展開図左側は部分的に欠損するため明確ではないが、下位文様はやや長め楕円区画1単位と思われる。これに対して、展開図右側の下位文様は中間に小さい楕円区画を置き、3単位に分割する。これら2段構成文様の間に1段の楕円区画文を配し、全体で4単位構成を採っている。口縁部文様下端は、胴部文様との区画線が不明確になってい



第 39 图 第 38 号住居跡出土土器

る。胴部は12単位の幅狭の磨消懸垂文を施すが、1単位は音叉状の形状を呈する。口縁部文様との対応関係は無い。地文は0段多条の単節RLで、口縁部は横位、胴部は縦位に施文している。現存高21.3cm、口径24.8cm、器厚0.9～1.3cmを測る。焼成は良好であるが、内面特に上位の被熱痕跡が顕著である。色調は赤褐色、明褐色、暗黄褐色を呈している。

2～13は覆土から出土した土器片である。9～13は1の時期に該当するが、他はそれ以前のものである。2は小形の眼鏡状把手の下に、横走する三角押文が認められる。3は、爪形文と、それに沿う波状沈線が施されている。4は連鎖状文、5は貼付け隆帯の左右に粗い集合沈線を充填、6は口縁部に2条の刻目を巡らす。7は深鉢胴部で、撚糸L地文に蛇行懸垂文を施す。8は条線地文、9～11は地文に単節LR、12は単節RLを縦位に施文している。11は隆帯懸垂文を有する。13は櫛歯状施文具で蛇行する条線を施す。9は深鉢頸部破片、他は胴部破片である。

第39号住居跡出土土器（第40図）

本住居跡も第38号住居跡と同様、覆土が薄く、遺物量は少ない。2個体が復元されている。

第40図1は屋内埋葬である。攪乱により大部分を欠く。凶化部分で25%を残す。口縁部は推定4単位の波状を呈する。文様は口縁部に複列の円形刺突文を巡らす。括れの弱い頸部には3条の区画沈線を施し、器面を上下に分割する。地文に縦位沈線を施し、上位には上下動の少ない3条の波状沈線を巡らす。沈波状線間は磨り消している。一部に撚糸Lが施されている。残存部は少ないが、胴下半部にも同様の沈線文を描く。口縁部の円形刺突文と区画沈線、波状沈線は、同じ施文具を使用していると思われる。現存高18.4cm、口径推定30.0cm、器厚1.1～1.6cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗褐色、茶褐色を呈する。

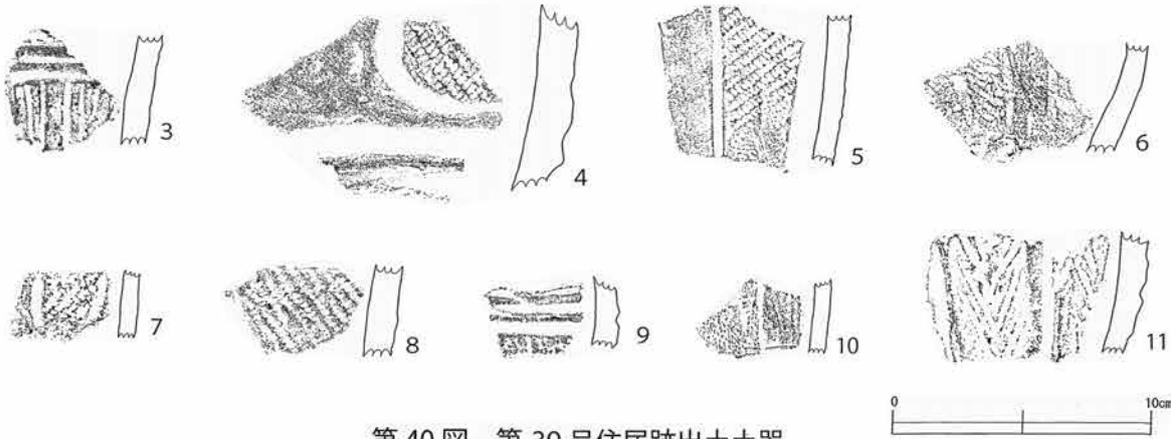
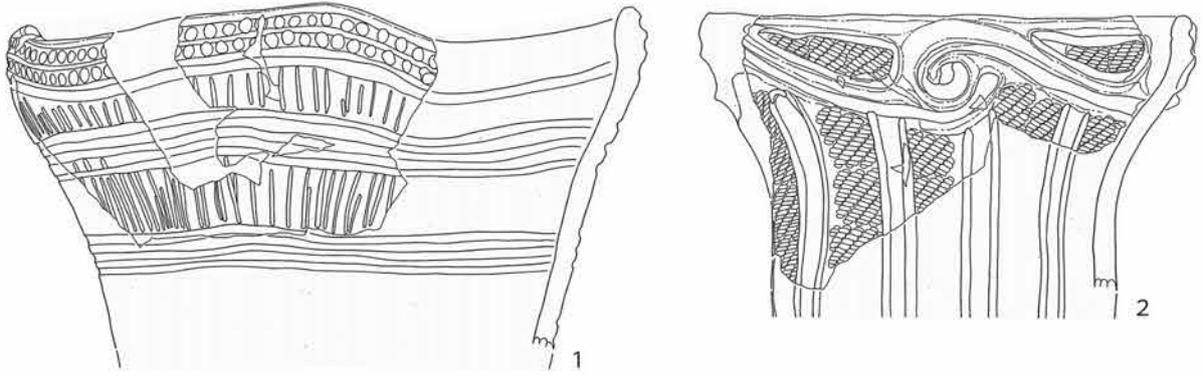
2は凶化部分の約20%が残存する。器形は口縁部が直立気味に開き、口縁部直下で括れる。口縁部文様は渦巻繫ぎ弧文的で、推定4単位構成を採る。繫ぎ隆帯隆帯上には三角形区画を置き、下にはやや幅狭の磨消懸垂文が連結する。口縁部文様下端の文様区画隆帯は不明確になっている。地文は単節RLで、口縁部、胴部ともに縦位施文である。現存高14.5cm、口径推定23.8cm、器厚0.9～1.1cmを測る。焼成良好で、色調は暗茶褐色、黒褐色、明褐色を呈する。

3は2と同一個体と思われるが、接合はしなかった。3条の区画沈線が認められる。4は深鉢の頸部付近である。口縁部文様の楕円区画が認められる。地文は単節RLの横位施文。5～10は深鉢の胴部破片で、9以外は磨消懸垂文が確認できる。地文は5・7が単節RL、他は単節LRで、いずれも縦位施文。11は曾利系の土器で、綾杉文を充填している。

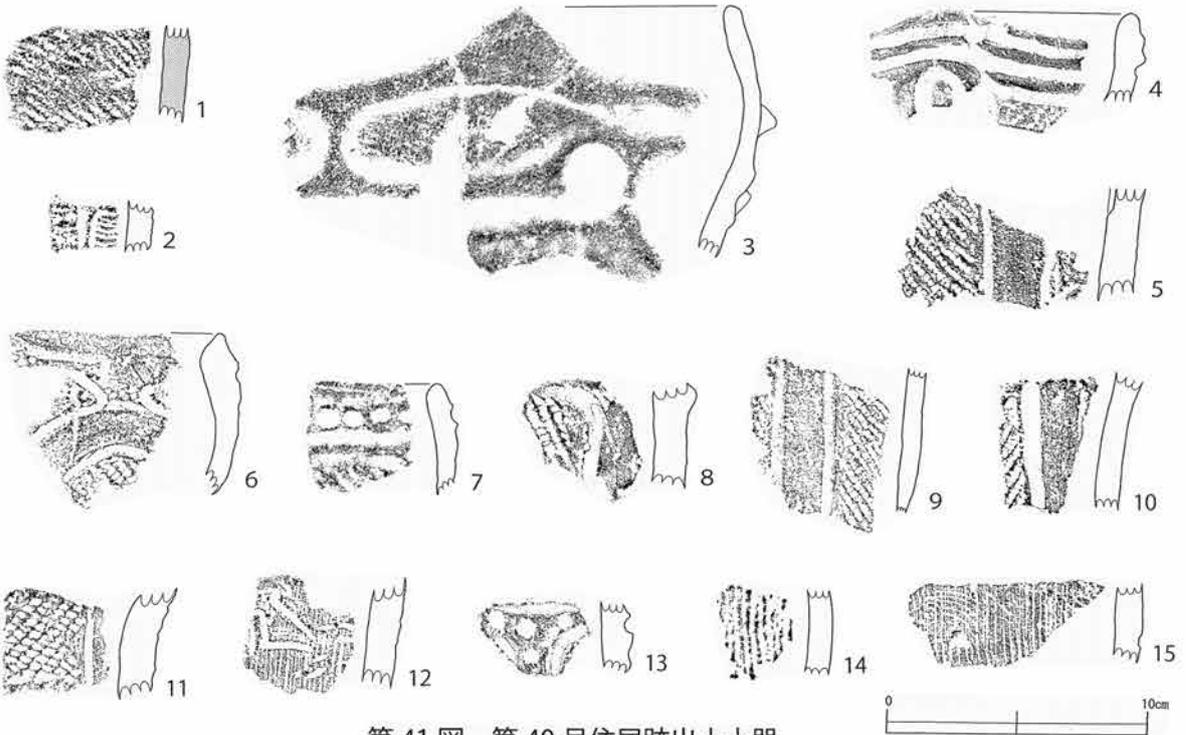
第40号住居跡出土土器（第41図）

本住居跡も覆土が薄いため、遺物は非常に少なかった。復元された土器は無い。

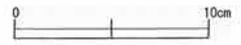
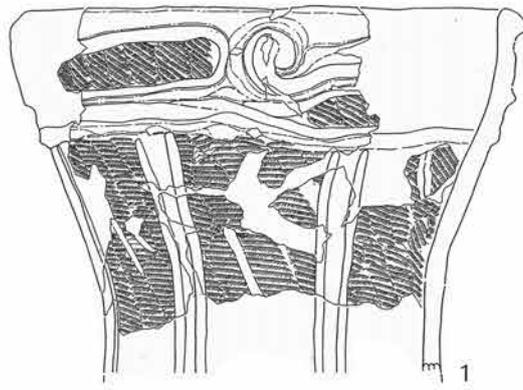
第41図1は単節RLを横位に施文している。胎土には繊維を含む。2は爪形文を施文している。3は4単位の突起を口縁部に配すると思われる。渦巻文と崩れた楕円区画が上下に入り組む。4は上下動の弱い波状口縁を呈すると思われる。地文は単節RL縦位施文。5・9～11は磨消懸垂文が施されている。地文は5・9が単節LR縦位、10・11が単節RLの縦位施文。6は口縁部に工字形の区画文を描き、下位に大柄の渦巻文の一部と思われる曲線の無文帯を置く。地文は単節RLで、充填施文と思われる。7は口縁部に円形刺突を1条巡らす。直下に沈線による曲線文を描く。地文は単節LRと思われる。8には逆U字の懸垂文が認められる。地文は単節LR縦位施文。12は連弧文系の土器と思われる。条線地文に形状不明の沈線文を描いている。13は隆帯上に円形刺突を施す。曾利系の土器と思われる。14・15は地



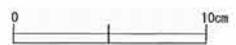
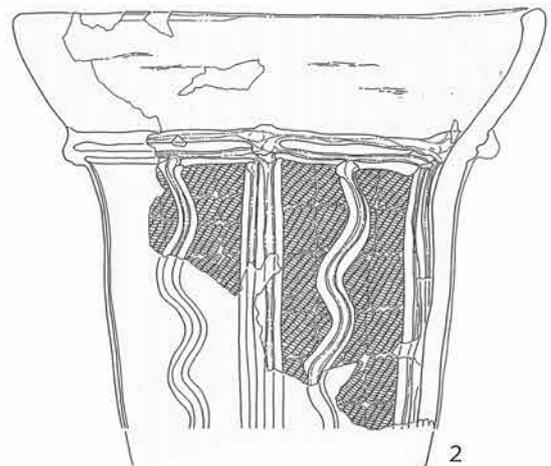
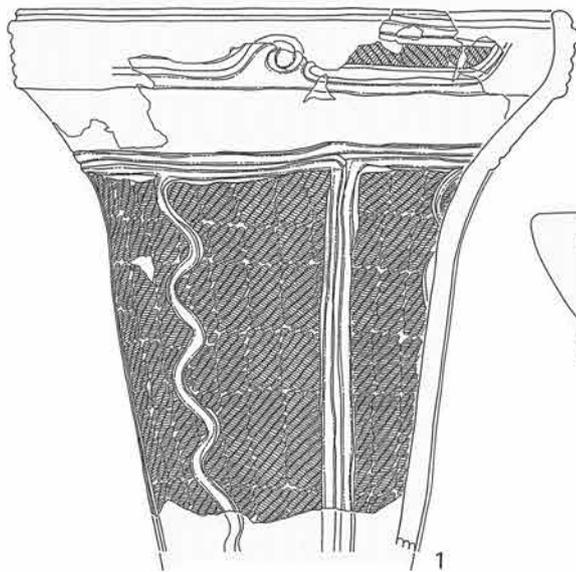
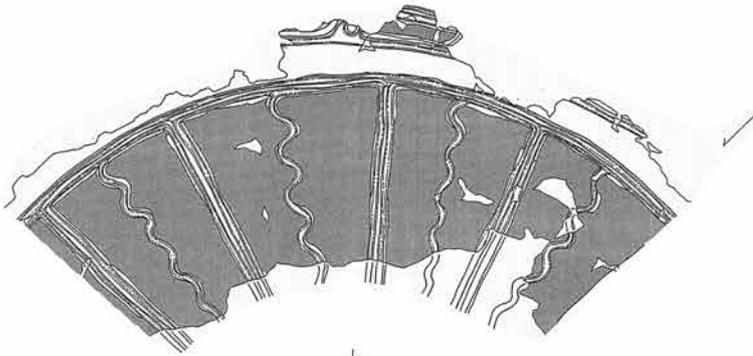
第40图 第39号住居跡出土土器



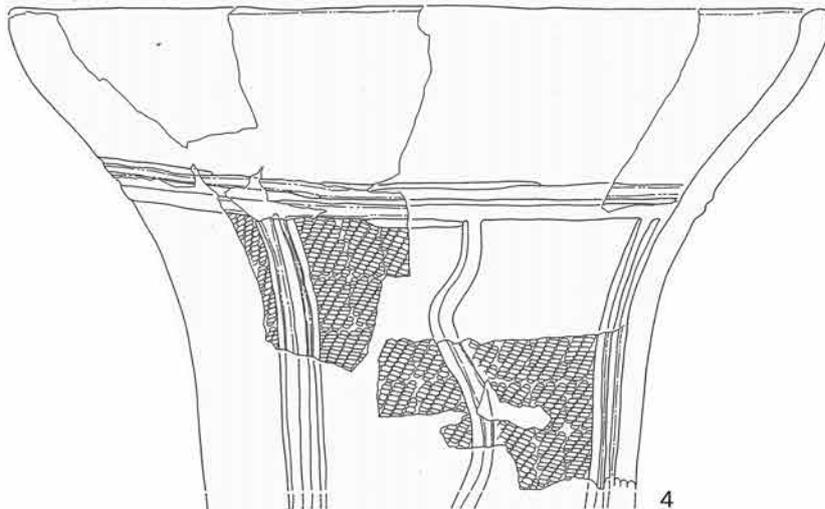
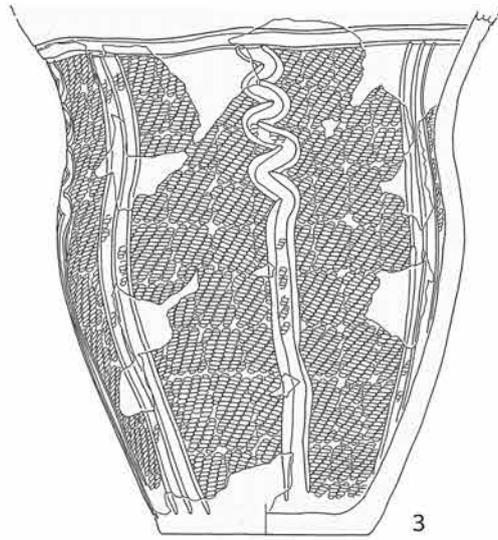
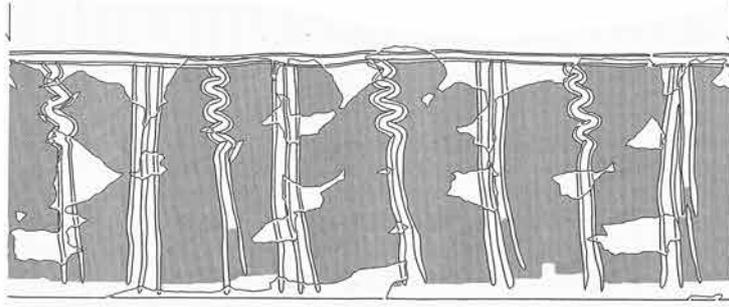
第41图 第40号住居跡出土土器



第 42 图 第 41 号住居跡出土土器



第 43 图 第 42・43 号住居跡出土土器 (1)



第44图 第42·43号住居迹出土土器(2)

文のみ認められる。14 は撚糸 L 縦位、15 は条線を施している。

第 41 号住居跡 (第 42 図)

炉跡のみが検出された住居跡であるため、復元されたのは埋設土器 1 個体である。

第 42 図 1 は図化部分の約 50% が残存する。器形は口縁部が直立気味でわずかに開き、胴部上位で弱く括れる。口縁部文様は 1 / 2 以上を欠くため不明確であるが、崩れた渦巻文と楕円区画の交互配置と思われる。推定 4 ~ 5 単位構成。口縁部文様下端の区画隆帯は、背が低く不明瞭となっている。胴部は磨消懸垂文 7 単位施す。地文部の 1 単位は幅狭になっている。口縁部、胴部ともに、沈施された線は粗雑である。地文は無節 L で、口縁部は縦位、胴部は斜位施文である。現存高 19.2cm、口径推定 24.2cm、器厚 0.9 ~ 1.5cm を測る。焼成は良好だが、内面は被熱痕跡が著しい。色調は黒褐色、暗褐色、茶褐色を呈する。

第 42・43 号住居跡出土土器 (第 43・44 図)

第 42・43 号住居跡については、調査時に遺物の分別ができなかった。ただし、出土位置と状況から、ほとんどが第 42 号住居跡に帰属するものと思われる。

第 43 図 1 は屋内埋甕で、長胴の深鉢である。口縁部の大半と底部付近を欠く。図化部分で 80% 残存。器形は幅狭の口縁部が直立し、やはり幅狭の頸部無文帯を介して括れ、長い胴部に至る。口縁部文様は残存部が少ないため不明な点が多い。渦巻文と区画文の一部が認められる。胴部文様は蛇行懸垂文と 2 本隆帯懸垂文を交互に配する。各 4 単位。いずれも半裁竹管で調整しているようである。隆帯脇沈線は明確ではない。地文は 0 段多条の単節 R L で、口縁部は横位、胴部は縦位に施文している。現存高 28.3cm、口径推定 27.4cm、器厚 0.9 ~ 1.2cm を測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、暗褐色、黒褐色を呈する。

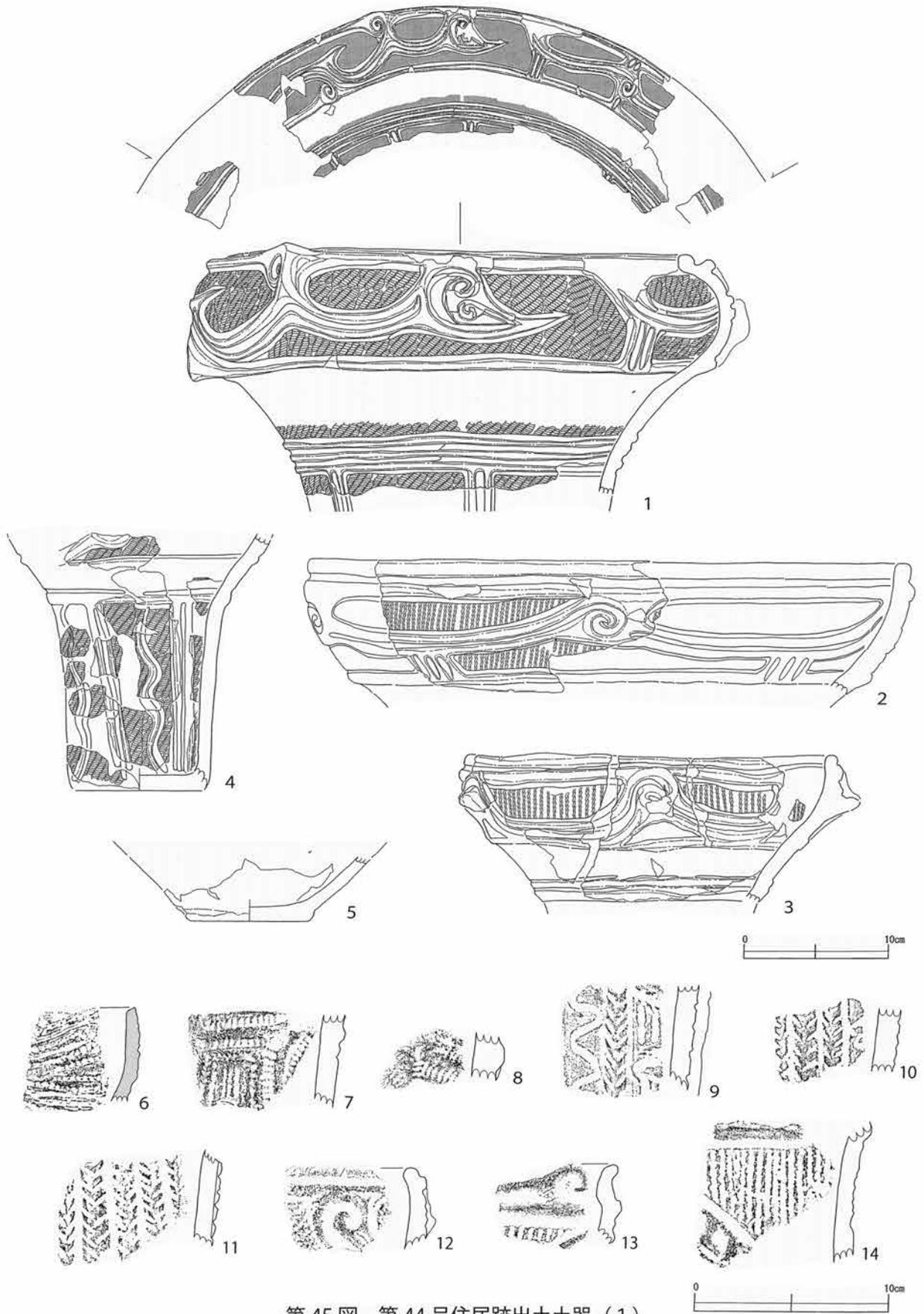
2 は口縁部無文の土器である。図化部分で約 20% 残存。器形は口縁部が直線的に開き、口唇部がわずかに内傾する。胴部は円筒形を呈する。口縁部は横方向の擦痕が目立つ。頸部に 2 本隆帯を巡らし、胴部は蛇行隆帯懸垂文と 2 本隆帯懸垂文を交互に配する。隆帯脇の沈線は単沈線で、明確に引かれている。隆帯上には、調整様の擦痕が看取される。各推定 5 単位。2 本隆帯懸垂文と頸部区画隆帯の接合部には、瘤状の突起を施す。地文は単節 R L で、縦位に施文されている。現存高 22.2cm、口径推定 28.5cm、器高 0.9 ~ 1.2cm を測る。焼成は良好で、色調は黒褐色、暗茶褐色を呈する。

第 44 図 3 は頸部以上を欠く。図化部分で 80% 残存。器形は胴部中位で膨らむ。頸部に 2 ~ 3 本の区画沈線を施し、胴部には上位がコンパス文状の 2 本沈線懸垂文と 3 本沈線懸垂文を交互に配する。いずれも半裁竹管を使用して描かれるため、沈線間の地文は、ほとんど磨り消されている。各 4 単位。地文は単節 R L の縦位施文。現存高 27.6cm、底径 10.6cm、器厚 0.9 ~ 1.5cm を測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、茶褐色を呈する。

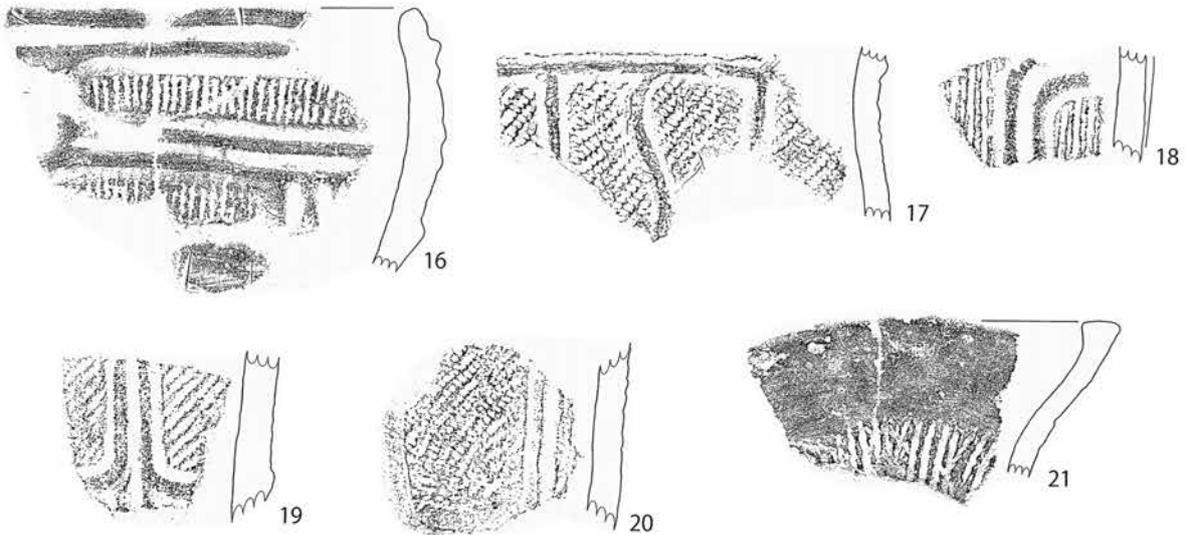
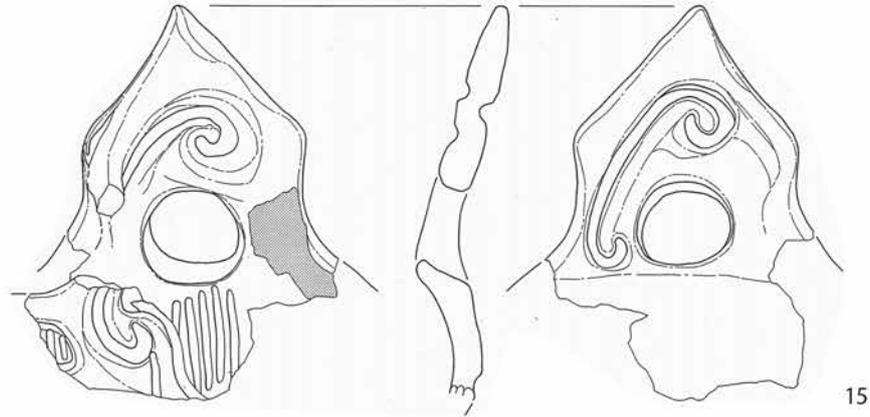
4 は第 43 図 2 と同様、口縁部無文帯の土器である。図化部分で約 30% 残存。器形は口縁部が直線的に開き、口唇部が直立気味になる。胴部は上位で若干湾曲する。頸部に 2 本隆帯を巡らし、区画線とする。胴部には 2 本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文を交互に配置する。頸部隆帯との接合点には、2 のような突起は見られない。隆帯上には調整痕のような擦痕が認められ、隆帯脇には単沈線を施している。地文は単節 R L の縦位施文。現存高 25.8cm、口径推定 40.2cm、器厚 1.1 ~ 1.5cm を測る。焼成は良好。色調は暗褐色、暗茶褐色を呈する。

第 44 号住居跡出土土器 (第 45・46 図)

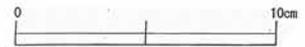
本住居跡も覆土が薄く、出土遺物は比較的少なかった。復元、図化できたのは炉跡埋設土器と覆土出土



第45图 第44号住居跡出土土器(1)



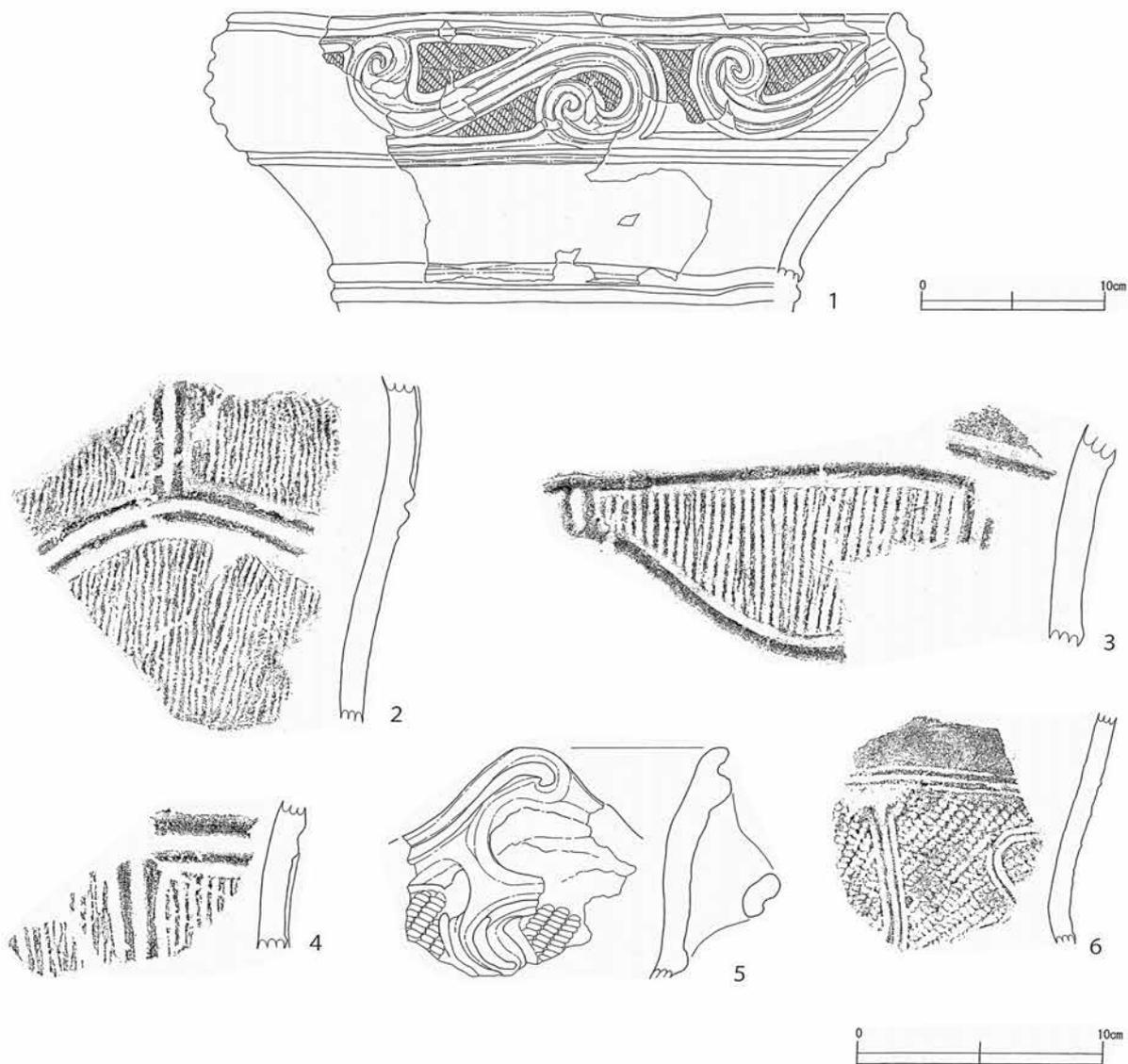
第46図 第44号住居跡出土土器(2)



土器4個体である

第45図1は炉跡埋設土器である。第45号住居跡の壁溝に破壊されており、凶化部分で約50%が残存する。器形は口縁部が強く内湾し、わずかに湾曲しながら頸部に至る。口縁部文様は面取りしたような、しっかりした2本隆帯で作出される。隆帯脇には、単沈線が引かれる。構成は画一的ではなく、上下に二分するような部位や、区画内を分割するような単位もある。要所には、渦巻文や柵状の貼付けが配され、文様帯上下端に連結する。渦巻文の一部は突起状を呈している。また、大木8b式に類似する剣先文も見られる。頸部無文帯は幅広で丁寧な磨きが入るが、頸部区画隆帯の直上に地文を残している。頸部下端の分割は、3本隆帯でなされる。胴部には2本隆帯懸垂文推定6~7単位配される。これらの隆帯は口縁部と同様、丁寧な作りで、おそらく半裁竹管腹面による調整が施されているものと思われる。地文は単節RLの口縁部、胴部ともに縦位施文主体であるが、一部充填施文のように隆帯に沿って斜位に施文されている部分も認められる。現存高19.8cm、口径30.6cm、器厚0.9~1.2cmを測る。焼成は良好であるが、内面には被熱痕跡が見られる。色調は暗茶褐色、暗褐色、黒褐色を呈する。

2は渦巻繫ぎ弧文土器で、大形破片からの復元実測である。口縁部器形は、湾曲しつつ開く。文様は渦



第47図 第45号住居跡出土土器

卷文を推定4単位配し、2本隆帯で結ぶ。本類型は弧状隆帯の下端が、口縁部下端区画隆帯に接するか、連結する例が多いが、本土器は弧状隆帯が最も下がった部分に柵状の貼付けを付し、下端隆帯に連結している。地文は撚糸Lで、縦位施文。現存高9.5cm、口径推定40.5cm、器高1.2～1.4cmを測る。焼成は良好で、色調は明茶褐色、明褐色、暗褐色を呈する。

3も渦巻繋ぎ弧文土器である。図化部分で30%が残存する。器形は頸部から直線的に開き、口縁部が直立する。文様は推定4単位の突出する渦巻文を、2本隆帯で連結する。下段の隆帯は急角度で下降し、口縁部文様下端の区画隆帯となる。頸部は幅狭の無文帯である。胴部との区画は、2本隆帯によってなされている。地文は撚糸Lの縦位施文。渦巻文下の三角形区画内は、磨り消されている。現存高10.5cm、口径推定24.4cm、器厚1.0～1.1cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、明褐色を呈する。

4は比較的小形の深鉢で、口縁部を欠く。図化部分で30%残存。作りが非常に粗雑である。器形は短かい円筒形の胴部に、直線的に開く頸部が付く。口縁部文様は、渦巻文と思われる隆帯文の一部を残す。口縁部文様下端の区画は、沈線となされている。頸部は幅狭の無文帯で、胴部との区画は1条の隆帯を巡らしている。胴部は2本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文を交互に配する。推定各4単位。隆帯脇には部分的

に単沈線を引く。地文は0段多条の単節RLで、口縁部、胴部ともに縦位施文。現存高17.7cm、底径推定9.0cm、器厚0.9～1.1cmを測る。焼成やや不良。色調は暗赤褐色、暗褐色、明茶褐色を呈する。

5は浅鉢底部付近の破片である。図化部分で40%残存。底部接合痕が認められる。現存高4.4cm、底径8.2cm、器厚0.8～1.3cmを測る。焼成やや不良で、色調は内面が明茶褐色、外面は暗褐色、黒褐色を呈する。

6～第46図21は、覆土出土の破片である。本住居跡の時期以外のものが混入している。6は深鉢口縁部破片で、横位の沈線を多数引き、刺突文を加える。胎土に繊維を含む。7は隆帯脇に幅広の角押文を施し、三角押文が伴う。胎土に金雲母を含む。8は隆帯脇に爪形文を施す。9は断面三角形の隆帯に綾杉文を付す。区画内には三角押文の波状文等が認められる。10・11は同一個体の可能性がある。縦位の集合沈線間に、綾杉文を施す。12・13は深鉢の口縁部破片。12は渦巻文と区画文の一部が見られる。地文は単節RL。13は突起部分で、小渦巻文が施される。地文は撚糸L。14は深鉢胴部破片。頸部区画隆帯と、胴部に展開する大柄な渦巻文の一部が認められる。第46図15は板状の大形把手である。内外面に渦巻文を施す。外面に上下を結ぶ橋状の把手と、区画文の一部が見られる。区画内には沈線が充填される。16は深鉢口縁部の破片で、文様帯を2本隆帯で上下に二分するタイプである。2本隆帯からは柵状の貼付けが垂下し、口縁部文様下端隆帯に接続する。図左側には、渦巻文の縁が認められる。地文は撚糸Lの縦位施文。17～20は胴部破片である。17は1本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文が、交互に配される。地文は単節RL縦位。18は撚糸L地文に、背の低い2本隆帯で屈折文が貼付けられている。19は2本隆帯懸垂文が、左右にU字状に分岐する。20は3本沈線懸垂文が認められる。地文は、両者とも単節RL縦位。21は無文の口縁部を持つ深鉢口縁部である。頸部以下は、撚糸Lを縦位に施す。

第45号住居跡出土土器 (第47図)

本住居跡も遺物量は少ない。復元、実測し得た土器は、1個体のみである。

第47図1は覆土から出土したもので、図化部分の20%が残存する。器形は口縁部が強く内湾し、頸部に緩やかに至る。口縁部文様は2本隆帯による独立した横S字文を配する。単位不明。各単位は上位の区画隆帯に接合し、下位には接する。下端区画隆帯を推定2条巡らす。頸部無文帯は広めで、胴部との分割に推定2本の隆帯を施す。胴部文様は不明である。口縁部文様の隆帯脇には、くっきりとした沈線を引くが、頸部区画隆帯には認められない。地文は単節R1で、横位に施文されている。現存高14.9cm、口径推定36.0cm、器厚1.0cmを測る。焼成は良好だが、内面に荒れが目立つ。色調は暗茶褐色、暗褐色、黒褐色を呈する。

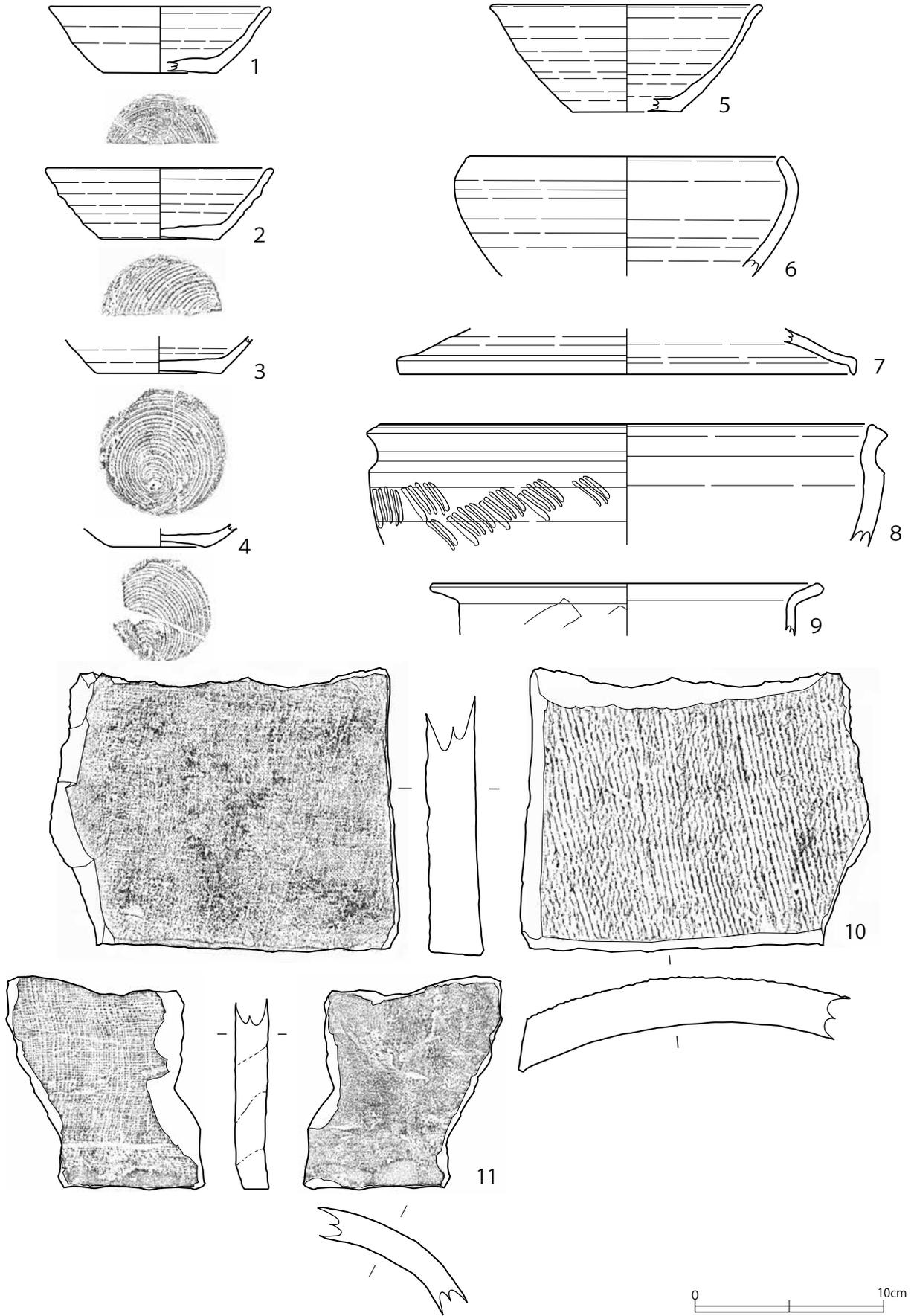
2・3は同一個体で、いずれも深鉢胴部破片である。撚糸L地文に隆帯で、大木8b式に見られる横位展開の渦巻文を作出している。4は頸部付近の破片で、頸部区画隆帯から垂下する2本隆帯懸垂文が認められる。地文は撚糸Lの縦位。5は口縁部破片で、横S字文末端が突起部で巻く。地文は単節LRの縦位。6は頸部付近の破片で、単節RL縦位の地文に半裁竹管腹面の重複施文で、頸部区画線と懸垂文を描く。

第46号住居跡出土土器 (第48図)

本住居跡の遺物は非常に少ない。出土したのは須恵器、土師器及び瓦である。

第48図1～4は須恵器坏である。いずれも東金子産。1は残存率30%。底部糸切り無調整で、外面にヘラによる傷が見られる。器高3.6cm、口径推定11.8cm、底径推定6.6cm、内底径推定6.0cmを測る。焼成良好。色調は灰色を呈する。胎土に白色粒、小礫を含む。

2は残存率50%。底部糸切り無調整で、内外面のロクロ目は強調気味である。器高3.8cm、口径推定



第 48 图 第 46 号住居迹出土土器

12.0cm、底径推定 6.2cm、内底径推定 6.6cmを測る。焼成は普通で、色調は橙色を呈する。胎土に白色粒、小礫、赤褐色粒を含む。

3は50%が残存する。底部無調整だが、糸切りをし直した痕跡が認められる。器高、口径不明、底径 6.6cm、内底径 6.5cmを測る。焼成良好。色調は灰色を呈する。胎土に白色粒、小礫を含む。

4は残存率30%。底部糸切りは無調整である。器高、口径は不明。底径 5.0cm、内底径 5.9cmを測る。焼成は普通で、色調は鈍い橙色を呈する。胎土に白色粒を含む。

5は須恵器壺で、残存率20%器高 5.8cm、口径、底径、内底径は、いずれも推定で各々 14.4cm、5.5cm、4.6cm。焼成良好。色調は鈍い褐色を呈する。胎土に白色粒を含む。東金子産。

6は須恵器鉄鉢である。残存率20%。口径推定 16.6cm、器高、底径は不明である。焼成は普通、色調は灰白色を呈する。胎土に砂、白色粒を含む。東金子産。

7は須恵器蓋である。残存率5%。口径は推定で 24.0cm。内面に降灰が認められる。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。胎土に白色粒、小礫を含む。東金子産。

8は須恵器鉢である。残存率5%。口縁端部に、わずかな立ち上りがある。口径推定 26.0cm。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。胎土に小礫を含む。東金子産。

9は土師器の甕である。残存率5%。「コ」字状口縁部の上部。磨耗が著しい。口径推定 20.2cm。焼成は普通。色調は鈍い橙色を呈する。胎土に黒色粒、雲母を含む。

10・11は瓦である。10は平瓦で、残存率20%。凹面に布目、凸面に麻縄叩き目が見られる。カマド構築材として使用されていた。長辺 14.9cm、短辺 16.7cmが残存。厚さ 2.6cmを測る。焼成良好。色調は浅黄色を呈する。胎土に白色粒、小礫を含む。東金子産。

11は丸瓦である。10%残存。凹面に布目が認められ、凸面にはへら削りが施される。大ききの割に軽い。長辺 10.2cm、短辺 9.3cmが残存。厚さ 1.6cmを測る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。東金子産。

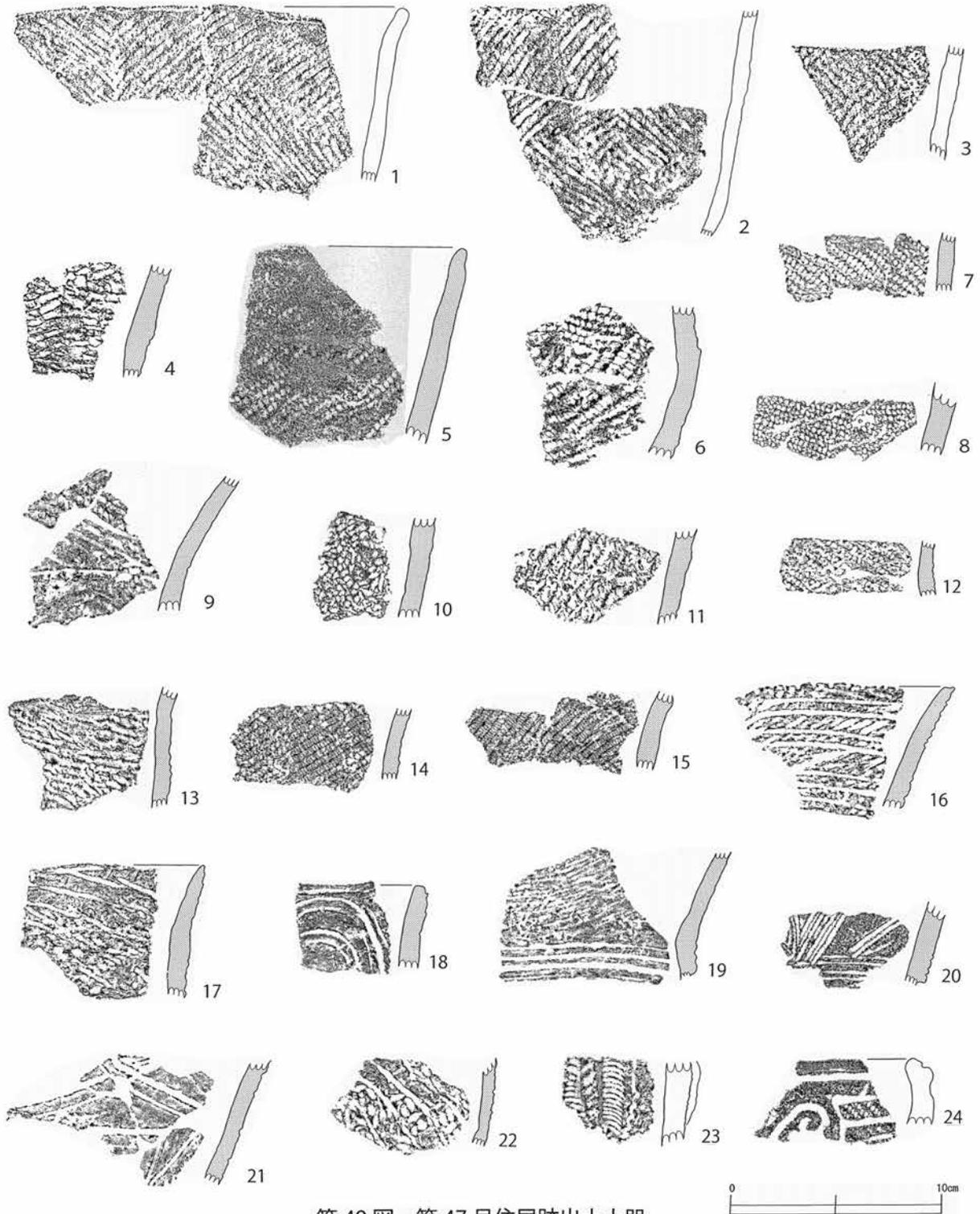
第47号住居跡出土土器(第49図)

本住居跡は覆土が薄く、攪乱も広範囲に及んでいる。復元し得た土器個体は無い。

第49図1は深鉢の口縁部破片で、薄手の作り。器形は、わずかに外傾して立ち上がる。地文は無節LとRで、両者の横位施文により羽状をなすが、上位に両者が混在する部位も認められる。胎土には金雲母を含む。2・3は1と同一個体の可能性がある。いずれも胴部破片で、胎土に金雲母を含んでいる。地文は2が無節L、3が無節Rを施している。4は地文に無節Lを施し、胎土に繊維を含む。接合痕を残している。5～8・10～12は単節縄文を施す。5・6・11が単節LR、7・8・10・12が単節RLを施している。いずれも胎土に繊維を含む。9・13～15は無節縄文で、9・13は無節R、14・15は無節Lである。いずれも胎土に繊維を含んでいる。9は接合痕を残す。16は鋸歯状の口唇部を持つ。無節Lを施文後、多段の平行沈線を引いている。胎土に繊維を含む。17は口縁部破片で、反撚りRRを施す。胎土に繊維を含む。18は沈線で曲線文を描く。19無節L施文後、平行沈線を引く。20・21は沈線のみ施されている。21は菱形のモチーフを描く。22は反撚り・正反の合を施す。16以降、すべて胎土に繊維を含む。23は刻目加飾の隆帯脇に爪形文を施し、沈線波状文に沿わせる。24は口縁部破片で、渦巻文と区画文の一部が認められる。地文は単節RLの横位施文。

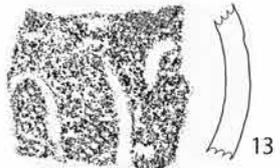
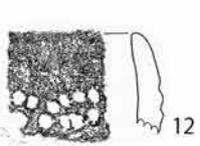
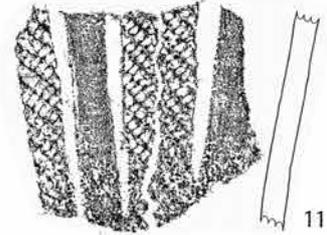
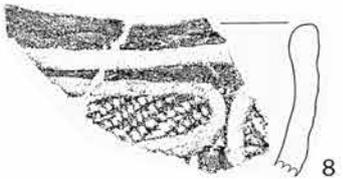
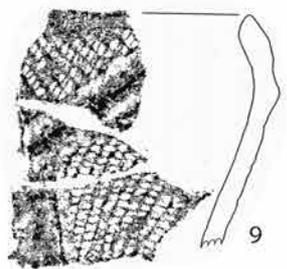
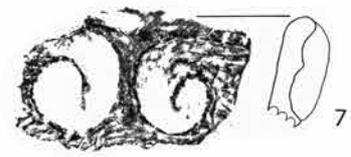
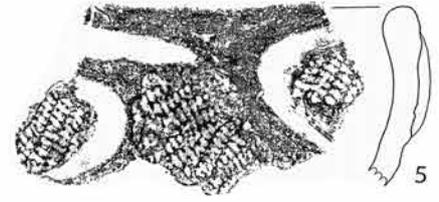
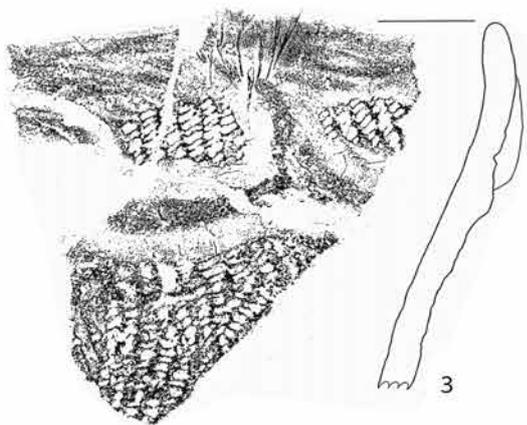
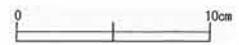
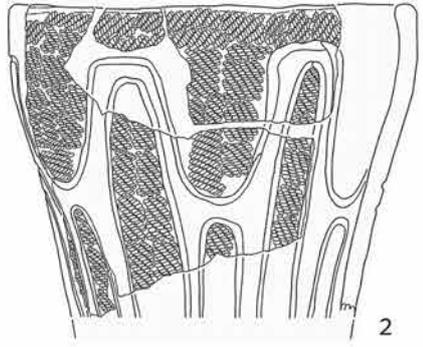
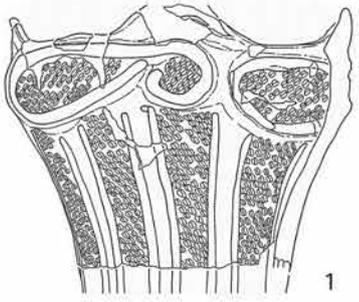
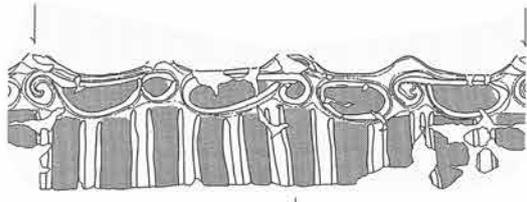
第48号住居跡出土土器(第50・51図)

本住居跡は出土遺物は比較的少ない。復元、図化し得た土器は、2個体である。

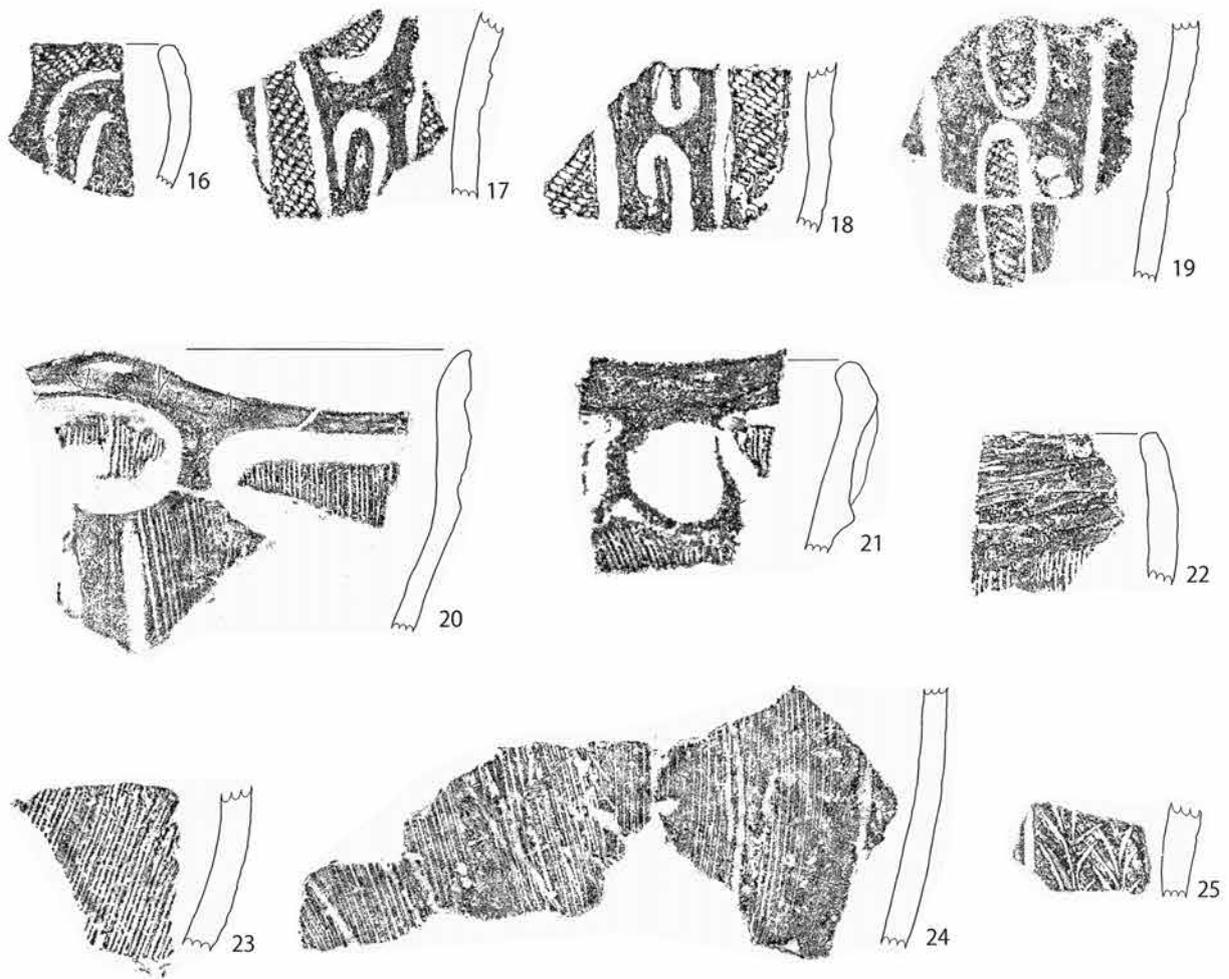


第49図 第47号住居跡出土土器

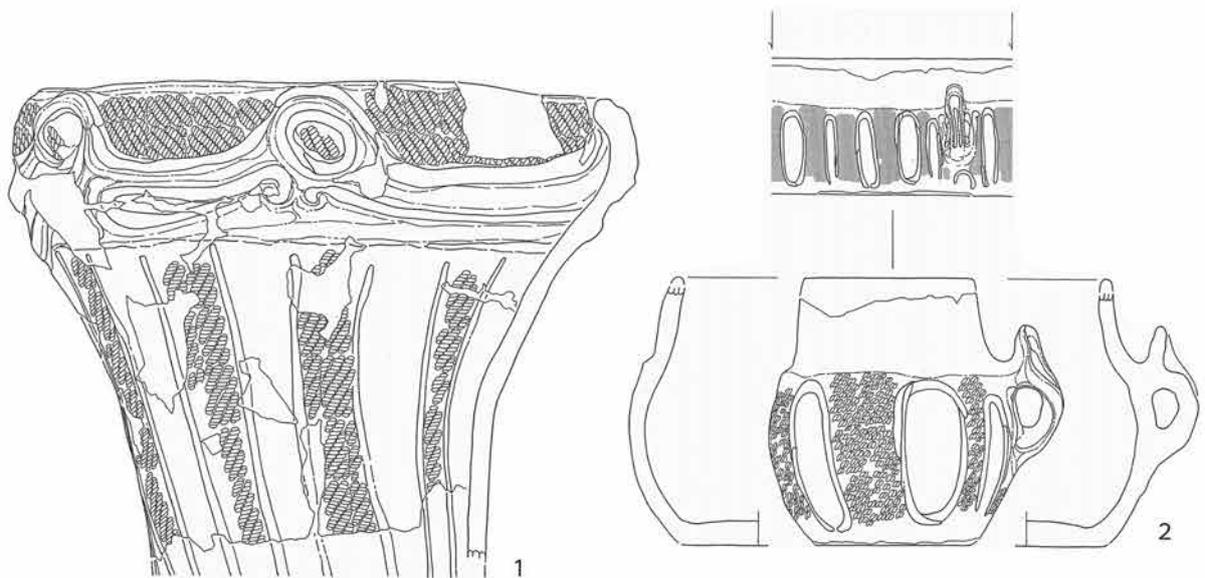
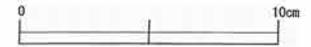
第50図1は遺構北西側床面上から、伏せられた状態で出土した。小形の深鉢で、図化部分で80%が残存する。口縁部は弱く内湾し、胴部は緩やかにすぼまる。4単位の外傾する突起を有し、一部に不明確ながら文様が認められる。口縁部文様は渦巻文と楕円区画が結合した単位文3単位配し、その間に円形区画文と楕円区画文を置く。渦巻文は1単位が地文を施し、区画文化している。渦巻文及び円形区画文は、突起に対応している。口縁部と胴部の文様区画線は、非常に不明瞭となっている。胴部は幅狭の磨消懸垂



第 50 图 第 48 号住居跡出土土器 (1)



第 51 图 第 48 号住居迹出土土器 (2)



第 52 图 第 49 号住居迹出土土器 (1)



文 10 単位垂下させるが、1 単位のみ 3 本沈線とする。地文は複節 L R L で、口縁部には横位施文、胴部には縦位に施文する。現存高 13.9cm、口径 17.4cm、器厚 0.8 ～ 1.2cm を測る。焼成は良好であるが、外面に被熱痕跡が顕著である。色調は暗赤褐色、黒褐色を呈する。

2 は大形の破片からの推定復元である。凶化部分で 25% が残存する。器形は外傾気味に立ち上り、口縁部はわずかに内傾する。文様は口縁部に振幅の波状沈線を一条巡らし、波頂部と波底部に長短 2 種の逆 U 字懸垂文を交互に配する。地文は単節 L R で、口縁部に横位、波頂部以下に縦位に充填施文している。現存高 16.6cm、口径推定 19.6cm、器厚 1.0 ～ 1.1cm を測る。焼成良好。色調は黒褐色、明褐色を呈する。

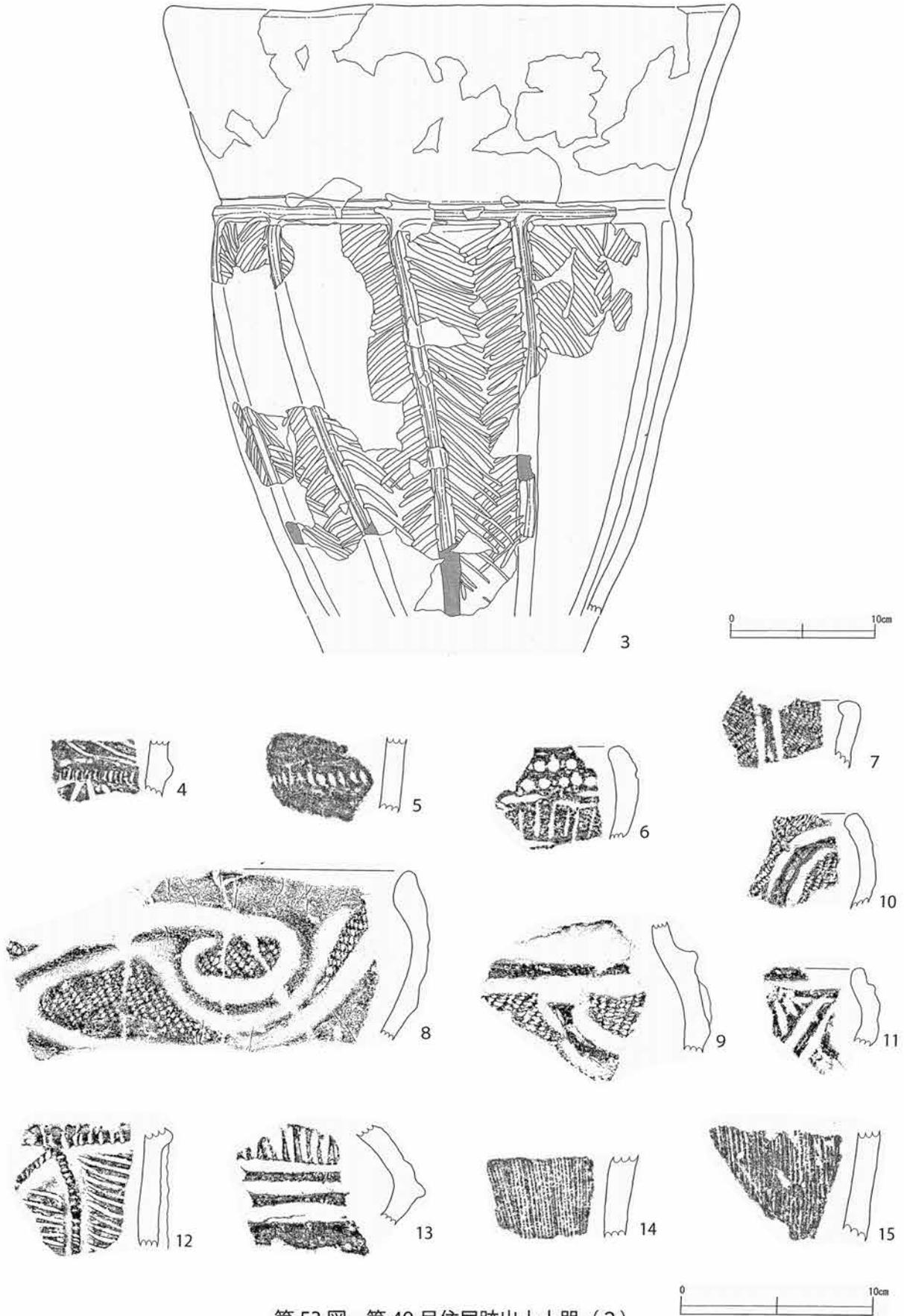
3 は大形の深鉢の口縁部破片である。口縁部文様は区画文が崩れた様相が顕著で、渦巻文も区画文化している。沈線も浅く、なぞり状を呈する。地文は粗い単節 R L で、施文方向は斜位、横位、縦位が見られるため、充填施文と考えられる。4 は円筒形土器と思われる。隆帯脇に沈線を引き、粗い波状沈線を沿わせる。地文は単節 R L の横位施文。胎土に金雲母を含む。5 の口縁部文様は、3 と同様、崩れた様相を呈する。渦巻文と思われる部分も地文が施され、区画文化している。地文は単節 R L で充填施文後に、隆帯脇をなぞっている。6・7 は口縁部破片で、渦巻文が認められる。8・9 は口縁部の区画文が認められる。いずれも区画隆帯は極めて低い。地文は 8 が単節 L R、9 が単節 R L である。10・11 は胴部破片で、懸垂文が施されている。10 には無文部が見られない。地文は、いずれも単節 L R である。12 ～ 第 52 図 16 は口縁部文様帯を持たない土器群である。12 は口縁部破片で、2 列の列点を巡らす。13・15 は逆 U 字の懸垂文と蕨状文の一部が見られる。地文単節 R L。14 は波状文或いは渦巻文を描く。地文は単節 R L を口縁部横位、以下縦位に充填施文する。16 は 2 本沈線で逆 U 字懸垂文を描き、口縁部に単節 R L を横位施文する。17 ～ 19 は胴部破片である。17・18 は逆 U 字懸垂文間に、U 字状の短懸垂文と蕨状文を対向させる。地文は、いずれも単節 R L。19 も同様の構成を採るが、蕨状文が逆 U 字懸垂文に替わる。地文単節 L R。20 ～ 24 は地文に条線を持つ土器群である。20 渦巻文と区画文を口縁部に施し、胴部に磨消懸垂文を垂下させる。口縁部に突起を有する。地文は渦巻文部にも施される。21 は渦巻文と区画文の一部が認められる。22・23 は鉢形の土器と思われる。口縁部を無文とし、胴部に条線を施す。24 は深鉢の胴部で、条線地文に 2 本沈線の懸垂文が施されている。25 は懸垂文間に綾杉文を充填する。

第 49 号住居跡出土土器 (第 52・53 図)

本住居跡は小規模な遺構で、覆土も薄いため、出土遺物は比較的少ない。復元、凶化し得た土器は、3 個体である。

第 52 図 1 は屋内埋甕である。口縁部は埋設された胴部上位から破片で出土しており、埋設時に床面から突出していたと思われる。2 は本土器の内側から出土している。凶化部分で 80% が残存する。器形は口縁部が強く内湾する。胴部の括れは弱い、凶左右で形状が異なり、焼成時に歪みが生じたと考えられる。文様は全体的に粗雑である。口縁部文様は渦巻文由来の円形区画文と、楕円区画文の交互配置である。各 5 単位。楕円区画文は上位の区画沈線を欠き、弧線的である。隆帯は概して低い。頸部付近に、横位の蕨状文を施す。頸部の区画隆帯は不明瞭となっている。胴部は幅広の磨消懸垂文で、地文部と各 10 単位配する。地文は単節 R L で、口縁部横位、胴部は縦位に施す。沈線にかかる部分や沈線から離れる部分も多々見られ、充填施文が明確である。現存高 25.2cm、口径 27.9cm、器厚 0.9 ～ 1.4cm を測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗赤褐色、暗茶褐色を呈する。

2 は 1 の内側に落ち込むように出土した。小形のジョッキ形土器である。口縁部を欠き、底部は大部分



第53图 第49号住居跡出土土器(2)

が剥離している。全体の90%が残存。口縁部は、わずかに内傾する幅広の無文帯である。胴部との境目には、段差を有する。胴部文様は縦位の沈線による長楕円形文と、逆U字の懸垂文を施すが、交互配置ではない。各3単位。図右側に突起を有する橋状把手を付け、直下に短い逆U字懸垂文を置く。把手両脇には蕨状文を描いている。地文は複節RLRで、区画内ではなく外側に充填施文する。現存高13.3cm、口径推定8.5cm、底部推定8.0cm、器厚0.9～1.4cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗褐色、明褐色を呈する。

第53図3は大形の深鉢である。炉跡周辺から、破片の状態出土している。図化部分で25%残存する。器形は口縁部が外傾する幅広の無文帯、胴部は樽状に上位で膨らむ。頸部に区画隆帯を1条巡らし、1本の隆帯懸垂文を垂下させる。推定10単位。隆帯脇には、はっきりとした沈線を引く。懸垂隆帯間は綾杉状文を充填する。現存高43.3cm、口径推定36.8cm、器厚1.0～1.2cmを測る。焼成は良好で、色調は暗茶褐色、黒褐色、暗赤褐色を呈する。

4は隆帯上に爪形文を加飾する。下部の一部に三角押文が認められる。5は一系列の爪形文を施す。6は口縁部に複列の円形刺突文を巡らす。下部は横位の沈線と、空間に沈線を充填する。接合はしなかったが、第40図1と同一個体と思われる。7は口縁部破片で、2条の沈線懸垂文を垂下させる。地文は単節RLの縦位施文。8は大柄な渦巻文と、崩れた区画文が認められる。口縁部に突起を有する。渦巻文内には地文が施されている。地文は単節RLの横位施文。9は鉢形土器で、口縁部は無文。区画文の一部を残す。地文は単節RL縦位。10は2条の沈線で、波状文を描くと思われる。地文は単節RLで、口縁部横位、以下は縦位に施す。11は区画隆帯の一部を残す。空間には沈線を充填する。12は横位の区画隆帯から、逆V字状に隆帯を垂下させる。隆帯上には刻目を施し、空間はやや斜位の集合沈線を充填している。13は浅鉢の破片である。文様帯下端に2本の隆帯を巡らす。上位の区画内は集合沈線を施す。14・15は地文条線の土器で、深鉢の胴部と思われる。

第50号住居跡出土土器 (第54図)

本住居跡は炉跡のみが検出されたため、出土遺物は非常に少ない。復元、図化し得たのは、炉跡埋設土器のみである。

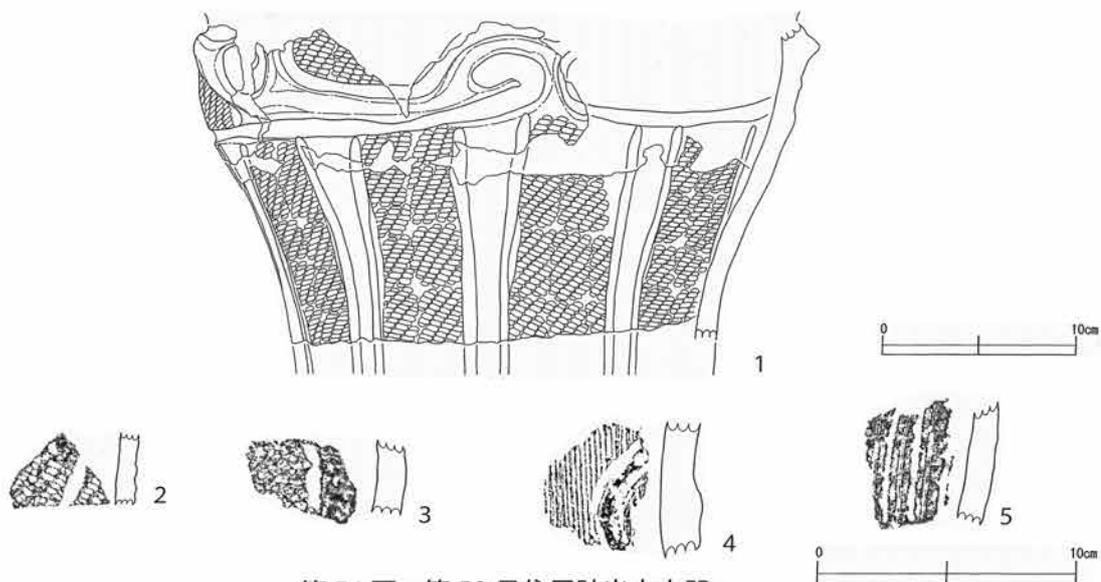
第54図1は炉跡埋設土器で、攪乱のため1/2以上を欠く。図化部分で40%残存。全体的に作りの粗い土器である。口縁部が、わずかに内湾し、胴部は括れが弱い器形を呈する。口縁部文様は渦巻文と区画文が入り組むが、崩れが顕著である。文様下端の区画線は、不明確となっている。胴部は太い沈線による幅広の磨消懸垂文を施す。単位不明。地文は口縁部、胴部ともに単節RLの縦位施文。原体は、かなり太めで、あまり乾燥しないうちに施文したためか、滑りが目立つ。現存高16.9cm、器厚1.0～1.2cmを測る。焼成は良好であるが、内面の被熱痕跡は非常に強い。色調は茶褐色、暗茶褐色、明褐色を呈する。

2～5は、いずれも深鉢胴部破片である。2は懸垂沈線文が見られる。地文は単節RL縦位。3は磨消懸垂文を施す。地文は単節LR縦位。4・5は条線地文で、4は隆蛇行帯懸垂文、5は沈線懸垂文を施す。

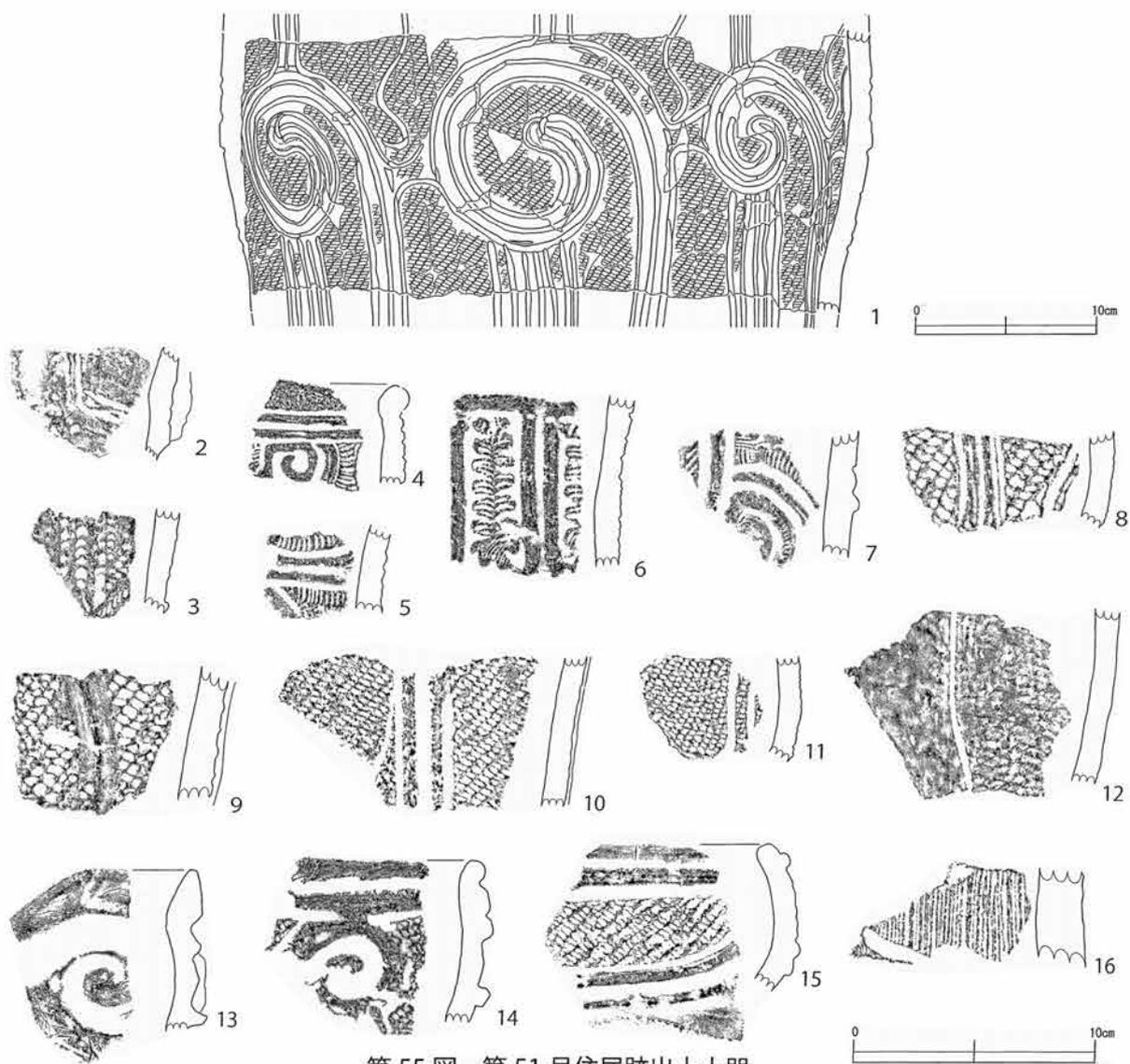
第51号住居跡出土土器 (第55図)

本住居跡の出土遺物は比較的少ない。復元、図化し得たのは、覆土出土の1個体のみである。

第55図1は大形の深鉢の胴部上位である。図化部分で50%が残存する。器形は胴部上位で膨らみ、下位に向けて徐々に径を減じる。文様は大柄な渦巻文3本の沈線で描き、末端を下位へ垂下させる。渦巻の先端は、わずかに肥厚する。渦巻文同士は、短弧線で連結される。上位には渦巻文本体に3本沈線、間に蛇行沈線が施されている。下位には上位の3本沈線に対応して、5～7本沈線を垂下させる。渦巻文及



第54图 第50号住居跡出土土器



第55图 第51号住居跡出土土器

び懸垂沈線間は、部分的に地文を磨り消している。地文単節 R L の縦位施文。現存高 15.6cm、器厚 1.1～1.3cm を測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、明褐色、暗褐色を呈する。

2 は刻目を施した隆帯脇に、細い角押文を複列施す。胎土には金雲母を含む。3 は隆帯に沿って、角押文及び三角押文が施される。4 は半裁竹管による区画内に、渦巻文と、その周囲に爪形文を施す。5 は背の低い隆帯脇に爪形文に沿わせる。6 は長方形区画内に爪形文を施文し、その周囲を半裁竹管の刺突を巡らす。蓮華文を逆にしたような文様。7 は隆帯上に刻目を加飾し、区画内に蓮華文を施す。8～12 は胴部破片である。地文は 8～11 が単節 R L、12 が無節 L。懸垂文は 8 が半裁竹管による沈線、9・10 が隆帯、11 が単沈線、12 が幅広の磨消懸垂文である。13～15 は口縁部破片である。13 は口縁部に突起が付き、直下に渦巻文が見られる。13 は渦巻文と区画文が認められる。区画内に単節 R L を施文する。15 は区画文の一部で、内側に単節 R L を施す。16 は条線地文に弧線を描いている。

第 52 号住居跡出土土器 (第 56・57 図)

本住居跡からは比較的多く遺物が出土している。7 個体の土器が復元、図化できた。

第 56 図 1 は深鉢の底部付近の破片である。撚糸 L を地文とし、2 本隆帯懸垂文と蛇行懸垂文を交互に配する。推定各 4 単位。前者は間隔が広めで、内側に地文を残す。隆帯脇には沈線が認められる。現存高 9.8cm、底径推定 10.0cm、器厚 1.1～1.2cm を測る。焼成良好。色調は明茶褐色、黒褐色を呈する。内面にはオコゲ状の炭化物が付着している。

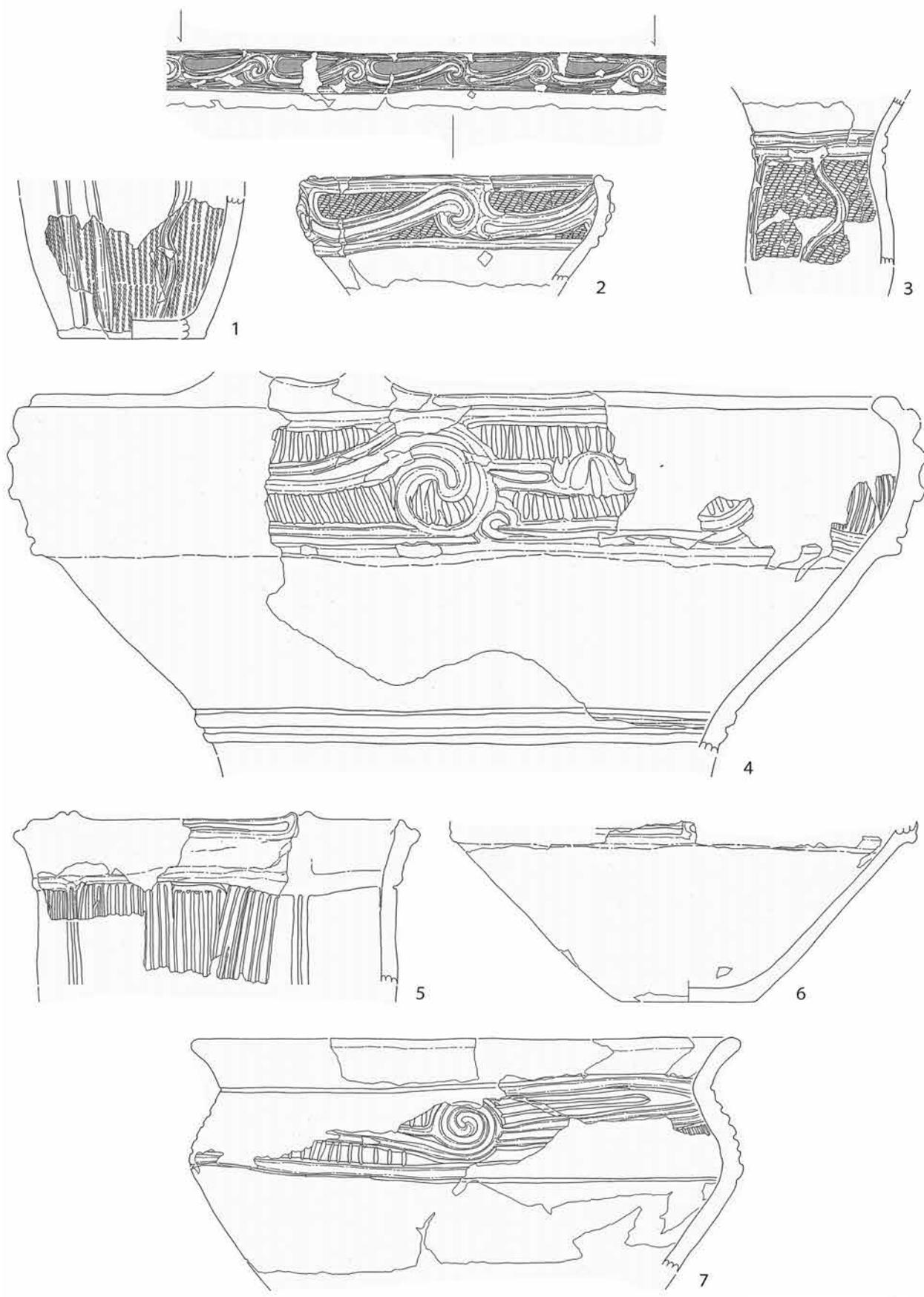
2 は小形の深鉢である。図化部分で 90% が残存する。器形は口縁部が緩く内湾し、頸部に直線的に至る。口縁部文様は渦巻繋ぎ弧文的で、太目の隆帯で文様を作出する。上下に半円状、三角形の区画を持つ。5 単位構成。各単位は多少の長さの違いはあるが、同じモチーフの完全な繰り返しとなっている。頸部は無文である。地文は単節 R L の縦位施文。現存高 8.0cm、口径 19.6cm、器厚 0.8～1.0cm を測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、黒褐色を呈する。

3 も小形の深鉢である。図化部分で 20% が残存する。器形は頸部で括れ、胴下部で膨らむ。頸部は無文帯で、区画隆帯は 2 本である。胴部文様は 2 本隆帯懸垂文と蛇行懸垂文を交互に配する。推定各 4 単位。地文は粗い単節 R L で、縦位に施文する。現存高 11.5cm、器厚 0.6～1.0cm を測る。全体に被熱痕跡が顕著で、劣化している。色調は赤褐色、暗褐色を呈する。

4 は大形の深鉢である。図化部分で 30% が残存する。器形は口縁部が内湾し、頸部に直線的に至る。口縁部には形状は不明であるが、把手が付くものと思われる。口縁部文様は残存部分が少なく不明確であるが、2 本隆帯で連結するによる横 S 字文が看取される。古手の要素である交互刺突文が 1 箇所認められる。空間には縦位の沈線を充填する。この充填手法は渦巻部にも使用されている。頸部は幅広の無文帯で、下端区画隆帯は 2 本と思われる。現存高 26.4cm、口径推定 58.6cm、器厚 1.2～1.6cm を測る。焼成やや不良。色調は暗褐色、黒褐色を呈する。

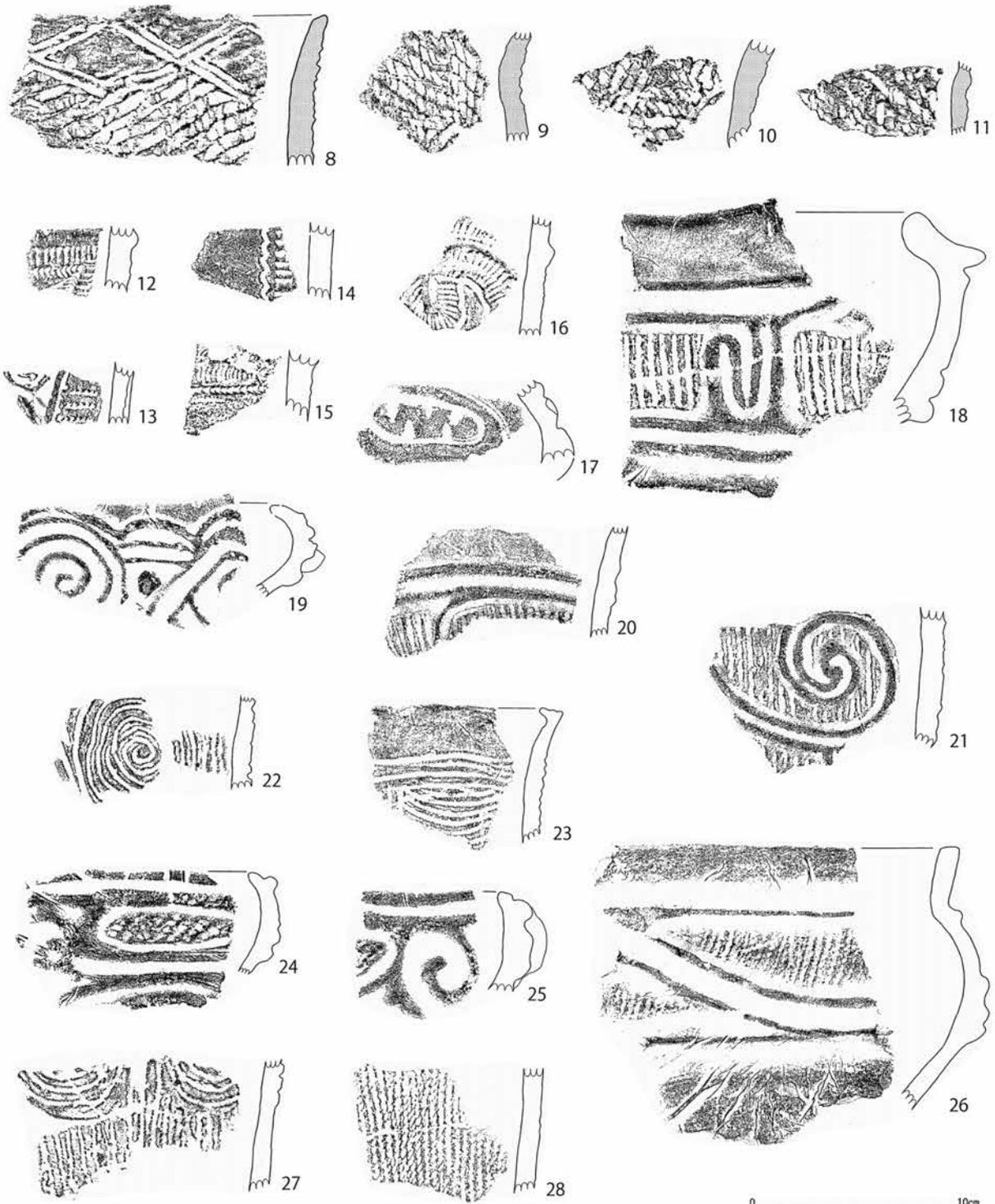
5 は円筒形の深鉢と思われる。破片からの推定復元である。口縁部には突起が 1 箇所残存するが、対になって数単位置かれた可能性もある。口縁部は、わずかに外傾する無文帯で、胴部との境界部分は肥厚する。胴部は 2 本隆帯を垂下させるが、単位は不明である。空間には半裁竹管内面で内面の平行沈線を充填する。現存高 12.1cm、口径推定 25.6cm、器厚 1.1～1.3cm を測る。焼成は良好であるが、内面に被熱痕跡有り。色調は暗褐色、茶褐色を呈する。

6 は浅鉢の下半部である。図化部分で 80% 残存。器形は底部から外傾して立ち上る。頸部に 1 本の区



第56图 第52号住居跡出土土器(1)





第57図 第52号住居跡出土土器(2)

画隆帯を巡らす。口縁部文様の一部を残すが、モチーフは不明である。現存高 12.8cm、底径 9.4cm、器厚 0.7 ~ 1.1cmを測る。焼成は良好で、色調は暗茶褐色、黒褐色、暗褐色を呈する。

7も浅鉢で、図化部分の40%が残存する。器形は口縁部が「く」字状に屈曲し、頸部で球形に膨らみ、直線的に底部に至ると思われる。口縁部は板状の幅広無文帯下に、2本隆帯による渦巻文と区画文を展開する。単位数は不明。隆帯脇には沈線を引く。区画内は横位の松葉状沈線と、縦位の短沈線を施している。頸部の区画隆帯は1本である。現存高 16.6cm、口径推定 37.4cm、器厚 1.1 ~ 1.3cmを測る。焼成良好。

色調は黒褐色、暗茶褐色、暗赤褐色を呈する。

第 57 図 8～11 は、いずれも胎土に繊維を含む。8 は口縁部に半裁竹管で連続的に菱形文を描き、地文に無節 L を施文する。9～11 は反撚り R R を施文している。12 は隆帯脇に幅広の角押文を施し、三角押文を並行させる。13 は印刻状の三叉文が認められる。三叉文脇には半裁竹管の連続刺突が施されている。14 は爪形文に波状沈線を沿わせる。15・16 は隆帯脇に爪形文を施す。15 は三角押文、16 は波状沈線を並行させる。17 は浅鉢で、楕円区画内に交互刺突文を施す。18 は 4 と同一個体と思われる。やや幅広の無文の口縁部は内傾する。2 本隆帯で文様帯の上下を連結する J 字文が見られる。19 は褶曲文の系統。隆帯の貼付けにより渦巻文等を作成している。20～22 は深鉢胴部破片である。20・21 は撚糸 L 地文に隆帯による懸垂文、渦巻文を貼り付ける。20 は頸部無文帯を持つ。22 は単沈線で渦巻文を描いている。23 は無文の口縁部を 2～3 条の横位沈線で区画し、直下に弧状沈線を重畳させる。24～26 は口縁部破片である。24・25 は渦巻文と区画文の交互配置で、地文は単節 R 1。26 は浅鉢である。板状の無文口縁部は外傾し、口縁部文様部は球形に膨らむ。2 本隆帯による区画文が認められる。地文は撚糸 L。27 は 22 と同一個体の可能性がある。並列の渦巻文下に、集合沈線を垂下させる。28 は地文のみ施される。撚糸 L。

第 54 号住居跡出土土器 (第 58 図)

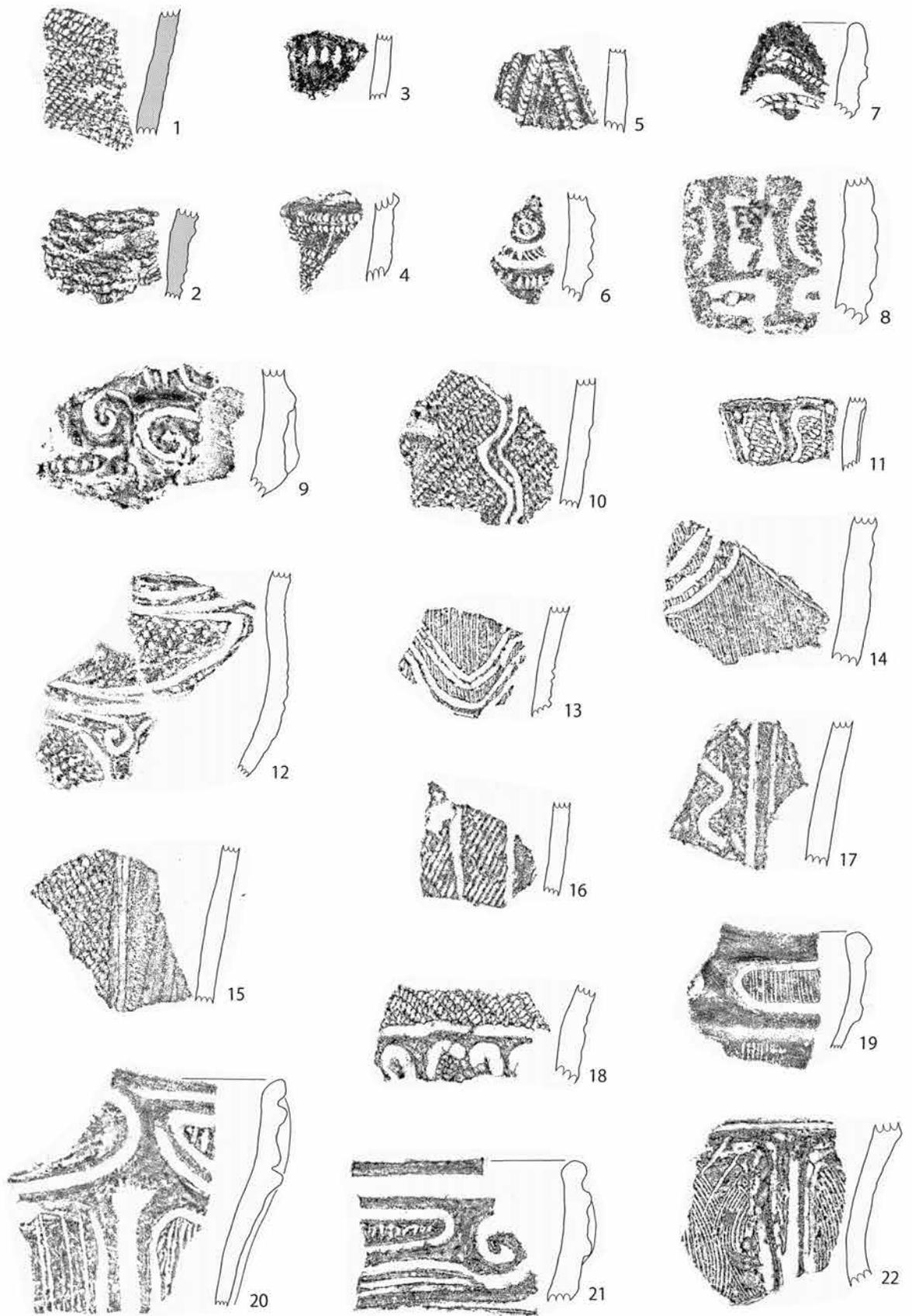
本住居跡は覆土が薄く攪乱も多いため、出土遺物は非常に少ない。復元、図化された土器個体は無い。

第 58 図 1・2 は胎土に繊維を含む。1 は単節 R L を横位、縦位に施文して菱形に構成する。2 は反撚り R R を施文している。接合痕を残す。3 は刻み目が認められる。胎土に金雲母を含む。4 は楕円区画内に複列の角押文が施される。5 は隆帯脇に複列の三角押文が施されている。6 は渦巻或いは同心円文状の隆帯上に刻目を施す。7 は突起先端部である。隆帯脇に複列の角押文を施している。8 は楕円区画の接合部で、工字部分に縦位の波状隆帯が貼り付けられている。9 は頸部破片で、双方向から巻く渦巻文が認められる。10・11 は胴部破片で、いずれも単節 R L を地文とする。10 は 2 条の蛇行沈線懸垂文、11 は蛇行隆帯懸垂文を施す。12～14 は連弧文、波状文が見られる。12 は下位の文様で、連弧文から沈線懸垂文が垂下し、内側に付帯文様である渦巻文を施している。地文単節 R L。13 は半裁竹管内側で重複施文せずに 4 条の波状文を描いている。地文は条線。14 は条線地文に、単沈線で 3 条の弧線を描く。15～18 は胴部破片で、いずれも磨消懸垂文が認められる。15 は幅広の磨消懸垂文で、沈線は浅く不明瞭。地文は単節 L R。16 は単節 R L の地文部に沈線懸垂文を施す。図右側が磨り消されている。17 は単節 L R 地文部に蛇行沈線懸垂文を施す。磨消懸垂文は 3 本沈線である。18 は頸部付近で、上位に単節 R L を施文する。下位には蕨状文の先端が見られる。19～21 は口縁部破片である。19・20 楕円区画文の一部を残す。いずれも頸部無文帯を持たない。地文は 19 が条線、20 が沈線である。21 は渦巻文と楕円区画の交互配置である。楕円区画内には縦位沈線が充填されているが、隆帯脇の幅広の調整から、ほとんど磨り消されている。22 は頸部から胴部上位の破片である。頸部区画隆帯から 2 本隆帯懸垂文が垂下する。空間には曲線条線が充填されている。

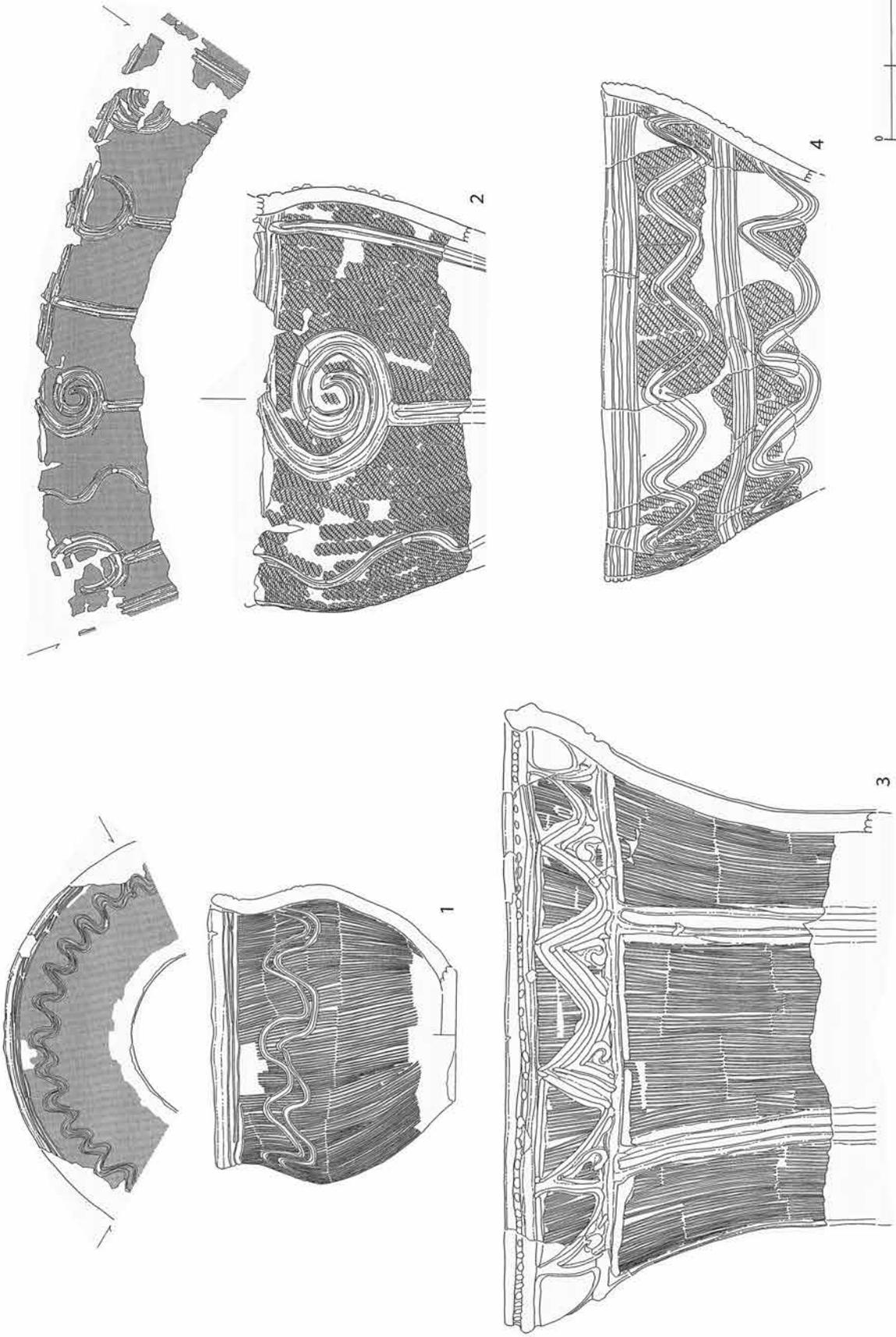
第 55 号住居跡出土土器 (第 59～62 図)

本住居跡からは多量の遺物が出土している。復元、図化し得た土器は 12 個体を数える。

第 59 図 1 は炉跡埋設土器で、口縁部の一部と底部を欠く。全体の 80% 程度が残存する。器形は胴上位で張る鉢形を呈する。口縁部は、わずかに外傾する。口縁部は幅の狭い無文帯で、直下に半裁竹管内側



第 58 图 第 54 号住居跡出土土器



第59图 第55号住居跡出土土器(1)

により3～4条の沈線を引く。胴部は地文に条線施文後、口縁部の沈線と同じ施文具で2段の粗い波状文を描く。基本的に下段が後から施されるが、上下が逆転している箇所も認められる。沈線間は地文が磨り消されている。波頂部は12単位。底部付近は地文が施されていない。器高16.7cm、口径17.4cm、底径推定8.6cm、器厚0.9～1.0cmを測る。焼成は良好であるが、上位を中心に被熱痕跡が顕著である。色調は明赤褐色、灰褐色、明褐色、暗褐色を呈する。

2は旧住居跡に伴う屋内埋葬で、口縁部と胴下半部を欠く。図化部分で90%残存。器形は頸部で括れ、胴部上位で膨らむ。頸部に2条の区画隆帯を巡らす。胴部文様は地文施文後、2本隆帯の懸垂文で器面を2分し、刺股状隆帯文と渦巻文を置き、下位に2本隆帯を垂下させる。片方の区画には、両文様間に蛇行懸垂隆帯を配す。隆帯脇には沈線が部分的に施される。刺股状文の開放部は逆になっている。地文は細かい単節RLで、縦位、斜位に施文している。現存高15.1cm、器厚0.9～1.1cmを測る。焼成は良好で、色調は黒褐色、暗茶褐色、暗赤褐色を呈する。

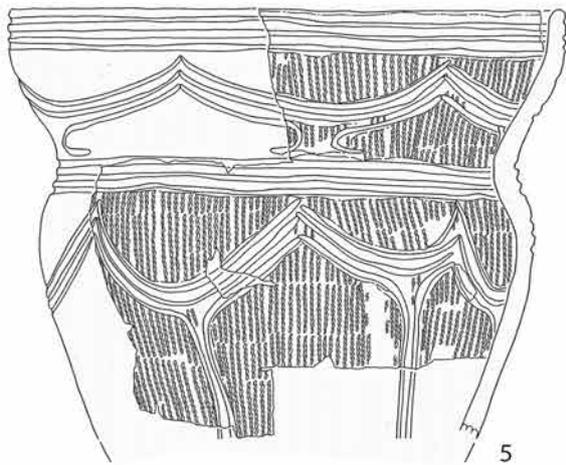
3は新住居跡の屋内埋葬である。口縁部約2/3と胴下半部を欠く。図化部分で70%残存。器形は胴部から頸部にかけて外傾的に立ち上り、口縁部が弱く内湾する。口唇部直下に沈線を巡らし、内側に連続円形刺突を加える。口縁部文様は1～3本沈線の波状文類似の文様を描くが、連続的なものではなく、諸所で繋ぎなおしている。各波頂部下には釣り針状の付帯文様を置く。沈線間は地文を磨り消すが、付帯文様周辺は残っている部分がある。頸部の区画隆帯は1本である。胴部は2本懸垂隆帯を6単位垂下させている。頸部区画隆帯下と懸垂隆帯脇には、ナゾリを入れている。地文は条線である。現存高25.0cm、口径推定40.7cm、器厚1.1～1.4cmを測る。焼成良好。色調は赤褐色、明赤褐色、暗茶褐色、明褐色を呈する。

4～第61図14は覆土から出土したものである。4は口縁部から頸部までが復元された。図化部分で約30%残存。直線的に開く器形を呈する。括れは弱い。口縁部と頸部に半裁竹管内面により、4本の区画沈線を巡らす。口縁部、胴部ともに、半裁竹管重複施文による3本沈線の波状文を描く。波頂部の単位は不明。胴部文様は一部区画沈線に付く。沈線間は地文が、ほとんど磨り消されているが、意図的ではないようである。地文は単節RLの縦位施文。現存高14.5cm、口径推定33.4cm、器厚0.8～1.1cmを測る。焼成良好。色調は暗褐色、明褐色、暗茶褐色を呈する。

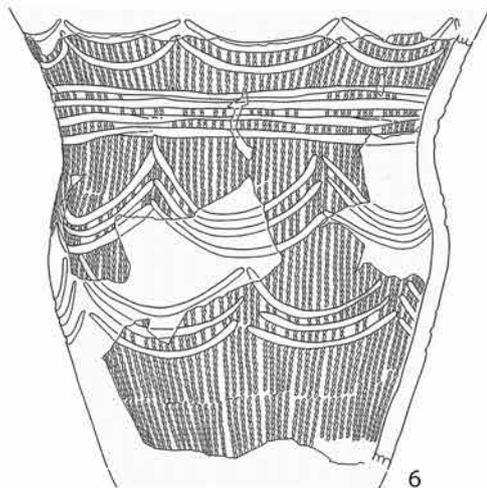
5は口縁部から胴部上半にかけて復元された。図化部分で約30%残存する。器形は口縁部が直立気味で、頸部で強く括れ、胴部が張る。口縁部及び頸部には、3本単沈線による区画文を巡らす。口縁部及び胴部文様帯には、単沈線2本による弧線文を描く。いずれも推定6単位構成。口縁部文様は山形の付帯文様、胴部は沈線懸垂文を付随させる。沈線間は、ほとんどが磨り消されている。地文は撚糸Lで、縦位、斜位に施す。現存高22.3cm、口径推定28.0cm、器厚0.9～1.2cmを測る。焼成良好。色調は明赤褐色、黒褐色、暗茶褐色を呈する。

6は頸部から胴部下半にかけて復元された。図化部分で40%が残存する。器形は頸部で強く括れ、胴中位で張る。頸部には4本の単沈線による区画文を巡らす。口縁部文様は2本沈線の弧線文が認められるが、胴部と同様、3本沈線だったと思われる。胴部文様は3本単沈線により、2段の弧線文を互い違いに描く。沈線間は磨り消していない。地文は撚糸L。現存高22.8cm、器厚0.8～1.0cmを測る。焼成良好。色調は明褐色、黒褐色を呈する。

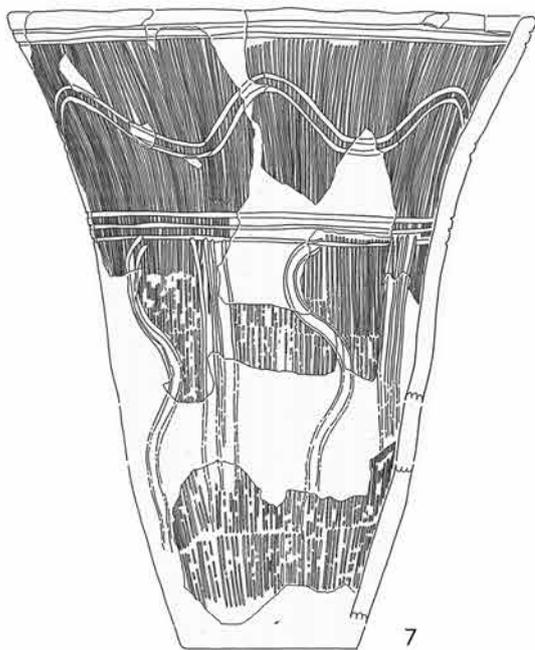
7は口縁部から胴部下半にかけて復元された。図化部分で40%を残す。器形は口縁部が外傾して開き、頸部は弱く括れる。口縁部と頸部に半裁竹管による区画線を巡らす。口縁部2条、頸部は重複施文の3条



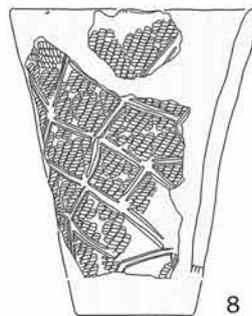
5



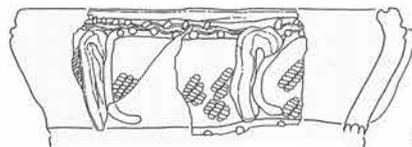
6



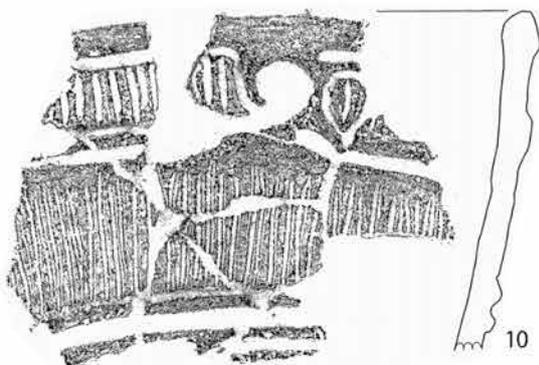
7



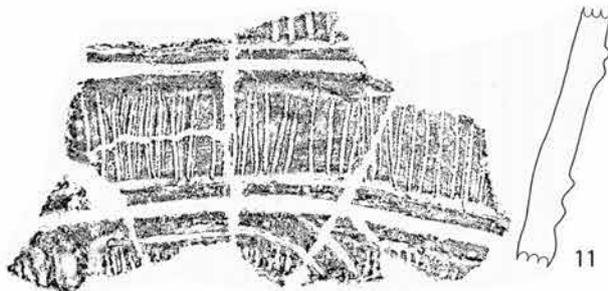
8



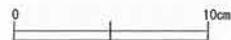
9



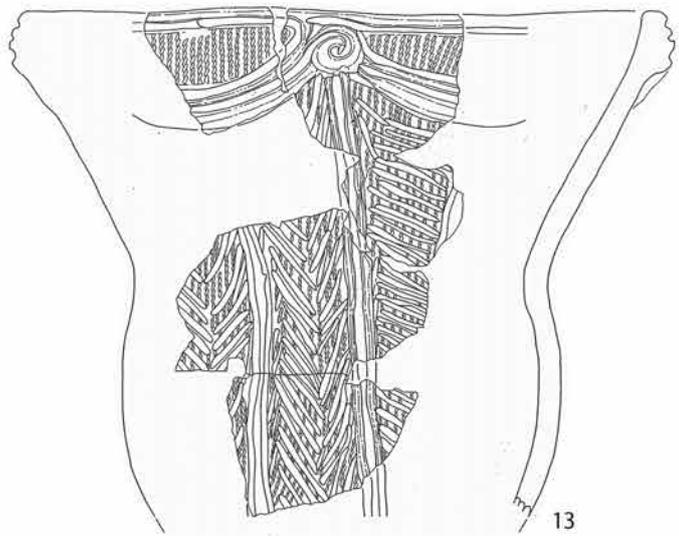
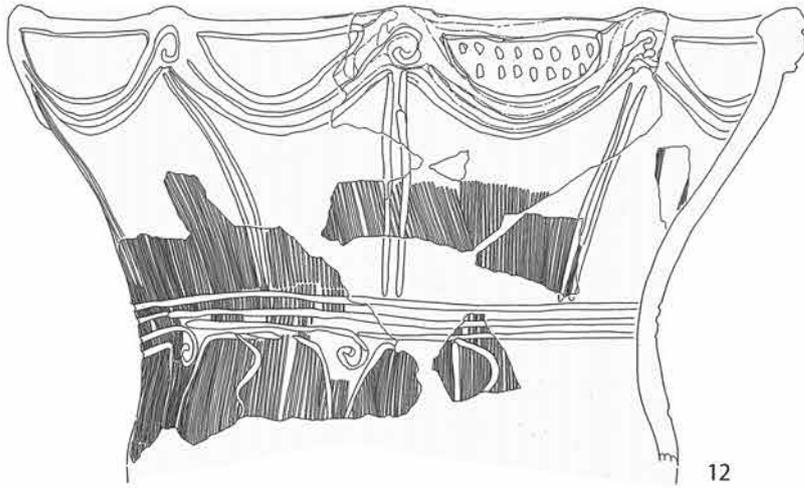
10



11



第60图 第55号住居跡出土土器(2)



第61图 第55号住居跡出土土器(3)



である。口縁部文様は半裁竹管による2条の波状文を施す。波頂部は推定で6～7単位。胴部は同一施文具により3条の沈線懸垂文と2条の蛇行懸垂文を交互に垂下させる。推定各6単位。地文は条線で、沈線間の一部が磨り消されている。また、胴部中位から下位にかけて、被熱により地文が消えている部分が多い。現存高32.2cm、口径推定26.8cm、器厚0.9～1.1cm。焼成良好。色調は茶褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

8は小形の土器で、口縁部から胴下半部にかけて復元された。図化部分で約25%残存。器形は底部から口縁部にかけて、直線的に開きつつ立ち上がる。地文に単節RLを縦位、斜位に施文後、半裁竹管内面で格子目状の文様を描く。沈線間は強く押し付けられたため、地文は磨り消されている。現存高14.0cm、口径推定12.5cm、器厚0.7～1.0cmを測る。焼成良好。色調は暗褐色、暗黄褐色、黒褐色を呈する。

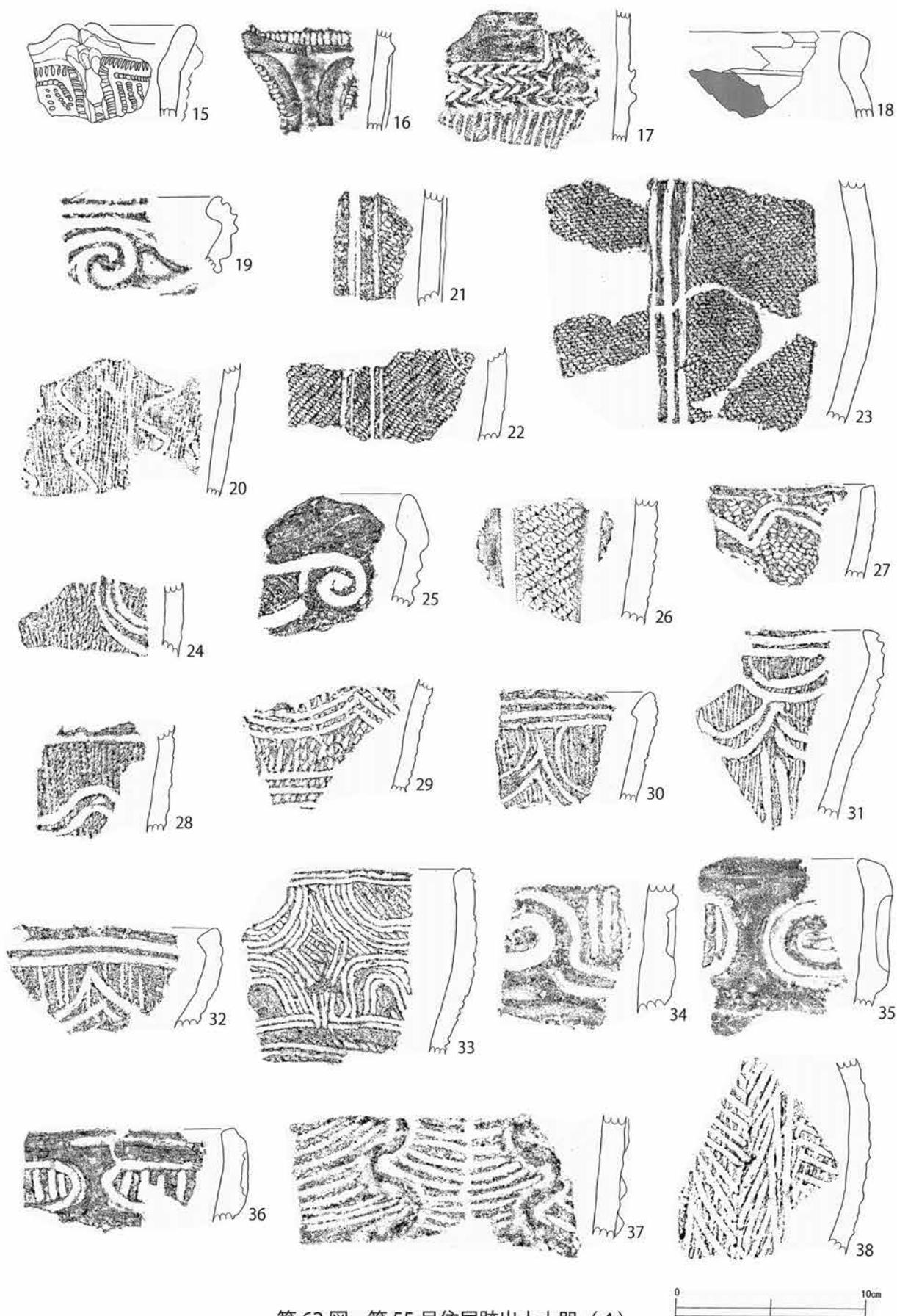
9は口縁部の破片からの推定復元である。器形は口縁部が緩く内湾し、頸部で括れる。口唇部に1条の沈線を巡らす。口縁部に2条の沈線を巡らし、交互に刺突を加える。頸部にも同様の区画文様を施すと思われる。口縁部から頸部にかけて仕切り状に隆帯を貼付け、口縁部区画文様から隆帯沿いに沈線を這わす。地文は単節RLの縦位施文であるが、器面が荒れているため部分的に確認できる。現存高6.7cm、口径推定18.2cm、器厚1.0～1.1cmを測る。焼成良好で、色調は黒褐色、暗茶褐色を呈する。

10・11は同一個体で、大形の深鉢である。10は口縁部から頸部、11は頸部から胴部の破片である。器形は口縁部が、わずかに外傾して立ち上がり、頸部の括れは弱い。口縁部文様は渦巻文と楕円区画文の交互配置である。頸部には太い2本隆帯を巡らし、胴部と区画する。胴部には2本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文を交互に垂下すると思われる。地文は沈線と条線で、本来無文帯である頸部にも施されている。

第61図12は比較的大形である。図化部分で約20%が残存する。器形は口縁部が湾曲しながら立ち上がり、頸部は強く括れる。胴部上位は張る。口縁部文様は推定8単位の渦巻文を2本隆帯で連結し、半円状の区画を作出する。区画内には2列の列点を充填する。渦巻文から2本沈線が垂下する。頸部は口縁部文様直下を無文とし、以下に条線を施文する。下端に区画文様として3本沈線を巡らす。胴部は上方が開き、内側に付帯文的に横蕨文を持つ2本沈線懸垂文と蛇行懸垂文、沈線懸垂文と蛇行沈線懸垂文の組み合わせが認められるが、全体の単位、構成は不明である。地文は頸部下半と同様、条線である。現存高24.1cm、口径推定37.8cm、器厚1.0～1.3cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、明褐色で、破損後の被熱のためか、隣接する破片同士で明確に色調が異なる部位がある。

13は破片から復元実測したものである。器形は口縁部が直線的に開き、頸部で強く括れ、胴部は上位で膨らむ。地文に撚糸Lを施文後、口縁部に推定6単位の渦巻文を2本隆帯で弧状に結び、半円形区画を作出する。区画内は隆帯脇に沈線を引くが、下端の処理が粗く、貼付け感を残す。頸部、胴部文様は渦巻文から2本隆帯懸垂文、弧線隆帯中央から2本沈線懸垂文を垂下させる。懸垂文間には綾杉文と斜行沈線を施す。隙間には地文が見られる。隆帯懸垂文脇は未処理で、貼付け感を残している。実測図最下部の破片は、第63号住居跡覆土から出土している(第77図31)。現存高26.4cm、口径推定31.8cm、器厚1.1～1.2cmを測る。焼成良好。色調は明褐色、黒褐色、明茶褐色を呈する。

14は大形の深鉢である。図化部分で30%が残存する。器形は口縁部が直線的に開き、頸部で強く括れ、胴部上位が張る。口唇部内面に稜を持ち、斜行沈線を施す。口縁部文様は半裁竹管内面による重弧文を推定6単位施す。重弧施文時に片側が浮いた部分も多く見られ、粗さが目立つ。重弧境界には先端が逆釣針状の、交互刺突を加えた蛇行隆帯を垂下させる。頸部には交互刺突波状隆帯を巡らす。胴部は残存部分が少ないため不明確であるが、先端に突起を持つ2本隆帯懸垂文を垂下させて器面を分割し、その間に交互



第 62 图 第 55 号住居跡出土土器 (4)

刺突波状隆帯を垂下させる。両者の単位は不明。空間には半裁竹管内面の集合沈線を充填する。現存高 36.1cm、口径推定 53.0cm、器厚は厚く、1.5～1.8cmを測る。焼成は、やや不良。色調は明褐色、暗茶褐色、黒褐色を呈する。

第 62 図 15 は双頭の小突起から隆帯を垂下し、区画を作出する。隆帯上は刻目を入れる。隆帯脇に幅広い角押文を沿わせ、空間に三角押文を充填する。16 は懸垂文の上端と思われる。隆帯脇に幅広い角押文を沿わせ、三角押文を並行させる。17 は円筒土器と思われる。無文口縁部直下に 2 条の隆帯を巡らし、円形の貼付け文と横位の綾杉文を施す。胴部には撚糸 L を施文する。18 は浅鉢の口縁部で赤色塗彩が見られる。19 は口縁部破片で、隆帯による渦巻文に剣先文が付く。20～24 は胴部破片である。地文は 20 が条線、21・22 が単節 R L、23 が単節 L R、24 が撚糸 L である。懸垂文は 20 が蛇行沈線、21～23 は 2～4 本の縦位沈線。24 は渦巻文の一部と思われる。25 は口縁部に突起を有し、渦巻文と区画文の一部を残す。地文は単節 L R。26 は胴部破片で、磨消懸垂文が認められる。地文は単節 R L。27～33 は波状文、弧線文を施すものである。地文は 28・29 が撚糸 L、27 が単節単節 R L、33 が単節 L R、30・31 が条線、32 が沈線である。波状文は 27・28 に、弧線文は 29～32、33 は 2 段の弧線文を対弧状に描いている。いずれも口縁部、頸部に区画文様が認められる。34～6 は口縁部破片である。渦巻文と区画文の一部が見られる。区画内は沈線を施す。37・38 は胴部破片である。37 は蛇行隆帯懸垂文を垂下させ、空間に弧状沈線を充填する。38 は第 61 図 13 と同一個体と思われるが、接合はしなかった。地文に撚糸 L を施し、沈線懸垂文と隆帯懸垂文を垂下させ、綾杉文を施している。

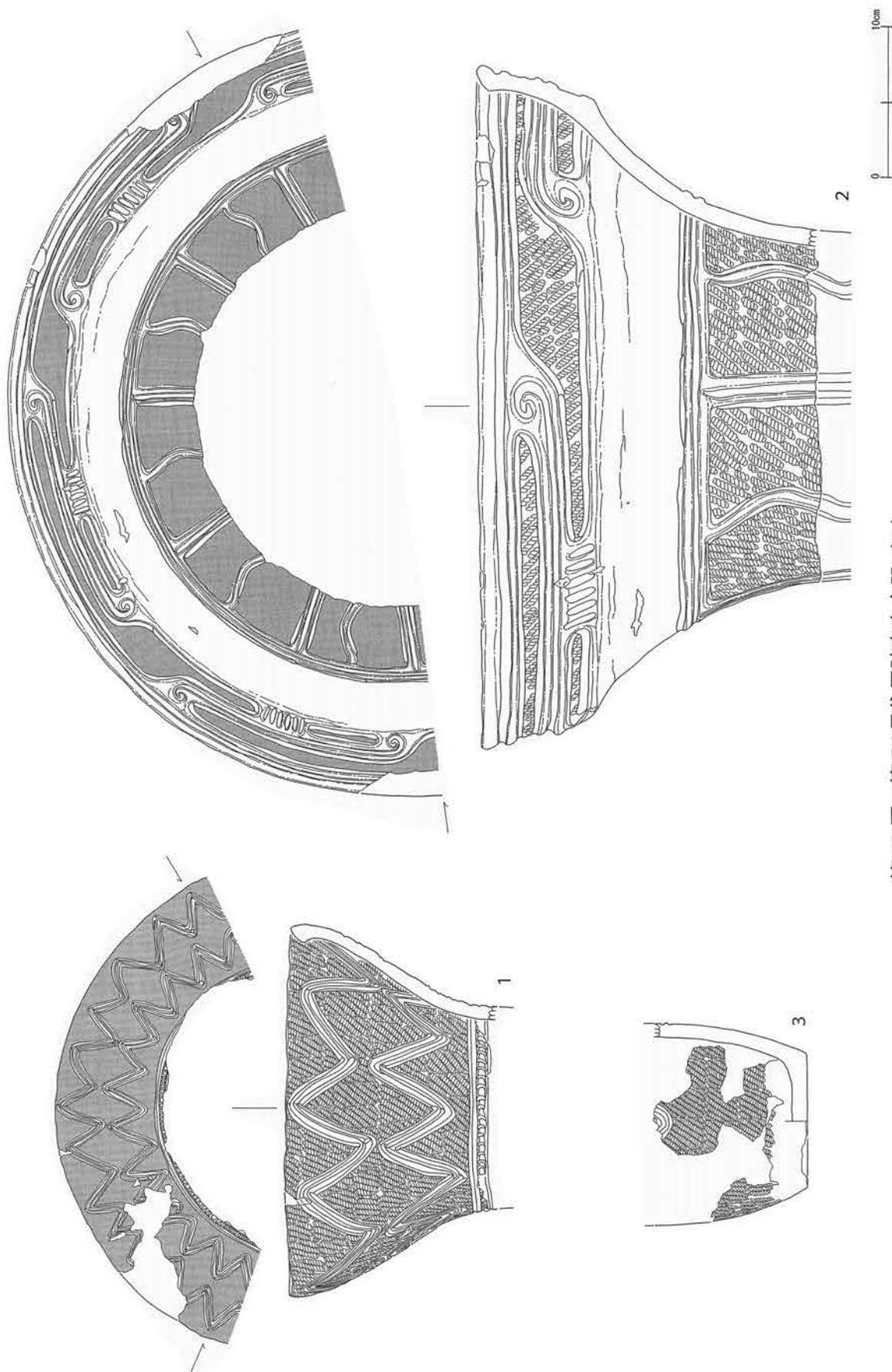
第 56 号住居跡出土土器 (第 63・64 図)

本住居は炉跡埋設土器等、3 個体の土器が復元、図化できた。

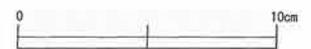
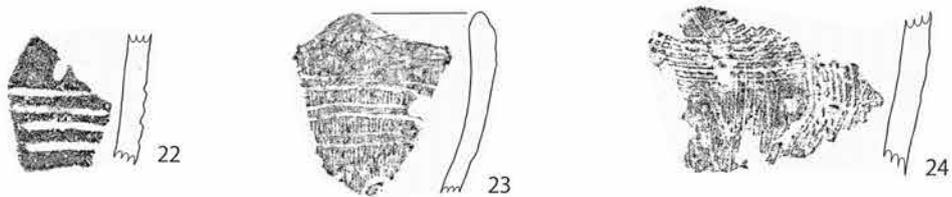
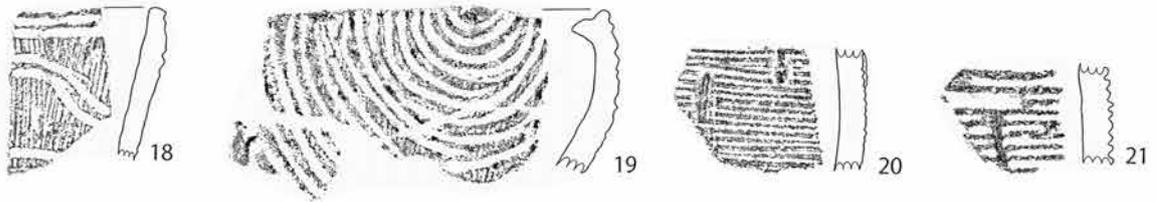
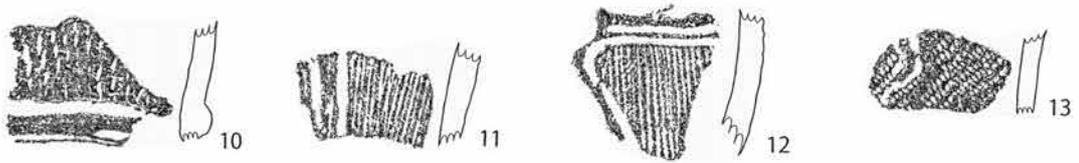
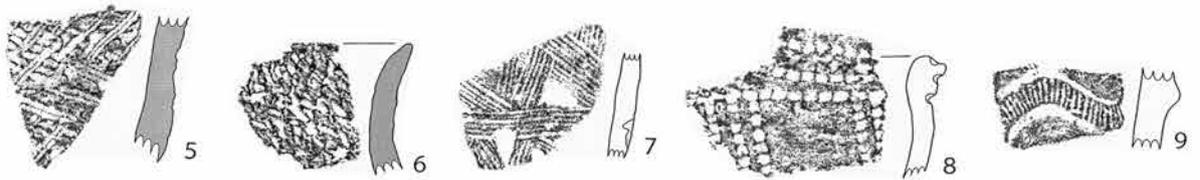
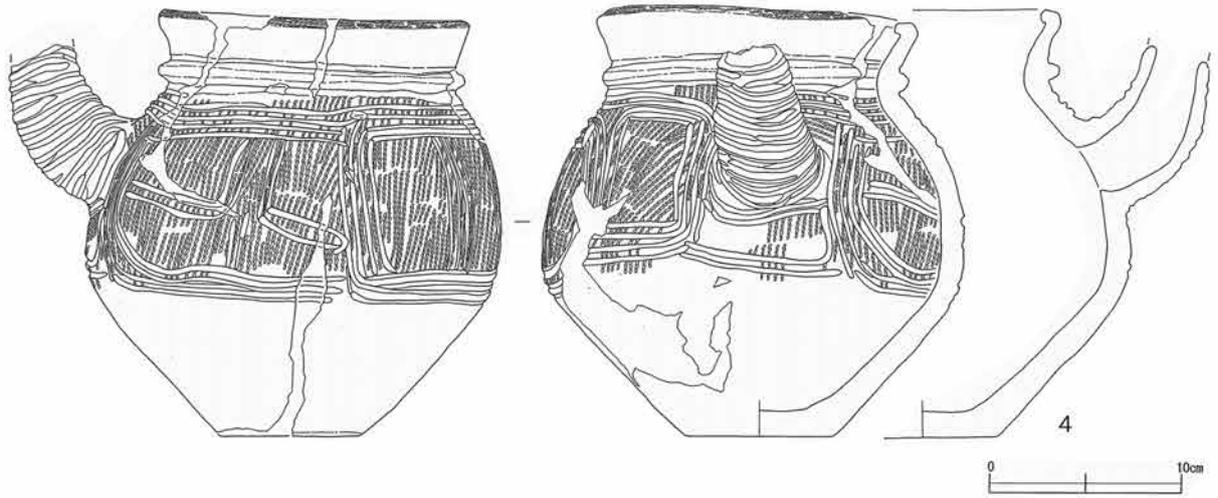
第 63 図 1 は炉跡埋設土器である。胴部を欠き、第 55 号住居跡 P 6 掘削時に口縁部の一部を破損している。図化部分で 90% 残存する。器形は口縁部が、わずかに湾曲して立ち上がる。頸部は強く括れる。胴部は円筒形に近いと思われる。口唇部内側に稜を有する。口縁部文様は鋸歯状文を 2 段、半裁竹管内面で描くが、連続した文様ではなく、上下で連結する。波頂と波底を対応させているため、菱形のモチーフにも見える。波頂部は 11 単位。頸部には同一施文具の重複施文で 3 条の沈線を巡らし、下段に押引文を施している。地文は単節 R L の縦位施文。現存高 14.4cm、口径 24.6cm、器厚 0.8～1.1cm を測る。焼成は良好であるが、内面は被熱が顕著で、劣化している。色調は茶褐色、明褐色、暗褐色を呈する。

2 は屋内埋甕で、大形の深鉢である。胴部中位以下を欠く。図化部分で 95% が残存する。器形は口縁部が外傾気味に立ち上り、頸部に向かって急激に径を減じる。口縁部文様は上下に隆帯を施し、やや幅狭に文様帯を区画する。主文様はクランク類似文で、3 単位作出し両端に渦巻文を置く。渦巻部は板状を呈する。隆帯は低めで、両脇に沈線をくっきりと描いている。クランク中央には板状に粘土を貼付け、6 本の短沈線を入れ、柵状の文様とする。頸部は無文で、輪積み部に亀裂が認められる。頸部には区画隆帯を 2 本巡らす。胴部文様は 2 本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文で、それぞれ 5 単位施す。隆帯脇に沈線を引くが、口縁部文様とは異なり、一様ではない。地文は太い単節 R L で、口縁部横位、胴部は縦位施文であるが、乾いた状態で施文したためか、条間に隙間があく。現存高 23.5cm、口径 45.8cm、器厚 1.1～1.5cm を測る。焼成良好。色調は明茶褐色、明褐色、暗褐色、黒褐色を呈する。

3 は胴部下位から底部が残す。図化部分で 30% が残存する。器形は円筒形を呈する。地文に単節 R L を縦位に施文し、2 本沈線で渦巻状の文様を描いている。現存高 10.4cm、底径 9.0cm、器厚 0.9～1.2cm



第63图 第56号居跡出土土器(1)



第 64 图 第 56 号住居跡出土土器 (2)

を測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、暗褐色を呈する。

第 64 図 4 は注口土器である。口縁部、胴部の一部と注口部の先端を欠くが、ほぼ完形である。器形は鉢形を呈する。口唇部は内屈し、平坦面に地文を施す。口縁部は無文で、下端に鏝を付ける。胴部上半に文様帯を持ち、半裁竹管内面による 4 本沈線で 6 単位の方角区画を描く。区画内は半裁竹管と単沈線併用で、4 本縦位沈線 3 単位、十字文 1 単位、地文のみ 1 単位、注口 1 単位を施す。注口部は単沈線で、鬘状に沈線を引く。地文は撚糸 L で、横位、縦位、斜位に施す。胴下半部は無文である。器高 22.7cm、注口先端 20.7cm、口径 14.3cm、胴部最大径 22.0cm、底径 7.7cm、器厚 0.6 ~ 1.6cm を測る。焼成やや不良。色調は暗茶褐色、暗褐色、黒褐色、黒色を呈する。

5・6 は胎土に繊維を含む。地文は 5 が付加条、6 は反撚り R R である。7 は横位、斜位の細沈線を器面に施し、三角形の印刻を入れる。8 は隆帯で区画し、隆帯脇と区画内に角押文を施す。低い隆帯上に刻目を加飾する。10 は頸部破片で、区画隆帯が見られる。地文撚糸 L。11 ~ 14 は胴部破片。11 は 2 本沈線懸垂文、12 は蛇行沈線懸垂文が認められる。地文は、いずれも撚糸 L。15 は逆 U 字懸垂文が描かれる。地文は単節 L R。16 は口縁部に交互刺突文を巡らし、弧線文を施す。地文撚糸 L。17 は沈線地文で、弧線文と付帯文様、頸部の区画文様を描く。18 は条線地文で、口縁部に 2 本沈線を巡らし、下位に波状文を施している。19 は口唇部内面に稜を持ち、沈線を巡らす。重弧文は単沈線で描かれている。20・21 は半裁竹管内面で、重層的に沈線を施す。縦位の隆帯が一部残存する。22・23 は横位に沈線を引く。22 は単沈線、23 は条線地文に半裁竹管で施している。24 は細沈線で曲線文や縦位沈線を描く。

第 57 号住居跡出土土器 (第 65 図)

本住居跡の復元個体は、炉跡埋設土器のみである。

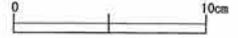
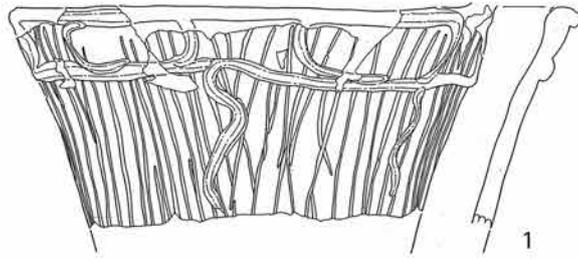
第 65 図 1 は口縁部の大半と、胴部中位以下を欠く。図化部分で 80% 残存。口縁部が直線的に開く器形を呈する。口縁部には突起が付くようだが、形状、単位は不明である。口縁部文様は上下 2 本の隆帯に区画され、間隔を空けて、縦位弧状隆帯により楕円区画を 5 ~ 6 単位作出する。胴部には 4 単位の蛇行隆帯懸垂文を垂下させる。隆帯脇は沈線等の処理がなされず、貼付け感を残している。地文は沈線で、口縁部から胴部まで連続する。現存高 11.7cm、口径推定 22.6cm、器厚 0.9 ~ 1.2cm を測る。焼成は良好であるが、内面は被熱により劣化している。色調は暗赤褐色、暗黄褐色、暗褐色を呈する。

第 58 号住居跡出土土器 (第 66・67 図)

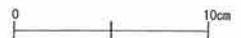
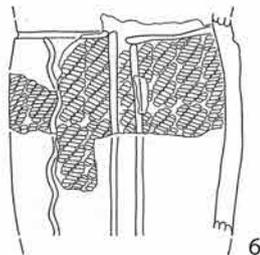
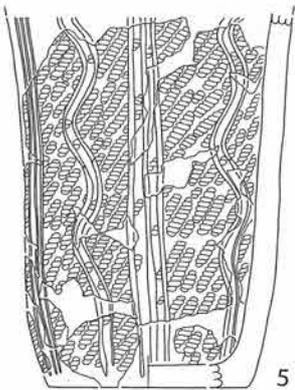
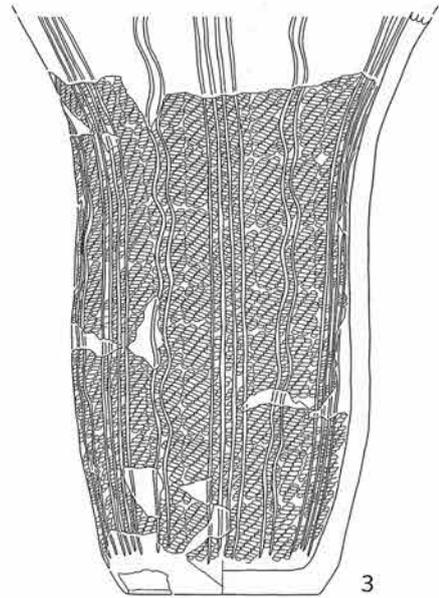
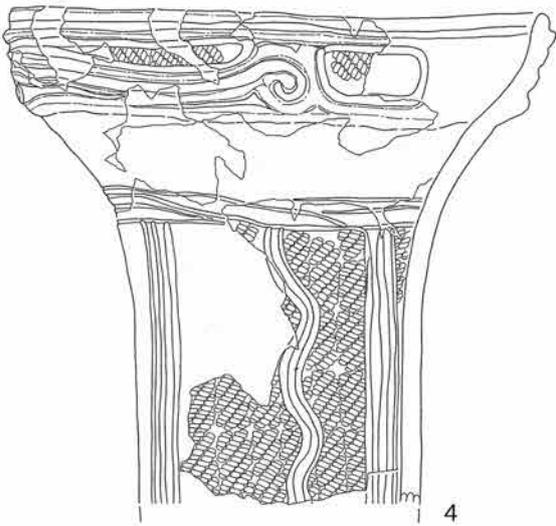
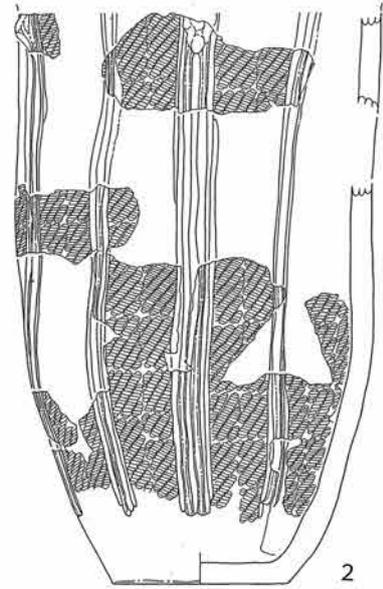
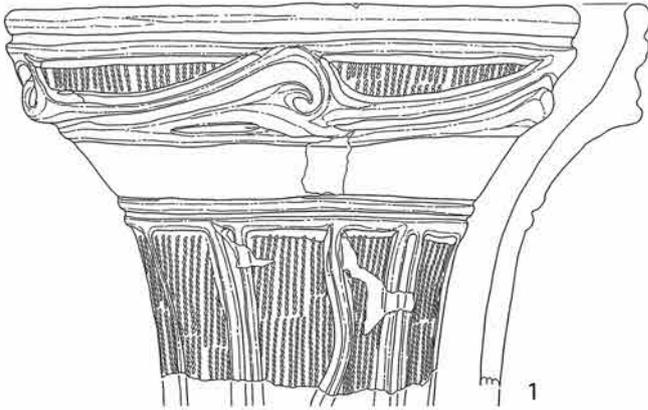
本住居跡の出土遺物は比較的多い。復元、図化し得た土器は 6 個体である。

第 66 図 1 は図化部分で 50% が残存する。器形は口縁部がほぼ直立し、緩やかに頸部に至る。胴部は円筒形を呈する。口縁部文様は上下を隆帯で区画し、渦巻繋ぎ弧文状の文様を、推定 4 単位作出する。文様帯が幅狭なため、弧線隆帯の上下動は弱い。半円状の区画は沈線で縁取られる。頸部は無文帯で、下端を 2 本隆帯で区画する。胴部は 2 本隆帯懸垂文と、蛇行隆帯懸垂文を交互に垂下させる。推定 4 ~ 5 単位施す。蛇行懸垂文の振幅は弱い。隆帯脇の沈線処理は一様ではない。地文は撚糸 L で、口縁部、胴部ともに縦位施文である。現存高 20.1cm、口径 28.4cm、器厚 1.1 ~ 1.4cm を測る。焼成は良好で、色調は暗茶褐色、暗褐色、黒褐色を呈する。

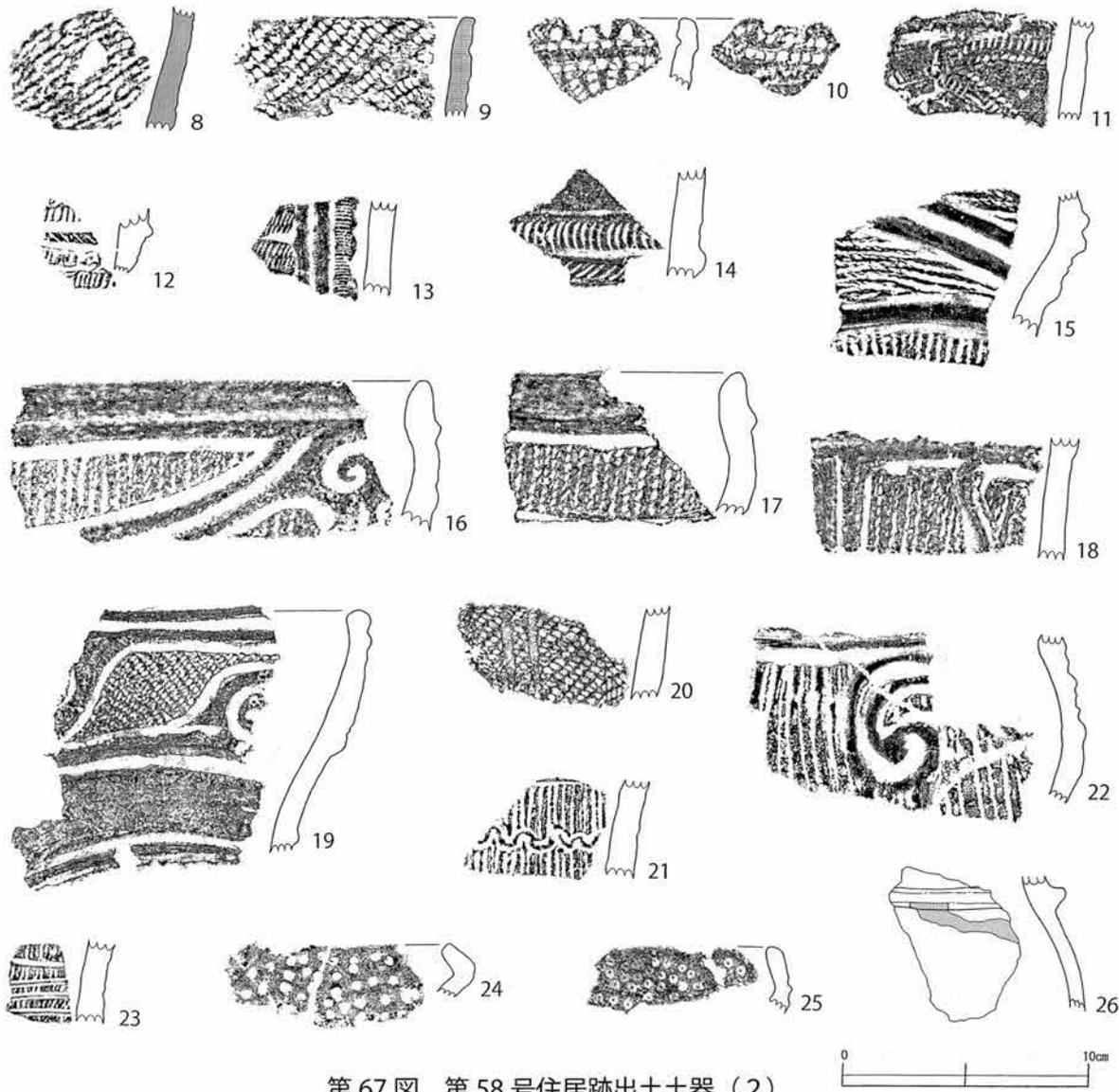
2 は口縁部と、胴部上位の大部分を欠く。器形は長胴の円筒形である。文様は先端に突起を持つ 2 本隆帯懸垂文と、1 本行隆帯懸垂文の交互配置である。推定各 5 単位。2 本隆帯の突起から、口縁部は開く無文帯と思われる。地文は 0 段多条の単節 R L で、縦位施文。現存高は推定で 30.0cm、底径 9.0cm、器厚 1.0



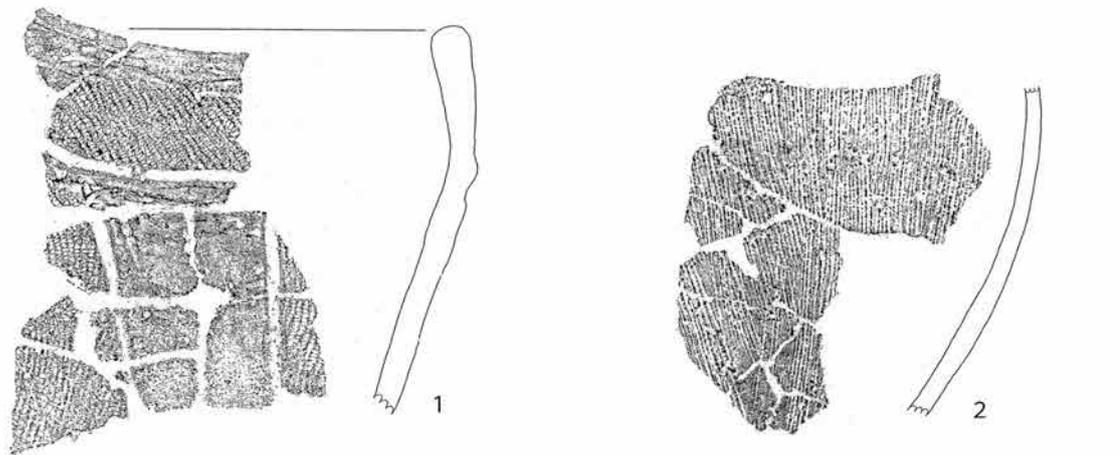
第65图 第57号住居迹出土土器



第66图 第58号住居迹出土土器 (1)



第 67 图 第 58 号住居跡出土土器 (2)



第 68 图 第 59 号住居跡出土土器 (1)

～1.3cmを測る。焼成良好。色調は明褐色、暗褐色、暗茶褐色を呈する。

3は胴上位から底部までを残す。図下部分で80%が残存。器形は長胴の円筒形を呈する。胴上位で、わずかに括れる。文様は半裁竹管内面による沈線懸垂文で、重複施文による4本沈線と、2本の蛇行沈線を交互に垂下させる。深めに施されているが、沈線間の地文を残している。各7単位。地文は単節RLで、縦位に施文する。現存高30.4cm、底径10.0cm、器厚0.9～1.4cmを測る。焼成は良好だが、下半部に顕著な被熱痕が認められる。色調は暗茶褐色、茶褐色を呈する。

4は口縁部から胴部中位を残す。図化部分で50%残存。器形は頸部から口縁部にかけて外傾気味に開き、胴部は円筒形を呈する。口縁部文様帯は幅狭で、長めの横S字文と半円形区画の組み合わせと、長方形区画の交互配置と思われる。推定各3単位。頸部は幅狭の無文帯で、下位を3～4本沈線で区画する。胴部は半裁竹管の内面で、重複施文の3本沈線懸垂文と2本沈線の蛇行沈線懸垂文を交互に垂下する。沈線間は地文が消えている。推定各4単位。地文は単節RLの縦位施文である。現存高26.2cm、口径推定27.2cm、器厚1.0～1.1cmを測る。焼成良好。色調は暗褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

5は胴部中位から底部までを残す。図化部分で40%残存。器形は円筒形を呈する。文様は半裁竹管内面による懸垂文で、重複施文の3本沈線と2本の蛇行沈線を交互に配する。沈線間は地文がほとんど消えている。地文は単節RLの縦位施文で、粗い施文のためか隙間が開く。現存高19.4cm、底径推定10.3cm、器高1.0～1.2cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、茶褐色を呈する。

6は頸部下端から胴部上位を残す。図化部分で50%が残存する。器形は円筒形を呈する。頸部は無文で、下端を沈線で区画する。胴部は単沈線で、2本沈線懸垂文と蛇行懸垂文を交互に配置する。地文は単節RLの縦位施文である。現存高11.7cm、器厚0.8～1.0cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗褐色を呈する。

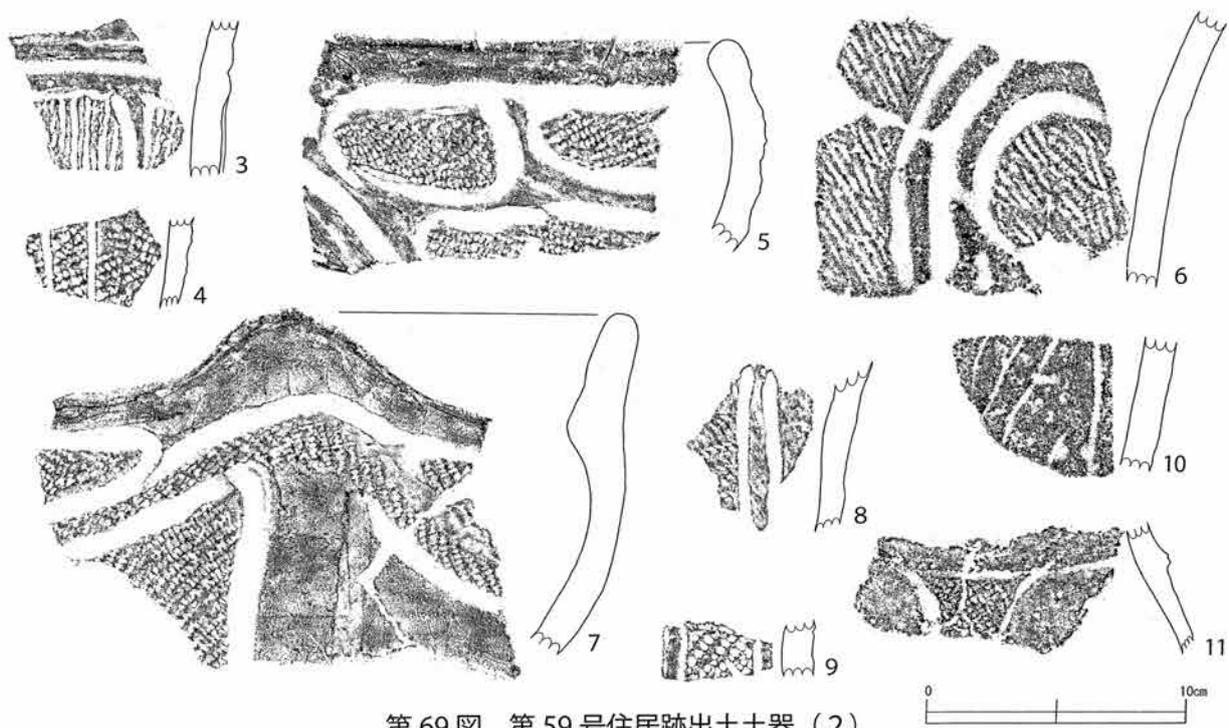
7は底部付近の破片である。図下部分で90%残存。底部接合痕が認められる。地文に浅い細沈線を疎らに施す。現存高4.8cm、底径7.0cm、器厚1.0～1.6cmを測る。焼成良好。色調は暗褐色、明褐色を呈する。

第67図8・9は胎土に繊維を含む。8は無節L、9は単節LRを施文している。10は角押文を内外面に施す。11は隆帯脇に爪形文を施し、三角押文を並行させる。12は隆帯上に刻目、脇に爪形文を施し、波状沈線を沿わせる。14も同様であるが、波状沈線は伴わない。15は頸部付近の破片である。1本隆帯で口縁部文様帯を区画し、2本隆帯で文様を作出している。地文は撚糸Lで、口縁部は横位、胴部は縦位に施文する。16～18は地文に撚糸Lを施す。口縁部破片で、渦巻文を2本隆帯で弧状に繋ぐ。17も口縁部破片で、下端に区画隆帯脇の沈線が認められる。18は胴部破片で、2本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文が垂下する。19・20は地文に単節RLを施す。19は口縁部から頸部の破片で、渦巻文と区画文の一部を残す。頸部は無文帯である。20は2本沈線懸垂文を施す。21は撚糸Lを地文に施し、横位の波状沈線を半裁竹管内側で描く。22は胴部上位の破片。半裁竹管内側の平行沈線を器面に施し、渦巻文を貼付ける。23は条線地文で、平行沈線を多段に施す。24・25は同一個体の口縁部破片である。器面に竹管の刺突文を施している。26は罅付土器の頸部である。外面に赤色塗彩を残す。

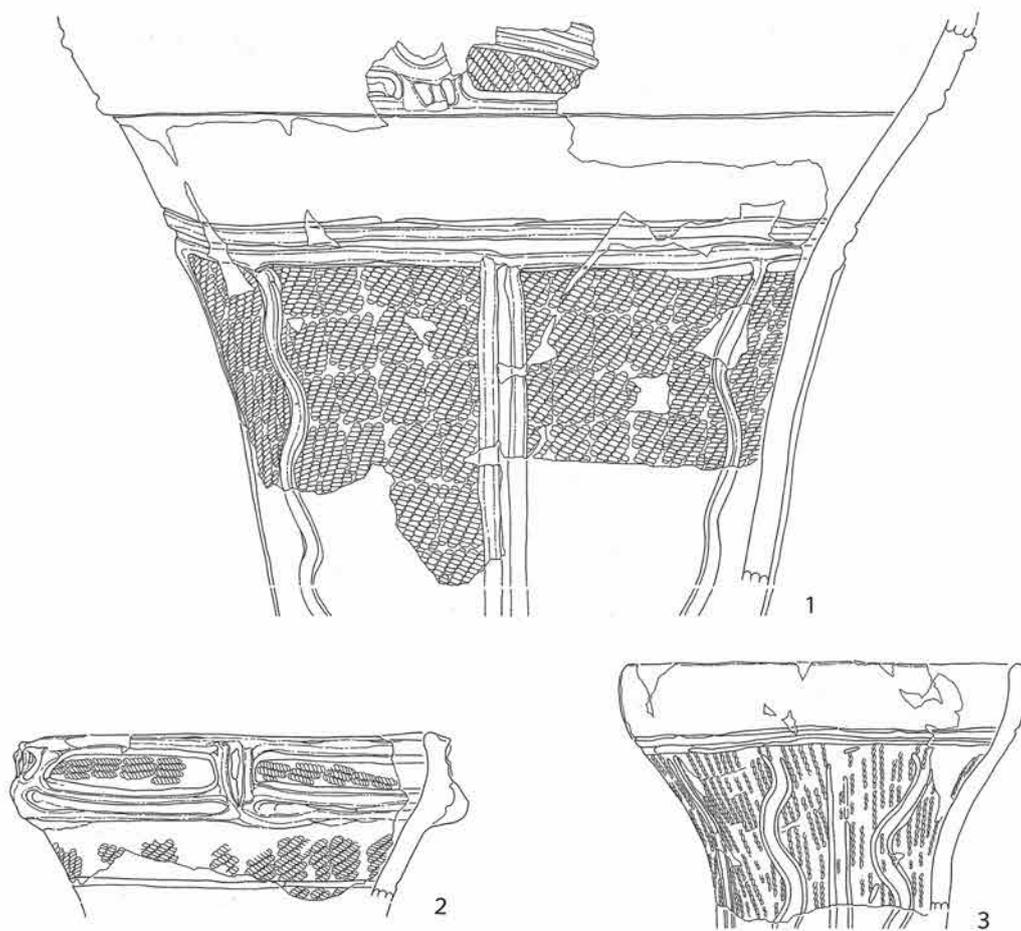
第59号住居跡出土土器(第68・69図)

本住居跡からは比較的大形の土器片が出土しているが、復元された個体は無かった。

第68図1は口縁部から胴部上位の破片である。口縁部は波状或いは突起が付くと思われる。胴部は幅広の磨消懸垂文を施す。地文は単節RLで、口縁部横位、胴部縦位に充填施文する。2は鉢形土器で、条線を施している。第69図3は頸部の破片で、地文撚糸Lを施し、隆帯懸垂文を垂下させる。4は単節R



第 69 图 第 59 号住居跡出土土器 (2)



第 70 图 第 60 号住居跡出土土器 (1)

L 地文に、単沈線で2本沈線懸垂文を施す。5は口縁部破片で、楕円区画文を作出している。口縁部文様直下に、曲線的な文様の一部が見られる。地文は単節LRの縦位施文である。6は胴部破片で、2本の幅広隆帯による渦巻文の一部と思われる。地文は単節LRの充填施文。7は大形土器の口縁部破片で、波状を呈する。幅広の沈線で器面を区画し、地文単節RLを充填施文するが、施文域と無文域の区分が不明確である。8・9は幅狭の磨消懸垂文が施される。地文は8が単節LR、9が単節RLである。10は胴部破片で、斜行沈線を充填する。11は罫付土器で、罫直下に沈線で逆U状の曲線を描く。地文は単節LRである。

第60号住居跡出土土器(第70・71図)

本住居跡は比較的遺物量が多く、4個体の土器が復元、図化された。

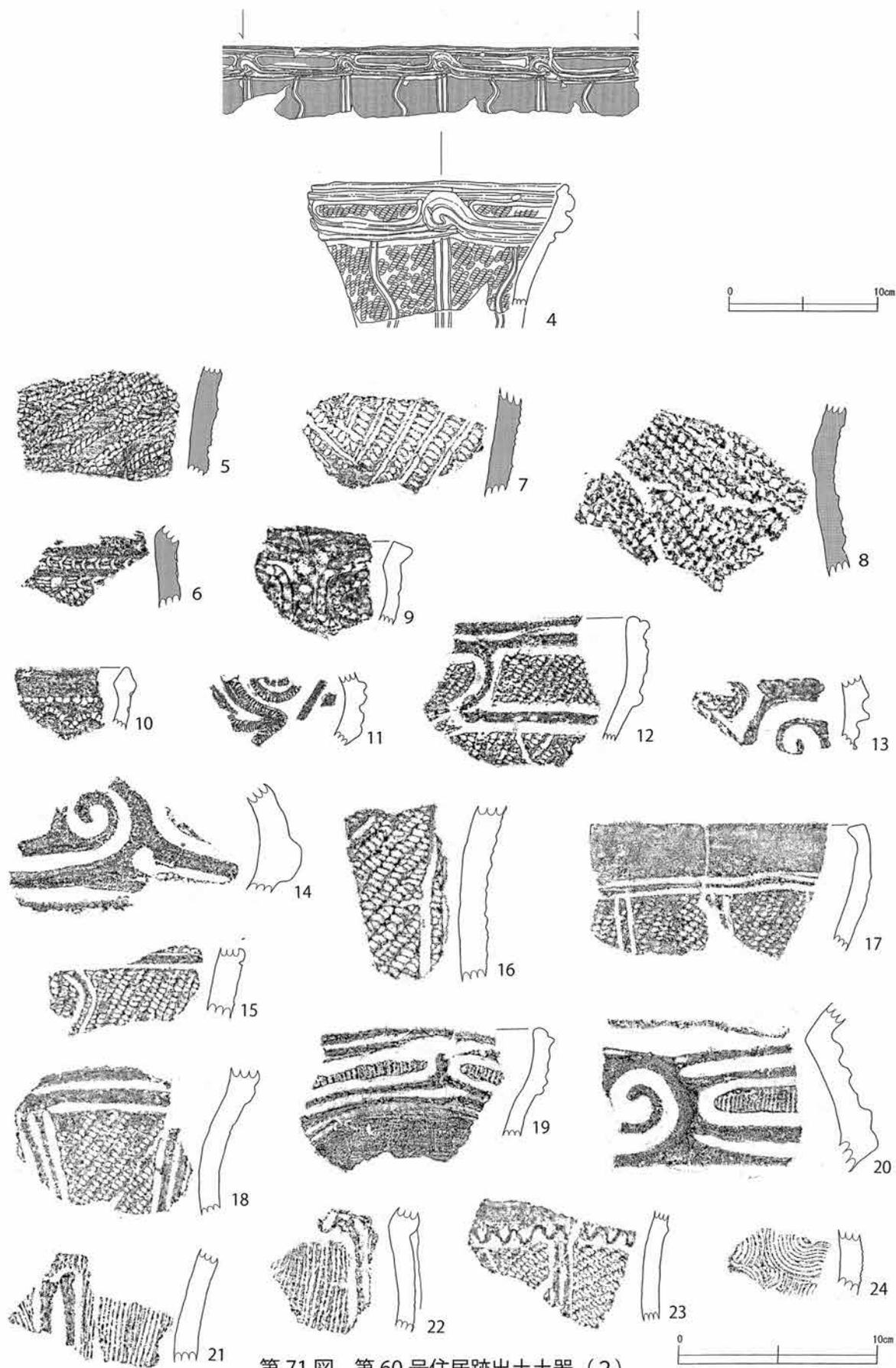
第70図1は大形の土器で、口縁部文様下半部から胴部上位を残す。図化部分で50%が残存する。器形は括れが弱く、口縁部に向かって外傾して開く。口縁部文様は渦巻文と直下の3本短隆帯による柵状の貼付けと、斜行する2本隆帯が認められる。渦巻文と区画文の組み合わせと思われるが、単位等は不明である。頸部は無文帯で、やや幅狭である。下端は2本隆帯を巡らしている。胴部には2本隆帯懸垂文と、蛇行隆帯懸垂文を交互に垂下させる。蛇行隆帯脇には沈線を引く。地文は単節RLで、口縁部横位、胴部は縦位に施文する。現存高29.9cm、器厚1.3～1.5cmを測る。焼成やや不良。色調は暗茶褐色、暗褐色を呈する。

2は口縁部から頸部を残す。全体的に粗い作りの土器である。図化部分で40%残存。器形は頸部から外傾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。口縁部文様は楕円形を基調とする区画文で、上位は1本隆帯、下端は2本隆帯となっている。単位間に短隆帯を2本貼り付ける。区画文は推定4単位であるが、1単位は中央で分割され、短い楕円区画を対向させる。頸部には疎らに地文を施し、下端に区画沈線1条が見られる。地文は単節RLで、口縁部斜位で条が横走する。頸部から胴部が縦位施文である。現存高9.0cm、口径20.2cm、器厚1.0～1.1cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、黄褐色、黒褐色を呈する。

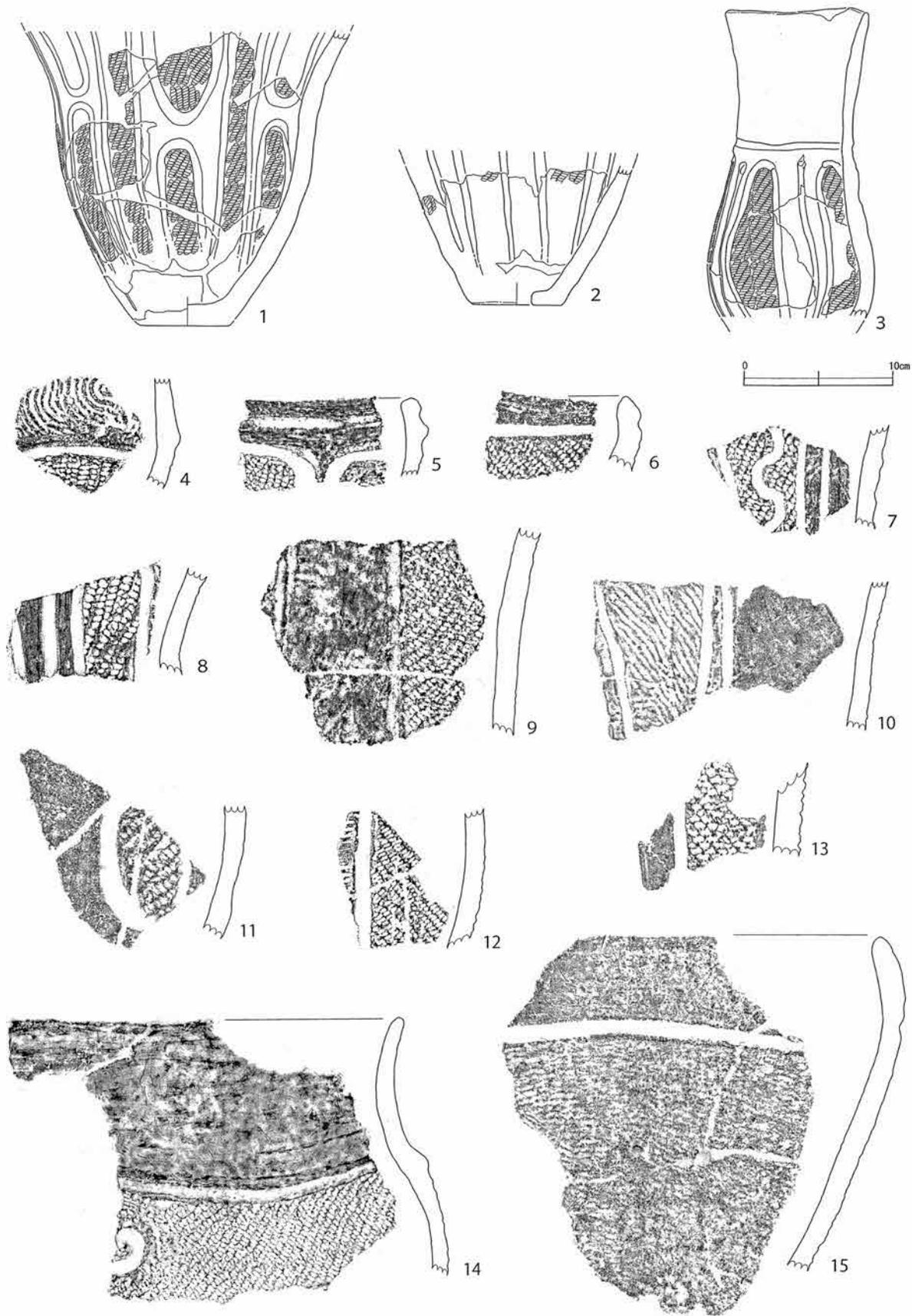
3は小形の深鉢で、口縁部から胴部上位を残す。図化部分で80%が残存。胴部上位から外傾しつつ立ち上り、口縁部はほぼ直立する。口縁部は無文帯で、下端を半裁竹管内面の平行沈線で区画する。器形の関係か、上位の沈線が深い。胴部には疎らに撚糸Lを縦位施文し、口縁部下端区画と同じ施文具で、2本沈線懸垂文と蛇行沈線懸垂文を交互に配する。沈線間の地文は、ほとんど消えている。現存高18.8cm、口径20.2cm、器厚0.7～1.0cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、茶褐色を呈する。

第71図4も小形の深鉢で、口縁部から胴部上位を残す。頸部無文帯を持たない。図化部分で90%を残す。器形は胴部上位から口縁部に向けて外傾して開く。口縁部文様は渦巻文と楕円区画文の交互配置で、各4単位。胴部は半裁竹管内面による重複施文3本沈線懸垂文と2本蛇行沈線懸垂文の交互配置である。3本沈線は渦巻文部、蛇行沈線は区画中央部から垂下する。沈線間の地文は、ほとんど消えている。地文は単節RLの縦位施文で、口縁部文様帯直下は磨り消されている。現存高19.8cm、口径17.0cm、器厚0.9～1.1cmを測る。焼成良好。色調は暗褐色、明茶褐色、黒褐色を呈する。

5～8は胎土に繊維を含む。いずれも深鉢の胴部破片である。5は反撚りのLL、6は半裁竹管の押引文に単節LR、7は付加条、8は単節RLをそれぞれ施す。9～11は胎土に金雲母を含む。9は隆帯上に刻目を入れ、隆帯脇に2条の角押文を施す。10は隆帯脇に角押文を沿わせ、三角押文の波状文を並行させる。11は渦巻文の一部で、隆帯上に細かい爪形文を施す。12は口縁部破片で、隆帯による楕円区画文、胴部には蛇行懸垂文が見られる。地文は単節RL縦位。13は渦巻文の一部である。14は浅鉢で、渦巻文と区画文の一部が認められる。15・16・18は胴部破片である。地文は、いずれも単節RL縦位。懸垂文は半裁竹管で描かれて



第71图 第60号住居跡出土土器(2)



第72图 第61号住居跡出土土器

いる。17は口縁部破片で、無文の口縁部下を沈線で区画し、2本沈線懸垂文を垂下させる。地文は単節RL縦位。19～22は地文に条線を施す。19は小形の深鉢で、隆帯により幅狭の楕円区画を作出している。20は浅鉢で、太い沈線で渦巻文と区画文を作出する。21・22は胴部破片。条線地文に隆帯懸垂文を施す。23は頸部破片で、無文帯直下に細い波状隆帯を巡らす。懸垂文は半裁竹管の重複施文。地文は単節RL縦位。24は櫛歯状施文で、曲線文を施している。

第61号住居跡出土土器 (第72図)

本住居跡は規模が小さいため、出土遺物は比較的少ない。復元、図化し得た土器は3個体である。

第72図1は屋内埋葬である。胴部中位から底部を残す。図化部分で80%残存。器形は胴部下位でわずかに膨らみ、中位で弱く括れる。胴部にはH字状の文様を展開し、沈線間に地文を充填施文している。磨消部は7単位。地文は単節RLで、縦位、斜位に施文する。現存高25.2cm、底径5.7cm、器厚1.0～1.5cmを測る。焼成やや不良。色調は茶褐色、暗茶褐色、明赤褐色を呈する。

2は深鉢の底部付近である。底部は内外面から穿孔されている。図化部分で40%残存。器形は底部から上位にかけて、外傾して立ち上がる。胴部文様は磨消懸垂文で、無文部は比較的幅広である。単位不明。地文は単節RLの縦位施文。現存高9.4cm、底径6.1cm、器厚0.9～1.3cmを測る。焼成良好。色調は明茶褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

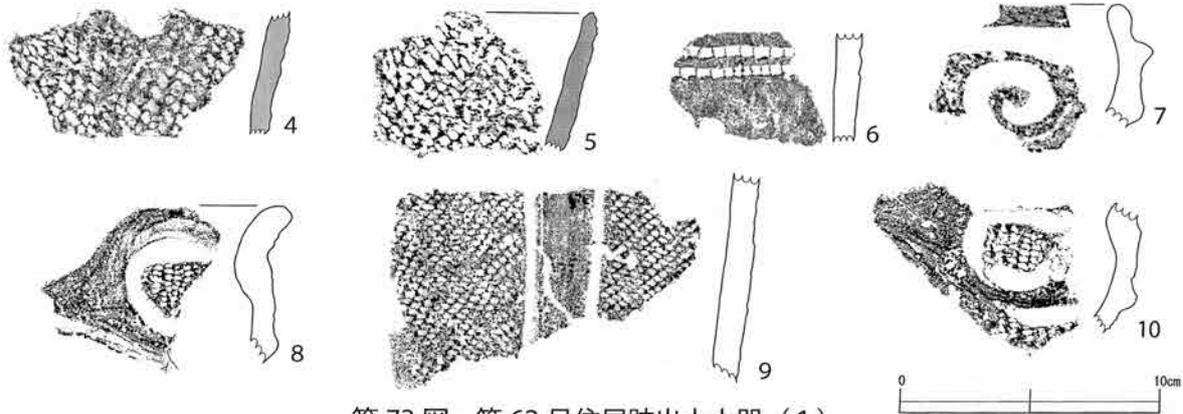
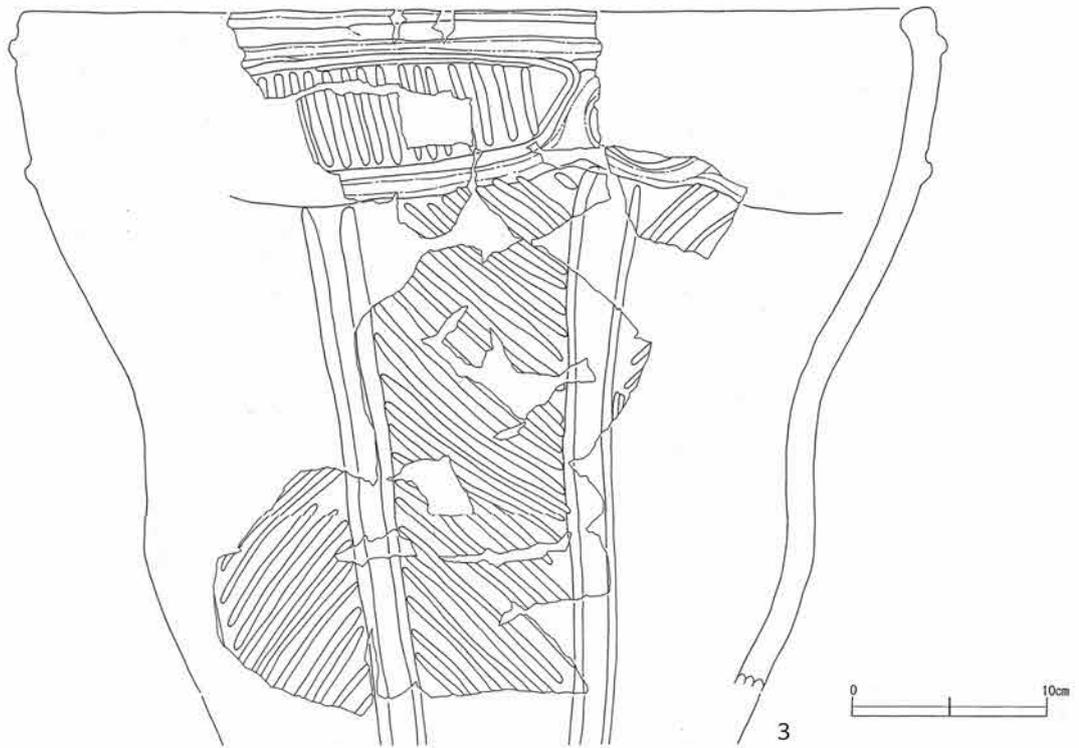
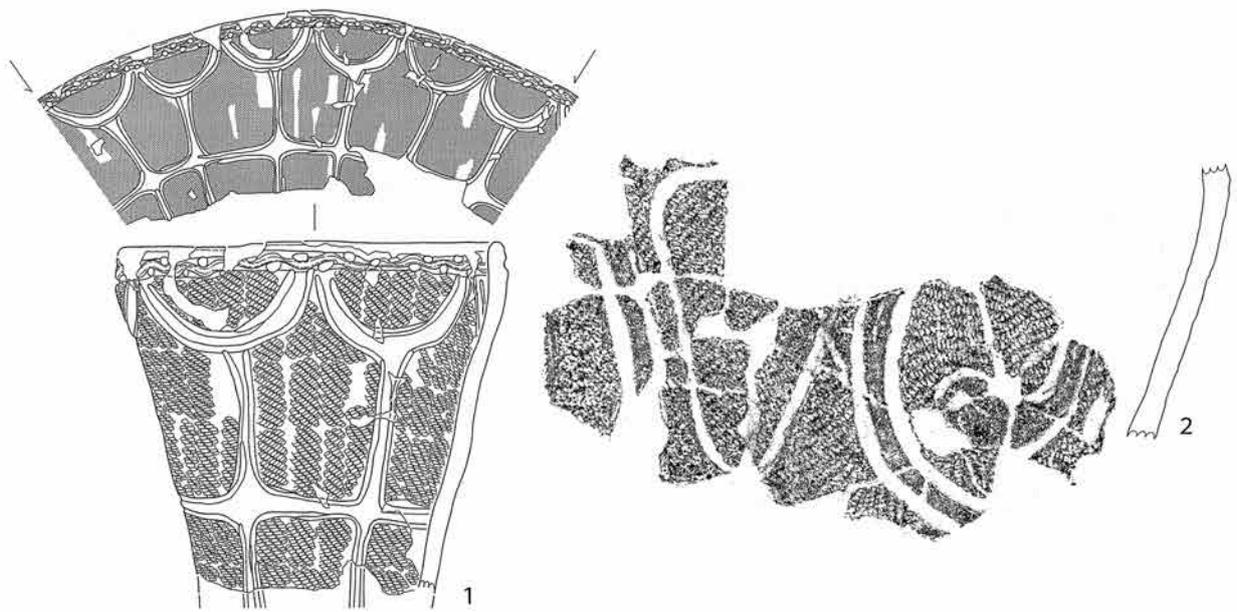
3は口縁部から胴下半部までを残す。ジョッキ形土器の可能性もあるが、把手及び接合痕は認められない。図化部分で40%残存。器形は胴下半部で膨らみ、内傾しつつ立ち上がる。口縁部はわずかに開く。口縁部は幅広の無文帯で、下端に区画沈線1条を巡らす。胴部文様は逆U字懸垂文と蕨状文を交互に配する。逆U字状懸垂文内は地文を施す。地文は0段多条の単節RL縦位施文。現存高21.1cm、口径推定9.3cm、器厚0.7～1.2cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗褐色を呈する。

4は頸部破片で、弱く屈曲する。上位に櫛歯状施文具で曲線文を施し、下位に地文単節RLを斜位施文している。5・6は口縁部破片である。5は渦巻文と区画文の上端で、渦巻文部にも地文単節RLが認められる。6は口縁部無文の土器で、1条の沈線を巡らす。以下に単節RLを横位施文する。7～13は胴部破片である。7・8には3本沈線の磨消懸垂文が見られ、7は地文部に蛇行沈線を施す。地文は、いずれも単節RL縦位。9・10は幅広の磨消懸垂文を施す。地文は9が単節RL、10が無節Lで、いずれも縦位施文。11はU字状の区画と思われる。地文に単節RLを施す。12・13の磨消懸垂文の幅は不明。地文は12が0段多条の単節LR、13は複節LRを縦位施文する。14は鉢形土器の口縁部である。口縁部は緩く湾曲する無文帯である。頸部に背の低い隆帯を巡らす。胴部には渦巻文の一部のような隆帯を残す。地文は単節LRで充填施文。15も鉢形土器である。胴部は直線的に開き、口縁部はわずかに内傾する。口縁部は幅広の無文帯で、下端に1条の沈線を巡らす。胴部には地文無節Lを斜位施文する。

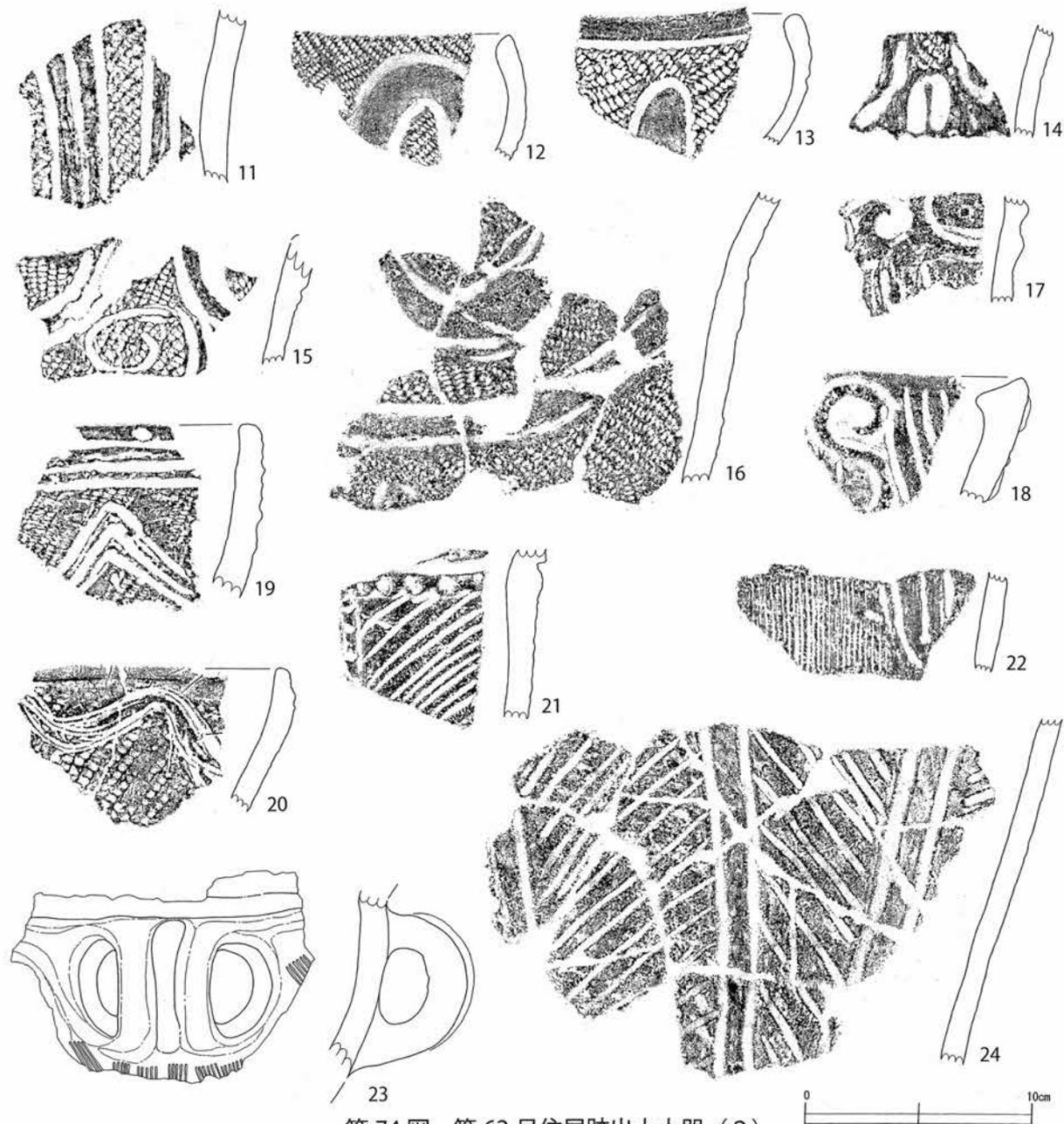
第62号住居跡出土土器 (第73・74図)

本住居跡は覆土が薄く、遺物量は少ない。復元、図化し得たのは2個体である。

第73図1は炉跡埋設土器である。図化部分で90%が残存する。器形は胴部よりやや外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。口唇部直下に1本隆帯を巡らし、交互刺突を加えて波状にしている。口縁部文様は単沈線2本による弧線文で、6単位施す。それぞれの弧線中央から2本沈線懸垂文を垂下、胴部中位で横方向に連結し杵状とする。沈線間の地文は、いずれも磨り消されている。地文は単節LRの縦位施文。部分的に隙間が開く。現存高18.4cm、口径19.2cm、器厚0.9～1.0cmを測る。焼成は良好であるが、内



第73图 第62号住居跡出土土器(1)



第74図 第62号住居跡出土土器(2)

外面とも口縁部付近に被熱が顕著で、劣化している。色調は明褐色、明茶褐色を呈する。

2は大形の土器で、胴部上位に2本沈線で大柄な渦巻文や区画文を描く。地文は単節RLの充填施文。

3も大形の土器である。図化部分で20%残存。器形は胴部中位で膨らみ、頸部から口縁部に向かって、わずかに湾曲しながら立ち上がる。口縁部文様は渦巻文と楕円区画文の交互配置と思われる。単位不明。楕円区画内は縦位の集合沈線を充填する。胴部文様は渦巻文と区画文中央から、2本沈線の懸垂文を垂下させる。単位は不明。沈線間は大形のわりに幅狭である。懸垂文間は斜行沈線を充填するが、各懸垂文を挟んで綾杉状としている。現存高47.4cm、口径推定45.4cm、器厚1.3～1.6cmを測る。焼成やや不良。色調は暗褐色、明赤褐色、黒褐色を呈する。

4・5は胎土に繊維を含む。地文は、いずれも単節LRである。6は無文地に複列の角押文を施す。7・8は口縁部破片で、7は渦巻文、8は突起下に円形区画を置く。8の地文は単節RLである。9は胴部破

片で、やや幅広の磨消懸垂文を施す。地文は単節 R L 縦位。10 は口縁部破片で、突起を有すると思われる。円形区画が見られる。第 74 図 11 は胴部破片で、3 本沈線の磨消懸垂文が施される。地文は単節 R L 縦位。12・13 は口縁部文様を持たない。12 は 2 本沈線、13 は 1 本沈線で逆 U 字の無文帯を作出し、地文に単節 R L を充填施文する。14 は U 字文の間に蕨状文を施す。15 は口縁部破片で、半円状の区画を隆帯で作出する。地文に単節 R L を施し、下から巻く渦巻文を沈線で描く。16 は太い 2 本沈線で大柄な渦巻文を描くと思われる。地文は単節 R L の充填施文。17 は口縁部文様の渦巻文と、楕円区画文の一部が見られる。胴部には沈線懸垂文が施され、空間に沈線を充填する。18 は重弧文の土器で、重弧間に先端釣針状の波状隆帯を垂下させる。19 は口縁部に 3 本沈線を巡らし、同じく 3 本沈線で弧線文を描く。地文単節 R L。20 は口縁部の区画文様が無い。半裁竹管内面で粗い波状文を描いている。地文単節 R L。21 は頸部に隆帯を 1 本巡らし、連続押圧を加える。胴部は沈線懸垂文を垂下させ、空間に斜行沈線を充填する。22 は地文条線に沈線懸垂文を施す。23 は両耳壺の把手部で、厚手の作り。地文は条線である。24 は胴部破片で、幅狭の 2 本沈線懸垂文を垂下させる。懸垂文間に斜行沈線を施す。懸垂文を挟んで綾杉状とする。

第 63 号住居跡出土土器 (第 75 ~ 77 図)

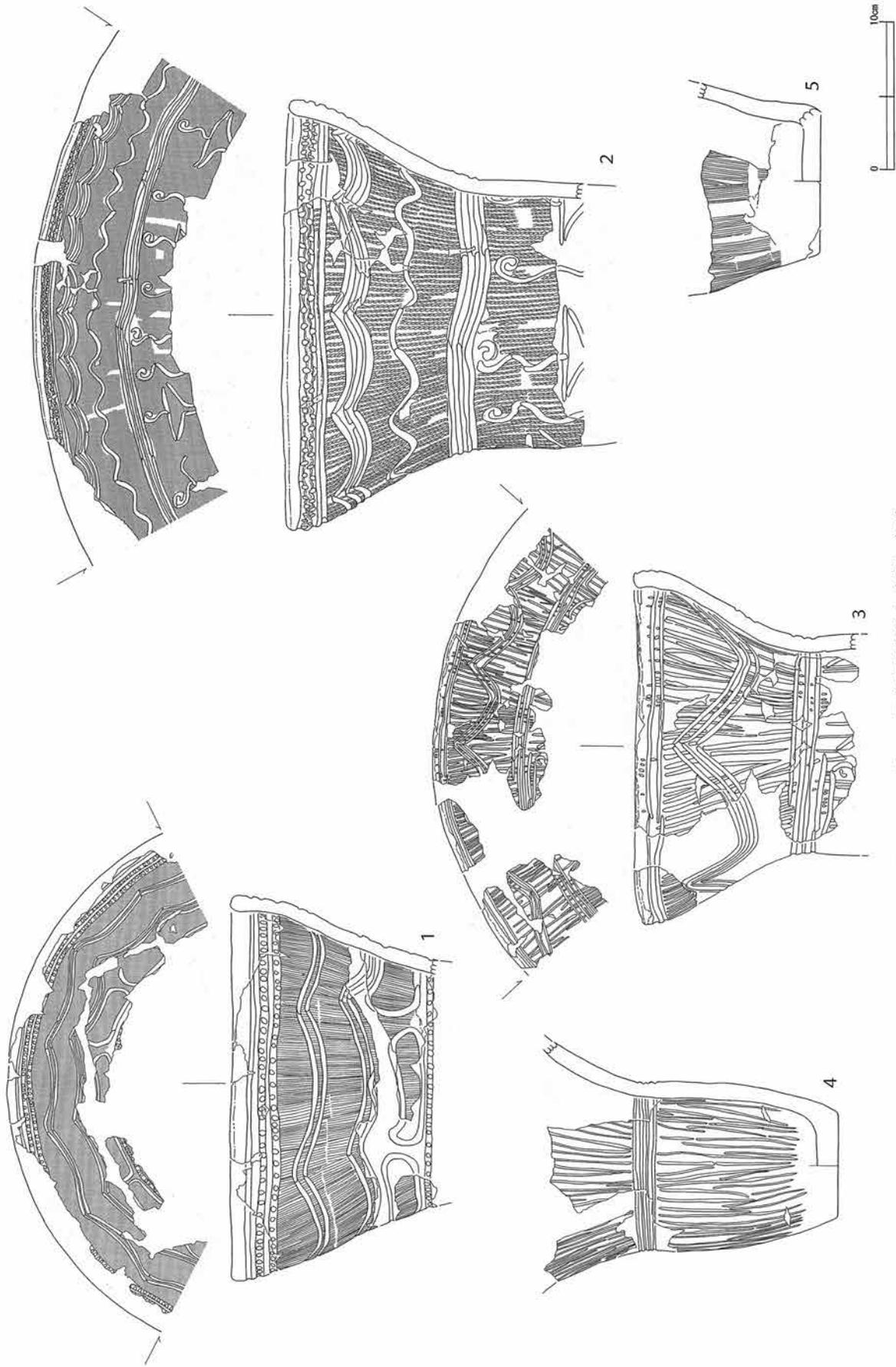
本住居跡は遺物量が多く、復元、図化された個体は 11 に及ぶ。

第 75 図 1 は炉跡埋設土器で、口縁部の大部分と胴部を欠く。図化部分で 60% が残存する。器形は頸部から直線的に開いて立ち上り、口縁部直立する。口唇部直下に 3 本沈線を巡らし、下 2 本に列点を加える。口縁部文様は間延びした単沈線 2 本の波状文を 2 段施し、2 段目下位に崩れた楕円形の付帯文様を入れる。波頂部は 6 単位。頸部には区画文様として、沈線を巡らし、列点を加える。沈線の本数は不明。地文に条線を施す。現存高 14.2cm、口径推定 25.2cm、器厚 0.9 ~ 1.1cm を測る。内外面とも被熱のため、劣化している。色調は明赤褐色、灰褐色、暗褐色、明褐色を呈する。

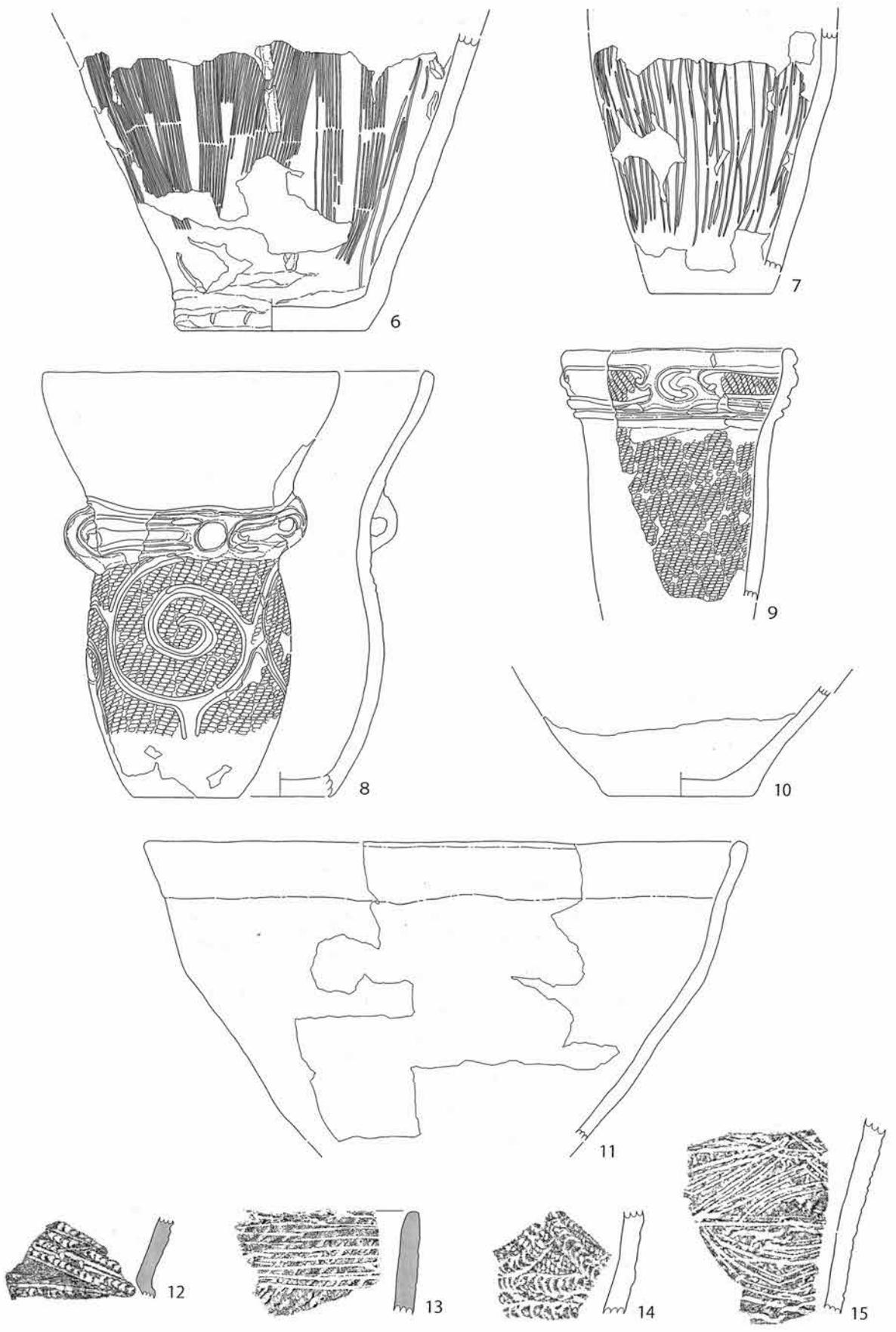
2 は屋内埋甕で、口縁部の 1 / 3 の胴下半部を欠く。図化部分で 80% を残す。器形は頸部から口縁部にかけて直線的に開き、胴部は円筒形に近い。口唇部直下に 3 本の沈線を巡らし、上 2 本に交互刺突を加え、波状隆帯とする。口縁部文様は上位に単沈線 3 本の弧線文を施し、下位に 1 本沈線波状文を巡らす。弧線文の波頂部は 12 単位。波状文は弧線文の波底部に、ほぼ対応するが、ズレがあるため 14 単位になっている。頸部には区画文様として 3 本沈線を巡らしている。胴部文様は頂部が三角形の懸垂文と蕨状文の組み合わせと、蕨状文単独の交互配置と思われる。推定各 4 単位。地文は撚糸 R の縦位。現存高 20.7cm、口径 27.6cm、器厚 0.8 ~ 1.1cm を測る。焼成は良好。色調は暗褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

3 は口縁部から胴部上位を残す。図化部分で 50% が残存。器形は頸部から口縁部にかけて、緩く内湾しつつ立ち上り、口縁部は直立する。胴部は円筒形に近い。文様は区画沈線間に残ることから、最初に地文沈線を施した後で描かれる。口唇部直下に 2 本沈線を巡らし、区画文様とする。口縁部文様は上下動の大きい弧線文を 3 本の単沈線で描くが、一部は間延びして波状となる。波頂部推定 5 単位。頸部の区画は 3 本沈線であるが、連続したものではなく、繋ぎなおしている部分が認められる。また、終点部分は互い違いになり、5 本沈線となっている。胴部文様は懸垂文と思われるが、モチーフ、単位ともに不明。口唇部の仕上げが粗く、接合痕を残す。現存高 15.4cm、口径推定 28cm、器厚 1.0 ~ 1.2cm で、比較的小形であるが厚手である。焼成良好。色調は暗茶褐色、明茶褐色、茶褐色を呈する。

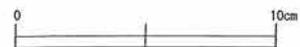
4 は口縁部下位から底部までを残す。図化部分で 60% 残存。頸部に半裁竹管内面による区画沈線を 4 条巡らし、地文として沈線を充填する。現存高 19.9cm、底径 9.0cm、器厚 1.0 ~ 1.5cm を測る。大きさの



第 75 图 第 63 号住居跡出土土器 (1)



第 76 图 第 63 号住居跡出土土器 (2)



わりに厚手である。焼成は良好。色調は黒褐色、明褐色、明茶褐色を呈する。

5は深鉢の底部付近である。図化部分で25%が残存する。器形は上方に向かって開く。地文に条線を施すが、底部近くは調整により消されている。一部2本沈線懸垂文が認められる。現存高8.4cm、底径推定9.7cm、器厚0.9から1.3cmを測る。焼成良好。色調は明茶褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

第76図6は深鉢の胴部下位から底部までを残す。比較的大形の土器である。図化部分で70%残存。器形は上方に向かって外傾しつつ立ち上がる。地文に条線を施し、隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文を交互に垂下させるが、調整が甘く剥離が著しい。推定各3単位。底部付近は粗い調整痕を残し、爪の跡のような刻みが見られる。現存高20.0cm、底径12.6cm、器厚1.1～1.4cmを測る。焼成良好。色調は明茶褐色、明赤褐色、黒褐色を呈する。

7は胴部中位から下位を残す。図化部分で30%が残存する。器形は中位で膨らみ、下位に向けて径を減じる。器面全体に細沈線を粗く施す。現存高16.4cm、器厚1.1～1.3cmを測る。焼成やや不良。色調は明茶褐色、黒褐色、暗褐色を呈する。

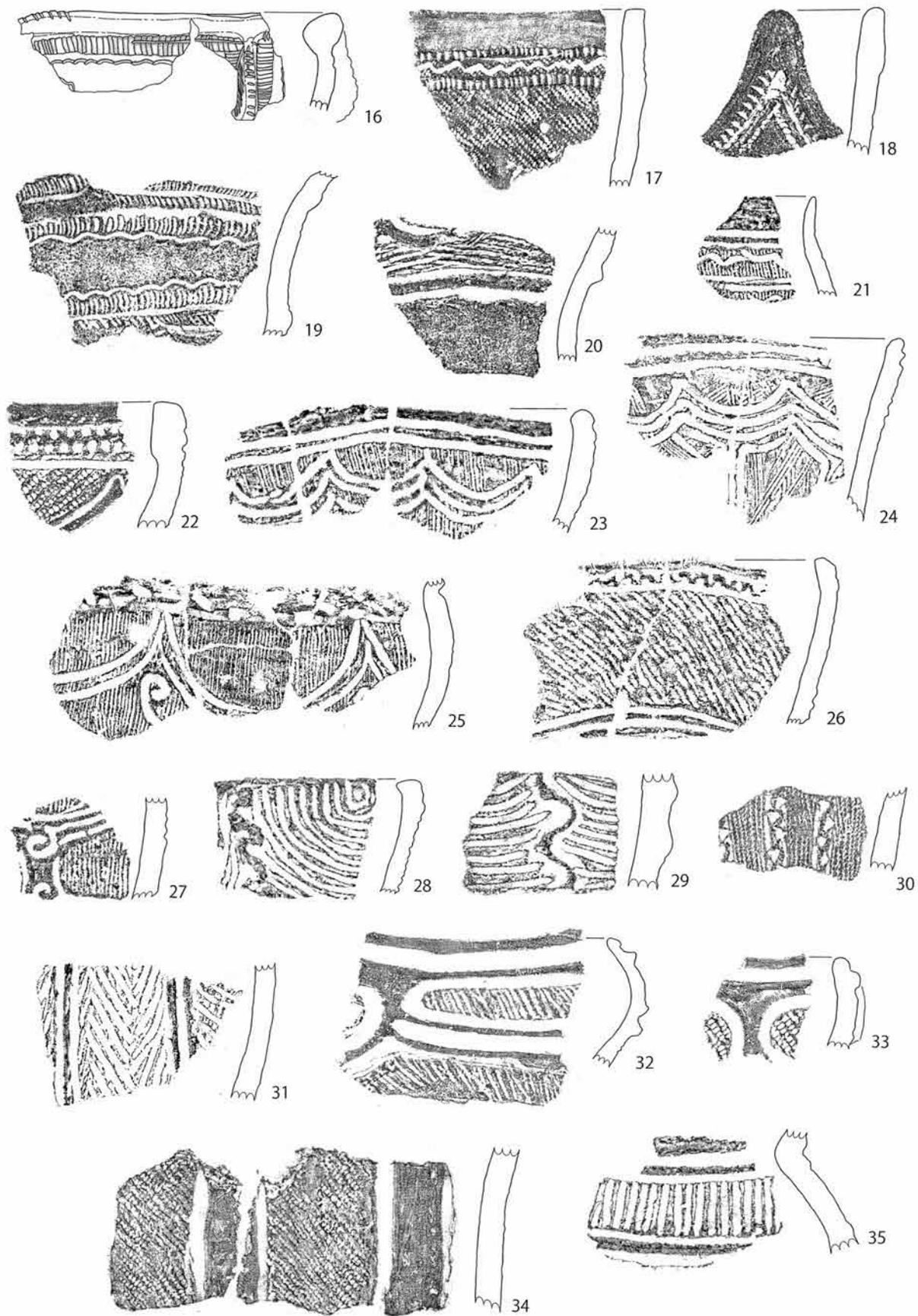
8は口縁部から底部までを残す。全体の25%程度が残存する。器形は細身で、口縁部が直線的に大きく開き、頸部で括れ、胴部中位で膨らむ。口縁部は幅広の無文帯である。頸部文様は隆帯により円形文と長方形区画を交互に配し、長方形区画の中間に小橋状把手を付ける。この部位の施文は非常に粗い。頸部下端の隆帯脇は未処理である。胴部文様は上位から中位にかけて2本沈線で渦巻文を描く。推定3単位。また、渦巻文連結部から垂下する蛇行沈線懸垂文が1箇所認められる。沈線間と底部付近は、地文をほとんど磨り消している。地文は太い単節RLの縦位施文である。器高29.5cm、口径推定19.6cm、底径推定7.2cm、器厚0.6～1.1cmを測る。焼成良好。色調は明褐色、黒褐色を呈する。

9は口縁部から胴部下位にかけての破片から推定復元した。図化部分で30%残存。口縁部がほぼ直立し、頸部以下は円筒形に近い器形を呈する。口縁部文様は幅狭で、渦巻文と楕円区画を交互に配すると思われる。推定各4単位。楕円区画内は隆帯脇に沈線を引き、先端は釣針状に巻く。文様下端区画は2本隆帯で、胴部との接点にナゾリを入れ、地文を磨り消している。胴部は地文のみである。地文は単節RLで、口縁部横位、胴部はやや斜位に施している。現存高17.4cm、口径推定14.6cm、器厚0.6～1.1cmを測る。焼成良好。色調は茶褐色、暗褐色を呈する。

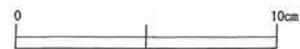
10は浅鉢の底部付近である図化部分で50%残存。器面の調整は粗い。現存高7.7cm、底径9.9cm、器厚0.7～2.0cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、明褐色を呈する。

11も浅鉢で、深めである。大形の破片から推定復元した。器形はわずかに湾曲して開く。口縁部に段を有する。器面調整は比較的丁寧である。現存高20.9cm、口径推定40.2cm、器厚0.8～1.1cmを測る。焼成良好。色調は明茶褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

12・13は胎土に繊維を含む。12は沈線で菱形のモチーフを描き、沈線間に半円形の連続刺突を施す。13は口縁部に重畳する沈線を引き、直下に無節Lを施文する。14・15は菱形のモチーフを描く。14は沈線間に爪形文を施す。地文単節RLが認められる。15は沈線のみで文様を描出する。第77図16は口縁部破片で、隆帯脇に角押文を施し、波状沈線を並行させる。17は無文口縁部直下に2条の角押文を巡らし、中間に三角押文の波状文を施す。地文は単節RL横位。18は波状口縁の頂部で、胎土に金雲母を含む。口縁隆帯の肩部に刻目を入れ、隆帯脇に2条の角押文を並列させる。19は頸部破片で、隆帯上に刻目を加飾し、脇に爪形文を施し沈線波状文を沿わせる。20は口縁部文様帯下半から頸部の破片である。



第77图 第63号住居迹出土土器(3)



口縁部文様は2本隆帯で作出される。地文は撚糸L横位。頸部は無文である。21は条線地文に平行沈線と波状沈線を巡らしている。22～24は弧線文を施す土器群である。地文は22が単節RL、他は条線である。ただし、24は施文方向がランダムである。22は口唇部直下に2条の沈線を巡らし、連続刺突を加える。弧線の沈線本数は不明。沈線間は地文が消える。23は口縁部に突起を有する。口唇部直下に2本沈線を巡らし、3本沈線で弧線文を描く。24は23と同様であるが、弧線下に杵状の付帯文様を持つ。25は頸部破片で、上端に交互刺突を加えた区画文様が見られる。弧線は2本沈線で描かれ、波頂部直下から先端蕨状の蛇行沈線懸垂文を垂下させる。26・27は22～25と同系統の土器である。26には弧線文は描かれない。口唇部直下に2本沈線と交互刺突による波状隆帯を巡らす。頸部には2～3本の区画沈線が見られる。地文は無節L縦位。27は胴部の破片で、条線地文に格子状の区画を2本沈線で描き、交差点に沈線を伴った小渦巻文を付加する。28・29は重弧文を施す。いずれも単沈線で描かれ、蛇行隆帯懸垂文を垂下させるが、28は重弧文施文後の貼付け、29は充填である。30は撚糸L地文に縦位隆帯を貼付け、交互刺突を加える。31は第61図13に接合した破片である。撚糸Lを施文後、隆帯懸垂文を貼付け、綾杉文を施す。32は口縁部破片である。交互配置の渦巻文と楕円区画文が認められる。地文は撚糸Lで、頸部にも施文されている。33は口縁部に作出された楕円区画文である。地文は単節RL。34は幅広の磨消懸垂文を持つ。地文は単節LR。35は浅鉢の頸部で、区画文内には沈線が充填されている。

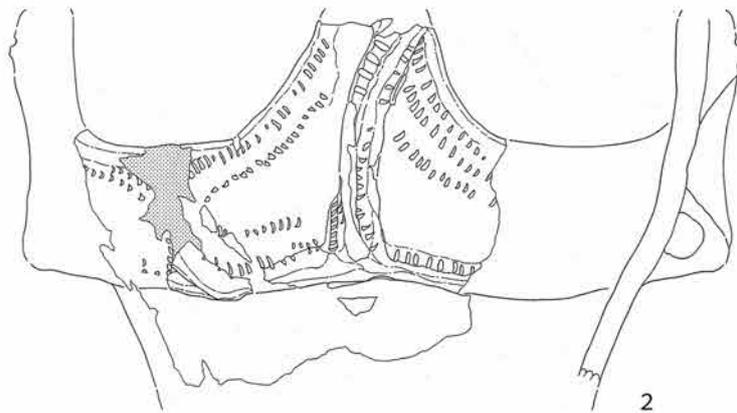
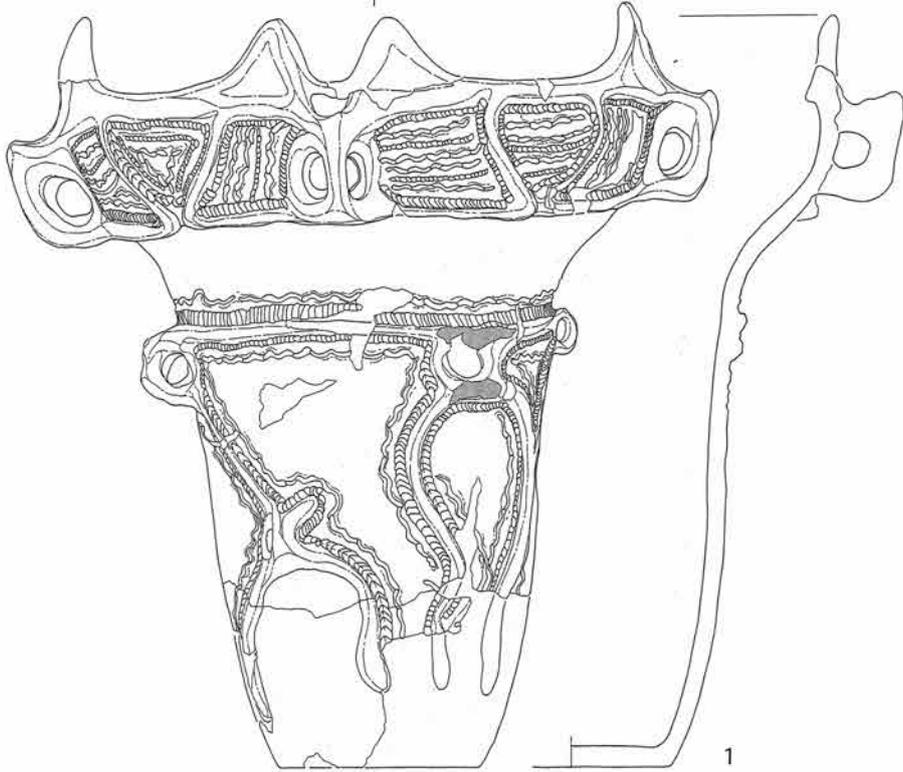
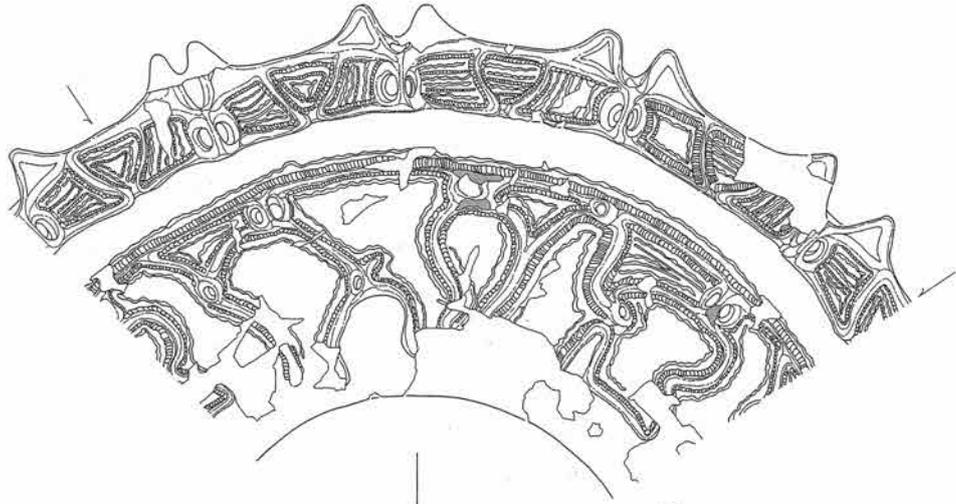
第64号住居跡出土土器(第78・79図)

本住居跡では6個体の土器が復元、図化し得た。また、第65号住居跡からは本住居跡に帰属すると思われる土器も出土している。

第78図1はP1にかかって出土したもので、全体の90%が残存する。実測図の接合線から下位が離れて出土しているが、他はまとまっていた。口縁部が緩く内湾し、頸部で括れ、胴部は円筒形に近い器形を呈する。口縁部主文様は断面カマボコ状の隆帯で作出され、眼鏡状把手を持つ台形区画と、逆三角形区画の交互配置で、重三角文に近い様相を呈する。各4単位。台形区画は双頭の突起を付け、下端は逆三角区画に張り出す。区画内は隆帯脇に幅広の角押文と三角押文を施し、内側に波状沈線と幅狭の角押文を縦位、横位に充填するが、手法は様々である。頸部は無文帯で、下端を隆帯で区画する。隆帯脇には角押文を施し、波状沈線を並行させる。胴部文様は懸垂文と区画文で、計5単位を作出する。隆帯分岐点には眼鏡状把手と、窪みを入れた小突起が配される。隆帯脇には主として三角押文を施し、波状沈線を沿わせる。空間は無文である。器高40.5cm、口径27.8cm、底径10.4cm、器厚0.9～1.6cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗茶褐色、明褐色を呈する。胎土に金雲母を含む。

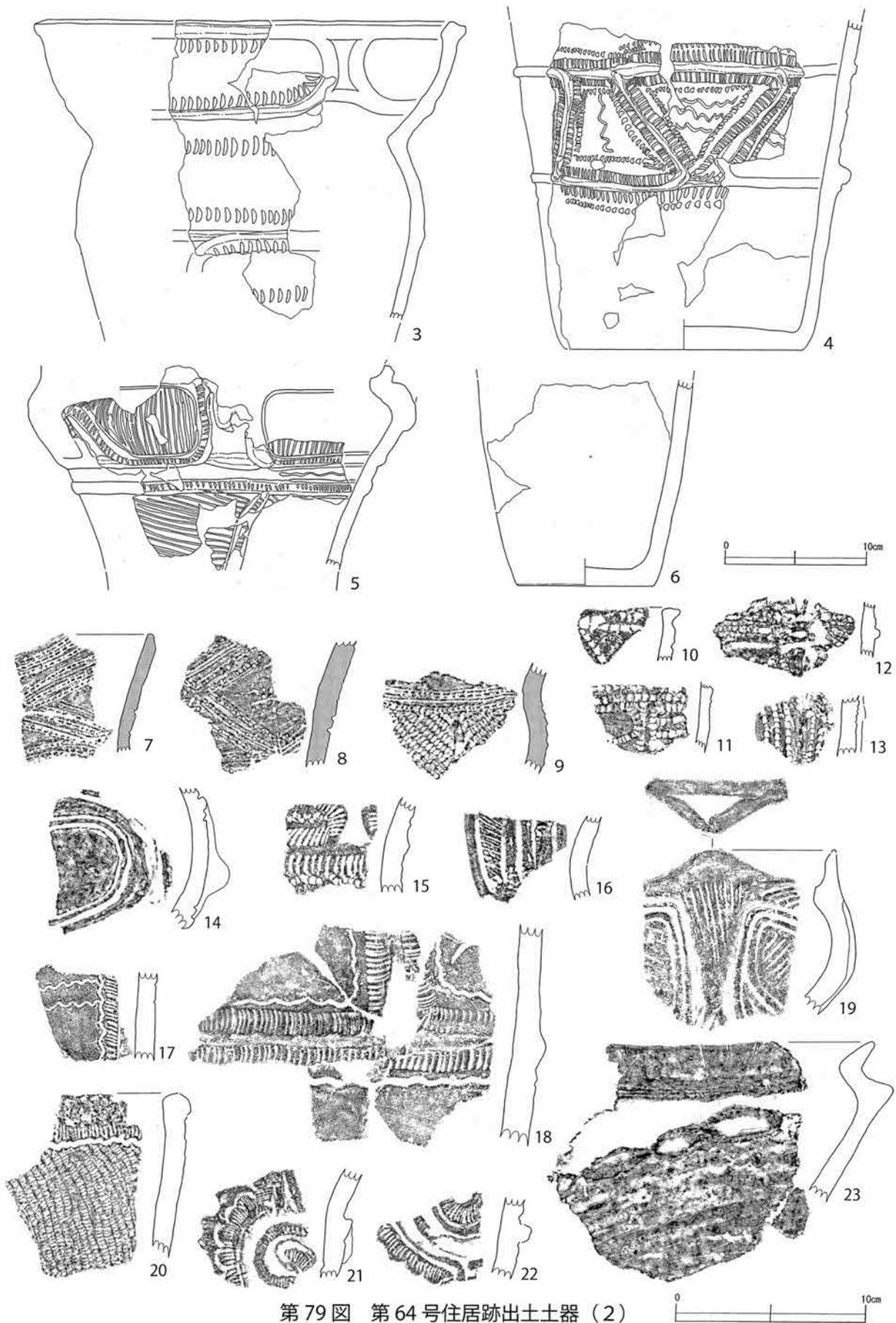
2は深鉢の口縁部から頸部の大形破片で、推定復元である。器形は外傾しつつ開く。口縁部は推定4単位の波状口縁で、両脇に隆帯を貼付け三角形の区画を作出する。さらに波頂部から隆帯を垂下させ、区画を二分する。垂下隆帯はわずかに湾曲し、下端は橋状把手とする。隆帯上には刻目を入れ、隆帯脇に1～3列の連続刺突を施す。頸部は無文帯である。全体に作りが粗い。現存高19.2cm、口径推定31.0cm、器厚1.1～1.7cmを測る。焼成良好。色調は明褐色、黒褐色、暗茶褐色を呈する。胎土に黒雲母を含む。

第79図3は口縁部から胴部上位の破片より復元実測した。口縁部は湾曲し、頸部で強く括れ、胴部上位は膨らむ。口縁部に隆帯による楕円区画を配する。推定4単位。区画内には隆帯に沿って、刺突に近い刻目を施す。頸部には同様の刻目を2条巡らす。胴部文様は垂下する隆帯の一部を残すが、懸垂文か楕円区画文かは不明である。隆帯上及び下位に刻目を施す。現存高21.5cm、口径推定28.5cm、器厚0.9～1.1



第78图 第64号住居跡出土土器(1)





第79图 第64号住居跡出土土器(2)

cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、黒褐色を呈する。胎土に金雲母を含む。

4は胴下半部を残す。図化部分で25%が残存する。器形は円筒形を呈する。無調整隆帯で区画し、重三角区画を作出する。単位不明。三角区画の隆帯脇には幅広の角押文を施し、三角押文を並走させる。その内側には波状沈線を入れる。重三角文上下も隆帯脇に角押文と並走する三角押文を施すが、角押文が刺突状となる部分が目立つ。現存高23.4cm、底径17.0cm、器厚1.0～1.7cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、明褐色、赤褐色を呈する。

5は大形破片からの復元実測である。口縁部上位から頸部にかけて残存する。器形は口縁部が屈曲し、頸部に向かって直線的に窄まる。口縁部文様の詳細は不明だが、楕円区画文の一部と把手基部が認められる。隆帯上に刻目、内側に集合沈線を充填する。頸部文様帯は幅狭で、波状沈線が見られる。胴部は三角区画の一部と思われる隆帯が残存する。隆帯上には刻目、区画内は細集合沈線を斜位に施している。現存高14.8cm、器厚0.9～1.4cmを測る。焼成良好。色調は暗褐色、茶褐色を呈する。

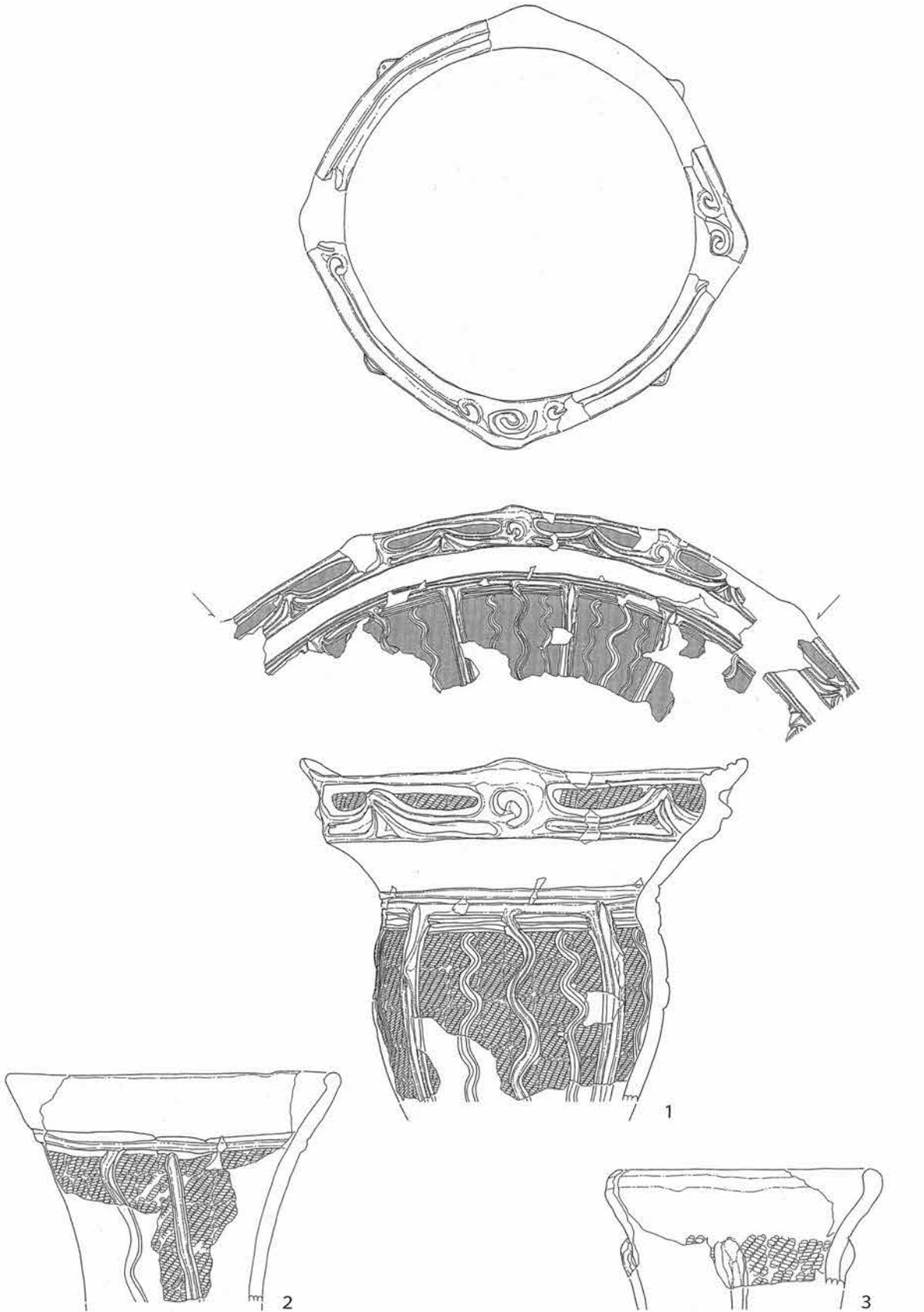
6は深鉢胴下半部である。図化部分で60%が残存する。調整痕を残すのみで無文である。現存高14.7cm、底径9.6cm、器厚1.1～1.4cmを測る。焼成良好。色調は明茶褐色、黒褐色を呈する。

7～9は胎土に繊維を含む。7は沈線で菱形のモチーフを描き、沈線内に連続刺突を加える。8は押し引き文で菱形モチーフを描出している。9は頸部破片で、区画文として2条の押し引き文を巡らす。下部は単節RLとLRを羽状に施文し、突起を貼り付ける。10～13は角押文を施す。12には突起から垂下する隆帯懸垂文が見られる。14～18は胴部破片である。14は区画文の一部と思われる。隆帯脇に2条の沈線を施す。15は扁平な隆帯で楕円区画を作出し、内側に刻みと三角押文の波状線を入れる。下部の区画隆帯脇も同じ処理をしている。16は縦位区画文で、半裁竹管内面の平行沈線による区画内に斜行沈線を充填している。17は刻みに波状沈線を並走させる。波状沈線を横位にも施す。18は比較的大形の土器で、隆帯により器面を区画する。区画形状は方形と思われる。隆帯脇には幅広の爪形文を施し、波状沈線を沿わせる。内側には三叉文と思われる沈線が残存する。19は口縁部破片で、突起を有する。突起直下から隆帯を垂下させ、両脇に半裁竹管の平行沈線を施す。隆帯上及び空間は集合沈線を施す。突起内面には三角形の印刻を入れる。20は無文の口縁部直下に刻みを入れ、波状沈線を並走させる。地文は単節RLの斜位施文である。21・22は同一個体と思われる。渦巻文を作出し、隆帯上には刻目を加飾し、脇に沈線を引く。22には蓮華文が見られる。23は浅鉢の口縁部破片である。頸部に突帯条に連鎖状文を巡らす。

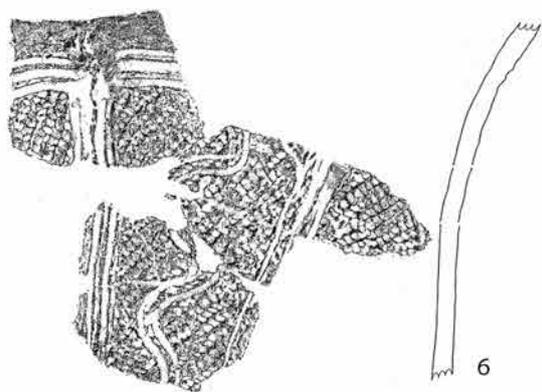
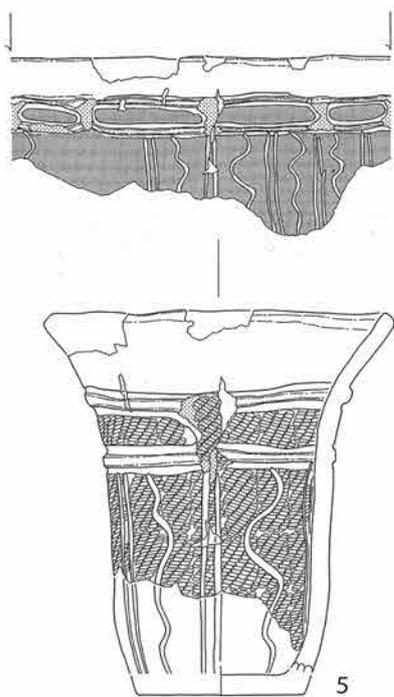
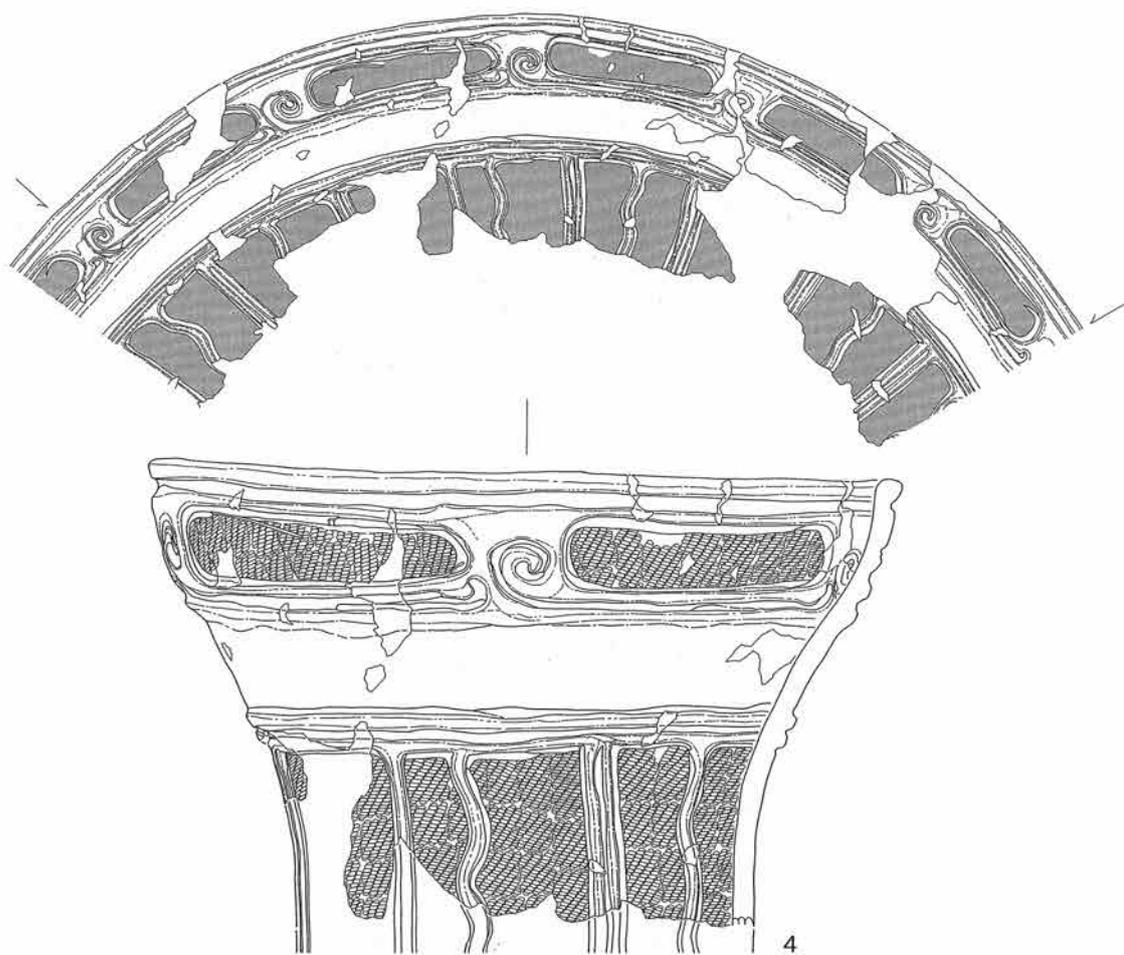
第65号住居跡出土土器（第80～83図）

本住居跡の出土土器は比較的豊富である。10個体が復元、実測し得た。ただし、重複する第64号住居跡に帰属すると思われるものが混入している。

第80図1は口縁部の一部と胴部の約1/2を欠く。図化部分で60%残存。器形は口縁部が内湾し、突起が強く外傾する。頸部の括れは強く、胴部は中位で膨らむ。口縁部には4単位の突起を有する。突起内面に渦巻文を配し、口唇部に両端釣針状の沈線を引く。口縁部文様帯は幅狭で、渦巻文と区画文の交互配置を基調とするが、区画文中央に山形の突起を置き、2単位の半円状区画に区分する。山形突起の下には三角形の窪みを施す。頸部は無文帯で、下端に2本の区画隆帯を巡らす。胴部文様は中間に突起を持つ2本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文を交互に各4単位垂下させ、頸部区画隆帯直下に3本沈線を引く。また、各隆帯懸垂文の中間に半裁竹管内面の蛇行沈線懸垂文を施す。施文具を強く押し付けたためか、沈線間は



第 80 图 第 65 号住居跡出土土器 (1)



第 81 图 第 65 号住居迹出土土器 (2)

地文が磨り消されている。地文は単節 R L で、口縁部は縦位、斜位、胴部は縦位に施文する。口縁部の斜位施文は充填的である。現存高 23.5cm、口径 23.4cm、器厚 0.8 ~ 1.5cm を測る。焼成は良好だが、胴部下位に被熱痕跡が明瞭である。色調は黒褐色、暗褐色、明褐色を呈する。地文部以外は入念な磨きが入り、光沢がある。

2 は破片からの推定復元である。器形は細身の胴部から、口縁部が外傾して立ち上がる。口唇部内面に稜を有する。口縁部は幅広の無文帯で、下端に区画隆帯を 1 条巡らす。胴部には 1 本隆帯と蛇行隆帯を交互に垂下させる。単位不明。隆帯脇には沈線を引くが、明確ではない。地文は単節 R L の縦位施文である。現存高 14.5cm、口径推定 21.5cm、器厚 0.7 ~ 1.1cm を測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、暗褐色を呈する。

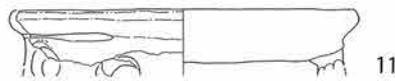
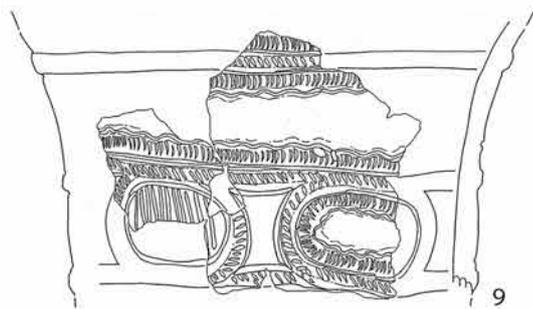
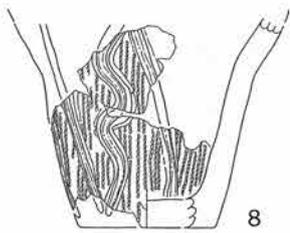
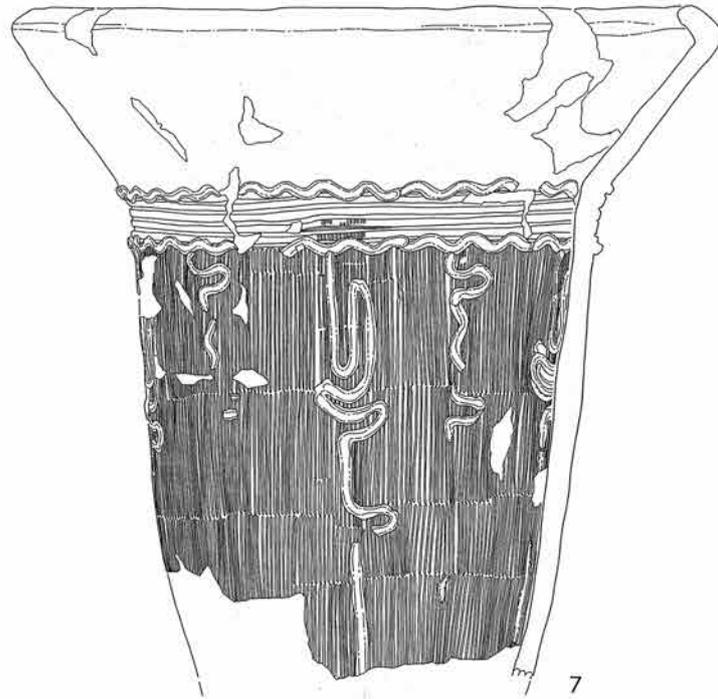
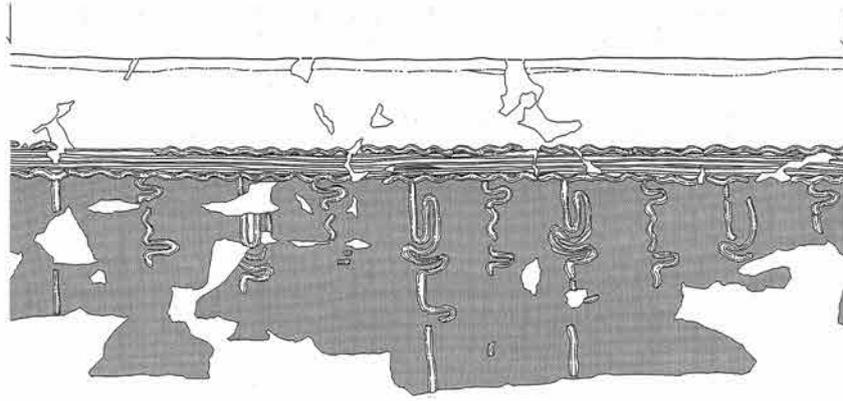
3 は口縁部から頸部付近を残す。図化部分で 40% 残存。器形は円筒形近い胴部から、外傾して口縁部が立ち上り、口唇部は肥厚する。口縁部は無文帯で、下端区画文様を持たない。頸部以下は地文単節 R L を縦位施文後、推定 5 単位の隆帯懸垂文を垂下させる。上端は肥厚する。現存高 8.1cm、口径推定 16.3cm、器厚 0.9 ~ 1.3cm を測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗茶褐色、暗赤褐色を呈する。

第 81 図 4 は大形の深鉢で、口縁部から胴部上位を残す。第 82 図 7 と折り重なるような状態で出土している。図化部分で 70% 残存。器形は頸部の括れが弱く、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部文様は渦巻文と楕円区画の交互配置で、沈線主導である。渦巻文から伸びる沈線は、文様帯下端隆帯上を走り反対側で鈎針状となる。各 5 単位。沈線は施文手法が粗雑で、同じ場所に複数回施されるため、稜線が不明瞭となっている部分が多い。頸部は幅狭の無文帯で、粗いナデを施している。下端に 2 本の隆帯を巡らし、胴部と区画する。胴部文様は基本的に 2 本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文の交互配置であるが、1 箇所のみ 1 本隆帯を垂下させる。各 6 単位。隆帯脇には沈線を引くが、一様ではない。地文は単節 R L で、口縁部区画内は縦位、斜位、胴部は縦位施文。現存高 24.0cm、口径 37.5cm、器厚 0.9 ~ 1.2cm を測る。焼成は良好。色調は暗茶褐色、黒褐色を呈する。

5 は口縁部から胴部下位までを残す。図化部分で 70% 残存。器形は円筒形の胴部に外傾する頸部、口縁部が付く。口縁部は無文帯で、下端を隆帯で区画する。頸部には隆帯による大小 4 単位の楕円区画を配するが、各々の接点は剥離している。剥離部分には地文が認められる。隆帯脇には明確に沈線を引く。胴部文様は 2 本沈線懸垂文と蛇行沈線懸垂文を交互に垂下させるが、展開図左側部分は磨耗が著しく、文様が読み取れなかった。推定各 6 単位。地文は単節 R L の縦位施文。現存高 18.2cm、口径 16.8cm、器厚 0.8 ~ 1.2cm を測る。被熱痕跡が顕著で、劣化している。色調は明黄褐色、暗褐色を呈する。

6 は深鉢の頸部から胴部の破片である。懸垂文先端が突起状となることから、口縁部無文の土器と思われる。非常に粗雑な作りである。頸部に 3 本沈線を巡らし、胴部と区画する。胴部には先端が突起状となる沈隆帯垂文と、半裁竹管内面による蛇行沈線懸垂文を交互に配する。単位不明。隆帯懸垂文は下位に向けて高さを減じる。地文は単節 R L の縦位施文。焼成やや不良。色調は暗茶褐色、暗褐色を呈する。

第 82 図 7 は第 81 図 4 と折り重なるように出土したものである。図化部分で 80% が残存する。器形は胴部が円筒形を呈し、口縁部は外傾して立ち上り、口唇部は内屈する。所謂長胴甕である。口縁部は幅広の無文帯である。地文条線施文後、頸部に半裁竹管内面の重複施文で 4 条の区画沈線を巡らす。頸部上下に波状隆帯を貼付け、頸部文様帯を構成する。胴部文様は貼付け隆帯懸垂文で鈎針状、棘状の文様を縦位波状隆帯との組み合わせで 10 単位垂下させる。隆帯下半部は直線になる。一部隆帯脇に沈線を施す。剥離が多く、全体の構成は不明瞭である。焼成良好。色調は暗褐色、黒褐色、茶褐色、明褐色を呈する。



第 82 图 第 65 号住居跡出土土器 (3)



8は深鉢の胴下半部で、破片からの推定復元である。小形のわりに厚手の土器である。胴部文様は隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文の交互配置を基本とするが、1本隆帯懸垂文が連続する部分もあり、一様ではない。隆帯脇には沈線が粗雑に施される。地文は撚糸R。現存高10.7cm、底径推定7.0cm、器厚1.2から1.4cmを測る。焼成良好。色調は赤褐色、黒褐色、暗茶褐色を呈する。

9は重複する第64号住居跡に帰属すると思われる。深鉢の頸部から胴部破片より推定復元したものである。隆帯により器面を多段に区分する。隆帯上に刻目、隆帯脇には爪形文を施し、波状沈線を沿わせる。下位の楕円区画内には集合沈線を充填している。現存高14.1cm、器厚1.0～1.2cmを測る。焼成良好。色調は暗黄褐色を呈する。

10は台付土器の台部である。凶化部分で80%が残存する。板状の貼付けをもって器面を二分し、地文単節LRを縦位施文後、各々2箇所の孔を両面から穿つ。現存高5.1cm、底径10.7cm、器厚1.0～2.0cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、暗褐色を呈している。

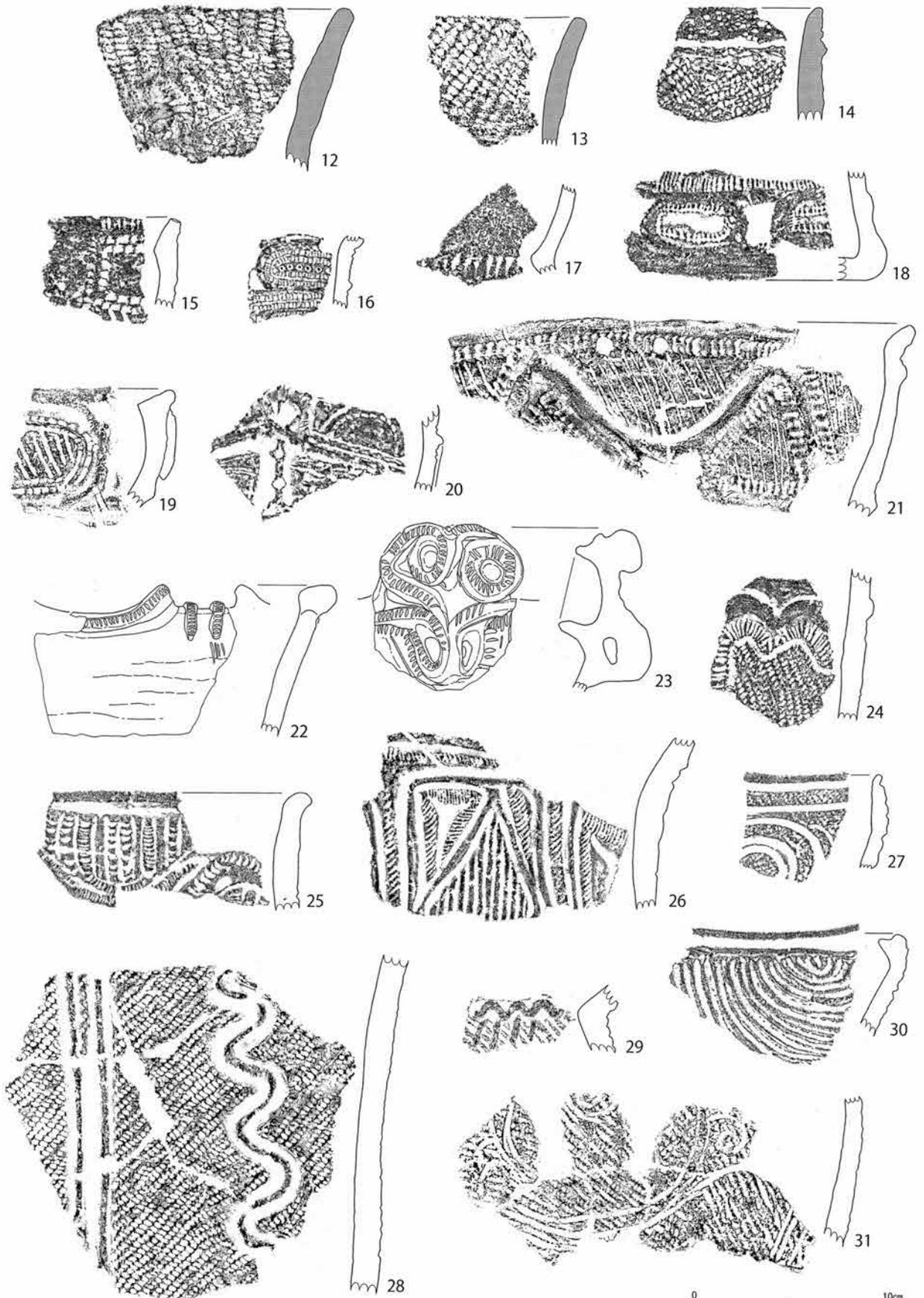
11は器台の破片である。凶化部分で25%残存。2箇所の孔が確認できる。台部平面は張り出し、擦痕が顕著。現存高3.5cm、器厚1.6～2.7cm。焼成良好。色調は明茶褐色、黒褐色を呈する。

第83図12～14は胎土に繊維を含む。12・13は地文に単節RLを施す。14は口唇部直下に1条の隆帯を巡らし、粗く刺突を施す。隆帯下には単節LRを横位施文する。15は角押文を複数施す。胎土に金雲母を含む。16は隆帯脇に複列の角押文を施し、内側に円形刺突を入れる。17は隆帯脇に爪形文を施す。胎土に金雲母を含む。18は屈折底を呈する。底部近くに楕円区画を配する。隆帯脇には刻み目を入れる。19は口縁部破片で、楕円区画の一部を残す。区画内は隆帯脇に複列の角押文を巡らし、内側は斜行沈線を充填する。胎土に金雲母を含む。21は口縁部に波状隆帯を貼付け、重三角区画を作出する。隆帯脇には幅広の角押文を施し、空間には斜行細沈線を入れる。口唇部直下に補修孔が2箇所穿たれている。22は口縁部破片で、波状口縁を呈すると思われる。波頂部は双頭となり、口唇部を回るように2本の隆帯を貼り付ける。隆帯上には刻目を施す。23は把手である。獸面を模したものと思われる。上部に円文を対で作出し、下部に眼鏡状把手を付ける。隆帯上には刻目、脇には爪形文を施している。裏面には大きな窪みを有する。24は隆帯脇に爪形文を施し、三角押の波状沈線を沿わせる。空間には単節RLの地文を施す。25は口縁部破片で波状隆帯による三角形区画の一部が残存する。隆帯上には刻目を施し、脇に沈線を3条引き、沈線間には爪形文を施す。空間に集合沈線を充填し、沈線間には粗い爪形文を入れている。26は胴部破片で、隆帯による方形区画の一部である。隆帯上に刻目を入れ、脇に沈線を巡らす。区画内を半裁竹管の斜行沈線でさらに分割し、空間に爪形文や三叉文、平行沈線を施している。27は口縁部破片で、沈線で渦巻文と思われる曲線文を描く。地文は単節RLの横位施文。28は胴部破片で、地文に単節RLを縦位施文し、2本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文を交互に垂下させる。隆帯脇に沈線は見られない。29は頸部破片で、半裁竹管と斜行沈線と貼付け隆帯により籠目文が作出されている。30は半裁竹管内面で重弧文が描かれている。口唇部内面に稜を有し、沈線を巡らしている。31は胴部破片で、沈線により大柄な渦巻文を描く。地文は単節LRの縦位施文。

第66号住居跡出土土器（第84図）

本住居跡は出土遺物が少なく、復元、実測し得た個体は無い。また、多時期の土器が混在している。

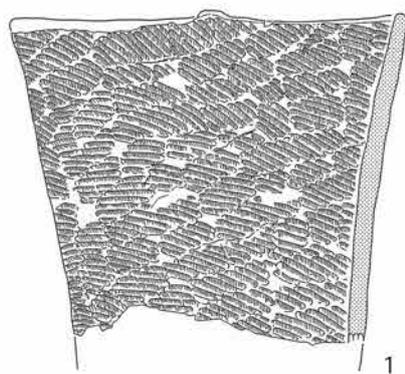
第84図1は胎土に繊維を含む。1は口縁部に突起を有する。文様は平行沈線による円文を描き、その左右に沈線で菱形のモチーフを配する。沈線内には半裁竹管の連続刺突を施している。2は口縁部に突起



第 83 图 第 65 号住居跡出土土器 (4)



第 84 图 第 66 号住居跡出土土器



第 85 图 第 67 ~ 69 号住居跡出土土器 (1)

を持つ。半裁竹管内面による波状文を多段に施している。3～5はいずれも沈線により菱形のモチーフを描く。4・5は沈線内に半裁竹管の連続刺突を施している。6・7は地文のみの土器である。6は反撚りRR、7は無節Rである。8は胎土に金雲母を含む。口縁部形状は波状で、頂部は双頭となり、直下に先端渦巻の隆帯を頸部に垂下させる。隆帯上には刻目を入れる。隆帯脇には単列の角押文を施し、空間に同一施文具による縦位の集合角押文を充填する。9は隆帯脇と空間に角押文を施す。10は三角形区画の一部で、隆帯脇に複列の三角押文を施している。11は口縁部破片で、把手から伸びる渦巻文の一部と思われる。隆帯上には爪形文と刻目を施している。12は隆帯による楕円区画を配する。隆帯脇には幅広の角押文を施し、空間には縦位の三角押文を充填する。13は沈線により渦巻文と区画を作出する。空間には蓮華文を施す。14は屈折底の破片である。下位に幅狭の楕円区画を配する。隆帯脇には刻目を施している。15は渦巻文の一部。隆帯上に刻目を施す。渦巻部周辺に交互刺突文が見られる。16～18は胴部破片である。16は半裁竹管内面で平行沈線と波状沈線を描く。地文は撚糸R。17は半裁竹管内面で渦巻文を描いている。地文は撚糸Lである。18は隆帯で渦巻文を作出する。地文は撚糸L。19～21は口縁部破片で、渦巻文と区画文が認められる。20は区画文内に隆帯を追加し、上下に二分する。21は口縁部に突起が付くと思われる。地文はいずれも単節RL。22・23は胴部破片で、半裁竹管内面の重複施文で沈線懸垂文を施す。23は曲線文も認められる。地文はいずれも単節RLで、22が縦位、23が横位。

第67～69号住居跡出土土器（第85・86図）

第67～70号住居跡は重複関係が複雑で、調査時に住居ごとの遺物区分が出来なかった。第70号住居跡は中期に帰属するため、整理作業時に該期の遺物を除き、他を第67～69号住居跡出土土器として処理した。

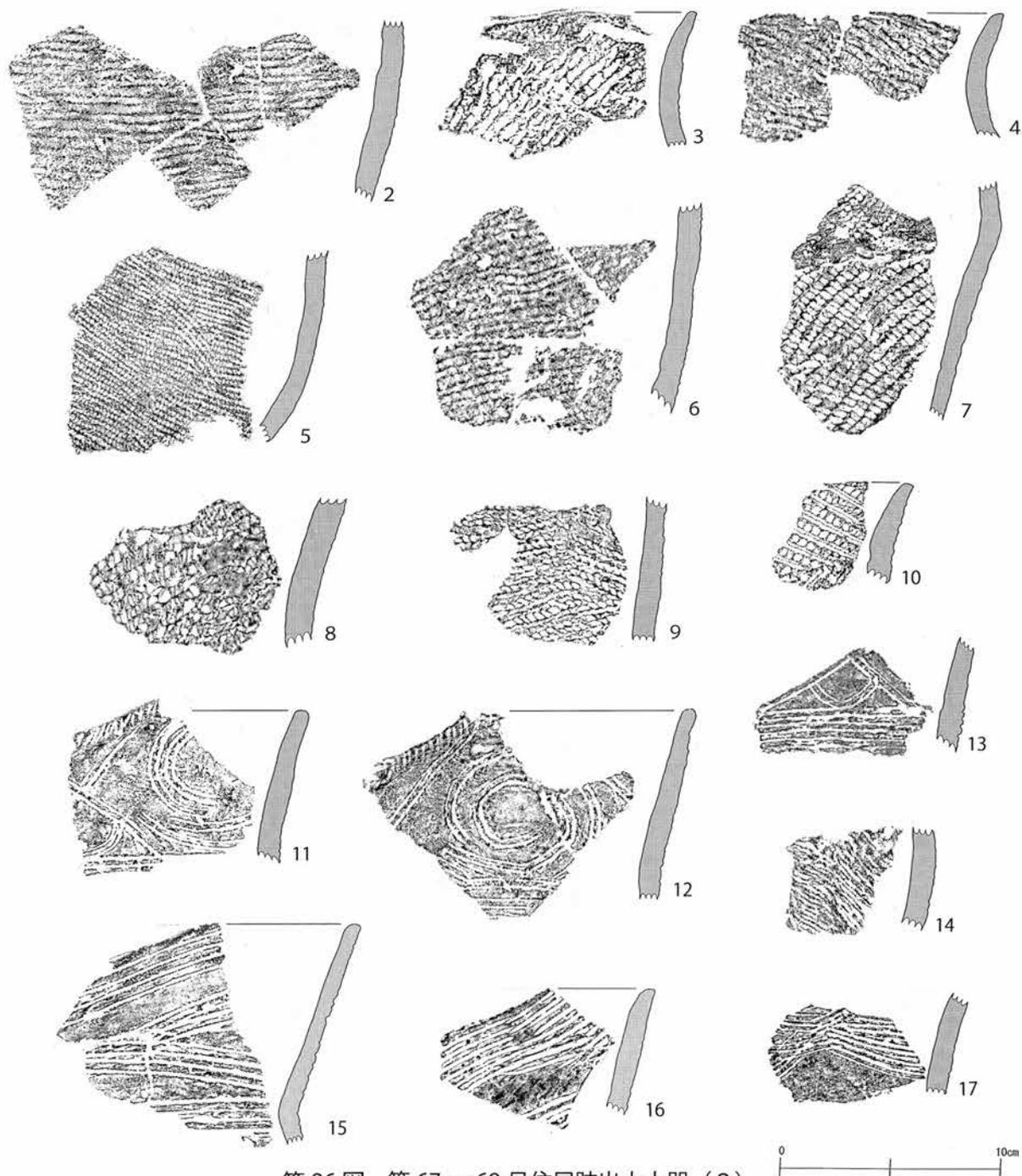
第85図1は第67号住居跡の炉跡埋設土器である。口縁部の一部と胴下半部を欠く。図化部分で90%が残存。器形は口縁部に向けて開き気味に立ち上がる。口縁部には小突起が1箇所認められる。文様は地文のみで、無節Rをやや斜位に施文している。胎土には繊維を含む。現存高17.8cm、口径20.0cm、器厚0.9～1.0cmを測る。焼成は良好であるが、内面は被熱痕跡が顕著である。色調は明褐色、明赤褐色、下半部は埋設されていたためか、黒褐色を呈する。

第86図2～17は、いずれも胎土に繊維を含む。2は胴部破片で、無節Lを斜位に施文している。3・4は口縁部破片で、3は単節LR、4は無節Rを施文している。5～9は胴部破片である。5は非常に細かい単節LR、6は無節Lを斜位施文する。7は接合痕を残し、上下に単節RLを施文する。8は無節Lと反撚りRRを施す。9は反撚りRRを施文。10は口縁部破片で、付加条を施している。11・12は同一個体で、波状口縁を呈する。各波頂部下に半裁竹管内面の沈線で菱形モチーフを描き、内側に渦巻文を施す。口唇部には刻目を入れている。13も同一個体と思われる。頸部に多条の沈線を施し、上位に菱形モチーフの接点が見られる。14は目の細かい単節LRを施文している。15～17は同一個体で、15・16は波状口縁である。口縁部と頸部に多条の沈線を施し、間に菱形のモチーフを描く。17は同モチーフの接点である。

第70号住居跡出土土器（第87・88図）

本住居跡は第67～69・71・72号住居跡と重複するため、当初、遺構のプランを明確にし得なかった。そのため第67号住居跡の出土土器の内、中期に帰属するものを本住居跡の出土遺物と判断した。

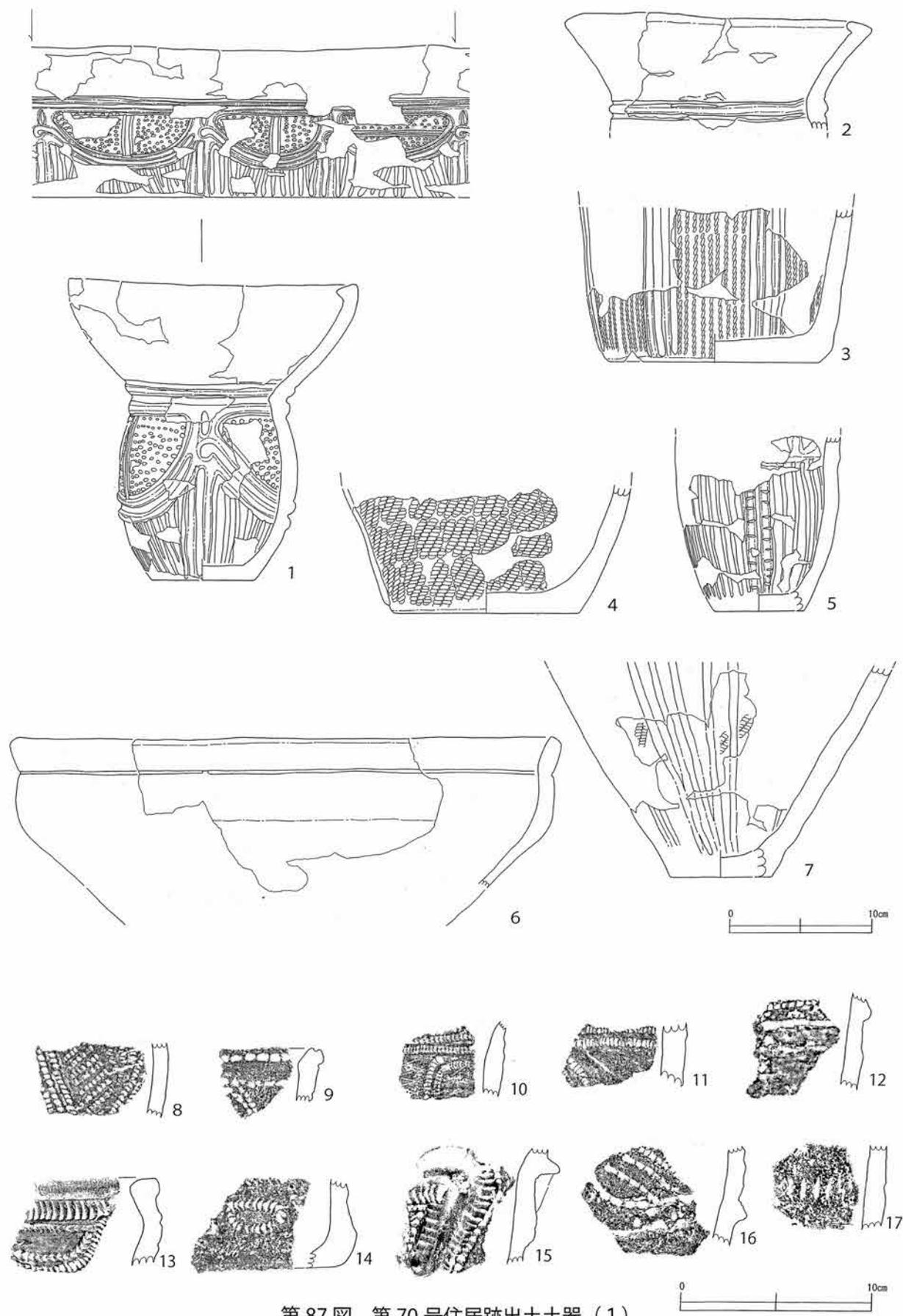
第87図1は本住居跡出土土器の内、唯一全体の器形が窺える。全体の60%が残存。器形は口縁部が



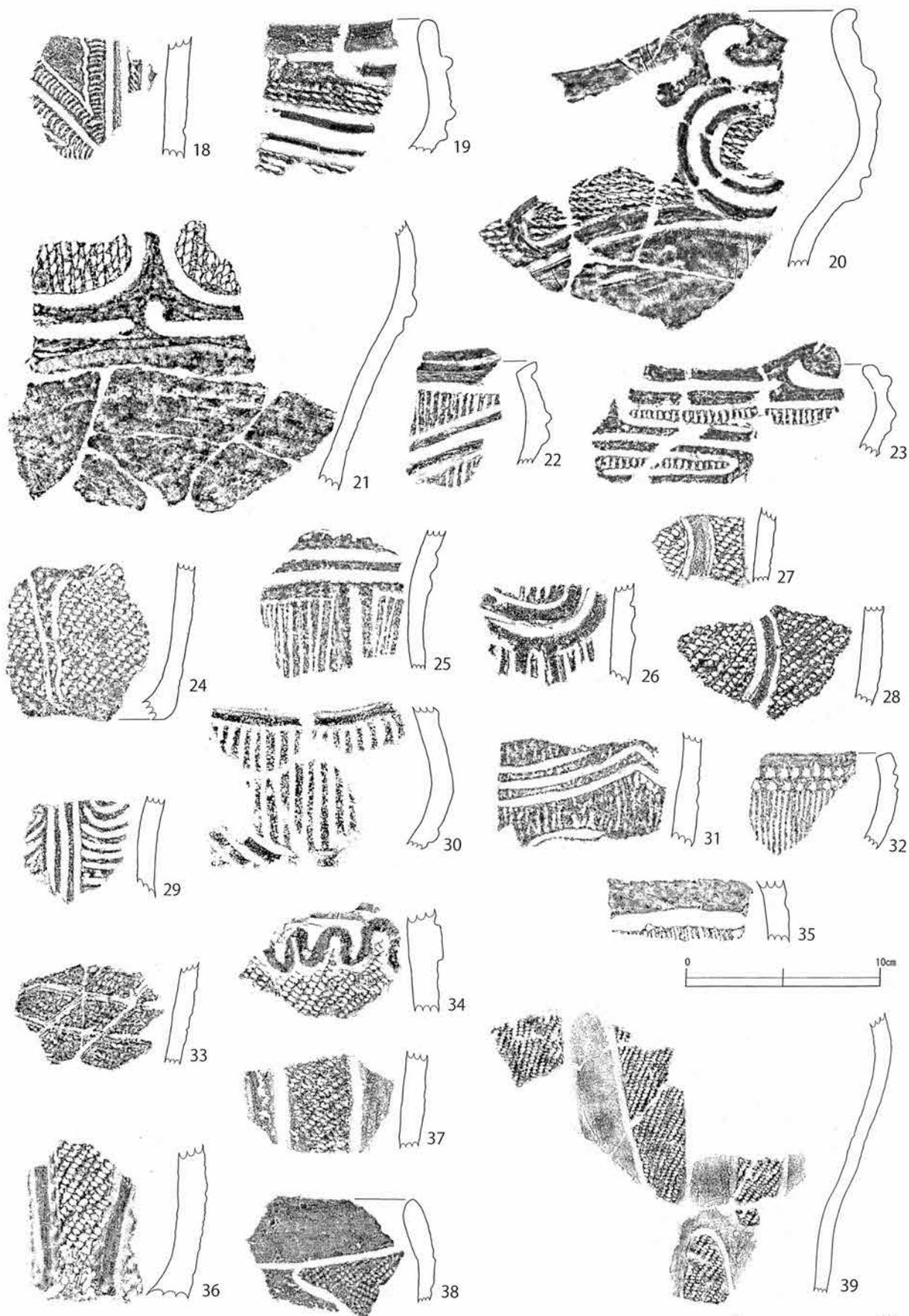
第 86 図 第 67 ~ 69 号住居跡出土土器 (2)

わずかに湾曲して開き、頸部で強く括れ、短胴の胴部は中位で膨らむ。口縁部は幅広の無文帯で、口唇部内面に稜を有する。頸部に 2 本隆帯を巡らし、胴部と分割する。胴部文様は 2 本隆帯で 3 単位の弧線区画を作出し、接点隆帯間に巻きの弱い渦巻文を置く。モチーフは渦巻繋ぎ弧文的である。弧線区画内は 2 単位が中央に 2 本縦位沈線、1 単位が 2 本横位沈線を引き、空間に刺突文を充填する。弧線区画接点からは 2 本隆帯懸垂文を垂下させ、空間に集合沈線を充填している。器高 21.4cm、口径推定 21.5cm、底径 7.2cm、器厚 0.9 ~ 1.2cm を測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、暗褐色、内面は黒褐色を呈する。

2 は無文の口縁部で、やや幅狭。図化部分で 60% が残存する。器形は外傾して立ち上り、口唇部内側に稜を有する。頸部には 1 本隆帯を残す。現存高 8.3cm、口径推定 19.0cm、器厚 0.9 ~ 1.0cm を測る。焼



第 87 图 第 70 号住居跡出土土器 (1)



第88图 第70号住居跡出土土器(2)

成良好。色調は暗茶褐色、黒褐色を呈する。

3は深鉢の胴下半部である。図化部分で50%が残存する。器形はわずかに外傾して立ち上がる。2本隆帯懸垂文を8単位垂下させる。隆帯脇には明確に沈線を引く。地文は撚糸L。現存高10.9cm、底径14.8cm、器厚1.2～1.8cmを測る。焼成良好。色調は明褐色、暗褐色を呈する。

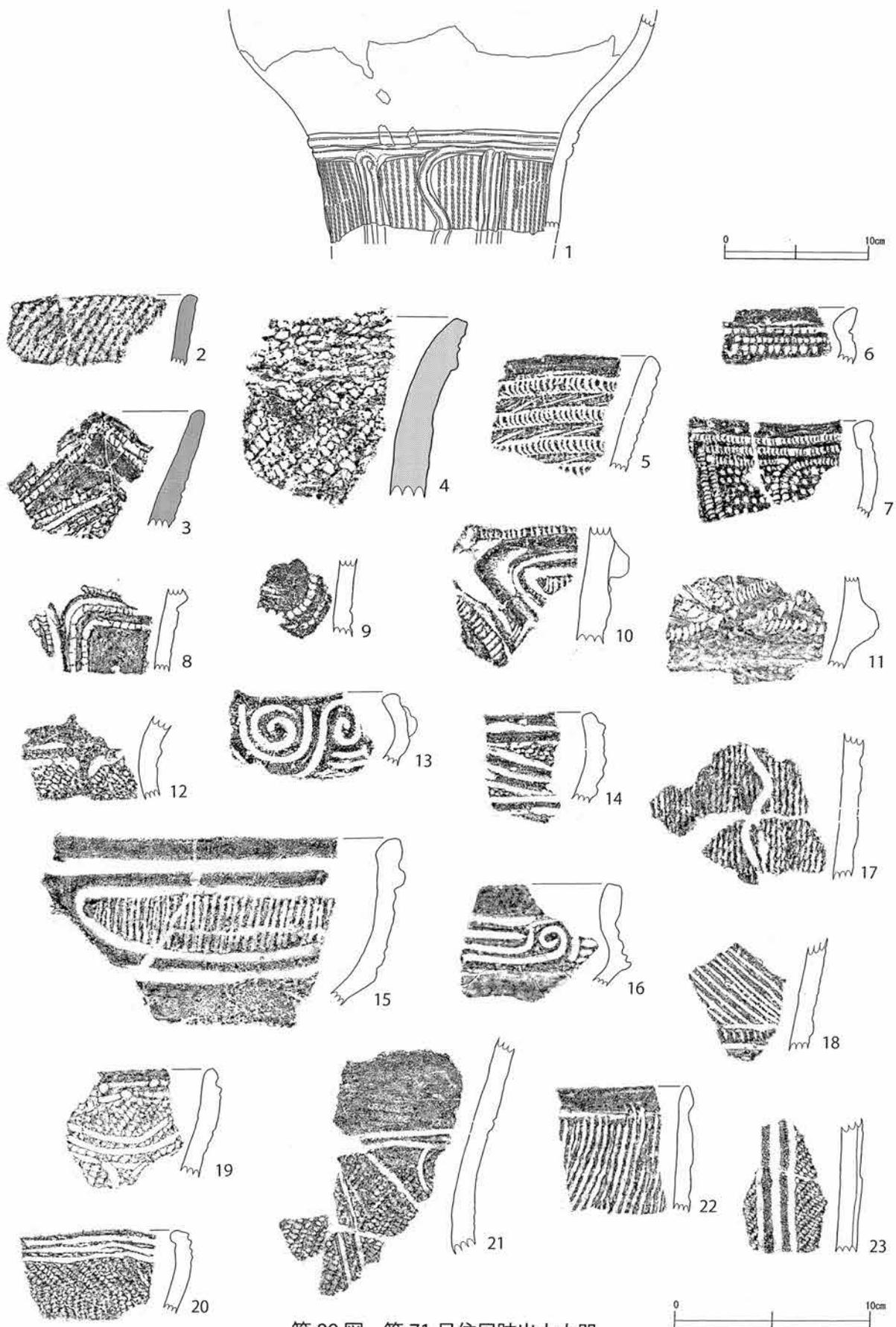
4は深鉢の底部付近である。図化部分で30%を残す。器形は上位に向けて、わずかに外傾しつつ立ち上がる。単節RL縦位の地文に隆帯尾懸垂文を施すが、単位は不明である。現存高9.1cm、底径推定13.2cm、器厚1.2～2.1cmを測る。焼成良好。色調暗赤褐色、黒褐色を呈する。

5は深鉢の胴下半部である。図化部分で50%が残存する。器形はわずかに内湾しつつ立ち上がる。刻目加飾の2本隆帯懸垂文を2単位垂下させ、空間に沈線を施している。上位に隆帯による文様が残るが、モチーフ等は不明。現存高12.4cm、底径6.4cm、器厚0.8～1.1cmを測る。焼成やや不良。色調は暗茶褐色、暗褐色を呈する。

6は浅鉢で、破片からの推定復元である。口縁部は断面板状で、わずかに外傾する。胴部は膨らみ、直線的に底部に至ると思われる。口縁部と胴部の境界に1条の沈線を引く他は、無文である。器面は磨き調整が施されている。現存高11.2cm、口径推定37.6cm、器厚0.6～1.3cmを測る。焼成良好。色調は明茶褐色、暗茶褐色を呈する。

7は深鉢の胴下半部破片である。器形は底部から直線的に開く。文様は太い沈線で描かれた沈線懸垂文であるが、本数が不揃いで単位も不明。地文は単節RLで、部分的に認められる。現存高14.8cm、底径推定7.2cm、器厚1.3～1.6cmを測る。焼成やや不良。色調は明茶褐色、黒褐色、暗茶褐色を呈する。

8～12は角押文を施す。8は並走する3列の角押文が見られ、空間に斜行する角押文を充填する。9は口縁部破片で、口唇部と隆帯脇に角押文を施す。胎土に金雲母を含む。10は細かい角押文を施し、空間に交差する細かい斜行沈線を引く。11は複列の角押文を施す。12は隆帯脇に角押文を施している。胎土に多量の金雲母を含む。13は爪形文を隆帯脇に施し、三角押文を並走させる。14は底部破片で、楕円区画内に三角押文を施している。15は三角形区画の一部。隆帯脇に爪形文を施し、三角押文を並走させる。16は隆帯脇に短列の角押文を施し、区画内に斜行する角押文を充填する。胎土に金雲母を含む。17は胴部破片で、横走する刻みが見られる。第88図18は縦位区画文の土器で、刻目加飾の隆帯脇に沈線を伴う。区画内は爪形文と並走する波状沈線は見られる。19・20は口縁部破片。19は横S字文の中央部分と思われる。地文は撚糸Lの横位施文。頸部は無文帯である。20は口縁部に突起を有し、沈線による渦巻文が施される。口縁部文様は2本隆帯で横S字文を作出する。地文は撚糸L横位施文。接合はしなかったが、第90図2と同一個体と思われる。21は頸部破片である。口縁部文様の隆帯文下端が見られるが、モチーフは不明。頸部には無文帯を置く。地文は撚糸Lの縦位。22・23は口縁部破片である。22は横S字文の一部で、地文は撚糸L縦位。23はクランク類似文と思われる。地文は沈線である。24は単節RL地文に沈線で懸垂文を描くが、上位が開くため、連弧文の可能性はある。25は頸部破片で、2本隆帯を巡らし、2本隆帯懸垂文を垂下させる。地文は撚糸L。26は胴部破片で、隆帯による渦巻文と懸垂文の一部が見られる。地文は沈線である。27は半裁竹管内面を強く押し付けて、擬隆帯懸垂文を施す。地文は単節RL縦位。28は蛇行隆帯懸垂文が見られる。地文は単節RL縦位。29は半裁竹管内面で懸垂文を施し、空間に重弧文を充填する。30は胴部上位の破片である。頸部には区画隆帯を巡らし、2本隆帯で弧線文を作出する。空間は集合沈線を充填している。31は3本沈線で弧線文を描く。地文は撚糸L。



第 89 图 第 71 号住居跡出土土器

32 は口縁部に 2 本沈線を巡らし、沈線内に列点を施す。地文は撚糸 L である。33 は第 60 図 8 に類似する。単節 R L をやや斜位に施文し、半裁竹管内面で菱形モチーフの文様を描く。34 は頸部に波状隆帯を貼り付ける。地文は単節 R L の縦位施文。35 は無文の口縁部下端に浅い沈線を巡らす。胴部地文は条線。36 は底部付近の破片で、単節 R L 地文に背の低い隆帯懸垂文を施す。37 は磨消懸垂文が見られる。地文は単節 R L 縦位。38 は沈線で文様を描くが、モチーフは不明。地文は単節 R L の充填施文。39 は上位が沈線による連結した U 字文、下位が逆 U 字文で、互い違いに描く。地文は単節 R L の充填施文である。

第 71 号住居跡出土土器 (第 89 図)

本住居跡の出土土器は比較的少なく、復元、実測し得たのは炉跡埋設土器のみである。

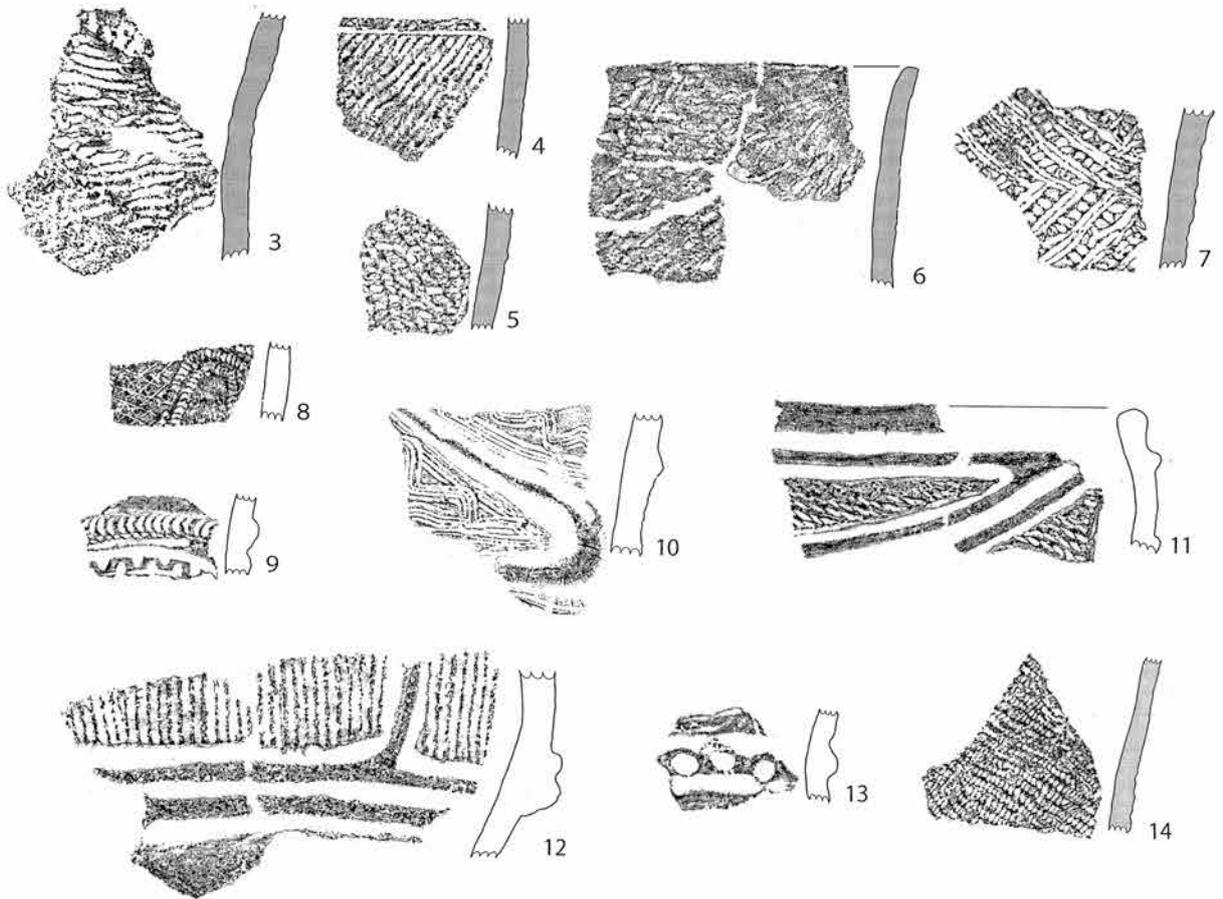
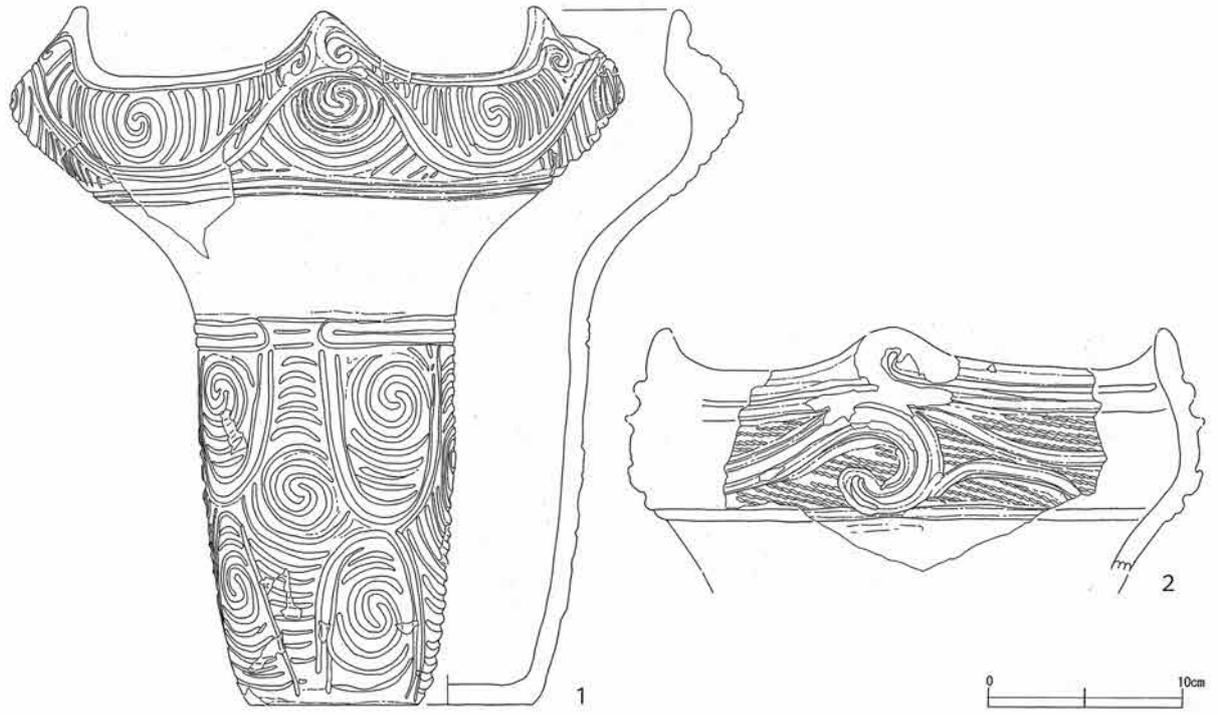
第 89 図 1 は炉跡埋設土器である。口縁部と胴下半部を欠く。図化部分で 80% が残存する。器形は口縁部がわずかに内湾しつつ立ち上り、胴部は円筒形を呈する。口縁部は幅広の無文帯で、下端に区画文様として 2 本隆帯を巡らす。胴部文様は 2 本隆帯懸垂文と、蛇行隆帯懸垂文を交互に配する。各 4 単位。2 本隆帯懸垂文間の沈線先端は、蕨状となる単位もある。隆帯脇には沈線を伴うが、太さは一様ではない。地文は撚糸 L である。現存高 15.4cm、器厚 0.9 ~ 1.2cm を測る。焼成は良好であるが、内面には被熱が顕著である。色調は黒褐色、黒色暗褐色、暗茶褐色を呈する。

2 ~ 4 は胎土に繊維を含む。いずれも口縁部破片である。2 は地文に無節 L を施す。3 は波状口縁で、沈線で菱形モチーフを描き、沈線内に刺突を加えている。4 は口縁部に隆帯を巡らし、上位に乱雑な刺突文、以下に単節 R L を施す。5 は多段の爪形文を施し、隙間に斜行沈線を入れる。6 は 2 種類の施文具で、口縁部に多段の角押文を巡らす。7 は内面に接合痕を残す。口縁部に複列の角押文、その直下に杵状や曲線文を角押文で描く。空間には刺突文を充填する。8 は頸部破片で、断面三角形の Y 字状隆帯を貼付け、脇に複列の角押文を施している。9 は複列の角押文を曲線的に施す。10 は三角形区画の一部で、隆帯脇に幅広の角押文と複沈線を施す。区画内には集合沈線を充填する。11 は頸部破片で、隆帯脇に連続した刻目と粗い角押文を施している。胎土に金雲母を含む。12 は頸部破片で、上位は無文帯、下位は単節 R L 地文に蛇行隆帯懸垂文を垂下させる。13 は口縁部に渦巻文を互い違いに並列させる。14 は横 S 字文の中央部分。地文は撚糸 L 横位。15 は口縁部破片で、区画文と渦巻文の一部が見られる。地文は撚糸 L である。16 は浅鉢で、沈線による渦巻文と区画文の一部を残す。17 は撚糸 L 地文に蛇行沈線懸垂文を垂下させる。18 は開く口縁部に斜行沈線を施す。下端は刻目加飾の隆帯で区画する。19 は口縁部に 2 条の沈線を巡らし、交互刺突を加える。下位に 3 本沈線で弧線文を描く。弧線文下に付帯文様が見られる。地文は単節 R L 縦位。20 は口縁部に 3 条の沈線を巡らし、地文に単節 R L を横位、斜位に施している。21 は頸部無文帯下端を 2 条の沈線で区画し、胴部に 2 本沈線懸垂文と蛇行沈線懸垂文を交互に垂下する。地文は単節 R L 縦位。22 は円筒形の土器で、口唇部は突帯状を呈する。地文は集合沈線である。23 は 0 段多条の単節 R L 地文に 2 本隆帯懸垂文を垂下させる。

第 72 号住居跡出土土器 (第 90 図)

大部分が調査区外にあるため、出土土器は比較的少ない。復元、実測し得たのは 2 個体である。

第 90 図 1 は炉跡の北側に横倒しの状態で出土した。口縁部の約 1 / 2 を欠く。全体の 80% が残存し、全体形が窺える。器形は 4 単位の突起を有する口縁部が強く内湾し、口縁部文様直下から括れる頸部に至る。胴部は長胴で、ほぼ円筒形を呈する。口唇部には突起部に対向する小渦巻文から流れる沈線を巡らす。突起に対応して突出する渦巻文を配し、それらを 2 条の波状沈線で繋いで区画を作出する。区画中央に渦



第 90 图 第 72 号住居跡出土土器

巻文を沈線で描き、空間に弧状沈線を充填する。頸部は無文帯で、下端を長楕円の沈線で区画する。胴部は対弧状の区画を沈線で4単位描き、内側に中央巴状の渦巻文と弧状沈線を空間に充填する。対弧区画外側も同様の文様を施している。器高36.6cm、口径推定23.2cm、底径8.8cm、器厚0.9～2.9cmを測る。焼成良好。色調は暗褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

2は破片からの推定復元である。第88図20と同一個体と思われるが、接合はしなかった。口縁部の内湾が強い。4単位の突起を有する。口縁部文様は2本隆帯による横S字文と、横J字文を連結させるものと思われる。隆帯間及び脇には何度もナゾリを入れるため、隆帯稜線が不明確となっている。頸部は無文帯である。地文は撚糸Lの横位施文。現存高12.3cm、口径推定24.8cm、器厚1.0～1.1cmを測る。焼成良好で、色調は暗茶褐色、黒褐色、暗赤褐色を呈する。

3～7は胎土に繊維を含む。3・4・6は無節L、5は単節RL、7は付加条をそれぞれ施している。8は複列の角押文と細沈線の格子目文が認められる。9は隆帯上に爪形文を加飾し、直下に交互刺突文を施している。10は三角形区画の一部で、区画内には櫛歯状施文具による条線を充填している。11は口縁部破片で、横S字文の一部。2本隆帯で作出される。地文は撚糸Lの横位施文。12は口縁部文様下位。区画隆帯を2本施す。頸部は無文帯である。地文は撚糸L縦位。13は隆帯上に円形刺突を加えている。14は胎土に繊維を含む。単節RLの横位施文である。

第73号住居跡出土土器(第91図)

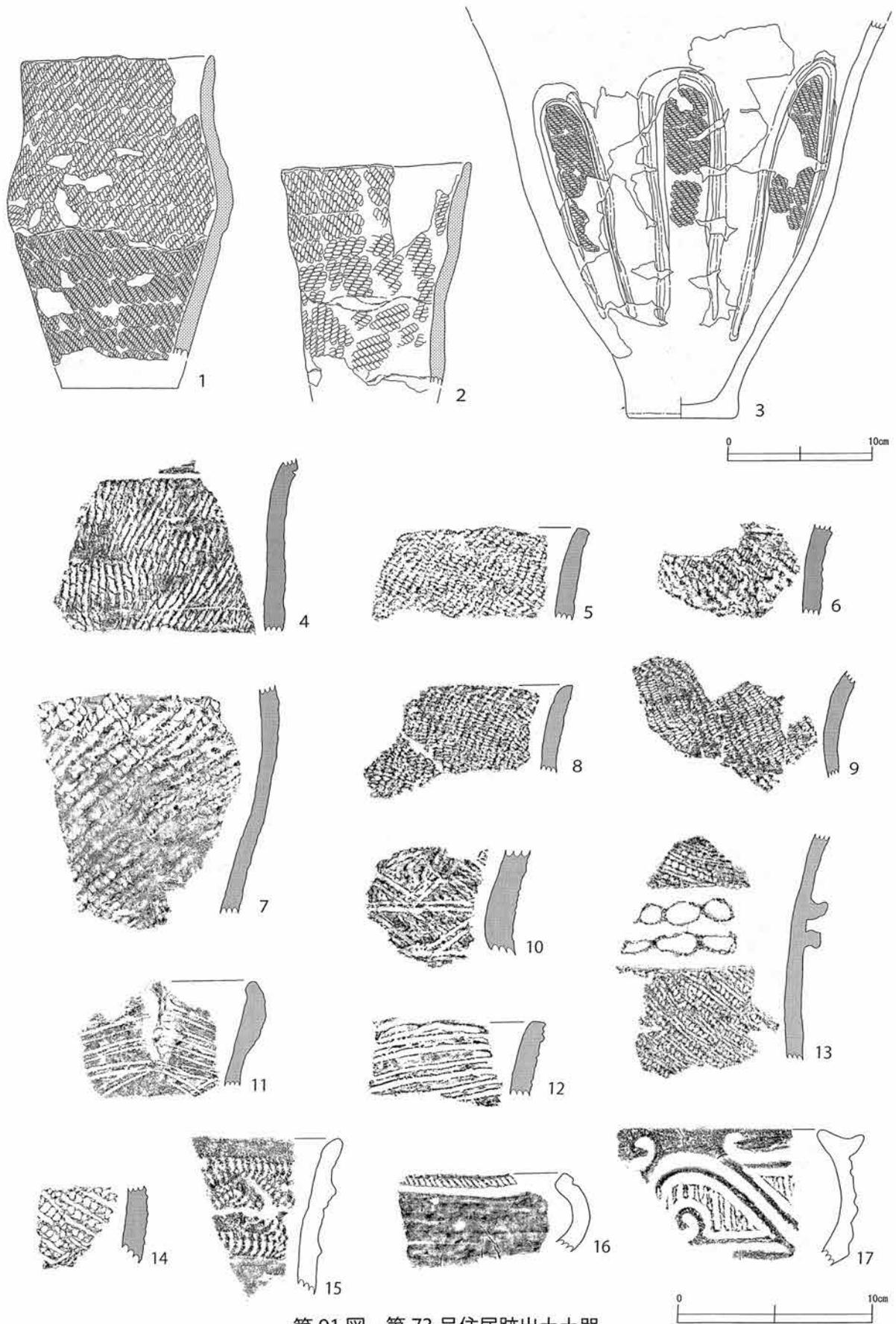
本住居跡では2個体の土器が床面近くより出土し、復元、実測し得た。また、単独埋葬と思われる個体も、破損した状態で出土している。

第91図1は口縁部から胴部上位の一部と底部を欠く。図化部分で80%が残存する。胎土に繊維を含む。胴部上位に最大径を有し、内傾しつつ立ち上り、口縁部はほぼ直立する。胴部中位に追加成形痕が見られ、その上下で施文原体を変える。上位は粗い単節LRの横位施文、下位は細かい単節RLの横位施文である。現存高21.9cm、口径12.9cm、器厚0.3～1.1cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、黒褐色を呈する。

2は図化部分で60%が残存する。下位に成形痕が2段認められる。器形は円筒形に近い。器面全体に単節RLを施すが、口縁部は横位、直下から成形痕上段までが縦位、胴部下半部は斜位に施文している。現存高15.8cm、口径12.7cm、器厚0.5から1.1cmを測る。焼成良好で、色調は黒褐色、暗茶褐色を呈する。

3は深鉢の胴部。覆土上層より破損した状態で出土したもので、本遺構には帰属しない。単独埋葬と思われる。図化部分で30%が残存する。器形は直立する小さな底部から、外傾しつつ立ち上がる。文様は逆U字状の懸垂文を、推定で7～8単位隆帯で作出している。地文は上半部のみで、単節LRの充填施文と思われるが、最後に隆帯脇に沈線を施すため、末端が消えている。現存高27.8cm、底径7.3cm、器厚0.9～1.2cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、黒褐色、暗褐色を呈する。

4～14は胎土に繊維を含む。4は上端に1条の沈線が見られる。地文は無節Lの横位施文である。5は口縁部破片で、単節RLをやや斜位に施している。6は無節Rの横位、7・9は単節RL横位、8は単節LRの横位施文。10は地文に無節Lを横位に施文し、半裁竹管内面による菱形文を多段に描く。11は口縁部に突起を有し、短い隆帯を貼り付ける。口縁部文様は沈線で描かれるが、モチーフは不明。12は平行沈線を施している。13は胴部に2本隆帯を横位に貼付け、指頭圧痕を加える。上下には付加条を施す。14の地文も付加条である。15は円筒形の深鉢と思われる。複列の角押文を接触した状態で隆帯脇に施す。16は袋状の無文口縁部である。口唇部に刻目を施している。17の口唇部は外側に突出し、平坦面を作る。



第91图 第73号住居跡出土土器

文様は隆帯による横S字文で、渦巻上位に対向する横位の蕨状文を施す。地文は撚糸L縦位。

第74号住居跡出土土器(第92～94図)

本住居跡から比較的多くの土器が出土している。2個体の炉跡埋設土器の他、8個体の土器が復元、実測し得た。

第92図1は炉跡1の埋設土器である。口縁部から頸部の大部分と胴下半部を欠く。図化部分で60%残存。器形は頸部で緩く括れ、胴部上位で膨らむ。頸部に2条の沈線を巡らし、上下に分割する。口縁部には3本の単沈線で弧線文を描く。単位不明。胴部は3本沈線懸垂文と2本蛇行沈線懸垂文を交互に施すが、後者は1単位を欠く。地文は条線。現存高12.7cm、器厚1.0～1.2cmを測る。焼成は良好であるが、被熱が顕著。色調は明赤褐色、明褐色を呈する。

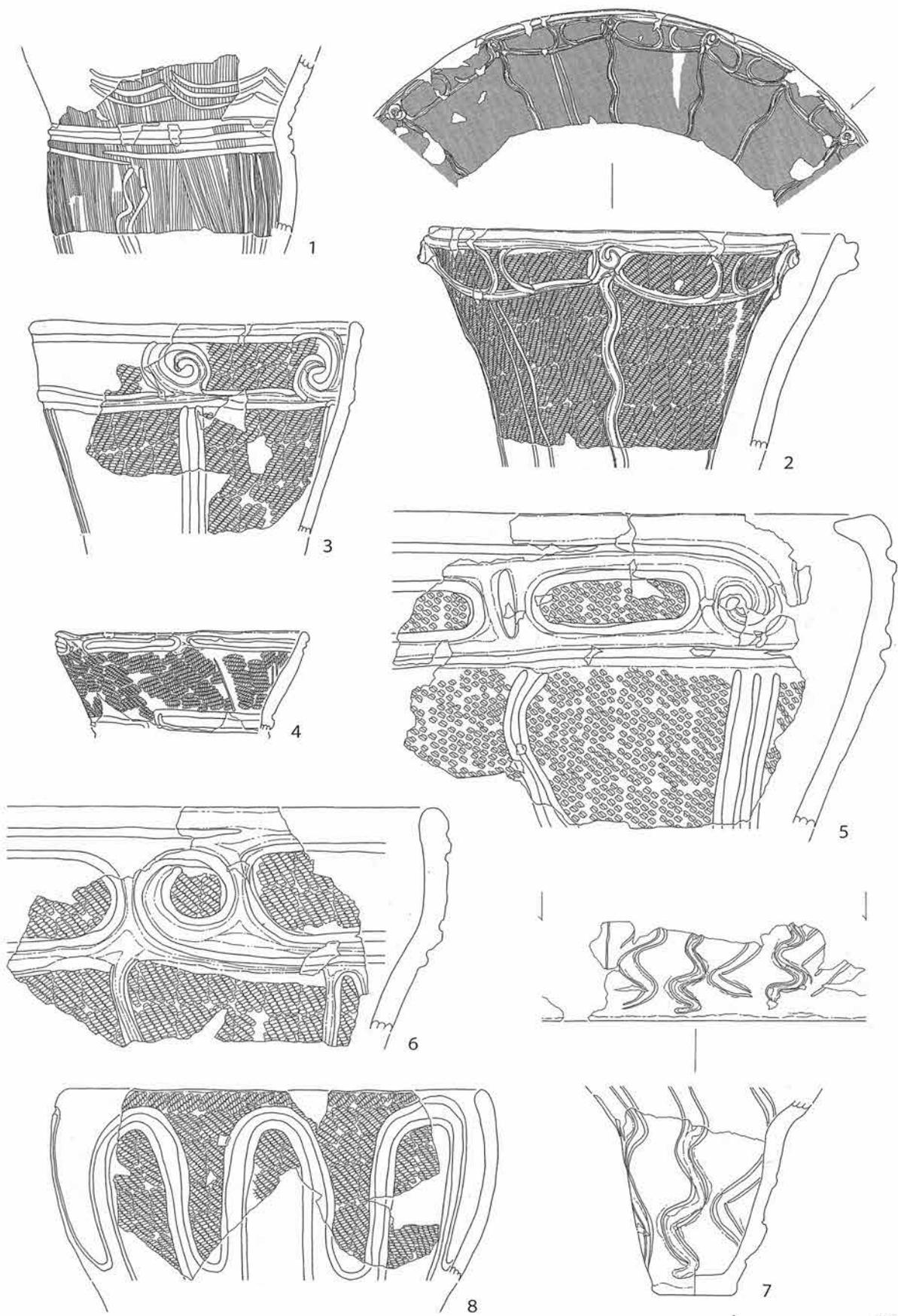
2は炉跡2の埋設土器である。口縁部の一部と、胴下半部を欠く。図化部分で90%が残存する。器形は口縁部に向けて外傾して直線的に開く。口唇部に1条の沈線を巡らす。口縁部文様は地文施文後に突起状の渦巻文を5単位置き、各々を弧状隆帯で連結する。弧状隆帯区画内にはX字状の隆帯を貼付け、楕円区画を対峙させるが、1単位のみ対としない。胴部は渦巻文から蛇行隆帯を垂下させ、1単位のみ2本沈線懸垂文を施している。隆帯脇には沈線を引くが、一様ではない。沈線懸垂文間は地文を残す。地文は太い条と細い条が交互に見られる異条状文で、単節RLの縦位施文である。一部磨り消された部分が認められる。現存高15.2cm、口径24.4cm、器厚0.9～1.1cmを測る。焼成は良好であるが、内面及び口縁部外面に被熱による劣化が著しい。色調は明茶褐色、明褐色を呈する。

3は破片からの推定復元である。図化部分で20%を残す。器形は緩く外傾しつつ開く。口縁部文様は文様帯を渦巻文で区切る構成を採り、明確な楕円区画は見られない。推定5単位。隆帯脇には沈線を伴う。胴部文様は幅狭の磨消懸垂文を、口縁部渦巻文に対応させ、5単位垂下させられると思われる。地文は口縁部、胴部ともに単節RLの縦位施文。現存高14.7cm、口径推定21.6cm、器厚0.7～0.9cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、明茶褐色を呈する。

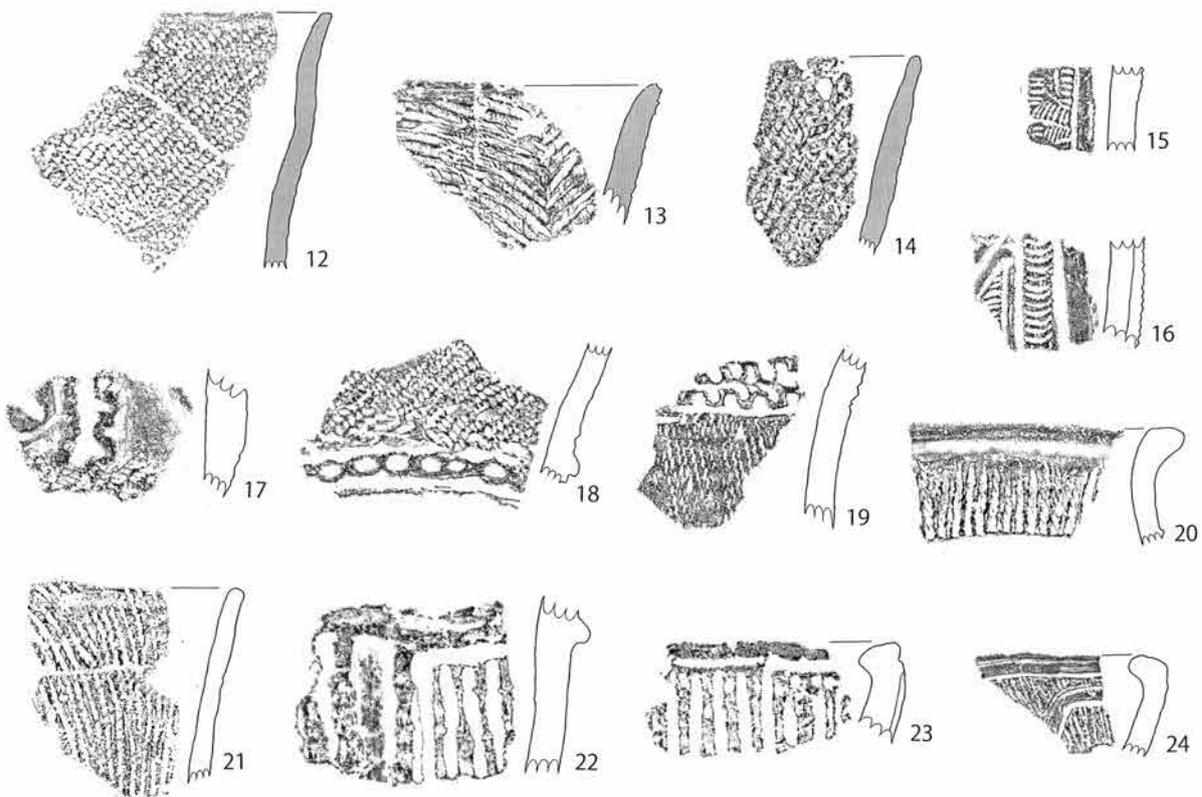
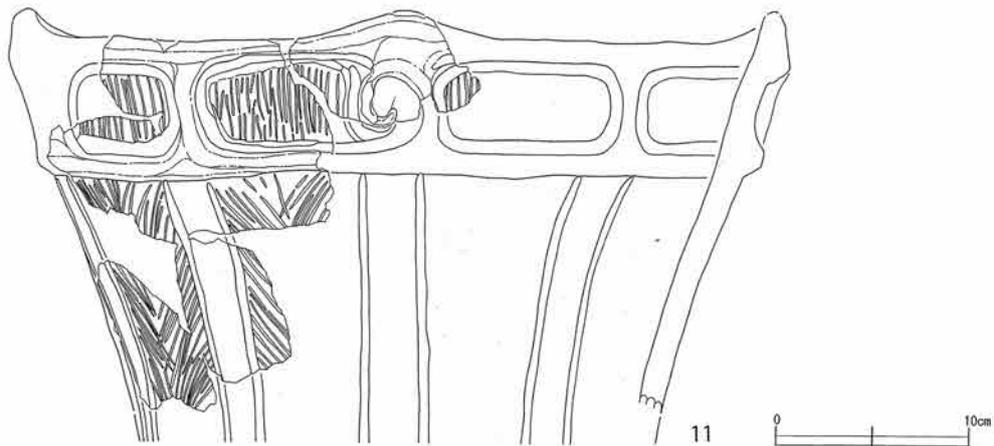
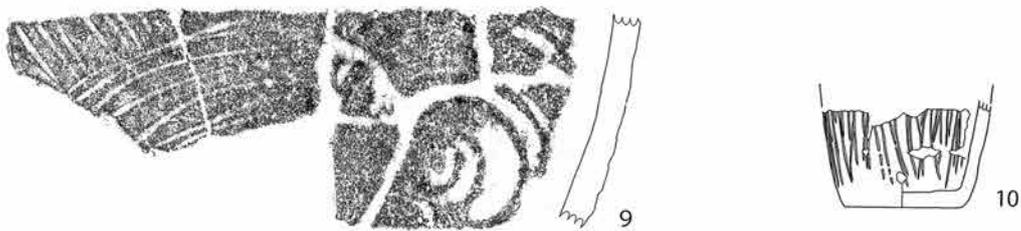
4は小形深鉢で、口縁部から頸部が残存する。図化部分で90%を残す。器形は頸部から口縁部に向けて外傾しつつ開く。文様は口縁部と頸部に長楕円形の沈線文を施し、地文を磨り消す。口縁部は4単位、頸部は不明。地文は単節LRを縦位、横位、斜位に施している。地文部には部分的に斜行沈線が見られる。現存高7.5cm、口径17.4cm、器厚0.7～1.0cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗茶褐色を呈する。

5は大形深鉢の口縁部破片である。炉縁の一部に使用されていた。器形は内湾しつつ立ち上り、口唇部内面には稜を有する。口縁部文様は渦巻文と楕円区画の交互配置を基調とするが、渦巻文部が縦位短沈線の部位も見られるなど、構成は不規則である。隆帯脇に太い沈線を伴うが、何度も同じところ場所をなぞるため、稜線が不明確となっている。胴部文様は3本沈線懸垂文と2本蛇行懸垂文の交互配置と思われる。沈線間は磨り消している。単位は不明。地文は複節LRの縦位施文である。現存高21.9cm、器厚1.5～2.0cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、茶褐色、暗褐色を呈する。

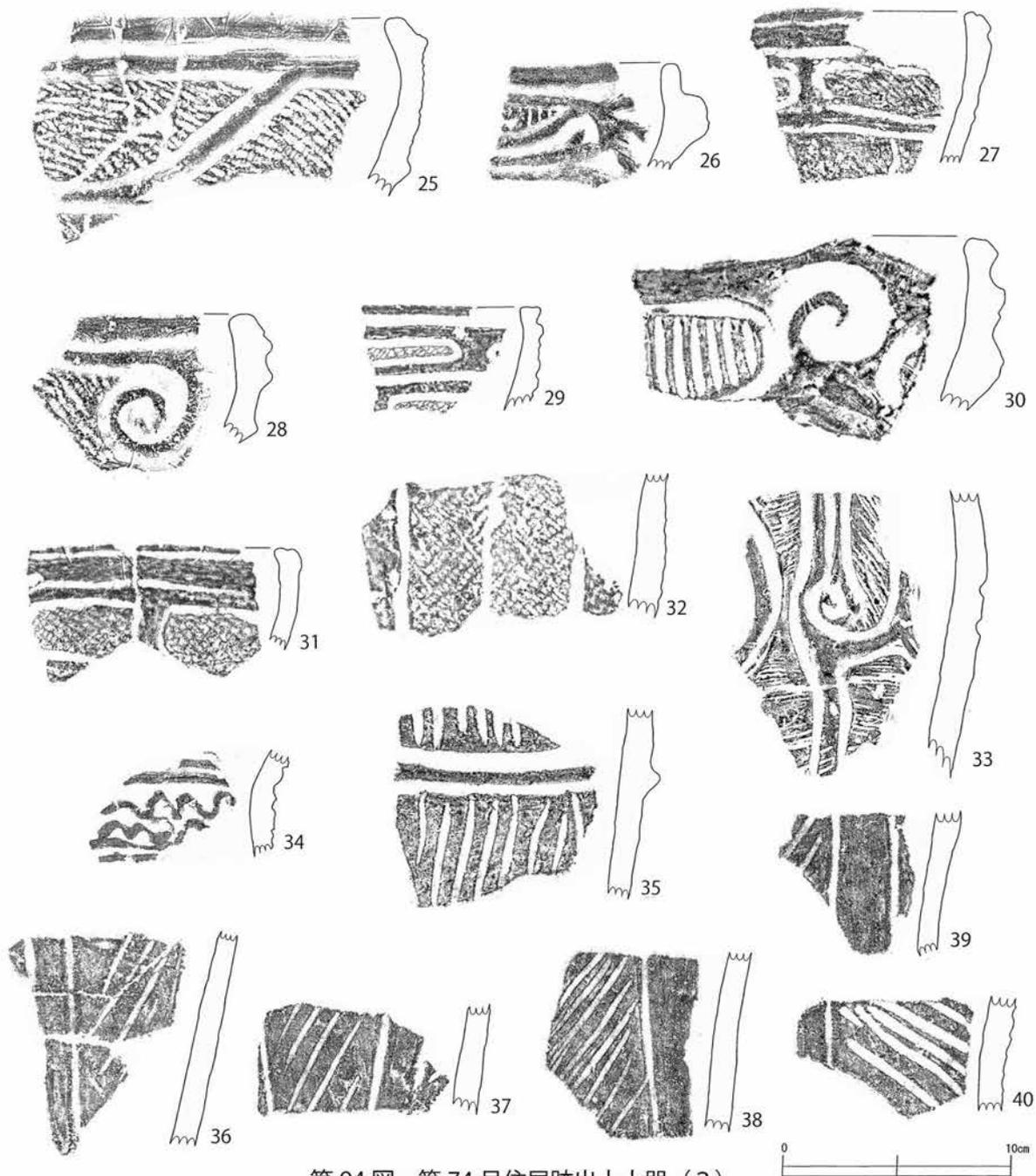
6も大形深鉢の口縁部破片で、5と同様、文様の描出が稚拙である。器形は頸部から外傾して立ち上り、口縁部はほぼ直立する。口縁部文様は渦巻文と楕円区画の交互配置であるが、渦巻文部にも地文が見られる。単位不明。文様帯下端に隆帯を巡らし、胴部と区画する。胴部には2本隆帯懸垂文と蛇行隆帯懸垂文を交互に垂下させられると思われる。2本隆帯間は地文を残す。地文は口縁部、胴部ともに単節LRの縦位施文である。現存高16.7cm、器厚1.4～1.6cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、茶褐色を呈する。



第92图 第74号住居跡出土土器(1)



第93图 第74号住居迹出土土器(2)



第94図 第74号住居跡出土土器(3)

7は小形の深鉢であるが、比較的厚手。口縁部すべてと胴部の一部を欠く。図化部分で60%が残存する。器形は小さめの底部から外傾して立ち上り、頸部から口縁部に向けて開くと思われる。胴部文様は蛇行隆帯懸垂文を推定3単位垂下させる。隆帯懸垂文間には2本蛇行沈線懸垂文と斜行沈線を施すが、明確な交互配置構成ではない。地文は無い。現存高13.9cm、底部は楕円形で、径5.0cm前後、器厚0.8～1.3cmを測る。焼成良好。色調は黒褐色、暗茶褐色を呈する。

8は破片からの推定復元である。図化部分で20%が残存する。器形は口縁部が内湾気味に立ち上がる。文様は沈線による波状文と逆U字の懸垂文の組み合わせである。推定8単位。沈線間は磨り消している。地文は単節LRで口縁部は横位、胴部は縦位に施文している。現存高13.3cm、口径推定28.4cm、器厚0.8

～1.1cmを測る。焼成やや不良。色調は暗褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

第93図9は大形深鉢の胴部破片である。2本隆帯で大柄な渦巻文を作出し、空間に沈線を充填する。焼成不良。色調は明褐色、黒褐色を呈する。

10は小形深鉢の底部付近である。凶化部分で50%が残存する。器形は上位にやや開く。器面に細沈線を乱雑に施している。現存高5.6cm、底径6.0cm、器厚0.6～0.9cmを測る。焼成良好。色調は暗褐色、黒褐色を呈する。

11は大形の深鉢で、部分的に残存する破片から推定復元した。凶化部分で25%を残す。器形は口縁部に向かって直線的に開く。口縁部には突起を有する。推定4単位。口縁部文様は渦巻文と楕円区画を配すると思われるが、単位等の詳細は不明。文様帯下端の区画隆帯は、太く明確である。胴部には2本沈線懸垂文を垂下させるが、単位は不明である。地文は口縁部は細い沈線による集合沈線、胴部は綾杉文であるが、両者とも粗い施文である。現存高21.3cm、口径推定37.2cm、器厚1.3～1.4cmを測る。焼成やや不良。色調は黒褐色、暗茶褐色、暗赤褐色を呈する。

12～14は胎土に繊維を含む。地文は12・14が単節LRの横位、13は無節LとRの横位施文による縦位の羽状縄文である。14には補修孔が認められる。15・16は縦位区画文の土器である。隆帯区画の脇に半裁竹管の平行沈線を施し、沈線脇には細かい刻みを入れる。16の隆帯上には刻目が加えられている。17は隆帯に交互刺突を加え、波状とする。18は頸部に1本の隆帯を貼付け、指頭圧痕を加える。地文は単節LR横位施文。19は交互刺突により波状文を2条作出する。地文は撚糸L。20は外反する口縁部直下に撚糸Rを施している。下端に沈線が見られる。21は口縁部以下に撚糸Lを施文する。22は頸部破片で、2本隆帯懸垂文が見られる。空間には集合沈線を施している。23は口縁部破片である。口唇部に沈線を巡らし、直下に集合沈線を施す。24も口縁部破片で、内面が突出する。口唇部に半裁竹管による平行沈線を巡らし、同一施文具では波状文を描く。地文は条線。第94図25～31は口縁部破片である。25は1本隆帯が上下区画隆帯間に斜行する。モチーフ不明。地文は単節LRで、縦位、斜位に施文される。26は渦巻文部が突出する。地文は撚糸L。27は偏平な隆帯による楕円区画の一部である。胴部の蛇行沈線懸垂文が認められる。地文は不明確であるが、無節Rと思われる。28は渦巻文が楕円区画に連結する。地文は単節RLの横位施文。29は偏平な隆帯による幅狭の楕円区画と渦巻文の一部が見られる。胴部には隆帯懸垂文が認められる。地文は単節RLの横位施文。30は口縁部に背の低い突起を付ける。渦巻文は楕円区画と連結する。地文には集合沈線を充填。31は口唇部に沈線を巡らす。口縁部文様は沈線で描かれた並列する楕円区画で、区画間は磨り消す。地文は単節LR縦位。32は胴部破片で、磨消懸垂文が施される。地文は単節RLの縦位。33は隆帯懸垂文に渦巻文を付随させる。地文は引掻き傷状の条線で、横位、斜位に施している。34は頸部破片で、2本隆帯間に波状隆帯を複列貼り付ける。口縁部は無文と思われる。35～40は2本沈線懸垂文間に沈線を充填する。充填沈線は縦位、斜位が見られる。

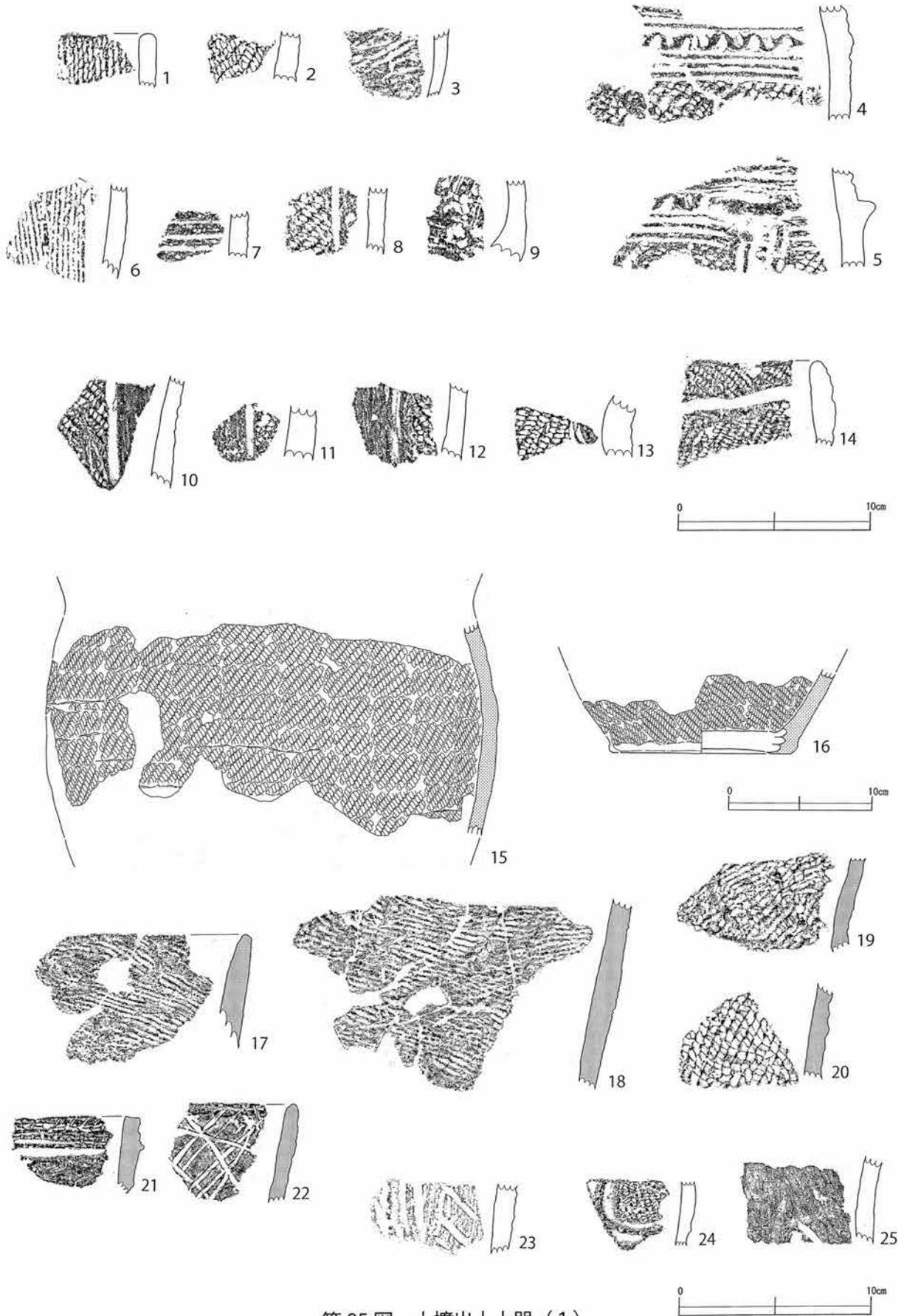
土壙出土土器

第15号土壙出土土器（第95図1～3）

第95図1～3は胴部破片である。1は撚糸L、2は単節LR縦位、3は条痕文をそれぞれ施している。

第17号土壙出土土器（第95図4・5）

4・5は同一個体と思われる。いずれも深鉢の胴部破片で、半裁竹管内面の重複施文による平行沈線を



第 95 图 土壤出土土器 (1)

巡らし、上位に隆帯を貼付け、交互刺突を加えて波状とする。1箇所突起が見られ、直下に沈線懸垂文を施している。地文は単節R Lの縦位施文。

第22号土壙出土土器（第95図6～9）

6～8は深鉢の胴部、9は底部付近の破片である。6は地文条線、7は沈線を半裁竹管内面の重複施文で沈線を施す。8は単節R Lの縦位施文に、磨消懸垂文を施す。9は条線が認められる。

第29号土壙出土土器（第95図10～13）

10～13は深鉢の胴部破片である。10～12は磨消懸垂文が施される。地文は10・12が単節L R。11は単節R Lで、いずれも縦位施文。13は括れ部分にあたり、単節R L地文に半裁竹管内面による曲線文が施される。

第30号土壙出土土器（第95図14）

14は口縁部に1条の沈線を巡らす。地文は単節R Lで、口縁部横位、沈線下は縦位に施文している。

第32号土壙出土土器（第95図15～22）

2個体の土器が実測し得た。15は深鉢胴部上位で、膨らむ器形を呈する。図化部分で50%が残存。胎土に繊維を含む。器面には追加成形痕が認められ、全面に粗い単節L Rを横位に施文している。16は深鉢の底部付近である。胎土に繊維を含む。器形は外傾して開く。底部は外側にやや張り出し、残存部分から僅かに上底状を呈すると思われる。地文は単節R Lの横位施文である。17～22は、すべて胎土に繊維を含む。17・18は同一個体で、地文は無節Rの斜位施文。19は上位に無節L、下位に付加条を施文する。20は地文単節L R。21は口縁部直下にタガ状の隆帯を巡らし、口唇部間に竹管の押引きを2条施している。22は沈線を格子目状に施している。

第37号土壙出土土器（第95図23～25）

23は地文条線に沈線懸垂文と斜行沈線が見られる。24は口縁部文様の一部で、円形区画文が認められる。地文は単節R L。25は蕨状文あるいは逆U字文の頂部が見られる。

第40号土壙出土土器（第96図26）

第96図26は胎土に繊維を含む。無節Lの斜位施文。

第42号土壙出土土器（第95図27～33）

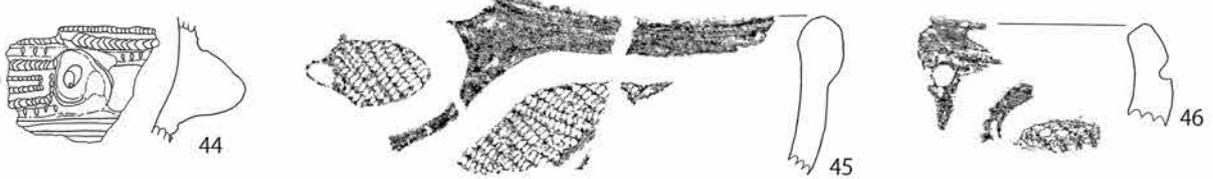
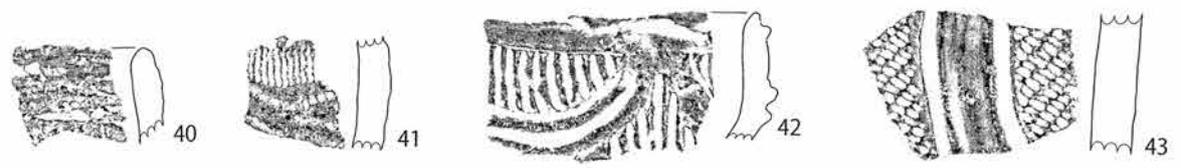
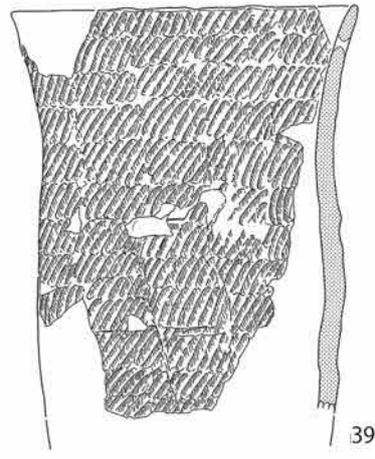
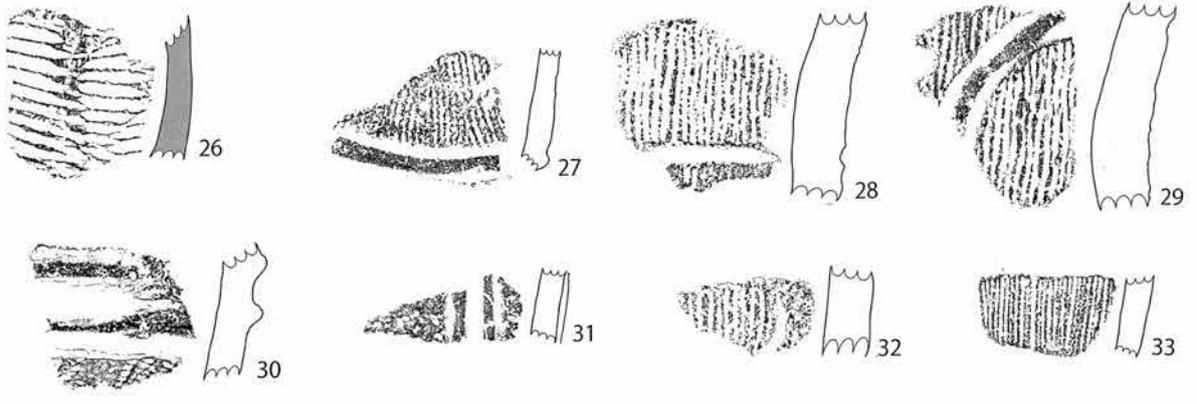
27～29は地文に撚糸Lを施文している。28・29は胴部破片で、厚手である。30は頸部破片で、口縁部文様の下端が残存する。胴部の地文は単節R Lの縦位。31～33は胴部破片で、31は隆帯懸垂文、32には沈線懸垂文が見られる。31は単節R L、32・33は条線を地文に施している。

第44号土壙出土土器（第96図34～38）

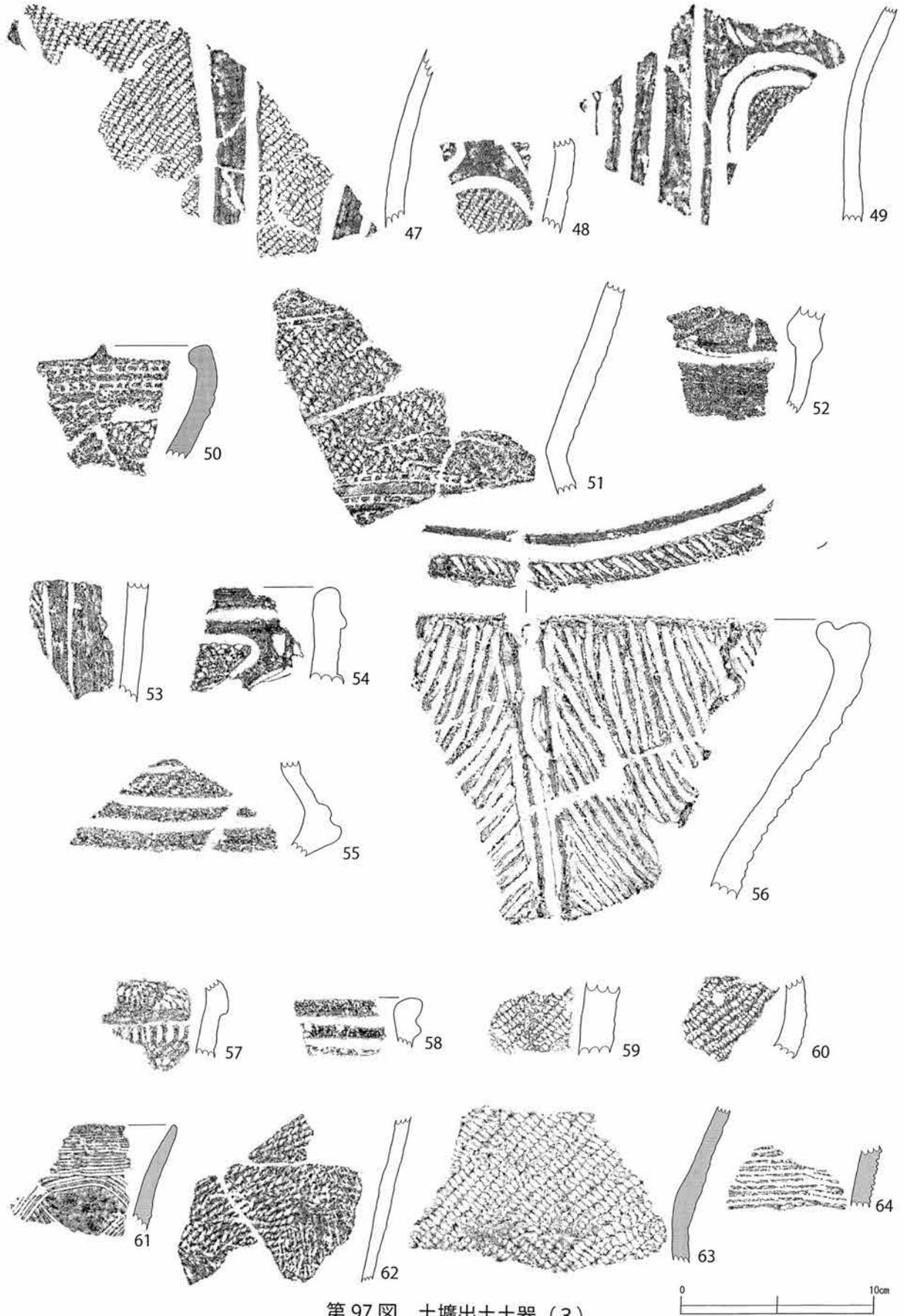
34は口縁部破片。器面の磨耗が著しく、地文は不明。35も口縁部破片で、2本沈線による逆U字の懸垂文が認められる。地文は単節L R。36～38は胴部破片で、36は蕨状文に地文単節R Lを施す。37は曲線的な懸垂文。地文は単節R L。38は地文に単節R Lを充填施文している。

第45号土壙出土土器（第96図39）

深鉢1個体が復元された。39は括れが弱く、円筒形に近い器形を呈する。図化部分で30%が残存する。口縁部は薄手で、わずかに外反し、両面から穿孔された補修孔が1箇所見られる。胴下半部が若干膨らむ。器面全体に無節Lを横位施文するが、施文時に滑ったような痕跡が随所に認められる。胎土には繊維を含む。現存高21.6cm、口径推定17.8cm、器厚0.6～1.1cmを測る。焼成良好。色調は暗茶褐色、黒褐色、



第96图 土壤出土土器(2)



第97图 土壤出土土器 (3)

暗赤褐色を呈する。

第54号土壙出土土器（第96図40～43）

40は口縁部破片で、無文の口縁部下に条線を施す。41は浅い沈線文と爪形文が認められる。42は口縁部破片。隆帯による渦巻繋ぎ弧文と思われる。空間には沈線を充填している。43は幅広の磨消懸垂文が見られる。地文は単節R Lの縦位施文。

第55号土壙出土土器（第96図44～46・第97図47～49）

44は片側に窪みを持つ突起の両側に、幅狭の楕円区画文を配する。隆帯脇には、幅の異なる三角押文を2重に施している。45は口縁部破片。4単位の波状口縁で、波頂部直下に区画文化した渦巻文が認められる。地文は単節R L横位。46は口縁部破片で、崩れた区画文と円形刺突が見られる。地文は単節R Lの横位施文。第97図47～49は胴部破片。47は幅広の磨消懸垂文が見られる。地文は単節R Lの縦位施文。48は逆U字懸垂文の頂部と上位に対向する波状文と思われる文様が見られる。地文は単節R Lで、充填施文と考えられる。49は対向するU字、逆U字懸垂文と数条の沈線懸垂文を施している。地文は単節R Lの縦位施文。

第56号土壙出土土器（第97図50～56）

50は口縁部破片で、胎土に繊維を含む。口唇部に小突起を有する。口唇部直下に2条の半裁竹管による押引き文を巡らしている。地文は単節R LとL Rを交互に施文し、菱形文を表出すると思われる。51は胎土に繊維を含まない。頸部が強く屈曲し、3条の押引き文を巡らす。50と同様、単節R LとL Rを交互に施文している。52は口縁部破片で、内外ともに肥厚する。口縁部は波状になると思われる。単位不明。無文である。53は胴部破片で、3本沈線の幅広磨消懸垂文が施されている。地文は単節L R縦位。54は口縁部破片。隆帯貼り付けによる横S字文の一部と思われる。地文は単節R L縦位。55は浅鉢の屈曲部。文様帯直下に2条の沈線を巡らす。地文は単節R Lの横位施文。56は大形の土器で、粗い重弧文が施されている。口縁部内面には、厚手の突帯が付いている。

第57号土壙出土土器（第97図57～60）

57は頸部破片で、上位は三角形区画の一部が見られる。隆帯脇には三角押文を施している。頸部区画隆帯下には幅広の爪形文を沿わせる。58は口縁部破片で、区画文上端の隆帯が認められる。59・60は胴部破片である。59は厚手。いずれも単節R Lを縦位施文している。

第61号土壙出土土器（第97図61～64）

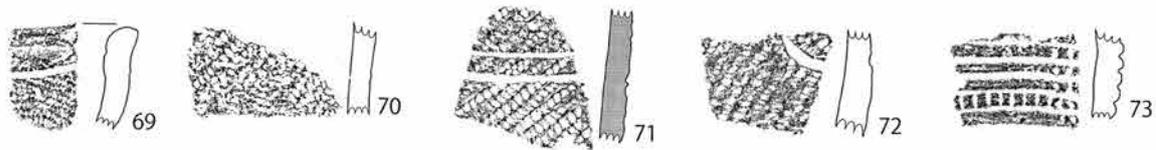
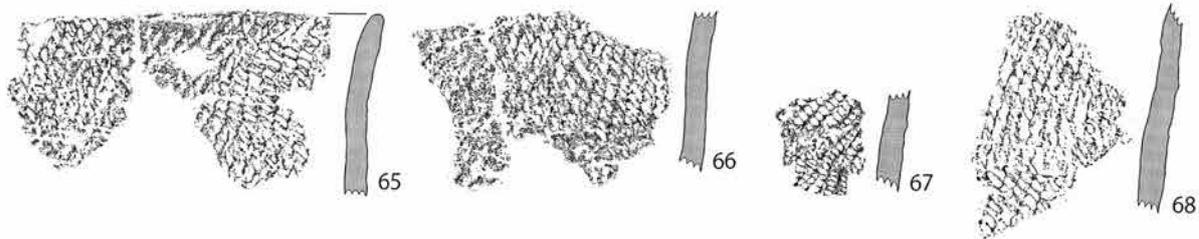
61・63・64は胎土に繊維、62は金雲母を含む。61は外反する口縁部破片で、曲線的な肋骨文が多条沈線で描かれている。62は地文のみで、反撚りL Lを施文している。63も地文のみで、単節L Rの横位施文。64は多条沈線を横位に引く。

第62号土壙出土土器（第98図65～68）

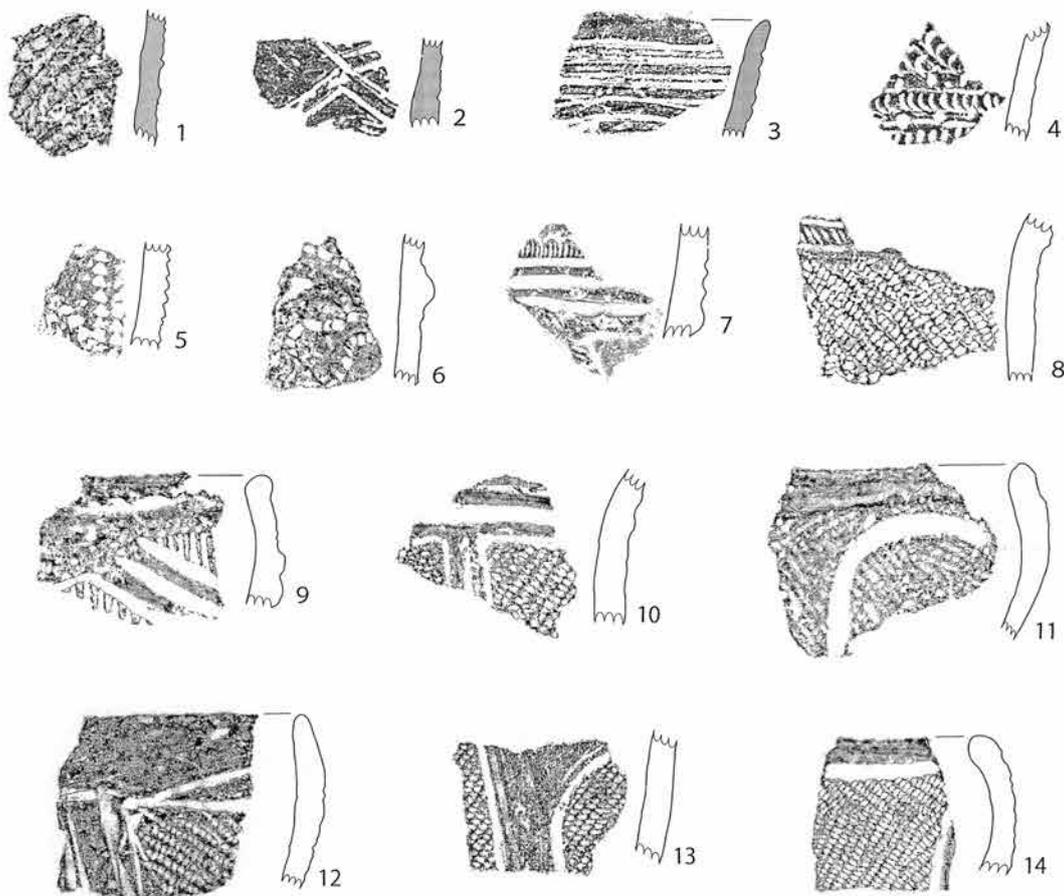
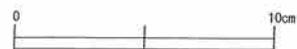
65～68は、いずれも胎土に繊維を含む。65は口縁部破片で、単節R Lを横位に施文している。66は65と同一個体と思われる。地文は単節R L。67は接合痕が認められる。地文は単節R Lの縦位。68は無節Lを施文している。

第63号土壙出土土器（第98図69・70）

69は口縁部が沈線を巡らし、幅狭の無文帯の作出する。沈線直下に単節L Rを施文している。70は胴部破片で、地文に単節R Lを縦位施文する。



第98图 土壤出土土器(4)



第99图 第2号性格不明遺構出土土器



第64号土壙出土土器（第98図71～73）

71は胎土に繊維を含む。地文に単節LRを施し、2条の沈線を横走させる。72は地文に単節RLを施す。沈線文の一部が認められる。

性格不明遺構出土土器

第2号性格不明遺構出土土器（第99図1～14）

第99図1～3は胎土に繊維を含む。1は地文に無節Lを横位施文している。2は2条の沈線で菱形文を描く。3は多条の横位沈線を施している。4は粗い爪形文を施す。5は三角押文を並列させる。6は胎土に金雲母を含む。隆帯脇に角押文を複列施している。7は口縁部文様の下端と思われる。隆帯上に刻目を施し、頸部に蓮華文が認められる。8は円筒形土器で、文様帯下端隆帯が見られる。下半部には単節RLを横位に施文している。9は口縁部文様の一部で、2本隆帯で文様が作出される。空間には集合沈線を施している。10は頸部破片。上位は無文帯である。隆帯懸垂文が見られる。地文は単節RLの縦位。11は口縁部に幅広の沈線を巡らす。その下には逆U字あるいは波状沈線文を施す。地文は単節LRの充填施文である。12は口縁部が幅狭の無文帯である。無文帯下端から沈線懸垂文を垂下させる。地文は単節LRの縦位。13はU字と逆U字懸垂文の組み合わせと思われる。地文は単節RLの縦位施文である。14の口縁部は幅の狭い無文帯である。無文帯直下は単節RLの横位、以下は縦位に施す。曲線的な沈線懸垂文が認められる。

単独埋甕

第1号単独埋甕（第100図1）

第100図1は胴上半部を残す。図化部分で70%が残存。器形は口縁部に向けて外傾して直線的に開き、口縁部付近で内湾する。文様は2段構成で、上位は上下動の大きい波状文を沈線で描く。下位は波状文下端に対応して逆U字文を置く。6単位。地文は単節RLの充填施文で、縦位、斜位に施す。乾燥した後の施文のためか、条の間が若干開く。現存高14.6cm、器厚0.6～0.9cmを測る。焼成は良好。色調は暗褐色、黒褐色を呈する。

第2号単独埋甕（第100図2）

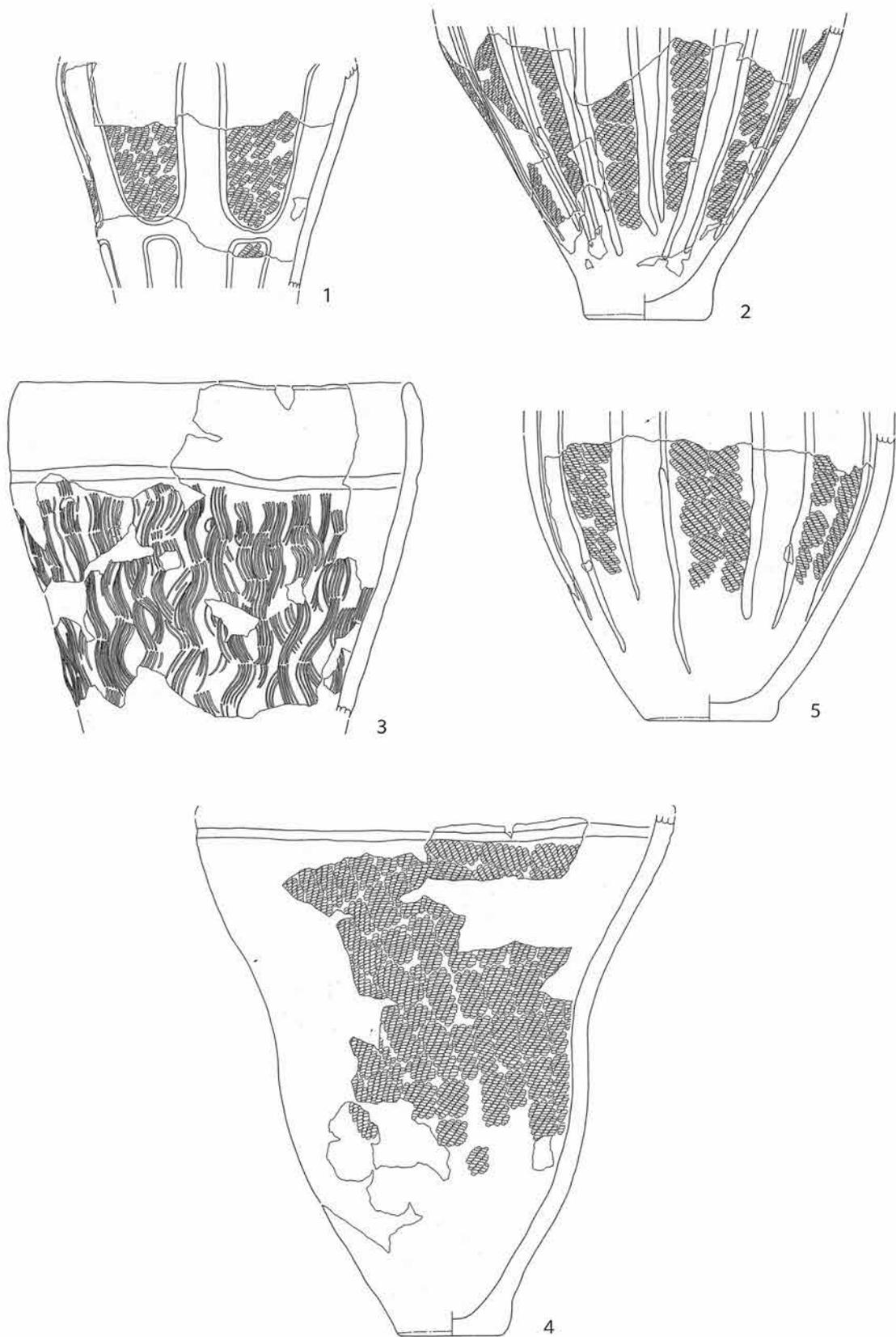
2は胴下半部を残す。図化部分で80%が残存。器形は底部が絞れた感じで、やや腰高。胴部文様は2～3本単位の太い沈線を垂下させ、交互に地文を施す。地文は単節RLの縦位で、充填施文。現存高19.2cm、底径7.4cm、器厚0.9～1.3cmを測る。焼成やや不良。色調は黒褐色、暗褐色、暗茶褐色を呈する。

第3号単独埋甕（第100図3）

3は口縁部から胴部上半にかけて、図化部分の50%を残す。器形は上位に向けて直線的に立ち上り、口縁部はわずかに内湾する。口縁部は幅広の無文帯で、下端に浅く太い沈線を巡らしている。区画沈線直下から胴部にかけては櫛歯状施文具による連続弧線文を施すが、重複が著しく施文単位の切り合いが不明確である。現存高21.9cm、口径推定24.4cm、器厚0.9～1.1cmを測る。焼成は不良。色調は暗褐色、黒褐色、暗茶褐色を呈する。

第4号単独埋甕（第100図4）

4は図化部分の50%が残存する。器形は腰高の底部からわずかに内湾して立ち上り、胴部上位から外



第100图 单独埋甕(1)



反して口縁部に至る。口縁部は全体を欠くが、無文であったと思われる。無文部直下に幅広の浅い沈線を巡らす。胴部上位から中位にかけて、地文単節R Lを縦位、斜位に施文している。下位から底部にかけては無文である。現存高 33.5cm、底径 6.5cm、器厚 0.9～1.2cmを測る。焼成やや不良。色調は黒褐色、暗茶褐色、茶褐色を呈する。

第5号単独埋甕（第100図5）

胴下半部のみ残存。図化部分で80%を残す。器形は丸みを帯びる。底部には歪みが認められる。2本沈線懸垂文を垂下させ、地文に単節L Rを縦位に充填施文する。無文部、地文部は各9単位。無文部は幅広である。現存高 13.6cm、底径 8.0cm、器厚 1.2～1.5cmを測る。焼成良好。色調は明褐色、暗茶褐色、黒褐色を呈する。

第6号単独埋甕（第101図6）

第101図6は口縁部から胴部上半、図化部分で70%を残す。器形は括れ部から口縁部までが、緩く内湾しつつ立ち上がる。口唇部内面に低い稜を有する。口縁部は幅狭の無文帯で、下端に浅い沈線を巡らす。実測図正面は無文部がH字状を呈するが、図背面はU字を逆U字懸垂文を対峙させる。両者合わせて、13単位施している。現存高 21.9cm、口径推定 31.0cm、器厚 0.9～1.3cmを測る。焼成良好。色調は暗赤褐色、暗褐色、明褐色、黒褐色を呈する。

遺構外出土土器

遺構外出土土器（第102～107図）

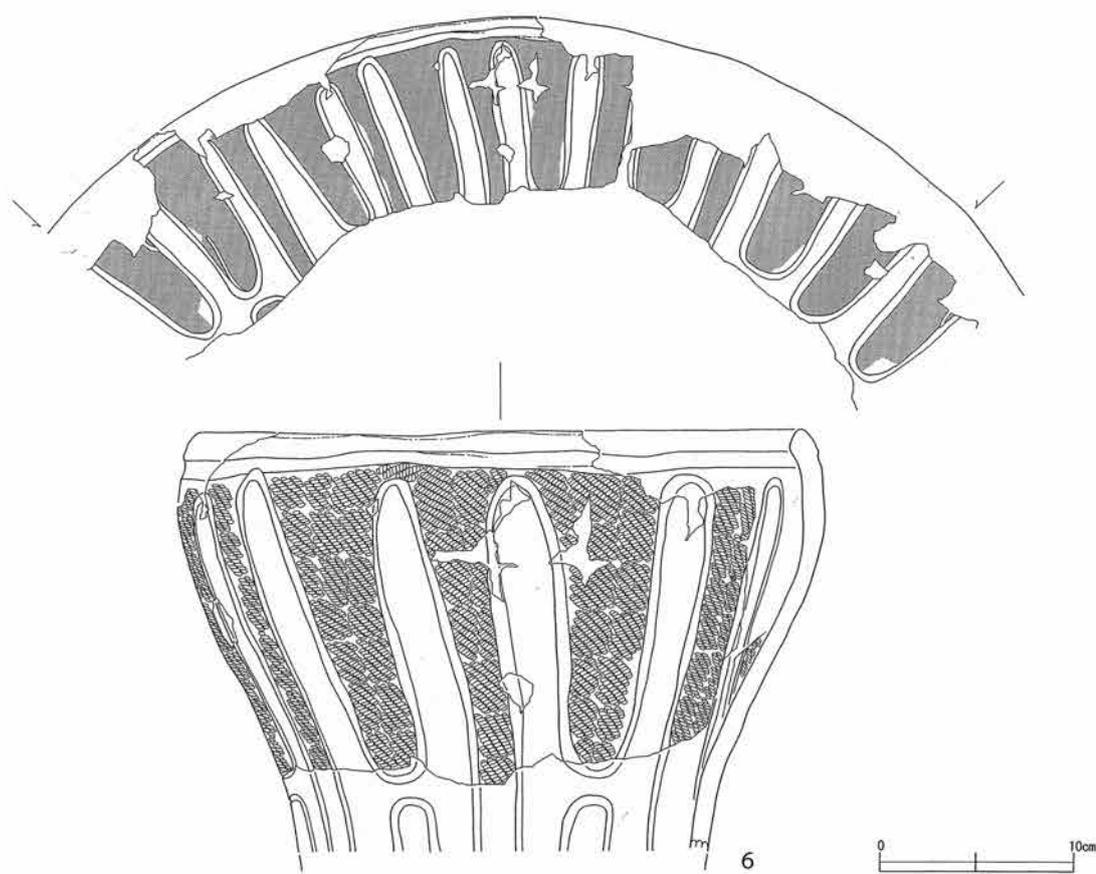
第102図1は、第58号住居跡覆土内から出土したものである。胎土には繊維を含む。器形は胴部上半の括れ部分から口縁部に向けて、外傾して立ち上がる。地文は無節Rの横位、縦位施文。施文方向を変えることで、地文のみで菱形文様を構成する。一部に輪積み痕が認められる。現存高 12.7cm、口径推定 31.5cm、器厚 0.7～1.1cmを測る。焼成は良好で、色調は暗茶褐色、暗褐色を呈する。

2は奈良・平安時代の遺構である第53号住居跡で出土したため、遺構外扱いとした。やや外傾する深鉢の胴下半部から底部までが、図化部分で60%残存する。無文で、器面調整痕が目立つ。現存高 10.5cm、底径 8.1cm、器厚 0.9～1.7cmを測る。焼成は良好。色調は赤褐色、暗褐色、明褐色を呈する。

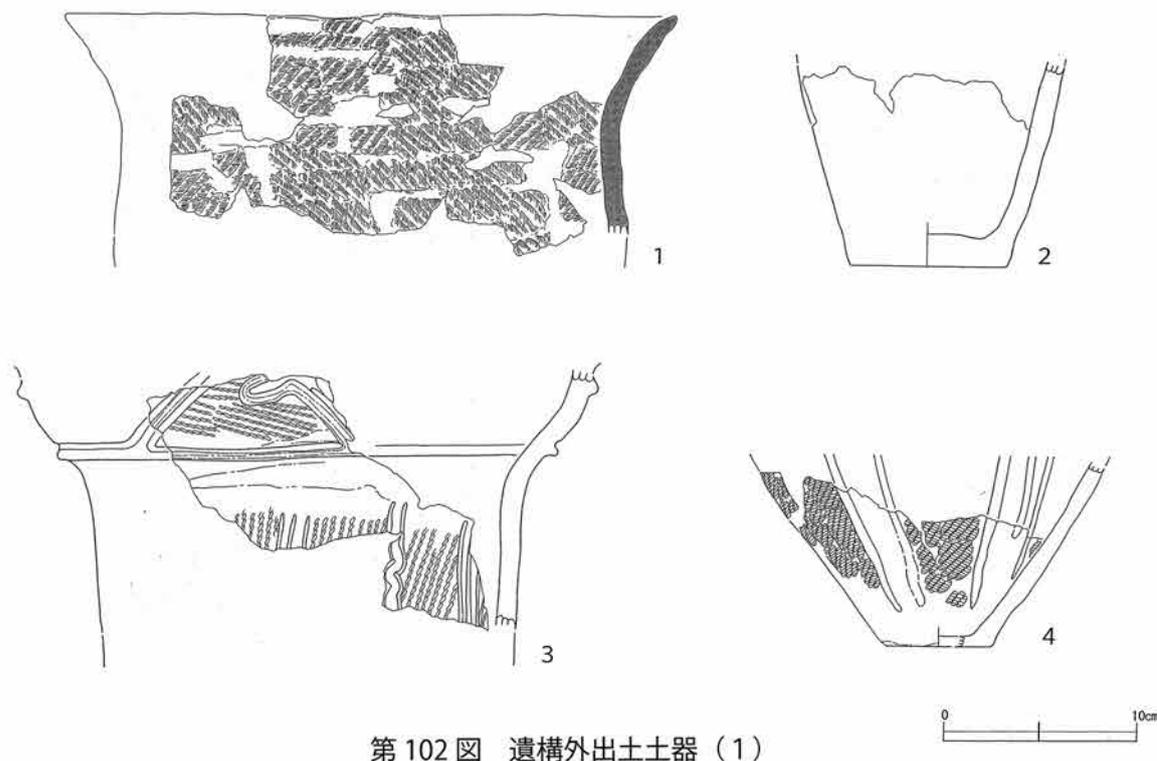
3は口縁部下位から胴部上半の破片からの推定復元である。口縁部から頸部にかけては、内湾するものと思われる。胴部は円筒形を呈する。口縁部文様は1本隆帯で作出されるが、モチーフ、構成等は不明。隆帯脇には沈線を伴う部分と伴わない部分が共存する。口縁部文様帯下端も、1本沈線で区画している。頸部は幅3cm程度の無文帯であるが、下位の区画文様は見られない。胴部は半裁竹管内面の平行沈線による波状及び重複施文3本沈線の懸垂文で、地文は消えている。地文は撚糸Lで口縁部斜位、胴部縦位である。現存高 13.4cm、器厚 1.0～1.1cmを測る。焼成良好。色調は明褐色、暗褐色を呈する。

4は深鉢の底部付近である。図下部分で70%が残存。器形は上位に向かって直線的に開く。底部は比較的薄い。2～3本の沈線を垂下させ、単節R Lを縦位に充填施文する。無文部と地文部は計6単位。現存高 9.4cm、底径 6.4cm、器厚 0.5～1.0cm。焼成良好。色調は赤褐色、暗茶褐色、黒褐色を呈する。

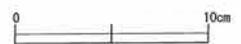
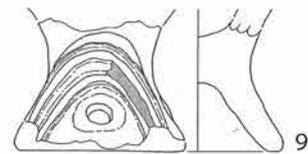
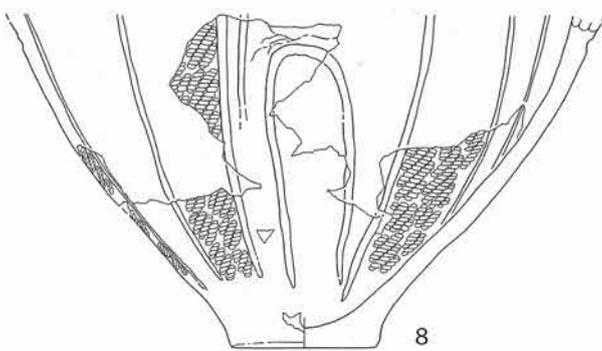
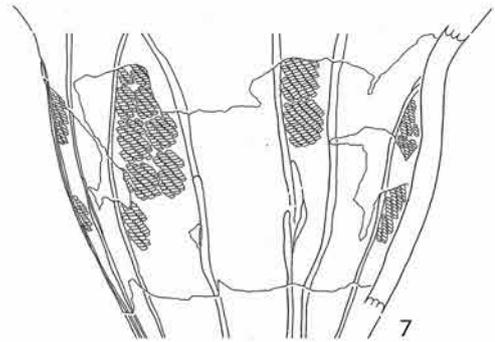
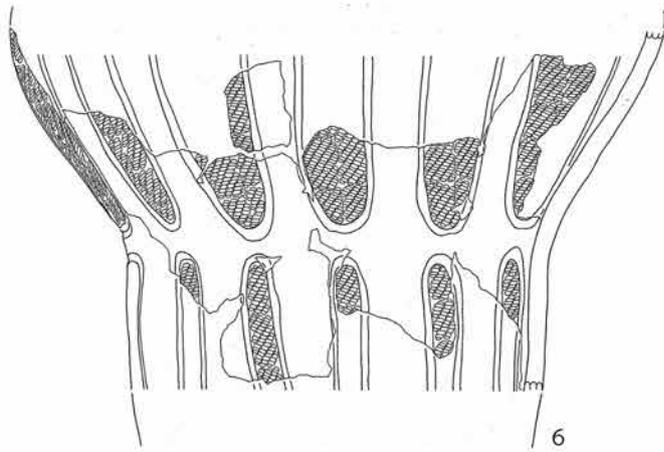
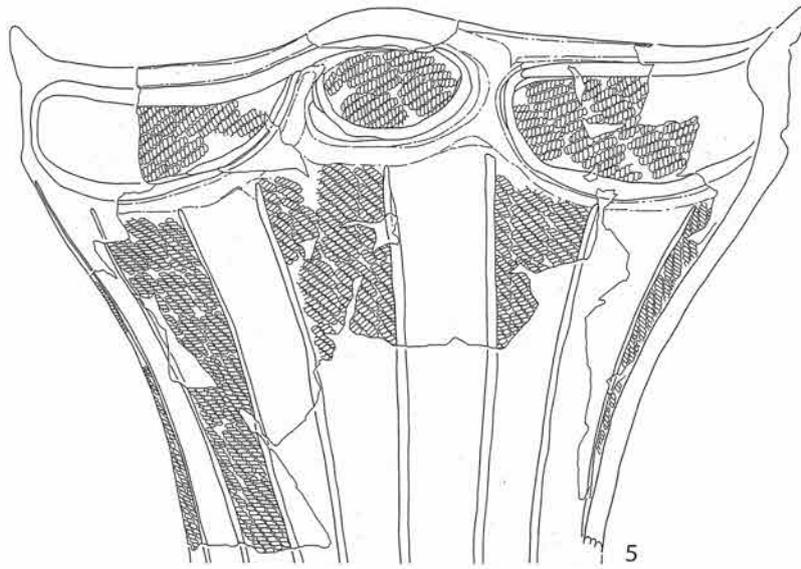
第103図5は大形の深鉢である。図下部分で30%を残す。器形は胴部中位からわずかに外反しつつ立ち上り、口縁部は内湾する。4単位の突起部は外傾する。口縁部文様は渦巻文が変化した小楕円区画と大半円状区画を組み合わせで、4単位構成。小楕円区画は突起に対応する。口縁部文様帯と胴部文様との境



第 101 图 单独埋甕 (2)



第 102 图 遺構外出土土器 (1)



第103図 遺構外出土土器(2)

界は不明確となっている。胴部は2本沈線による幅広の磨消懸垂文で、無文部、地文部各9単位。地文は単節LRで、口縁部横位、斜位、胴部は縦位施文である。現存高28.2cm、口径推定40.8cm、器厚1.0～2.2cm。焼成良好。色調は暗褐色、黒褐色、暗赤褐色を呈している。

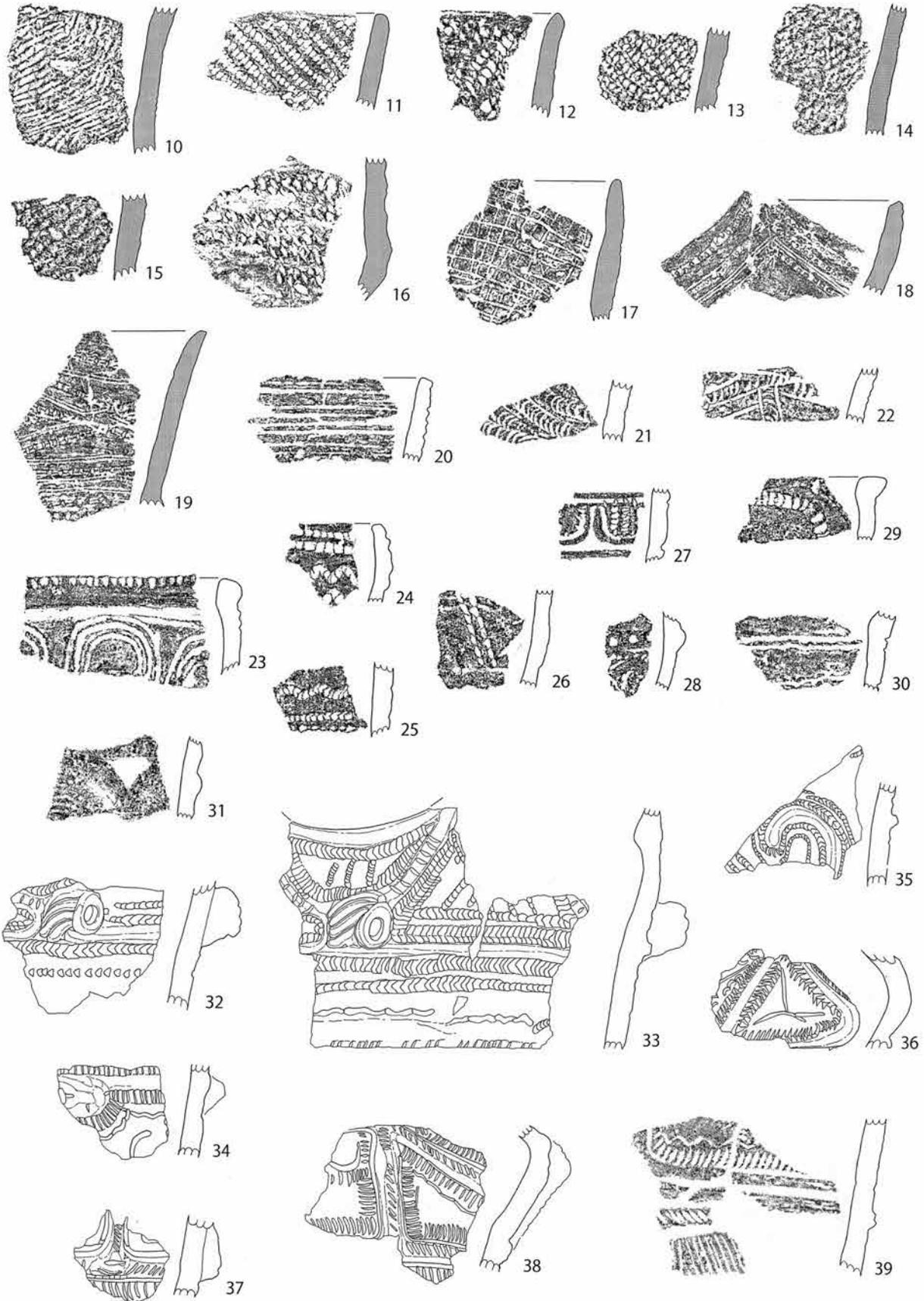
6は胴部中位から上位を残す。図化部分で25%が残存。器形は胴部の括れが強めで、口縁部は内湾する。文様は上部が波状あるいは楕円文で、対向する下位は逆U字文を垂下させる。推定12単位。地文は単節RLで、縦位に充填施文している。現存高18.9cm、器厚0.8～1.0cmを測る。焼成は良好で、色調は暗褐色、黒褐色を呈する。

7は深鉢の胴部で、図化部分の30%を残す。器形は下半部が丸みを帯び、上半部は外傾して立ち上がると思われる。文様はU字と逆U字懸垂文を交互に組み合わせるが、上位は波状になる可能性がある。地文は単節LRの縦位で、充填施文。現存高14.7cm、器厚1.0～1.2cmを測る。焼成はやや不良で、色調は暗褐色、黄褐色を呈する。

8は深鉢の底部付近で、器形から比較的大形の土器と思われる。図化部分で20%が残存。器形は腰高の底部から、丸みを帯びて立ち上がる。文様は推定6～7単位の2本沈線による懸垂文を基本とするが、図中央のように頂部が微隆起状となる地文を持たない逆U字文も認められる。地文は単節RLの縦位で、充填施文。現存高17.5cm、底径7.4cm、器厚0.8～1.4cmを測る。焼成は良好。色調は黒褐色、暗赤褐色、暗茶褐色を呈する。

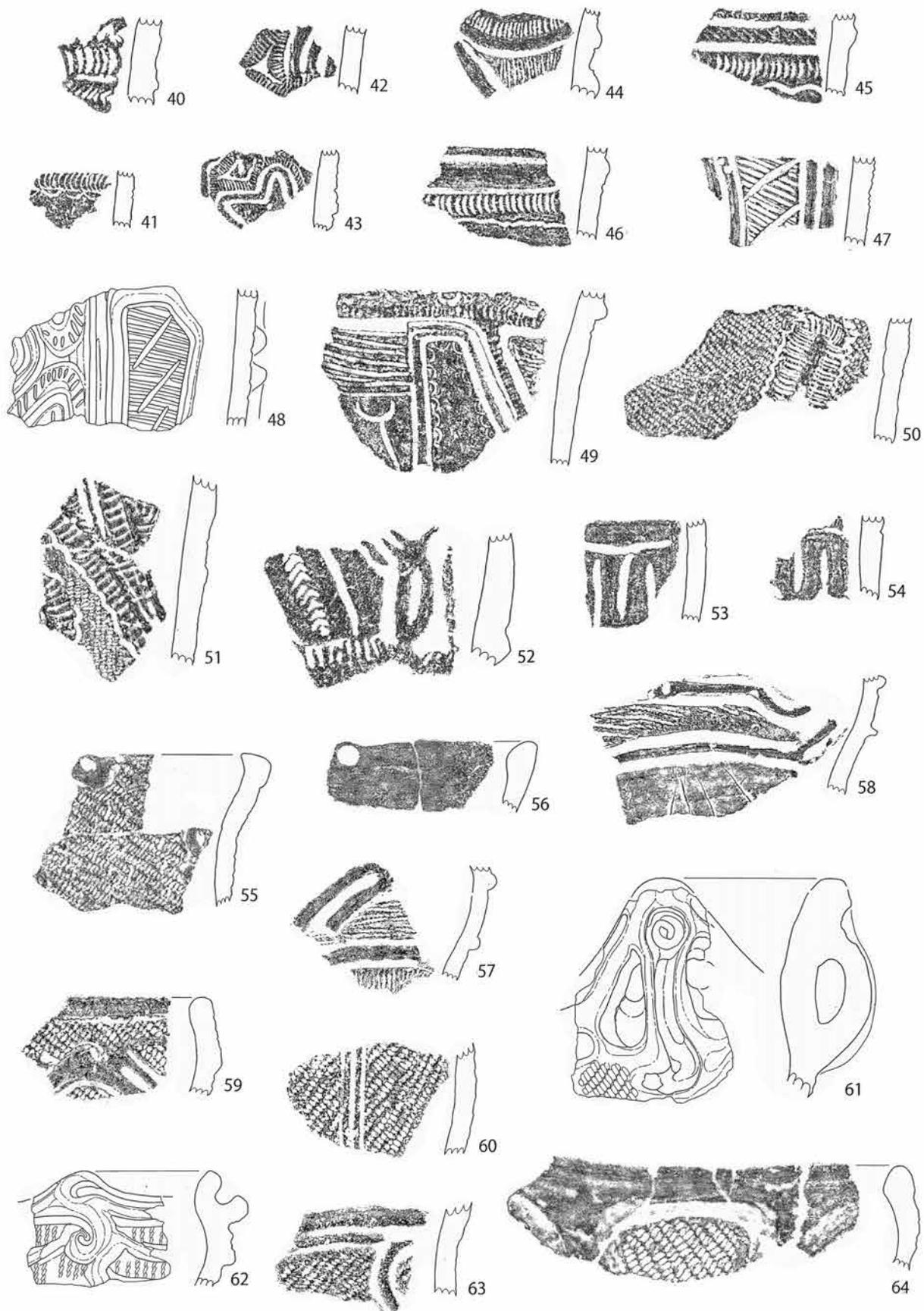
9は台付土器である。器面の荒れが著しいが、図化部分で90%を残す。3本隆帯を弧状に貼付け、隆帯間に沈線を引く。対向して2単位。弧状隆帯下に孔を開けている。地文は施されていない。現存高7.0cm、底径推定8.5cm、器厚1.1～2.4cmを測る。焼成やや不良。色調は暗赤褐色、明褐色を呈する。

第104図10～19は胎土に繊維を含む。10～16は地文のみで、10は無節L、11・13は単節RL横位、12・15・16は単節LR、14は反撚りLLを施している。17は粗い沈線で格子目文を描いている。18は波状口縁で、半裁竹管により平行沈線を重ね、沈線間に刺突を加えている。19も同様であるが、施文が粗い。20は口縁部破片で、粗い平行沈線が施されている。21は連続爪形文重畳させる。22も連続爪形文が見られる。23～29・31は胎土に金雲母を含む。23は口唇部が肥厚し、刻目を加える。口唇部直下は3条の結節沈線を逆U字状に並列して施すが、全体のモチーフは不明である。24は口縁部に2条の角押文を巡らし、直下に波状の角押文を施す。25は波状と2条の三角押文が認められる。26は2条の結節沈線を斜位に施す。輪積み痕が見られる。27は半裁竹管内面による擬隆帯で区画文を作出し、内側に三角押文を充填する。28は上位の隆帯に圧痕を施し、隆帯下に三角押文を施している。29は口縁部破片で、区画隆帯脇に幅広の角押文を沿わせる。30は頸部付近と思われる。粗い波状沈線を巡らす。31はY字状懸垂文の先端と思われる。懸垂文間には平行沈線を施す。32は口縁部重三角文の下端と思われる。三角区画の接合点に円形の窪みを基幹に、貼付隆帯を施した突起を有する。区画内と隆帯脇には多重に幅広の三角押文を施している。器面の荒れが著しい。33は32と同一個体と思われる。32と同じ突起を三角区画接合点に置く。区画内と隆帯脇の処理も同様。一部隆帯上に刻目を施している。また、頸部には波状沈線が認められる。34は爪形文を隆帯脇に施し、波状沈線を平行させる。35は渦巻状の隆帯脇に複列の三角押文を施す。36は口縁部三角区画の一部で、区画接合点が突出する。隆帯脇には幅広の三角押文を沿わせるが、施文は連続刺突である。区画内には三叉文を施している。37は方形区画の一部と思われる。接合点は突出し、隆帯上には刻目を施す。隆帯下には爪形文を沿わせる。38は口縁部文様の一部で



第104图 遺構外出土土器(3)

0 10cm



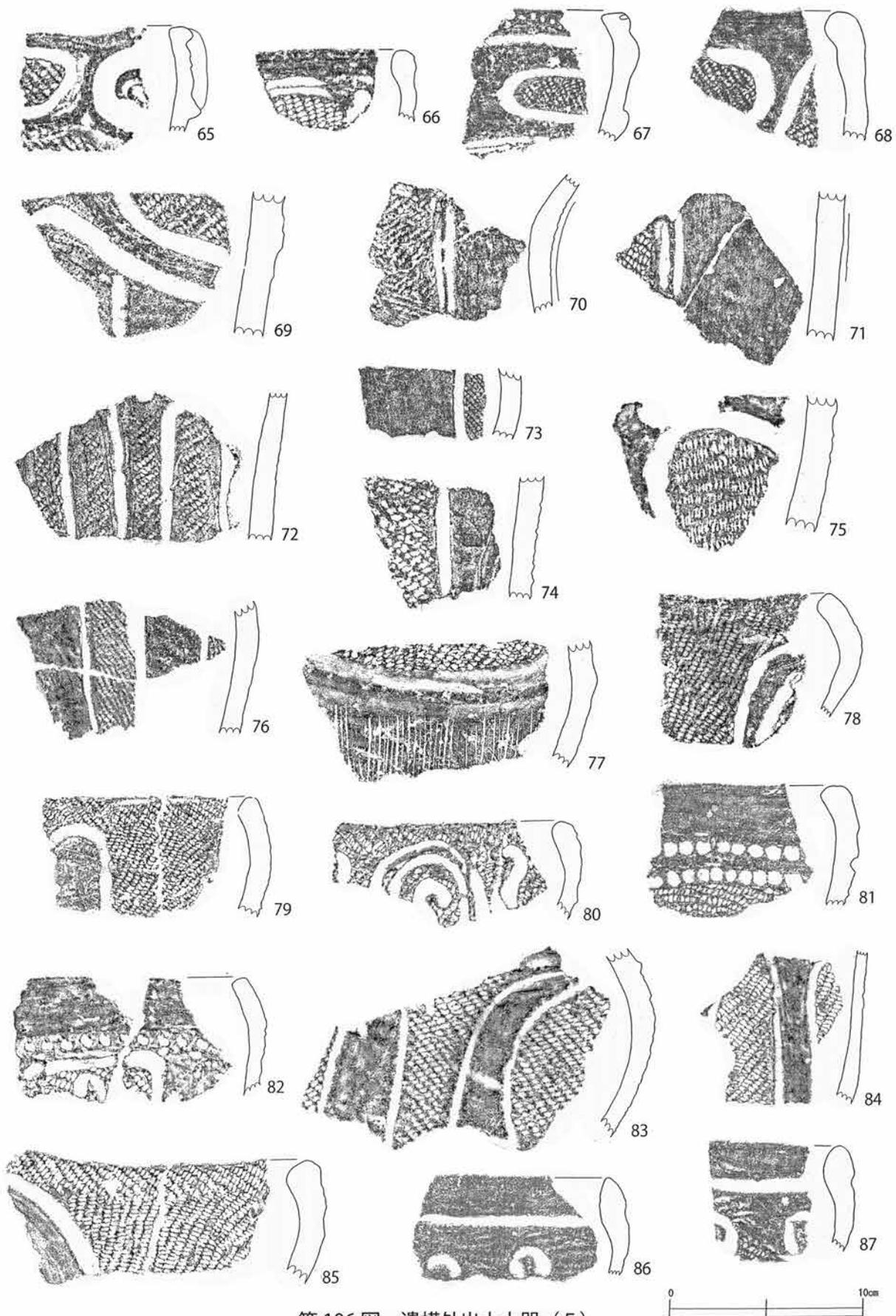
第 105 図 遺構外出土土器 (4)

ある。器形は屈曲が強い。隆帯上に刻目、隆帯脇に沈線を引く。区画内には爪形文と波状沈線を施している。39は扁平な隆帯が見られる。区画形状は楕円形あるいは方形と思われる。隆帯上位は3本沈線に爪形文を平行させる。下位は半裁竹管内面による平行沈線を充填している。

第105図40は無調整隆帯上下に幅広の爪形文を施している。41は爪形文下に半裁竹管の刺突を加える。42は三叉文を施す。43は半裁竹管竹管内面による平行沈線で区画を作出し、区画内に爪形文と波状沈線を平行させる。44は隆帯脇に爪形文を施し下位の区画内に集合沈線を充填する。45・46は隆帯脇を調整あるいは沈線を引き、粗い爪形文を施す。45は隆帯上に刻目を付す。47・48は同一個体と思われる。パネル文の系統で、半裁竹管内面による区画後に、斜行沈線を充填する。48には対向する隆帯が見られ、隆帯上に粗い刻目を施している。49は胴部文様上位で、パネル文の形式を採る。主要な区画は隆帯で作出する。区画内は複沈線で分割され、集合沈線、半円形刺突、三叉文等が施されている。50は抽象文に類する。ワラジ虫状の文様を描き、地文に単節RLを施文している。51は微隆起状の隆帯脇に幅広の角押文を施し、波状沈線を平行させる。地文は単節RL。胎土に金雲母を含む。52は大柄な連鎖状隆帯を垂下させる。区画内は空間が多く、連続刺突や綾杉文等が見られる。53・54は同一個体で、交互短沈線が見られる。55は口縁部破片で、0段多条の単節RLを横位施文し、口縁部に波状隆帯を貼り付けている。56は浅鉢の破片で、補修孔が認められる。57・58は口縁部から頸部の破片で、58は第102図3の同一個体と思われる。撚糸Lの地文施文後、口縁部に隆帯で文様を作出している。59は口縁部文様の一部であるが、隆帯が剥離して、地文単節RLが露出している。60は胴部破片で、単節RL縦位施文後、3本沈線の懸垂文を施している。61は大柄な橋状把手を持つ。把手には縦位のS字状沈線を引く。地文は単節LR横位。62は渦巻文と区画文の組み合わせ。地文は撚糸L縦位施文。63は頸部周辺の破片で、頸部は無文帯。1本隆帯で区画された胴部には蛇行懸垂隆帯を垂下させる。地文は単節RL縦位施文。64は口縁部破片で、渦巻文が変化した円形区画が認められる。地文は単節RLの横位に充填施文している。

第106図65～68は口縁部破片で、渦巻文と区画文の一部を残す。地文は65が単節LR縦位、他は単節RLの横位。69は頸部破片で、区画隆帯は扁平である。胴部の懸垂文無文部は幅広となっている。地文は単節LR。70～76は胴部破片。70・71は微隆起懸垂文で無文部を区画する。他は沈線懸垂文。地文は70～73・76が単節LR、74は複節LRL、75は櫛歯状施文具の刺突である。77は鉢形土器の口縁部文様下端で、口縁部区画内の地文は単節LR、胴部は条線。78～79は口縁部破片で、逆U字あるいは波状の沈線文を施す。80は縦位のS字状沈線が見られる。地文は、いずれも単節RLで口唇部は横位に、下部は縦位に施文する。81は幅広の無文口縁部直下に、2条の円形連続刺突を巡らす。地文は単節LRの斜位施文。82は無文口縁部直下に、1条の半円形刺突を施す。地文は単節LRで、施文後に沈線で文様を描く。83～85は地文施文後に、沈線で曲線的な文様や懸垂文を描く。85は波状口縁。地文は83が単節LR、他は単節RL。86・87は無文の口縁部直下に1本沈線を引き、地文単節LRを充填後、蕨状沈線文を並列させている。

第107図88は胴部括れ付近の破片である。上位には単節RLを横位に施文し、浅い沈線で区画する。下位には単節RLを縦位施文し、蕨状文を垂下させる。89は鉢形土器である。口縁部は無文で、区画沈線下に条線を施す。90は大形土器の口縁部破片で、幅広の無文帯下に微隆起線で区画する。区画線下には単節RLを充填施文する。沈線文の一部が見られるが、モチーフは不明である。91は有孔罌付土器である。罌上位に孔を穿つ。裏面に赤色塗彩が認められる。92は胴部破片で、地文単節LR施文後に大木



第 106 図 遺構外出土土器 (5)



第107图 遺構外出土土器(6)

式系の沈線文を描いている。93も大木式系の文様を施す。曲隆線で渦巻文や懸垂文を描き、空間に単節LRを充填施文している。94～96は渦巻重弧文の土器である。胴部破片で、いずれも細身の器形を呈すると思われる。97～103・111は連弧文土器である。2～4本の沈線で波状文を描いている。111には小渦巻の付帯文様が見られる。地文は97が単節RL、98は撚糸L、99・100・111は条線、101～103は沈線を施している。104は口縁部破片で、繋ぎ弧文を隆帯で作出し、地文に条線を施す。105は屈曲する幅狭の口縁部文様を持つ。渦巻文下に2本隆帯の懸垂文を垂下させる。地文は条線。106・107は沈線による楕円区画に集合沈線を充填。区画文脇に蕨状文の上端が認められる。108は口縁部文様下端である。胴部には櫛歯状施文具による条線を施す。蕨状懸垂文が見られる。109は重弧文土器で、重弧間に縦位の波状隆帯を置く。口唇部内面には突帯を有し、上位に斜行沈線を施す。110は連続円形刺突を施した隆帯懸垂文を垂下させ、両側に単節RLを縦位施文後に、弧線を引く。112～114は後期の土器である。112は口縁部破片で、口唇部に1条の沈線を巡らす。口縁部には沈線で区画文を描き、地文に単節LRを充填施文している。113・114は胴部破片で、沈線で粗雑な曲線文を描く。地文は持たない。

石器

概要に示したように、完形・半完形品で特徴的なもののみ掲載した。計測値、石材等については出土石器属性表（第1・2表）を参照のこと。

遺構出土石器

第37・38号住居跡出土石器（第108図）

第108図1は浅い凹基で無茎。正面に多方向からの調整剥離、裏面に広い剥離面と周縁部に調整剥離を入れる。2は深い凹基無茎の石鏃。両面ともに多方向から調整剥離を施している。3は撥形の打製石斧で、正面に大きく自然面を残す。正面の調整剥離は周縁部に限定され、裏面は多方向からの剥離が入る。両側縁には敲打が施される。4も撥形を呈するが、両側縁に浅い抉りが入る。正面基部に自然面、裏面に主要剥離面を残す。両側縁の敲打は部分的である。3・4とも刃部は丸刃で、調整剥離は最小限である。

第39号住居跡出土石器（第109図）

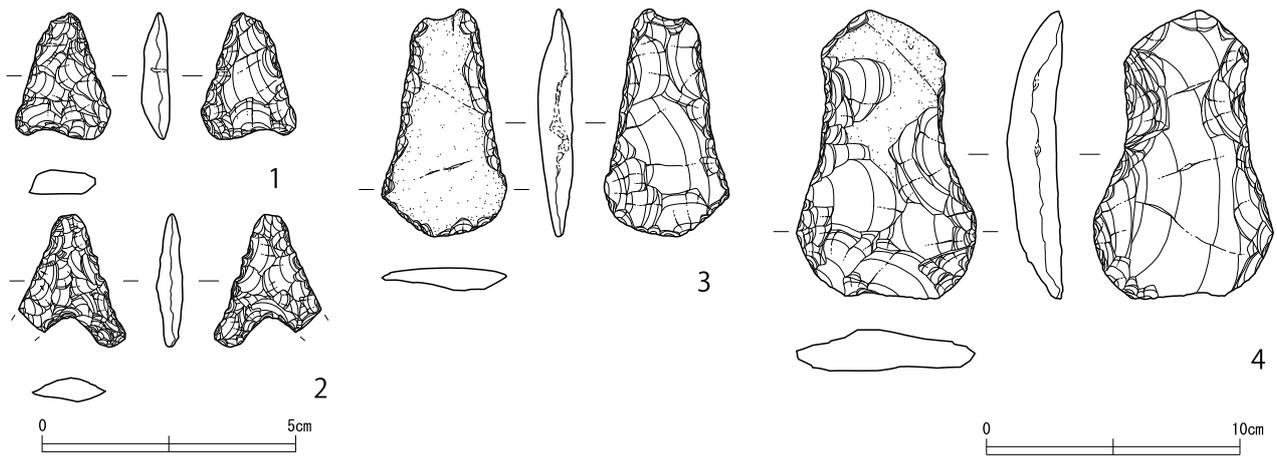
第109図1は短冊形の打製石斧である。両面に部分的に自然面を残す。正面基部から中央にかけて多方向、裏面は周縁部に調整剥離が施される。両側縁の敲打は部分的である。2は凹石である。全周的に敲打を見られる。また、両面に大きめの凹みが作出されている。

第40号住居跡出土石器（第110図）

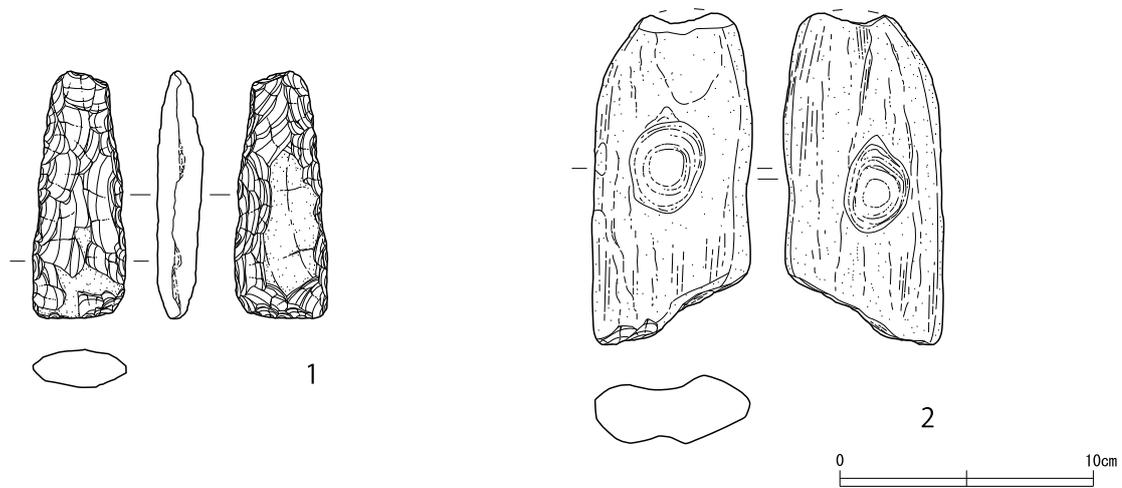
第110図1は平基無茎の石鏃であるが、厚手で未成品に近い。両面に多方向からの調整剥離が施されている。2は短冊形の打製石斧で、基部を欠く。側面形は中央が湾曲する。刃部には擦痕が顕著である。刃部は平刃で、擦痕が見られる。3・4は撥形を呈するが、抉りが偏り、やや不定形である。いずれも丸刃である。3は正面に自然面、裏面に一部主要剥離面を残す。両面ともに周縁部の調整剥離が顕著である。4は表面基部に自然面、裏面に大きく主要剥離面を残す。正面には多方向からの剥離が施されるが、裏面は周縁部に目立つ。5は敲石で、下位側面に敲打痕が目立つ。

第41号住居跡出土石器（第111図）

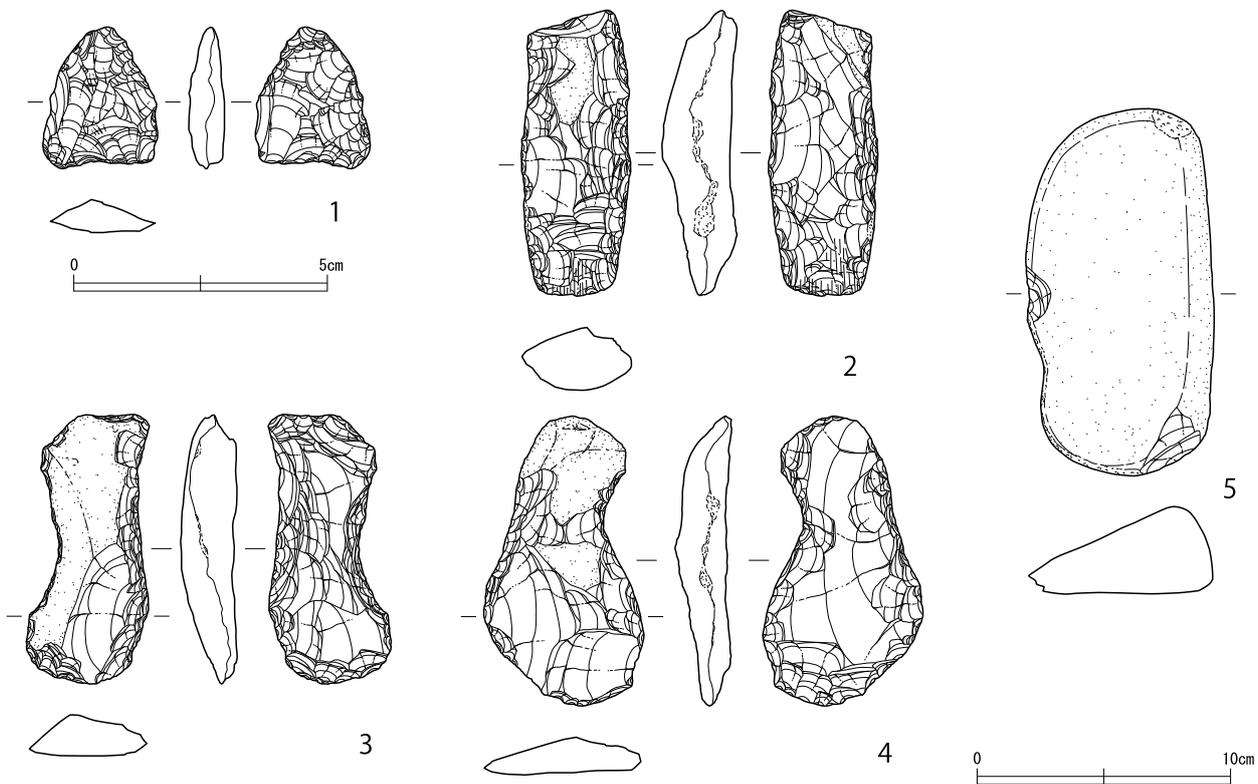
第111図1は凹基無茎の石鏃である。両面とも多方向からの調整剥離が施されている。2は平基無茎で、両面に大きな剥離面を残し、周縁部に調整剥離が施されている。3は搔・削器である。比較的厚手の作り。



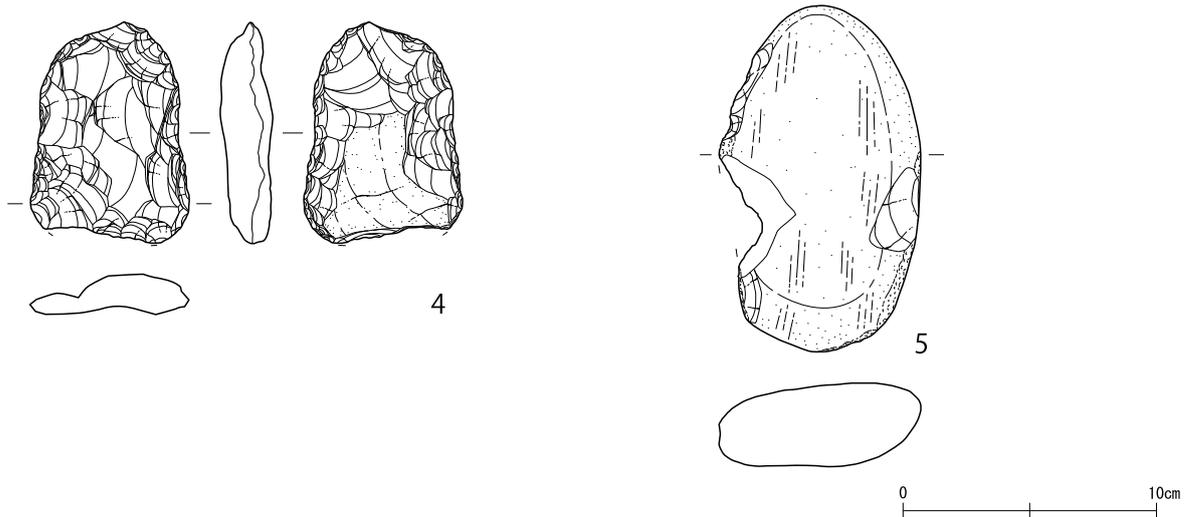
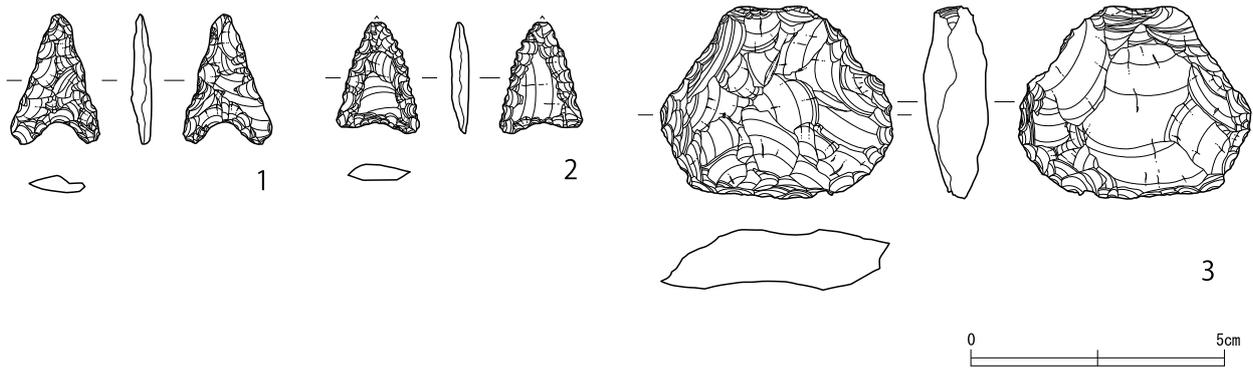
第 108 图 第 37·38 号住居跡出土石器



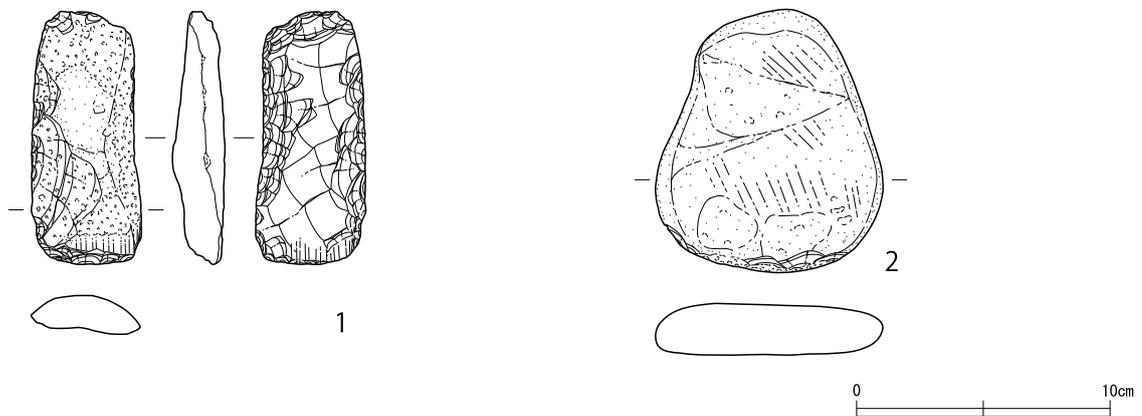
第 109 图 第 39 号住居跡出土石器



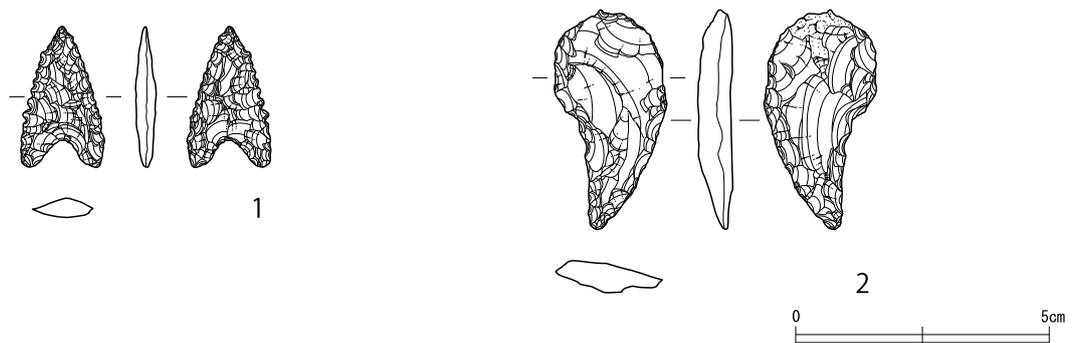
第 110 图 第 40 号住居跡出土石器



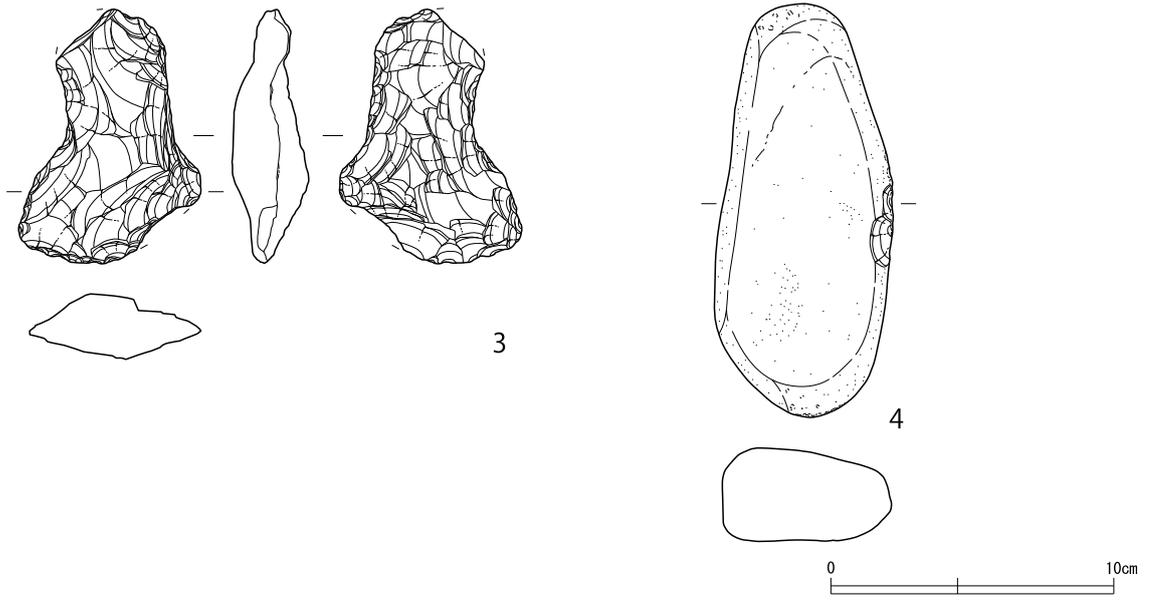
第 111 图 第 41 号住居迹出土石器



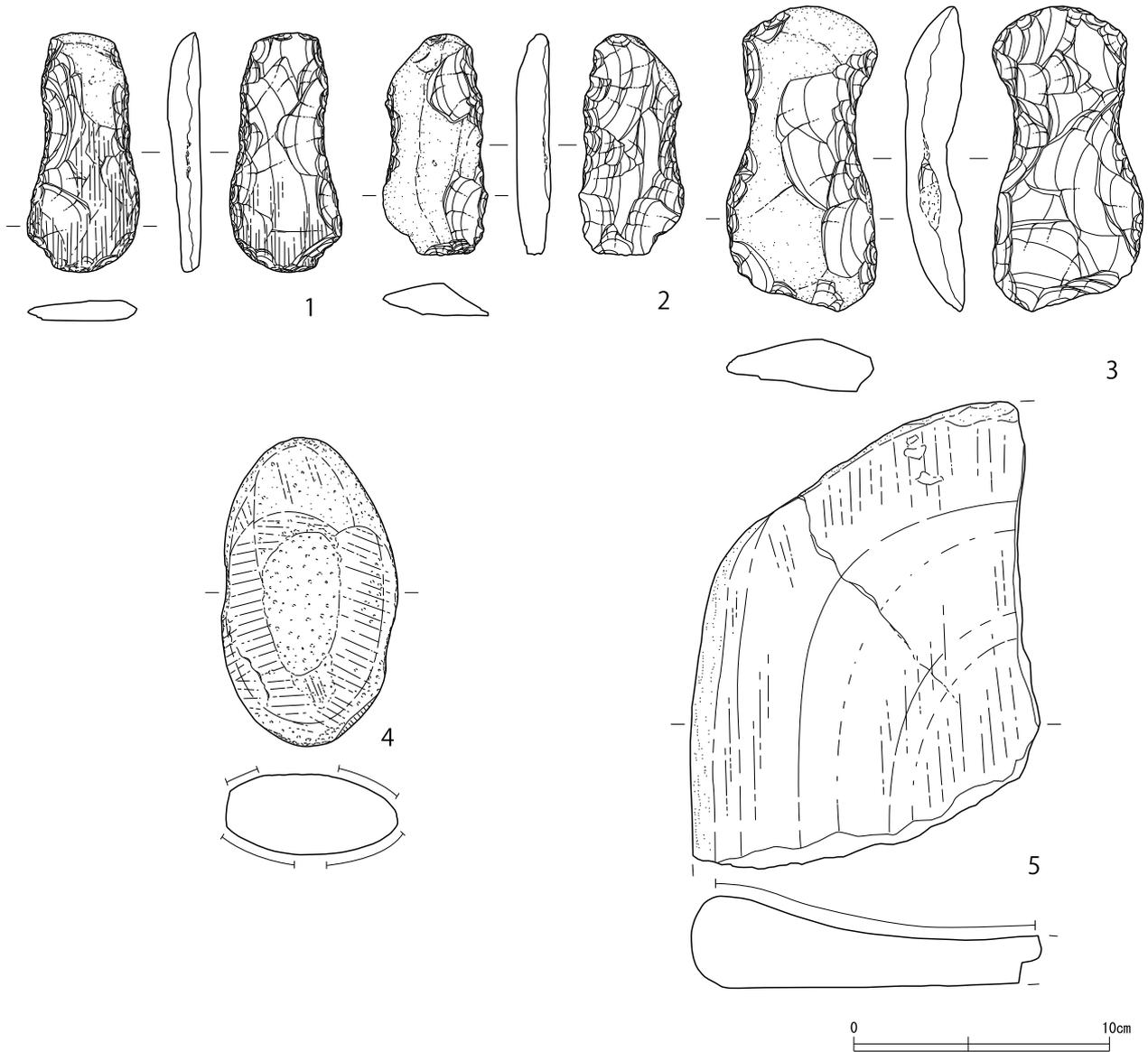
第 112 图 第 44 号住居迹出土石器



第 113 图 第 46 号住居迹出土石器 (1)



第 114 图 第 46 号住居跡出土石器 (2)



第 115 图 第 48 号住居跡出土石器

正面に多方向からの調整剥離が入るが、裏面は周縁部の調整が目立つ。4は短冊形の打製石斧で、刃部を欠く。正面に多方向からの剥離、裏面に風化した剥離面が見られる。両側縁の敲打はほとんど認められない。5は敲石であるが、擦痕が目立ち、磨石にも使用されていたと思われる。側縁に敲打痕が顕著。

第44号住居跡出土石器 (第112図)

第112図1は整った短冊形の打製石斧である。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残し、両側縁に調整剥離を施す。正面には外周を中心に敲打痕が認められる。刃部は平刃で、擦痕が認められる。2は敲石で、両面とも自然面を多く残す。下端に敲打による剥離が見られる。両面とも擦痕が認められる。

第46号住居跡出土石器 (第113・114図)

本住居跡は奈良・平安時代の住居跡であるが、多量の縄文時代の石器が覆土に混入していた。

第113図1は抉りの深い凹基無茎の石鏃である。両面とも多方向からの調整剥離が施され、主要剥離面は不明確である。両側縁とも鋸歯状を呈している。2は搔・削器である。略勾玉状の形状を呈する。中央から下位にかけて調整剥離が施され、刃部を作出している。第114図3は打製石斧で、抉りが深い撥形を呈し、刃部の一部を欠く。4は敲石で、先端部と基部に敲打痕が認められる。

第48号住居跡出土石器 (第115図)

第115図1～3は打製石斧である。1は短冊形に近い正面基部付近に自然面、裏面には多方向からの剥離が見られる。両面に擦痕が認められ、使用痕と思われる。刃部は丸刃である。2は短冊形に近いが、やや不整形。正面に自然面、裏面は多方向からの剥離が見られる。3は両側縁の抉りが深く、分銅形に近い。正面に自然面、裏面には多方向からの剥離が認められる。刃部は平刃であるが、やや斜めに作出されている。4は磨石であるが、敲石としても使用されている。外周全体に敲打痕が見られる。5は石皿の破片である。全体のおおよそ1/4が残存する。縁辺部は断面丸みを帯びる。被熱痕跡が認められる。

第49号住居跡出土石器 (第116図)

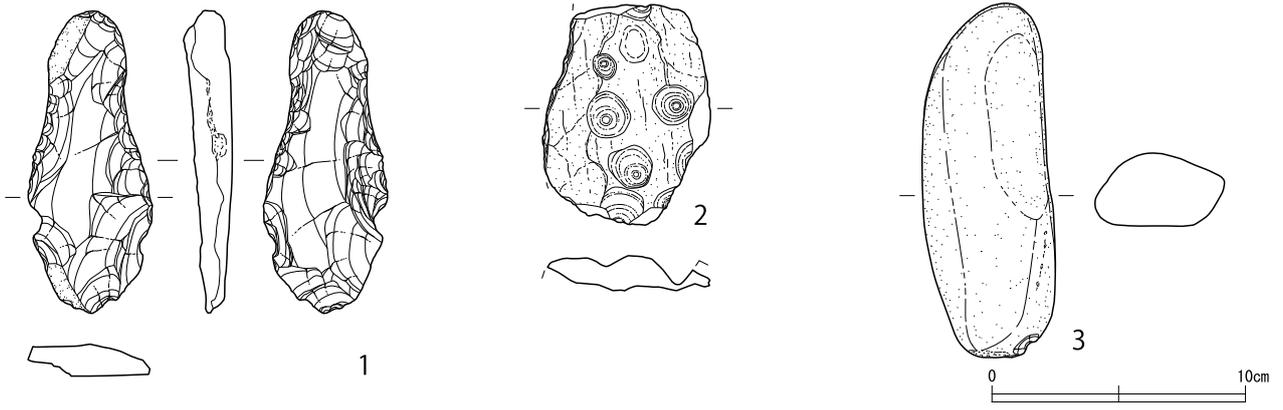
第116図1は打製石斧で、基部が幅狭な撥形を呈する。両面とも多方向からの剥離をもって作出されている。刃部は破損している可能性もあるが、尖頭形を呈している。2は凹石の破片であるが、石皿の裏面の可能性もある。4箇所の変形が認められる。3は敲石で、先端部に使用痕が顕著である。

第51・52号住居跡出土石器 (第117図)

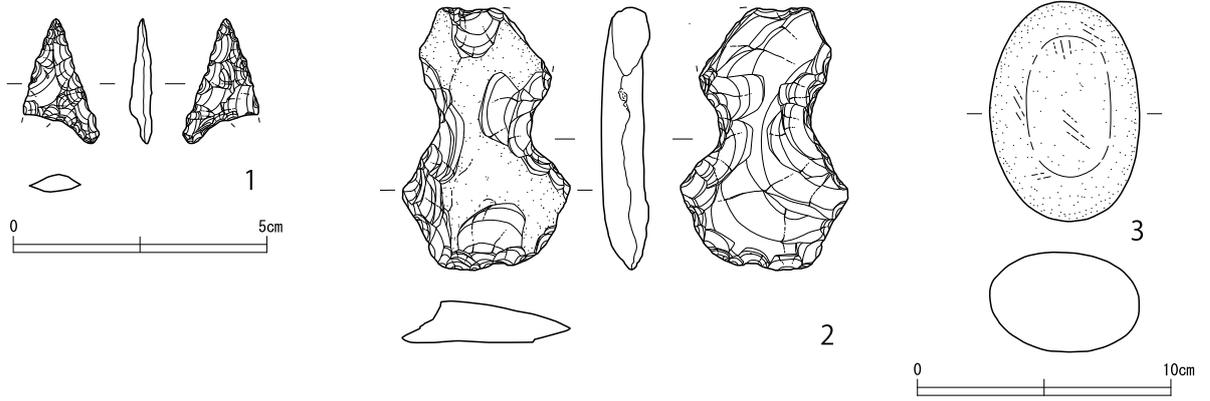
第117図1・2は第51号住居跡、3は第52号住居跡出土石器である。1は凹基無茎の石鏃である。片足を欠く。正面に主要剥離面の一部を残し、裏面は多方向からの調整剥離が見られる。2は分銅形の打製石斧で、両側縁の抉りが顕著である。表面に自然面、裏面に主要剥離面の一部を残している。刃部には、両面からの調整剥離が認められる。丸刃に近い形状。3は磨石である。周縁部全体に擦痕が認められる。

第54号住居跡出土石器 (第118・119図)

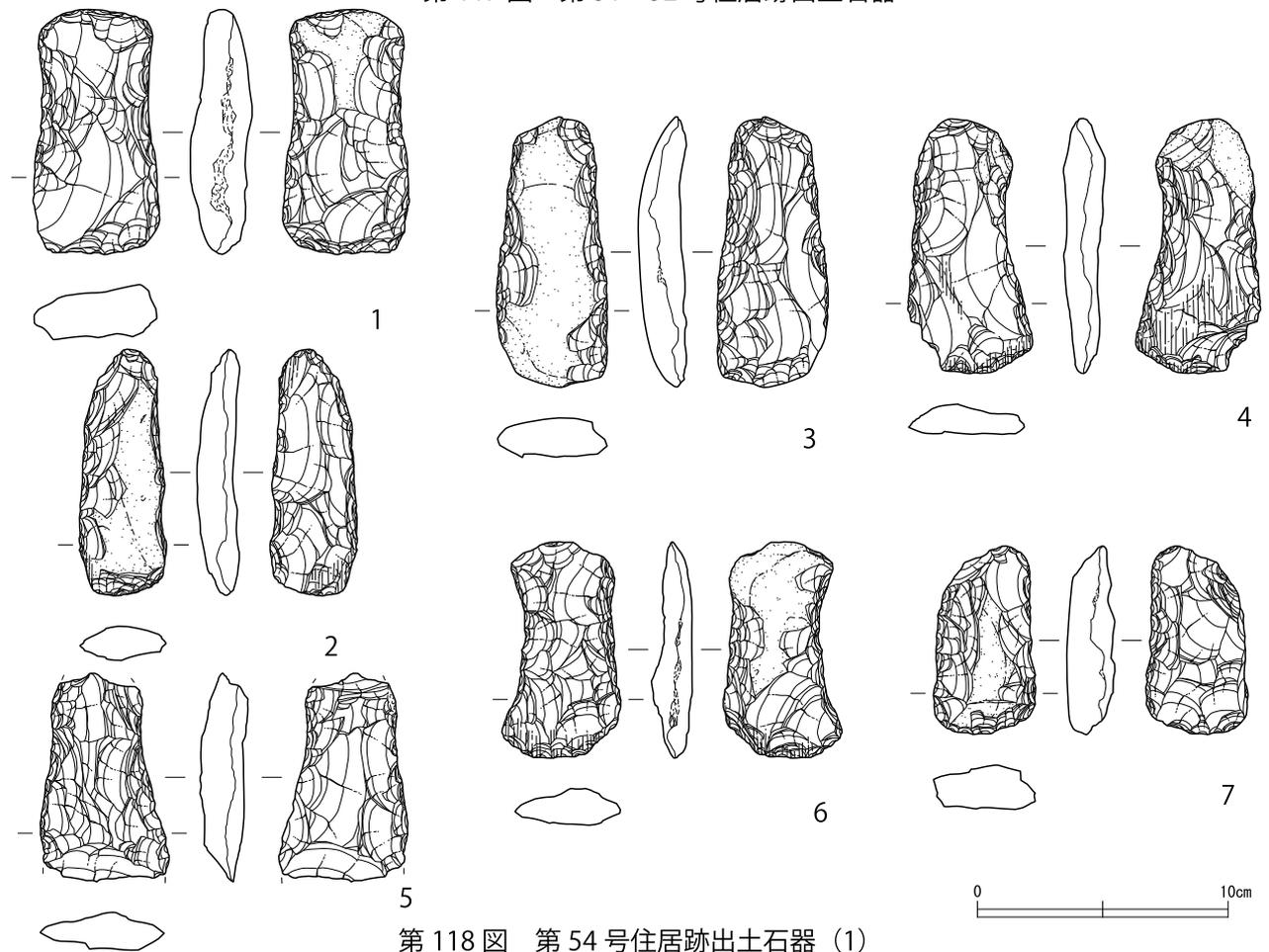
第118図1～7は打製石斧である。1は整った短冊形を呈する。表面に主要剥離面の一部を残し、裏面には周縁部からの大きめの剥離によって作出される。刃部は平刃である。2は短冊形で、基部は尖頭形を呈する。正面に自然面、裏面は多方向からの剥離が見られる。刃部は平刃で、主として裏面からの剥離で作出されている。一部に擦痕が認められる。3は整った短冊形を呈する。正面に自然面、裏面に主として両側縁からの剥離を施している。刃部は丸刃に近く、正面からの剥離で作出されている。4は撥形を呈するが、やや不整形である。正面に主要剥離面の一部、裏面基部に自然面を残している。刃部両面に擦痕が認められる。5は撥形を呈し、正面は多方向からの剥離、裏面には主要剥離面を残す。6は撥形を呈する。



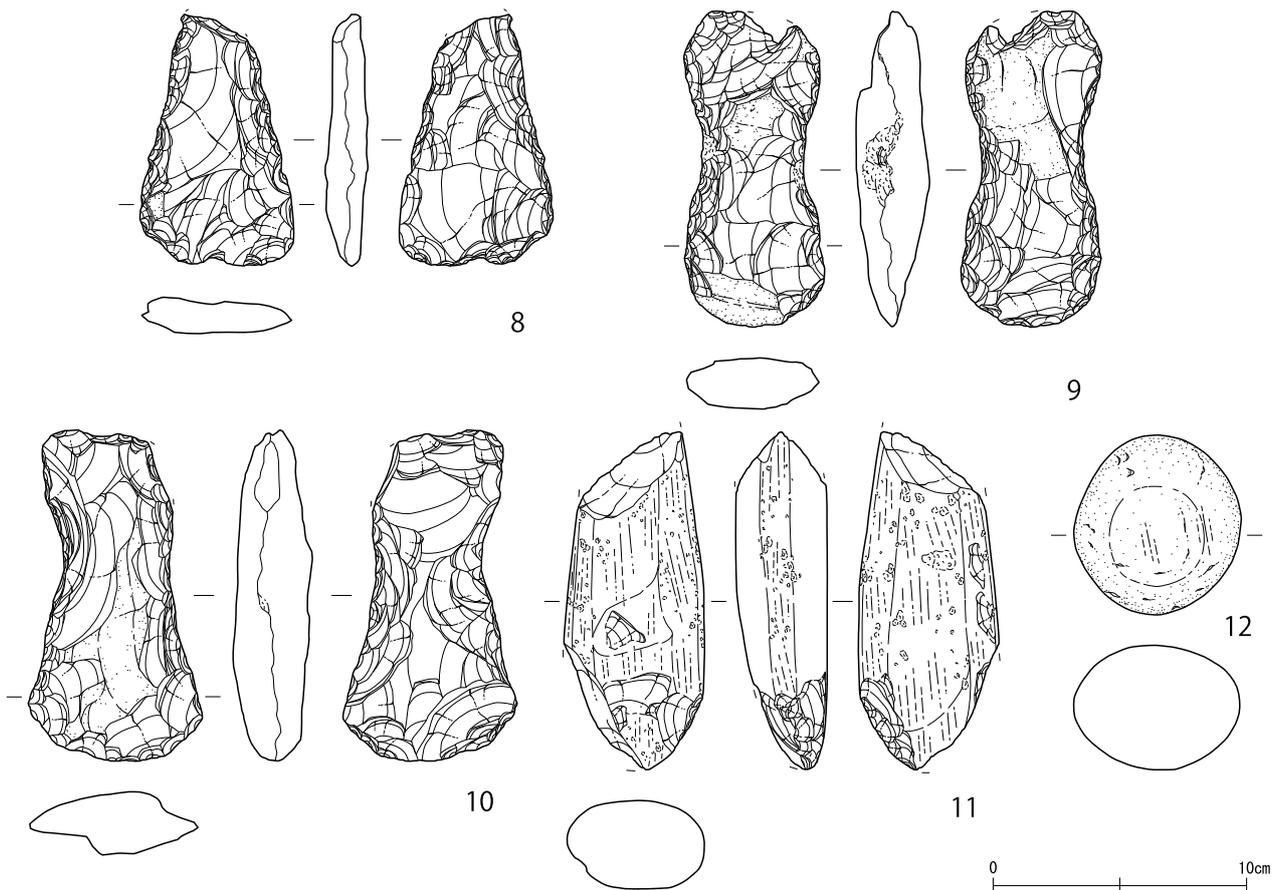
第 116 图 第 49 号住居迹出土石器



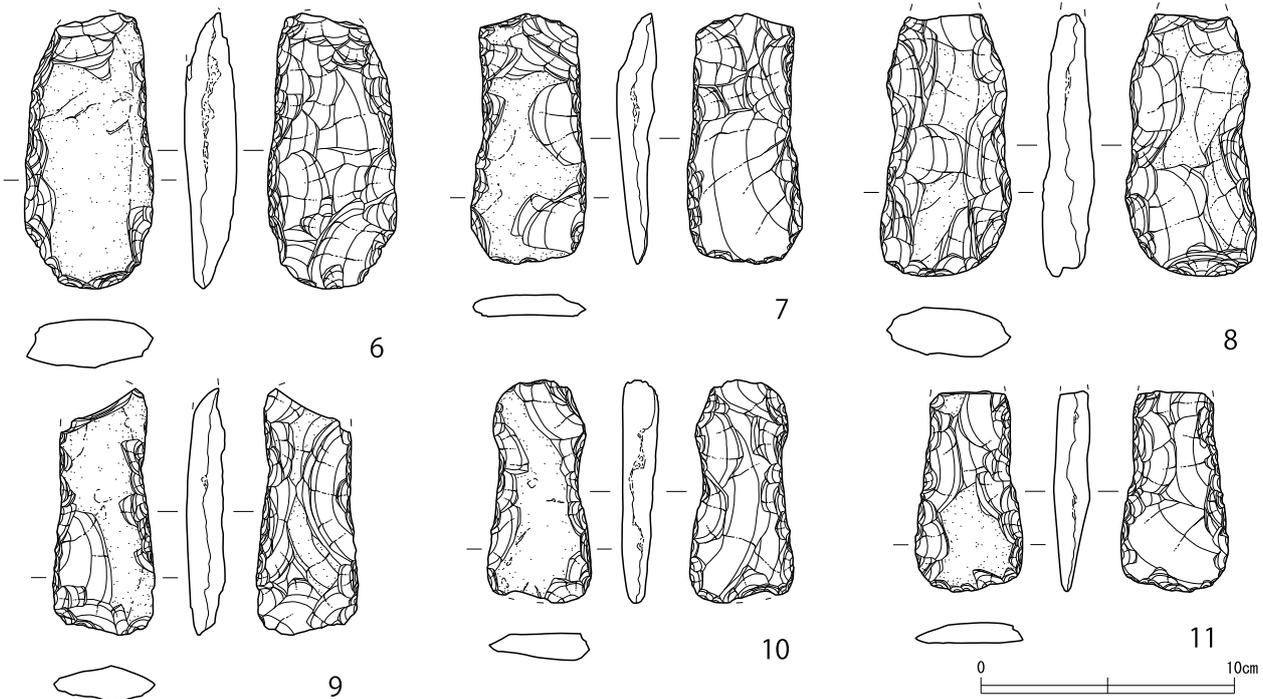
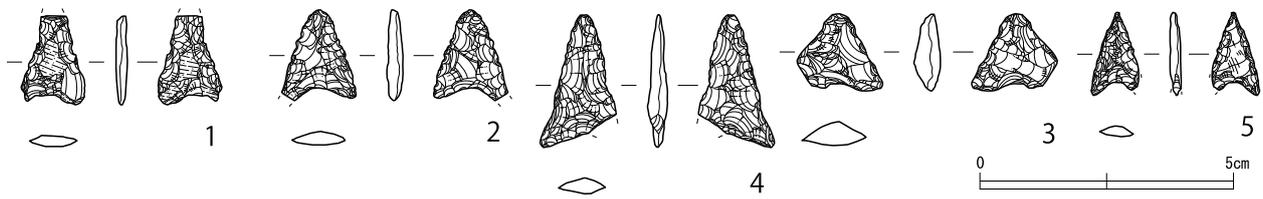
第 117 图 第 51·52 号住居迹出土石器



第 118 图 第 54 号住居迹出土石器 (1)



第 119 图 第 54 号住居迹出土石器 (2)

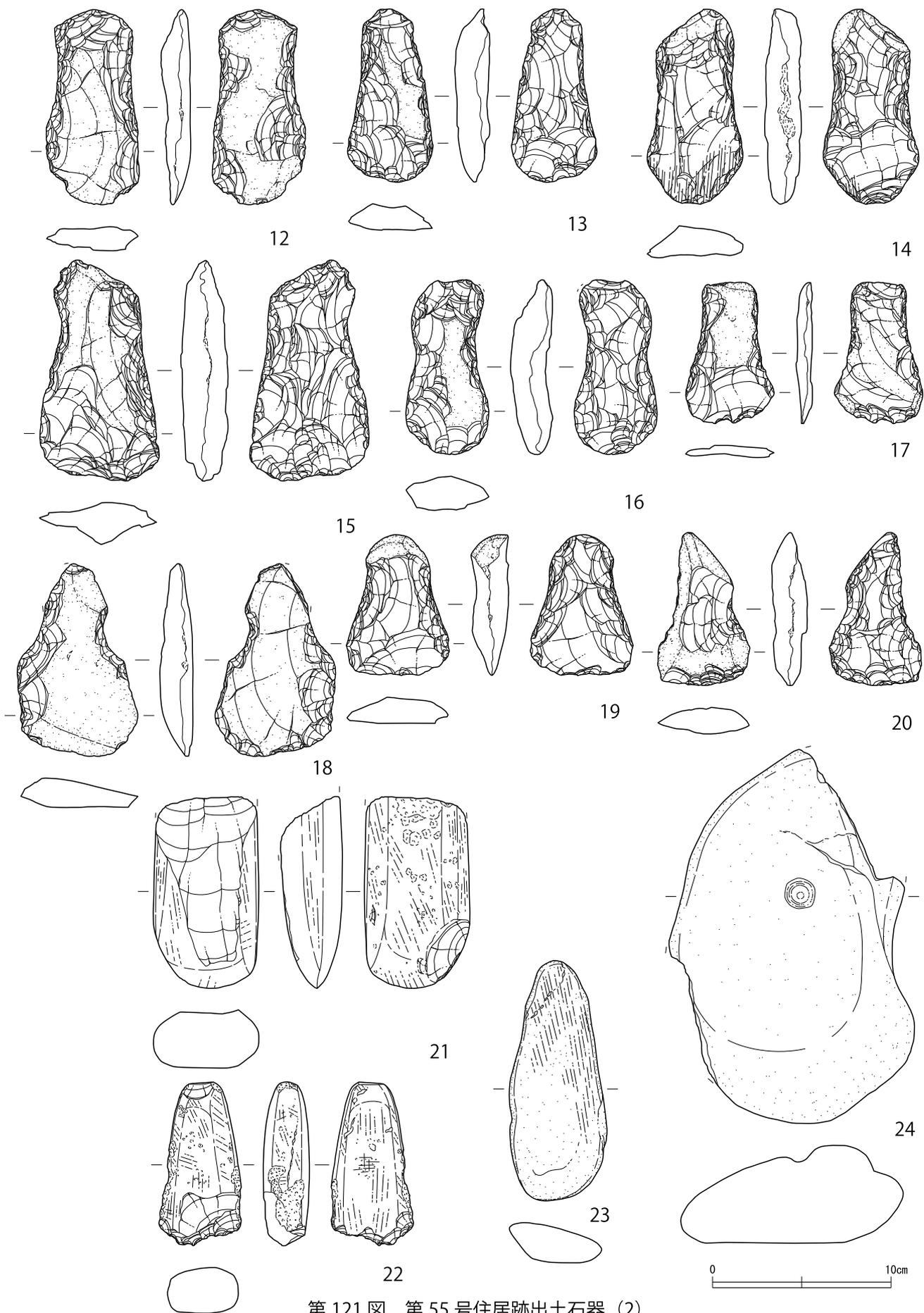


第 120 图 第 55 号住居迹出土石器 (1)

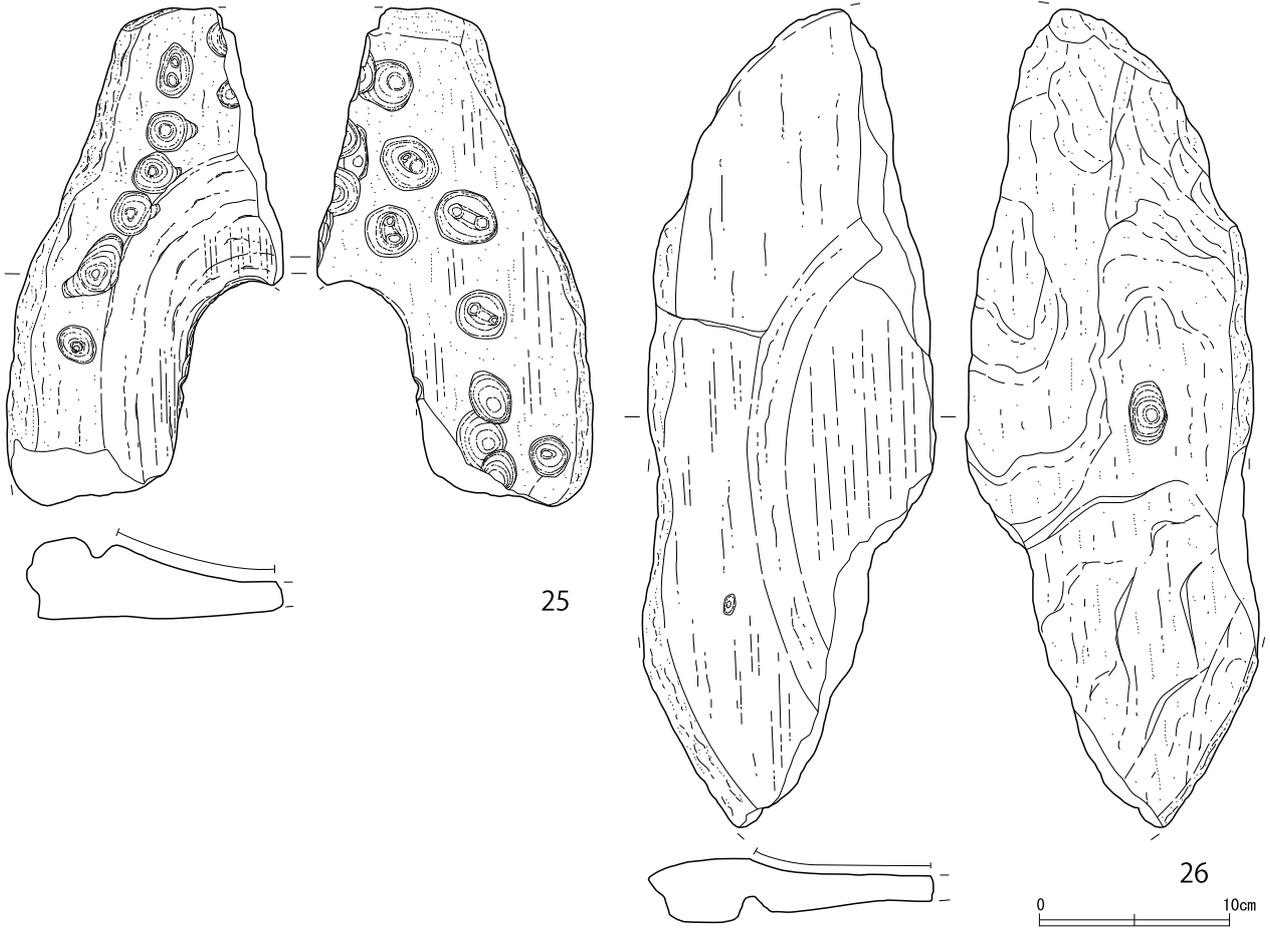
正面に多方向からの剥離、裏面中央から基部にかけて自然面を残す。刃部は斜刃で、擦痕が見られる。7は短冊形であるが、基部は斜位形状を呈する。正面に自然面、裏面に多方向からの剥離が見られる。刃部は、やや丸みを帯びた平刃。第119図8は撥形を呈する。基部を欠く。正面に主要剥離面の一部、裏面は多方向からの剥離が加えられる。刃部は平刃で、両面に調整剥離が見られる。9は短冊形であるが、両側縁の抉りが深い。基部の一部を欠いている。表面刃部と裏面基部に自然面を残している。両側縁の敲打が顕著である。10は撥形を呈する。基部の一部を欠く。両面ともに多方向からの剥離が見られる。刃部は丸刃で、両面からの剥離で作出されている。11は乳棒形の磨製石斧である。刃部と基部を欠くが、刃部には剥離が多数見られ、破損品の修復を試みた痕跡と思われる。両面と両側縁に縦方向の磨痕が見られ、敲打痕も随所に認められる。12は磨石である。両面に擦痕が見られ、周縁部には敲打痕が認められる。

第55号住居跡出土石器(第120～122図)

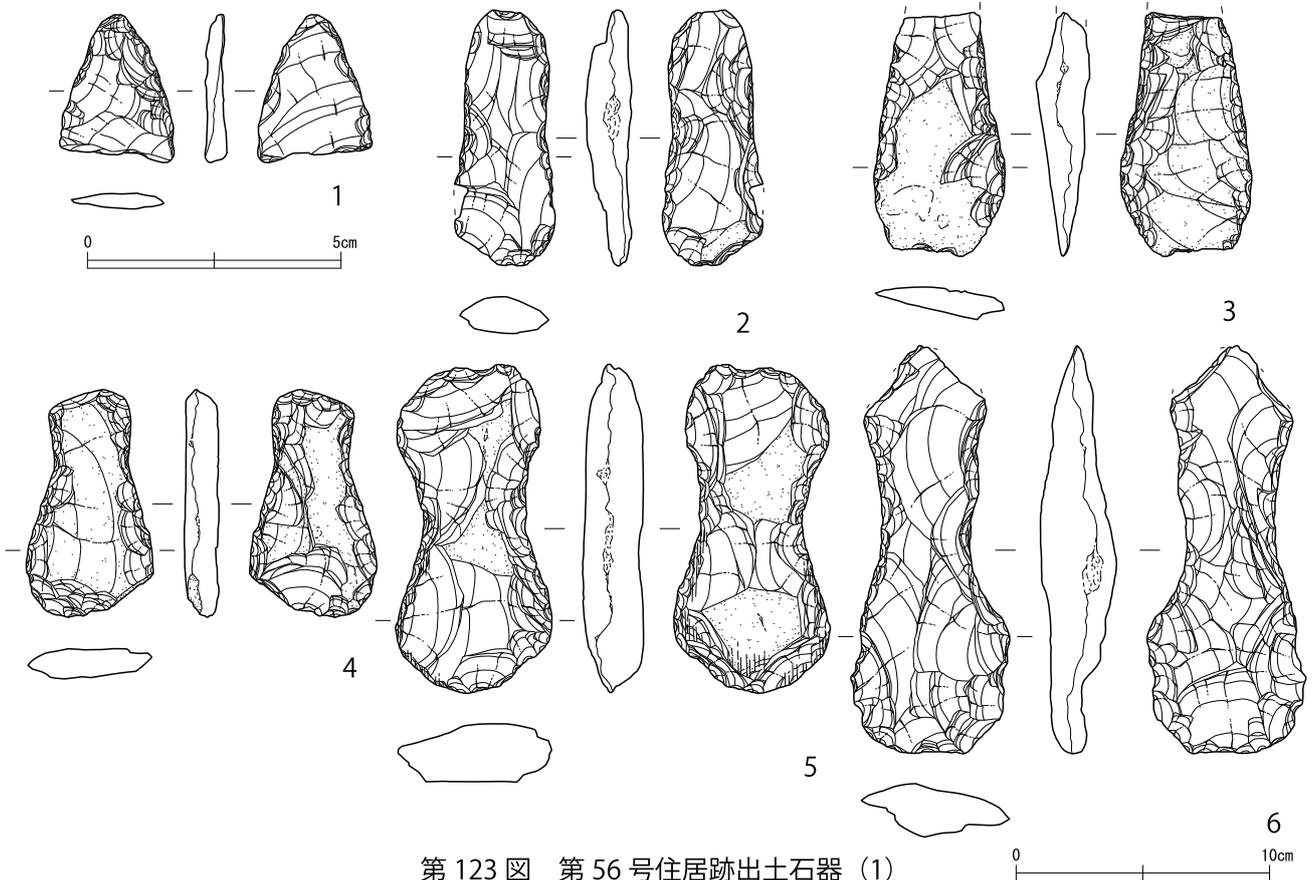
第120図1～5は石鏃である。1は凹基無茎で、基部の抉りは浅い。先端を欠く。やや粗い調整剥離で作出されている。2は凹基無茎で、左脚部を欠く。基部の抉りは浅い。両面とも細かな調整剥離が施されている。3は浅い抉りの凹基無茎で、やや不整形である。全体的に調整剥離が粗い。4は右脚を欠く。凹基無茎で、やや長めの形態を呈する。細かい調整剥離が見られる。5は凹基無茎で、深めの抉りが入る。右脚の先端を欠く。正面には丁寧な調整剥離が見られるが、裏面には主要剥離面が残り、調整は周縁部のみである。6～第121図20は打製石斧である。6は短冊形を呈する。基部先端を欠く。正面に自然面、裏面に多方向からの剥離が加えられている。刃部は平刃で、主として裏面からの剥離で作出されている。両側の剥離によりやや幅狭になっている。7は短冊形を呈する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。調整剥離は周縁部主体である。刃部は平刃で、最小限の剥離で作出されている。8も短冊形であるが、両側縁に浅い抉りが入る。基部先端を欠く。正面に自然面、裏面は多方向からの剥離が施される。刃部は丸刃で、作りは粗い。9は整った短冊形を呈する。基部先端を欠く。正面に自然面を残し、裏面には大きめの剥離が目立つ。刃部はやや斜行するが、平刃で両面剥離で作出されている。10は短冊形であるが、基部が幅を減じ、やや撥形に近い。刃部の一部を欠く。正面に大きく自然面、裏面に主要剥離面を残している。調整剥離は周縁的である。刃部形状は平刃。11の形状は10に類似する。正面下半部に自然面、裏面に主要剥離面の一部を残す。刃部は丸みをおびた平刃。第121図12の形状も10・11に似る。正面に主要剥離面、裏面に自然面を残す。調整剥離は周縁部を主とし、両側縁の敲打は、ほとんど見られない。刃部は丸刃である。13～20は撥形を呈する。13は正面一部に自然面、裏面に主要剥離面を残す。刃部は丸刃で、両面からの剥離で作出されている。14は両面の基部先端に自然面を残す。正面には主要剥離面の一部が認められ、裏面は多方向からの剥離が加えられている。両側縁の敲打が顕著である。刃部は丸刃で、両面に擦痕が見られる。15は、やや大振りの製品である。正面に自然面を残し、裏面には多方向からの剥離が念入りに施されている。刃部は平刃で、やや丸みを帯びる。16は両側縁の抉りが、やや深め。正面に自然面、裏面に多方向からの剥離が見られる。刃部は丸刃で、両面からの剥離で作出される。17は正面中央から基部にかけて自然面、裏面に大きく主要剥離面を残している。調整剥離は周縁的である。刃部は平刃であるが、作りは粗い。18は基部が尖頭状を呈する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。調整剥離は周縁的で且つ部分的。刃部は丸みを帯びた平刃で、正面からの調整剥離が認められる。19は正面基部に自然面、裏面に主要剥離面の一部を残す。形状調整は大きめの剥離によってなされる。刃部は平刃。20は基部が偏った尖頭状をなす。正面左側縁に大きく剥離が入り、他は自然面を残す。裏面には



第121图 第55号住居跡出土石器(2)



第 122 图 第 55 号住居迹出土石器 (3)



第 123 图 第 56 号住居迹出土石器 (1)

多方向からの剥離が見られる。刃部は平刃で、両面からの剥離により作出されている。21・22は磨製石斧である。21は基部を欠く。正面及び刃部右に剥離が見られるが、使用時の破損によるものか、修復痕かは不明である。磨痕は両面とも斜方向、側縁は縦方向に認められ、敲打痕が随所に残る。22は刃部を欠損する。使用時の破損と考えられるが、先端部には両面からの剥離と敲打痕が見られ、修復が試みられたものと思われる。正面には縦方向、裏面と側縁には斜方向の磨痕認められる。23は敲石で、自然面を多く残す。周縁部に敲打痕が見られる。また、両面に斜方向の擦痕があり、磨石としても使用されていたと思われる。24は大形の敲石で、両側縁に欠損が認められる。周縁部に弱い敲打痕を残し、正面に1箇所凹みが見られる。第122図25・26は石皿である。25は全体の約1/4程度が残存する。正面の稜には8箇所、平坦な裏面には12箇所の凹みが認められる。中央は大きめの孔となっているが、使用の結果剥落したのか、意図的に穿たれたかは不明である。ただし、断面形は正面から裏面に向けて、わずかに斜行する。被熱痕跡が顕著。26は1/2弱が残存する。薄手の作り。両面に凹みが各1箇所見られる。

第56号住居跡出土石器(第123・124図)

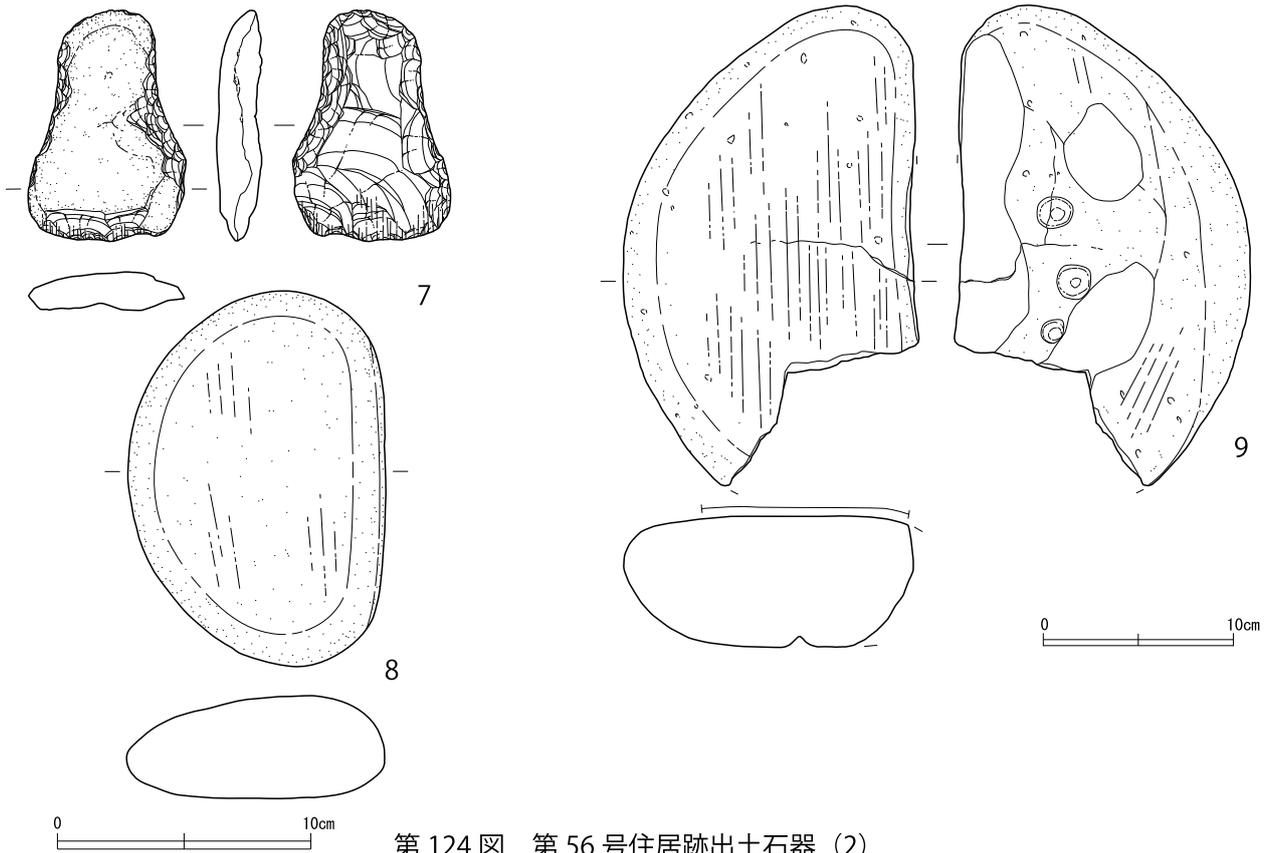
第123図1は平基無茎の石鏃で、粗い作りである。正面は多方向からの剥離、裏面は主要剥離面を残している。調整剥離は周縁的で、正面先端には比較的に入念に施されている。2～第124図7は打製石斧である。2は短冊形で、正面は多方向からの剥離、裏面には主要剥離面の一部と、刃部に自然面を残している。調整剥離は裏面に顕著で、周縁的に認められる。刃部は偏りのある丸刃。3は基部を欠く。短冊形を呈する。両面に自然面を残す。調整剥離は正面は深く入るが、裏面は周縁的である。刃部は平刃。4は撥形を呈し、基部近くに浅い抉りが入る。正面に主要剥離面、裏面に自然面を残している。調整剥離は周縁的で、両面とも入念である。刃部は丸刃。5は刃部と基部の幅が同値に近い分銅形を呈する。両面に自然面を部分的に残し、周縁的に深めの調整剥離が入る。刃部は丸刃で、正面に擦痕が認められる。6は両側縁の抉りが深めで、細身の撥形を呈する。基部の一部を欠く。調整剥離は周縁的である。刃部は丸刃で、両面とも側縁の調整が顕著。第124図7は撥形を呈する。正面の大半は自然面、裏面には主要剥離面を残す。調整剥離は基部の成形以外は周縁的である。刃部は平刃で、両面から作出されている。擦痕が両面に認められる。8は敲石で、周縁的に弱い敲打痕が認められる。両面に擦痕が見られ、磨石としても使用されていたと思われる。9は石皿である。1/3程度が残存する。正面は平坦で、擦痕が顕著である。裏面には3箇所の凹みが認められる。被熱痕跡あり。

第58号住居跡出土石器(第125図)

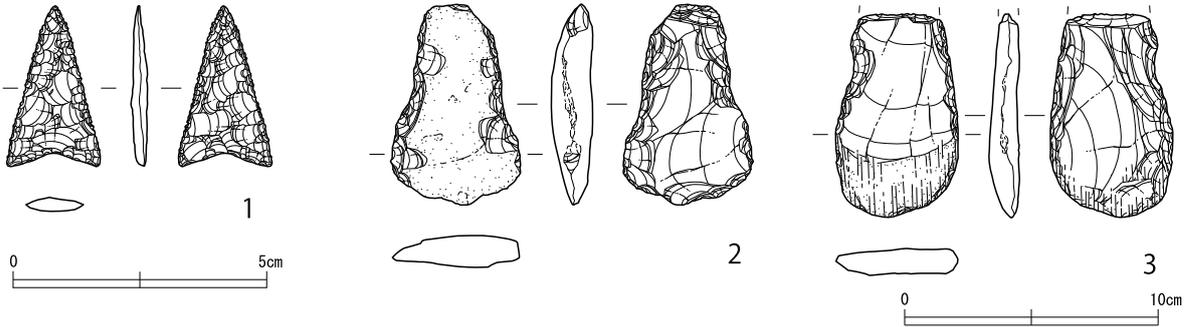
第125図1は石鏃で、凹基無茎であるが、基部の抉りは浅い。多方向からの剥離により作出され、周縁的に細かい調整剥離を施している。2・3は打製石斧である。2は撥形を呈し、正面に自然面、裏面に一部主要剥離面を残す。調整剥離は周縁的である。刃部は丸刃で、調整は主に正面から行われている。側縁の敲打痕が顕著。3も撥形で、基部を欠損する。正面刃部付近に自然面、裏面に主要剥離面を残している。調整剥離は裏面に多く見られる。刃部は丸刃で、両面に擦痕が認められる。

第59・60号住居跡出土石器(第126図)

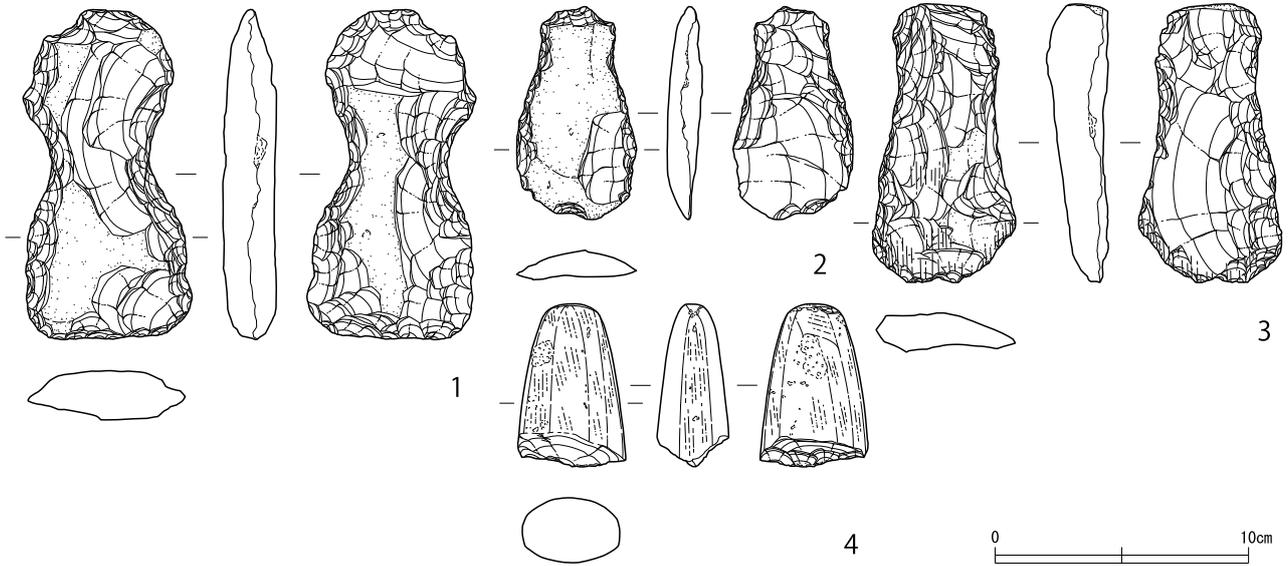
第126図1は第59号住居跡、2～4は第60号住居跡出土石器である。1～3は打製石斧である。1は両側縁の抉りが深く、分銅形に近い。両面に部分的に自然面を残す。調整剥離は周縁的で、念入りに施される。刃部は平刃で、両面からの剥離で作出されている。4は乳棒形の磨製石斧で、中央から刃部にかけて欠損する。磨痕は両面、側縁ともに縦あるいはやや斜方向になされ、基部付近に敲打痕が認められる。



第 124 图 第 56 号住居跡出土石器 (2)



第 125 图 第 58 号住居跡出土石器



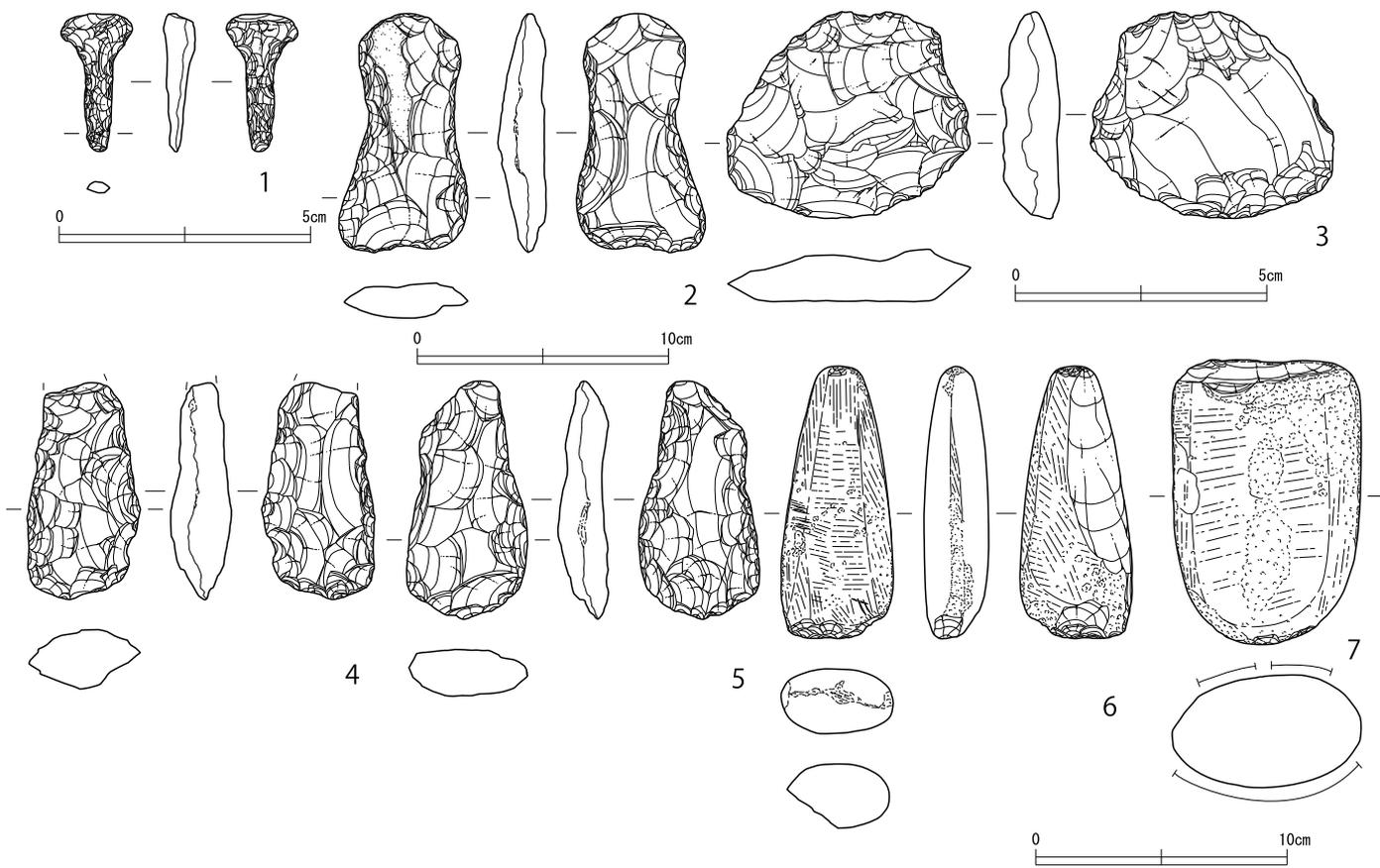
第 126 图 第 59・60 号住居跡出土石器

第 61・62 号住居跡出土石器 (第 127 図)

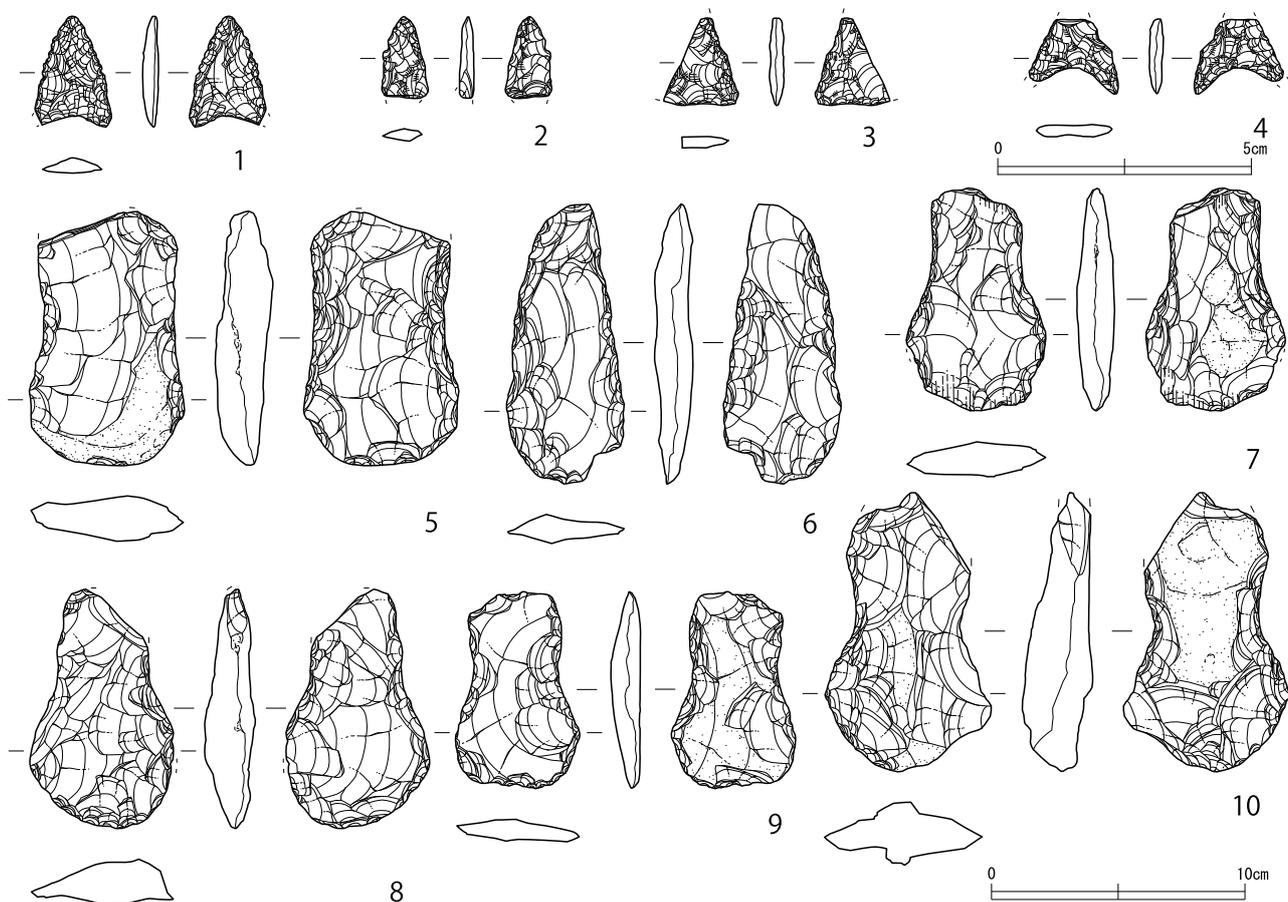
第 127 図 1・2 は第 61 号住居跡出土石器である。1 は石錐で、完形品。基部はやや厚手で、先端に向かって厚みを減じ、断面は楕円形を呈する。調整剥離は入念に施されている。2 は打製石斧で、撥形を呈する。両側縁に浅い抉りが入る。正面一部に自然面、裏面に主要剥離面を残す。調整剥離は側縁下位に多く見られる。刃部は平刃で、主として正面から剥離が加えられている。3～7 は第 62 号住居跡出土石器である。3 は搔・削器で、不整楕円形を呈する。比較的厚手の作り。正面は多方向からの剥離、裏面に主要剥離面の一部を残している。調整剥離は刃部裏面に顕著である。4・5 は打製石斧である。4 は撥形を呈し、基部先端を欠く。両面ともに多方向からの剥離によって作出される。調整剥離は、正面に多く認められる。刃部は丸刃であるが、やや偏りがある。5 も撥形を呈する。正面は多方向からの剥離、裏面には主要剥離面の一部を残している。調整剥離は周縁的である。刃部は丸刃で、両面からの剥離で作出される。6 は乳棒形の磨製石斧である。裏面に大きな剥離が見られる。磨痕は正面が縦位、裏面は斜位を主体とする。刃部は欠損し、敲打が施されている。裏面の剥離とともに、補修の痕跡と思われる。7 は敲石である。楕円形状の自然石を利用している。図上位を欠くが、欠損部にも敲打痕が、認められる。正面には敲打による浅い凹みがあり、両面に擦痕が見られる。

第 63 号住居跡出土石器 (第 128・129 図)

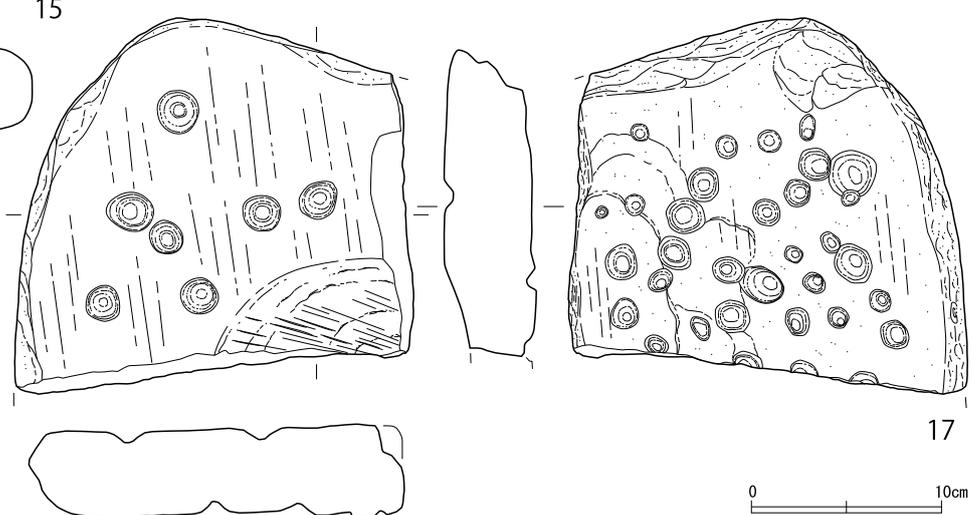
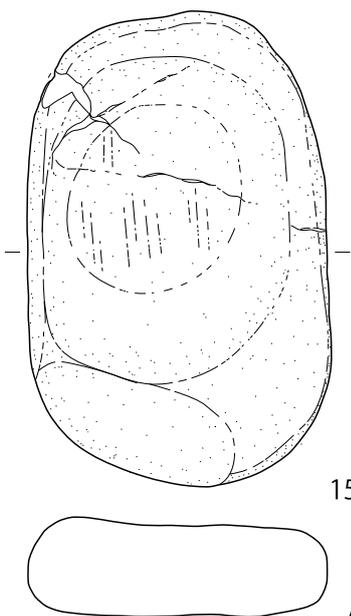
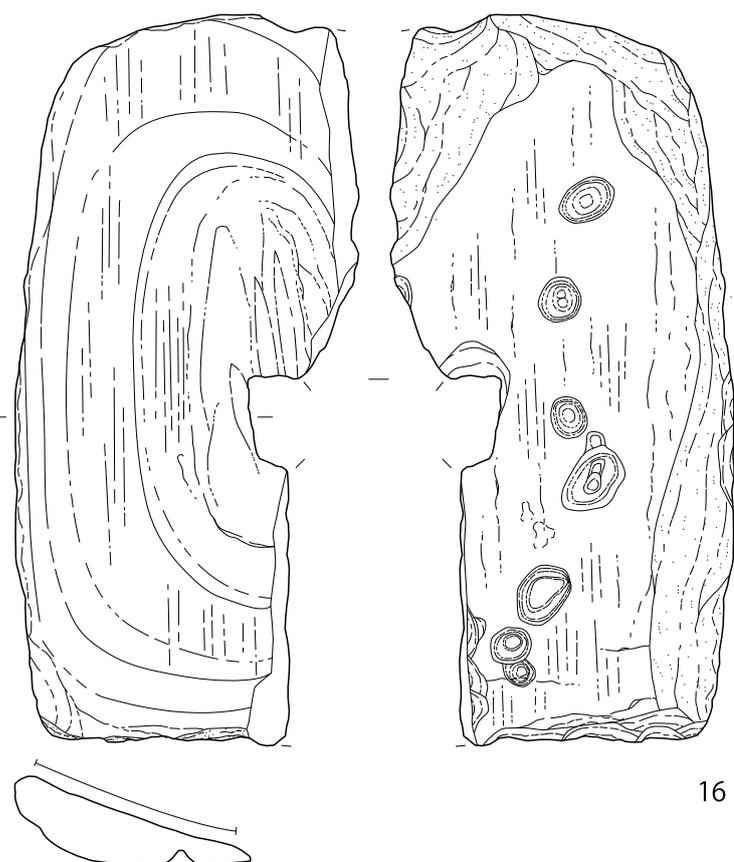
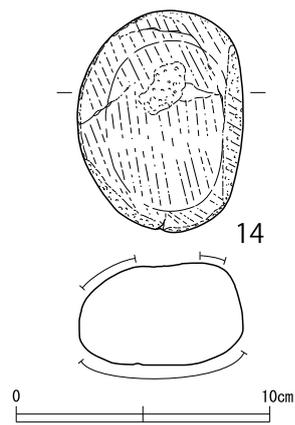
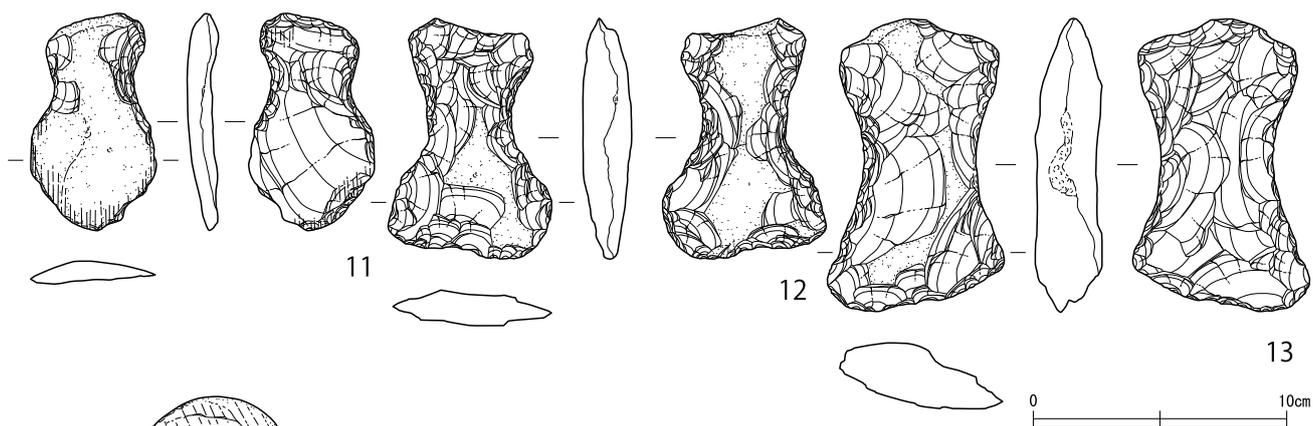
第 128 図 1～3 は石鏃である。1 は凹基無茎であるが、基部の抉りが非常に浅い。左脚部の先端を欠く。正面の調整剥離は深く入るが、裏面は周縁的である。2 は小形で、比較的粗雑な作り。基部を欠損する。両面とも調整剥離が深く入る。3 は先端を欠く。平基無茎で、整った二等辺三角形を呈する。調整剥離は先端から右側縁に偏る。4 は先端と左脚部を欠く。凹基無茎で、抉りが深く入る。調整剥離は周縁的に丁寧に施されている。5～第 129 図 13 は打製石斧である。5 は短冊形で、基部を欠損する。正面刃部付近に自然面、裏面には図右方向からの剥離が多く加えられている。調整剥離は周縁的。刃部は丸刃で、主として正面からの剥離で作出されている。6 は撥形を呈する。正面に主要剥離面、裏面に多方向からの剥離が見られる。調整剥離は周縁的に施されるが、図左側縁に顕著である。刃部は丸刃で、一部欠損する。7 は撥形であるが、中央から基部にかけて直線的な形状を呈する。正面には多方向からの剥離、裏面基部には自然面を残す。刃部は丸刃で、擦痕が認められる。両面からの剥離で作出されている。8 の形状は 7 に類似する。基部の一部を欠く。正面には多方向からの剥離、裏面には主要剥離面の一部を残す。調整剥離は側縁に集中する。刃部は丸刃で、両面剥離で作出される。9 は、やや小振りで、形状は 7・8 に似る。調整剥離は疎らになされている。刃部は丸みを帯びた平刃で、主として裏面から剥離が加えられている。10 は両側縁の抉りが深く、分銅形に近い。基部を欠損する。正面は両側縁からの大きめの剥離、裏面には自然面を残している。刃部は丸刃で、両面剥離で作出されている。第 129 図 11 は基部付近の両側縁に深い抉りが入る。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。調整剥離は主として裏面に見られる。刃部は丸刃であるが、中央が尖頭状を呈する。両面に擦痕が認められる。12 は両側縁に深い抉りが入る。両面に、部分的に自然面を残している。刃部は平刃で、両面からの剥離で作出されている。13 は両側縁が湾曲する。正面基部に自然面、裏面には多方向からの剥離が見られる。刃部はやや斜位の平刃で、両面からの剥離で作出されている。14 は磨石で、自然石を未加工で使用している。両面に擦痕、側縁には周縁的に敲打痕が見られる。また、正面中央に楕円形の敲打が施されている。15 は敲石である。自然石を無加工で使用している。敲打痕は全周で認められ、平坦部には擦痕が見られる。16・17 は石皿である。16



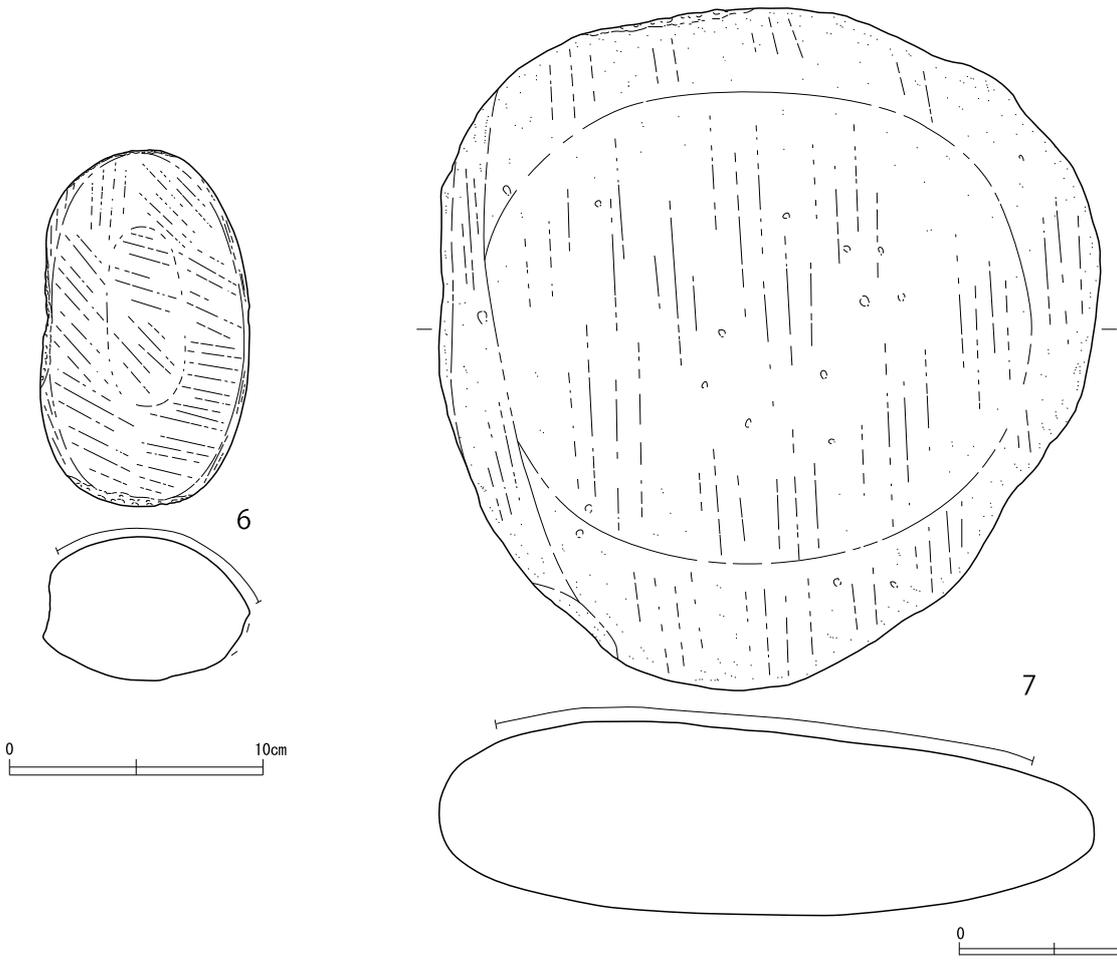
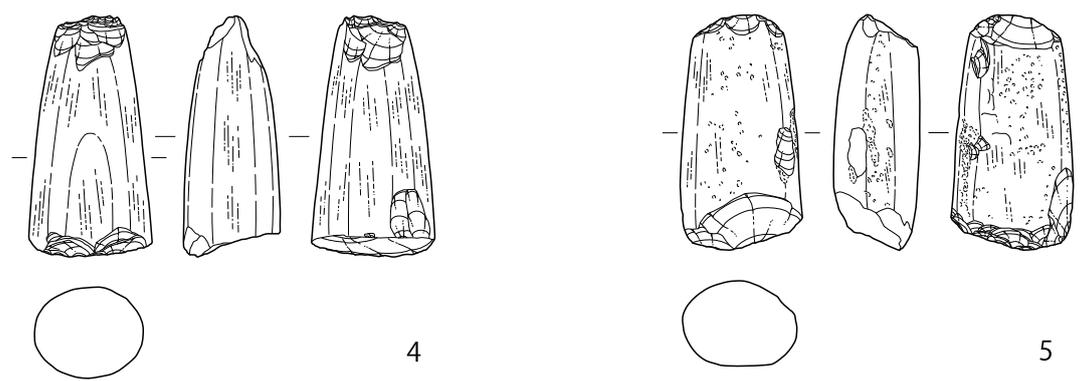
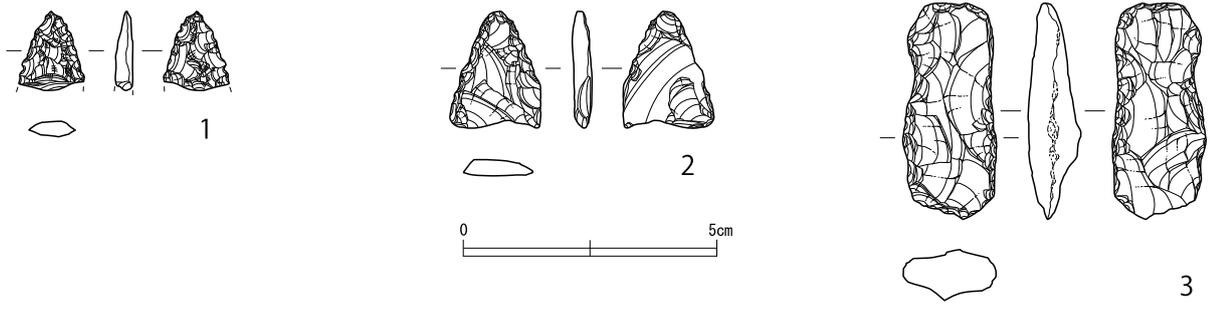
第 127 图 第 61·62 号住居迹出土石器



第 128 图 第 63 号住居迹出土石器 (1)



第 129 图 第 63 号住居跡出土石器 (2)



第 130 图 第 64 号住居跡出土石器

は全体の1/2程度が残存し、全体形は隅丸長方形を呈すると思われる。正面は縁辺から中央に向けて皿状に窪み、擦痕が全体的に認められる。窪み中央は孔となるが、裏面に剥離が認められ、正面からの圧力によってあけられたものと思われる。裏面は縁辺に加工痕を残し、平坦部に9箇所の凹みが見られる。17は正面下端に、皿状の窪みの一部が残存する。また、両面に多数の凹みが見られる。

第64号住居跡出土石器(第130図)

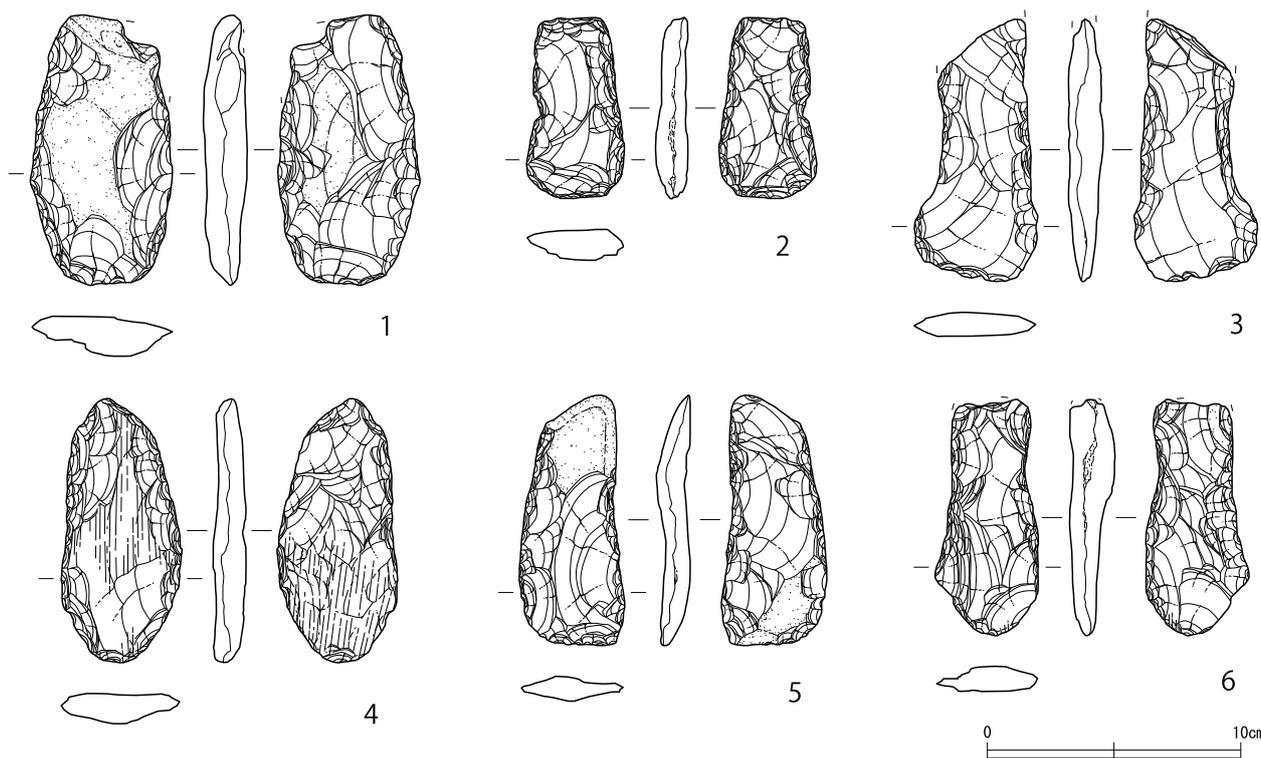
第130図1・2は石鏃である。1は比較的小型で、基部を欠損する。形状調整剥離は周縁的であるが、やや粗い。2は平基無茎で、やや粗雑な作り。正面の調整剥離は縁辺部のみに施され、裏面には主要剥離面を大きく残している。3は打製石斧で、短冊形を呈する。両面ともに、多方向からの剥離が加えられている。刃部は平刃で裏面からの剥離が目立つ。4・5は磨製石斧である。4は乳棒形で、刃部と基部を欠くが、刃部欠損時の剥離以外は補修痕の可能性が高い。磨痕は縦方向を主体とする。敲打痕はほとんど認められない。5も刃部、基部を欠損する。随所に小さめの剥離と敲打痕が見られ、4と同様、欠損後に補修を試みたものと思われる。磨痕は縦方向を主とする。6は敲石で、楕円礫を使用している。周縁的に敲打痕が見られ、両面に横方向、斜方向擦痕が認められる。7は窪み面を持たないタイプの石皿で、大形の扁平な自然石を用いている。正面に主として縦方向の擦痕が認められ、縁辺の一部に敲打痕が見られる。

第65号住居跡出土石器(第131図)

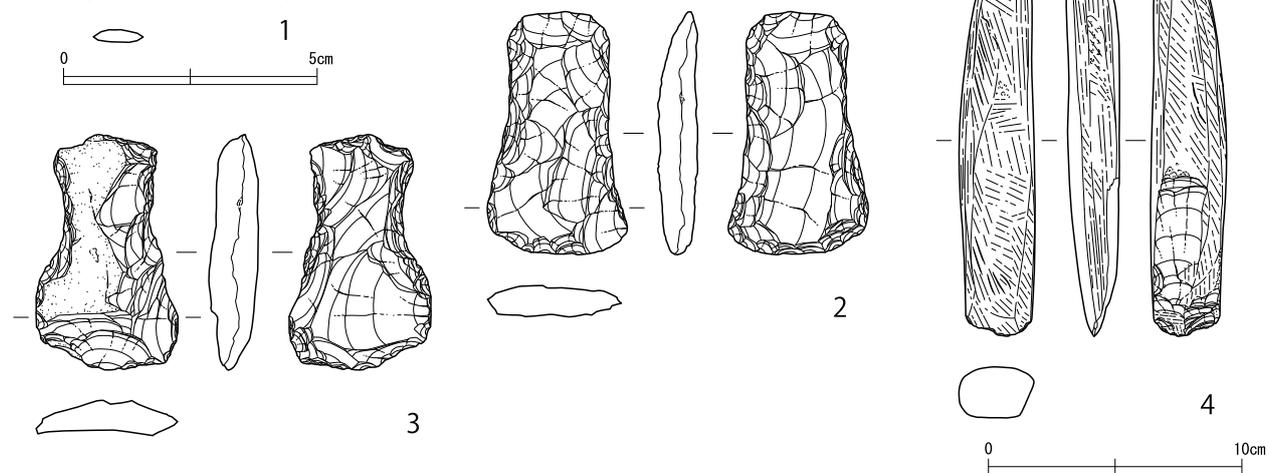
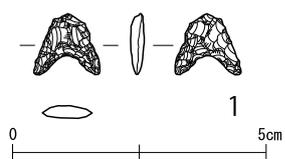
第131図1～6は打製石斧である。1が中央が幅広で、小判形に近い。基部の一部を欠く。正面に自然面、裏面に多方向からの剥離を残す。調整剥離は周縁的に施される。刃部は幅の狭い平刃で、両面からの剥離で作出されている。2は小品で、短冊形を呈するが、左側縁に浅い抉りが入る。正面に主要剥離面、裏面は多方向からの剥離を残している。調整剥離は周縁的であるが、裏面には念入りに施されている。刃部はやや丸みを帯びた平刃で、両面からの剥離で作出されている。3は刃部形状がやや不整な短冊形を呈する。基部を欠損する。正面に多方向からの剥離、裏面に主要剥離面を残している。調整剥離は周縁的であるが、やや粗雑。刃部は平刃で、主として裏面からの剥離で作出されている。4は小判形を呈する。正面に主要剥離面、裏面に多方向からの剥離を残す。調整剥離は正面に念入りに施されている。刃部は尖頭状で、裏面からの剥離が顕著。また、正面中央から基部及び裏面刃部付近には擦痕が認められる。5は基部がわずかに湾曲するが、短冊形を呈する。正面は基部に、裏面は刃部付近に自然面を残している。調整剥離は周縁的。刃部は平刃で、両面からの剥離で作出される。6は撥形を呈し、基部先端を欠く。両面とも多方向からの剥離を残し、周縁的な調整剥離を施す。刃部は尖頭形で、わずかに調整剥離が認められる。

第66号住居跡出土石器(第132図)

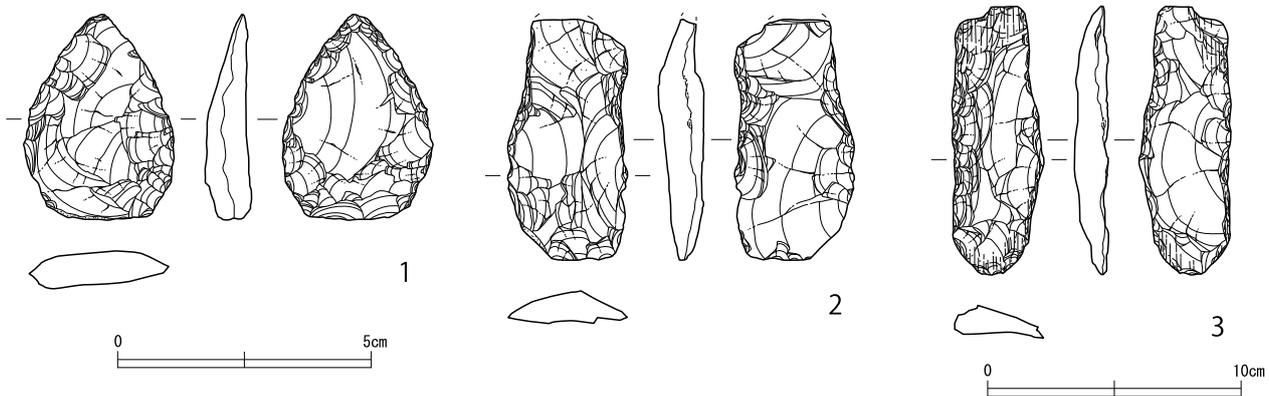
第132図1は石鏃である。凹基無茎で、長い脚部を有する。先端部を欠く。調整剥離は周縁的で、丁寧に施されている。2・3は打製石斧である。2は撥形を呈し、正面に多方向からの剥離、裏面には主要剥離面を残す。刃部はやや丸みを帯びた平刃で、両面からの剥離により作出されている。3も撥形を呈するが、両側縁の抉りは深めである。正面に自然面、裏面に主要剥離面の一部を残す。調整剥離は裏面に念入りに施され、正面は大きめの面的な剥離が入る。刃部は平刃であるが、やや不整形である。4は磨製石斧であるが、形状が整っていないため、未成品と思われる。定角形を意図したものと考えられる。両面及び側縁部には縦方向、斜方向の磨痕と敲打痕が認められる。刃部は作業途中で、正面から入れられた面的な剥離を残している。



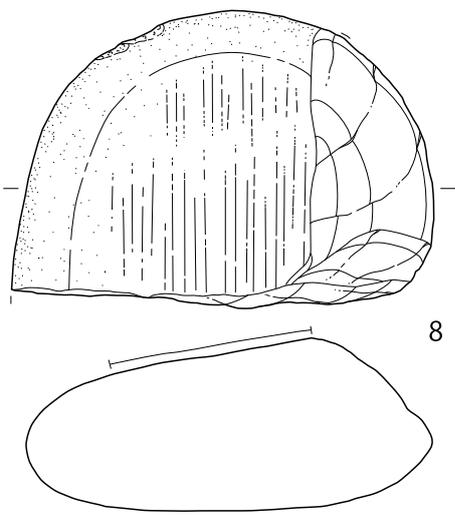
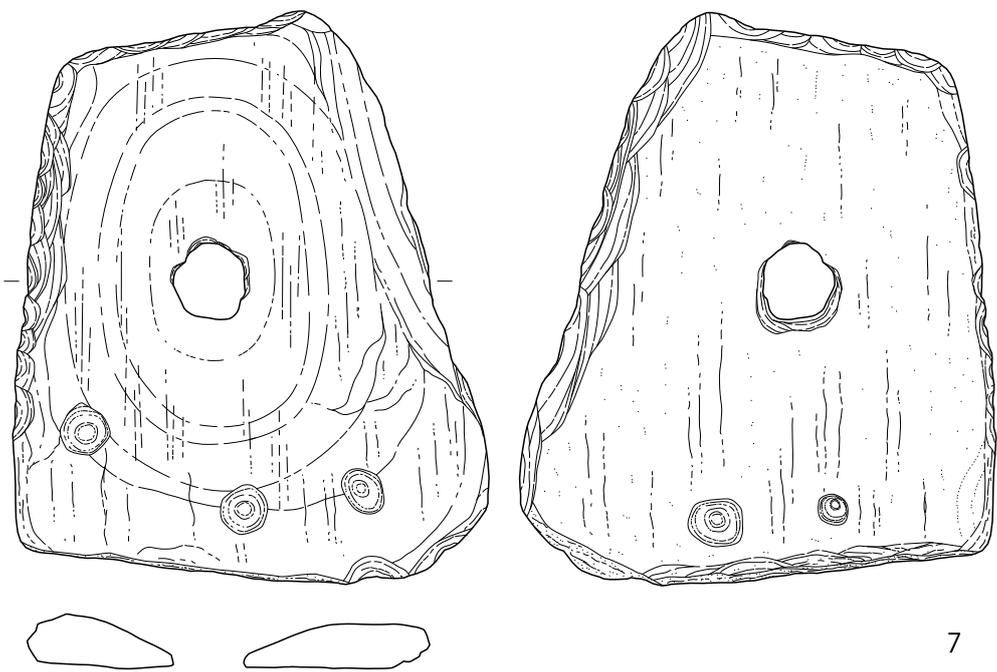
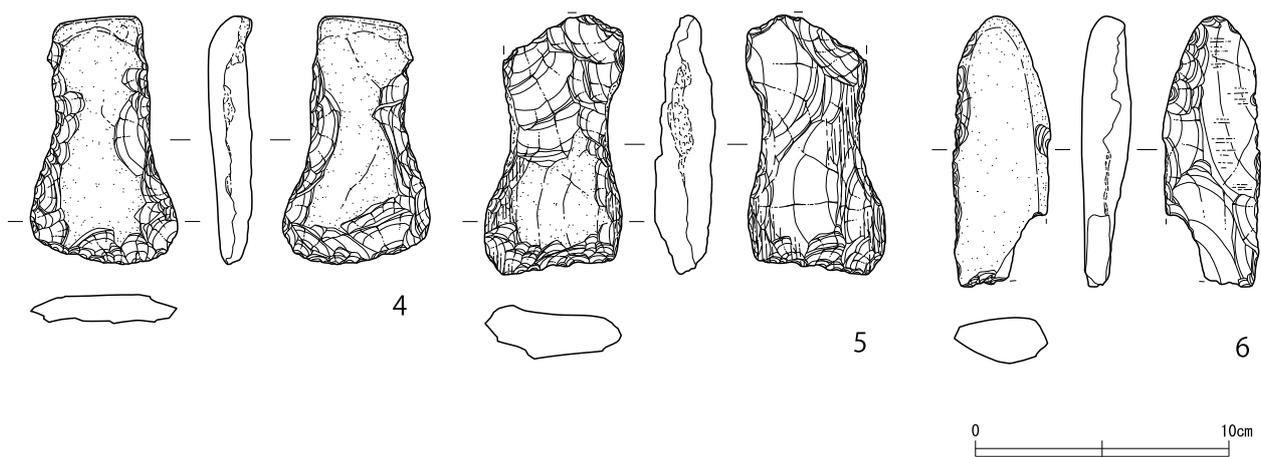
第 131 图 第 65 号住居跡出土石器



第 132 图 第 66 号住居跡出土石器



第 133 图 第 67 号住居跡出土石器 (1)



第 134 图 第 67 号住居迹出土石器 (2)

第 67 号住居跡出土石器 (第 133・134 図)

第 133 図 1 は平基無茎の石鏃である。大形の作りで、未成品の可能性もある。正面は多方向からの剥離、裏面には主要剥離面を残している。調整剥離は裏面が周縁的で、正面は部分的に留まる。2～第 134 図 5 は打製石斧である。2 は短冊形を呈し、基部の一部を欠く。正面は多方向からの剥離、裏面には主要剥離面を残している。調整剥離は粗雑で、大きめの面的な剥離が施されている。刃部は偏った平刃で、裏面からの剥離が目立つ。3 も短冊形を呈する。正面に多方向からの剥離、裏面には主要剥離面を残す。調整剥離は粗いながら、周縁的に施されている。刃部は丸刃。基部と刃部には擦痕が認められる。4 は撥形を呈し、両側縁に浅い抉りが入る。両面に自然面を残している。調整剥離は粗い面的剥離が施され、基部縁辺には敲打痕が見られる。刃部は平刃で、両面からの剥離で作出されている。5 も撥形を呈する。基部の一部を欠く。6 は磨製石斧の未成品である。正面に自然面、裏面に粗い面的な剥離を施しており、加工途中の状態で廃棄されたものと思われる。弱い敲打痕が見られるが、磨痕は認められない。7 は石皿で、ほぼ完形と思われる。炉跡 2 の覆土上位から出土した。正面左側及び裏面右側に、形状調整の剥離が施され、裏面は平坦に仕上げられている。正面中央に皿状の窪みがあり、中央に孔を持つ。孔裏面には、正面からの圧力による貫通時の剥離痕がある。正面に 3 箇所、裏面に 2 箇所の凹みが見られる。8 も石皿である。全体の約 1/2 を欠く。両面平坦部に縦方向の擦痕、周縁部の一部に敲打痕が認められる。

第 70～72 号住居跡出土石器 (第 135 図)

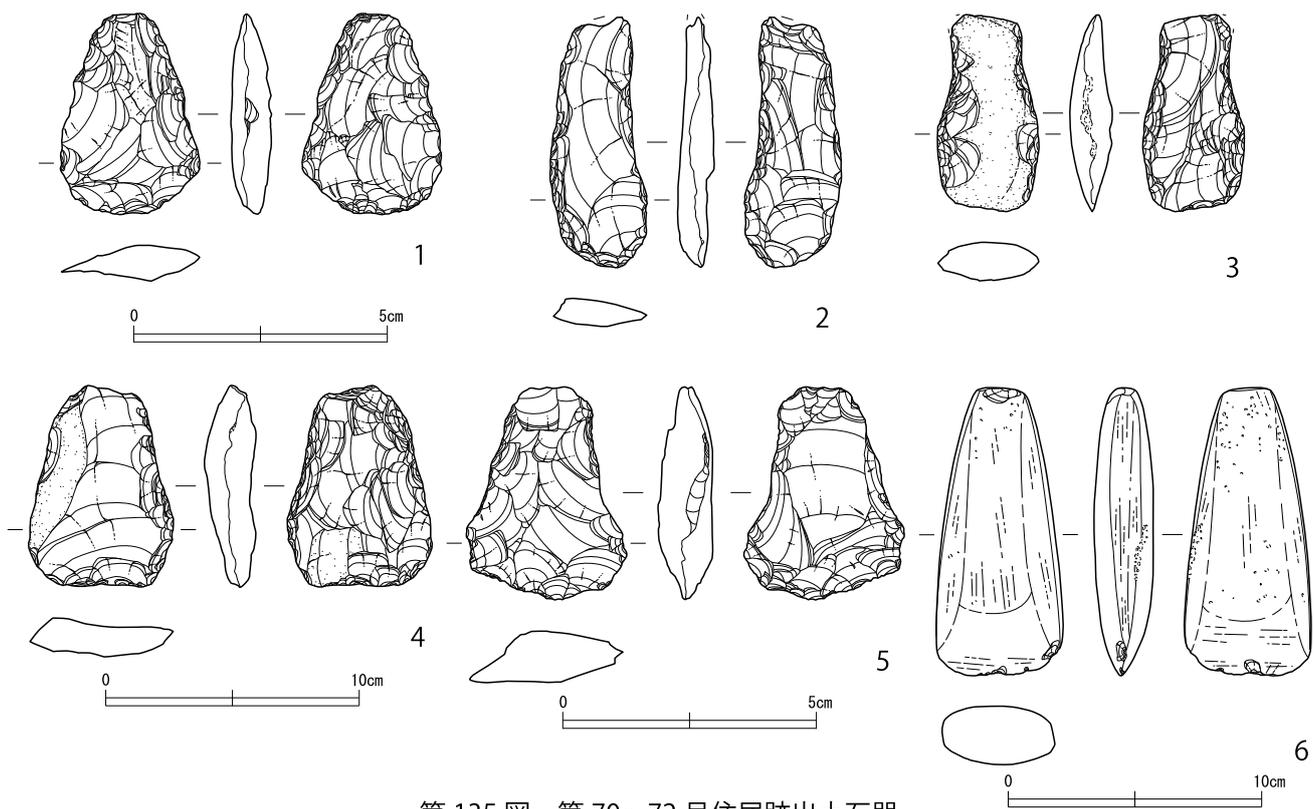
第 135 図 1・2 は第 70 号住居跡、3・4 は第 71 号住居跡、5・6 は第 72 号住居跡出土石器である。1 は搔・削器である。面的な剥離を多方向から入れ、部分的に調整剥離を施す。刃部は正面左側縁と思われる。2～4 は打製石斧である。2 はやや不整短冊形で、薄手の作り。正面に主要剥離面、裏面には多方向からの剥離を残す。調整剥離は粗雑。刃部は丸刃で、両面からの剥離で作出される。3 は小振りで、短冊形を呈する。基部の一部を欠く。正面に自然面、裏面に多方向からの面的剥離を残す。調整剥離後に、敲打を加える。刃部は平刃で、剥離面をほぼそのまま使用している。4 は撥形を呈する。正面に自然面を残し、裏面には主として右方向からの面的剥離を施す。調整剥離は基部に集中。刃部は平刃で、両面剥離で作出される。5 は搔・削器で、撥形を呈する。正面に多方向からの剥離、裏面に主要剥離面を残している。調整剥離は周縁的であるが、粗い。6 は乳棒形の磨製石斧。刃部に使用時と思われる剥離が見られる。磨痕は主として縦方向だが、裏面刃部周辺は横方向である。部分的に敲打痕を残している。

第 73 号住居跡出土石器 (第 136 図)

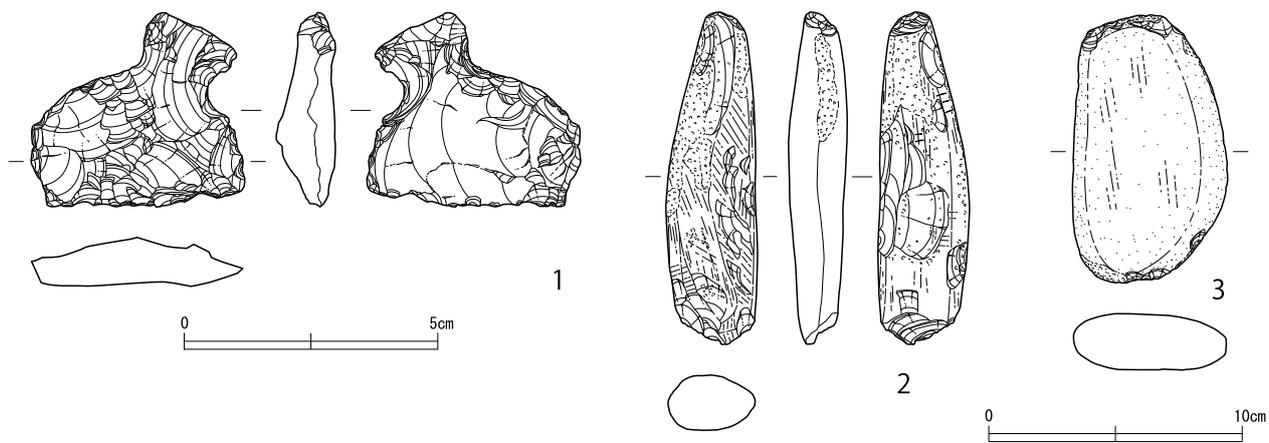
第 136 図 1 は石匙である。正面に多方向からの面的な剥離、裏面に主要剥離面を残している。調整剥離は周縁的であるが、粗い。摘み部分は両側から抉りを入れている。刃部の調整は正面に顕著で、裏面は使用時の剥離の可能性もある。2 は乳棒形の磨製石斧で、未成品である。縦方向、斜方向の磨削が施されるが、随所に形状調整の面的剥離や敲打痕が見られる。3 は敲石で、自然石の形状を残す。先端部と基部に強い敲打痕、両面の平坦部に擦痕が認められる。

第 74 号住居跡出土石器 (第 137・138 図)

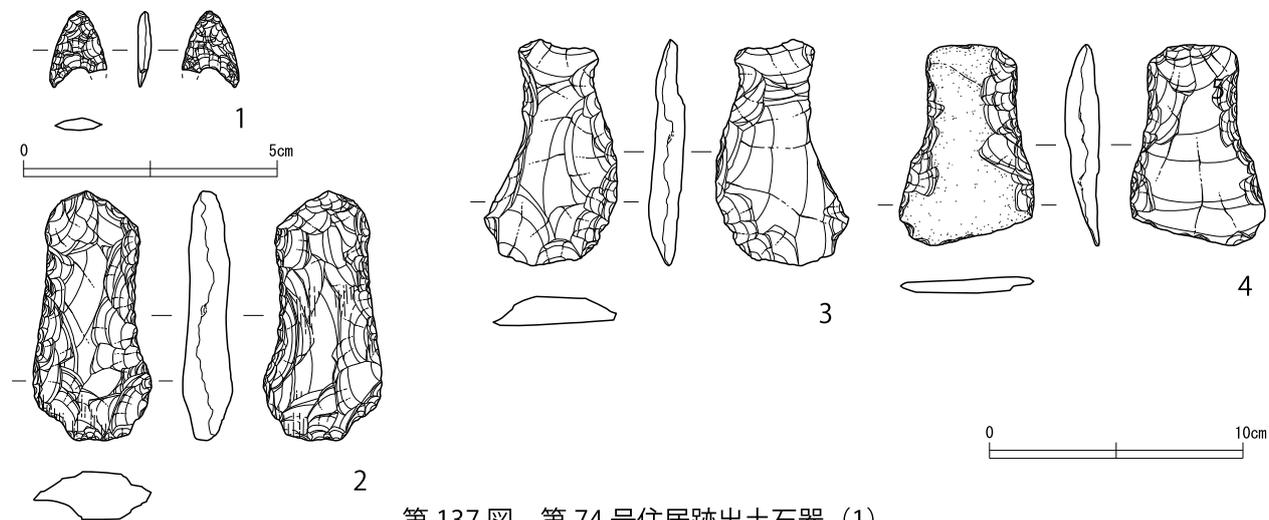
第 137 図 1 は小形の石鏃である。凹基無茎で、右脚部を欠く。両面とも、周縁的な調整剥離が見られる。2～4 は打製石斧である。2 は短冊形で、わずかに湾曲する。両面に主要剥離面を残し、その周囲には多方向からの面的剥離が見られる。調整剥離は両側縁から基部に顕著である。刃部は粗い作りで、丸刃に近い。3 は鉞様の形状を呈する。両面に主要剥離面を一部を残している。調整剥離は大きめで偏りが見られ



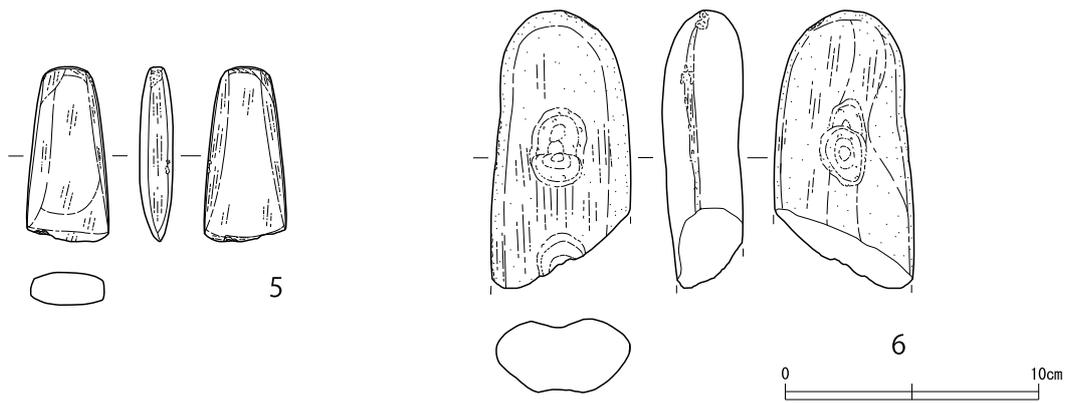
第 135 图 第 70~72 号住居迹出土石器



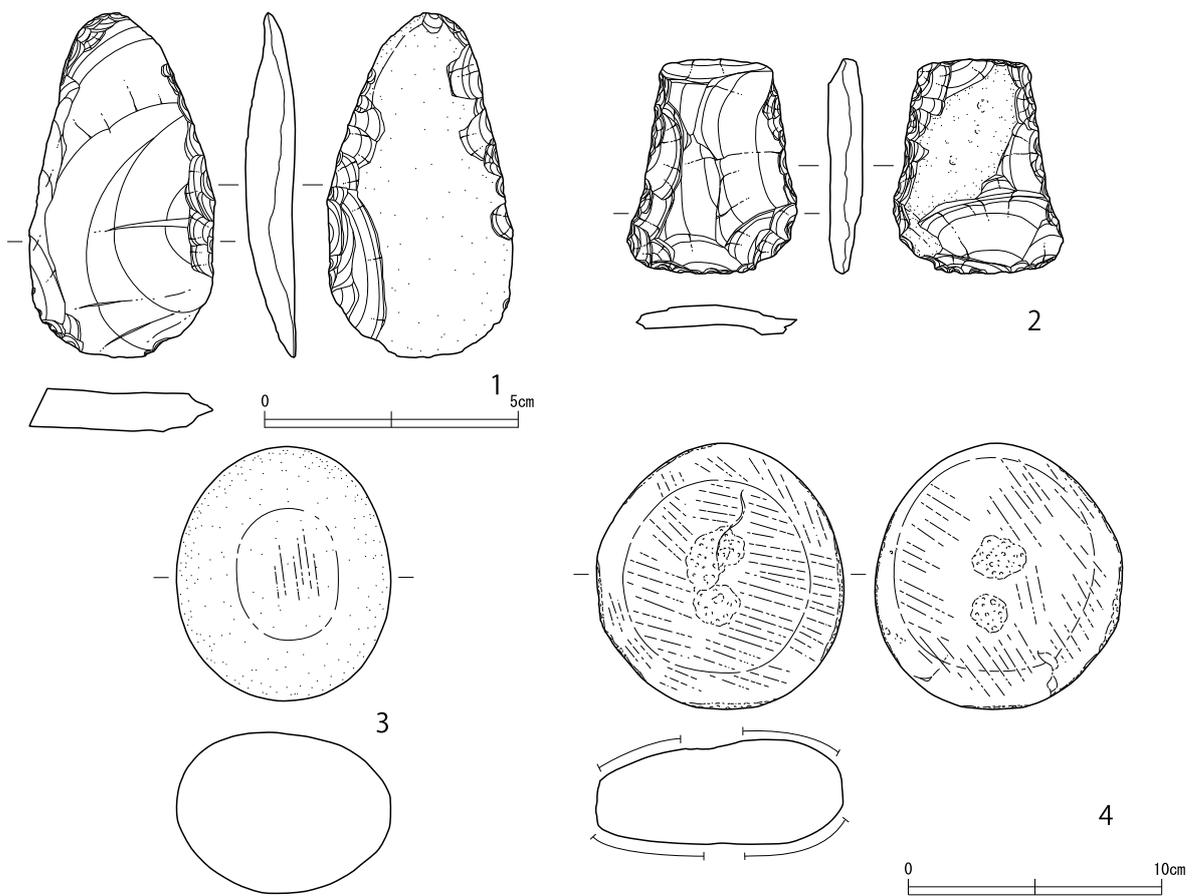
第 136 图 第 73 号住居迹出土石器



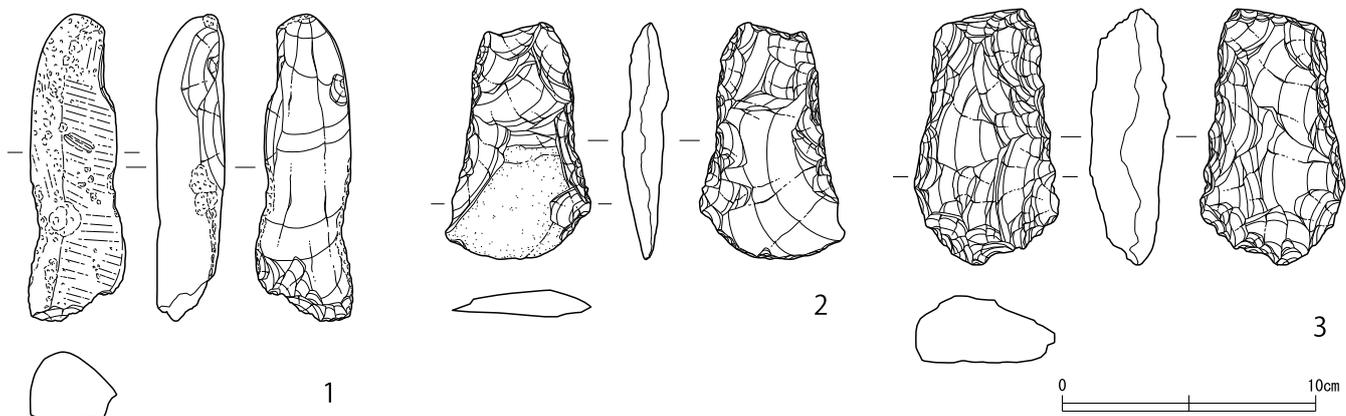
第 137 图 第 74 号住居迹出土石器 (1)



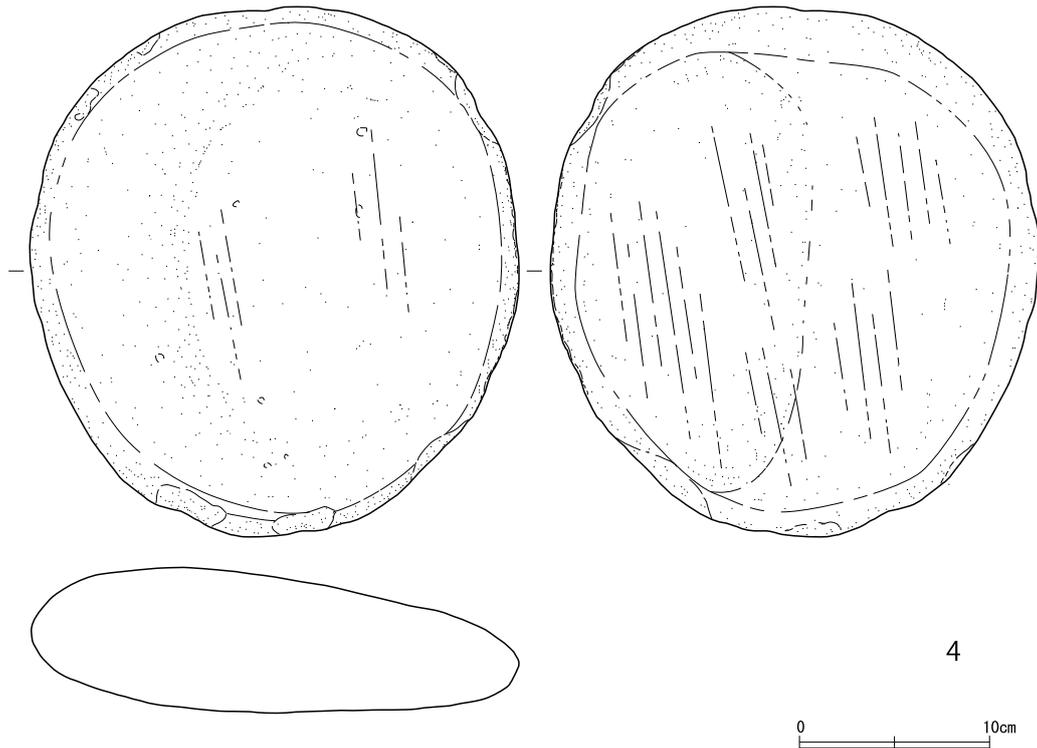
第 138 图 第 74 号住居跡出土石器 (2)



第 139 图 第 2 号性格不明遺構出土石器



第 140 图 土壤出土石器 (1)



第 141 図 土壌出土石器 (2)

る。刃部形状は丸刃。4は撥形を呈する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残している。調整剥離は主として両側縁に施す。刃部は平刃で、やや斜位。正面は自然面を無加工使用している。第 138 図 5 は定角型の磨製石斧である。刃部の一部を欠く。丁寧な作りで、両側縁は面取りがなされている。6 は敲石である。長楕円の自然石を素材とする。両面の平坦部に擦痕と凹み、側縁には周縁的に敲打痕を残す。

第 2 号性格不明遺構出土石器 (第 139 図)

第 139 図 1 は搔・削器である。撥形を呈し、正面に主要剥離面、裏面に自然面を大きく残す。調整剥離は中央から基部にかけて粗く施される。刃部は、ほぼ無加工である。2 は打製石斧で、撥形を呈する。基部を欠損する。正面に主要剥離面の一部、裏面に自然面を残している。両側縁からの面的剥離で形状を作り出し、粗い調整剥離を周縁的に施す。刃部は丸みを帯びた平刃で、両面剥離で作出されている。3 は磨石で、円形の自然石を無加工で使用。正面に擦痕を残す。4 は敲石で、円形の自然石を使用。両面の平坦部に 2箇所凹みを有する。平坦部と肩部に擦痕があり、側縁には、全周的に敲打痕が見られる。

土壌出土石器 (第 140・141 図)

第 140 図 1 は第 22 号土壌から出土。磨製石斧の未成品と思われる。正面に横位、斜位の擦痕と敲打痕が見られ、裏面には主要剥離面を残す。先端に形状調整の剥離が見られる。2 は第 44 号土壌から出土した打製石斧で、撥形を呈する。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残す。基部と両側縁に面的剥離を施した後、側縁部に調整剥離を加える。刃部は丸刃で、ほぼ無加工。3 と第 141 図 4 は第 61 号土壌から出土した。3 は短冊形の打製石斧で、両面ともに多方向からの剥離が見られる。調整剥離は両側縁に施されるが、裏面に顕著である。刃部は丸刃だが、形状に偏りがある。両面剥離で作出されている。第 141 図 4 は石皿である。大形の円形自然石を使用している。形状調整のためか周縁的に敲打が施され、両面に使用時の擦痕が認められる。

第1表 出土石器属性表(1)

図版番号	遺構番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
第108図1	SJ-37・38	石鏃	2.5	1.9	0.6	2.2	チャート	
第108図2	SJ-37・38	石鏃	2.7	(2.1)	0.5	1.8	チャート	左脚部欠損
第108図3	SJ-37・38	打製石斧	9.1	5.0	1.4	60	砂岩	
第108図4	SJ-37・38	打製石斧	11.5	7.1	2.2	172	ホルンフェルス	
第109図1	SJ-39	打製石斧	9.9	3.7	1.9	90	緑泥片岩	
第109図2	SJ-39	敲石	(13.2)	6.4	2.9	364	緑泥片岩	
第110図1	SJ-40	石鏃	2.8	2.3	0.7	3.8	チャート	
第110図2	SJ-40	打製石斧	11.4	4.4	3.0	166	砂岩	刃部に擦痕あり
第110図3	SJ-40	打製石斧	10.8	4.9	2.3	121	ホルンフェルス	
第110図4	SJ-40	打製石斧	11.6	6.4	2.3	140	砂岩	
第110図5	SJ-40	敲石	14.6	7.5	4.2	556	砂岩	
第111図1	SJ-41	石鏃	2.6	1.8	0.4	1.5	チャート	
第111図2	SJ-41	石鏃	(2.2)	1.6	0.4	1.0	チャート	先端部欠損
第111図3	SJ-41	搔・削器	3.8	4.6	1.3	23.5	チャート	
第111図4	SJ-41	打製石斧	8.8	6.3	2.1	123	ホルンフェルス	
第111図5	SJ-41	敲石	13.8	(8.0)	3.4	566	閃緑岩	
第112図1	SJ-44	打製石斧	10.1	4.4	2.1	132	緑色岩	正面に敲打痕顕著 刃部に擦痕あり
第112図2	SJ-44	敲石	10.5	9.0	2.2	288	砂岩	
第113図1	SJ-46	石鏃	2.8	1.7	0.4	1.2	赤チャート	
第113図2	SJ-46	搔・削器	4.4	2.2	0.7	5.6	チャート	
第114図3	SJ-46	打製石斧	(10.2)	7.2	3.0	152	ホルンフェルス	刃部と基部の一部欠損
第114図4	SJ-46	敲石	16.5	7.1	3.8	642	砂岩	
第115図1	SJ-48	打製石斧	10.6	4.9	1.5	90	頁岩	刃部から中央に擦痕
第115図2	SJ-48	打製石斧	9.8	4.6	1.5	81	頁岩	
第115図3	SJ-48	打製石斧	13.5	6.6	2.6	260	ホルンフェルス	
第115図4	SJ-48	磨石	13.6	7.7	3.6	620	緑色岩	
第115図5	SJ-48	石皿	(20.6)	(15.3)	4.6	2214	緑泥片岩	被熱痕跡あり
第116図1	SJ-49	打製石斧	12.1	4.9	1.9	103	ホルンフェルス	
第116図2	SJ-49	凹石	(8.8)	(6.6)	1.6	116	緑泥片岩	石皿破片
第116図3	SJ-49	敲石	14.1	5.3	3.8	331	砂岩	
第117図1	SJ-51	石鏃	2.5	(1.5)	0.4	0.8	チャート	右脚部欠損
第117図2	SJ-51	打製石斧	(10.5)	6.7	1.9	135	ホルンフェルス	基部一部欠損
第117図3	SJ-52	磨石	8.8	5.9	4.0	294	砂岩	
第118図1	SJ-54	打製石斧	9.9	5.1	2.5	155	ホルンフェルス	
第118図2	SJ-54	打製石斧	9.9	3.5	1.7	67	頁岩	
第118図3	SJ-54	打製石斧	10.9	4.5	2.0	113	ホルンフェルス	
第118図4	SJ-54	打製石斧	10.3	5.0	1.7	91	ホルンフェルス	刃部に擦痕あり
第118図5	SJ-54	打製石斧	(8.4)	5.2	2.0	78	ホルンフェルス	刃部と基部欠損
第118図6	SJ-54	打製石斧	8.7	4.8	1.6	70	泥岩	
第118図7	SJ-54	打製石斧	7.6	4.1	2.0	74	ホルンフェルス	
第119図8	SJ-54	打製石斧	(10.1)	6.1	1.7	100	ホルンフェルス	基部欠損
第119図9	SJ-54	打製石斧	(12.6)	5.6	2.9	228	砂岩	基部一部欠損
第119図10	SJ-54	打製石斧	(13.2)	6.9	3.1	401	ホルンフェルス	基部一部欠損
第119図11	SJ-54	磨製石斧	(13.5)	5.6	3.6	264	緑泥片岩	刃部と基部の一部欠損 再生中?
第119図12	SJ-54	磨石	7.2	6.6	5.3	323	砂岩	
第120図1	SJ-55	石鏃	(1.7)	1.3	0.2	0.8	黒曜石	先端部欠損
第120図2	SJ-55	石鏃	1.8	(1.5)	0.3	0.8	チャート	左脚部先端欠損
第120図3	SJ-55	石鏃	1.5	(1.7)	0.5	0.7	黒曜石	左脚部欠損?
第120図4	SJ-55	石鏃	2.7	(1.5)	0.4	0.8	チャート	右脚部欠損
第120図5	SJ-55	石鏃	1.7	(1.0)	0.2	0.4	黒曜石	右脚部先端欠損
第120図6	SJ-55	打製石斧	(11.0)	5.1	2.1	155	砂岩	基部一部欠損
第120図7	SJ-55	打製石斧	10.0	4.6	1.6	78	砂岩	
第120図8	SJ-55	打製石斧	(10.5)	5.2	2.1	133	砂岩	基部欠損

第2表 出土石器属性表(2)

図版番号	遺構番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
第120図9	SJ-55	打製石斧	(9.9)	4.1	1.6	67	砂岩	基部欠損
第120図10	SJ-55	打製石斧	8.9	4.1	1.5	63	ひん岩?	刃部一部欠損
第120図11	SJ-55	打製石斧	(8.0)	4.3	1.4	61	ホルンフェルス	基部欠損
第121図12	SJ-55	打製石斧	11.1	5.3	1.7	109	ホルンフェルス	
第121図13	SJ-55	打製石斧	9.8	4.8	2.0	96	ホルンフェルス	
第121図14	SJ-55	打製石斧	11.1	5.4	2.1	151	砂岩	刃部に擦痕あり
第121図15	SJ-55	打製石斧	12.5	6.7	2.6	205	ホルンフェルス	
第121図16	SJ-55	打製石斧	(9.9)	4.7	2.4	119	ホルンフェルス	基部一部欠損
第121図17	SJ-55	打製石斧	8.0	5.0	0.9	36	砂岩	
第121図18	SJ-55	打製石斧	(10.9)	6.8	1.9	133	砂岩	基部一部欠損
第121図19	SJ-55	打製石斧	8.0	5.8	2.1	99	ホルンフェルス	
第121図20	SJ-55	打製石斧	8.7	5.2	2.0	78	ホルンフェルス	
第121図21	SJ-55	磨製石斧	(10.8)	5.9	3.5	372	砂岩	基部欠損 正面に剥離 再生中?
第121図22	SJ-55	磨製石斧	9.3	4.6	2.6	168	透閃石?	刃部両面に剥離と敲打痕 再生中?
第121図23	SJ-55	敲石	13.6	5.5	2.7	214	砂岩	
第121図24	SJ-55	敲石	(21.2)	(13.8)	6.3	2025	安山岩	被熱痕跡あり
第122図25	SJ-55	石皿	(27.2)	(13.4)	4.9	1860	緑泥片岩	被熱痕跡あり
第122図26	SJ-55	石皿	(42.9)	(15.2)	4.9	3166	緑泥片岩	
第123図1	SJ-56	石鏃	3.0	2.3	0.4	2.7	チャート	
第123図2	SJ-56	打製石斧	10.2	4.0	1.8	75	ホルンフェルス	刃部脇一部欠損
第123図3	SJ-56	打製石斧	(9.7)	5.2	2.1	91	ホルンフェルス	基部欠損
第123図4	SJ-56	打製石斧	9.1	5.0	1.4	69	ホルンフェルス	
第123図5	SJ-56	打製石斧	13.1	6.2	2.4	231	砂岩	
第123図6	SJ-56	打製石斧	(16.2)	6.3	3.0	221	ホルンフェルス	基部一部欠損
第124図7	SJ-56	打製石斧	9.2	6.2	1.8	107	泥岩	刃部に擦痕あり
第124図8	SJ-56	敲石	15.0	10.3	4.1	982	安山岩	
第124図9	SJ-56	石皿	(25.6)	(15.7)	7.2	3422	閃緑岩	被熱痕跡あり
第125図1	SJ-58	石鏃	3.2	1.9	0.3	1.7	チャート	
第125図2	SJ-58	打製石斧	8.0	5.1	1.6	72	泥岩	
第125図3	SJ-58	打製石斧	(8.1)	4.9	1.2	67	緑色岩	基部欠損 刃部に擦痕あり
第126図1	SJ-59	打製石斧	13.2	6.7	2.1	214	砂岩	
第126図2	SJ-60	打製石斧	8.5	4.7	1.4	57	泥岩	
第126図3	SJ-60	打製石斧	11.1	5.7	2.5	148	泥岩	刃部に擦痕あり
第126図4	SJ-60	磨製石斧	(6.5)	4.3	2.9	111	凝灰岩	中央から刃部欠損
第127図1	SJ-61	石鏃	2.8	1.4	0.6	1.7	チャート	
第127図2	SJ-61	打製石斧	9.6	5.1	1.9	95	ホルンフェルス	
第127図3	SJ-62	搔・削器	4.2	4.9	1.2	26.5	チャート	
第127図4	SJ-62	打製石斧	(8.7)	4.5	2.4	100	ホルンフェルス	基部欠損
第127図5	SJ-62	打製石斧	9.6	4.8	2.0	97	ホルンフェルス	
第127図6	SJ-62	磨製石斧	10.9	4.5	2.6	188	砂岩	刃部に敲打痕 再生中?
第127図7	SJ-62	敲石	11.5	7.6	4.6	718	緑泥片岩	
第128図1	SJ-63	石鏃	2.2	1.5	0.3	1.3	チャート	
第128図2	SJ-63	石鏃	(1.6)	(0.9)	0.3	0.7	黒曜石	基部欠損
第128図3	SJ-63	石鏃	(1.8)	1.5	0.3	0.8	黒曜石	先端部欠損
第128図4	SJ-63	石鏃	(1.5)	(1.8)	0.3	0.8	黒曜石	先端部と左脚部先端欠損
第128図5	SJ-63	打製石斧	(10.1)	6.1	2.3	153	泥岩	基部一部欠損
第128図6	SJ-63	打製石斧	(11.2)	4.6	1.5	76	泥岩	刃部一部欠損?
第128図7	SJ-63	打製石斧	8.9	5.5	1.5	76	泥岩	刃部に擦痕あり
第128図8	SJ-63	打製石斧	(9.5)	5.7	2.0	101	ホルンフェルス	基部一部欠損
第128図9	SJ-63	打製石斧	7.9	4.9	1.2	47	ホルンフェルス	
第128図10	SJ-63	打製石斧	(8.7)	5.0	1.2	51	泥岩	基部欠損
第129図11	SJ-63	打製石斧	11.1	6.6	2.8	157	泥岩	
第129図12	SJ-63	打製石斧	9.6	6.5	1.9	101	ホルンフェルス	

第3表 出土石器属性表(3)

図版番号	遺構番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
第129図13	S J-63	打製石斧	11.7	7.0	2.7	224	ホルンフェルス	
第129図14	S J-63	磨石	8.9	6.6	4.3	410	輝緑岩	
第129図15	S J-63	敲石	19.0	12.1	5.0	1552	安山岩	
第129図16	S J-63	石皿	(38.3)	(17.9)	5.4	3136	緑泥片岩	中央に孔あり
第129図17	S J-63	石皿	(19.7)	(20.7)	5.0	3370	緑泥片岩	
第130図1	S J-64	石鏃	(1.6)	1.3	0.4	0.8	黒曜石	基部欠損
第130図2	S J-64	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.9	チャート	
第130図3	S J-64	打製石斧	8.6	3.7	2.1	70	泥岩	
第130図4	S J-64	磨製石斧	(9.6)	4.9	3.9	257	安山岩	刃部、基部欠損 再生中?
第130図5	S J-64	磨製石斧	(9.4)	4.8	3.5	241	安山岩	刃部、基部欠損 再生中?
第130図6	S J-64	敲石	14.2	8.3	5.7	974	閃緑岩	
第130図7	S J-64	石皿	35.8	34.4	10.3	16025	閃緑岩	
第131図1	S J-65	打製石斧	(10.8)	5.6	1.7	123	ホルンフェルス	基部一部欠損
第131図2	S J-65	打製石斧	7.2	3.9	1.3	45	泥岩	
第131図3	S J-65	打製石斧	(10.5)	4.9	1.4	73	ホルンフェルス	基部欠損
第131図4	S J-65	打製石斧	10.5	4.8	1.3	82	頁岩	刃部から中央に擦痕あり
第131図5	S J-65	打製石斧	10.0	4.2	1.4	58	泥岩	
第131図6	S J-65	打製石斧	(9.4)	4.1	1.8	69	砂岩	基部一部欠損
第132図1	S J-66	石鏃	(1.2)	1.3	0.3	0.4	黒曜石	先端部欠損
第132図2	S J-66	打製石斧	9.7	5.5	1.6	104	ホルンフェルス	
第132図3	S J-66	打製石斧	9.4	5.6	2.0	101	頁岩	
第132図4	S J-66	磨製石斧	(15.9)	3.0	2.1	176	頁岩	刃部欠損 再生中?
第133図1	S J-67	石鏃	4.1	3.0	0.9	11.3	チャート	未成品?
第133図2	S J-67	打製石斧	9.6	4.7	1.8	85	砂岩(ホルンフェルス?)	基部一部欠損
第133図3	S J-67	打製石斧	10.7	3.7	1.3	53	頁岩	刃部と基部に擦痕あり
第134図4	S J-67	打製石斧	9.9	5.8	1.7	110	砂岩	
第134図5	S J-67	打製石斧	(10.3)	5.5	2.4	134	頁岩	基部一部欠損
第134図6	S J-67	磨製石斧	(10.8)	3.9	2.0	100	緑泥片岩	裏面に剥離顕著 再生中?
第134図7	S J-67	石皿	30.2	24.7	4.1	3432	緑泥片岩	中央に孔あり
第134図8	S J-67	石皿	(15.6)	(22.0)	9.2	4476	閃緑岩	
第135図1	S J-70	搔・削器	4.0	2.8	0.8	8.5	チャート	
第135図2	S J-70	打製石斧	(10.0)	3.8	1.4	53	ホルンフェルス	基部一部欠損
第135図3	S J-71	打製石斧	(7.8)	4.0	1.7	57	泥岩	基部一部欠損
第135図4	S J-71	打製石斧	8.1	5.8	2.1	93	頁岩	
第135図5	S J-72	搔・削器	4.2	3.2	1.1	13.3	チャート	
第135図6	S J-72	磨製石斧	11.5	5.0	2.4	228	凝灰岩	刃部に刃毀れ?
第136図1	S J-73	石匙	3.9	4.2	1.2	16.7	チャート	
第136図2	S J-73	磨製石斧	(13.2)	3.6	2.3	166	緑泥片岩	剥離と敲打痕顕著 再生中?
第136図3	S J-73	敲石	10.7	6.2	2.6	242	安山岩	
第137図1	S J-74	石鏃	1.5	(1.1)	0.3	0.7	黒曜石	右脚部欠損
第137図2	S J-74	打製石斧	10.0	4.7	2.0	95	頁岩	
第137図3	S J-74	打製石斧	9.0	5.3	1.5	58	ホルンフェルス	
第137図4	S J-74	打製石斧	8.0	5.3	1.4	55	ホルンフェルス	
第138図5	S J-74	磨製石斧	7.0	3.3	1.3	58	砂岩	刃部に刃毀れ?
第138図6	S J-74	敲石	11.1	5.5	3.2	297	緑色岩	
第139図1	S X-2	搔・削器	6.9	3.7	1.0	27.0	泥岩	
第139図2	S X-2	打製石斧	8.6	6.7	1.4	90	頁岩	
第139図3	S X-2	磨石	10.2	8.5	6.4	758	砂岩	
第139図4	S X-2	敲石	10.6	9.8	4.4	621	砂岩	
第140図1	S K-22	磨製石斧	(12.2)	3.9	2.7	186	緑泥片岩	剥離と敲打痕顕著 再生中?
第140図2	S K-44	打製石斧	9.4	5.8	1.8	87	ホルンフェルス	
第140図3	S K-61	打製石斧	10.2	5.7	3.2	210	ホルンフェルス	
第141図4	S K-61	石皿	27.8	25.5	7.7	7728	安山岩	

土製品

出土土製品には土製円盤と耳飾がある。土製円盤は遺構内外より 68 点が出土し、内 45 点が深鉢、23 点が浅鉢の破片を利用している。5 点は胎土に繊維を含むため前期のものと思われるが、他は中期の所産と考えられる。隆帯、沈線による文様を残すものもある。地文は撚糸 L、無節 R・L、単節 RL・LR、条線が見られる。耳飾は遺構覆土内から 1 点出土している。

第 44 号住居跡出土土製品 (第 142 図 1)

第 142 図 1 は浅鉢破片を利用した土製円盤である。形状はやや不整形。正面から斜方向に擦痕が認められ、断面形は台形を呈する。

第 46 号住居跡出土土製品 (第 142 図 2)

2 は浅鉢破片利用の土製円盤である。形状はやや不整形。周縁の擦痕は斜方向で、断面形は台形を呈する。

第 52 号住居跡出土土製品 (第 142 図 3～5)

3～5 は、いずれも土製円盤である。3 は深鉢の破片を利用したものである。隆帯上に刻目を施した、渦巻文の一部を残す。周縁の擦痕は斜方向で、断面形は台形を呈する。4 は浅鉢の破片で、やや不整形。輪積み痕が認められる。断面形は長方形。5 も浅鉢破片を利用している。断面形は長方形。

第 53 号住居跡出土土製品 (第 142 図 6～8)

6～8 は、いずれも土製円盤である。6 は深鉢の胴部で、小品。周囲がよく磨られている。断面形は平行四辺形を呈する。地文は単節 RL。7 は深鉢の胴部破片で、地文に単節 RL 施文後、沈線懸垂文を施している。周縁の擦痕は粗い。8 も深鉢の胴部で、太目の沈線文が見られる。断面形はやや不整な台形。

第 55・56 号住居跡出土土製品 (第 142 図 9～18)

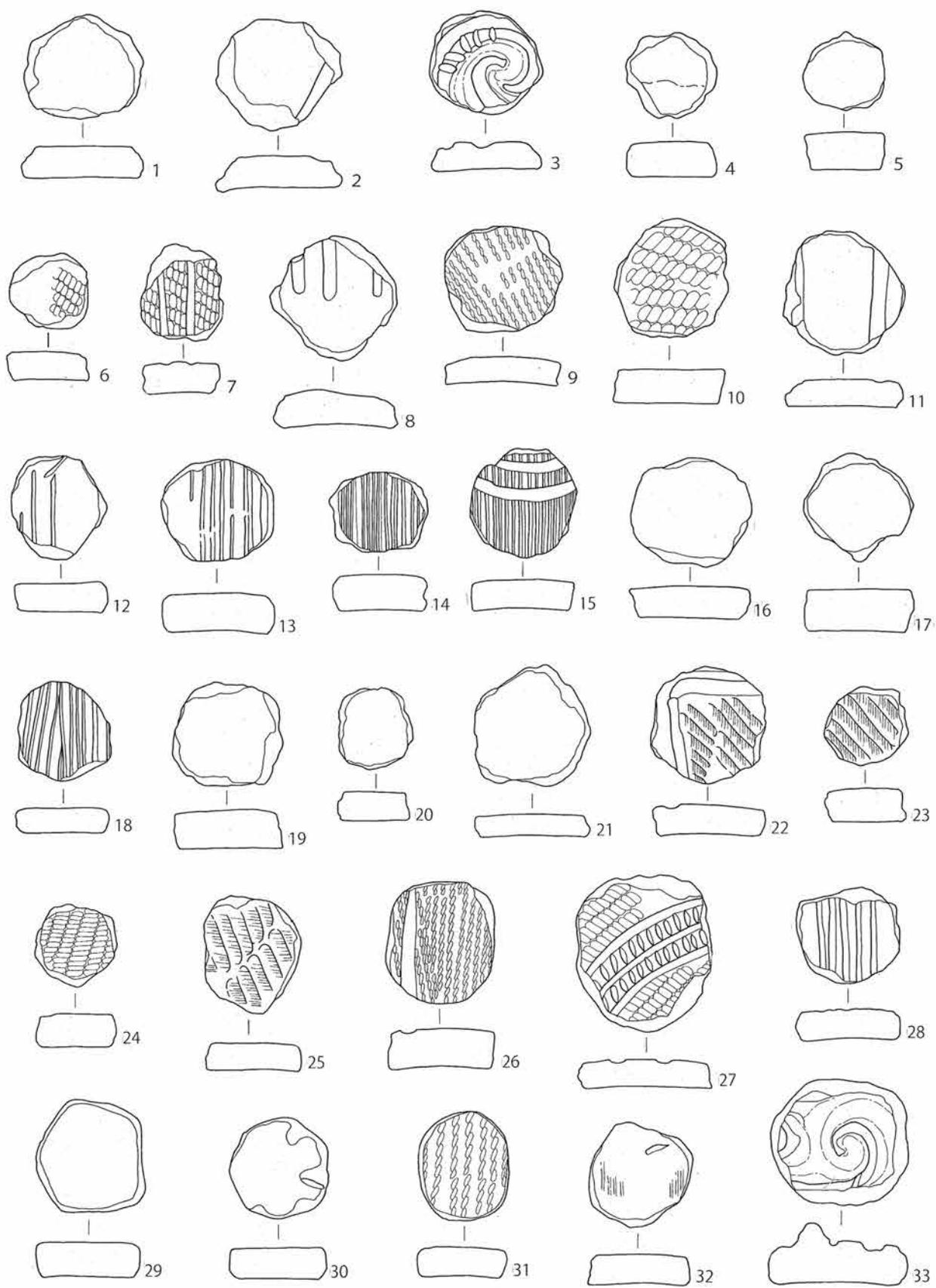
9～17 は、第 55 号住居跡出土の土製円盤。9 は深鉢の破片で、楕円形を呈する。周縁には垂直方向の擦痕が見られ、断面形は長方形。地文は撚糸 L である。10 は深鉢の破片で、不整円形を呈する。周縁に垂直方向の擦痕が認められ、断面形は平行四辺形である。地文は単節 LR。11 は深鉢の破片で、沈線懸垂文が認められる。断面形は不整台形を呈する。12～14 は地文に条線を施す。いずれも深鉢の胴部破片である。12 は不整円形を呈する。周縁の擦痕が顕著で、断面形は不整長方形を呈している。13 は不整楕円形を呈する。周縁に垂直方向の擦痕が見られる。断面形は不整長方形。14 は地文条線に弧状の沈線が見られる。周縁には垂直方向の擦痕があり、断面形は長方形を呈する。16・17 は浅鉢の破片である。16 は不整円形で、周縁に垂直方向の擦痕が入る。断面形はやや不整な長方形を呈する。17 も不整円形。周縁には粗い擦痕が見られ、断面形は長方形を呈する。18 が第 56 号住居跡出土。深鉢の胴部破片で、地文に条線を施す。縁には垂直方向の擦痕が見られる。断面形は丸みを帯びた長方形。

第 58 号住居跡出土土製品 (第 142 図 19～21)

19～21 は浅鉢の破片。いずれも土製円盤である。19 は不整円形。周縁には粗い擦痕が認められ、断面形は平行四辺形を呈する。20 は不整長方形。周縁には粗い擦痕が見られる。断面形は不整長方形。21 は不整円形を呈する。周縁に垂直方向の擦痕が見られ、断面形は平行四辺形を呈する。

第 62 号住居跡出土土製品 (第 142 図 22～24)

22～24 はいずれも深鉢の破片である。地文は 22・23 は無節 R、24 は単節 RL である。22 は不整円形。地文の他、懸垂文状の沈線が見られる。周縁に垂直方向の擦痕が入り、断面形は長方形を呈する。23 は



0 5cm

第 142 図 出土土製品 (1)

やや不整な円形。周縁に粗い擦痕が垂直方向に入る。断面形は不整長方形を呈する。24 は円形を呈する。23 とともに、使い込まれた結果として小形化したと思われる。断面形は丸みを帯びた長方形。

第 63 号住居跡出土土製品 (第 142 図 25 ~ 30)

25 ~ 30 はいずれも土製円盤である。25 ~ 28 が深鉢破片、29・30 が浅鉢の破片である。25 は不整楕円形で、地文は無節 L を施している。周縁には垂直方向の擦痕が入り、断面形は丸みを帯びた台形を呈する。26 は沈線懸垂文に、地文撚糸 L を施す。形状は整った楕円形。周縁に垂直方向の擦痕が見られ、断面形は長方形を呈している。27 は薄手の土器片で、楕円形を呈する。弧状の 3 本沈線間に刻目を入れる。地文に単節 RL を施す。周縁の擦痕は粗く、断面形はやや不整な長方形。28 は不整楕円形で、器面に集合沈線を施す。周縁に両面からの斜位の擦痕が見られ、断面形は丸みを帯びた長方形を呈する。29 は不整な方形で、無文。胎土は緻密。周縁には垂直方向の擦痕が顕著で、断面形は長方形を呈する。30 は胎土は緻密であるが、脆い。無文。周縁に垂直方向の擦痕が見られ、断面形は長方形を呈する。

第 64 号住居跡出土土製品 (第 142 図 31・32)

31・32 は、いずれも深鉢の破片を利用した土製円盤である。31 は整った楕円形で、地文に撚糸 L を施している。断面には垂直方向の擦痕が顕著で、断面形は丸みを帯びた長方形を呈している。32 は不整円形で、部分的に条線を残す。断面に斜方向の擦痕が見られ、断面形は台形を呈する。

第 65 号住居跡出土土製品 (第 142 図 33・第 143 図 34 ~ 39)

33 ~ 第 143 図 36 は深鉢、37 ~ 39 は浅鉢の破片を利用した土製円盤である。33 は口縁部破片で、渦巻文を残す。隅丸方形を呈し、断面には垂直方向の擦痕が見られる。断面形は丸みを帯びた長方形。34 は両面の一部が剥落している。沈線による文様が見られる。断面の擦痕は垂直方向である。35 は間隔の空いた単節 RL を施している。断面には垂直方向の擦痕が顕著で、断面形は丸みを帯びた長方形を呈する。36 は横位の幅広沈線文を施す。正面に剥落が見られる。断面には垂直方向の擦痕が認められ、断面形は長方形を呈する。37 は不整楕円形で、断面に垂直方向の擦痕が見られる。断面形は長方形を呈する。38 は不整円形で、断面にやや斜位の擦痕が認められる。断面形は不整台形を呈する。39 は不整円形を呈する。断面に斜位の擦痕が見られ、断面形は台形に近い。

第 67 号住居跡出土土製品 (第 143 図 40 ~ 44)

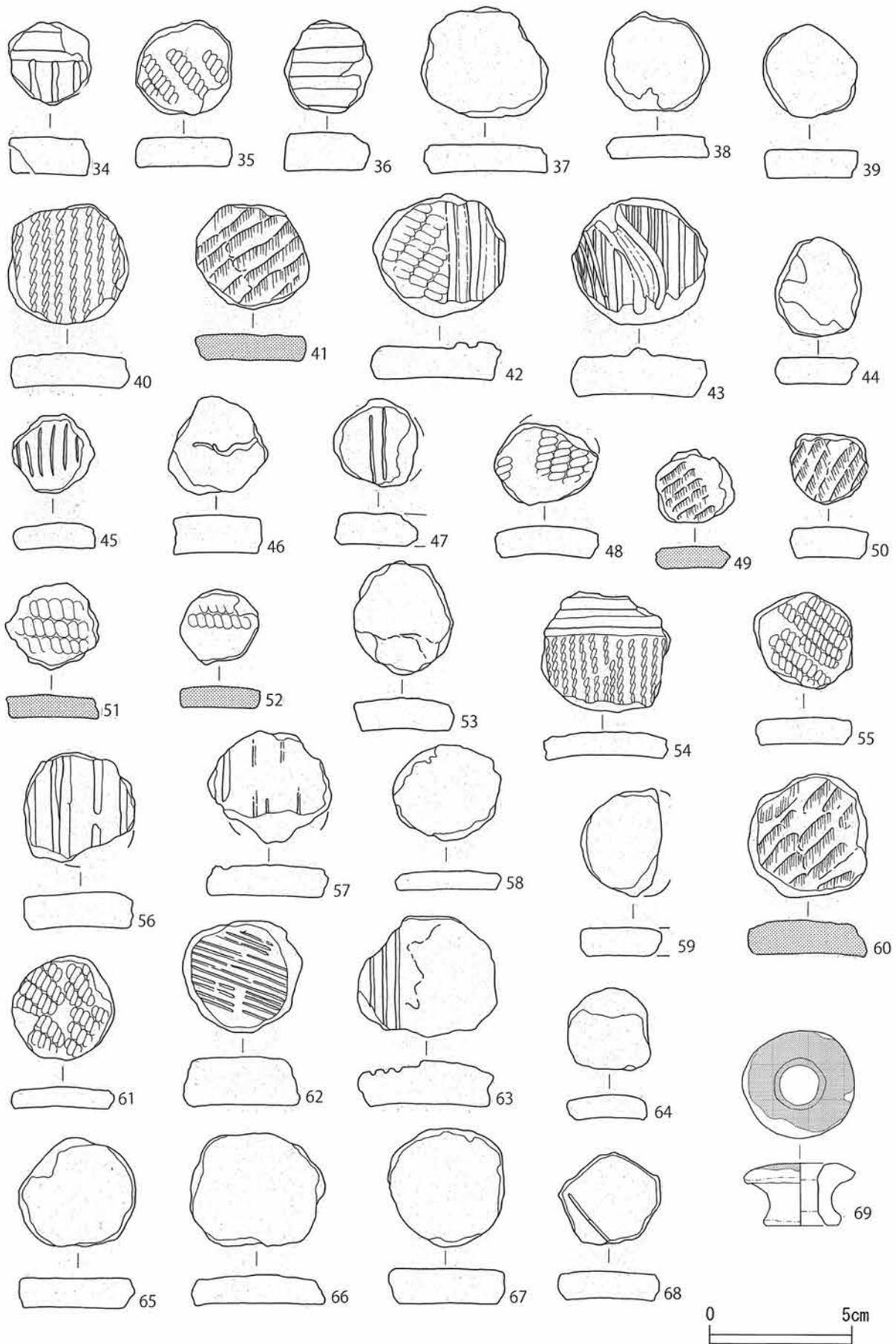
40 ~ 44 はいずれも土製円盤で、40 ~ 43 が深鉢、44 が浅鉢の破片を利用している。40 は円形で、地文に撚糸 L を施す。周縁に垂直方向の擦痕が見られ、断面形は長方形を呈する。41 は不整楕円形で、地文に無節 L を施している。胎土に繊維を含む。周縁には斜位、垂直方向の擦痕が認められ、断面形は不整台形を呈する。42 は不整円形で、地文単節 RL と沈線懸垂文を施す。周縁に垂直方向の擦痕が見られ、断面形は不整長方形を呈する。43 は円形で、地文に条線施文後、蛇行隆帯懸垂文を貼り付ける。周縁には斜位、垂直方向の擦痕が認められる。断面形は不整長方形。44 は不整楕円形で、周縁に斜位、垂直方向の擦痕が見られる。断面形は不整台形を呈している。

第 70 号住居跡出土土製品 (第 143 図 45)

45 は深鉢の破片を利用した土製円盤で、不整円形を呈し、細沈線を施す。周縁には斜方向の擦痕が見られる。断面形は不整な平行四辺形。

第 71 号住居跡出土土製品 (第 143 図 46)

46 は深鉢の破片利用の土製円盤で、不整円形。1 条の波状沈線が引かれる。周縁には垂直方向の擦痕



第143图 出土土製品(2)

が認められ、断面形は長方形を呈する。

第 72 号住居跡出土土製品 (第 143 図 47・48)

47・48 は土製円盤で、いずれも深鉢の破片である。47 は不整円形を呈するが、一部欠損する。部分的に条線を残す。周縁にやや斜方向の擦痕が見られ、断面形は略台形を呈している。48 は地文に単節 RL を施す。周縁には垂直方向の擦痕が認められる。断面形は丸みを帯びた長方形を呈する。

第 73 号住居跡出土土製品 (第 143 図 49～53)

いずれも土製円盤で、49～52 は深鉢、53 は浅鉢の破片を利用している。49・51・52 は胎土に繊維を含む。49 は地文に無節 L を施す。周縁に垂直方向の擦痕を残すが、部分的に剥落している。断面形は丸みを帯びた長方形。50 は不整円形を呈し、地文に無節 L を施す。周縁に垂直方向の擦痕が見られ、断面形は長方形を呈する。51 は不整円形で、地文に単節 RL を施している。周縁に垂直方向の擦痕が見られ、断面形は平行四辺形を呈する。52 は円形を呈し、一部に地文単節 RL が認められる。周縁に垂直方向の擦痕が見られ、断面形は長方形を呈している。53 は指頭状の圧痕を残す。周縁に斜位、垂直方向の擦痕が見られ、断面形は不整長方形を呈している。

第 74 号住居跡出土土製品 (第 143 図 54～59・69)

いずれも土製円盤で、54～57 は深鉢、58・59 は浅鉢の破片である。54 は不整円形を呈し、区画沈線と地文に捺糸 L を施している。周縁には垂直方向の擦痕が見られ、断面形は長方形。55 は円形で、単節 RL を施す。周縁にやや斜位方向の擦痕が見られ、断面形は丸みを帯びた長方形を呈する。56 はやや不整な円形で、一部欠損する。器面には縦位の沈線文を加える。周縁には垂直方向の擦痕が認められ、断面形は長方形を呈する。57 は不整円形を呈するが、約 1/3 を欠損する。懸垂沈線と地文条線を部分的に残す。加工は形状を整える程度で、断面の擦痕はほとんど見られない。58 は不整楕円形を呈する。周縁に顕著な擦痕が認められる。断面形は丸みを帯びた長方形。59 は楕円形を呈するが、約 1/3 を欠く。周縁の擦痕は垂直方向である。69 は耳飾で、床面直上から出土している。断面形は整った鼓状の形状を呈する。上面と円孔内面に赤色塗彩を施している。上部径 3.9cm、下部径 2.5cm、高さ 2.2cm を測る。

遺構外出土土製品 (第 143 図 60～68)

遺構外からは 9 点出土しており、すべて土製円盤である。60～63 は深鉢、64～68 は浅鉢の破片を利用している。60 は胎土に繊維を含む。地文に無節 L を施している。やや不整な円形を呈し、周縁には顕著な擦痕が見られる。断面形は略台形。61 は整った円形で、地文に単節 RL が施されている。周縁の擦痕が顕著で、断面形は丸みを帯びた長方形を呈する。62 は厚手の破片を利用している。不整円形で、地文には条線を施す。周縁の擦痕は正面から斜方向に入り、断面形は台形を呈する。63 は一部に条線を残す。全体形は不整楕円形を呈する。加工は形状調整のみで、周縁の擦痕はほとんど見られない。64 は一部が使用時に剥落したものと思われる。周縁の擦痕はやや斜方向で、断面形は平行四辺形を呈する。65 はやや不整な円形を呈する。周縁の擦痕は垂直方向であるが、粗い。断面形は不整長方形。66 は不整な隅丸長方形を呈する。周縁には主として斜方向の擦痕が見られ、断面形は略台形である。67 は整った円形で、周縁の擦痕が顕著である。断面形は略台形。68 は不整円形。周縁の擦痕は垂直方向を主とし、断面形は丸みを帯びた長方形を呈する。

V 考 察

はじめに

今回報告の稲荷上遺跡第6次調査では、縄文時代前期黒浜1式期の住居跡5軒、中期勝坂2a式期の住居跡1軒、加曽利EⅠ（新）～EⅢ（新）式期の住居跡25軒、時期不明7軒、単独埋葬6基等が検出され、これら遺構群に伴う多量の土器、石器が出土した。遺構に伴わない土器群も前期後半諸磯式から中期前葉勝坂1式や阿玉台Ⅰb式等が散見されるが、本章では、これらのうち中期中葉以降の出土土器群と集落構成について焦点を当て、考察を加える。土器変遷案については第144～146図に示し、実測図のスケールは1/10に統一した。作成にあたっては、鈴木保彦氏（1981）、黒尾和久氏他（1995）、金子直行氏（1996）、細田勝氏（2008）、永瀬史人氏（2008）等の編年案を参照した。

1 中期中葉土器群の変遷について

第1期

中期中葉勝坂2a式段階、新地平編年では7b期の一部と8a期に該当すると思われる。第64号住居跡出土土器があるが、遺構外からも出土例が見られるため、未調査区域に当該期の住居跡が存在する可能性がある。土器組成は、勝坂2a式と阿玉台Ⅱ（新）式で構成される。

第144図1は勝坂2a式土器で、胴下半部に重三角区画の横帯文を置く。区画隆帯脇に幅広の角押文と三角押文を沿わせ、内側に波状沈線を引く。2～4は阿玉台Ⅱ（新）式である。2の文様区画隆帯は無調整隆帯で、隆帯脇に幅広角押文を平行させ、波状沈線を充填する等、技法上1に類似する。勝坂式の強い影響が窺えるが、胴部文様帯下端が開放する点で勝坂式と異なっている。3は大型の扇状把手を持つタイプで、東関東的。2～3列の連続押圧文を隆帯脇に沿わせる。4はやや新相で、区画内に幅広の連続押圧文を施す。2・4は胎土に金雲母を含むが、東関東的な3には含まれない。

第2期

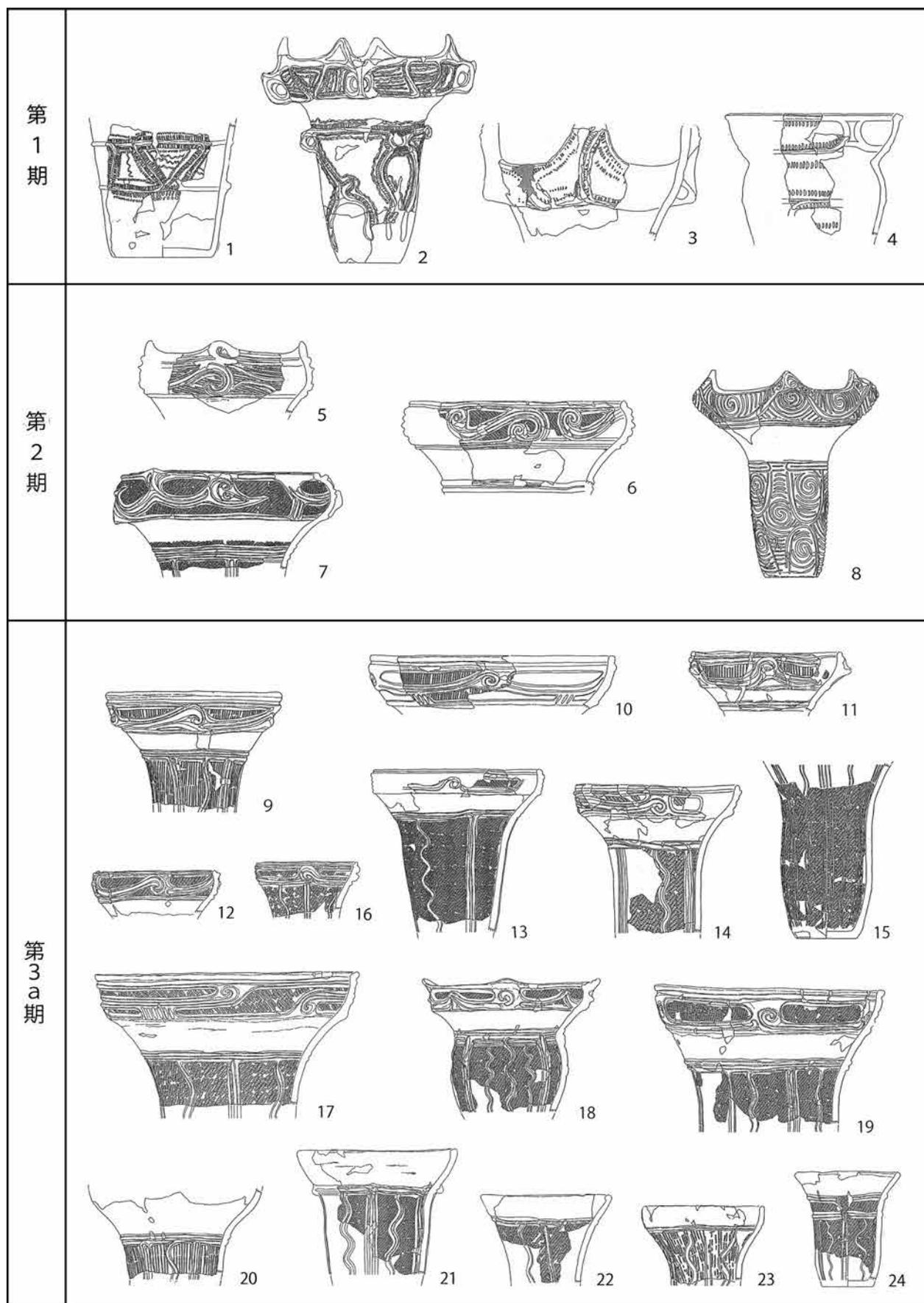
中期後半加曽利EⅠ式新段階であるが、提示できる資料は少ない。本段階の遺構は、第44・45・72号住居跡の3軒が検出されている。新地平編年では10b期に該当する。

加曽利EⅠ式系土器（5～7）の他、曾利Ⅰ式の系譜を引く渦巻重弧文土器（8）があるが、いずれも口縁部の内湾が強い器形を呈する。口縁部文様は、2本組隆帯による末端の巻が強い横S字文（6）が主体となるが、7のように大木式の影響を受けた区画文や剣先文を持つものも認められる。頸部には無文帯が定着し、下端を隆帯で区画して隆帯懸垂文を垂下させる。地文は前段階に盛行した擦糸Lの他、単節RLが多い。渦巻重弧文はこの段階で消滅するようである。この傾向は周辺の集落遺跡と共通している。

今回の調査では、当該期に一般的な箱状や板状の大型把手を持つ土器はほとんど認められない。わずかに第44・45号住居跡に破片が見られる程度である（第46図15・第47図5）。

第3a期

加曽利EⅡ古段階に該当する。新地平編年の10c期と11a期に概ね該当する。8軒の該期住居跡が検出され、出土土器も比較的多い。これらの内、第56号住居跡出土資料は連弧文土器初源段階を考える上で注目に値する。本段階は、9～24のような加曽利E系の土器群が主体となる。器形は前段階と比較



第144图 稻荷上遺跡出土土器変遷図(1)

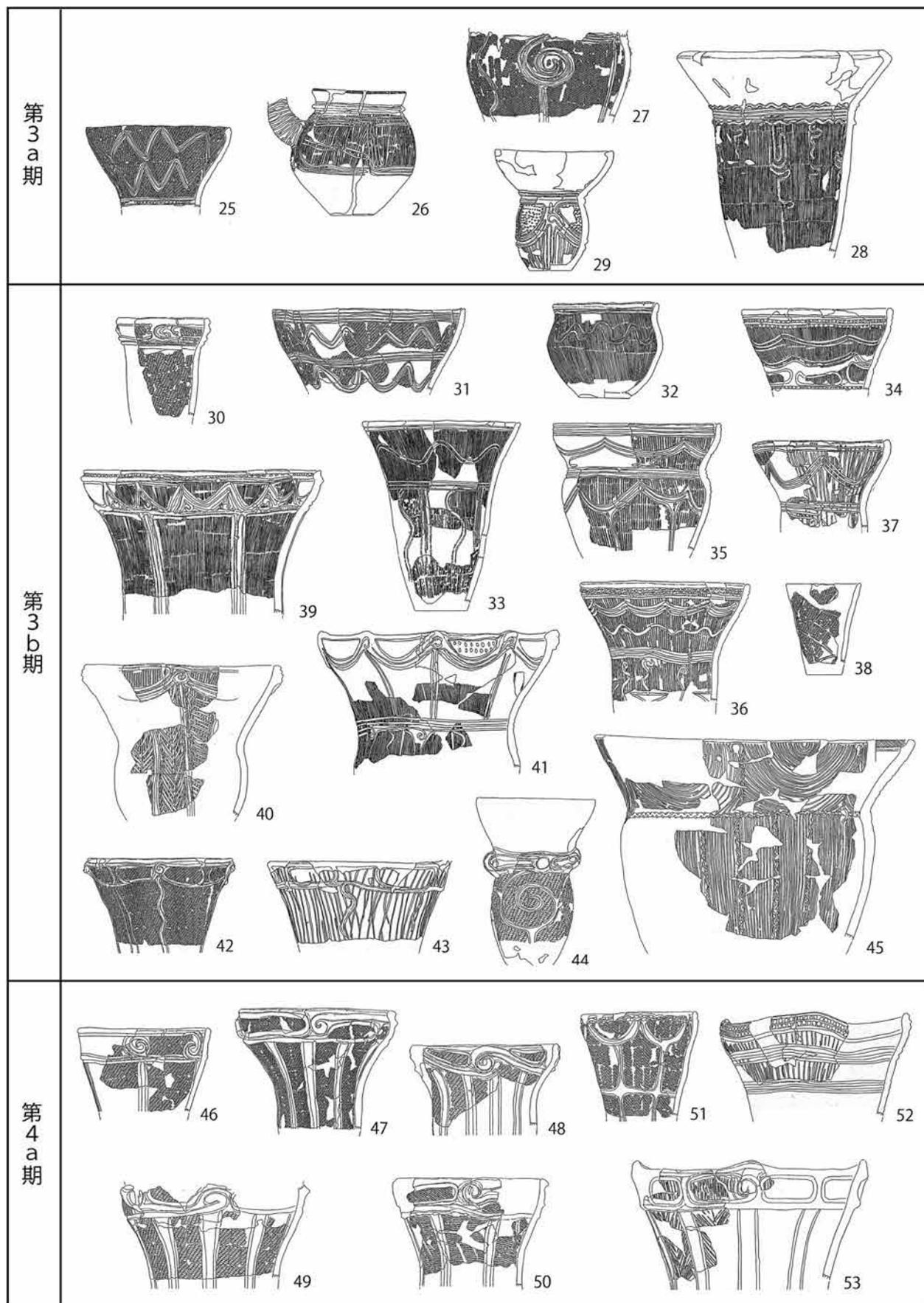
すると、口縁部は平縁が一般的で、前段階に比して湾曲が弱くなり、直立あるいは外傾する。胴部は長胴化するが、18のように中位で膨らむものもある。口縁部文様帯及び頸部無文帯は、幅狭になる傾向が認められる。口縁部文様は横S字文が弛緩し、渦巻繫ぎ弧文土器やクランク類似文の土器が出現する（9～12・16・17）。他には、14・18・19のように区画文を持つ土器も見られる。特に19は渦巻文と楕円区画の交互配置で、次段階以降に一般化する沈線主導型である。これらの土器群を俯瞰すると、口縁部文様に伝統的な隆帯主導型と平板な沈線主導型が混在する段階といえるが、換言すれば両者の交代期とすることもできよう。頸部無文帯を有するものが一般的であるが、16のようにこれを喪失したのも見受けられる。胴部文様は前段階と同様、2本隆帯と蛇行隆帯を交互に垂下させる隆帯懸垂文が主体であるが、15・16のように半裁竹管腹面による沈線懸垂文も出現する。これらは重複施文による3本沈線と、2本沈線による蛇行懸垂文の交互配置で、隆帯懸垂文を置換したものと考えられる。さらに、16は浅い半裁竹管施文具を強く押し付けることにより地文がほとんど消えている。意図的かどうかは不明であるが、磨消縄文の萌芽とも思える。地文は撚糸Lと単節縄文RLが見られる。

口縁部文様帯を持つ伝統的な土器群に加えて、本段階で増加するのが20～24のような口縁部無文の土器である。無文口縁部の形状は、わずかに内湾するもの（20・21・23）と口縁部文様帯を有する土器の頸部と同様、開くもの（22・24）がある。胴部形状は円筒形を呈する。胴部文様は口縁部下端区画文下に隆帯あるいは沈線懸垂文を垂下させるが、24のように懸垂文の上に区画文を置くものも見られる。隆帯懸垂文は2本隆帯と区画隆帯接続部に蕨状の沈線を施すもの（20）や瘤状突起を付けるもの（21）がある。沈線懸垂文のうち、23は半裁竹管腹面を強く押し付けるように引いているためか、地文がほとんど消えており、同じ第60号住居跡から出土している16に技法が共通する。同じ沈線懸垂文でも、24は半裁竹管ではなく単沈線で施している。

第145図25～29には、加曽利E式以外の系統の土器を提示した。25は初源段階の連弧文土器と思われるが、出現期としては、従来の編年案（黒尾1995・永瀬2008）を遡ることになる。弧線文類似の鋸歯状文を2段施すが、技法、モチーフは連弧文土器として定型化していない。頸部区画文様は半裁竹管の押し引きで、古い様相である。26は注口土器であるが、罌付の壺形土器に注口を付けたもので類例を見ない。口唇部の断面形状は28に類似する。地文撚糸に杵状文を半裁竹管腹面で描く。注口部の沈線も同様である。27は曾利Ⅱ式土器であるが、やや古相を呈する。第55号住居跡（旧）の屋内埋甕である。頸部の区画文様は多段の隆帯で、28に共通するが、胴部の渦巻き文と懸垂隆帯は太めで、貼付け処理もすっかりしており、28のあり方とは異なる。28はオリジナルに近い曾利Ⅱ式土器である。器形は口唇部が内屈し、胴部は円筒形を呈する。やや古相。地文は条線文で、細い粘土紐を張り付けて懸垂文を施すが、貼付け処理は曾利式流儀で、圧着が弱く剥落が目立つ。19と折り重なるように出土したもので、曾利Ⅱ式と加曽利EⅡ古段階の時間的同時性を証する興味深い資料と言える（第27図）。29は20～24と同系統の土器と思われるが、繫ぎ弧文類似の区画文内に刺突文を充填しており、折衷的である。刺突文充填は曾利Ⅱ式でも新しい要素であるため、第3b期の可能性もあるが、口縁部無文系統の土器群の出現、盛行が加曽利EⅡ古段階と考えられるため、本段階とした。次段階では加曽利E式系の土器が急激に衰退するが、25～29のような土器群にその動きの一端が窺える。

第3b期

加曽利EⅡ新段階で、新地平編年の11b・c期が該当する。加曽利E式系土器の減退期である。4軒の

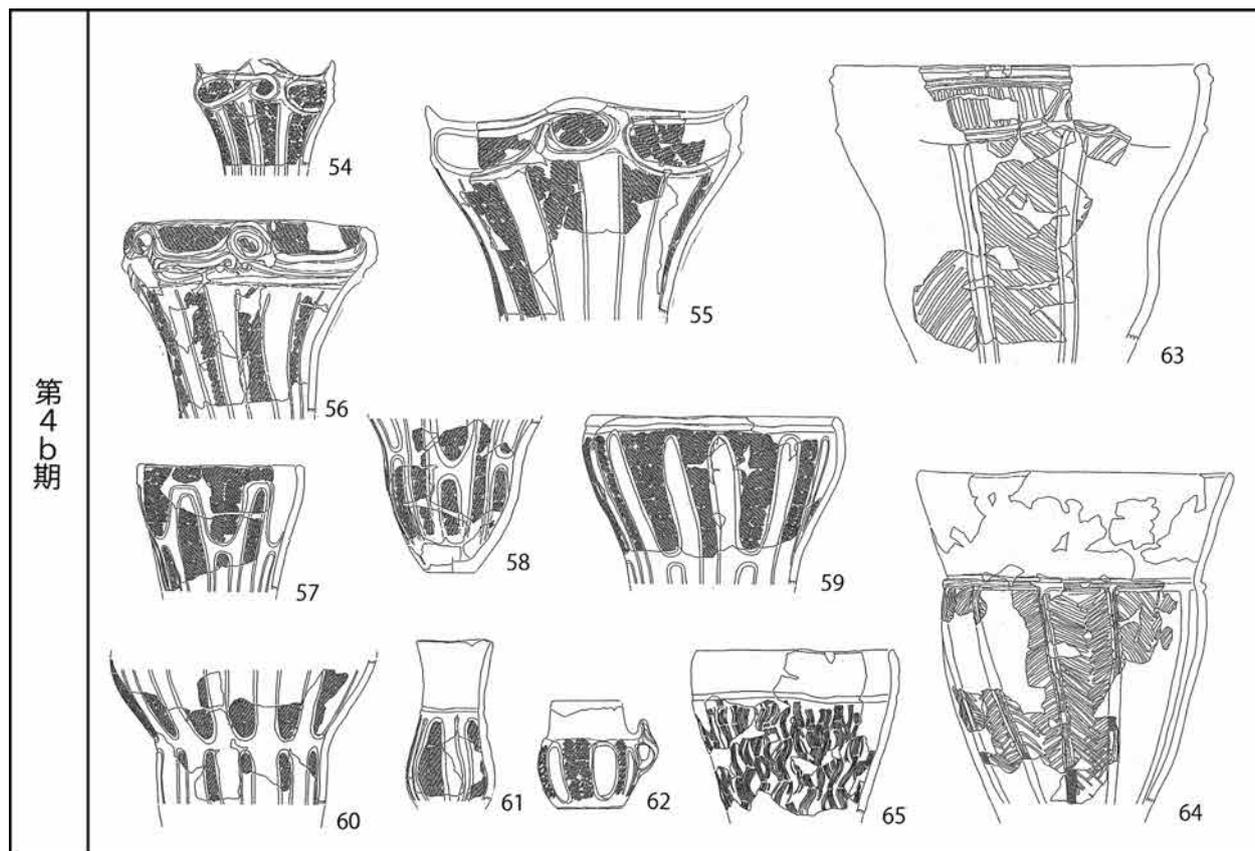


第145图 稻荷上遺跡出土土器変遷図(2)

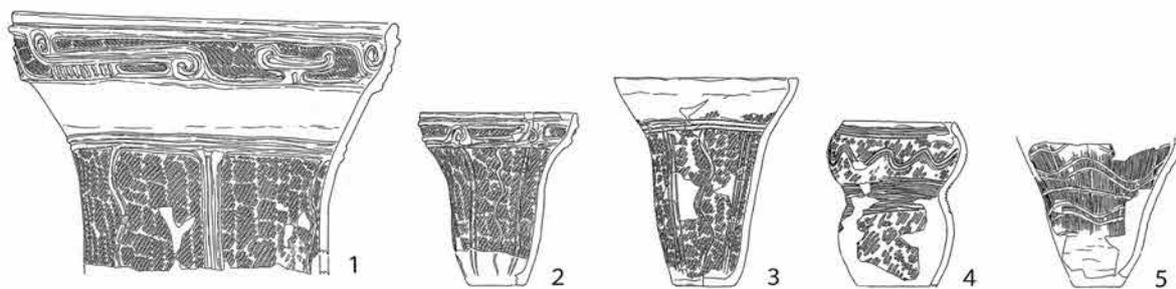
該期住居跡が検出された。軒数は少ないながら、出土土器は比較的多く、連弧文、曾利式、加曾利E式・曾利式折衷の「新戸・原山型」(第60図10・11)等バラエティーに富み、組成は非常に複雑である。30は第144図19の系譜を引く加曾利E式系の土器である。幅狭の口縁部文様は、渦巻文と楕円区画の交互配置で、頸部無文帯を欠く。胴部の懸垂文は施されない。31～37は連弧文土器である。器形は口縁部が外傾するもの(30・31・36)、直立気味のもの(34・35・37)がある。胴部形状は全体像が窺えるものは少ないが、33・36・37のように円筒形を呈するもの他、頸部の括れが強く、胴部が膨らむ所謂「重厚なプロポーション」のもの(35)があるが、稀な例では32のような鉢形も見られる。主文様は波状文(31～33)、弧線文(34・35・37)を描くもの他、両者を口頸部に施すもの(36)がある。弧線・波状文の描出技法には、半裁竹管腹面によるもの(31～33)、単沈線によるもの(34～37)が認められるが、本段階では後者が主体的になると思われる。口縁部区画文様には沈線のみもの(33・35・37)、円形刺突文(34)、交互刺突文(36)がある。後二者は本段階に増加するようである。また例外的に32のように隆帯を巡らすものも見られる。口頸部の付帯文様としては、今回報告例では、34の楕円沈線文を見るのみである。胴部は加曾利E系の懸垂文(33)、弧線文+懸垂文(35)、蕨状文+半円状沈線文(36)を施すものがある。なお、35は次段階の51の文様に引き継がれるものと思われる。38は小型の土器で、縄文地文に半裁竹管腹面で格子目状の文様を描いているが、どの型式に位置付けられるかは不明である。連弧文土器盛行期に見られるミニチュア土器の一種とも思える。該期の地文は単節RLの他、撚糸L・R、条線、集合沈線があり、他の土器群とも共通するが、条線が量的に増加するようである。39は第55号住居跡(新)の屋内埋甕で、連弧文土器と加曾利E式土器、曾利式土器の要素が混在する個体である。本段階を象徴するような土器と言えよう。口唇部に連弧文土器類似の区画文様が巡り、円形刺突文が施される。口縁部文様は、3本単沈線で鋸歯状文を施す。連続施文ではなく、上下で繋ぐ部分が多く技法的には稚拙で25に類似する。鋸歯状文内には連弧文土器の付帯文様に類似する釣針状の沈線文が施されている。頸部無文帯は無く、口縁部文様下端隆帯から2本隆帯を垂下させる。地文は条線である。他に本段階で成立し、急速に増加する折衷タイプの渦巻繋ぎ弧文土器(40・41)や、口縁部枠状区画文の土器(42・43)がある。加曾利E式系の渦巻繋ぎ弧文土器は、前段階で成立している(第144図10・11)が、本段階では口縁部文様下端区画隆帯を喪失し、渦巻部も小型化、突出する傾向が看取される。40は地文に撚糸Lを施したのちに綾杉文を施している。綾杉文は、次段階の加曾利E式・曾利式の折衷タイプの土器に多く見られるようになる。41は口縁部区画内に列点を充填し、地文に条線を施すなど、曾利式的な色彩が強い。枠状区画文の土器は、42・43ともに隆帯貼付け後の処理が甘く、技法上28のような曾利式の隆帯文に通じるものがある。44は山梨県域から関東地方西部の曾利式に散見される、小型両耳把手を口縁部無文帯直下に持つ土器である。胴部には地文縄文に大柄の渦巻文を描き、大木式の影響が認められる。渦巻文は単沈線で描かれるが、沈線間は地文をほとんど磨消しており、本段階末に磨消縄文の手法が成立していた可能性を示唆している。45は曾利Ⅱ式でも新相の大形の重弧文土器である。重弧文、胴部の沈線文ともに、半裁竹管腹面を重複施文している。

第4 a期

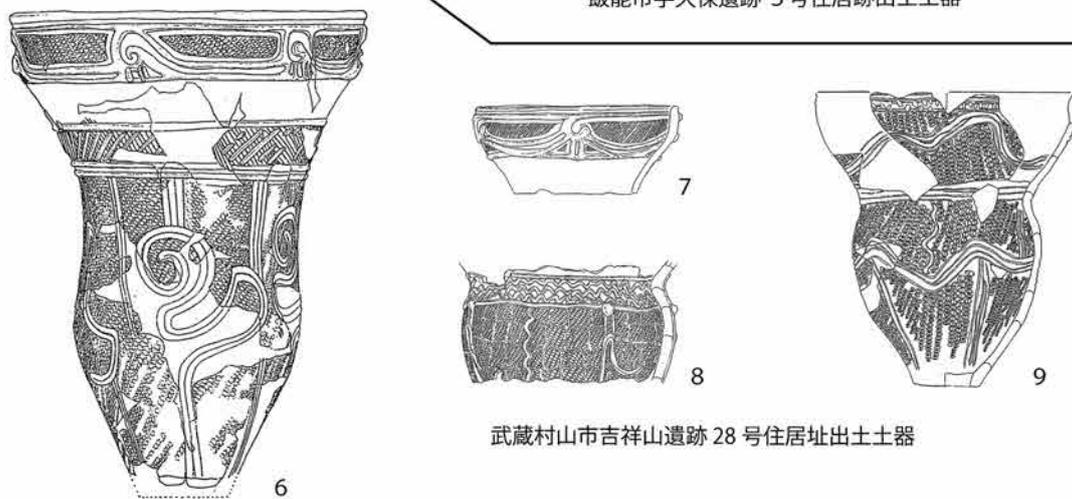
本段階は加曾利EⅢ式古段階で、新地平編年の12 a期から12 b期の一部が概ね該当する。加曾利E式系土器が復活し、連弧文土器が急激に衰退する。前段階末に発生したと思われる磨消縄文の手法が確立し、一般化する。また、加曾利E式・曾利式折衷の「新戸原山型」が増加していく。



第 146 图 稻荷上遺跡出土土器変遷図 (3)



飯能市芋久保遺跡 5号住居跡出土土器



武蔵村山市吉祥山遺跡 28号住居址出土土器

第 147 图 第 3 a 期連弧文土器出土例

当該期の加曾利 E 式系土器の深鉢は、平縁で口縁部の湾曲が弱く、直立あるいはわずかに外傾するものが多い（46～50）。胴部の器形は中位で弱く括れる。深鉢の他、第 73 図 23 のような両耳壺も出現する。口縁部文様は、渦巻文と楕円、半円等の区画文の交互配置を基調とするが、上下の入り組み具合により様相が異なる。文様描出は太い沈線で行われ、隆帯の起伏は全体的に乏しい。口縁部文様と胴部文様の境界は不明確になりつつある。胴部には単沈線により磨消懸垂文が施されるが、基本的に幅が狭い。地文は無節 L、単節 R L、0 段多条の単節 R L があり、横位、縦位、斜位施文が見られる。

連弧文土器には 51・52 があるが、前段階からの変容が著しい。51 の器形は括れが無く、直線的に開く。文様は、35 の下半部文様に類似するもので、沈線間は加曾利 E 系土器に準じて、磨消している。口縁部区画文様に新相である交互刺突文を巡らす。地文は単節 L R の縦位施文で、この段階から徐々に増加するようである。52 は上半部の弧線文が弛緩し、ほとんど平行沈線文となっている。口縁部区画文様は円形刺突文で、51 と同様新相である。53 は「新戸・原山型」で、口縁部に 4 単位の突起を有する。口縁部文様は渦巻文と楕円区画文であるが、前段階の杵状区画文土器に通じるものがある。胴部の懸垂文は他に比してやや広めで、新相と言えよう。区画内及び胴部懸垂文間には粗い集合沈線と綾杉文を充填している。

第 4 b 期

加曾利 E Ⅲ 式新段階である。新地平編年の 12 b 期の一部と 12 c 期が概ね該当する。本段階では連弧文土器が消滅し、吉井城山類が出現する。また、今回報告の事例には無いが、胴部渦巻文の梶山類も本段階に出現するものと思われる。

加曾利 E 系の口縁部文様帯土器は、口縁部の器形がやや丸みを帯び、胴部は弱く括れて底部に至る。口縁部は平縁の他、4 単位の突起を有するものが増加する。口縁部文様は前段階の渦巻文と区画文を配するタイプが継続するが、渦巻文が円形区画文に変化し、楕円区画文に連結するもの（第 146 図 54・55）や、上下の入り組みが弛緩するもの（56）が見られる。前者は口縁部文様直下の区画隆帯を喪失する。胴部には磨消懸垂文が施されるが、無文部が幅広になる。本段階に出現する連弧文土器の変化形態である吉井城山類に類する H 字状文の土器群（57～60）は、吉井城山類に一般的な蕨状文が見られない。61・62 は E Ⅲ 新段階に散見されるジョッキ型土器である。当該期の加曾利 E 式系土器の地文は、前段階では非常に多かった単節 R L が減少に転じ、単節 L R が卓越する。他に複節 R L R・L R L が見られる。また、56・62 のような充填縄文の手法も見られる。

63 は「新戸・原山型」に類する。やや古相で第 4 a 期の可能性もあるが、渦巻文が円形区画文化していると思われるため、本段階とした。64・65 は在地化した曾利式土器であるが、64 は外傾する無文口縁部直下に 1 条の区画隆帯を巡らし懸垂隆帯を貼り付け、綾杉文を充填する。65 は内湾する無文口縁部直下に 1 条の沈線を巡らし、胴部に櫛歯状施文具の蛇行条線を施す等、同じ在地化でも異なった方向性を示す。

以上、今回報告の土器群について、変遷の概要を記した。中期第 2 期以降の流れを俯瞰すると、第 3 a 期における渦巻繋ぎ弧文土器（第 144 図 10・11）の成立に連動して、連弧文土器の初源を見る（第 145 図 25）。同段階では加曾利 E 式系土器の多系統化というもう一つの傾向が看取される。第 3 b 期に加曾利 E 式系土器が衰退し、連弧文土器（31～38）が急激に増加し、渦巻繋ぎ弧文の変形（40・41）や加曾利 E 式・曾利式の折衷タイプ（39・44）が混在する複雑な組成が現出する。第 4 a 期には加曾利 E 式系土器が復活し、連弧文土器が減少する。これらのあり方は他の同時期の遺跡でも一般的と言える。

この変遷の流れの中で、多くの研究者が言及しているのが、唐突とも言える連弧文土器の出現と急増である。今回報告の土器群の中でも、第3 a期（加曽利 E II 式古段階）に位置付けた第144 図17と第145 図25が屋内埋葬と炉跡埋設土器という、ほぼ同時期と言える状態で出土している。従来の変遷観では、17は加曽利 E II 式古段階（新地平編年では10 c期）に位置付けられるが、連弧文出現期は加曽利 E II 新段階（新地平編年では11 b期）とされ、時間差が疑われる資料である。次項では25を連弧文土器の初源的な事例と仮定し、諸先学の研究を参考にして、同時期とされる出土例と比較、検討を試みたい。

2 初源段階の連弧文土器について

第145 図25は、第3 a期（加曽利 E II 式古段階）に位置付けた。口頸部に施された連弧文類似の2段の鋸歯状文は、初期の連弧文土器に多いとされる半裁竹管腹面で描かれているが、波底部を繋ぐ点で技法的には稚拙である。また、多段の弧線文の波頂部と波底部を対とするのは盛行期の連弧文土器にはほとんど見られない。口縁部区画文様は欠く。頸部の区画文様は古相である半裁竹管の押引き文で、鋸歯状文と同じ施文具を使用したと思われる。器形は口頸部が大きく開き、胴部は残存部から円筒形と推定される。同時期の第144 図20～24のような口縁部無文の加曽利 E 系土器に似る。口唇部内面には、曾利式類似の稜を有する。これらの器形、主文様のあり方、口縁部区画文様の欠如、文様の描出に選択された施文具、技法、地文等から、当該土器は連弧文土器の初源段階のものと判断した。上記は、編年上の位置付けに差異はあるが、永瀬史人氏が設定した連弧文土器編年細別模式図の1段階の要件に概ね合致すると思われる。（永瀬2008）。特に、器形や文様描出の稚拙さから同段階の土器群に加わった新たな類型、あるいは様相が確定していないものとする。なお、前段階及び同段階に定型化した連弧文土器が成立していない以上、稚拙な模倣品ではないことを付言する。

狭山市丸山遺跡第12号住居跡からは、加曽利 E II 式古段階の良好な組成が出土している（石塚2003）。この組成には、加曽利 E 式系の渦巻繋ぎ弧文土器、21 類似の口縁部無文の土器、28より若干新相と思われる頸部に籠目文を持つ曾利 II 式が見られる。連弧文土器は伴わないが、今回の事例をもって、25のような初源的連弧文土器が同段階に加わる可能性が高いことを指摘しておく。しかしながら、祖形となった文様については未だ不明と言わざるを得ない。

第144 図17は、25を本段階に位置付ける根拠となった土器で、屋内埋葬である。隆帯主導のクランク類似文の土器であるが、前述のように新地平編年で、府中市清水ヶ丘例の同種土器が10 c期に位置付けられている（黒尾1995）。筆者は、本段階を17の隆帯主導型と、19のような沈線主導型が混在する移行期と考えたが、新地平編年ではこれらを分離することにより、加曽利 E 1 式（10 c期）から E 2 式（11 a期）への変化と捉えている。この点については、簡略化の方向性として型式学的には可能性はあっても、今回の出土土器群の組み合わせの検討からは両者を分離し得る積極的な根拠は認められなかった。また、19と比較的古相である曾利 II 式の28との共伴も問題となろう。これらのあり方から、本稿では、近年の埼玉編年（金子1996他）に倣い新地平編年の10 c期と11 a期を統合し、1段階とした。本段階を総括すると、丸山遺跡第12号住居跡出土土器群のような伝統的な組成に、渦巻繋ぎ弧文土器、平板な沈線主導型の土器や口縁部無文の土器が加わり、さらに25のような定型化していない連弧文土器の初源段階の土器が類型として出現する。これらは、当該期が第3 b期に向けて大きく変化する過渡的な段階として評価できることを指摘しておきたい。

初源期の連弧文土器を伴う事例は少ないが、今回報告した第 56 号住居跡出土例の他に、第 147 図に同時期と考えられる 2 つの事例がある。第 147 図 1～5 は、飯能市芋久保遺跡第 5 号住居跡出土土器である（富元他 1991）。1 は第 144 図 17 に酷似する。2 は口縁部文様が沈線主導型に近く、頸部無文帯を欠く。胴部の懸垂文は、第 14 図 15 のように半裁竹管腹面で施され、沈線間の地文を残している。3 は口縁部無文の土器で、無文帯直下の区画沈線、懸垂文ともに 2 と同様、半裁竹管腹面で描かれている。4 は初源的な連弧文土器と思われ、永瀬氏も 1 段階の事例としてあげている。器形は口縁部が丸みを帯び、胴部は中位で膨らむ。この器形は、連弧文土器では類を見ない。口頸部の文様は波状文で、口縁部と頸部に区画文様を持つ。いずれも半裁竹管腹面で施されるが、頸部区画文様は、粗い重複施文がなされている。器形が定型化されておらず、施文具にも半裁竹管の多用に古相が看取される。5 はやや弛緩した波状文を単沈線で描く。地文は他の土器が単節 R L であるのに対して、条線を採用しているため、盛行期である第 3 b 期のものと考えた。上記から芋久保遺跡例は、5 を除いて、稻荷上第 3 a 期、新地平編年の 10 c～11 a 期に属し、4 は初源期の連弧文土器と評価できよう。ただし、永瀬氏は本例を連弧文 1 段階、新地平編年の 11 b 期に例示している。

6～9 は武蔵村山市吉祥山遺跡第 28 号住居跡出土土器群である（高橋他 1984）。6 は口縁部に加曾利 E II 式古段階、口縁部文様は沈線主導で渦巻文と区画文の交互配置、頸部には曾利 II 式の籠目文、胴部に半裁竹管腹面で大木 8 b 式類似の文様を描き、同一個体における複数型式共存の典型例とされる。7 は渦巻繋ぎ弧文の加曾利 E II 式土器である。8 は頸部文様が第 145 図 27・28 に類似する曾利 II 式土器であるが、II 式でもやや古手との指摘がある（大網 2011）。6～8 の地文は、いずれも単節 R L である。9 は連弧文土器である。主文様である波状文、口縁部と頸部の区画文様、胴部の懸垂文のいずれも古相である半裁竹管腹面で描かれているが施文は粗雑である。地文は複節 R L R。本組成は山崎和己氏等に取り上げてられて以来、初源段階の連弧文土器を含む組成として注目されてきた（山崎 1986・安孫子 2005・2011 等）。山崎氏は、9 の土器をおそらく 6 との共伴をもって、1980 年の東京・埼玉編年の第 2 段階に位置付けた。安孫子昭二氏は、山崎氏の位置付けを新地平編年に置き換え、この組成を 10 c 期の所産とし、連弧文土器の初源とした。連弧文出現期としては、現在のところ最も古い位置付けと言える。これに反して、黒尾和久氏は 6 の土器を 8 とともに、第 144 図 17 や第 147 図 1 と同じ様相である清水ヶ丘例と同じ段階の新地平編年 10 c 期に位置付けたが、9 の土器は除外している。その理由について言及はないが、新地平グループの宇佐美哲也氏は「連弧文土器の生成に関与したと考えられる「武蔵野曾利縄文タイプ（『曾 c・y②』）」の出現は 11 b 期なのであり、連弧文土器の一部が 11 b 期の新しい時期に伴う可能性はあるものの、少なくとも 11 b 期を超えて遡ることはあり得ない」と断じている（宇佐美 2010）。永瀬氏も共伴関係について言及はないが、芋久保例の 4 とともに 9 を 11 b 期に位置付け、連弧文土器成立期としている。大網信良氏は吉祥山例を検討し、6 の土器を頸部の籠目文や胴部の半裁竹管腹面の曲線文、剣先文等のあり方から 11 a 期に下げ、該期を連弧文土器の出現期とした（大網 2011）が、後に 11 b 期に変更している（大網 2013）。このように、本例は多くの研究者に取り上げられ、検討されてきたが、その内容と位置付けについては確定に至っていない、ただし、永瀬氏の作成した編年対比表よれば、連弧文土器の出現期に関しては、新地平編年 11 b 期とする案が大勢を占めているようである。ここで問題となる 9 の土器について、筆者の見解を述べておきたい。本土器は文様描出に半裁竹管腹面を使用する点で古相であると言えるが、本施文具は稻荷上第 3 b 期に位置付けた第 145 図 32～34 にも認められ、盛行

期にも継続する。口縁部の区画文様には交互刺突文が見られ、円形刺突文とともに盛行期に多用される。器形と初源期に見られる円筒形の胴部ではなく、頸部の括れが強い所謂「重厚なプロポーション」である。上記についても新相が窺えるが、最も問題なのが地文の複節R L Rである。複節縄文に関しては、単節L Rとともに加曾利EⅢ式期に急増するもので、EⅡ式段階の事例としては類を見ない。これらの理由から、当該土器は組成の中でも1段階新しい連弧文土器盛行期、稲荷上第3 b期、新地平編年11 b期以降、永瀬氏の連弧文2段階に位置付けることが妥当ではないかと考える。

以上、稲荷上遺跡第56号住居跡出土例に関連して、芋久保例と吉祥山例の検討を行ったが、後者に対する評価は研究者によって前後が著しいことが分かった。連弧文土器については、その類型の多用さも手伝って、それ自体で変遷を詳らかにするのが難しいため、共伴する加曾利EⅢ式土器とのクロスチェックが肝要となる。しかしながら、研究者間で、一括遺物の取り扱いや援用する編年案が異なるため、上記のようなズレが生起すると思われる。いずれにしても、今回の考察では、連弧文土器の初源は新地平編年11 b期より1段階遡る10 c～11 a期、稲荷上第3 a期（加曾利EⅡ式古段階）の可能性が高いと結論しておく。

3 稲荷上縄文時代集落の変遷について

今回報告した堅穴住居跡のうち、縄文時代のものは計36軒で、時期別内訳は前期黒浜1式期5軒、中期第1期（勝坂2 a式段階）1軒、第2期（加曾利EⅠ式新段階）3軒、第3 a期（加曾利EⅡ式古段階）8軒（内1軒は遺構内重複）、第3 b期（加曾利EⅡ式新段階）4軒、第4 a期（加曾利EⅢ式古段階）6軒、第4 b期（加曾利EⅢ式新段階）3軒、時期不明あるいは確定できなかったもの6軒である。集落の全体形は、南東側に開口部を持つ馬蹄形が想定される。そのため明確な環状構造が認められない。第148・149図には、各期の分布状況を示した。本項では、各期の堅穴住居跡の動きについて検討し、集落変遷について若干述べることにする。なお、中期に関しては勝坂2 b式段階から勝坂式最終末・加曾利EⅠ式古段階までは、遺物の出土は散見されるが遺構が欠落するため、第2期を加曾利EⅠ式新段階とした。

前期黒浜1式段階

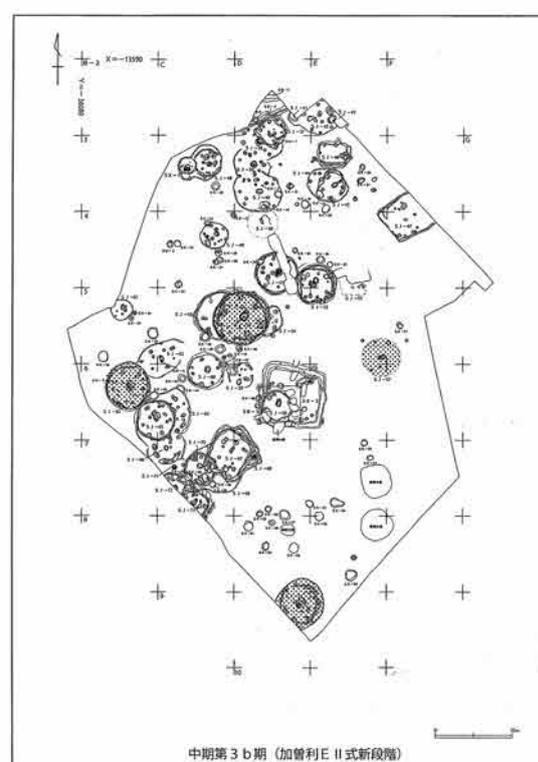
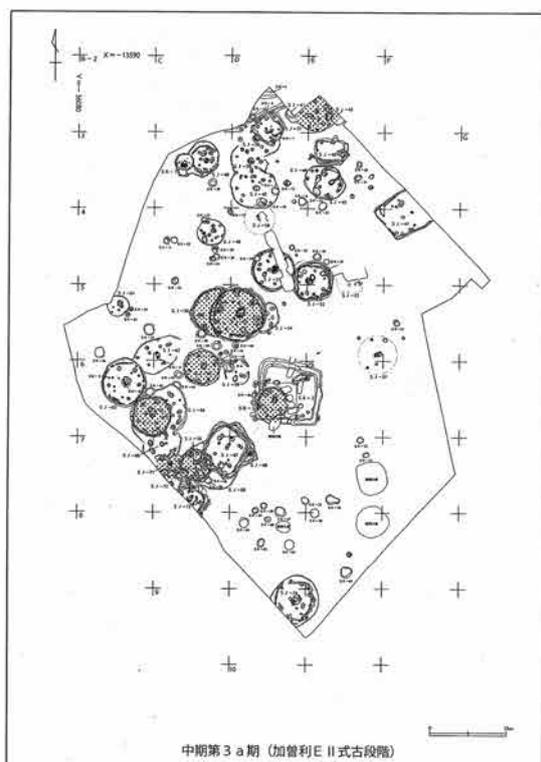
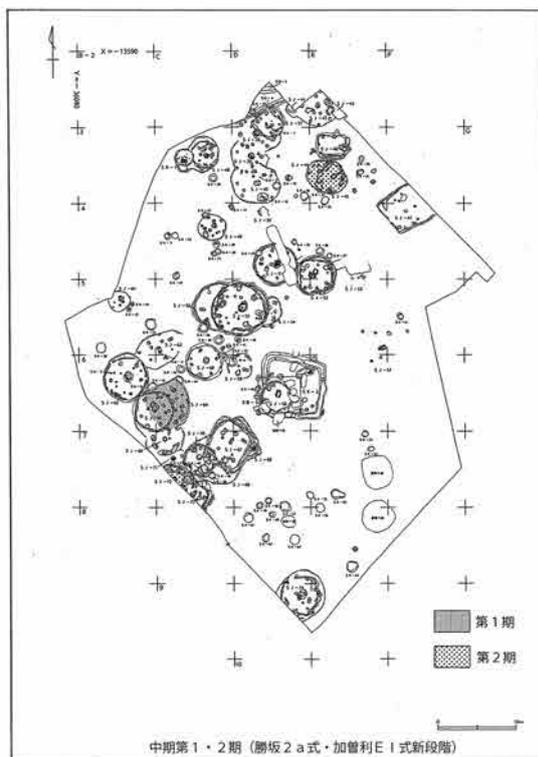
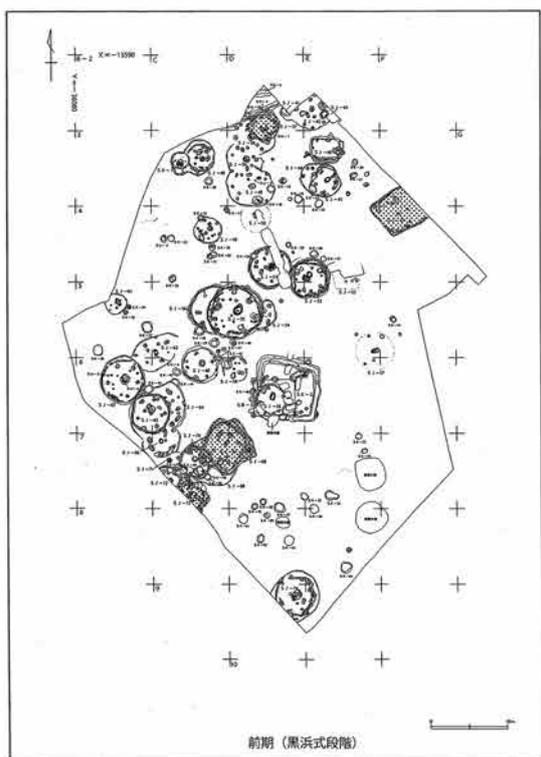
第37・47・67・68・73号住居跡が該当する。同時期の住居跡が、大略北側の崖線沿いに帯状分布する。本遺跡第2次調査でも、東側に隣接する調査区から2軒の該期住居跡が検出されている（平成7年度調査未報告）が、概ね第47・67・73号住居跡と線的に繋がる。この分布傾向は、本遺跡西方に位置する揚楯木遺跡の第1次調査で検出された前期集落に類似する（昭和56年度調査 増田他1986）。黒浜式期には集落が環状化する事例も見られるが、本遺跡と周辺では集落規模は比較的短期間且つ小規模で、その形成については地形的な制約を強く受けていた可能性がある。

中期第1期（勝坂2 a式段階）

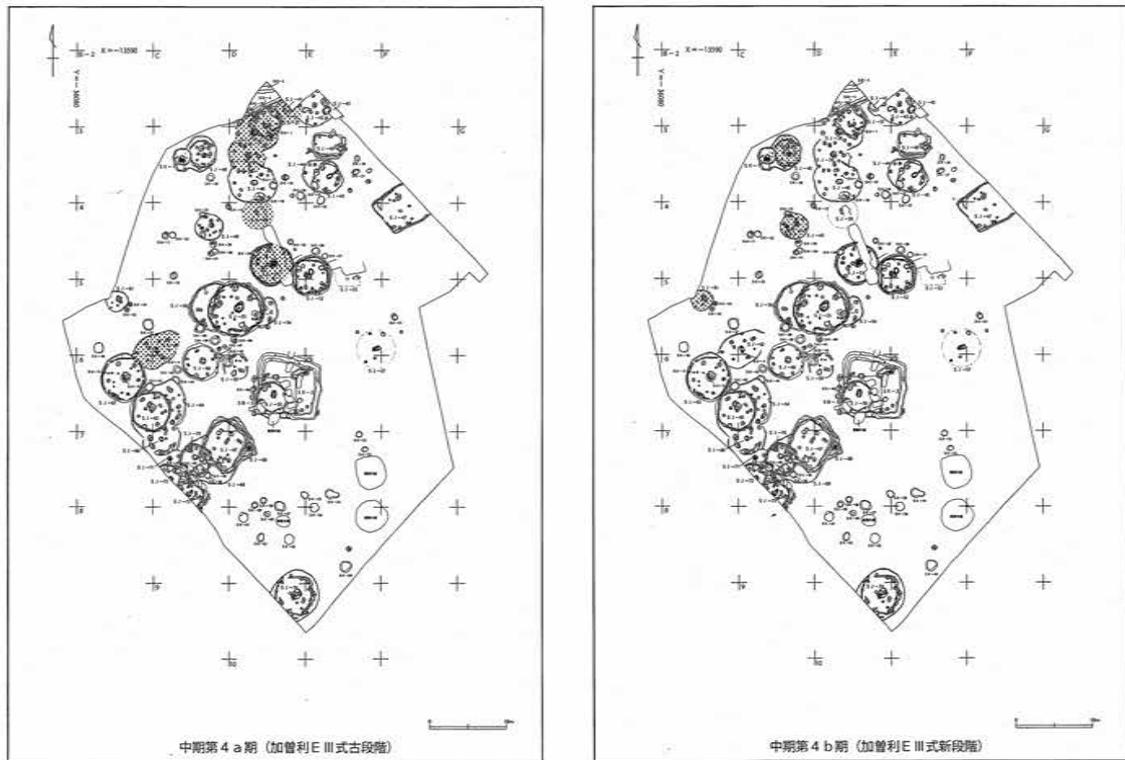
当該期では、第64号住居跡1軒が検出されている。本遺跡における中期集落の始期と思われる。概して、大規模集落の開始期は小規模な集落で、遺構が点在する様相が認められる。同時期の土器については、東側に隣接する第2次調査区でも認められ、他の住居跡の存在も想定される。

中期第2期（加曾利EⅠ式新段階）

勝坂2 b式期以降、勝坂式最終末・加曾利EⅠ式古段階までは明確な遺構を欠くため、本段階を第2期とした。当該期では、第44・45・72号住居跡の3軒が検出されている。東西に線的に位置する。検討



第 148 図 稻荷上遺跡集落変遷図 (1)



第 149 図 稲荷上遺跡集落変遷図 (2)

材料は少ないため断定はできないが、勝坂 2 b 式期以降の断絶から新たに集落が形成された段階と考えられる。

中期第 3 a 期 (加曾利 E II 式古段階)

第 42・55 (旧)・56・58・60・65・70・71 号住居跡の 8 軒が該当する。調査区北側から南西に向かって、带状に展開する。集落としての体裁が整う時期と評価される。住居跡分布も、やや居住域の幅が広がり、集落が外側に拡大しているように見える。ただし、第 55 (旧)・56 号住居跡と、第 70・71 号住居跡は重複しているため、これらを細分すれば一時期の軒数は減少する。住居跡は 4 本主柱の比較的小型のものが大勢を占めるが、やや大型の第 55 (旧)・56 号住居跡が加わる。他の集落遺跡でも、連弧文土器盛行期の住居跡の大型化が看取されるが、連弧文土器初源期の本段階からその傾向が認められると言えよう。

中期第 3 b 期 (加曾利 E II 式新段階)

本段階は連弧文土器盛行期で、第 55 (新)・57・63・74 号住居跡の 4 軒が該当する。集落内側に位置する第 57 号住居跡は、炉跡のみが検出されたもので、全体形や規模については不明である。他の 3 軒は比較的大型の住居跡で、径 6～8 m 弱を測る。いずれも、集落の外縁近くに位置する傾向が認められる。住居跡の大型化とともに、居住域の拡大が本段階の特徴と言えるであろう。今回報告の調査では、該期住居跡の検出は 4 軒に止まったが、調査区外には本段階の住居跡が多く残されていると推定される。

中期第 4 a 期 (加曾利 E III 式古段階)

第 38・39・41・50・51・62 号住居跡の 6 軒が該当する。本段階の住居跡は、第 51 号住居跡以外は

掘り込みが浅く、平面形も不明確なものが多いが、この傾向は加曾利 E Ⅲ式段階の住居跡の特徴でもある。また、第 41・50 号住居跡は炉跡のみが検出されており、平面形、規模ともに不明である。該期の住居跡は重複が多く、集落外縁に帯状に連なる点で、居住域の規制の存在を思わせる。

中期第 4 b 期（加曾利 E Ⅲ式新段階）

本段階の住居跡は、第 48・49・61 号住居跡の 3 軒が該当する。いずれも小型の住居跡で、掘り込みも浅く、第 4 a 期と様相が類似する。分布域は前段階より更に外側に動き、最外縁に位置している。一見崖線付近に小環状に展開するように見られるが、未報告の第 2 次調査区でも該期住居跡がほぼ同一線上に認められるため、第 4 a 期に近似する帯状分布が継続するものと思われる。なお、当該期の住居跡の同一線上あるいはやや内側に、単独埋甕（第 1～6 号）が点在することを付言しておく。

以上、各段階での集落様相について若干所見を述べた。中期の環状・馬蹄形集落では、竪穴住居の段階的な占地動態が内側から外側に動く場合と、外側から内側に動く場合の 2 種が認められる。今回報告の調査区では前者の典型例ともいえるべき動きが看取された。無論、集落全体の調査が行われた訳ではないので、あくまで傾向として捉えられるだけである。今後は、今回の土器変遷案をもとに、市内最大の宮地遺跡や市域周辺に所在する大規模集落遺跡でも、この傾向が認められるか確認し、検討していくことが必要と考えている。

〈引用・参考文献〉

- 安孫子昭二 2011 『縄文時代中期集落の景観』 未完成考古学叢書 9
- 石塚和則 2003 『丸山遺跡』 狭山市遺跡調査会報告書第 13 集
- 宇佐美哲也他 2010 『東京都あきる野市 前原・大上・北伊奈』 一都市計画道路秋 3・5・2 号伊奈館谷線新設事業に伴う埋蔵文化財調査（2）—
- 大網信良 2011 「連弧文土器の祖形に関する一考察」『東京の遺跡』 No. 96
- 大網信良 2012 「曾利式圏における連弧文土器の型式変化とその背景」『早稲田大学大学院研究科紀要』 第 4 分冊
- 神奈川考古同人会 1981 「シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題—特に加曾利 E 式と曾利式土器の関係について—土器資料集成図集」『神奈川考古』 第 10 号
- 神奈川考古同人会 1981 「シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題—特に加曾利 E 式と曾利式土器の関係について—」『神奈川考古』 第 11 号
- 金子直行他 1996 『大山遺跡 第 9 次』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 180 集
- 黒尾和久他 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム 縄文時代集落研究の新地平』
- 鈴木保彦 1981 「関東・中部・北陸地方」『縄文土器大成』 2 中期
- 高橋健樹他 1984 『吉祥山 武蔵村山市吉祥山遺跡確認調査報告書』 武蔵村山市文化財資料集 4
- 富元久美子他 1991 「芋久保遺跡（第 1・2 次）発掘調査報告書」『飯能の遺跡（11）』
- 永瀬史人 2008 「連弧文土器」『総覧縄文土器』
- 細田 勝 2008 「加曾利 E 式土器」『総覧縄文土器』
- 増田正博他 1986 『狭山市史 原始・古代資料編』
- 山崎和己 1980 「型式学的方法—連弧文土器様式—」『季刊考古学』 17

写真図版



図版1 稻荷上遺跡 第6次調査区空中写真



稲荷上遺跡 第6次調査区全景



第37号住居跡全景



第38号住居跡全景



第38号住居跡炉跡



第39号住居跡全景



第39号住居跡炉跡



第39号住居跡屋内埋甕



第40号住居跡全景



第 41 号住居跡全景



第 42・43 号住居跡全景



第 42 号住居跡炉跡



第 42 号住居跡屋内埋葬



第 44 号住居跡全景



第 44 号住居跡炉跡



第 45 号住居跡全景



第 45 号住居跡炉跡



第46号住居跡全景



第46号住居跡カマド1



第46号住居跡カマド2



第47号住居跡全景



第48号住居跡・第1号性格不明遺構全景



第48号住居跡炉跡



第48号住居跡遺物出土状況



第1号性格不明遺構遺物出土状況



第 49 号住居跡全景



第 49 号住居跡炉跡



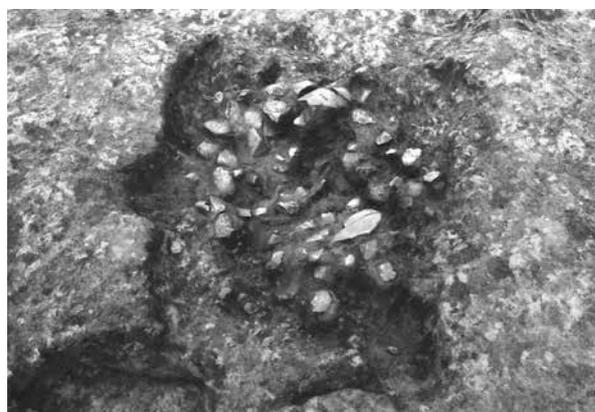
第 49 号住居跡屋内埋甕



第 50 号住居跡炉跡



第 51 号住居跡全景



第 51 号住居跡炉跡



第 52 号住居跡全景



第 52 号住居跡炉跡 1 · 2



第 52 号住居跡遺物出土状況



第 53 号住居跡全景



第 54 号住居跡全景



第 54 号住居跡炉跡



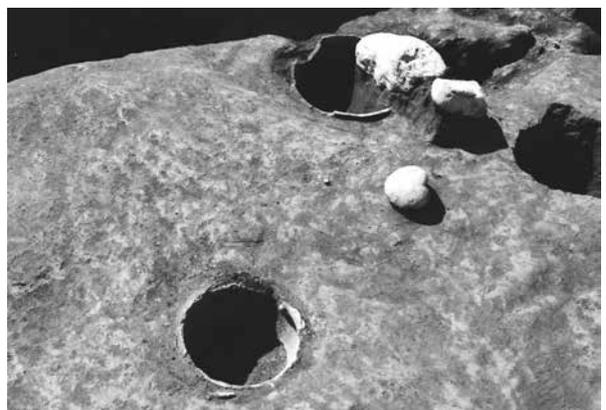
第 55 号住居跡全景



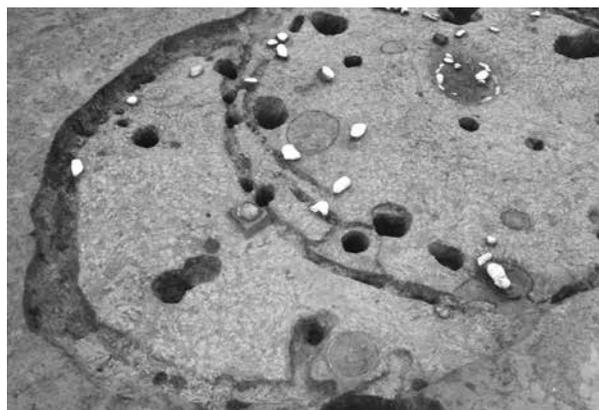
第 55 号住居跡炉跡 1



第 55 号住居跡炉跡 1 土器埋設状況



第 55 号住居跡屋内埋甕 1・2



第 56 号住居跡全景



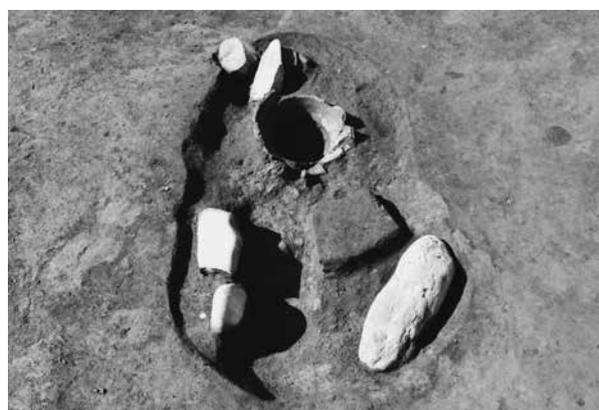
第 56 号住居跡炉跡



第 56 号住居跡屋内埋甕



第 56 号住居跡遺物出土狀況



第 57 号住居跡炉跡



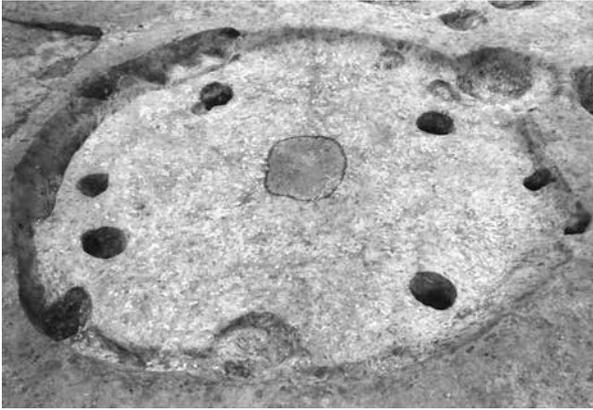
第 58 号住居跡全景



第 58 号住居跡遺物出土狀況



第 59 号住居跡全景



第 60 号住居跡全景



第 60 号住居跡遺物出土狀況



第 61 号住居跡全景



第 61 号住居跡炉跡



第 61 号住居跡遺物出土狀況



第 62 号住居跡全景



第 62 号住居跡炉跡



第 63 号住居跡全景



第 63 号住居跡炉跡



第 63 号住居跡屋内埋甕



第 64・65 号住居跡全景



第 64 号住居跡遺物出土狀況



第 65 号住居跡炉跡



第 65 号住居跡遺物出土狀況



第 66・71 号住居跡全景



第 66 号住居跡炉跡



第 71 号住居跡炉跡



第 67・68 号住居跡全景



第 67 号住居跡炉跡 2



第 69・70・72・73 号住居跡全景



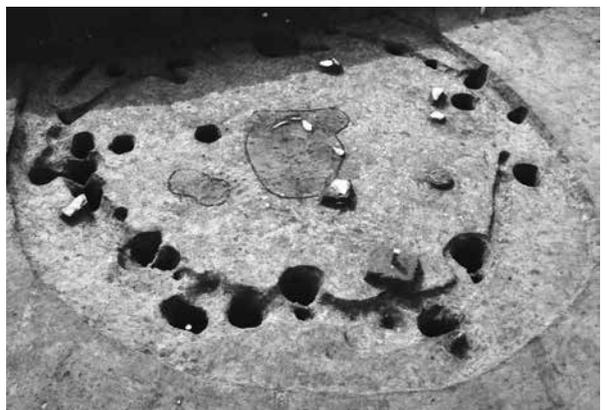
第 70 号住居跡炉跡



第 72 号住居跡炉跡



第 72 号住居跡遺物出土狀況



第 73 号住居跡全景



第2号性格不明遺構全景



第32号土壙・第2号单独埋葬全景



第46号土壙全景



第56号土壙全景



第63号土壙全景



第4号单独埋葬檢出狀況



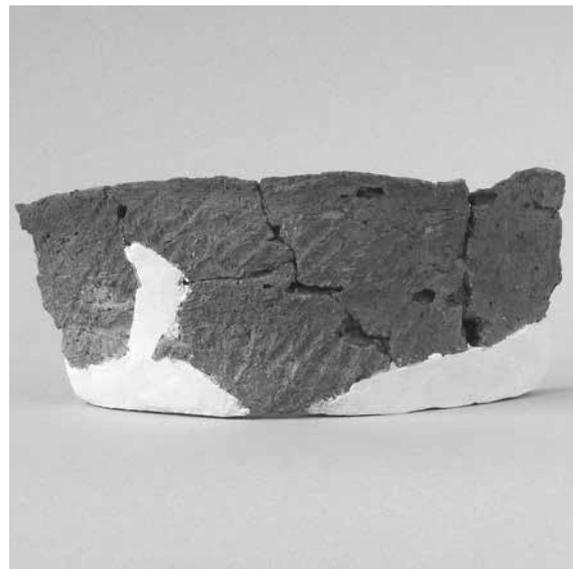
第5号单独埋葬檢出狀況



第6号单独埋葬檢出狀況



第 37 号住居跡 (第 38 图 1)



第 37 号住居跡 (第 38 图 2)



第 37 号住居跡 (第 38 图 3)



第 38 号住居跡 (第 39 图 1)



第 40 号住居跡 (第 40 图 1)



第 40 号住居跡 (第 40 图 2)



第 41 号住居跡 (第 42 图 1)



第 42・43 号住居跡 (第 43 图 1)



第 42・43 号住居跡 (第 43 图 2)



第 42・43 号住居跡 (第 44 图 3)



第 42・43 号住居跡 (第 44 图 4)



第 44 号住居跡 (第 45 图 1)



第 44 号住居跡 (第 45 图 2)



第 44 号住居跡 (第 45 图 3)



第 44 号住居跡 (第 45 图 4)



第 45 号住居跡 (第 47 图 1)



第 46 号住居跡 (第 48 图 1)



第 46 号住居跡 (第 48 图 2)



第 46 号住居跡 (第 48 图 3)



第 46 号住居跡 (第 48 图 4)



第 46 号住居跡 (第 48 图 5)



第 46 号住居跡 (第 48 图 6)



第 46 号住居跡 (第 48 图 8)



第 46 号住居跡 (第 48 图 9)



第 46 号住居跡 (第 48 图 10)



第 46 号住居跡 (第 48 图 11)



第 48 号住居跡 (第 50 图 1)



第 48 号住居跡 (第 50 图 2)



第 49 号住居跡 (第 52 图 1)



第 49 号住居跡 (第 52 图 2)



第 49 号住居跡 (第 53 图 3)



第 50 号住居跡 (第 54 图 1)



第 51 号住居跡 (第 55 图 1)



第 52 号住居跡 (第 56 图 1)



第 52 号住居跡 (第 56 图 2)



第 52 号住居跡 (第 56 图 3)



第 52 号住居跡 (第 56 图 4)



第 52 号住居跡 (第 56 图 5)



第 52 号住居跡 (第 56 图 6)



第 52 号住居跡 (第 56 图 7)



第 55 号住居跡 (第 59 图 1)



第 55 号住居跡 (第 59 图 2)



第 55 号住居跡 (第 59 图 3)



第 55 号住居跡 (第 59 图 4)



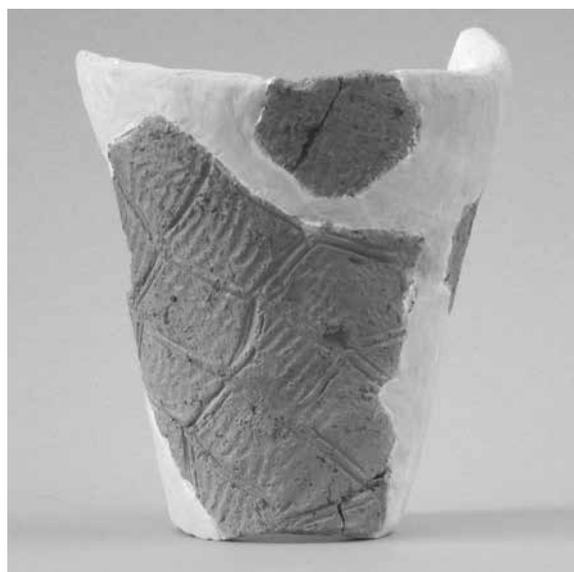
第 55 号住居跡 (第 60 图 5)



第 55 号住居跡 (第 60 图 6)



第 55 号住居跡 (第 60 图 7)



第 55 号住居跡 (第 60 图 8)



第 55 号住居跡 (第 60 图 9)



第 55 号住居跡 (第 61 图 12)



第 55 号住居跡 (第 61 图 13)



第 55 号住居跡 (第 61 图 14)



第 56 号住居跡 (第 63 图 1)



第 56 号住居跡 (第 63 图 2)



第 56 号住居跡 (第 63 图 3)



第 56 号住居跡 (第 64 图 4)



第 57 号住居跡 (第 65 图 1)



第 58 号住居跡 (第 66 图 1)



第 58 号住居跡 (第 66 图 2)



第 58 号住居跡 (第 66 图 3)



第 58 号住居跡 (第 66 图 4)



第 58 号住居跡 (第 66 图 5)



第 58 号住居跡 (第 66 图 6)



第 58 号住居跡 (第 66 图 7)



第 60 号住居跡 (第 70 图 1)



第 60 号住居跡 (第 70 图 2)



第 60 号住居跡 (第 70 图 3)



第 60 号住居跡 (第 71 图 4)



第 61 号住居跡 (第 72 图 1)



第 61 号住居跡 (第 72 图 2)



第 61 号住居跡 (第 72 图 3)



第 62 号住居跡 (第 73 图 1)



第 62 号住居跡 (第 73 图 3)



第 63 号住居跡 (第 75 图 1)



第 63 号住居跡 (第 75 图 2)



第 63 号住居跡 (第 75 图 3)



第 63 号住居跡 (第 75 图 4)



第 63 号住居跡 (第 75 图 5)



第 63 号住居跡 (第 76 图 6)



第 63 号住居跡 (第 76 图 7)



第 63 号住居跡 (第 76 图 8)



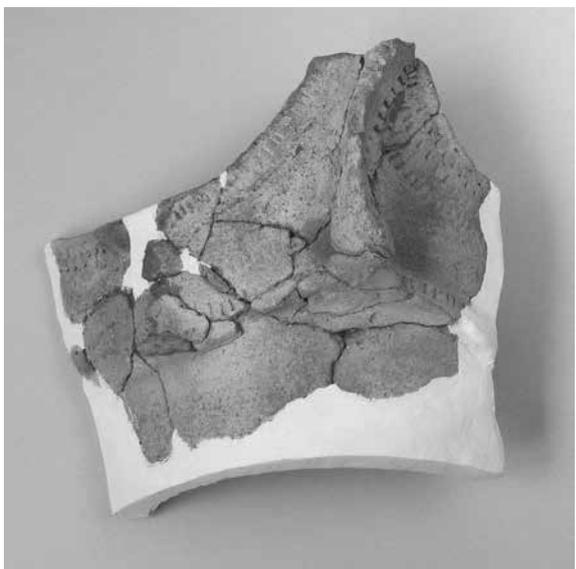
第 63 号住居跡 (第 76 图 9)



第 63 号住居跡 (第 76 图 11)



第 64 号住居跡 (第 78 图 1)



第 64 号住居跡 (第 78 图 2)



第 64 号住居跡 (第 79 图 3)



第 64 号住居跡 (第 79 图 4)



第 64 号住居跡 (第 79 图 5)



第 64 号住居跡 (第 79 图 6)



第 65 号住居跡 (第 80 图 1)



第 65 号住居跡 (第 80 图 2)



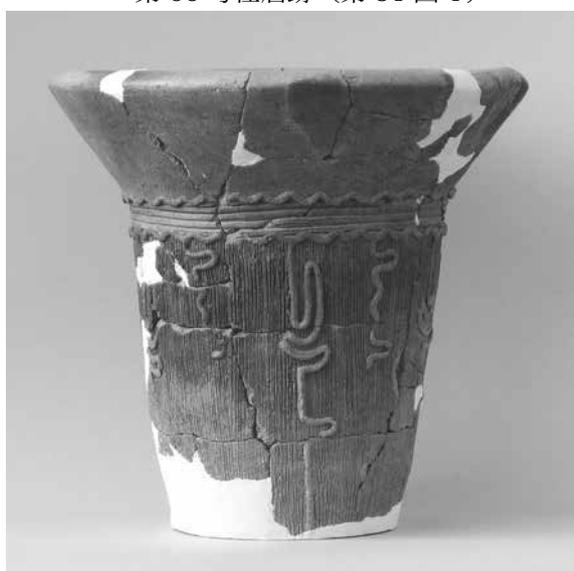
第 65 号住居跡 (第 80 图 3)



第 65 号住居跡 (第 81 图 4)



第 65 号住居跡 (第 81 图 5)



第 65 号住居跡 (第 82 图 7)



第 65 号住居跡 (第 82 图 8)



第 65 号住居跡 (第 82 图 9)



第 65 号住居跡 (第 82 图 10)



第 65 号住居跡 (第 82 図 11)



第 67 ~ 69 号住居跡 (第 85 図 1)



第 70 号住居跡 (第 87 図 1)



第 70 号住居跡 (第 87 図 2)



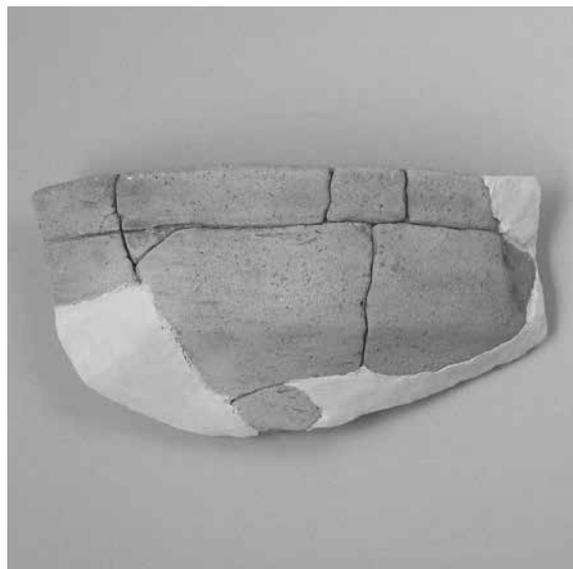
第 70 号住居跡 (第 87 図 3)



第 70 号住居跡 (第 87 図 4)



第 70 号住居跡 (第 87 图 5)



第 70 号住居跡 (第 87 图 6)



第 70 号住居跡 (第 87 图 7)



第 71 号住居跡 (第 89 图 1)



第 72 号住居跡 (第 90 图 1)



第 72 号住居跡 (第 90 图 2)



第 73 号住居跡 (第 91 图 1)



第 73 号住居跡 (第 91 图 2)



第 73 号住居跡 (第 91 图 3)



第 74 号住居跡 (第 92 图 1)



第 74 号住居跡 (第 92 图 2)



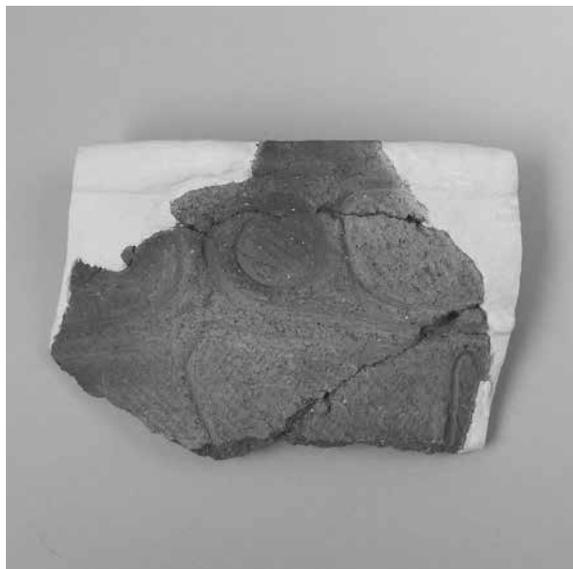
第 74 号住居跡 (第 92 图 3)



第 74 号住居跡 (第 92 图 4)



第 74 号住居跡 (第 92 图 5)



第 74 号住居跡 (第 92 图 6)



第 74 号住居跡 (第 92 图 7)



第 74 号住居跡 (第 92 图 8)



第 74 号住居跡 (第 93 图 10)



第 74 号住居跡 (第 93 图 11)



第 32 号土壙 (第 95 图 15)



第 32 号土壙 (第 95 图 16)



第 46 号土壙 (第 96 图 39)



第 1 号单独埋甕 (第 100 图 1)



第 2 号单独埋甕 (第 100 图 2)



第3号单独埋甕 (第100图3)



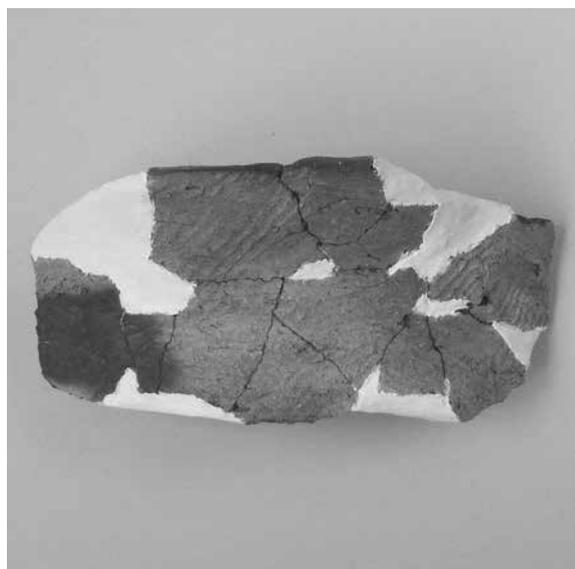
第4号单独埋甕 (第100图4)



第5号单独埋甕 (第100图5)



第6号单独埋甕 (第101图6)



遺構外出土土器 (第102图1)



遺構外出土土器 (第102图3)



遺構外出土土器 (第 102 図 4)



遺構外出土土器 (第 103 図 5)



遺構外出土土器 (第 103 図 6)



遺構外出土土器 (第 103 図 7)



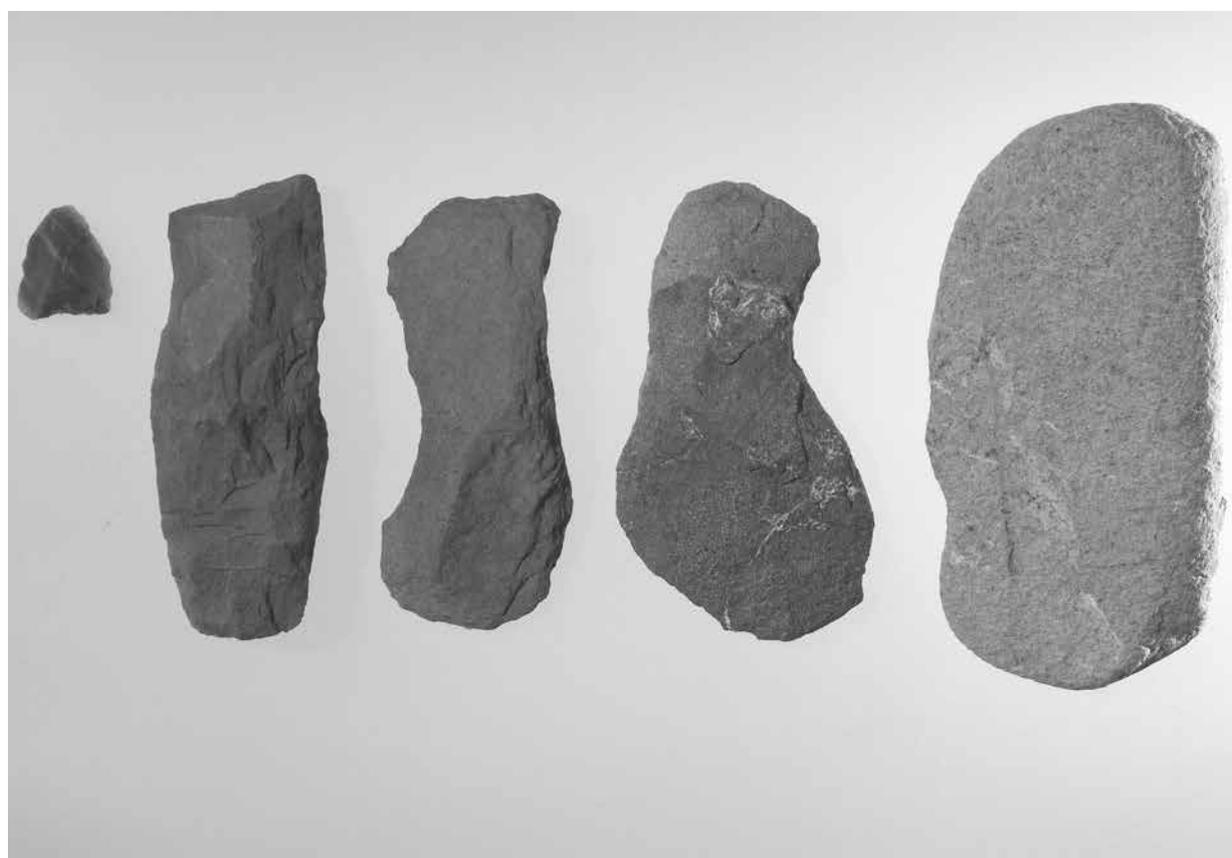
遺構外出土土器 (第 103 図 8)



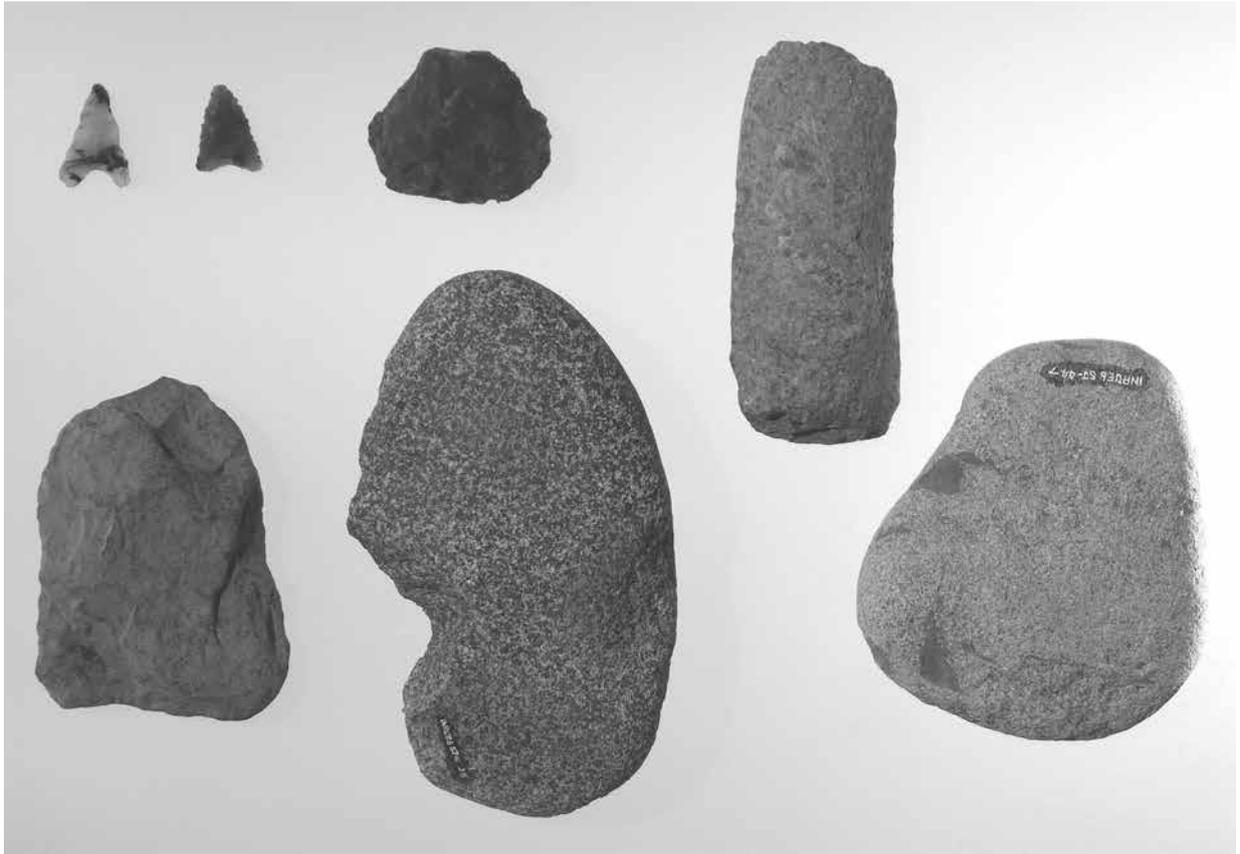
遺構外出土土器 (第 103 図 9)



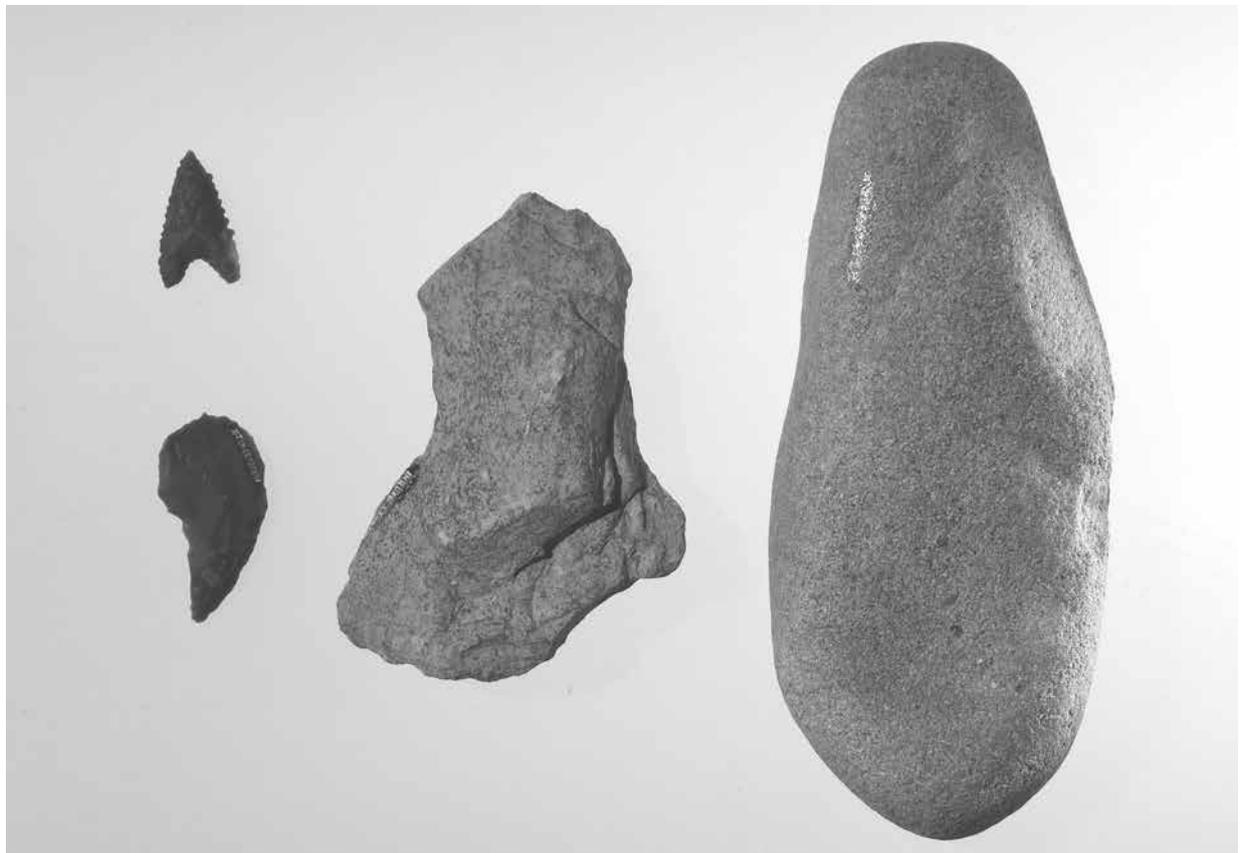
第 37 ~ 39 号住居跡 (第 108 · 109 图)



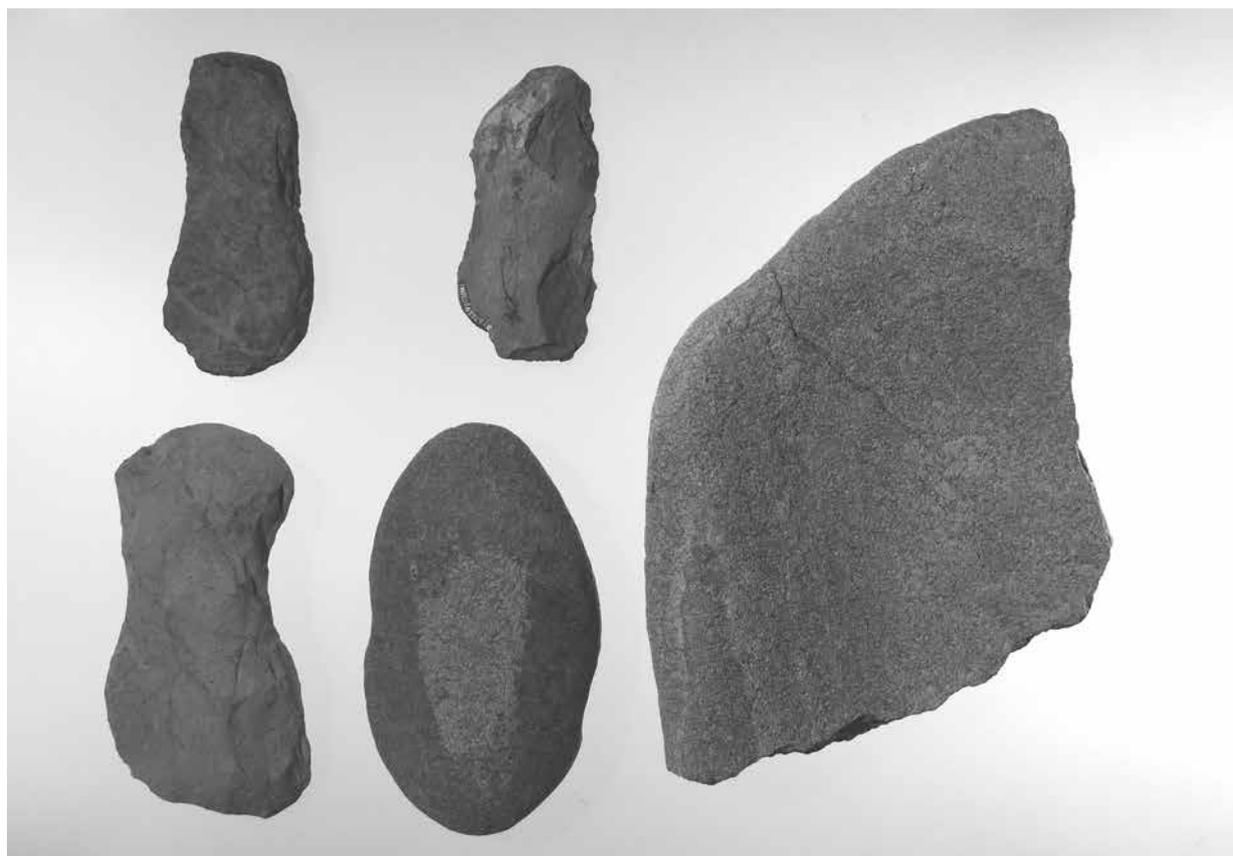
第 40 号住居跡 (第 110 图)



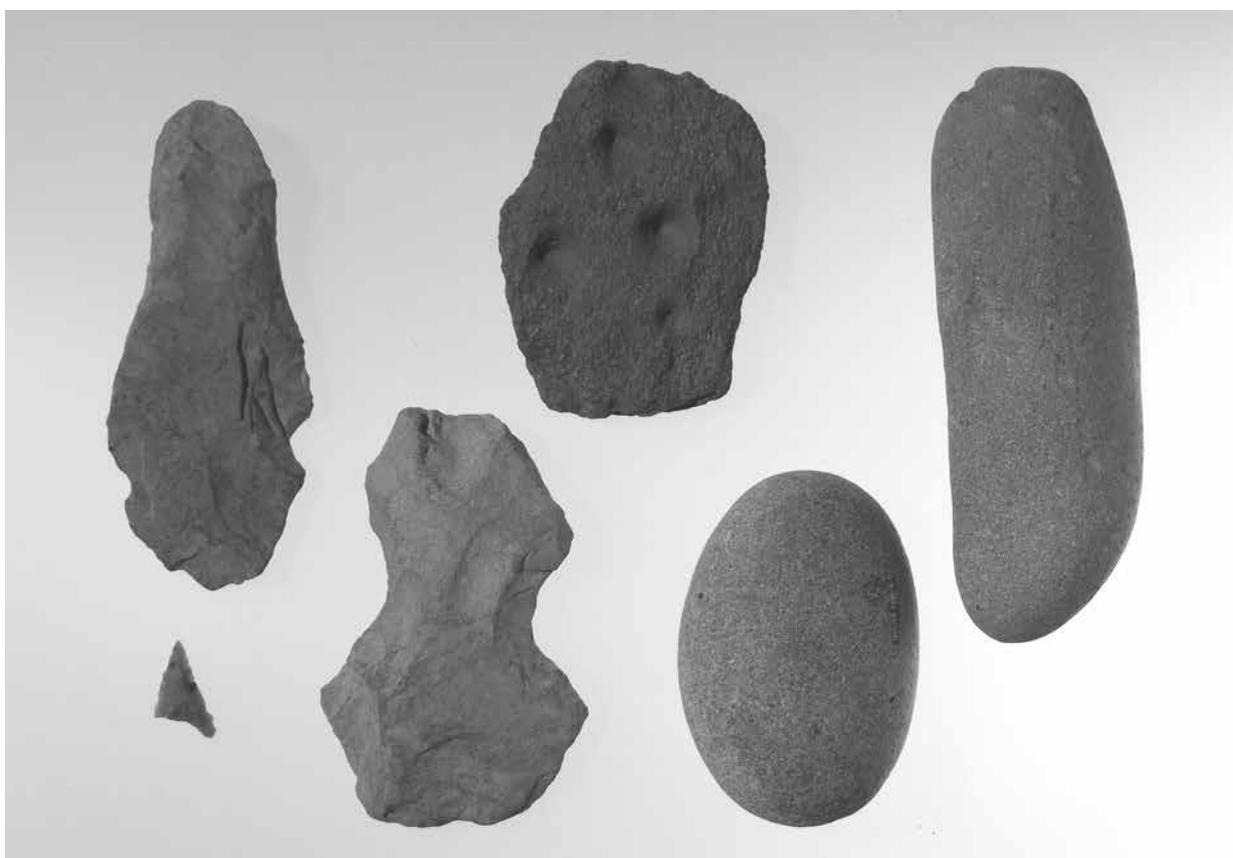
第 41·44 号住居跡 (第 111·112 图)



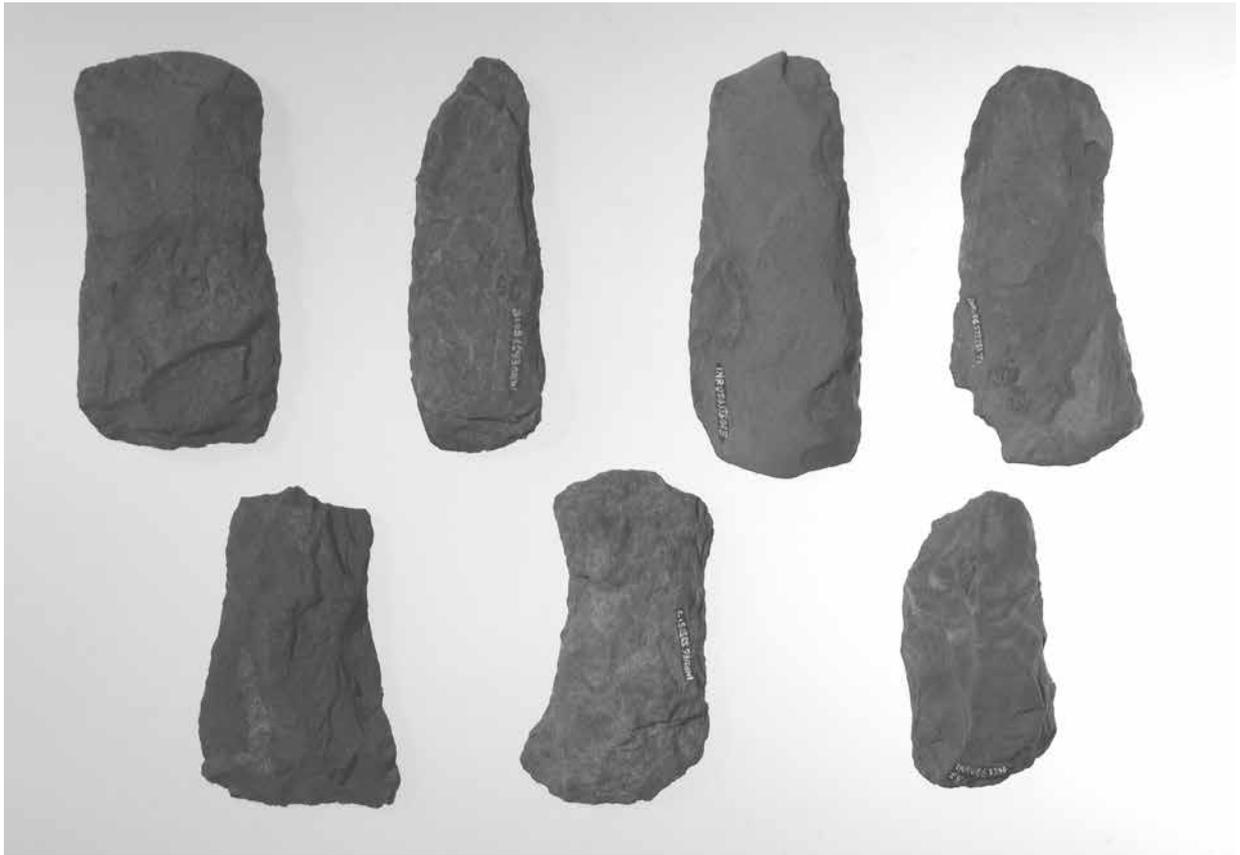
第 46 号住居跡 (第 113·114 图)



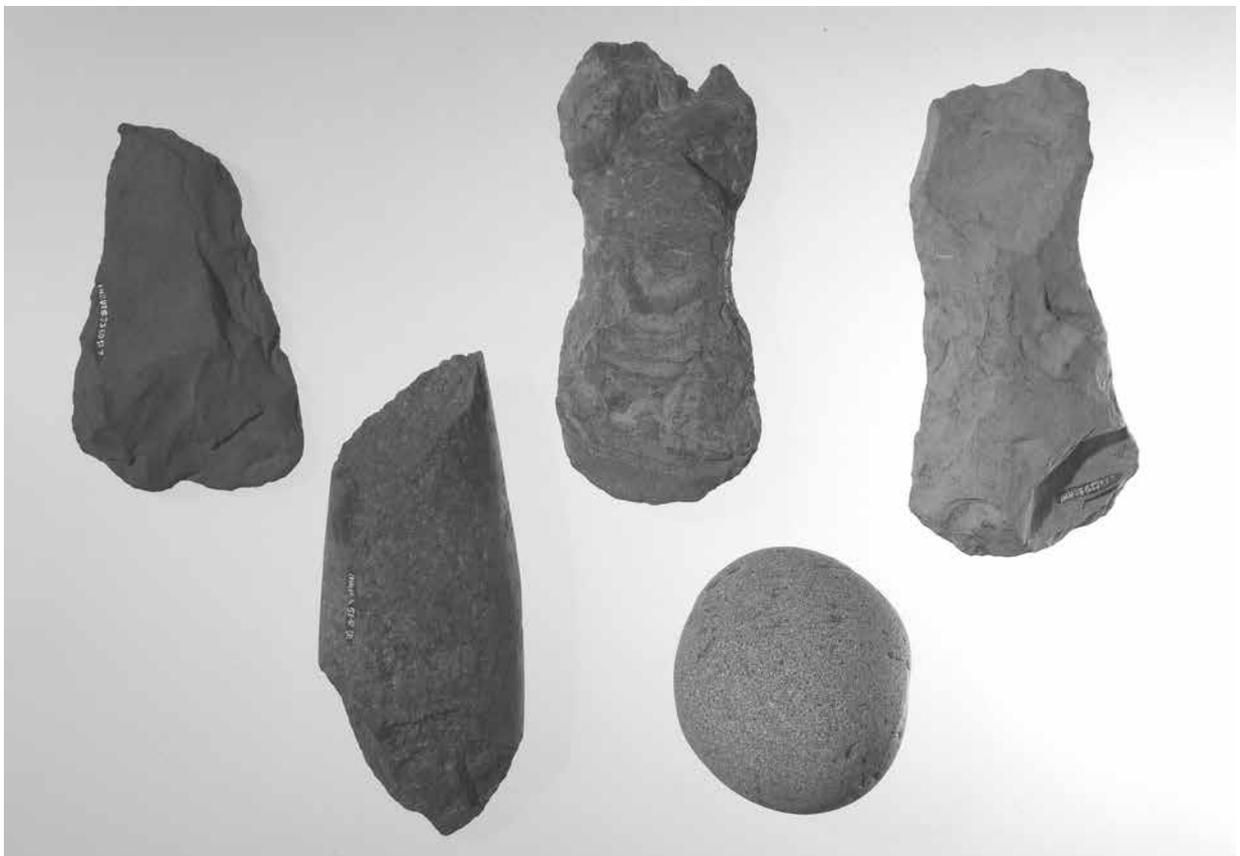
第 48 号住居跡 (第 115 图)



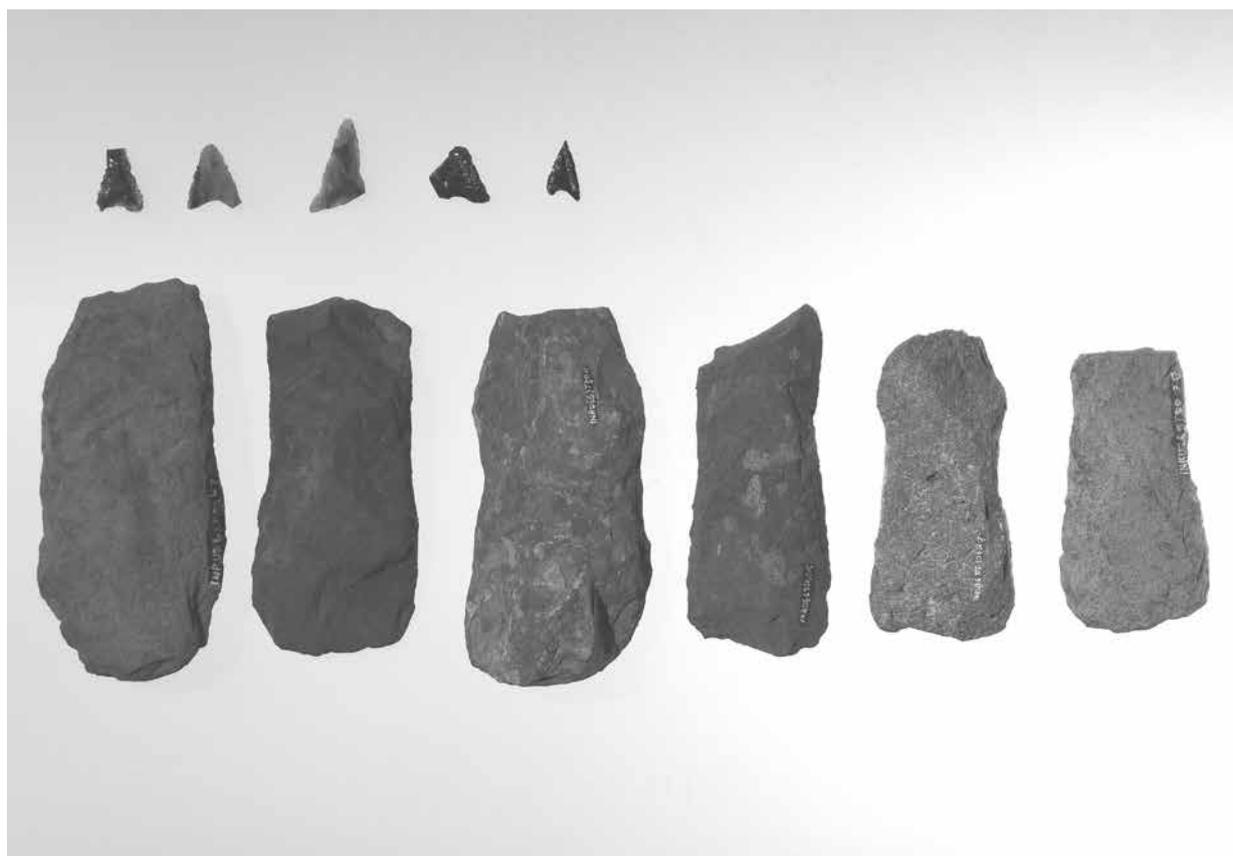
第 49・51・52 号住居跡 (第 116・117 图)



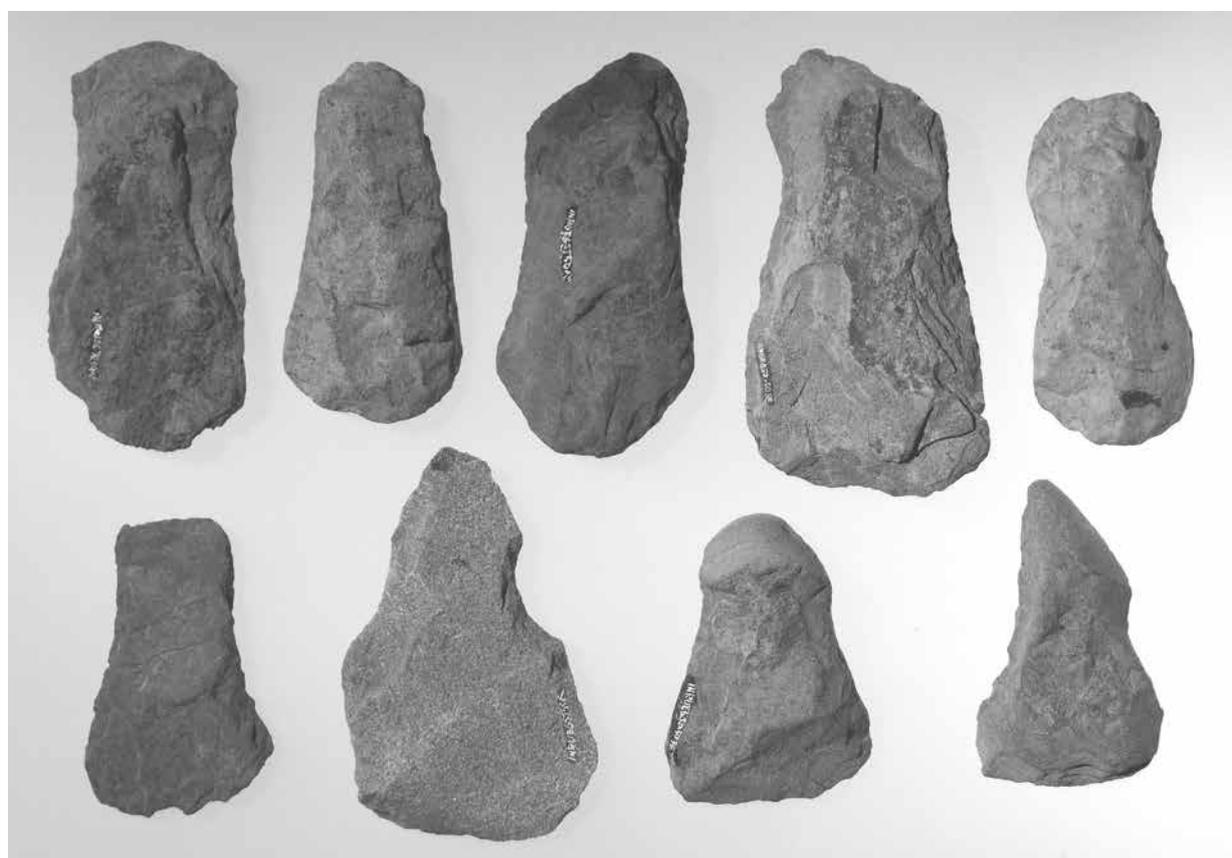
第 54 号住居跡 (第 118 図)



第 54 号住居跡 (第 119 図)



第 55 号住居跡 (第 120 图)



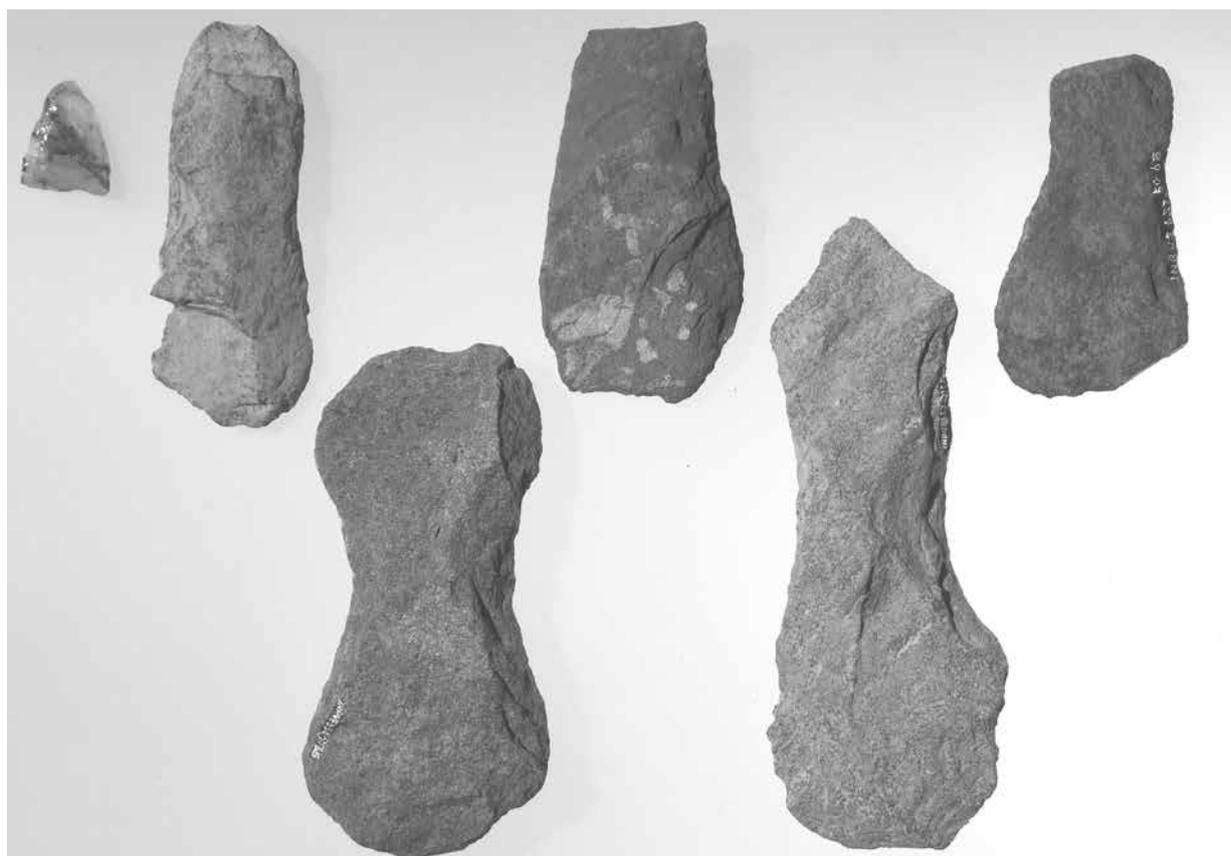
第 55 号住居跡 (第 121 图-1)



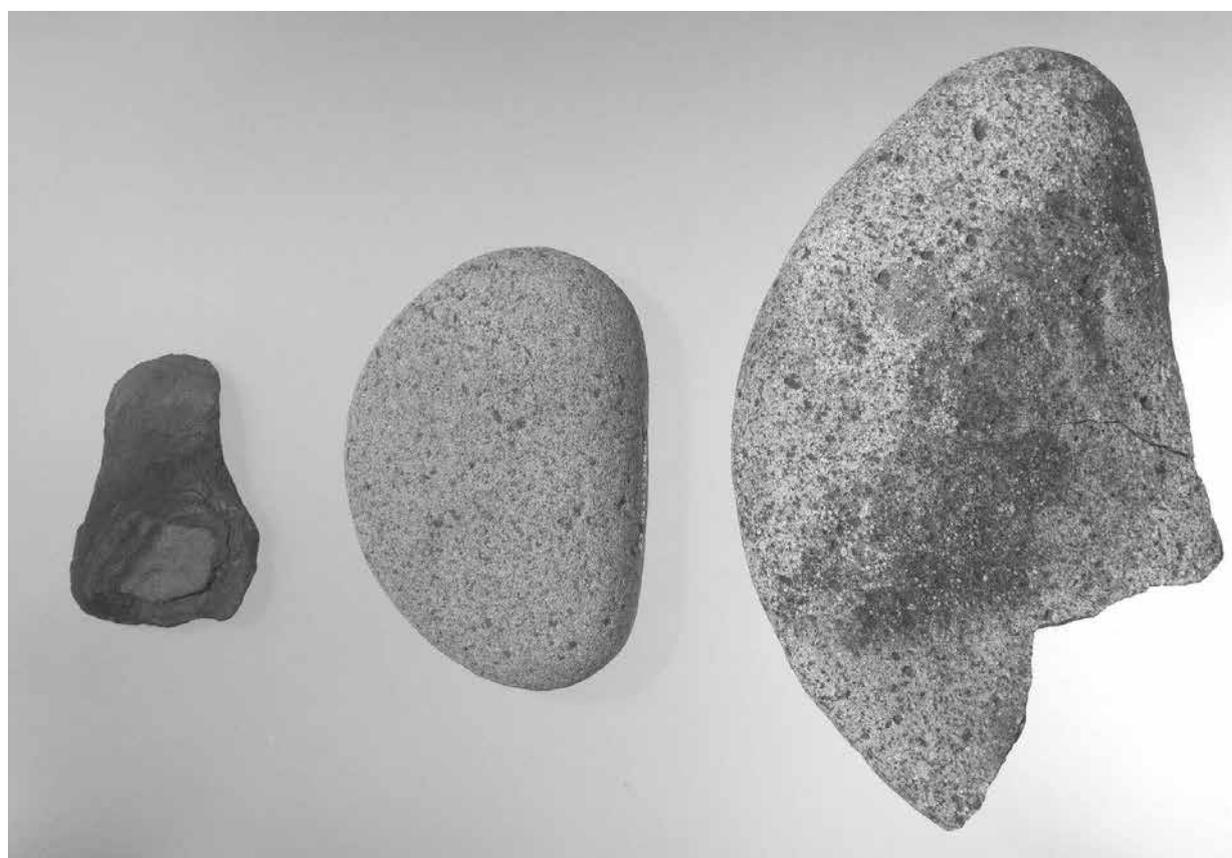
第 55 号住居跡 (第 121 图-2)



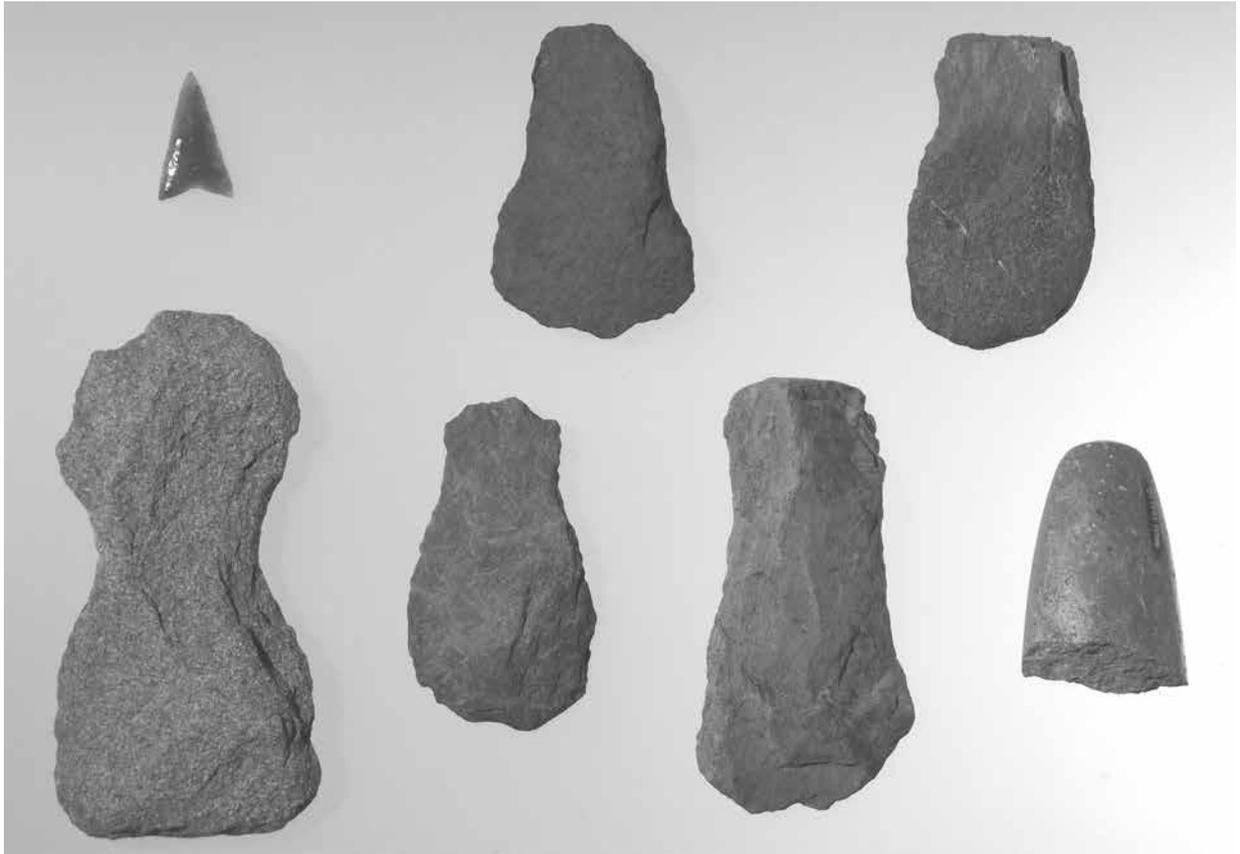
第 55 号住居跡 (第 122 图)



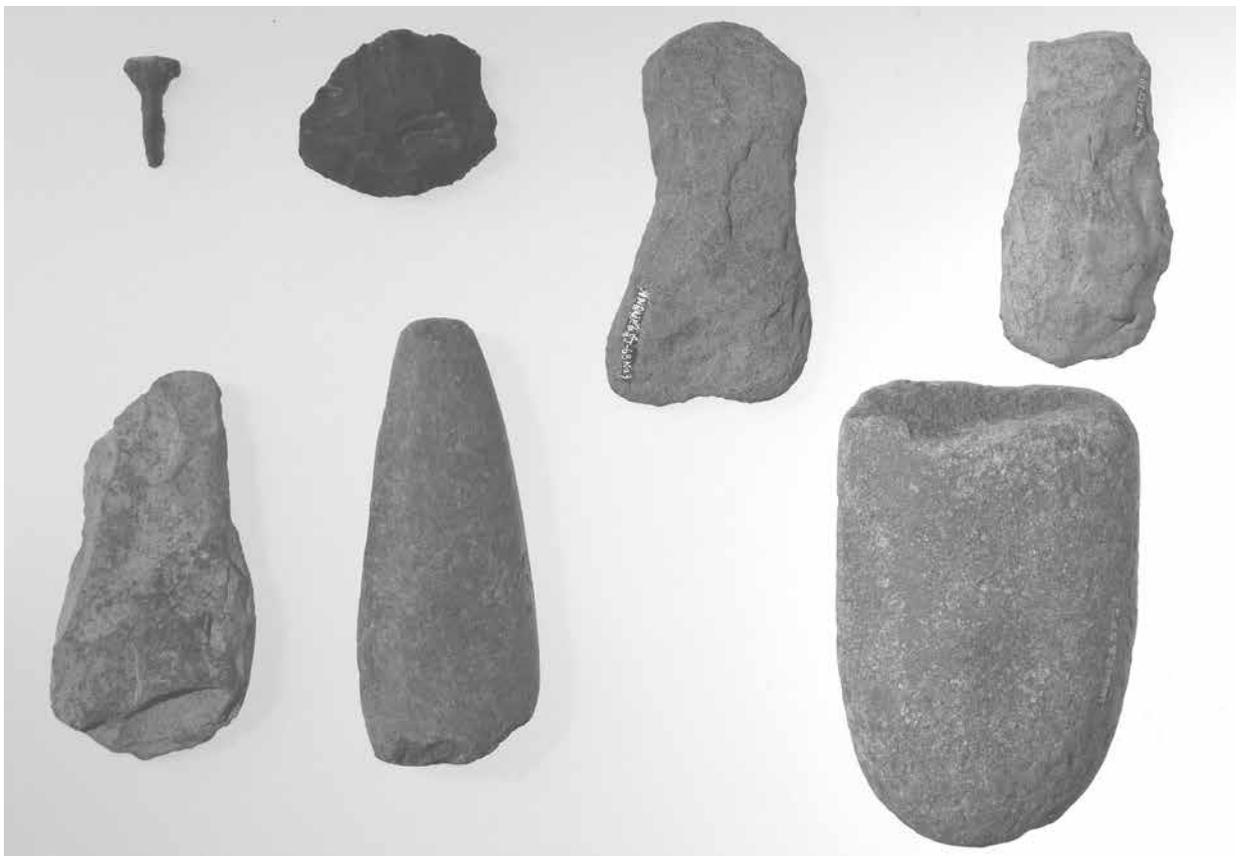
第 56 号住居跡 (第 123 图)



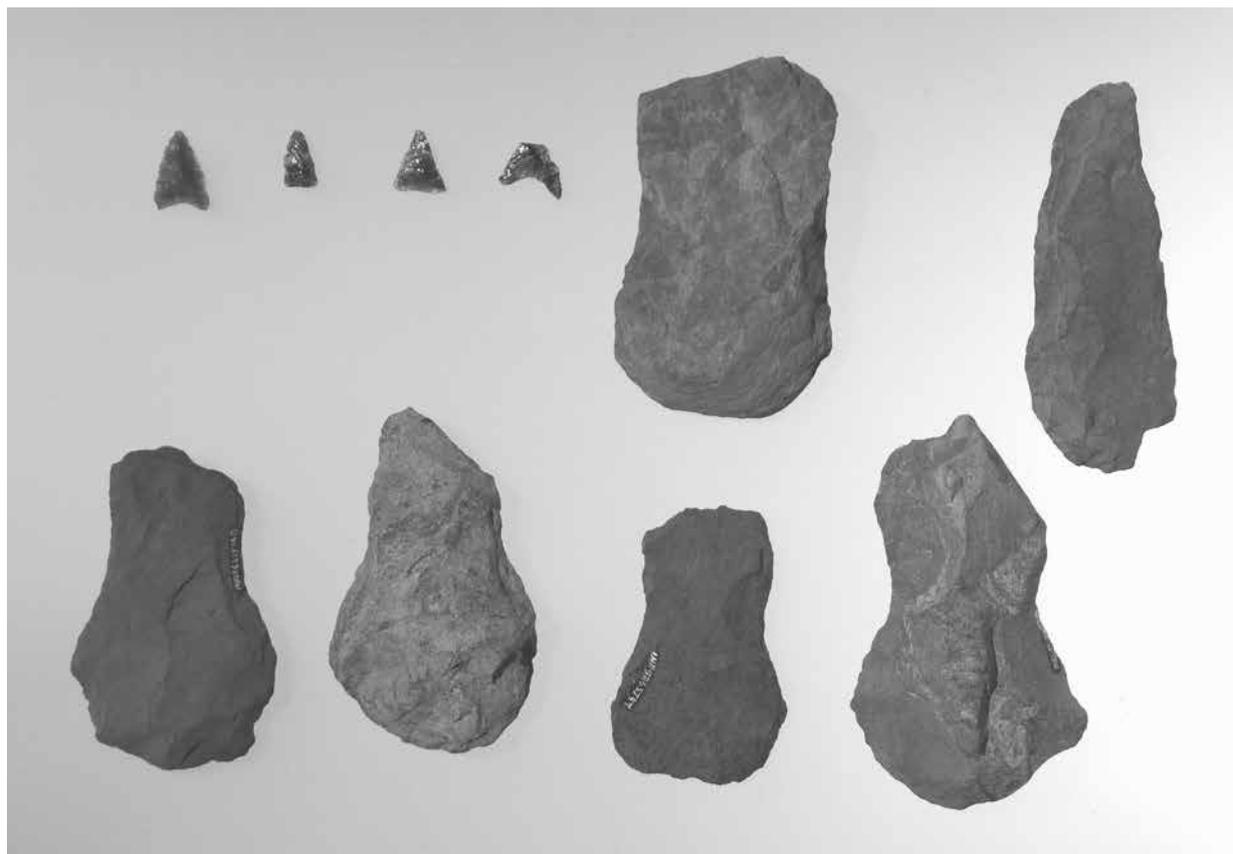
第 56 号住居跡 (第 124 图)



第 58 ~ 60 号住居跡 (第 125・126 図)



第 61・62 号住居跡 (第 127 図)



第 63 号住居跡 (第 128 图)



第 63 号住居跡 (第 129 图-1)



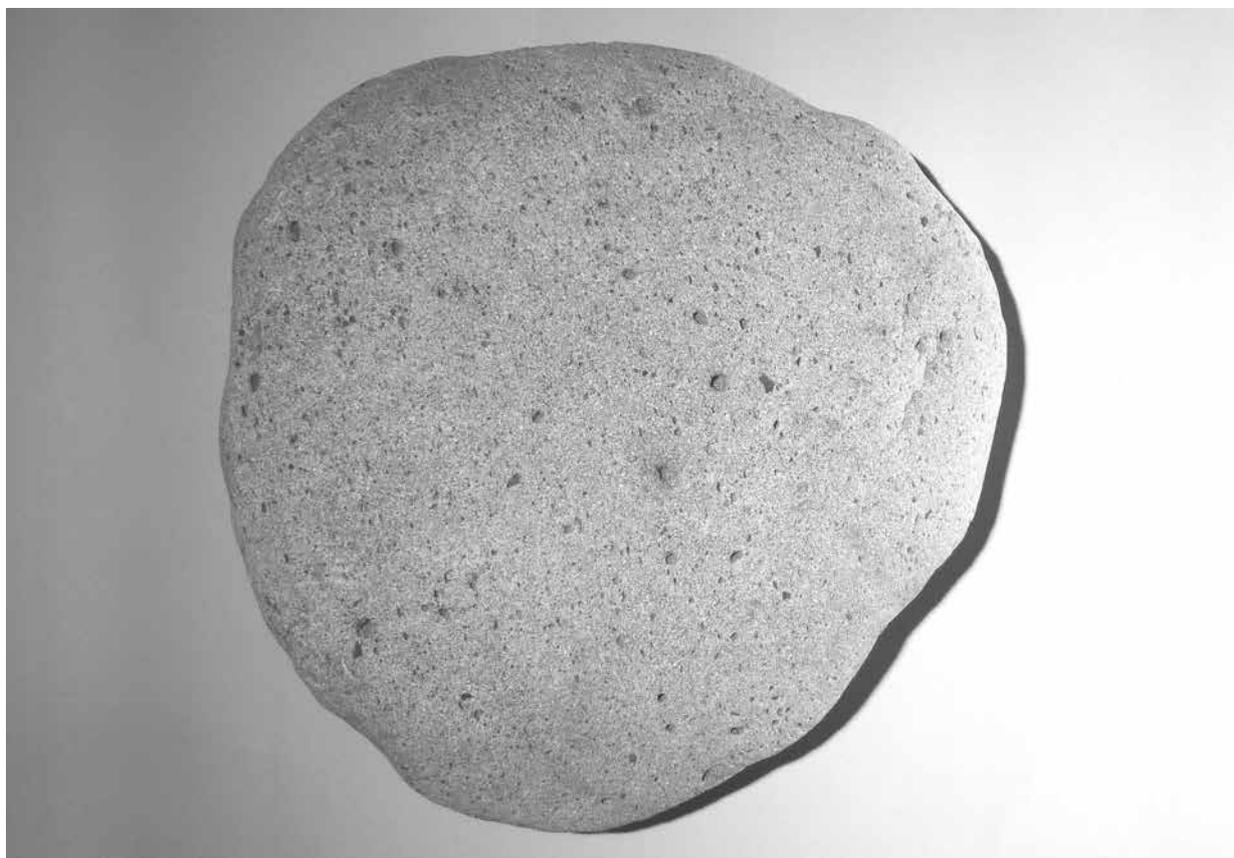
第 63 号住居跡 (第 129 图-2)



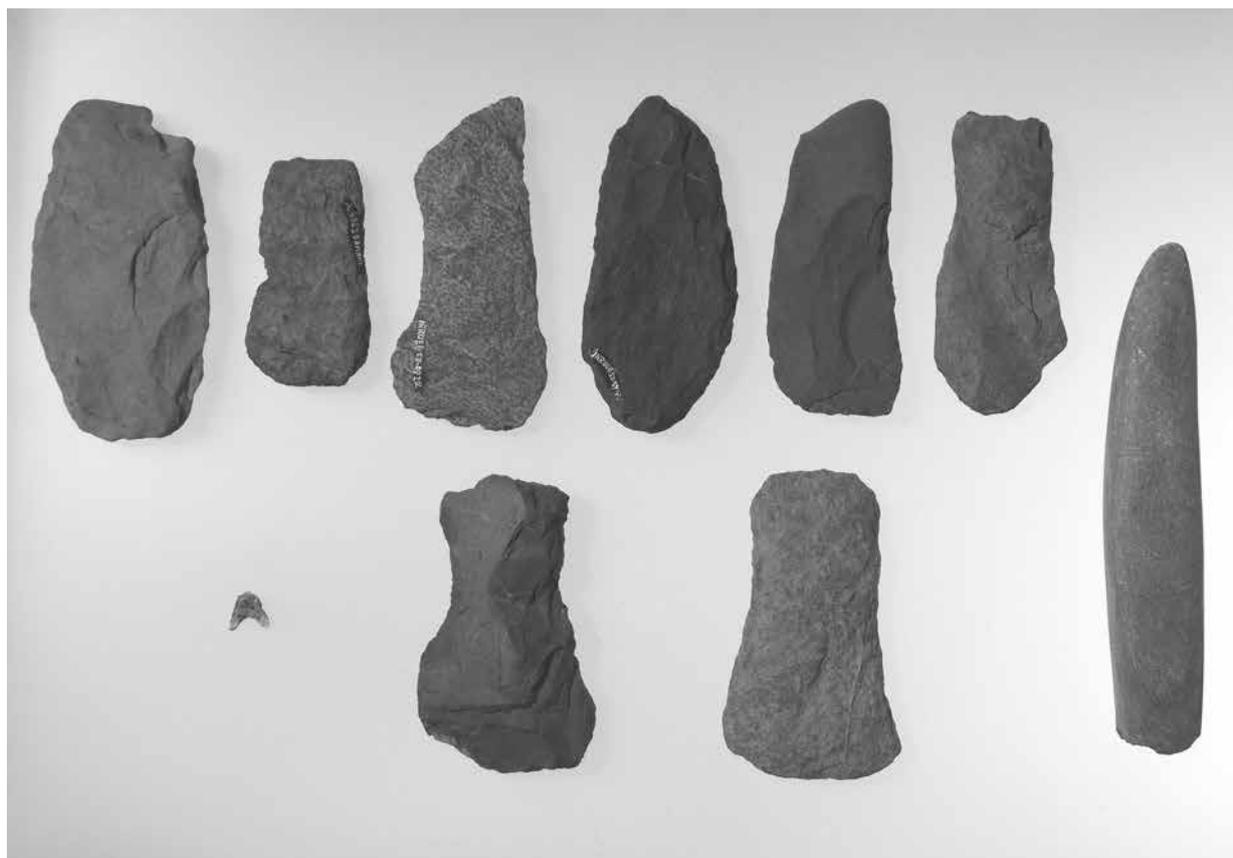
第 63 号住居跡 (第 129 图-3)



第 64 号住居跡 (第 130 图-1)



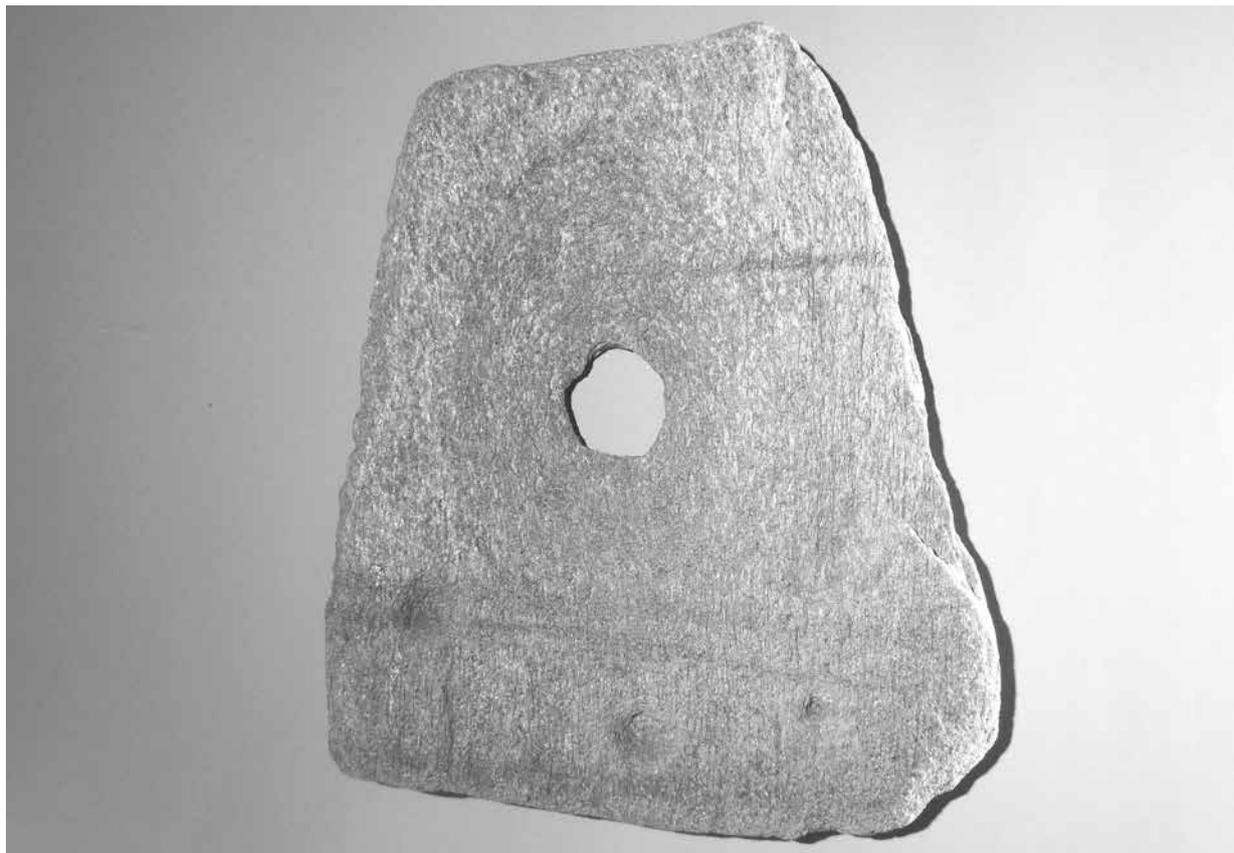
第 64 号住居跡 (第 130 图-2)



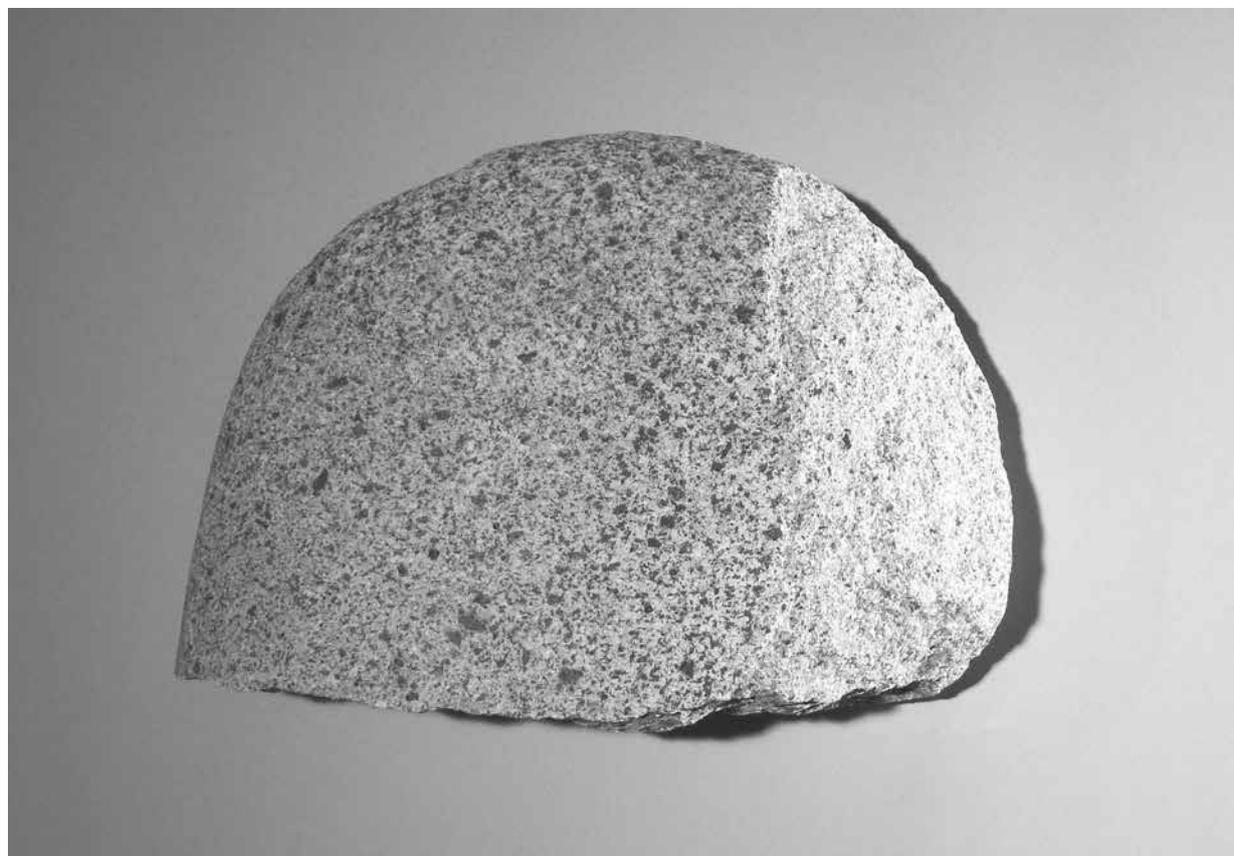
第 65·66 号住居跡 (第 131·132 图)



第 67 号住居跡 (第 133·134 图-1)



第 67 号住居跡 (第 134 图-2)



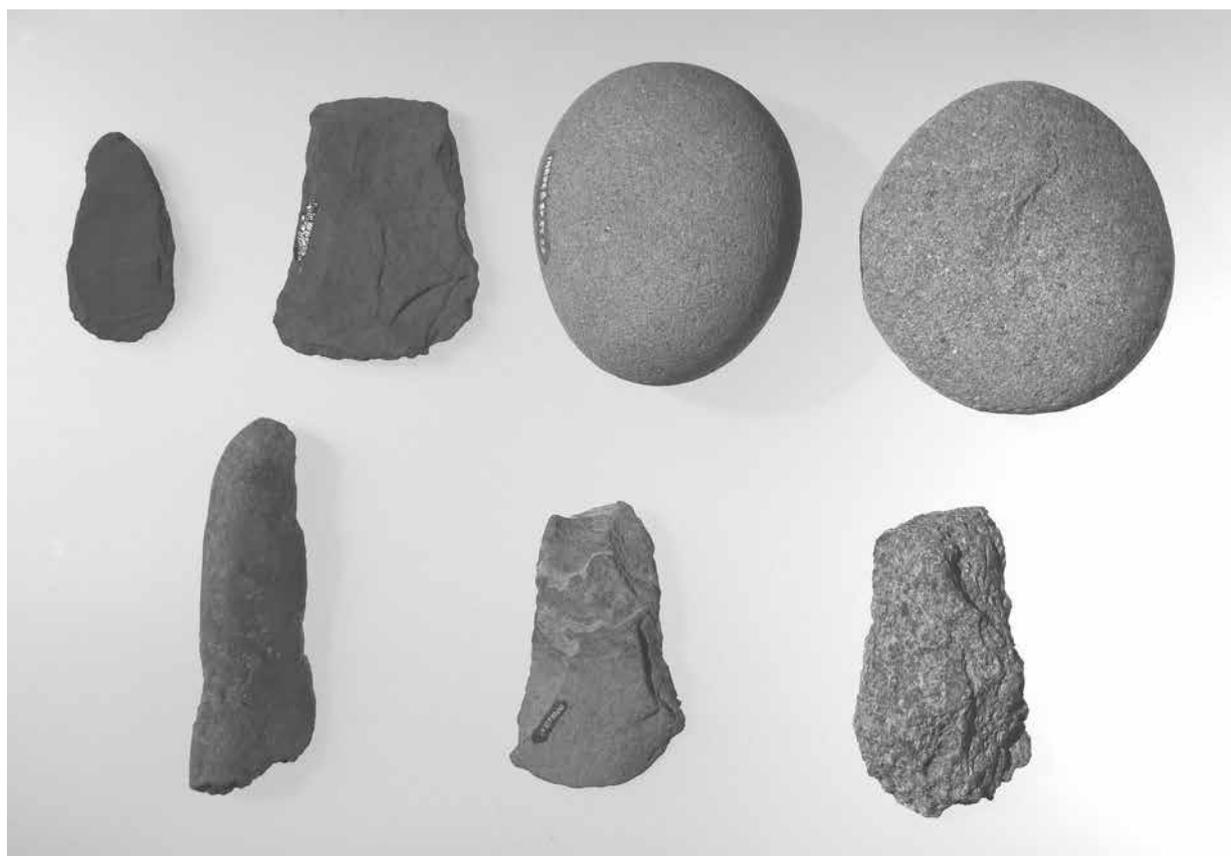
第 67 号住居跡 (第 134 图-3)



第 70 ~ 73 号住居跡 (第 135 · 136 図)



第 74 号住居跡 (第 137 · 138 図)



第2号性格不明遺構・第22・44・61号土壙（第139・140图）



第61土壙（第141图）

報告書抄録

ふりがな	いなりうえいせきだい6じちょうさ							
書名	稲荷上遺跡 第6次調査							
副書名	学校法人 文理佐藤学園 西武文理小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	狭山市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	石塚和則・安井智幸							
編集機関	埼玉県狭山市遺跡調査会							
所在地	埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号							
発行年月日	西暦2017(平成29)年10月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
いなりうえいせき 稲荷上遺跡	さいたまけんさやましおおあざしもおくのみ 埼玉県狭山市大字下奥富 あざいなりうえ 字稲荷上582外	22	32	139° 25' 51"	35° 52' 48"	20021009～ 20030411	3,700	小学校建設 に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
稲荷上遺跡 第6次調査	集落跡	縄文時代	住居跡	36軒	縄文土器・石器 須恵器 土師器	縄文時代中期を主と する環状集落跡		
		奈良・平安時代	住居跡	2軒			掘立柱建物跡	1棟
			土 壙	38基				
			単独埋蔵	6基				
			性格不明遺構	2基				
			土 壙	12基				
			溝	2条				

狭山市遺跡調査会報告書 第26集

稲 荷 上 遺 跡 第6次調査

—学校法人 文理佐藤学園 西武学園文理小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成29年10月26日 印刷

平成29年10月27日 発行

発行 埼玉県狭山市遺跡調査会

埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号

電話 04-2953-1111

印刷 有限会社ミネ五十子印刷

【正誤表】

稻荷上遺跡 第6次調査

(狭山市遺跡調査会報告書 第26集)

ページ	行	誤	正
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	46 坂上遺跡	22029	22030
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
85ページ	37行目	鉢形	壺形
96ページ	3行目	鉢形	壺形
139ページ	33行目	第45号土壇	第46号土壇
抄録	北緯	139°25'51"	35°52'48"
	東経	35°52'48"	139°25'51"